

三重古墳群



2022

豊後大野市教育委員会

序 文

平成17年3月に5町2村の合併により成立した豊後大野市は、大分県南部の大野川の流れに抱かれた自然豊かな地に所在しています。特に約9万年前の阿蘇火砕流をはじめとした多様な地形は、大地の成り立ちや雄大な地球の活動を示しており、地域の新たな魅力として注目されています。

この大自然に育まれた豊後大野の地には、古くから先人たちの活躍を物語る数多くの遺跡が存在し、多様な郷土の歴史や文化をうかがい知ることができます。平成25年より日本ジオパーク活動をとおして自然遺産や地質遺産などの学習や保全活動を進めており、同時に歴史遺産についても学習を深められるよう取組みを行っています。本書掲載の三重古墳群でもそうした取組として、小中学生の社会見学など郷土の歴史を学ぶ現地学習の教材としても活用を行っています。

市としても教育行政の一環として、埋蔵文化財をはじめとする歴史遺産の保存や活用に向けた支援や調査活動に取り組んでおり、さらにはその成果を公表して地域の歴史や文化や伝統を大切にし、次世代へ守り伝える機運が高められるよう進めていく所存です。

本書は、こうした郷土の貴重な文化財調査の記録として刊行いたしました。今後の学術研究や文化財保護活動に広く役立てられれば幸いです。

最後に、調査にご指導ご協力いただいた大分県教育委員会・別府大学文化財研究所をはじめ関係機関・調査指導委員のみなさま、地元地域の多くの方々に対し心より感謝を申し上げます。

令和4年3月

豊後大野市教育委員会
教育長 下田 博

例　　言

- 1、本書は豊後大野市教育委員会が平成22年～令和2年まで市内遺跡調査で実施した三重古墳群及び関連古墳群調査の報告書である。
- 2、本書掲載の調査報告のうち、第3章第6節立野古墳については、大分県教育委員会の許可を得て刊行報告書を転載再構成した。また、立野古墳調査の写真は大分県教育委員会より提供していただいた。
- 3、地中レーダー探査業務は、NPO法人iさいとに委託して平成28・29年に行い、それぞれの成果報告を編集して第3章第7節に掲載した。
- 4、発掘調査における調査基準点設置ならびに遺構実測は(株)埋蔵文化財サポートシステム大分支店に委託し、遺構・遺物の実測・トレースは雅企画有限公司に委託した。
- 5、遺構・遺物の写真撮影は調査員で行い、図面や写真は重政・漆生古墳群は別府大学文化財研究所で保管し、それ以外は豊後大野市教育委員会で保管している。
- 6、調査中、豊後大野市内遺跡調査指導委員会の指導をいただいたほか、次の方々より視察・助言をいただいた（敬称は略、所属は当時）。
後藤宗俊（別府大学名誉教授）、高橋克壽（花園大学教授）、下村智（別府大学教授）、小林昭彦、松本康弘、後藤晃一、小柳和宏、綿貫俊一（大分県教育委員会）、清水宗昭（別府大学非常勤講師）、長直信（大分市教育委員会）、服部真和（(株)九州文化財総合研究所）、福田聰（佐伯市教育委員会）、吉田和彦（杵築市教育委員会）、森本星史（宇佐市教育委員会）、若林善満（苅田町教育委員会）、佐藤裕一郎（豊後大野市文化財保護審議会委員）、志賀智史（九州国立博物館）
- 7、本書の執筆は、第3・4・5章を田中裕介（別府大学教授）、玉川剛司（別府大学准教授）、井大樹（大分県教育委員会）、諸岡が分担し文末に記しているほか、村田仁志、平尾良光の両氏より原稿をいただいた。
それ以外は諸岡が行った。
- 8、本書の編集は豊後大野市内遺跡調査指導委員会の指導のもと諸岡が行った。

本　文　目　次

第1章 調査の経緯	3. 緒方地域の古墳	25
第1節 調査に至る経緯	4. 茜川流域の古墳	27
第2節 過去の調査と研究	5. 奥岳川周辺域の古墳	28
第3節 調査の経過	第3章 三重古墳群の調査の成果	31
第4節 調査の組織	第1節 小坂大塚古墳	31
第2章 遺跡の立地と環境	1. 調査の経過	31
第1節 地理的環境	2. 墳丘測量調査	32
第2節 歴史的環境	3. 確認調査	38
第3節 大野川中流域の古墳分布	4. 出土遺物	43
1. 三重地域の古墳	5.まとめ	44
2. 平井川周辺地域の古墳	第2節 道ノ上古墳	48

1. 調査の経過	48
2. 墳丘測量調査	49
3. 確認調査	59
4. 出土遺物	62
5. まとめ	64
第3節 重政古墳	68
1. 立地と環境	68
2. 調査の経過	68
3. 調査の実施と体制	70
4. 墳丘測量調査	72
5. 確認調査	79
6. 出土遺物	95
7. まとめ	105
第4節 秋葉鬼塚古墳	111
1. 調査の経過	111
2. 墳丘測量調査	112
3. 確認調査	118
4. 出土遺物	130
5. まとめ	135
第5節 竜ヶ鼻古墳	139
1. 調査の経過	139
2. 墳丘測量調査	140
3. 確認調査	147
4. まとめ	149
第6節 立野古墳	150
1. 調査の経過と概要	150
2. 墳丘測量調査	152
3. 確認調査	152
4. 出土遺物	157
5. まとめ	162
第7節 地中レーダー探査報告	163
1.はじめに	163
2. 地中レーダー探査の結果	167
3. 総合評価	200
第8節 三重地域の小円墳	202
1. 鉢ノ窪古墳群	202
2. 下津留古墳群	206
3. 内田古墳群	210
第9節 小結	218
第4章 三重古墳群周辺古墳の調査成果	220
第1節 坊ノ原古墳	220
1. 調査の経過	220
2. 墳丘測量調査	221
3. 確認調査	230
4. まとめ	240
第2節 漆生古墳群	245
1. 立地と環境	245
2. 調査の経過	246
3. 調査の実施と体制	247
4. 墳丘測量調査	249
5. 古墳群の構成と基本層序	262
6. 大久保1号墳	262
7. 大久保2号墳	270
8. 大久保3号墳	276
9. 城山古墳	281
10. 漆生古墳群の調査成果	286
第5章 造構・遺物の検討	297
第1節 墳丘(形態・構造)について	297
第2節 大野川中流域における埴輪群	307
第3節 大野川中流域の剣拔式石棺について	316
第6章 総括	325

写真図版目次

写真図版1 小坂大塚古墳(1)	333
写真図版2 小坂大塚古墳(2)	334
写真図版3 小坂大塚古墳(3)	335
写真図版4 小坂大塚古墳(4)	336
写真図版5 道ノ上古墳(1)	337
写真図版6 道ノ上古墳(2)	338
写真図版7 道ノ上古墳出土遺物(1)	339
写真図版8 道ノ上古墳出土遺物(2)	340
写真図版9 重政古墳(1)	341
写真図版10 重政古墳(2)	342
写真図版11 重政古墳(3)	343
写真図版12 重政古墳(4)	344
写真図版13 重政古墳(5)	345
写真図版14 重政古墳出土遺物(1)	346
写真図版15 重政古墳出土遺物(2)	347
写真図版16 重政古墳出土遺物(3)	348
写真図版17 秋葉鬼塚古墳(1)	349
写真図版18 秋葉鬼塚古墳(2)	350
写真図版19 秋葉鬼塚古墳(3)	351
写真図版20 秋葉鬼塚古墳(4)	352
写真図版21 秋葉鬼塚古墳出土遺物	353
写真図版22 竜ヶ鼻古墳	354
写真図版23 竜ヶ鼻古墳出土遺物	355
写真図版24 立野古墳(1)	356
写真図版25 立野古墳(2)	357
写真図版26 立野古墳出土遺物(1)	358
写真図版27 立野古墳出土遺物(2)	359
写真図版28 鉢ノ窪古墳群(1)	360
写真図版29 鉢ノ窪古墳群(2)	361
写真図版30 鉢ノ窪古墳群(3)	362
写真図版31 下津留古墳群(1)	363
写真図版32 下津留古墳群(2)	364
写真図版33 下津留古墳群(3)	365
写真図版34 内田古墳群(1)	366
写真図版35 内田古墳群(2)	367
写真図版36 内田古墳群出土遺物	368

写真図版37	坊ノ原古墳(1)	369
写真図版38	坊ノ原古墳(2)	370
写真図版39	坊ノ原古墳(3)	371
写真図版40	坊ノ原古墳(4)・出土遺物写真	372
写真図版41	漆生古墳群(1)	373
写真図版42	漆生古墳群(2)	374
写真図版43	漆生古墳群(3)	375
写真図版44	漆生古墳群(4)	376
写真図版45	漆生古墳群(5)	377
写真図版46	漆生古墳群(6)・出土遺物写真	378
写真図版47	豊後大野市内古墳(1)	379
写真図版48	豊後大野市内古墳(2)	380
写真図版49	宮尾塚ノ原採集遺物	381

挿 図 目 次

第1図	大野川流域の地形図	5
第2図	豊後大野市周辺地質図	6
第3図	豊後大野市主要遺跡分布図	7
第4図	豊後大野市古墳分布図	8
第5図	三重地域古墳分布図	9
第6図	濱平原古墳群1号石棺・出土鉄鉢	12
第7図	濱平原古墳群3号・4号石棺・出土鉄斧	13
第8図	陣箱遺跡周溝墓構造	15
第9図	宮尾塚ノ原出土埴輪	15
第10図	平井川周辺地域(東側)古墳分布図	16
第11図	平井川周辺地域(西側)古墳分布図	17
第12図	向原古墳墳丘測量図	17
第13図	町2号墳墳丘測量図	18
第14図	尾崎古墳石室・出土遺物	18
第15図	加原遺跡方墳SO01	19
第16図	下原古墳の記事	19
第17図	旧三重町中央公民館所蔵古写真	20
第18図	早尾原古墳測量図	21
第19図	早尾原古墳石棺	21
第20図	丸山古墳測量図	22
第21図	丸山古墳石棺蓋	22
第22図	高伏古墳石棺	22
第23図	若宮古墳墳丘測量図	23
第24図	若宮古墳石棺	23
第25図	宮生日平採集鉄刀	24
第26図	緒方地域古墳分布図	25
第27図	茜川流域古墳分布図	27
第28図	御塚古墳測量図	27
第29図	奥岳川流域古墳分布図	28
第30図	中ノ原古墳実測図	28
第31図	小坂大塚古墳周辺地形図	31
第32図	小坂大塚古墳墳丘測量図	33
第33図	小坂大塚古墳3D図	37
第34図	小坂大塚古墳調査トレンチ配置図	38
第35図	小坂大塚古墳第1トレンチ	39
第36図	小坂大塚古墳第2トレンチ	40
第37図	小坂大塚古墳第3・5トレンチ	41
第38図	小坂大塚古墳第4トレンチ	41
第39図	小坂大塚古墳第6トレンチ	42
第40図	小坂大塚古墳第7トレンチ	42
第41図	小坂大塚古墳第8トレンチ	43
第42図	小坂大塚古墳出土遺物	43
第43図	小坂大塚古墳墳丘復元図	45
第44図	道ノ上古墳周辺地形図	48
第45図	道ノ上古墳墳丘測量図	51
第46図	道ノ上古墳墳丘測量図(測量復元案)	55
第47図	道ノ上古墳3D図	57
第48図	道ノ上古墳調査区配置図	58
第49図	道ノ上古墳第1トレンチ	60
第50図	道ノ上古墳第2トレンチ	61
第51図	道ノ上古墳第3トレンチ	61
第52図	道ノ上古墳出土遺物1	62
第53図	道ノ上古墳出土遺物2	63
第54図	道ノ上古墳墳丘復元図	65
第55図	重政古墳周辺地形図	68
第56図	重政古墳墳丘測量図	73
第57図	重政古墳墳丘測量図(測量復元案)	76
第58図	重政古墳3D図	78
第59図	重政古墳調査区配置図	80
第60図	重政古墳第4トレンチ	81
第61図	重政古墳第5トレンチ	84
第62図	重政古墳第7トレンチ出土状況	86
第63図	重政古墳第7トレンチ	87
第64図	重政古墳第6トレンチ	88
第65図	重政古墳第8トレンチ	90
第66図	重政古墳第9トレンチ	91
第67図	重政古墳第10トレンチ	93
第68図	重政古墳第11トレンチ	94
第69図	重政古墳出土遺物1	98
第70図	重政古墳出土遺物2	99
第71図	重政古墳出土遺物3	100
第72図	重政古墳出土遺物4	101
第73図	重政古墳出土遺物5	102
第74図	重政古墳出土遺物6	103
第75図	重政古墳墳丘復元図	107
第76図	秋葉鬼塚古墳周辺地形図	111
第77図	秋葉鬼塚古墳墳丘測量図	113
第78図	秋葉鬼塚古墳墳丘測量図(測量復元案)	117
第79図	秋葉鬼塚古墳3D図	118
第80図	秋葉鬼塚古墳調査区配置図	119
第81図	秋葉鬼塚古墳第1トレンチ	120
第82図	秋葉鬼塚古墳第2トレンチ	121
第83図	秋葉鬼塚古墳第3トレンチ	123
第84図	秋葉鬼塚古墳第4トレンチ	124
第85図	秋葉鬼塚古墳第5トレンチ	124
第86図	秋葉鬼塚古墳第6トレンチ	125
第87図	秋葉鬼塚古墳第7トレンチ	126
第88図	秋葉鬼塚古墳第8トレンチ	127

第89回	秋葉鬼塚古墳第9トレンチ	127
第90回	秋葉鬼塚古墳第10トレンチ	128
第91回	秋葉鬼塚古墳第11トレンチ	129
第92回	秋葉鬼塚古墳第12トレンチ	129
第93回	秋葉鬼塚古墳出土遺物1	132
第94回	秋葉鬼塚古墳出土遺物2	133
第95回	秋葉鬼塚古墳墳丘復元図	136
第96回	竜ヶ鼻古墳周辺地形図	139
第97回	竜ヶ鼻古墳測量図	141
第98回	竜ヶ鼻古墳墳丘測量図(測量復元案)	144
第99回	竜ヶ鼻古墳3D図	145
第100回	竜ヶ鼻古墳調査区配置図	146
第101回	竜ヶ鼻古墳第1トレンチ	147
第102回	竜ヶ鼻古墳出土遺物	148
第103回	立野古墳周辺地形図	150
第104回	立野古墳墳丘測量図	151
第105回	立野古墳第1トレンチ	153
第106回	立野古墳第2トレンチ	154
第107回	立野古墳第2トレンチにおける層序の形成	154
第108回	立野古墳第3トレンチ	155
第109回	立野古墳第4トレンチ	156
第110回	立野古墳第5トレンチ	156
第111回	立野古墳出土埴輪の分類と形式組成	159
第112回	立野古墳出土埴輪1	160
第113回	立野古墳出土埴輪2	161
第114回	立野古墳埴丘企画想定案	162
第115回	円筒状の埋藏物からの反射記録されるバーボン形の表示形式	165
第116回	秋葉鬼塚古墳の断面データから想定されるレーダー波速度	165
第117回	500MHzアンテナで収集したデータにフィルタ処理したもの	166
第118回	断面データから水平なタイムスライスを作成するイメージ	166
第119回	秋葉鬼塚古墳でのアンテナ走査マップ(500MHz)	167
第120回	秋葉鬼塚古墳 500MHzデータによるタイムスライス	168
第121回	秋葉鬼塚古墳 地表下100cm前後の長方形の反射	169
第122回	秋葉鬼塚古墳 地表下130cm前後の構造の反射	169
第123回	秋葉鬼塚古墳 地表下180cm前後の長方形の反射	169
第124回	秋葉鬼塚古墳 後円部の反射オーバーレイ	169
第125回	秋葉鬼塚古墳 後円部の反射レーダーグラム	169
第126回	秋葉鬼塚古墳 後円部の復元図と主体部位置	170
第127回	重政古墳でのアンテナ走査マップ	171
第128回	重政古墳500MHzデータによるタイムスライス	172
第129回	重政古墳270MHzデータによるタイムスライス	173
第130回	重政古墳地中レーダー探査結果	174
第131回	重政古墳地形図+タイムスライス	175
第132回	竜ヶ鼻古墳の探査範囲とアンテナ走査マップ	176
第133回	竜ヶ鼻古墳タイムスライス 500MHzデータ	177
第134回	竜ヶ鼻古墳タイムスライス・レーダーグラム 500MHzデータ	178
第135回	竜ヶ鼻古墳の測量図と探査結果 500MHzデータ	178
第136回	竜ヶ鼻古墳タイムスライス 270MHzデータ	179
第137回	竜ヶ鼻古墳タイムスライス・レーダーグラム 270MHzデータ	180
第138回	竜ヶ鼻古墳の測量図と探査結果 270MHzデータ	180
第139回	小坂大塚古墳の探査範囲とアンテナ走査マップ	181
第140回	小坂大塚古墳タイムスライス 500MHzデータ	182
第141回	小坂大塚古墳タイムスライス・レーダーグラム 500MHzデータ	183
第142回	小坂大塚古墳の測量図と探査結果 500MHzデータ①	184
第143回	小坂大塚古墳の測量図と探査結果 500MHzデータ②	184
第144回	小坂大塚古墳 タイムスライス 270MHzデータ	185
第145回	小坂大塚古墳 タイムスライス・レーダーグラム 270MHzデータ	186
第146回	小坂大塚古墳の測量図と探査結果 270MHzデータ①	187
第147回	小坂大塚古墳の測量図と探査結果 270MHzデータ②	187
第148回	道ノ上古墳の探査範囲とアンテナ走査マップ	188
第149回	道ノ上古墳 タイムスライス 500MHzデータ	189
第150回	道ノ上古墳タイムスライス・レーダーグラム 500MHzデータ	190
第151回	道ノ上古墳の測量図と探査結果 500MHzデータ①	191
第152回	道ノ上古墳の測量図と探査結果 500MHzデータ②	191
第153回	道ノ上古墳 タイムスライス 270MHzデータ	192
第154回	道ノ上古墳タイムスライス・レーダーグラム 270MHzデータ	193
第155回	道ノ上古墳の測量図と探査結果 270MHzデータ①	194
第156回	道ノ上古墳の測量図と探査結果 270MHzデータ②	194
第157回	立野古墳の探査範囲とアンテナ走査マップ	195
第158回	立野古墳 タイムスライス 500MHzデータ	196
第159回	立野古墳タイムスライス・レーダーグラム 500MHzデータ	197
第160回	立野古墳の測量図と探査結果 500MHzデータ⑤	197
第161回	立野古墳 タイムスライス 270MHzデータ	198
第162回	立野古墳タイムスライス・レーダーグラム 270MHzデータ	199
第163回	立野古墳の測量図と探査結果 270MHzデータ	199
第164回	鉢ノ窪古墳群配置図	202
第165回	鉢ノ窪1号棺	203
第166回	鉢ノ窪2号棺	203
第167回	鉢ノ窪3～6号棺	204
第168回	鉢ノ窪古墳群第2トレンチ	205
第169回	鉢ノ窪古墳群第3トレンチ	205
第170回	下津留古墳群配置図	206
第171回	下津留1号墳石棺	207
第172回	下津留4号墳石棺	208
第173回	内田古墳群周辺地形図	210
第174回	内田古墳群トレンチ配置図	211
第175回	内田1号墳第1・第3・第6トレンチ	212
第176回	内田1号墳第2トレンチ	213
第177回	内田1号墳石棺材	213
第178回	内田2号墳第1・第6トレンチ	214
第179回	内田1号墳出土遺物	215
第180回	内田2号墳出土遺物	216
第181回	坊ノ原古墳周辺地形図	220
第182回	坊ノ原古墳墳丘測量図	223
第183回	坊ノ原古墳墳丘測量図(測量復元図)	226
第184回	坊ノ原古墳3D図	228
第185回	坊ノ原古墳調査トレンチ配置図	229
第186回	坊ノ原古墳第1トレンチ	230
第187回	坊ノ原古墳第2トレンチ	231
第188回	坊ノ原古墳第3トレンチ	232
第189回	坊ノ原古墳第4トレンチ	233
第190回	坊ノ原古墳第5トレンチ	234
第191回	坊ノ原古墳第6トレンチ	234
第192回	坊ノ原古墳第7トレンチ	235
第193回	坊ノ原古墳第8トレンチ	236
第194回	坊ノ原古墳第9トレンチ	237

第195図	坊ノ原古墳第10トレンチ	237
第196図	坊ノ原古墳第11トレンチ	238
第197図	坊ノ原古墳第12トレンチ	238
第198図	坊ノ原古墳第13トレンチ	239
第199図	坊ノ原古墳出土遺物	240
第200図	坊ノ原古墳墳丘復元図	241
第201図	漆生古墳群周辺地形図	245
第202図	漆生古墳群墳丘測量図	250
第203図	大久保1・3号墳測量図	251
第204図	大久保1・3号墳縦横断面図	252
第205図	大久保1・3号墳測量復元図	254
第206図	大久保2号墳測量図	256
第207図	大久保2号墳測量復元図	257
第208図	城山古墳測量図	259
第209図	城山古墳測量復元図	260
第210図	漆生古墳群3D図	261
第211図	大久保1・3号墳トレンチ配置図	263
第212図	大久保1号墳第1トレンチ	264
第213図	大久保1号墳第2トレンチ	265
第214図	大久保1号墳第3トレンチ	266
第215図	大久保1号墳第4トレンチ	267
第216図	大久保1号墳第5トレンチ	268
第217図	大久保1号墳第6トレンチ	269
第218図	大久保1号墳頂部平面	269
第219図	大久保1号墳出土遺物	270
第220図	大久保2号墳トレンチ配置	271
第221図	大久保2号墳第1トレンチ	272
第222図	大久保2号墳第2トレンチ	273
第223図	大久保2号墳第3トレンチ	274
第224図	大久保2号墳頂部トレンチ	274
第225図	大久保2号墳出土遺物	275
第226図	大久保2号墳石棺	276
第227図	大久保3号墳第1トレンチ	277
第228図	大久保3号墳第2トレンチ	278
第229図	大久保3号墳第3トレンチ土層図	278
第230図	大久保3号墳第3トレンチ石棺出土状況	279
第231図	大久保3号墳第3トレンチ完掘状況	280
第232図	大久保3号墳主体部蓋石	281
第233図	城山古墳トレンチ配置図	282
第234図	城山古墳第1トレンチ	282
第235図	城山古墳第2トレンチ	283
第236図	城山古墳第3トレンチ	283
第237図	城山古墳頂調査区	284
第238図	城山古墳石棺材1・2	285
第239図	城山古墳石棺材3・4・5	285
第240図	城山古墳出土遺物	286
第241図	漆生古墳群の立地	288
第242図	大久保1・3号墳復元図	290
第243図	大久保2号墳復元図	291
第244図	城山古墳復元図	292
第245図	立野・小坂大塚・道ノ上古墳	299
第246図	重政・秋葉鬼塚・竜ヶ鼻古墳	301
第247図	坊ノ原・大久保1号墳	302
第248図	墳丘比較図(編年)	303
第249図	墳端テラスマモデル図	305
第250図	豊後大野市三重町の古墳	307
第251図	立野古墳の埴輪	308
第252図	大分川河川敷採集埴輪	309
第253図	茨木将軍山古墳の埴輪	309
第254図	道ノ上古墳の埴輪	310
第255図	秋葉鬼塚古墳の埴輪	310
第256図	重政古墳の埴輪	311
第257図	竜ヶ鼻古墳出土の埴輪	312
第258図	勘助野地1号墳の壺型埴輪	313
第259図	仏原千人塚古墳の壺型土器	314
第260図	大分県の削抜式石棺分布図	317
第261図	大野川中流域の削抜式石棺実測図(1)	319
第262図	大野川中流域の削抜式石棺実測図(2)	320
第263図	大野川中流域の削抜式石棺実測図(3)	321
第264図	熊本の舟蓋土坑墓実測図	323
第265図	豊後大野市及び間辺城における首長墓の変遷	326
第266図	古代道路推定地と古墳分布図	328
第267図	三重古墳群と推定交通路	329
第268図	九州の関連古墳位置図	331

表 目 次

第1表	小坂大塚古墳の復元案	46
第2表	道ノ上古墳の復元案	66
第3表	重政古墳調査区一覧表	79
第4表	重政古墳出土遺物観察表	104
第5表	重政古墳石造物観察表	105
第6表	重政古墳の復元案	108
第7表	秋葉鬼塚古墳出土遺物観察表	134
第8表	秋葉鬼塚古墳の復元案	137
第9表	立野古墳トレンチ層位一覧	157
第10表	下津留4号墳石棺材一覧表	209
第11表	漆生古墳群の復元案	293
第12表	豊後大野市内前方後円墳の規模比較一覧	298
第13表	豊後の埴輪の編年的位置	307
第14表	大分県下の削抜式石棺一覧	316
第15表	大分県下の組合式家形石棺	316

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

大分県豊後大野市は、2005(平成 17)年3月に大野郡7町村(三重町・清川村・緒方町・朝地町・大野町・千歳村・大飼町)が合併して成立し、その市域は大野川中流域の大部分に相当する。市域内には数多くの先史時代遺跡があり、周知遺跡の件数として古墳は、前方後円墳8基、円墳40基が知られており、消滅古墳を加えると33件58基を数える。しかし調査例も少ないため、出土遺物などの資料がほとんど知られてなく実態は不明のままで文献でも特に取り上げられることも少なかった。

1990年代以後各種開発から保護する目的で多くの遺跡で調査が行われるようになるが、市域の古墳についても一部で事前調査の対象となっている。測量図などによる墳丘規模や形態の資料が作成され、史跡指定されることで保存に対しては一定の成果を得られているものの、古墳全体の詳細な実態把握には至っていなかった。その後町村合併による市制発足後、2010(平成 22)年度より市内主要古墳へ対象を広げて調査事業を行った。調査は、特に未調査の前方後円墳などの主要古墳を中心に、墳丘規模や形態・構造をはじめ遺跡範囲の確認や出土遺物による築造時期の把握を目的に、別府大学との共同で進められている。2017(平成 29)年度に豊後大野市内遺跡調査指導委員会を設置して、調査成果の検討や調査指導をいただきながら2021(令和3)年まで行われた。全容解明までいかないが、調査事業開始から10年以上経過し、一定の成果として市内に所在する古墳の重要性が明らかになりつつある。

本書で取り扱う三重古墳群の範囲として、大野川本流域も一部含めた三重川流域に分布する古墳群である。分布域が広範囲で立地環境に隔たりがあるものの、同じ地域的な枠組みとして旧三重町域を拠点とする首長墓群として認識できるもので、共通した社会的基盤の中で築造されたと考えられる。社会的な背景の中で築造された首長墓である6基の前方後円墳と、付随する円墳群を一つの政治支配単位としてのまとまりと捉えることができるところから、古墳群として認識を持つことで、以下三重古墳群として総称する。

第2節 過去の調査と研究

(1) 戦前

大正時代に大分県史蹟名勝天然紀念物調査研究会が発足し、県内の遺跡や巨樹などの調査報告書が刊行される中に市域の古墳や横穴墓もいくつか報告されている。第二輯に緒方町の横穴墓(本荘・前田 1923)、第三輯に三重町の前方後円墳(本荘・前田 1924)、第七輯に古墳や横穴墓の一覧(日名子 1929)があり、現地踏査などを元とした最初の調査報告資料で、基礎資料としても貴重である。ほかに、1925(大正 14)年刊行の「大野郡々史」には大野町鬼塚(御塚)古墳の記述があり、1934(昭和 9)年刊行の「緒方村誌」に緒方町城山古墳の石棺や横穴墓の記述があるなど、いくつかの古墳について紹介されている。なお、1929(昭和 4)年時点で前方後円墳3基(小坂大塚古墳・道ノ上古墳・重政古墳)と円墳9基の存在が知られていた。

また、この頃には古墳の発掘事例による発見が相次ぐが、当時は文化財保護の制度も弱く、盗掘や破壊例も少なからず存在している。主体部石棺の発見や掘り出された経緯が判明しているものとして、1915(大正 4)年に城山古墳、1927(昭和 2)年に早尾原古墳で、1933(昭和 8)年に大野町下原古墳、1937(昭和 12)年に高伏古墳などがあり、一部は新聞に掲載されるなど文献による記録も残されている。しかし、多くは不時の発見のためか詳しい調査記録は伝わっておらず、地元に伝承として伝わる坊ノ原古墳や鉢ノ窪古墳や重政古墳などを含め、数多くの古墳が盗掘を受けていると思われるが、詳しい状況などは不明である。

(2) 戦後～1980年頃

戦後しばらくも同じ状況が続くが、1948(昭和 23)年に賀川光夫氏による古墳の発掘調査が三重町の潰塚原

石棺群で行われている。市内では初めての発掘調査報告書として翌年作成されているが、1963(昭和38)年刊行の三重町史沿革編によって要約が掲載されている。

以降、高度成長期による開発や農業基盤整備などに対応する文化財調査が行われるようになると、古墳の発見が相次ぐようになる。秋葉鬼塚古墳・竜ヶ鼻古墳・坊ノ原古墳などの存在が知られるようになり、1975(昭和50)年刊行の「全国遺跡地図」(文化庁1975)の時点では前方後円墳5基、円墳25基が記載されている。この頃には前方後円墳4基(道ノ上古墳・小坂大塚古墳・重政古墳・坊ノ原古墳)が県指定史跡となるなど、史跡指定による保護措置も行われている。

また、有志による地域活動の一環で露出した石棺の整備などを目的とした調査も行われており、1970(昭和45)年に鉢ノ窪2・3号棺、1972(昭和47)年に同1号棺、同時に漬平塚原石棺3・4号棺などで行われている(丸小野1987)。これらの石棺群の存在が周知されるようになり、県内の石棺に対する研究が行われている(清水・高橋1982、神田1990、若杉1997)。また、町村史や広報誌の刊行も行われ、古墳の概要や伝承などをまとめた文献が刊行されるようになる。1934(昭和9)年の緒方村誌、1963(昭和38)年の三重町誌沿革編、1967(昭和42)年の朝地町史、1976(昭和51)年の大野町史など地域史として古墳が記述された文献が増加している。しかしながら調査例が乏しい当時のため、実態は不明のままの記述が多い。

(3) 平成以降(合併前)

1988(昭和63)年に現地踏査によって前方後円墳であることが判明した立野古墳は、大野川流域では最初に埴輪の存在が確認された古墳として注目され(清水1998)、1995(平成7)年に最初に前方後円墳の確認調査が行われることで初めて多くの成果が得られた(田中1998)。また、1992(平成4)年には緒方町の漆生古墳群としてそれまで知られていた2基に加えて前方後円墳(大久保1号墳)の存在が新たに確認された(田中1992)。

こうした踏査による発見もある一方、発掘調査の進展に伴い新たな資料や事例も増加するようになる。1994(平成6)年から翌年にかけて鉢ノ窪古墳群、1995(平成7)年には重政古墳で確認調査が行われ、以後も竜ヶ鼻古墳、道ノ上古墳、町古墳群、内田古墳群において調査が行われている(村上1996、諸岡1997・2000・2002・2003)。その多くが開発に伴う保存目的のための調査として行われたが、竜ヶ鼻古墳や道ノ上古墳等は遺跡の範囲確認調査として学術調査という側面で行われた。調査後は町1号墳のみ消滅したが、それ以外は遺跡保護の措置が講じられている。

これらの調査の成果として埴輪の存在が多く古墳で確認されるようになり、古墳築造年代に関する資料が増加している。大分県内で出土埴輪の集成の発表が行われ(田中1995)、また石棺の集成も行われる(清水・高橋・神田)など、市域の古墳に関する地域的な位置づけが明らかになりつつある。1992(平成4)年に大分県遺跡地図の刊行により市域内には前方後円墳8基、円墳40基を数えるようになり、墳丘測量図などの基礎資料化も進んで、この時期には立野古墳・秋葉鬼塚古墳・竜ヶ鼻古墳が新たに県指定史跡となっている。

豊後大野市発足後、2010(平成22)年より新たに市内遺跡事業に前方後円墳を中心とした主要古墳を対象として、墳丘規模・形態や築造年代の把握のための測量調査と確認調査を着手し、以後継続して調査を続けていく。世界測地系の座標を用いた測量図によって整備も進み、確認調査では墳丘規模や構造の一端も明らかになるなど、古墳に関する資料が蓄積されることにより、古墳研究の進展につながっている。

第3節 調査の経過

2010(平成22)年度 小坂大塚古墳の墳丘測量調査および範囲確認の第1次調査をトレント5箇所(1~5トレント)の調査区で行い、墳端テラスや周溝などを確認した。また緊急開発に伴い漬平塚原石棺群の遺跡範囲確認調査を行ったが遺構は特に確認できなかつた。

2011(平成23)年度 漆生古墳群4基の墳丘測量調査を行った。

- 2012(平成 24)年度** 漆生古墳群の第1次調査を行い、調査トレンチは大久保1号墳には3箇所(1~3トレンチ)、大久保3号墳は2箇所(1・2トレンチ)、城山古墳は2箇所(1・2トレンチ)の計7箇所の調査区を行った。
- 2013(平成 25)年度** 漆生古墳群の第2次調査を行い、調査トレンチは大久保1号墳には1箇所(4トレンチ)、大久保2号墳は2箇所(1・2トレンチ)の計3箇所の調査区を行った。秋葉鬼塚古墳の第1次調査として、墳丘測量調査及び、トレンチ5箇所(1~5トレンチ)の調査区を行い、墳端テラスや周溝のほか、埴輪を確認した。
- 2014(平成 26)年度** 漆生古墳群の確認調査を夏期に第3次・冬期に第4次調査として行い、大久保1号墳は1箇所(5・6トレンチ)、大久保2号墳は1箇所(3トレンチ)、城山古墳は1箇所(3トレンチ)の計4箇所の調査区を行った。秋葉鬼塚古墳第2次調査として、トレンチ7箇所(6~12トレンチ)の調査区を行った。坊ノ原古墳の墳丘測量調査や石棺材の実測を行い、中ノ原古墳と向原古墳の墳丘測量調査を行った。
- 2015(平成 27)年度** 漆生古墳群の第5次調査を行い、調査トレンチは大久保1号墳には墳頂部調査区、大久保2号墳は墳頂部第3トレンチの拡張調査区、城山古墳は墳頂部グリッド4箇所の計6箇所の調査区を行った。また、露出している大久保2号墳と城山古墳の石棺材の実測を行った。坊ノ原古墳の第1次調査として、トレンチ8箇所(1~8トレンチ)の調査区を行い、若宮古墳の墳丘測量及び露出した石棺の実測を行った。
- 2016(平成 28)年度** 漆生古墳群の第6次調査を行い、大久保1号墳には墳頂部調査区、大久保3号墳は墳頂部の第3トレンチで行い、主体部遺構を確認した。坊ノ原古墳の第2次調査として、トレンチ4箇所(9~12トレンチ)の調査区を行った。丸山古墳の墳丘測量及び、出土と伝わる石棺材の実測を行った。地中レーダー探査を秋葉鬼塚古墳・重政古墳で実施した。
- 2017(平成 29)年度** 重政古墳の第2次調査として、まず墳丘測量調査を行い、トレンチ3箇所(4~6トレンチ)の調査区を行い、墳端テラスや周溝などを確認した。地中レーダー探査を竜ヶ鼻古墳・小坂大塚古墳・道ノ上古墳・立野古墳で実施した。
- 2018(平成 30)年度** 重政古墳第3次調査として、トレンチ5箇所(5~9トレンチ)の調査区を行い、墳端テラスや周溝などを確認した。早尾原古墳の墳丘測量を行い、鉢ノ窟古墳群と下津留古墳群の石棺材の実測作業を行った。
- 2019(平成31・令和元)年度** 重政古墳の第4次調査として、トレンチ5箇所(7~11トレンチ)の調査区を行い、段築上の壺形埴輪や墳端テラスなどを確認した。小坂大塚古墳の第2次調査として、トレンチ3箇所(6~8トレンチ)の調査区を行い、墳端テラスや周溝などを確認した。道ノ上古墳の墳丘測量調査を行った。
- 2020(令和2)年度** 重政古墳第5次調査として、トレンチ3箇所(7・10・11トレンチ)の発掘・実測等を行い、竜ヶ鼻古墳の墳丘測量調査を行った。年度途中、新型コロナ感染対策による日程変更のため、重政古墳10トレンチのみ完掘できず、翌年度に持ち越された。
- 2021(令和3)年度** 重政古墳の第10トレンチの発掘・実測を、前年度より継続して実施した。

第4節 調査の組織

調査主体 豊後大野市教育委員会

久保田正治	(教育長 平成 22~28 年度)
下田 博	(教育長 平成 29 年度~)
山口正美	(教育次長 平成 22 年度)
西山清隆	(教育次長 平成 23 年度)
萩原憲士	(教育次長 平成 30 年度)
衛本浩二	(教育次長 令和元年度)
堀 誠裕	(教育次長 令和 2 ~ 3 年度)

豊後大野市内遺跡調査指導委員会

	田中裕介	(別府大学文学部教授)
	杉井 健	(熊本大学文学部准教授)
	重藤輝行	(佐賀大学芸術地域デザイン学部教授)
	林 正憲	(独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所主任研究員)
調査指導	後藤宗俊	(別府大学名誉教授)
	後藤晃一	(大分県教育厅文化課 平成 22～24 年度)
	横澤 慎	(大分県教育厅文化課 平成 25～26 年度)
	越智淳平	(大分県教育厅文化課 平成 27～29 年度)
	山路康弘	(大分県教育厅文化課 平成 30 年度)
	井 大樹	(大分県教育厅文化課 令和元～2 年度)
	佐藤 信	(大分県教育厅文化課 令和 3 年度)
調査事務	阿南鋼一	(生涯学習課長 平成 22～23 年度)
	渡邊久洋	(生涯学習課長 平成 24 年度)
	木津都彌	(生涯学習課長 平成 25 年度)
	赤嶺且治	(生涯学習課長 平成 26 年度)
	芦刈次郎	(社会教育課長 平成 27 年度)
	川野文敏	(社会教育課長 平成 28 年 4～12 月)
	真部直廣	(社会教育課長 平成 29 年 1～3 月)
	廣瀬宏一	(社会教育課長 平成 29～30 年度)
	深田宏文	(社会教育課長 令和元年度)
	佐藤精華	(社会教育課長 令和 2 年度)
	岡部 司	(社会教育課長 令和 3 年度)
	原嶋宏司	(生涯学習課文化財係長 平成 23～25 年度)
	高野弘之	(文化財係長 平成 26～30 年度 社会教育課参事 令和元～2 年度)
	諸岡 郁	(生涯学習課文化財係) 調査担当
	豊田徹士	(生涯学習課文化財係)
	大野幸則	(社会教育課文化財係)
	毛利篤史	(社会教育課文化財係)
	神志那庸一	(社会教育課文化財係)
	長屋佳歩	(社会教育課文化財係)

(諸岡)

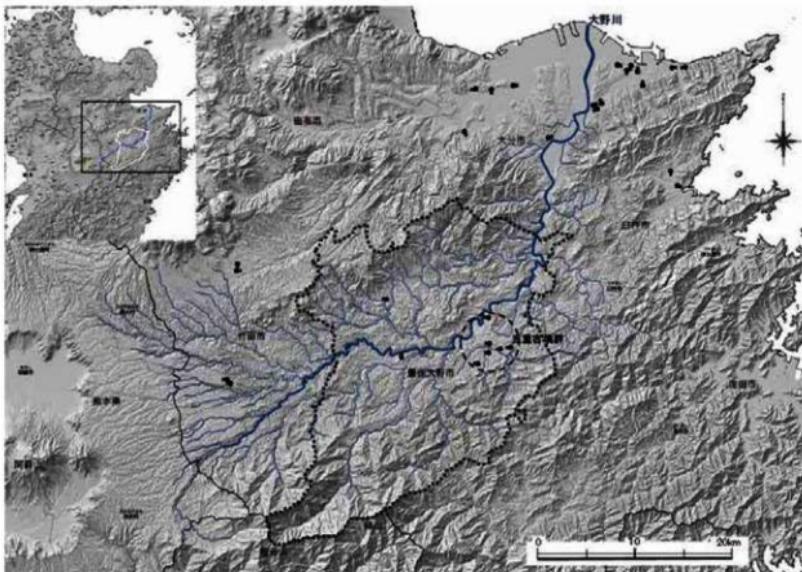
第2章 遺跡の立置と環境

第1節 地理的環境

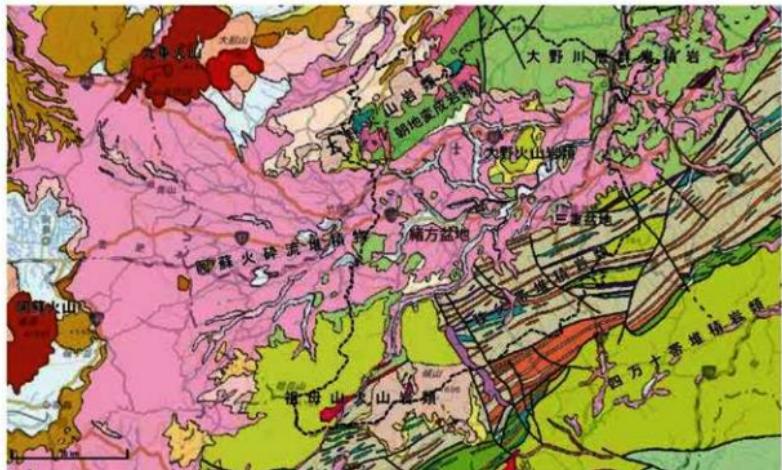
大分県南部に位置する豊後大野市は、北側には標高700m級の大野山地系が連なり、南側には標高1500m以上の祖母傾山系で宮崎県に接しており、中央を県下最大の流域面積を誇る河川である大野川が流れている。大野川は、祖母傾山系や阿蘇外輪山・九重連山等を源とし、数多くの支流を合流しながら東流し、次第に北流に向きを変えて別府湾に達するが、豊後大野市域はその大野川中流域の大部分に相当する。流域北側の大野山地系は、朝日変成岩や花崗岩類が分布する大野火山岩類と、大野川層群の礫岩・砂岩・泥岩などの堆積岩が分布する地質である。流域南側は、秩父帶・四万十帶の堆積岩類からなる基盤岩に、祖母火山岩類である流紋岩や凝灰岩からなる祖母傾山系の山地帯が連なっている。その間に挟まれた大野川地溝帯には阿蘇山噴火の火碎流堆積物による台地や丘陵地形が顕著に発達し、特に9万年前に堆積した阿蘇4火碎流は大野川流域の谷を埋め尽くし、熔結凝灰岩となって最大100mの厚さで堆積している。台地地形は「原」と呼ばれる平坦面が広がり、標高は犬飼付近で約120m、大野付近で200m、竹田市では330mと阿蘇山に近づく程上昇して、この地域の特徴的な風景として形成されている。

台地の間を縫うように流れる大野川やその支流である平井川・緒方川・三重川・奥岳川・茜川などの河川が浸食や蛇行を繰り返して深い谷を形成し、谷壁には熔結凝灰岩の絶壁が露出している。また面積は広くはないが河岸段丘や沖積平野が河川沿岸にみられ、台地の平坦面とは阿蘇熔結凝灰岩の断崖に隔てられるなど変化に富む地形を見せている。これらの台地や河岸段丘上では各先史時代より続く生活基盤となっており、様々な遺跡が集中する地域として知られている。

特に台地や丘陵の崖面など市内の至る所で目にできる阿蘇熔結凝灰岩は、軟質の弱溶結や硬質



第1図 大野川流域の地形図 (1/500000) 国土地理院陰影地形図使用



第2図 豊後大野市周辺地質図（産業技術総合研究所シームレス地質図（基本版）使用）

の強溶結など地域によってさまざまな特質のある岩質である。強溶結の岩質は石材として各時代の石造物に加工されているが、古墳時代にはすでに石棺等の主要石材でもある。弱溶結の岩盤には墳丘の地盤や横穴墓造営に利用されるなど、地域の文化に根付いた石質・石材として知られている。

第2節 歷史的環境

市内の主要遺跡はいずれも台地地形上や大野川沿岸の平野や段丘上で數多く分布している。旧石器時代の遺跡は、国指定史跡の岩戸遺跡をはじめ、市ノ久保遺跡・津留遺跡・百枝遺跡・駒方遺跡群など大分県内でも著名な遺跡が多いことで知られている。縄文時代も同様で、早期の田村遺跡・鳥穴遺跡、前期の千人塚遺跡、後期の夏足原遺跡・川南原遺跡群・駒方遺跡・惣田遺跡、晚期の大石遺跡・宮地前遺跡など、遺構や遺物の遺存状態が良好な出土であったことが確認されている。

弥生時代では前期の遺跡は少なく、平石遺跡および駒方遺跡B地区で大型の壺や甕等を棺として埋葬していた墓地遺跡が検出されている。中期の後半以降に遺跡数は増加し始め、近中遺跡や岡遺跡など市内の各台地地形上で住居跡が現れてくるようになる。やがて後期に入ると台地地形上の各所に遺跡数が急増して集落として出現し、中には大規模な集落として発達をみせている。200基を超える堅穴住居跡や掘立柱建物群が検出された鹿道原遺跡をはじめ、舞田原遺跡、高松遺跡・高添遺跡・二木本遺跡・松木遺跡など多数知られ、それぞれ台地上を生活拠点として展開したものとみられている。また古市遺跡や陣箱遺跡など河川に近い冲積平野や河岸段丘上からも同様の集落が見つかっており、県下でも代表的な集中地域として知られている。地形的にいざれも水田耕作に適した位置ではなく、畑作を中心とした生活風景が想定されているが、鉄器の出土量も多いことから生活の豊かさを物語っており、中には銅鏡片を出土するなど、社会構造の変化などの現われと推定される。また、土器の器種や形態などの特徴により、大野町域を中心とした大野原地域と千歳町・犬飼町を中心とした白鹿山周辺域という、大野川中流域の東西でそれぞれ文化圏の存在も推定されている。

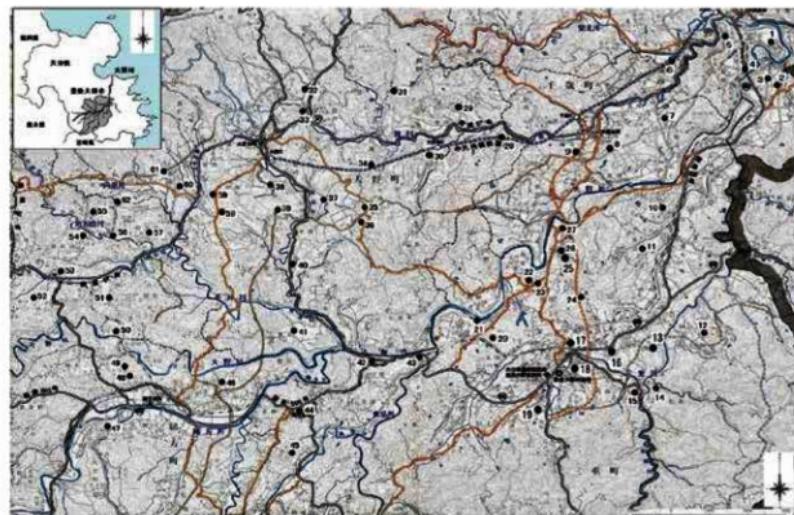
このような集落遺跡は古墳時代の前期初頭まで存続しているが、それ以後になると台地上からは激減している。河川に近い平野部に古墳時代の住居跡が見つかっていることから、生活の拠点が台地上から平野へ変化したこ

と捉えられるが、社会的な大きな変化がうかがえる。やがて古墳の築造が始まるようになるが、首長墓として前期後半から中期にかけて8基の前方後円墳をはじめとする古墳群や石棺群が数多く所在する。市内三重川流域に前方後円墳群、朝日・大野町域の平井川流域に円墳群が多く分布し、約50基を数えるほどである。後期になると古墳の築造は激減して横穴墓へと変わっていくが、各小河川沿いの平野や谷間などを見下ろす位置などに群集して、分布域が広がるように所在している。

歴史時代以後について、市域は豊後国大野郡の大部分に含まれる。古代の遺跡調査例としては古市遺跡や加原遺跡等で行われて建物跡などが見つかっているのみで調査例は多くはない。大野郡衙跡についても確認されていないが、前方後円墳の多い三重地域に所在が有力視されている。また、大野郡内に設置された駅の一つに三重駅があり、これも三重地域と推定されて豊後と日向を結ぶ官道の中継地として存在していたと推定されている。緒方地域でも条里跡と推定される地割が緒方盆地で確認され、経塚が2箇所で確認されているが、そこは豊後武士団である大神一族の緒方氏の本拠地である。

中世以後、凝灰岩を利用した磨崖仏や石塔類などの石造物の造立が数多くみられ、建物遺構が惣田遺跡や高添遺跡で、墳墓群が千人塚遺跡で検出されている。また、大名である大友家の家臣団である戸次氏・一万田氏・志賀氏など有力な氏族にゆかりのある寺社が造立され、拠点として志賀城や一万田氏館跡など多くの中世城館跡が確認されている。戦国期には交通路の要衝であったためか戦乱に巻き込まれており、特に天正年間の豊薩戦争における薩摩の島津氏との抗争などにより多くの山城が築城されている。

大友氏除国後は小藩分立となり、近世の市域は臼杵藩と岡藩の領域に属し、両藩の様々な関連施設や、街道や河川港などの交通の遺跡等が所在し、一部は現在でも人々の生活や社会と結びついている。



1 雷田原遺跡 2 黒松遺跡 3 琴ノ久保遺跡 4 津留遺跡 5 烏六遺跡 6 天添遺跡 7 斎田原遺跡 8 上原遺跡 9 上手門遺跡 10 洗水古墳 11 惣田遺跡 12 江字塚原古墳群
13 小坂大野古墳 14 松尾城跡 15 内田古墳群 16 岩ノ上古墳 17 岩ヶ鼻古墳 18 鹿政古墳 19 秋葉鬼鹿古墳 20 六山横穴墓群 21 上下田遺跡 22 百枝遺跡 23 陣跡
24 札船遺跡 25 立野古墳 26 斎吉古墳 27 下浦留古墳群 28 向田遺跡 29 佐原西遺跡 30 中道古墳 31 光品寺遺跡 32 佐吉古墳 33 法寧寺墓群 34 六井遺跡 35 鳥居古墳
36 宮地前遺跡 37 松木遺跡 38 田原遺跡 39 古方遺跡 40 萩舟久手遺跡 41 足原原遺跡 42 駒曾宝生寺 43 犬芦遺跡 44 大鶴院遺跡 45 中ノ原古墳 46 鹿生宮古墳
47 仲情穴墓群 48 千人塚遺跡 49 鹿尾城跡 50 志賀城跡 51 若宮古墳 52 九山谷古墳 53 大若木桟舟遺跡 54 田村遺跡 55 - 一万田遺跡 56 善市遺跡 57 佐喜群 58 近中遺跡
59 二木木遺跡 60 加原遺跡 61 伊ノ原古墳 62 伊原古墳

第3図 豊後大野市主要遺跡分布図

第3節 大野川中流域の古墳分布

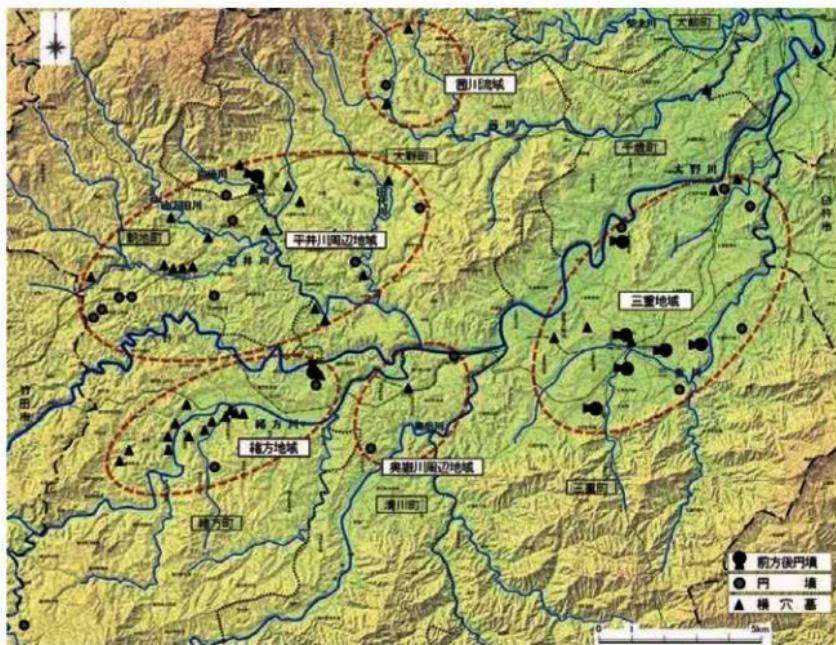
大野川中流域に相当する豊後大野市には、阿蘇火砕流堆積による丘陵や台地上に多くの古墳が所在している。市東部には前方後円墳、西部に円墳が多い傾向があり、これらはいずれも大野川本流やその支流などの河川流域毎の地域単位が分布地域として示されている。各河川流域に形成される河岸段丘上や沖積平野などの周囲でもあることから、沖積平野が権力支配の本拠地でもあったことがうかがわれる。このような地形は大野川本流や支流の各河川沿いで見られ、各河川流域の間には阿蘇熔結凝灰岩の崖面や山地により遮られて地形的にも隔たりがあることからも、各河川単位でのまとまりが政治的支配地域の単位として捉えることができる。

三重古墳群が所在する市東部の三重町域には、三重川流域の沖積平野の三重盆地とその周辺から、北側の大野川本流域沿岸にも渡って広く分布しており、これらを含めた地域を三重地域とする。

市西部の大野川北岸の朝日・大野町域にかけて広範囲に分布する古墳群は、平井川とその支流域の範囲として複数の小地域に分割もできるものの、一括して平井川周辺地域とする。

同じく市西部の緒方町域は、大野川本流沿岸の平野及び緒方川流域の緒方盆地周囲も含めた地域を、緒方地域とする。

その他数は少ないが、大野町東部から千歳町域を茜川流域、清川町域を奥嶽川流域周辺とした中にも小地域として、平野部周辺に円墳が分布している。また、大野川中流域内の支流である野津川や柴北川流域の沖積平野には、古墳の存在は知られていない。

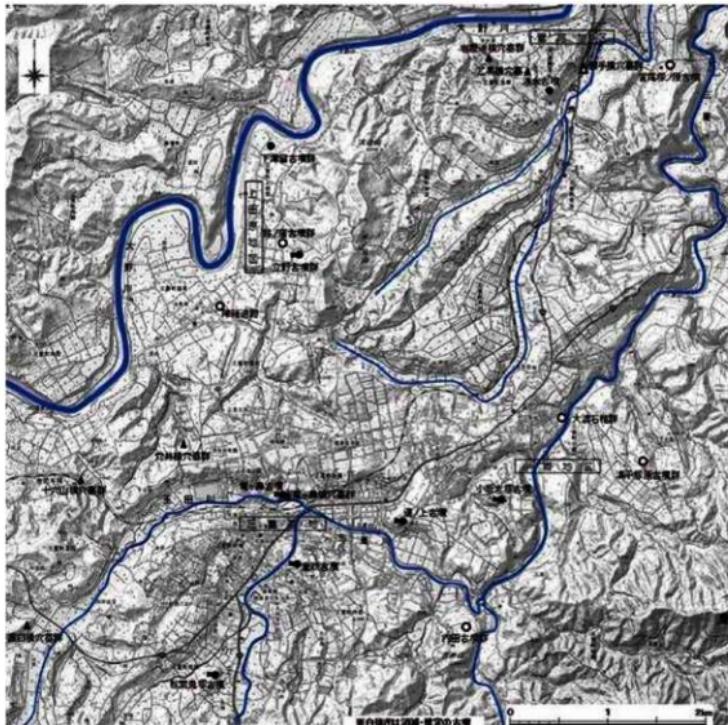


第4図 豊後大野市古墳分布図 (1/150000) (国土地理院陰影起伏図に加筆)

1. 三重地域の古墳

市中心部の三重町域に相当する三重川流域と大野川本流域に、前方後円墳6基のほか小円墳群等が点在し、大野川中流域でも中心的な存在とみられている。そのうち三重川流域に多くの主要な首長墳があり、上流側の沖積平野である三重盆地には周囲を取り巻くように見下ろす台地端に所在し、下流の小坂地区周辺には沖積平野ではなく台地地形群が発達し、こうした台地の高所に所在している。上流と下流で立地環境が異なることが知られている(玉永1987ほか)。

大野川本流の沿岸には河岸段丘及び台地地形による平坦地形が至る所でみられるが、その中の上田原地区内に分布が集中している。下流側の菅尾地区にも所在しているが、大野川沿いだけでなく三重川支流の又井川流域にかけての分布もある。各古墳については以下の通りであるが、三重古墳群の主要古墳の調査内容については第3章で紹介する。



第5図 三重地域古墳分布図 (1/50000) (国土地理院陰影起伏図に加筆)

小坂大塚古墳(第3章1節 写真図版1~4)

三重川流域の最も下流側の独立状の台地上に所在する前方後円墳で、大正時代に前方後円墳として報告され(本荘・前田1924)、1972(昭和47)年には大分県指定史跡となっている。前方部前端など一部を削平されて

いる以外はほぼ保存状況は良好で、全長約43mで、後円部径27m、前方部長16mで、後円部に比べ前方部が低く小さいのが特徴である。後円部頂上には近世石塔類があり、墳頂北側に盗掘坑らしき窪みがあるが、経緯等は不明で主体部や出土遺物も知られていない。なお、東側に接している小型の塚は後世の築造と考えられる。

1997(平成9)年度に大分県教委による墳丘測量が行われ、全長は約43m、後円部に比べ前方部が小さく柄鏡形の前方後円墳である墳形の特徴から、古墳時代前期後半頃の築造と推定されている(田中1998、橋本1998)。2010(平成22)年に測量(玉川2012)、と第1次の確認調査(諸岡2012)、2019(令和元)年度の第2次調査により、後円部墳端にテラス状平坦面や周溝を検出し、くびれ部の形態も確認できた。しかし時期を推定できる出土遺物はなく、墳丘形態より古墳時代前期の築造と推定されている(諸岡2021)。

みちのく 道ノ上古墳(第3章第2節 写真図版5~8)

三重盆地を東側より見下ろす台地先端上に所在する前方後円墳で、全長約74mと大野川流域最大規模を誇る。古くから存在は知られており、大正時代に前方後円墳として報告され(本荘・前田1924)、1972(昭和47)年には大分県指定史跡となっている。前方部前端や後円部南側に一部削平があるが概ね保存は良好で、後円部頂上に社殿跡があるが、主体部については特に伝承はない。

2000(平成12)年に行われた確認調査でくびれ部墳端の根石列及び葺石を検出し、後円部側墳端にテラス状の平坦面が後円部で確認されている。後円部東側では周溝が確認されており、後円部の周囲のみ設けられていたと考えられる。円筒埴輪や壺形埴輪の破片も出土していて、中期初頭頃の築造年代と推定されている(諸岡2002)。2019(令和元)年度に測量調査を行われている(玉川2021)。

じゆまさ 重政古墳(第3章第3節 写真図版9~16)

三重盆地の中心部を見下ろす通称重政原と呼ばれる台地西端に所在する前方後円墳である。全長は約52mを測るが、後円部の一部をグランドにより失われているとみられ、それ以外は保存状況は概ね良好である。大正時代の報告では明治時代の盗掘により石棺内より遺物が出土するものすでに行方不明となっている旨の伝承などが記述されている(本荘・前田1924、伊東1952)。1973(昭和48)年に大分県指定史跡となっている。

調査は学校施設整備に伴って行われ、1994(平成6)年度に墳丘測量、翌年にトレーナー3箇所による確認調査(1次調査)が行われている。第1トレーナーより葺石の存在や壺形埴輪の破片が出土したが、全体的な擾乱等により周溝や墳端などは確認できず、第2・3トレーナーでも遺構は全く検出できていない(諸岡1997)。またこの頃には壺形埴輪が存在することが明らかとなり、5世紀初頭の築造年代が推定されている(田中1998)。

2017(平成29)年度より別府大学の協力により、重政古墳の規模や形態の確認調査のため墳丘測量と併せて2次調査に着手、2020年度の5次調査まで継続して実施した(田中2019・2020・2021、玉川2019)。

あきばおにづか 秋葉鬼塚古墳(第3章第4節 写真図版17~21)

鬼塚区の通称竜王山と呼ばれる、三重盆地を南側から見下ろす標高166m程の台地先端上に立地する前方後円墳である。地元地名の「鬼塚」の由来ともいわれ、古墳としては古くから知られている。盗掘の伝承が地元に伝わるものの中でも主体部については不明である(土生1968)。1970年代の分布調査の進展により前方部を西側に向かって前方後円墳として確認されている。1993(平成5)に墳丘測量図の作成により全長50m程の規模とみられ、1994(平成6)年には県指定史跡となっている。

調査は2013・2014(平成25・26)年度に行い、墳丘測量とトレーナー12箇所による確認調査を行っている(田中2015、玉川2015、諸岡2015・2016)。

竜ヶ鼻古墳(第3章第5節 写真図版22・23)

上赤嶺区の通称大原と呼ばれる広大な台地から伸びる尾根上に所在し、三重盆地を北側から見下ろす位置にある。墳丘は後円部墳頂に盗掘坑らしい窪みがあるほか、全体的に掘削や改変等により、わずかに前方後円墳としての墳形が確認できる。昭和40年代以降より赤嶺古墳という名称でも記述されるようになり、昭和50年代以降には地形からの推定により、前方後円墳の可能性が高いことで紹介されている。出土遺物や葺石などではなく古墳としての確証はなかったが、1998(平成10)年度の確認調査で円筒埴輪の出土が判明した。確認調査では墳丘には葺石ではなく、後円部東は尾根を掘り切るような幅6m程に掘込まれているのが確認されている。

出土した円筒埴輪により、5世紀中頃～後半の前方後円墳として市内最後の築造と推定される(田中2000、諸岡2000)。2020(令和2)年度に測量調査が行われている。

内田古墳群(第3章第8節 写真図版34～36)

道ノ上古墳の南側の吉井山山麓より派生する台地上に所在し、三重盆地内を南東側より見下ろす立地環境である。現在周囲は農地となっていて、「マゼ古墳」と呼ばれる1基が墳丘の一部を残すのみとなっている。元々数基の塚があったが明治頃の開墾によって消滅し、その際に石棺が掘り出されて鉄劍や耳環等の出土があつたと伝えられている。

2001(平成13)年の調査で少なくとも2基以上の古墳群であることを確認し、1号墳(マゼ古墳)と2号墳は東西に並んで築造された径17m程の小円墳群とみられている。確認調査で検出した周溝内には、葺石と思われる礫がすべて崩落して周溝底に溜まつた状態であることが確認できた。また石棺材と思われる溝のある凝灰岩板石が墳丘上にあり、主体部は箱形石棺であった可能性がある。出土遺物は1号墳では土師器壺などが、2号墳では土師器高杯が周溝内より出土し、時期は1号墳は5世紀初頭頃、2号墳は1号墳よりやや後出するものと思われる(諸岡2003)。

漬平塚原古墳群

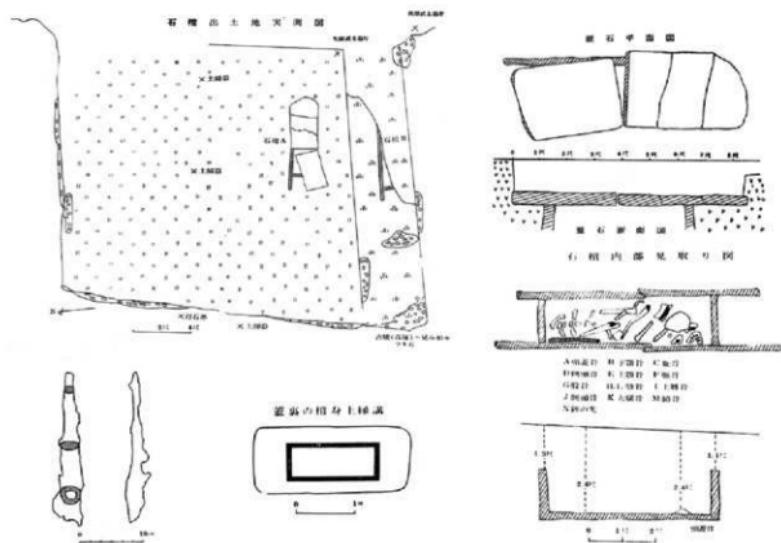
三重町東部の小坂地域の畠地の広がる台地地形上の、北東側にやや傾斜した突端付近一帯に所在する。三重川流域では最も下流側で、周囲は谷底に狭小な水田を望む環境である。字名は漬平で通称塚原と呼ばれている地域で、1949(昭和24)年に2基の箱式石棺が賀川光夫氏により確認され、「塚原古墳」の名称で報告されている(賀川1949)。当時すでに墳丘はほとんど失われて棺材が露出している状況で、ほかに周辺にも棺材らしき石材が点在していたことが記述されている。

その後1972(昭和47)年に農業基盤整備により新たに石棺2基の発見により「漬平石棺群」という名称で調査が行われている(玉永1987)。種類は箱形と舟形石棺で、前述の賀川氏調査の2基から続けて3・4号棺とし、これまで計4基の石棺群があったことが知られている。元々内田古墳群のような小円墳群であったと考えられるが、それぞれの墳丘の位置等は不明である。現在は葺石と思われる出土礫が積まれているのが残されているが、遺構は基盤整備により大きく攢乱を受けているためか2010(平成22)年度の確認調査では検出できず、墳丘に関する手掛かりは不明である。

1号・2号棺(第6図) 賀川氏の調査当時にA・B石棺とされていたもので、便宜上石棺Aを1号、石棺Bを2号とする。1号棺は、メートル法に換算して蓋石は長さ2.4m幅0.81mとされ、2枚の板石で構成され、内面に長方形形状の溝を有している。棺身は長さ1.36m、幅0.45mで、側辺部に各2枚、小口部各1枚の計6枚と、底石の組み合わせである。2号棺は一部が露出しているのを確認し、1号棺とは1.3m程の間隔で並んでいることが分かる。副葬品は石棺Aに鉄矛や人骨の他、周囲に土師器や須恵器が出土したという。葺石の散布が確認されているが墳丘は失われていたと記述されており、古墳としての規模は不明である。

3号棺(第7図中) 凝灰岩製の箱式石棺で、内法で測ると長さ1.62m、幅0.39mである。棺身の小口部に溝状の枘が設けられ、長側石と組み合わせているが、1号棺とは小口と側板の組み合わせ方が異なっている。棺蓋の内側には1号石棺と同じく長方形形状の溝が彫られているが、こちらは二重で彫り込まれている。破碎しているため枚数は不明であるが、棺身は側辺部と小口部と底部各1枚の5枚の板石の組み合わせで、底部の中央に穿孔がある。棺内上り2体の人骨の他、鉄斧が出土している。

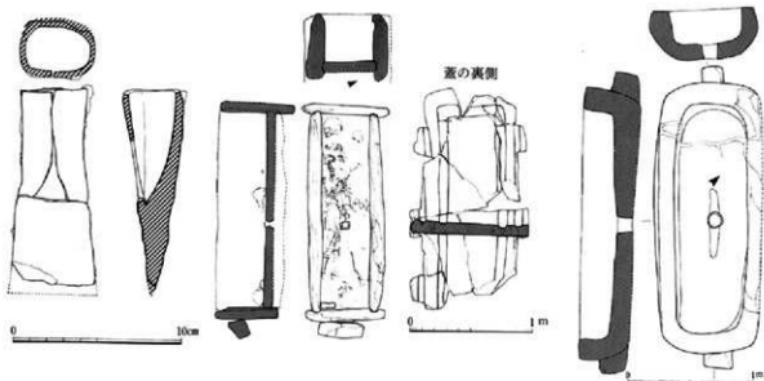
4号棺(第7図右) 凝灰岩製の舟形石棺で、棺身のみ確認されている。長さ2.16m、幅0.85m、内法では長さ1.83m、幅0.55mで、底部中央に穿孔がある。小口部両方に方形の繩掛け突起がある。現在下小坂区の愛宕社前に移転して保存している。(写真図版47)



第6図 清平塚原古墳群1号石棺・出土鉄錆 (賀川1949)

三重盆地にはその他にも古墳の存在が文献上確認することができる。賀川氏の塚原石棺報告の分布図上に示すように、三重町上小坂区の三重川に架かる市道の山渡橋の西側の位置に3基の石棺記号が描かれている(賀川1949)。塚原石棺群の周辺に棺材が置かれている記述がこれに該当するのか不明であるが、特に本文には触れられていない。同じ頃、伊東東氏により山渡石棺の名称で記述があり、耳環や土器、鉄器の出土が紹介されている(伊東1952)。いずれも昭和20年代に書かれた文献に記されているのみで、それ以後には文献に登場することはなく、詳細は不明である。現地も三重川下流側の川に向かって傾斜する台地上の山林であるが、石棺の所在は確認できない。

三重町秋葉の丈六寺に石棺の伝承が土生米作氏によって紹介されている(土生1968)。秋葉鬼塚古墳の所在する台地の北側で、秋葉川に沿って延びる低い丘陵地形上で、現在貴船様と称されて祀られている位置に石棺が埋められているという。これも伝承のみで詳細は不明である。



第7図 渋平塚原古墳群3号・4号石棺・出土鉄斧（玉永1987）

たての 立野古墳群

上田原区立野集落のある台地上に所在する古墳群で、大野川河岸段丘を見下ろす位置である。1号墳の前方後円墳1基のほかに周囲に3基の小円墳が所在する古墳群であることが知られ、他にも周辺には開発等で失われた古墳の伝承もある。

1号墳（立野古墳）（第3章第6節 写真図版24～27）全長約65m、前方部26.5m、後円部38.5mの前方後円墳で、市内第2位の規模である。墳丘南側は宅地により削平を受けているが、北側はよく保存されており、馬蹄形の周溝及び前方部西側の陸橋部が確認できる。後円部墳頂部に盗掘跡らしい窪みがあるが、主体部等については特に何も伝えられていない。古くから古墳との認識はされていたが、1988（昭和63）年の踏査によって約60m規模の前方後円墳であることと市内では初めて埴輪の存在が確認された（清水1998）。その後1992（平成4）年に県指定史跡となつたが、台風による墳丘の一部崩落の発生により、1999（平成11）年に南側掘削面に法面の盛土による墳丘の保護を行つていている。

調査は大分県教育委員会により1995（平成7）年に墳丘測量と確認調査が行われ、後円部墳端に葺石に覆われたテラス状の平坦面を検出している。調査の結果、柄鏡型の墳丘形態や墳端根石列を確認し、出土遺物の円筒埴輪と壺形埴輪により、古墳時代前期後葉から末にかけての築造と考えられた（田中1998）。

2号墳 1号墳の立野古墳の周堤に接して築造されているもので、径10m、高さ1m程の小円墳と考えられる。出土遺物や主体部については特に伝えられていない。

3号墳 立野古墳の西側50mに所在する塚状の高まりがあり、頂部は墓地として利用されている。径は15m、高さ4mを測る墳丘であるが、周囲を削平されていることから径20m程の規模であったと思われる。出土遺物や主体部については特に伝えられていない。

4号墳 3号墳より17m南側の民家敷地脇に低墳丘状の高まりがあり、規模は7m×10m程の長方形形状で、高さ1m程の緩やかな墳丘を呈している。かつて石棺が掘り出されたとの伝承があるが、現在は埋め戻されて確認できない。3号墳と4号墳は距離的にも近く、削平により分断された一つの古墳の可能性も指摘されている。

はちのくぼ 鉢ノ窪古墳群（第3章第8節 写真図版29・30）

上田原区の中原集落内に所在し、立野古墳群より北西200m程の河岸段丘に向かって傾斜する位置である。

宅地や畠などに石棺が露出して置かれており、出土位置が不明な破片なども含めて、舟形石棺5基と箱形石棺1基の計6基が確認されている。本来古墳群であったものの、現況では墳丘は失われて石棺のみ露出する分布状況から、石棺群の名称で周知遺跡となっている。石棺は掘削や流失など墳丘土消失のためか古くから発見されており、1号棺が宅地脇の崖面に露出し、2・3号棺も昭和初期には既に盜掘による刀剣類出土の伝承がある。

1970(昭和45)年になります2・3号棺の整備のため樹木伐採や掘り出されていて、出土位置のまま復元されていることが当時の記録より伺える。主軸は1号棺と同じ東西方向で、隣接しての出土のため2基の埋葬主体部を持った同一古墳であった可能性がある。墳丘について昭和45年当時にはわずかに残っていたらしく「小さな塚」と表現されているが、当時の写真(写真図版30)では墳丘規模等は不明である。現在は径7m、高さ2mの墳丘形状になっているが、後世の開発で周囲を掘下げられて石棺のみ残されたためで、墳丘の痕跡は残されていないとみられる。石棺は大きく傾き、掘り出された当時より変化しているようで、50年近く経過して樹木や周囲の土砂流失などにより棺材の傾きが進行したと考えられる。

その後1号棺も一部が露出していた崖面の崩落の危険などから1972(昭和47)年に現在地に移されている。その際、ほぼそのままの方位で移動したと伝えられているため、本来の位置は2~3m西側の東西方向の主軸であったと推定される。内部より人骨4体分と鉄刀の出土が伝えられている(丸小野1987)。

このように昭和40年代に掘り出されて復元されることで存在が知られるようになっており、当時は「中原石棺」あるいは「上田原石棺」と地名から呼ばれていたが、現在は「鉢ノ窪石棺」という名称で周知されている。

墳丘については現況では全く観察できないが、1994(平成6)年度の確認調査で検出した1号棺の墳丘跡や、出土位置のまとと伝わる2・3号棺、4号棺の出土伝承など、限られた狭い範囲での分布であったと考えられる。また1号棺南の第3トレーナーで別の古墳1基の周溝らしい遺構を検出していること、さらに南側に聖塚と呼ばれる塚状地形の伝承など、複数の古墳が想定されており、南北100mの範囲に低墳丘の古墳群として存在していたものと推定される。

じんばこ 下津留古墳群(第3章第8節 写真図版31~33)

上田原区の下津留集落内に所在し、箱形石棺が露出する2箇所を含む4基の古墳群として周知されている。立野古墳や鉢ノ窪古墳群とはやや離れた大野川沿岸に近い段丘端の地形上である。集落内にいくつか墳丘が残存しているが、古くから削平・改変が著しく保存状況は良好でないうえ、規模も様々ですべてが古墳かどうかの確証は乏しい。墳丘表面に大小様々な礫が伴うこと、地元で信仰地として祭られているなどの共通性から4基の古墳群として推測され、西側より1号~4号墳と想定されている(田中1998、2009 諸岡2020)。そのうち1号墳と4号分に箱形石棺の石材が所在する。なお、墳丘規模や形態については不明で、石棺の出土に関する経緯も出土遺物も全く知られていないため、石棺材以外の資料は皆無の状態である。

じんばこ 隣箱遺跡(第8図)

2011(平成23)年度の3次調査で行われた弥生時代後期集落内で古墳時代前期初頭とみられる周溝墓が検出されている。河岸段丘上の立地環境で、周溝は径8m前後のいびつな梢円形で、北側に半円形状に接続して複数の周溝墓が重なるように配置された様相を示しているが、北側調査区外へと続き全容は不明である。

周囲に9基の墓坑らしき遺構があるが、周溝の中心主体部は4号墓と考えられる。長さ2m、幅は1.4mの長方形の平面で、掘り込みの三方は垂直に近いが、南側は階段状に緩傾斜で掘り込まれている。床面には両小口部に棺材用の掘り込みがあるが側板の掘り込みはみられない。棺内寸は長さ1.5m、幅は70cm程との木棺墓と推定される(諸岡2018)。

あそづ 浅水古墳(写真図版47)

昔尾地区、三重川支流の又井川流域の沖積平野を見下ろす台地上に所在しているが、古くは千田平古墳という名称でも呼ばれている。現状は径12m、高さ2m程の円墳状で、頂部は大きく窪んで盜掘跡を残している。窪みの内部にみられる石材が石室や羨道らしき配置であることから横穴式石室の可能性も考えられている。記録によると戦後には既に盜掘されて須恵器片が散乱していたと伝わるが、それら経緯も含めて出土遺物の行方などは不明である(伊東1952)。単独の所在であるが、南側の井上原の台地上にも千人塚と呼ばれる塚が伝えられている。

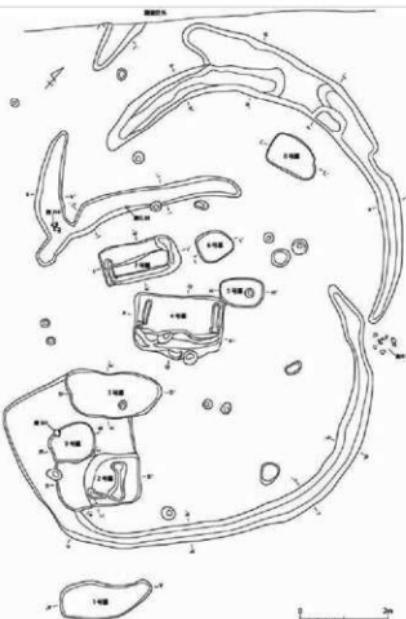
みやおつかのはる 宮尾塚ノ原古墳

昔尾地区の又井川流域の台地上の畠地で、1999(平成11)年頃、土取工事中に埴輪が採集されている。墳丘は全く確認できないが、字名は「塚ノ原」であり、地元には塚の存在した伝承もあることから、かつて古墳が存在した可能性がある。しかし墳丘に関する詳細は不明で、埴輪以外の手掛かりはない。

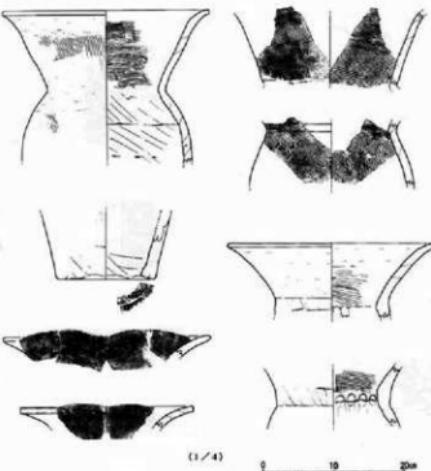
宮尾塚ノ原採集の埴輪はすべて単口縁の壺形埴輪で、数個体分出土している。

(第9図 写真図版49)

口縁部は端部が平坦のもの(1・4)と丸いもの(5・6)がある。また外反する後円部の先端でわずかに屈曲するもの(1・2・6)がある。頸部屈曲部より胴部は1・3であまり肩を張らず長胴化気味の形態と思われる。底部は8のみであるが、整形前の大きく穿孔する形態とみられる。色調は白色気味で、赤色顔料の塗布しているものもある⁽¹⁾。前期末から後期初頭頃の小円墳の存在が考えられる。



第8図 陣箱遺跡周溝墓遺構(諸岡2018)



第9図 宮尾塚ノ原出土埴輪
(第3回九州前方後円墳研究会資料集)

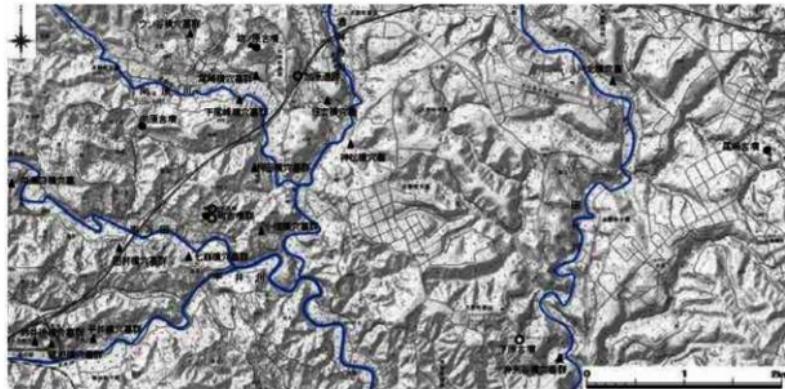
三重地域の横穴墓

三重川流域の三重盆地には20基以上群集している竜ヶ鼻横穴墓群があり、須恵器や馬具類などの鉄器や装身具など多くの出土遺物が伝えられ、6世紀後半から7世頃にかけての造営と考えられる(玉永1987)。他に三重盆地西部には菰口横穴墓群(2基)が所在しており、また盆地東部に内田横穴墓が一部の文献に記載があるものの所在は不明である。

大野川本流域の十六山横穴墓群(2基)のうちの1基より、1982(昭和57)年の調査で鉄製武器や鹿角製刀剣装具などが出土し、5世紀後半の初期横穴墓と推定される(玉永1983)ほか、穴井横穴墓群(11基)や迫横穴墓群(3基)が小支谷に造営されている。さらに下流の菅尾地域には岩屋迫横穴墓群(8基)や乙黒横穴墓(1基)が大野川本流沿岸の段丘に、又井川沿岸には現在は消滅しているが敷手横穴墓群(4基)がある。

2. 平井川周辺地域の古墳

市西部の大野町から朝天町域にかけての地域を流域とする平井川流域に分布する古墳群で、平井川本流だけでなくその支流の田代川、向原川、市万田川など範囲も広く、いくつかの小地域に分れる総称としている。前方後円墳である坊ノ原古墳以外は円墳とみられる。立地環境は、向原川や市万田川地区的古墳群は、河川沿いの沖積平野を見下ろす丘陵上に分布しているのに対し、西側の大野川本流沿岸と平井川の間の尾根上に点在する古墳群は、平野地域から離れた狭い丘陵状地形が連なるその頂上に立地する位置で、市道南部幹線と呼ばれる道路沿線で近世岡城路以来主要交通路となっており、周囲の尾根や台地を見渡す環境にある。最東端の田代川沿岸も平野から離れた台地地形上に所在する。なお、横穴墓群が平井川のほか各支流の河川沿いの谷底平野の周囲に点在している。



第10図 平井川周辺地域（東側）古墳分布図 (1/50000) (国土地理院陰影起伏図に加筆)



第11図 平井川周辺地域(西侧)古墳分布図(1/50000)(国土地理院陰影起伏図に加筆)

坊ノ原古墳 (第4章第1節 写真図版37~40)

平井川支流の向原川流域の平野を見下ろす丘陵上に所在する前方後円墳で、全長約45mの前方部が低く小さい墳形である。明治頃に盜掘を受けたと伝わり(清水1977・賀川1980)、その際の箱形石棺らしい石材が前方部上に置かれている。出土遺物等は全く伝えられていない。

2015~2016(平成27~28)年度に墳丘測量と確認調査が行われている(玉川2016、諸岡2017・2018)。その結果、幅2~3m程のテラス状平坦面が墳丘端で検出し、さらに周囲に溝が掘り巡らせる盾形周溝の存在を確認したが、全周までは巡らせず、前方部端の溝は中世の造構である可能性が高い。円礫が墳丘各所で見られるものの、各トレンチの周溝からは葺石らしき礫は見られず、葺石のない古墳の可能性が高い。

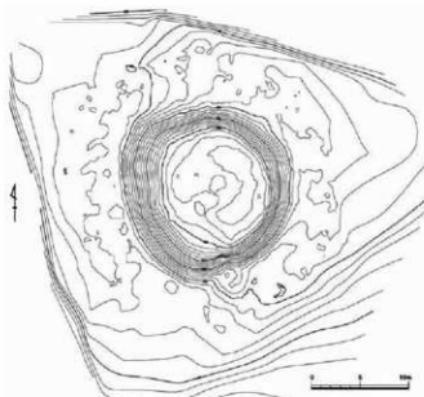
埴輪はみられなかったが、土師器の高杯や甕が周溝内より出土しており、築造時期は前期後半頃と推定される。

向原古墳 (第12図 写真図版47)

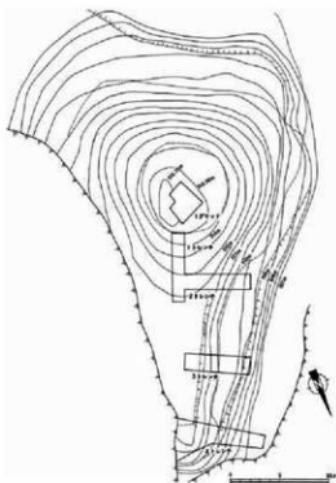
北園区向原集落の南側丘陵上に所在する円墳で、南側より向原川沿いの平野を見下ろす標高261mの丘陵上に位置する。存在は古くから知られて紹介され(日名子1929)、竹内古墳との名称もある。

現況は概ね正円で、径18m、高さ2.8~3.4mを測る。墳頂は径10mの平坦面がありその中央に長軸4m、短軸3mの橢円形状の盜掘跡らしい痕みがある。

葺石らしい礫は全く見られず、段築なども確認できない。墳丘周囲はほぼ平坦面となっているが、周溝の存在する可能性がある。出土遺物等や主体部などは何も伝えられていない。



第12図 向原古墳墳丘測量図(1/500)



第13図 町2号墳測量図（村上1996）

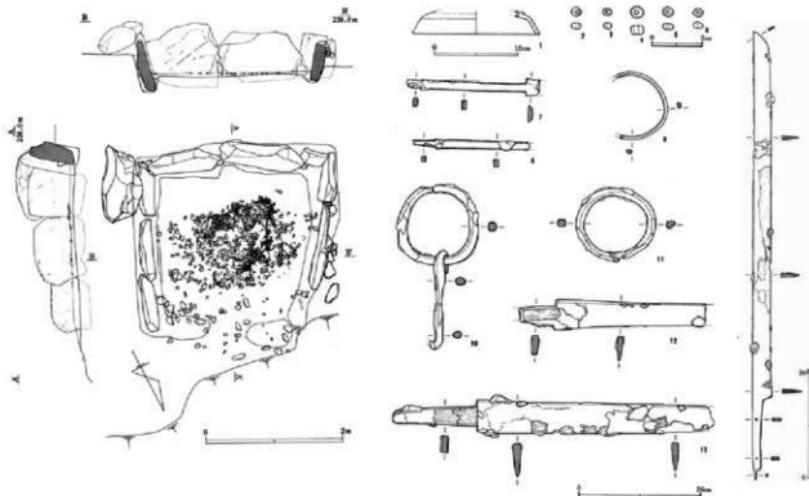
まち 町古墳群 (第13図 写真図版48)

朝地町市万田地区の平井川支流市万田川流域の沖積平野を見下ろす丘陵上に所在し、尾根上に並んで4基の分布とされているが、うち3基は円墳として古くから存在は知られている（日名子1929）。土砂採集に伴い、1994（平成6）年に1号～3号墳の3基の調査が行われているが（村上1996）、1号墳は中世に改変され、3号墳は近世墓地に改変されており古墳としての遺構は確認されていない。4号墳は現況で所在不明である。

2号墳は東西径23m、南北径21mのいびつな円形で、北側に前方部状の張り出しがあるが、円墳と考えられている。主体部は中世の土坑墓造営により搅乱を受けている。墳丘周辺で出土した土師器片により5世紀前半頃の築造と推定されている。

おさな 尾崎古墳 (第14図 写真図版47)

平井川支流の田代川西側の大野町片島地区の北側に傾斜する台地上に所在し、1982（昭和57）年度に行われた農業基盤整備による調査で存在が確認された古墳である。墳丘は耕作などで消失しており、周溝および主体部床面の検出により径15mの円墳と復元されている。



第14図 尾崎古墳石室・出土遺物（小林1983）

主体部は市内で唯一確認された横穴式石室墳であったが、石室は床面付近の腰石のみを残して玄門の袖石も含め抜取られている。玄室は長2.2m、奥壁幅2.45mの正方形状で、入口の方位は北側で床面には礫が敷かれている。腰石は板状の石材を用いており、奥壁及び側壁には赤色顔料の塗布がある。

須恵器や直刀・小刀・鉄族・馬具の各種鉄器類、銅鏡・ガラス小玉の出土遺物があり、時期は6世紀後半と推定される(小林1983)。

加原遺跡 (第15図)

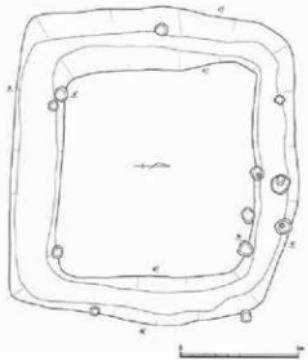
2012(平成24)年度に調査された加原遺跡B区では方墳2基が並んで検出されている。加原川沿いの沖積平野内の立地環境で、いずれも墳丘は失われていて、1基は南北8.1m東西8.7mで、主体部は確認できない。遺物は周溝より紡錘車が出土するのみであり、古墳時代前期から中期にかけてのものとみられている(小柳2014)。

下原古墳 (第16図)

大野町郡山区の下原集落に、工事中に石棺が発見された伝承がある。立地環境は田代川添いの沖積平野を望む独立状の小規模な台地上である。現地には1933(昭和8)年4月17日発掘との刻銘がある慰靈の石碑があるが、現在は埋め戻されているためか石棺は見られず、墳丘らしき痕跡も確認できない。当時の新聞記事によると、石棺は工事の採土中に発見され、大きさはメートル法に換算して、長さ218cm、巾72cm程の規模とされ、内部より人骨三体分と刀剣類4本と鐵8点のほか武器らしきものがあったという。さらに蓋石が除かれた石棺の写真が掲載されていて、箱形石棺であることが判る。

これとよく似た古写真2点が旧三重町中央公民館に所蔵されていて、この新聞掲載写真とは反対側方向から撮影されたと考えられるものである。元は地元郷土史家である伊東東氏の所蔵写真とみられ、撮影場所は永らく不詳であったもので、近年下原古墳の石棺の可能性が指摘されている⁽¹⁾。これには蓋石の一部も写っており、2~3枚で構成された刳抜式石棺のような丸みのある形状が判る。長側石の一つは2枚組足しており、小口部を長側石で挟み、内面は丁寧に面取調整が施されているように見える。発見当時は多くの来訪があったようで、4月23日の記事には郷土史家の十時英司氏や伊東東氏らの視察が報じられており、この時撮影されたものと推定される。

なお、「高さ5.5mの円墳」と記述された文献もあり(本村1981)、当初は墳丘が残っていた可能性がある。現在は全く古墳として

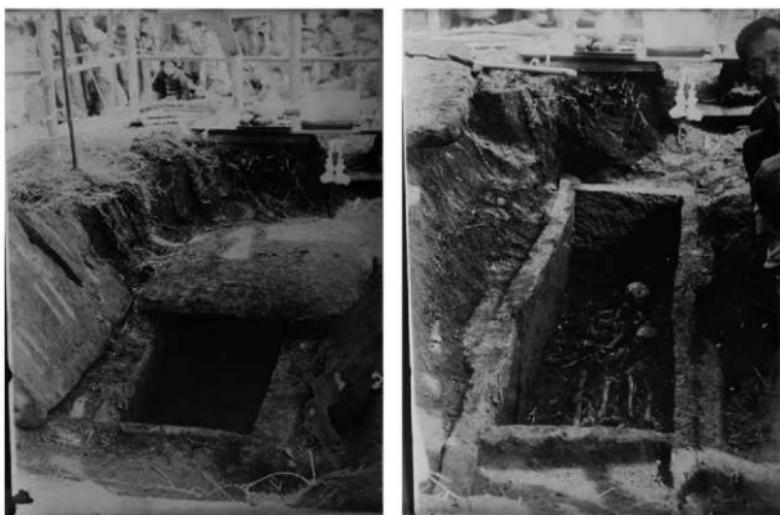


第15図 加原遺跡方墳S001
(小柳2014)



第16図 下原古墳の記事
(昭和8(1933)年4月25日大分新聞)

の痕跡はみられず、出土遺物の行方も知られていない。



第17図 旧三重町中央公民館所蔵古写真

はようばる 早尾原古墳（第18・19図 写真図版48）

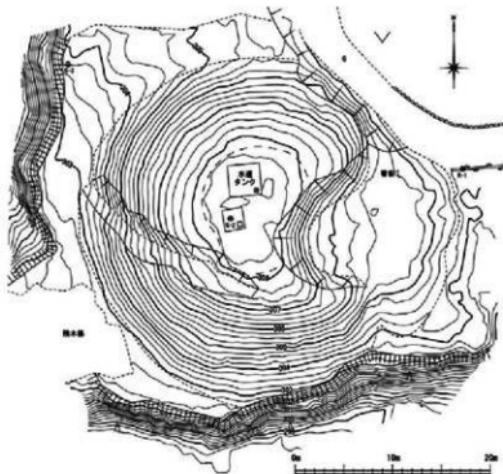
上尾塚の東西に延びる尾根地形上の、周囲を見渡す高台状の地形に立地する。古くは有縁寺古墳とも称され、頂上に貯水タンクが設置され、墳丘の一部に掘削が見られるが、概ね径35m、高さ3～5.5mを測る大型円墳として確認できる。地表面に葺石らしい人頭大の円礎が見られ、周溝も存在している可能性がある。

内部主体として、1927(昭和2)年3月に箱形石棺が掘り出されている。「朝地町史」(賀川他1967)には石棺の図面が掲載されており、長さ3.39m、幅0.81m、深さ0.82～0.9mの凝灰岩製の板石を組み合わせている。副葬品として「土器」「石器」の出土が記載されているが詳細は不明である。現在は確認できないが、石棺材と推定されている石材1点が隣接の公民館脇に安置されている。最大長65cm、厚さ10cm前後の板状の凝灰岩で風化が著しく加工痕などは観察できず石棺材かどうかは不明である。

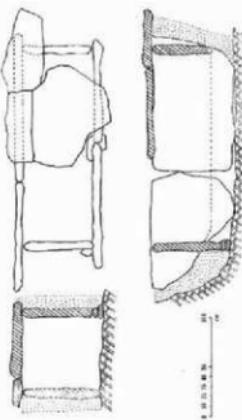
まるやま 丸山古墳（第20・21図 写真図版48）

上尾塚の東西に延びる尾根地形上の、丘陵状地形に立地し、標高約280mの周囲の丘陵を見渡せる小高い位置でもある周囲は住宅等による掘削のためか、墳丘周りのみ取り残されて残るが、元々尾根地形上の一際高い頂部に築造されていたと思われる。

古くから存在は知られており、地元では長者伝説ゆかりの遺跡としても伝えられている。「朝地町史」(賀川他1967)では、帆立貝式墳とも判断されるような見取図と、墳丘構造や表面観察について記述があるが、2016(平成28)年の測量の結果、墳丘はほぼ円形状の地形を測れるが、周囲が掘削による急傾斜に囲まれて特に墳丘東側は畑の造成等により削平を受けるなど墳端についてははつきりしない。部分的に残ると思われる位置から推定して、墳丘部は東西径14m南北径13m程の平坦面があり、中央には長編3.5m、短辺2m、深さ0.5m程の楕円形状に窪んでおり、町史に記述どおりの盜掘坑と思われる。



第18図 早尾原古墳測量図 (1/500)



第19図 早尾原古墳石棺
(賀川他1967)

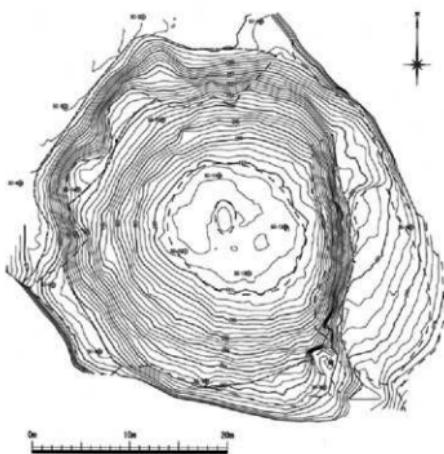
しかし形態や規模などについて町史と異なる点もあり、近年の掘削や段築の可能性も考えられる。墳頂の盜掘坑付近を中心として、標高281～283m付近にみられる傾斜変換するラインより推定して、径32m、高さ5.5mの規模の円墳と考えられる。北方向に向けて方形状の張出するような地形が見受けられ、町史の記述にある造り出しの痕跡という可能性もあるが、凝灰岩の地山岩盤が露出し、墳丘かどうかの確認は困難であるため、現状では円墳と判断したい。周溝の有無も不明で、出土遺物は全く知られていない。

主体部の手掛けとして、丸山古墳出土と伝わる石棺蓋が、墳丘の100m南東側の市道沿いの崖面に立て掛けられている。盗掘の経緯等は不明であるが、長者伝説に因む銭箱の蓋石とされて通称銭蓋石とも呼ばれている。棺身については不明である。天保2年(1831)の紀行文に現在の位置に安置されている記述があり(柄木田2005)、江戸時代にはすでに盗掘を受けていたことが判る。

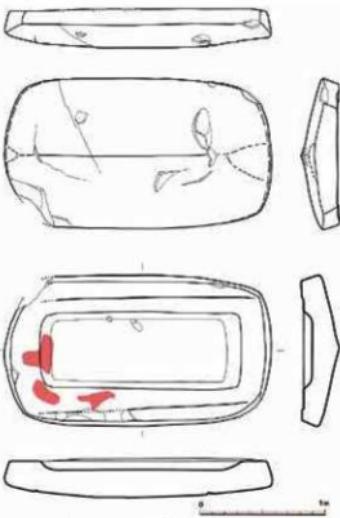
2015(平成27)年11月～28年3月にかけて、道路工事に伴って石棺蓋の移設が行われた際に実測調査を行っている。石棺蓋の材質は硬質な凝灰岩である。石棺蓋の平面は隅丸長方形形状で、一部欠損が見られるものの残りは良好で、全長は縦260cm、横幅は119.5cm、厚さは最大で29cmである。外側の中心には稜があり、断面は屋根形になっている。また四方の端は外側から内側に向かって直線的に内傾している。内側の切り抜きは縦160cm横65cmの長方形形状に、深さは約3.5cmと浅く平坦である。内側の左右端に幅12cm高さ1cm程の段が設けられており、内側の一部に赤色顔料が観察できる。外側の装飾がなく内側の切り抜きが浅いなどの特徴から、石棺の年代は5世紀中頃～後半と考えられる(井2018)。

たかぶし 高伏古墳 (第22図 写真図版48)

丸山古墳の北東500mの尾根状地形上に所在し、「朝地町史」によると突出部のある径20mの墳丘があったとされている。現状は宅地や道路等で削平・改変を受け多為か、平坦面のある高台状になっていて、墳丘かどうかは確認できない。1936(昭和11)年に稻干場の造成中に箱形石棺を発見している。側板の隅角の切込みに小口部



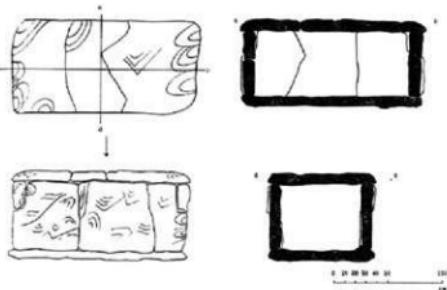
第20図 丸山古墳測量図 (1/500)



第21図 丸山古墳石棺蓋 (1/40)

の突起を組み合わせていたという見取図が掲載されている。鉄器や耳環の出土遺物が伝えられているが、詳細は不明である(賀川他1967)。

石棺材は旧大恩寺中学校に教材として野外展示されていたが、その後元の墳丘跡地近くに戻され積み重ねられている⁽²⁾。棺材は4枚あるが、屋根がかけられて固定されている為詳しく観察できないものの、いずれも長さは80~105cm、幅は60cm前後、厚さは10cm前后を測る板状の凝灰岩である。一部の縁辺に平坦の加工痕がある。突起のある部材は見られなかったが、側板の切込みのある部材が2枚見受けられる。



第22図 高伏古墳石棺 (朝地町史より転載)

尾森古墳 (写真図版48)

上尾塚の尾根地形より東側に延びる丘陵上に所在し、周知遺跡とはなっているがこれに関する文献はない。墳丘地形が2基観察でき、高位置にある西側が1号墳、東側が2号墳とする。1号墳の墳丘は径10m高さ4m程の円錐状で、頂部には径4m程の平坦面がある。部分的に削平があり、張出しのような地形もみられるなど改変がみられる。遺物については不明である。

2号墳は1号墳の東側100m程の丘陵端の位置にあり、径15m、高さ4m程の円墳とみられるが、裾部を削平されて改変が見られる。墳頂部にも削平を受けて、箱形石棺の一部とみられる石材が露出しており、小型の板状凝灰岩が3枚確認できる。多くは失われているとみられ、石棺の元の規模や方位などは不明確である⁽³⁾。

ゆうじゆく 用作古墳

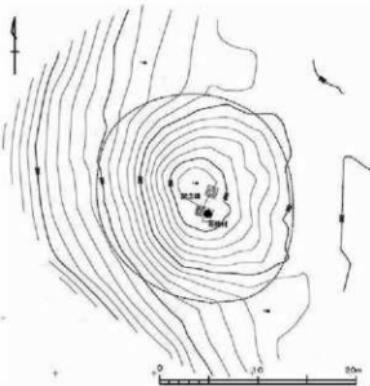
上尾塚地区的尾根地形より東側の丘陵上に所在し、周囲は小河川沿いの谷水田を見下ろす位置で、「朝地町史」に記述があり周知遺跡となっているが、正確な位置は不明である。しかし周辺の丘陵地形上に径10mの墳丘状の高まりが観察でき、円墳とも思われるが周囲の地形とほぼ一体化しており、確認が必要と思われる。

わかみや 若宮古墳 (第23・24図 写真図版48)

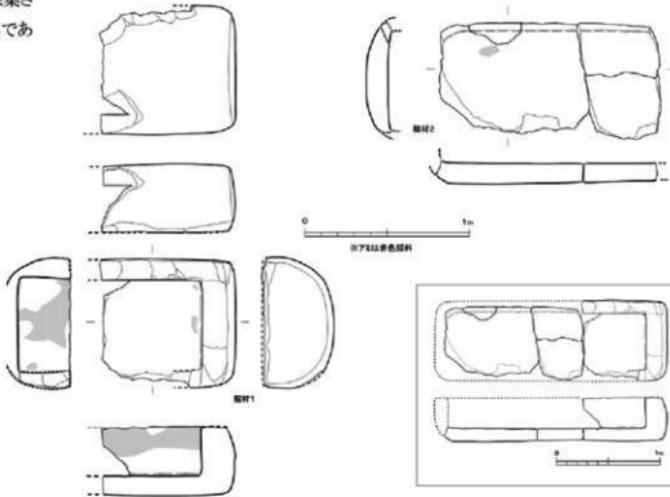
若宮神社境内の山林内に所在する。立地環境は標高262mの上尾塚から続く尾根地形で、台地地形状となっている。見通しは良くないが平井川流域の下野地区の平野を見下ろす位置である。

墳丘は台地縁辺の傾斜地に立地しているためか東西径は19m、南北径20mで、やや楕円気味の円墳である。高さは東側で訳1.2m、西側で2.4mを測る。墳頂部には記念碑が2基建立されていて、うち1基の脇に石棺材が置かれている。墳頂平坦面は径4m程で盗掘痕の痕跡はないが、石棺の露出・石碑の建立により、墳丘頂部を削平等により改変されているとみられる。墳丘上には大型礫がわずかに見られるが、段築や造り出し等は確認できない。周溝等は不明であるが、周囲の地形から傾斜面に続く西側以外に設けられている可能性がある。出土遺物も特に伝えられてなく、墳丘上より若干の土器片が採集さ

れているのみである。



第23図 若宮古墳測量図 (1/500)



第24図 若宮古墳石棺 (1/30)

墳頂部の石棺について、出土に関する経緯は伝えられてないが、墳頂中央に記念碑が文政11(1828)年に建立されていることから、この墳掘り出されたものと考えられる(朝地町文化財保護委員会1988)。著しく破損しているが、凝灰岩製の剥抜き式石棺内面の深さから棺身と思われる。片側小口部の棺材1、底部の棺材2の他側縁部とみられる破片がいくつか確認できるが、完形に復元できるほど遺ってはおらず、蓋石らしき石材も見られない。内面には丁寧な調整が施されており、赤色顔料が一部残る。断面は方形状に深く剥抜かれており角部分の厚さは5cm程と薄くなっている。石枕や底部穿孔などは確認できない。外面は風化が著しいが縄掛突起の痕跡は確認できない。

接合復元から推定して、全長は220cm程と推定される。平面は長方形で断面は半円形に近い形態は、竹田市石舟古墳石棺の棺身があり、形式編年Ⅰ形式(4世紀末～5世紀前半)の特徴と考えられる(神田1990)。しかし長幅費が2.8とやや幅が広く断面長方形に深く剥抜かれているという新しい要素もみられることから、やや後出の5世紀前半頃と推定される。

みやお D びら 宮生日平古墳

2012(平成24)年10月23日朝地町宮生字日平の市道拡幅工事現場で鉄刀が出土している(第25図)。重機で崖を掘削した土砂を搬出作業中に偶然発見されたもので、採集された場所は尾根上の丘陵状に高まった地形である。刀について形態的にも古墳時代の遺物と推定されるもので、未発見の古墳であった可能性が高い。現地を踏査したが既に掘削が進んでいたためか、墳丘や主体部遭構、他の遺物なども含め全く確認できなかった。

刀は直刀で、保存状態は良好であるが発見時の重機によるためか弯曲して切先が欠損している。全長106.5cmを測るが、本来は108cmに復元されるものである。部分的に木質組織の付着があり、目釘穴は2箇所である。

鉄刀出土地は、多くの古墳群がある上尾塚地域から続く尾根上である。かなり離れた東端であるが同一地形上にあることから一連の古墳群であった未発見古墳の存在の可能性が考えられる(豊後大野市歴史民俗資料館2014)。

平井川周辺地域のその他の古墳として、地神原古墳、志屋古墳群、北平古墳などが朝地町史などに記載のあるものの詳細は不明である。なかでも北平古墳は石棺出土の伝承が伝えられているがその所在は不明である。ほかに久保古墳・狐追古墳などは自然地形と区別は付かず、墓地に変更されたとされる大塚古墳は古墳としての痕跡を確認することができない。逆に古墳とみられる地形が見受けられる地形も存在し、竹田市羽恵には羽恵古墳と紹介されているものや用作古墳周辺の丘陵上にも散見できる。すべてが古墳との判断できないが、墳丘として認識し難いものもあるなど、この地域の古墳の全容は不明な点が多い。

平井川流域の横穴墓

横穴墓は平井川及びその支流の小河川沿いの沖積平野や谷間に見下ろす崖面に数多く点在し、23箇所69基を数える。坊ノ原古墳の所在する向原川沿いに尾崎横穴墓群(6基)、嵯ノ谷横穴墓群(4基)、下尾峰横穴墓群(2基)や、酒井寺川沿いには住吉横穴墓群(2基)、神松横穴墓(1基)、持田横穴墓(1基)、小畠横穴墓(1基)がある他、市万田川沿いには向瀬口横穴墓(1基)、田村横穴墓群(13基)、田代川沿いには川北横穴墓(2基)、

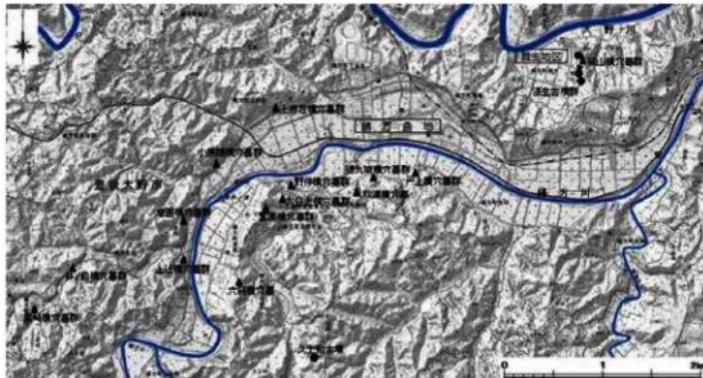


第25図 宮生日平
採集鉄刀 (1/6)

弁天谷横穴墓群(2基)がある。平井川沿いには分布範囲が広く、上流の近地地区には三反田横穴墓群(8基)、中流の板井迫・平井地区には大戸横穴墓(1基)、石田横穴墓(1基)、孤迫横穴墓群(13基)、姉井迫横穴墓群(7基)、平井横穴墓群(2基)、下流の津留地区には折口横穴墓群(2基)、津留横穴墓群(5基)がある(日名子1929)。近年調査が行われた石田横穴墓以外は未調査で、実態は不明である。

3. 緒方地域の古墳

市西部の緒方町域に相当する大野川本流域沿岸と緒方川流域の範囲とし、市内では最も広い沖積平野である緒方盆地が所在するが、その周囲には分布はみられない。緒方盆地の北側、大野川本流沿岸の越生地区丘陵上に前方後円墳を含む漆生古墳群があり、ほかに緒方川上流域や支流の谷間などに小古墳がわずかに点在するのみである。横穴墓は緒方盆地及びその周辺に多数確認されている。



第26図 緒方地域古墳分布図(1/500000)(国土地理院陰影起伏図に加筆)

漆生古墳群(第4章第2節 写真図版41~46)

緒方町越生地区の大野川に面した沖積平野を東側より見下ろす丘陵尾根上に所在する4基の古墳群で、前方後円墳の大久保1号墳を含む、円墳と推定される大久保2号・3号墳に方形状の墳丘形態の城山古墳から構成されている。石棺の露出する城山古墳と大久保2号墳の2基が古くから存在が知られて(日名子1929)おり、かつては城山古墳・大久保古墳という字眼を由来とする名称で周知されていた。1992(平成4)年に前方後円墳を含む古墳群であることが確認(田中ほか1992)されることにより、字大久保に3基の古墳が存在することが判明し、前方後円墳を大久保1号墳、これまでの大久保古墳を大久保2号墳、1号墳の南側の高まりを大久保3号墳との名称とし、城山古墳も一連の古墳群として含めて地域名である漆生古墳群として周知されることとなった。2012(平成24)年より6次の調査が行われ、地山の岩盤を削り出して築成された墳丘であることなどが判明した。出土遺物は乏しく、大久保1号墳以外は葺石もなく墳形の手掛けよりも少ないが、主体部の特徴などから前期後半から中期にかけての古墳群と思われる。

城山古墳 古墳群中最も標高の高い位置にあり、一辺20m程の方形状を呈する墳丘である。壙された箱式石棺とみられる棺材が墳頂にあり、大正年間の盗掘と伝えられているが(緒方村役場1934)、墳頂部の調査で主体部は大きく削平を受けている状況であった。周囲は中世に山城が構築されているため、その頃改変を受けた可能性が高く、墳形も元は円墳であったと推定される。墓坑の輪郭周囲より出土した、高环脚部等の土師器片により、

古墳時代前期後半の古墳群中で最も最初に築造されたと考えられる。

大久保1号墳 全長約36mを測る前方後円墳で、保存も概ね良好であるが築造地形上の制約のためか、後円部は正円ではなく前方部も先がやや窄まる墳形である。確認調査で墳端基底石を含めて葺石を確認し、堀切状の溝や段築らしいテラス面を検出し、二段築成と考えられる。くびれ部から前方部にかけて転落が著しく墳端の根石列及びくびれ部の確認までには至らなかったが、地山の凝灰岩が表土下より現れ、地山を削り出して築造された古墳群である。また後円部墳頂部には砂利状の小礫の広がりがあり、盗掘の痕跡はみられなかった。遺物はわずかな土器片のみで、城山古墳に続く前期末頃の築造時期と思われる。

大久保2号墳 楕円形状の高まった地形上の近世墓地に凝灰岩製舟形石棺の棺蓋が置かれていることから、墓地に改変された古墳と推定されている。元の墳形は不明であるが、周囲の地形が長方形にも見え、あるいは北側に造り出しのような突出した地形も確認できるものの、今のところ墳丘との関連は判断できない。調査では墳形に関する手掛かりは見られなかったが、主体部については赤色顔料を伴う墓坑の輪郭が検出でき、蓋石と形状が合うことから、岩盤を削り抜いた石蓋墓坑の可能性が高く、大久保3号墳と同じ形式と推定される。

大久保3号墳 大久保1号墳の南側にわずかに地形的な高まりがあり、ほぼ自然地形を利用した墳丘と考えられる。立地地形上の制約のためかやや楕円形状となっているが、径10mほどの円墳と推定されている。墳頂部のトレンチでは凝灰岩製の繩掛け突起のような加工されている2石継足しの石棺蓋が検出されている。棺身は石棺材でなく地山岩盤を長方形に削り抜いたもので、石蓋土坑墓のような形式である。主体部内面は赤色顔料に覆われ、人骨片がわずかに残っていたが、副葬品はみられなかった。

くどき 久土知古墳（写真図版47）

立地環境は緒方町久土知区の緒方川支流清田川沿いの、緒方盆地へ続く谷間を見下ろす丘陵上に所在する。「大野郡古墳横穴調査書」に記述（日名子1929）された以外文献に登場することがなかったが、現在も丘陵頂部の壅みに箱式石棺の棺身が開けられたままそのまま露出した状態である。古くから開口しているせいか、植物の根や堆積土砂などで覆われ、棺材表面も苔の付着などで観察しづらいが、内部の埋葬主体は長軸170cm、短軸50cmを測り、長軸の方位は東西に近い。石材は凝灰岩で側石は北側は2石、南側は3石の継足しで構成され、小口石は1石づつの計7石で構成されている。棺材の上側辺は平坦面が一部確認でき、内面は剥離もあってやや粗いが、一部調整加工された痕跡がある。底石や棺蓋は確認できない。ほぼ自然地形の丘陵上にあるため、墳丘規模は不明である。

緒方川上流部の支流の小園川流域の大石地区において、大石古墳と天神古墳という古墳2基の周知遺跡の記載がある（文化庁1975）。大石古墳は大石遺跡の台地上の西端山林内に所在する塚状地形であるが、径12m高さ2m程の扁平な地形が確認できる（写真図版47）。天神古墳は所在位置が不明確で、大石地区近くの丘陵上に塚状の地形を指すものとも考えられるが、「大字天神」と記載されている所在地名が異なっており、所在は明らかでない。

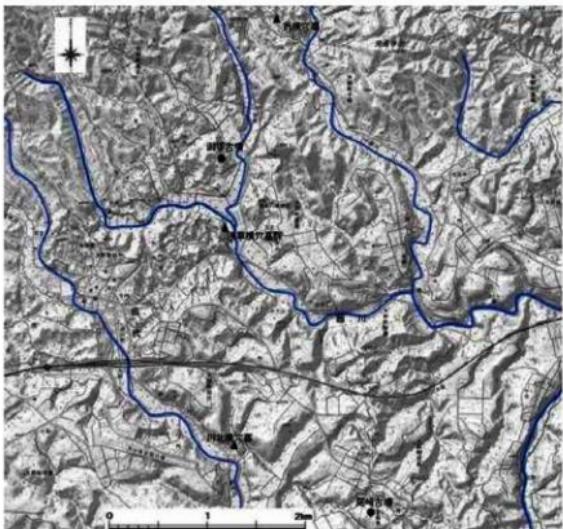
緒方地域の横穴墓

横穴墓は大野川本流の漆生古墳群の丘陵にある城山横穴墓群（5基）以外は緒方川流域の緒方盆地沿いやその支流沿いの谷間に数多く点在し、21箇所74基を数える。平野沿いには小無類横穴墓（1基）、徳丸城横穴墓群（2基）、秋津横穴墓（1基）、戸上横穴墓群（2基）、八坂横穴墓群（6基）、食闌横穴墓群（3基）、上辻横穴墓（1基）などがある。現在は消滅している六箱横穴墓は江戸時代に発見され、鉄刀や鉄族のほか轡が現在も伝えられている（渡部1992）。緒方川の支流沿いの谷間には、野仲や久土知地区的清田川沿いに、野仲横穴墓群（5基）、大日上横穴墓（5基）、宮園横穴墓（15基）がある他、小庵地区的川入川沿いに小庵横穴墓群（6基）、井ノ前

横穴墓(4基)、がある(日名子1929、緒方村役場1934)。文献によって名称や所在地が異なるものもあり、詳細な分布調査が必要である。

4. 茜川流域の古墳

大野町東部より千歳町・犬飼町域を流れる茜川流域には、上流域と中流域の2箇所に分布がある。確認できる古墳は唯一御塚古墳のみである。中流域の千歳町新殿地区付近などの広い沖積平野もあるが、横穴墓が一部地域しか所在せず、限られた範囲のみの分布である。



第27図 茜川流域古墳分布図(1/50000) 国土地理院陰影起伏図に加筆

御塚古墳 (第28図 写真図版47)

大野町藤北の茜川上流域にある唯一の古墳で、見通しは良くないが、周囲の平野を見渡す一際高い丘陵上にある。古くから知られて大正時代には古墳として紹介され(日豊時報社1925)、鬼塚古墳や坪井古墳との名称でも知られている。径33m、高さ5mの大型円墳で、墳裾の一部に掘削が見られるが、概ね墳丘の保存は良好である。墳頂部は10m程の平坦面があり、盜掘跡ではなく、主体部や出土遺物等は何も伝えられていない。墳丘上には大小の礫の露出がみられる。

その他の古墳・横穴墓

茜川下流域の千歳町新殿付近を中心に広がる沖積平野に、野尻古墳の名称で古墳が記載されている。長峰字野尻の茜川沿いの平野に所在し、「千歳村誌」には「亀甲」と称されて古墳と推定され



第28図 御塚古墳測量図(賀川1980)

ていることが記載されている(芦刈1974)。墳丘状の塚が現地で確認でき、頂部は平坦で南北に長く、側面観は前方後円墳のような地形にもみえる。しかし、平面形は全長100mを超える不定形な椭円形状で、表面がほぼ岩盤地形で旧河道の蛇行部分の痕跡ともみられることなどから自然地形の可能性も高く、今後の確認調査が必要と考えられる。

横穴墓について、茜川上流の御塚古墳の南側に浅草横穴墓群が市内最大の31基であることが知られている(賀川1980)以外は折横穴墓(1基)のみである。中流の千歳町付近では工事中に多くの遺物が発見されている岩下横穴墓群の他に西平横穴墓群(3基)、平原横穴墓群(2基)がある。

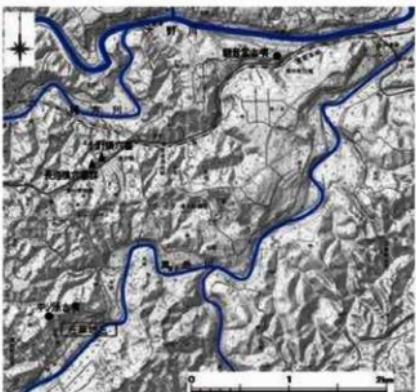
犬飼町には古墳は知られてなく、舞田原東側の大野川沿いの斜面上において舞田横穴墓が1基所在するのみである。なお、犬飼町大寒付近に石棺出土の伝承があり、三重川が大野川に合流する付近の台地上に露出していたが、圃場整備の際に行方不明になったと伝えられている。

5. 奥岳川周辺地域の古墳

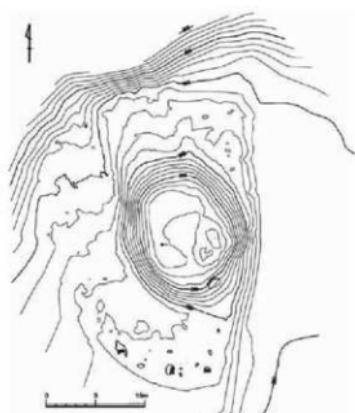
祖母傾山麓を源とし、緒方町南部から清川町を北流して大野川に注いでいる奥岳川には、河川沿いに沖積平野がいくつも存在する。流域内に確認できる古墳は唯一中ノ原古墳のみで、清川町域周辺からみて親音堂古墳や長迫横穴墓群などがあるが、古墳分布図として規模は小さい。

中ノ原古墳 (第30図 写真図版47)

清川町三玉の佐草地域の沖積平野を見下ろす標高約208mの台地上に所在する。現在は中ノ原古墳という名称となっているが、過去



第29図 奥岳川流域古墳分布図 (1/50000)
(国土地理院陰影起伏図に加筆)



第30図 中ノ原古墳測量図 (1/500)

には佐草古墳とも呼ばれている。昭和63年に旧清川村指定史跡となり、町村合併後も市指定史跡として至る。

立地環境は山林内で植林による造成のためか墳丘周囲の地形の変改がみられる。墳丘は楕円気味の形態で、東西径14m、南北径16mで、高さは約2mを測る。墳頂は径7mほどの平坦面があり、中央付近には径4m程の窪みがあることから盃掘跡と思われる。葺石はみられず、段築なども確認できない。北側墳端に前方部状に張り出す地形が確認できるが、現況では改変跡と思われ、墳丘の一部ではないとみられる。出土遺物や主体部などは特に伝えられていない。

その他に、清川町白尾の下辻集落東の大野川に面した丘陵上に観音堂古墳が所在する。隣接して観音堂が建てられており墳丘上周囲に石造物群が安置されて、後世の信仰地となっている。古墳は二段築成のようにも見え、径18m程の円墳と思われるが、観音堂建設などで削平を受けているように見える。高さは約3mを測り、墳頂は径4mほどの平坦面があり、葺石はみられない。出土遺物や主体部などは特に伝えられていない。周知遺跡としては古墳とされているが、特に周囲に平野ではなく、現況から中近世の信仰の塚との可能性もある。

奥岳川沿いには横穴墓は確認されていないが、観音堂古墳南側の谷を遡った位置に長迫横穴墓群(3基)がある(橋本1979)他、小野横穴墓(1基)の所在が伝えられている。
(諸岡)

【註】

- (1)服部正和氏(大分県埋蔵文化財センター)ご教示による
- (2)羽田野靖夫氏ご教示による
- (3)玉永光洋氏ご教示による

【引用・参考文献】

- 朝地町文化財保護委員会 1988『あさじ地名考』
芦刈政治 1974『原始・古代』『千歳村誌』千歳村誌刊行会
井大樹 2016「大分県下の刺抜式石棺」「坊ノ原古墳の石棺材」『豊後大野市内遺跡発掘調査概要報告書』6 豊後大野市教育委員会
井大樹 2018「丸山古墳石棺蓋について」『豊後大野市内遺跡発掘調査概要報告書』8 豊後大野市教育委員会
伊東東 1952「三重町内の古墳」『みえ町報』第15号
大分県大野郡緑方村役場 1934『緑方村誌』
大分県教育委員会 1962『大分県遺跡一覧』昭和36年度調査
大野町文化財委員会『櫛爪文文集 大野町の歴史と文化財』
賀川光夫 1949『豊後国大野郡原箱式石棺に就て』『三重町誌沿革編』1966三重町)
賀川光夫他 1967『原始時代』『朝地町史』朝地町史刊行会
賀川光夫他 1980『古墳時代』『大分県大野町史』大野町史刊行会
柄木田文明 2005「中条唯七郎『九州道中日記』を読む」『市誌研究ながら』第一二号
神田高士 1990「大分の舟形石棺」「おおいた考古」大分県考古学会
九州前方後円墳研究会2000『第3回九州前方後円墳研究会資料集 九州の埴輪 その変遷と地域性』
後藤宗俊 1982『大和国家の成立と二農の在地首長』『大分県史古代編 I』大分県
小林昭彦 1983『尾崎古墳』『大分県内遺跡詳細分布調査概報2』大分県教育委員会
小柳和宏編 2014『加原遺跡』大分県教育厅埋蔵文化財センター
清水宗昭1977『坊ノ原古墳』『大野原台地の遺跡 大分県大野原地区土地改良事業完形遺跡群予備調査概要 II』大野町教育委員会
清水宗昭 1982「大分の石棺」『九州考古学』第56号 九州考古学会
清水宗昭 1998「立野古墳発見の経緯」「大分の前方後円墳 三重・西国東地区編」大分県教育委員会
田中裕介他 1992「緑方町越生にある漆生古墳群の観察—大久保2号石棺の実測と大久保1号墳の測量調査から—」
田中裕介 1995「東九州における古墳時代首長系譜の変遷と画期(上)」「おおいた考古」第7集 大分県考古学会
田中裕介編 1998『大分の前方後円墳 三重・西国東地区編』大分県教育委員会
田中裕介 2009「豊後大野市三重地域の首長墓とその動向」「地域の考古学—佐田茂先生佐賀大学退任記念論文集』
田中裕介編 2014「漆生古墳群第1次発掘調査」「豊後大野市内遺跡発掘調査概要報告書」4 豊後大野市教育委員会
田中裕介他 2015「漆生古墳群第2次調査」「秋葉鬼塚古墳出土遺物」「豊後大野市内遺跡発掘調査概要報告書」5 豊後大野市教育委員会
田中裕介他 2016「漆生古墳群第3次・4次調査」「豊後大野市内遺跡発掘調査概要報告書」6 豊後大野市教育委員会
田中裕介他 2017「漆生古墳群第5次調査」「豊後大野市内遺跡発掘調査概要報告書」7 豊後大野市教育委員会
田中裕介他 2018「漆生古墳群第6次調査」「豊後大野市内遺跡発掘調査概要報告書」8 豊後大野市教育委員会
田中裕介 2019「豊後大野市の古墳群からみた地域社会と首長像」「古墳時代阿蘇ルートの研究—阿蘇地域に築かれた古墳
に注目して—』熊本大学文学部
田中裕介他 2019「重政古墳第2次調査」「豊後大野市内遺跡発掘調査概要報告書」9 豊後大野市教育委員会

- 田中裕介他 2020 「重政古墳3次調査」『豊後大野市内遺跡調査概要報告書』10 豊後大野市教育委員会
- 田中裕介他 2021 「重政古墳4次調査」『豊後大野市内遺跡調査概要報告書』11 豊後大野市教育委員会
- 玉川剛司 2012 「小坂大塚古墳測量調査について」『豊後大野市内遺跡発掘調査概要報告書』3 豊後大野市教育委員会
- 玉川剛司 2014 「生駒古墳測量調査」『豊後大野市内遺跡発掘調査概要報告書』4 豊後大野市教育委員会
- 玉川剛司 2015 「秋葉鬼塚古墳測量調査」『豊後大野市内遺跡発掘調査概要報告書』5 豊後大野市教育委員会
- 玉川剛司 2016 「坊／原古墳」『豊後大野市内遺跡発掘調査概要報告書』6 豊後大野市教育委員会
- 玉川剛司 2019 「賀丘測量調査」『豊後大野市内遺跡発掘調査概要報告書』9 豊後大野市教育委員会
- 玉川剛司 2021 「道／上古墳」『豊後大野市内遺跡発掘調査概要報告書』11 豊後大野市教育委員会
- 玉永光洋 1983 『十六山横穴墓』三重町教育委員会
- 玉永光洋 1987 「古墳時代」『大分県三重町誌総集編』三重町
- 中島宗芳 1966 「古墳時代」『三重町誌沿革編』三重町
- 日豊時報社 1925 『大分県大野郡々史』
- 橋本幸治 1996 「小坂大塚古墳」『大分の前方後円墳 三重・西国東地区編』大分県教育委員会
- 橋本典忠 1979 「原始・古代」『清川村誌』清川村誌刊行会
- 服部真和 2021 「新聞から読む大分の考古学-昭和7年の「石棺ブーム」-」『大分県立埋蔵文化財センター研究紀要』4
- 土生米作 1968 「鬼塚ばなし」『大野旬報』(昭和43年10月18日)
- 日名子太郎 1926 「大野郡古墳横穴調査書」『史蹟名勝天然紀念物調査報告 第七輯』大分県史蹟名勝天然紀念物調査会
- 文化庁文化財保護部 1975 『全国遺跡地図 大分県』
- 豊後大野市歴史民俗資料館 2014 「朝地町宮生発見の鉄刀について」『豊後大野市歴史民俗資料館年報』6
- 本荘昇・前田多三郎 1923 「緒方郷・横穴古墳」『史蹟名勝天然紀念物調査報告 第二輯』大分県史蹟名勝天然紀念物調査会
- 本荘昇・前田多三郎 1924 「三重郷・史蹟」『史蹟名勝天然紀念物調査報告 第三輯』大分県史蹟名勝天然紀念物調査会
- 真野和夫 1989 「古墳文化の浸透」『大分県史先史編II』大分県
- 九小野克美 1987 「上田原石棺群の存在価値」『古代朝鮮文化を考える』第二号 古代朝鮮文化を考える会
- 村上久和編 1999 『町墳墓群』朝地町教育委員会
- 本村豪章 1981 「古墳時代の基礎研究稿 資料編(I)」『東京国立博物館紀要』第16号
- 諸岡郁 1997 「鉢ノ座石棺群」「重政遺跡」『三重地区遺跡群発掘調査概報』II 三重町教育委員会
- 諸岡郁 2000 「童ヶ鼻古墳」『三重地区遺跡群発掘調査概報』IV 三重町教育委員会
- 諸岡郁 2002 「道／上古墳」『三重地区遺跡群発掘調査概報』VI 三重町教育委員会
- 諸岡郁 2003 「内田古墳群」『三重地区遺跡群発掘調査概報』VII 三重町教育委員会
- 諸岡郁 2012 「小坂大塚古墳」『豊後大野市内遺跡発掘調査概要報告書』3 豊後大野市教育委員会
- 諸岡郁 2015 「秋葉鬼塚古墳」『豊後大野市内遺跡発掘調査概要報告書』5 豊後大野市教育委員会
- 諸岡郁 2016 「秋葉鬼塚古墳(2次調査)」「中／原古墳・向原古墳」『豊後大野市内遺跡発掘調査概要報告書』6 豊後大野市教育委員会
- 諸岡郁 2017 「坊／原古墳」「若宮古墳」『豊後大野市内遺跡発掘調査概要報告書』7 豊後大野市教育委員会
- 諸岡郁 2018 「陣箱遺跡(第3次調査区)」『豊後大野市教育委員会
- 諸岡郁 2018 「坊／原古墳」「丸山古墳」『豊後大野市内遺跡発掘調査概要報告書』8 豊後大野市教育委員会
- 諸岡郁 2020 「早尾原古墳」「鉢／座・下津留古墳群」『豊後大野市内遺跡発掘調査概要報告書』10 豊後大野市教育委員会
- 諸岡郁 2021 「小坂大塚古墳(2次調査)」『豊後大野市内遺跡発掘調査概要報告書』11 豊後大野市教育委員会
- 若杉竜太 1997 「九州石棺考」『先史学・考古学研究』II 龍田考古会
- 渡部幹雄 1992 「六箱横穴墓の遺物と出土記録」『おおいた考古』第5集 大分県考古学会

第3章 三重古墳群の調査の成果

第1節 小坂大塚古墳

1. 調査の経過

小坂大塚古墳は三重川流域の狭い谷に囲まれた独立状の台地上に所在し、標高約160mの一際高い場所に立地している。周囲の台地を見渡せる立地環境で、谷を挟んで東方に道ノ上古墳を視認できる位置であるが、三重盆地から離れた位置で、他の前方後円墳群と異なる環境である。

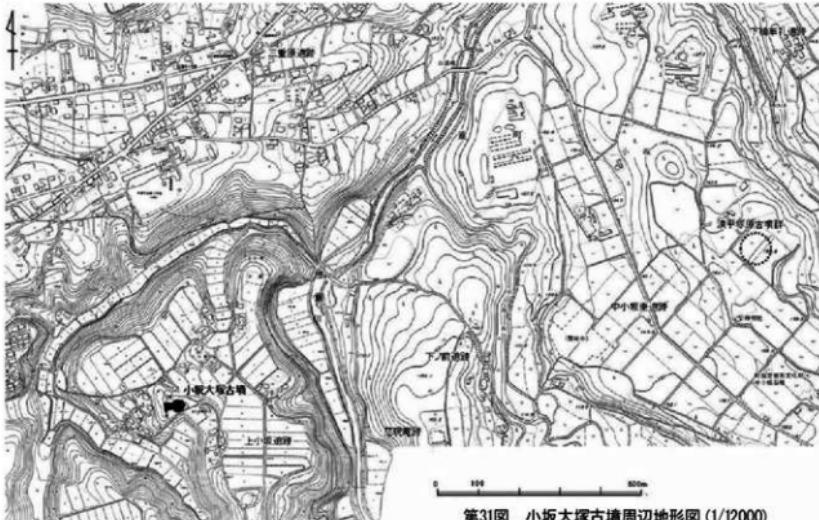
全体的に保存は良好であるが、前方部北西端が崖面に接して失われ、後円部東や前方部南側の墳端付近は造成による削平を受けているものとみられる。後円部墳頂に庚申塔などの近世石造物群が造立され、一部盗掘坑らしき窪みがあるが、主体部や出土遺物については何も伝えられてはいない。墳丘表面に葺石とみられる川原石が観察されているものの、段築等の施設は確認されていない⁽¹⁾。

1997(平成9)年度に大分県教育委員会による墳丘測量が行われ、全長は約43m、後円部に比べ前方部が小さく柄鏡形の前方後円墳である墳形の特徴であることから、古墳時代前期後半頃の築造と推定されている⁽²⁾。

その後、豊後大野市教育委員会は将来の保護のための基礎資料作成を目的として、市内主要古墳の調査を開始するにあたり、隣接する公民館改築に伴う土砂の掘削が行われるなど、今後も開発に対する保存が懸念された小坂大塚古墳より着手することになった。2010(平成22)年度に第1次調査として測量調査及び範囲確認調査が行われ、墳丘規模形態や築造時期の把握を目指した調査トレーニングを合計5箇所設定している⁽³⁾。墳丘測量は周囲の伐採作業と併せ、世界測地系による座標管理のもと再測量を行った⁽⁴⁾。2019(令和元年)に1次調査で不充分であった箇所の確認として、トレーニング3箇所による第2次調査を実施した⁽⁵⁾。
(諸岡)

【注】

- (1)玉永光洋 1987「古墳時代」『三重町誌総集編』三重町
- (2)田中裕介 橋本幸治 1998「小坂大塚古墳」『大分の前方後円墳』大分県教育委員会
- (3)諸岡郁 2012「小坂大塚古墳」『豊後大野市内遺跡発掘調査概要報告書』3 豊後大野市教育委員会
- (4)玉川剛司 2012「小坂大塚古墳測量調査について」『豊後大野市内遺跡発掘調査概要報告書』3 豊後大野市教育委員会
- (5)諸岡郁 2021「小坂大塚古墳2次調査」『豊後大野市内遺跡発掘調査概要報告書』11 豊後大野市教育委員会



第31図 小坂大塚古墳周辺地形図 (1/12000)

2. 墳丘測量調査

(1) 調査に至るまでの経過

小坂大塚古墳の測量図については、1997(平成9年)に大分県教育委員会が中心となり測量調査が行われ、25cm間隔の等高線で精緻な測量図が作製されている(田中1998)。しかし今回、世界測地系による座標を用いた墳丘規模確認の発掘調査を実施する必要性がでてきため、あらためて座標管理のもと測量調査を実施することとなった。

そこで、デジタル機器を用いた変化点測量法により、小熊山古墳など県内多数の前方後円墳の測量調査を実施している別府大学文化財研究所(玉川2003、2004)に、測量調査が依頼されるという経緯となった。

墳丘測量調査は、別府大学の玉川剛司の指導のもと、田中 眞、馬場晶平(文学部文化財学科4年)、権丈和徳、崎谷雄紀(同学科3年)が中心となり、2010(平成22)年11月28日から2011年2月27日の計11日間で行った。測量範囲は、墳丘部を中心に4843m²で、計測点は墳丘部で約3,600点、周辺地形を合わせると計5,702点であった。測量調査にあたっては、あらかじめ市教委が準備した計3本の基準点⁽¹⁾をもとに、必要に応じて補助杭を設定し測量を行った。

以下、調査の成果について述べていきたい。

(2) 墳丘測量の内容と成果(第32図)

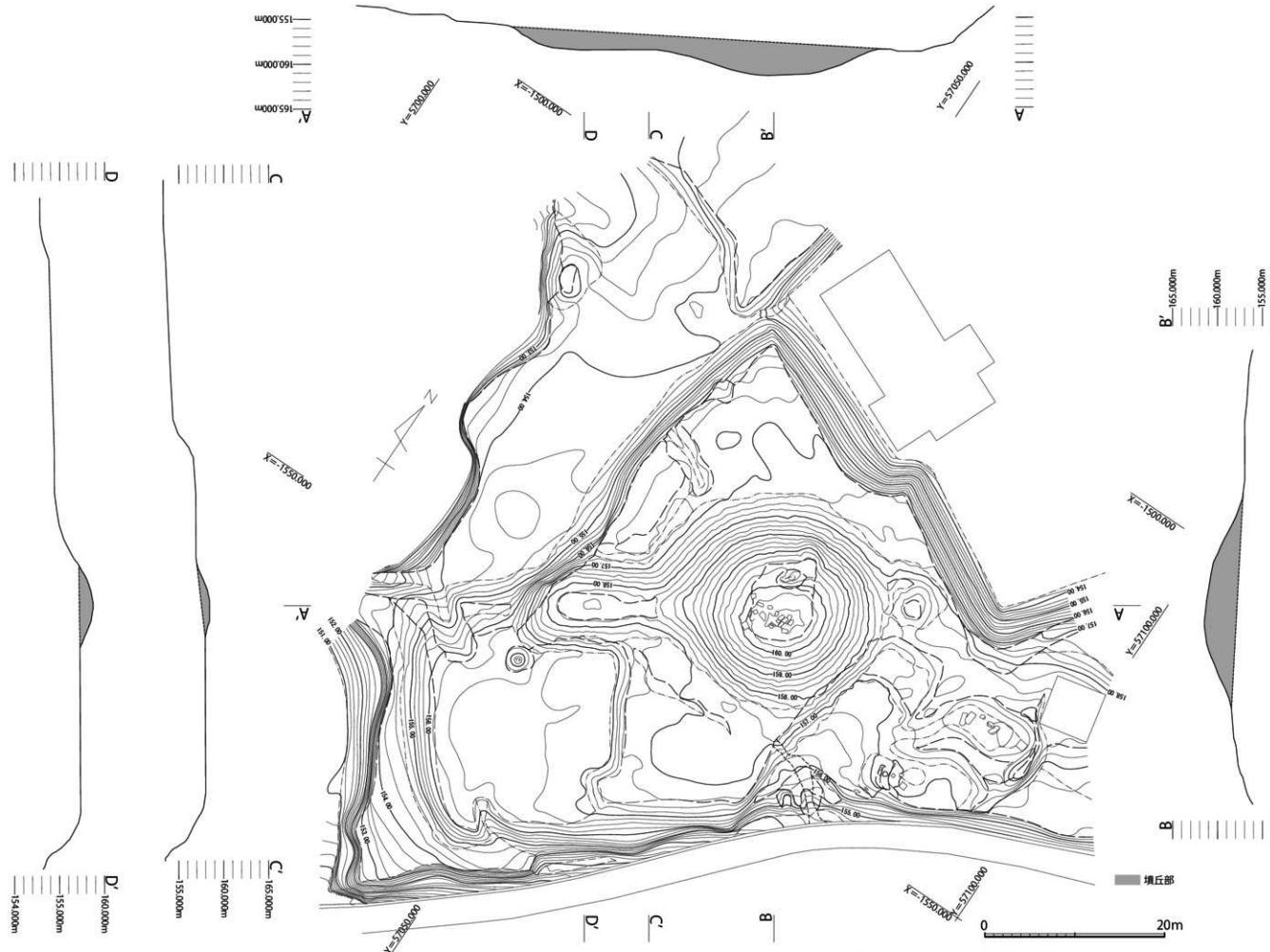
後円部 後円部における墳端ラインについてみると、墳丘北側のくびれ部から後円部が最大幅になる個所までの範囲における、標高157.000～157.250mの等高線と現状の墳端ラインが並行にめぐっている。また、同範囲における墳端ラインから墳頂部にかけての等高線が乱れていないことから、比較的良好に墳端と墳丘斜面が遺存していると考えられる。次に、後円部の東側では墳丘主軸に沿って、高さ約1mのほぼ円形の高まりがあり、墳端ラインとほぼ接している。この地点から墳丘南側の墳端については、宅地による削平を受けしており、墳丘本来の墳端ラインは確認できない。この削平ラインの西端で標高157.750mの等高線と墳端ラインが接する地点から墳丘南側のくびれ部にかけては、墳端ラインが正円形に広がらず3.6mほど墳丘側に入り込み、くびれ部ラインに接合している。この平面形態は、墳丘当初からのものか、削平によるものかは不明である。しかし、等高線159.00m付近から墳端ラインまでの等高線間隔が、北側に比べ狭いことから、削平受けた痕跡である可能性がある。また、現状での墳端と考えられる傾斜変換線の標高を比較すると、南側の方が全体的に1.0m程高いことが確認できるため、築造当初から標高差があったものと考えられる。以上のことから、墳丘北側の比較的良好に遺存している墳端ラインを通る、径27.4mのラインが後円部径であると考えられる。

段築については、現状で明確なテラスは確認できなかつたが、標高159.000mの等高線から上位と下位で間隔が違うため、この付近に段築のテラスがある可能性が高い。葺石については、墳丘斜面の東側から南側にかけて良好な状態で残っているのが確認できた。

墳頂部については、墳頂部南側の近世の庚申塔などが造立されている地点の標高が最も高く161.500mであった。また、墳頂部北側に向けて傾斜し、墳頂部北側の標高は159.750mであることから、高低差0.75mもある。この低くなっている墳頂部北側には、幅2.1m、長さ3.1mの溝みが墳丘主軸と並行するように確認でき、盗掘孔であると考えられる。

くびれ部 くびれ部の墳丘北側と南側は、墳端ラインと等高線が大きく乱れず、並行にめぐっていることから、良好に遺存しているものと考えられる。これら両側の墳端ラインを結ぶ8.7mがくびれ幅であると想定できる。

しかし、くびれ部の墳端の標高をみると、北側は156.800m、南側では157.800mで、後円部と同様に1mの高低差がある。また現状では、墳丘北側のくびれ部の位置に対し、墳丘主軸からみた南側のくびれ部の位置は、北側よりも2mほど主軸側に位置し、さらに2mほど後円部側に寄っている。この墳丘主軸対し北側と南側のくび



第32図 小坂大塚古墳 墓丘測量図 (1/400)

れ部の位置にズレが生じている現象は、墳丘北側が後世の削平を受けて生じたものか、築造段階で墳丘主軸の北側と南側で高低差生じさせて築造されたことに起因するものなのか、今後発掘調査による確認が必要であろう。くびれ部の墳頂標高は158.400mで、後円部墳頂から3.1m低い位置で前方部と接している。

前方部 前方部の墳端ラインの現状は、前方部の墳丘主軸から北側と南側で、後世の畠地や宅地造成により墳丘斜面が大きく掘削を受けている。また、特に前方部の墳丘主軸の北側の前方部隅角と前方部端について、これらの削平のため消失している。前方部墳端ラインについて詳しくみていくと、前方部北側では、くびれ部から5.8m先の前方端隅角側で南北方向に前方部端の墳丘斜面が大きく掘削を受けている。しかし、くびれ部から削平面の上端ラインが接する地点までの墳端ラインは等高線とも並行してめぐり、墳端ラインから前方部の墳頂部にかけての等高線も乱れていないことから良好に遺存していると考えられる。また、この範囲の墳端ラインは、くびれ部から隅角に向けて若干外側に広がっている。

前方部南側では、くびれ部から6.3m先で、宅地による削平を受けているため、この地点から前方部隅角側の墳端は本来の形状保っていない。しかし、くびれ部から削平上端ラインと接する範囲までについては、墳端から前方部の墳頂部にかけての等高線が若干乱れているものの、墳端ラインが良好に遺存しているものと思われる。また、この宅地造成により削平された範囲をみると、墳端ラインと削平ラインが接する地点から9.3m先で、削平の上端と下端ラインが合流する。この合流地点の墳端付近では、円形のくぼ地が見られるものの、幅2.6mほどの平坦面が確認でき、さらにその先は前述したように墳丘北側から延びる掘削面の上端が接する。この平坦面の墳端ラインは、緩やかにコーナーを描きながら墳丘主軸側にめぐっており、その上部等高線とも並行していることから、前方部隅角から前方部端の痕跡である可能性が高い。

以上の状況から、くびれ部から前方部の墳端ラインが遺存している地点と、前方部北側で見られる墳端が外側に開く状況や、前方部南側の隅角から主軸側にめぐる墳端ラインを考慮すると、前方部長15.5m、前方部幅は9.5mであると推測できる。段築については確認できなかった。

前方部高については、1.8mである。前方部墳頂部は、くびれ側で158.300m、前端側では158.500mであり、両地点の高低差が0.2mであることから、ほぼ平坦であると言えよう。また、段築については、墳頂部と墳端ラインの間の等高線がほぼ同間隔であることからもわかるように、その痕跡は確認できなかった。

周辺部 墳丘北側の平坦面には、前方部から後円部北西側の墳端ラインが良好に遺存している範囲にかけて、幅2.6m、深さ16cmの窪みがある。この窪みは、墳端ラインに沿って並行してみられるため、周溝の痕跡である可能性が高い。

また、後円部東側には、墳端に接するように、径約6.0m、高さ約1.0mの小円丘がみられる。この小円丘は、田中氏が指摘するように、古墳に付随するも施設ではなく、後世に造られた塚のようなものであると考えられる(田中1998)。

(3) 測量調査のまとめ

墳丘測量調査の成果から、前方部端部と考えられる墳端ラインと後円部の墳丘主軸側と接する墳端から、墳長42.5mであると想定できる。つまり、小坂大塚古墳の規模については、墳長42.5m、後円部径27.4m、くびれ幅8.7m、前方部長15.5m、前端幅9.5m、後円部高4.35m、前方部高1.8mを測り、後円部二段、前方部一段築成の前方後円墳であると考えられる。しかし、墳長及び前方部長については、今後の発掘調査により多少前後する可能性がある。墳丘の形状については、墳丘北西側でくびれ部から前方部の削平ラインにかけて、前方部があまり広がらないことや、くびれ部の高さと前方部削平ラインまでの高さがほぼ同じである。

また、墳丘主軸に対し北側と南側における墳端に標高差がみられる。これらの標高差の要因について考察したい。高低差の要因としては、①自然地形に起因するものと、②古墳築造における視覚効果を考慮したもの²²⁾と

の両側面があると考えられる。前方後円墳という形を視認させるためには、前方後円墳という墳形であると認識が可能である一定方向よりみせる必要がある。また、見せる側の平坦面が低ければ低いほど、視覚効果により、墳形そのものを実際より大きく見せることができる。②を確認するため、墳丘の3D図⁽³⁾を作製したのが第33図である。この3D図の作製については、冒頭でも述べたように今回実施した墳丘測量調査は、墳丘斜面の変化点の座標を計測し、その座標データから測量図を作製したものである。つまり測量成果の一次データとしては、X、Y、Zの座標値がこれにあたる。この座標値のデジタルデータから3D図を作製した。

第33図の1は、墳丘主軸沿って真上から観た3D図で、2は前方部側からの斜め上からの鳥瞰3D図である。3～6は墳丘北側から、7～10は墳丘南側からの3D図である。なお、1～4・7・8は平行投影で、5・6・9・10は透視投影で作製した。真上からの1を見ると墳丘主軸に沿って若干楕円形となっているが、削平による大きな乱れは確認できない。また、後円部西側から墳端が前端の削平ラインに接する範囲までの墳端ラインに沿って、浅い窪みが墳端ラインの外側に確認できる。これが、先に指摘した周溝の痕跡である。4・5は、墳丘北側のくびれ部を中心にして横から見た3D図である。4は横から見た平行投影図で、5は横から見た透視投影図である。6は古墳が立地する台地の北側から見上げた透視投影図で、5・6の3D図をみると、前方後円墳であることが視認できることがわかる。一方、8～10は墳丘南側からの視点で4～7と同様の位置からの3D図である。墳丘南側では、8・9の横から見た視点では、前方後円墳であることが視認できるが、10の谷側からの仰角視点では後円部しか視認できないことが確認できた。この古墳の南側の谷部は、古墳から22mも低い。

以上のことから、小坂大塚古墳を前方後円墳であると視認させるためには、古墳が立地する台地北側の緩やかな谷地形から、もしくは古墳南側の谷を挟んだ南側の台地からであれば視認しすることが可能である。つまり、これらの方向に古墳を認識させたい対象となるモノ(集落、道など)が存在し、その対象を意識して築造された可能性が推察される。

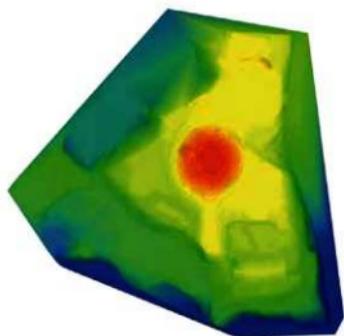
(玉川)

【註】

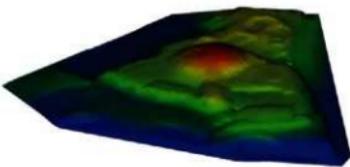
- (1)T01は後円部墳頂部東側、T02はくびれ部墳頂部、T03は前方部墳頂部にそれぞれ設置されたものを使用した。
T01:X=-1530.962, Y=57064.460, Z=161.343, T02:X=-1545.553, Y=57046.304, Z=158.397, T03:X=-1512.912, Y=57048.909, Z=156.653,
- (2)古墳築造における立地状況を決定する概念が存在すると考えられる。この概念は、古墳築造に当たり立地条件を決定する概念で、良好な自然地形を選定する側面のみならず、当時の政治的な情勢をも包有する地域のランドマーク的な性格をもつものと考えられる。
- (3)座標値のデジタルデータから、TINデータ(近接する座標値から不整三角網生成し、地表面を三角形の集合で表現するデジタルデータ構造。)を作製し、標高値を段階的に色分けした3D図。

【参考文献】

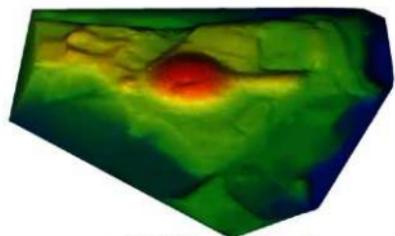
- 諸岡 郁 1990 「三重町の前方後円墳」『おおいた考古』第3集 大分県考古学会
田中裕介 1998 「大分県の大型古墳」『大分の前方後円墳』大分県文化財報告書 第100輯 大分県教育委員会
橋本幸治 1998 「小坂大塚古墳」『大分の前方後円墳』大分県文化財報告書 第100輯 大分県教育委員会
下村智・吉田和彦・玉川剛司 2003 「古墳におけるデジタル測量の研究-大分県下の古墳を事例として-デジタル測量」
『九州考古学第78号』九州考古学会
玉川剛司 2004 「小熊山古墳測量調査」『文化財研究所年報』2 別府大学文化財研究所



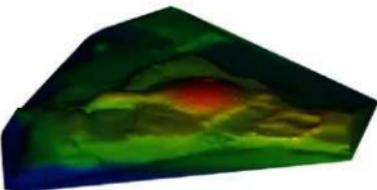
1. 塗丘真上からの3D図
(平行投影図)



2. 塗丘西側からの鳥瞰3D図
(平行投影図)



3. 塗丘北側からの鳥瞰3D図
(平行投影図)



7. 塗丘南側からの鳥瞰3D図
(平行投影図)



4. 塗丘北側真横からの3D図
(平行投影図)



8. 塗丘南側真横からの3D図
(平行投影図)



5. 塗丘北側真横からの見透し3D図
(透視投影図)



9. 塗丘南側真横からの見透し3D図
(透視投影図)



6. 塗丘北斜面下からの見透し3D図
(透視投影図)



10. 塗丘南斜面下からの見透し3D図
(透視投影図)

第33図 小坂大塚古墳3D図



第34図 小坂大塚古墳調査トレンチ配置図(1/400 玉川作図)

3. 確認調査

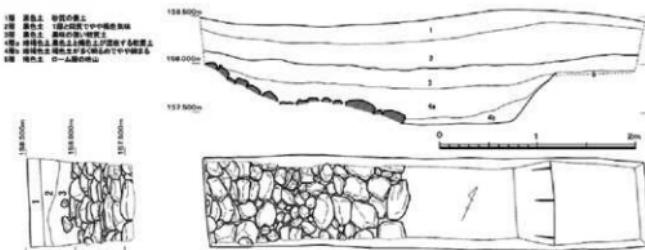
(1) 第1トレンチ (第35図 写真図版1)

後円部東側の墳端および後円部東側に接する塚の確認を目的として、幅1m長さ4.5mの範囲を掘下げたところ

る、葺石や墳端根石及び周溝を検出した。葺石は河原石とみられる礫が使用され、ほぼ隙間なく敷詰められた状態で検出している。傾斜面より1m程外側にテラス状に平坦面が設けられ、標高157.6m付近で傾斜面が大きく変化することから墳端とみられる。墳丘側は大型礫を傾斜して葺かれており、根石も同じような礫が置かれている。テラスは幅0.6mの小型礫による平坦面があり、統いて幅0.7mの大型礫による緩やかな傾斜面があるが、墳端部にテラスが設けられていることは他のトレンチでも観察できる。石材はやや角のある河原石で、拳大程度から人頭大以上の礫が使用されているが、特に大型のものは斜面に、小型は平坦面という傾向が観察できる。特にテラス端の根石は最大長40cmを超える大型礫で、全体的に大きめの規模の石材である。

葺石より外側には周溝の掘り込みを検出し、外側斜面は高さ0.5mの急傾斜で地山のローム層を掘り込まれている。周溝底面の標高は約157.4mで、根石より幅1.5mのほぼ平坦であるが、底面は地山ローム層ではなく黒色土と褐色土の混合して押し固めたような土層となっており、深さは確認していないが、溝底を整形した整地層と思われる。出土遺物は見られない。

なお、後円部東側に接する塚について、トレンチに塚の南端が含まれているが、塚に関する遺構は確認できなかった。トレンチ北壁の土層でも周溝に土砂が堆積した後に上層の黒色土による盛土の状況を示していることから、後世の築造と判断される。



第35図 小坂大塚古墳第1トレンチ (1/50)

(2) 第2トレンチ (第36図 写真図版2)

後円部北側の墳端及び周溝の確認のため、幅1m長さ9.8mの範囲で掘下げ、葺石及び周溝を検出した。

葺石は墳端より1.5m程外側に広がる墳端テラス面と思われる状態が確認できるが、第1トレンチと比べて残りも良くないため隙間が多く、一部は位置が動いているとみられる。石材も河原石が多く使われているが、斜面と平坦面の石材の大きさに第1トレンチのような違いは観察できない。根石も明確ではないが、標高約156.4m付近で傾斜面の変化が観察でき、墳端と考えられる。墳丘側には傾斜面が続き、外側は幅0.6mのテラス状平坦面と、幅0.8mの緩斜面へと続き、第1トレンチと同様の形態の墳端であると考えられる。

周溝について、葺石より底面の幅は2.1m、標高約156mのほぼ平坦で、1トレンチより幅は広く、標高はやや下がる。高さ0.5m、地山を掘り込まれているが、1トレンチと同じく底部に整地層が見られる。その外側は特に遺構はみられず、周堤などの痕跡はみられない。遺物は時期不明の土器片が出土した。

(3) 第3・5トレンチ (第37図 写真図版2)

第3トレンチはくびれ部墳端の確認のため拡張部も含めて2m×2.3mで掘り下げ、後円部から前方部にかけて配置されたとみられる葺石を検出した。

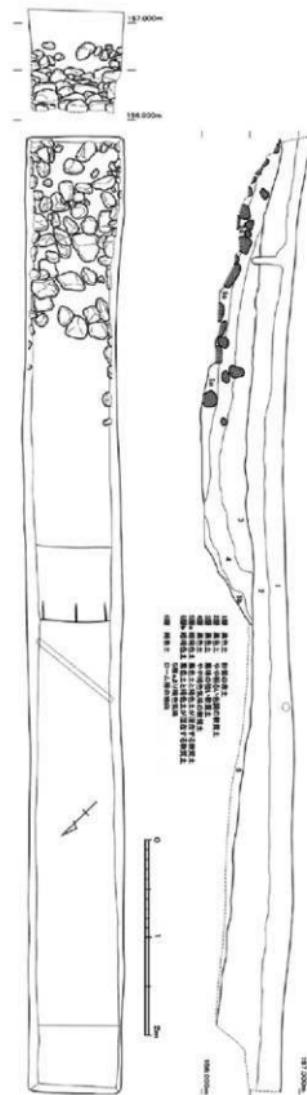
葺石は前方部から後円部へと続くくびれ部と思われる配置状況であるものの不明瞭で、テラス状平坦面と区別できない。後円部側は人頭大ほどの河原石が見られるものの、多くは元位置を動いているとみられる。前方部側は特に改変を受けているためか、根石をはじめとして多くが失われていると思われる。前方部側で径5cm程の玉砂利状の円礫が標高156.5m程で検出している。この礫については後円部側の葺石にも一部混在していることから、墳頂部等からの転落石の可能性もあり、詳細な配置状況については明確ではない。出土遺物は時期不明の土器片のみである。

第5トレチは第1・2トレチで確認できた周溝の外縁部を把握するため、3トレチの北側に幅1m長さ2.5mを追加して5トレチとして掘下げた。周溝の底面は標高156m程で外側に向って若干下降気味に傾斜し、礫検出位置より4m程の幅で周溝外縁斜面を検出した。

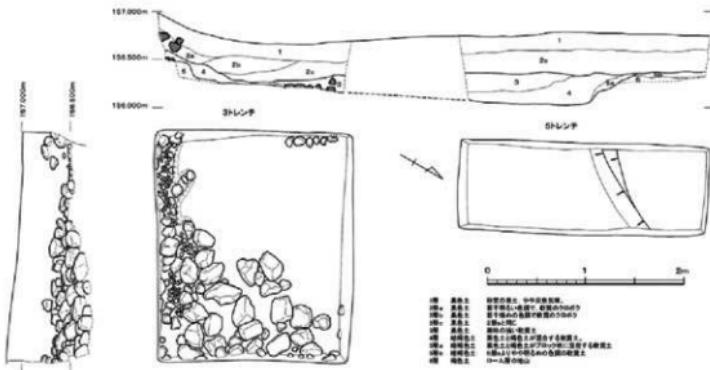
深さは0.3mで、地山を掘り込まれている。緩やかにカーブを描いている平面観であったため、周溝の平面形態は墳形に沿う形状で廻らせているものと考えられる。出土遺物は見られなかつた。

(4) 第4トレチ（第38図 写真図版3）

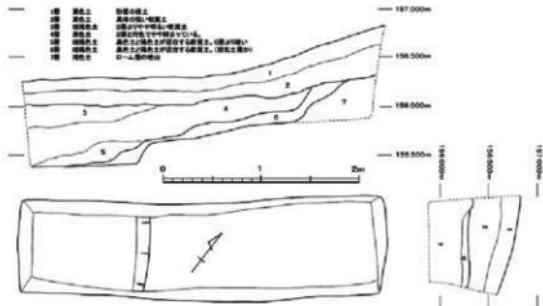
前方部西側に墳端の確認のため、1m×3.8mで設定した。葺石を検出することができず、堆積土に混入する礫はあるが、転落石としての出土量ではなかった。葺石は本来配置していないのか、あるいは搅乱等により持ち出されたのか判断はできない。トレチ東側で検出された7層は地山のローム層で、その上層の6層が墳丘盛土か、その流出土と思われる。西側で検出した5層は整地層とよく似ており、落込みのような傾斜面も検出し、底部の標高は約155.4mである。しかしその上層の4層が搅乱層と考えられ、特にトレチ西側に向かって厚く堆積しているため、前方部墳端を示す位置は7層の途切れる位置から6層の落込む1.5m間と考えられるが明確ではない。出土遺物は近代の陶磁器や瓦片などで古墳に伴う遺物は見られず、近年の搅乱を示している。



第36図 小坂大塚古墳第2トレチ (1/50)



第37図 小坂大塚古墳第3・5トレンチ (1/50)



第38図 小坂大塚古墳第4トレンチ (1/50)

(5) 第6トレンチ (第39図 写真図版3)

後円部南側の墳端位置および周溝の確認を目指して、長さ4m幅1mで設定し、墳端葺石および周溝を検出している。標高157.6m付近で傾斜が変化することから墳端とみられ、墳丘側斜面にはやや小ぶりの礫が葺かれているが、墳端の根石は明確ではない。その外周には人頭大ほどの大振りの礫が約1m幅でほぼ平坦状に敷かれたテラス面があり、端には根石として大型の礫が置かれている。

周溝は、墳端テラスの根石付近が底部で最も低く、標高は157.4m程度で、断面は逆台形状である。溝幅は墳端から外側から立ち上がり検出面までの間が約2mで、他のトレンチで検出した中では最も幅は狭い。周溝は地山ローム層土と黒色土の混合された整地層(5層)があり、地山を掘り込んだ後に溝底から外側斜面上に盛土されて、溝幅を狭まるような整地が行われたことが推定される。

出土遺物は表土層及び周溝堆積土層より土師器片(第42図1~3)が出土している。

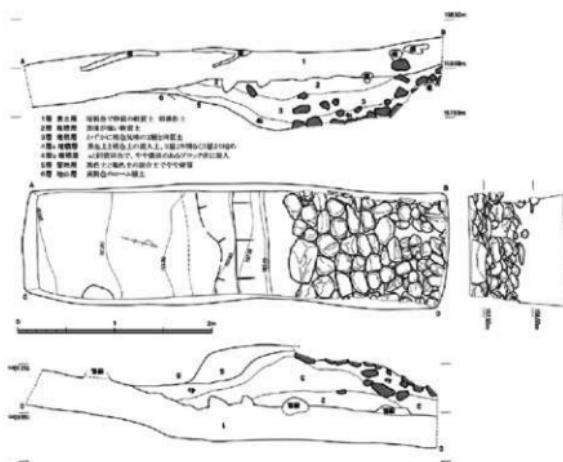
(6) 第7トレンチ (第40図 写真図版3・4)

南側くびれ部の墳端検出を目的に7m²の範囲に、周溝の範囲確認で幅1m長さ4m拡張して設定した。くびれ部の葺石と周溝の範囲を検出した。

葺石は保存は良くなく失われている種も多いが、墳丘斜面から墳丘の外周にかけてテラス状に敷かれている。トレンチ北端でやや大振りの礫が並び、調査区内の北隅付近でやや屈曲していることからもくびれ部の墳端根石と思われる。テラス状疊敷は、墳形に沿って幅80cmに置かれてあり、端には大型礫の根石が列を成して並んでいる。墳端の根石列とテラス端の根石列は、共に前方部側西側の端部に向かって直線状に

続き、わずかに広がるような前方部形態と思われる。

墳端テラスより外側は周溝底に向かって緩やかに下降し、転落した礫が多量にあるが、特に周溝底部は礫が集中し、転落石が溜まっているものとみられる。この礫の周囲に焼土層が確認でき、溝底より20cm程上層で礫自



第39図 小坂大塚古墳第6トレンチ (1/50)



第40図 小坂大塚古墳第7トレンチ (1/50)

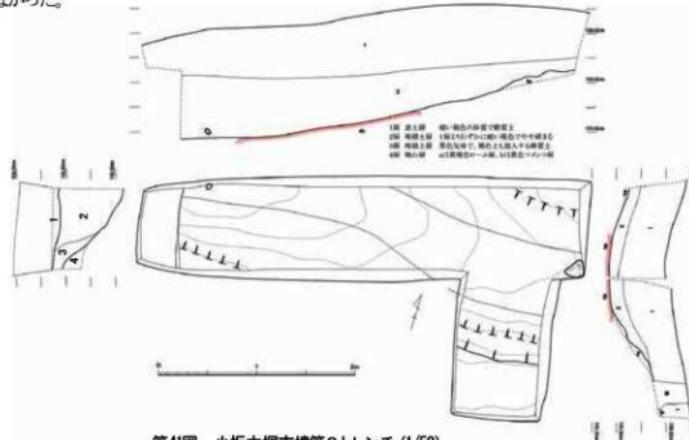
体にも被熱痕があることから、周溝内に転落石などの堆積が進んだ時期に火を焚いた痕跡と考えられる。この焼土層より下層で弥生時代の土器(第42図4)を検出しており、流れ込みで混入したものと思われる。

周溝の断面はゆるやかなV字状で、外側に向かって上昇面が続き、溝幅は4mを測る。底部の標高は156.3m、検出面からの深さは1.1mで、盛土による整地層があるが、地山層までは確認していない。

(7) 第8トレンチ(第41図 写真図版4)

前方部前端部分の検出を目的として、幅1m長さ4mに、南側に張出すように長さ1m程拡張してL字状に設定した。表土から地山層に到達するまで深さ60~100cm程度で、一部マメンコ層が露出している。トレンチとほぼ同じ方向の溝状に掘り込まれているのを検出した。内部の土層は第6・7トレンチの周溝とは異なり、搅乱土層に近い褐色土が続くもので、後世の堆積土とみられる。遺物は何も出土していない。

調査区西側の地表面に道跡の産みが続いており、方向もほぼ一致することから、掘割りの道跡と考えられる。古墳に関する遺構や遺物は確認できないが、道跡で掘削された可能性もあり、前方部についての手掛けりは何も検出できなかった。

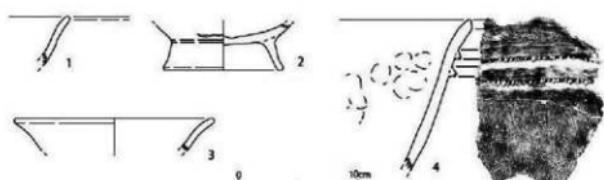


第41図 小坂大塚古墳第8トレンチ(1/50)

4. 出土遺物

調査トレンチより流れ込みと思われる出土遺物があったが、第42図に図示したもの以外は小破片のみで、築造年代を推定できるものは出土していない。1・2は第6トレンチの表土層より出土したもので、同一個体と思われる平安時代頃と考えられる土師器碗である。3は同じく6トレンチより出土した甕または壺と思われる土師器口縁部である。4は第7トレンチ周溝底の転疊内(6層)より出土したもので、弥生時代中期の下城式斐形土器の口縁部である。

(諸岡)



第42図 小坂大塚古墳出土遺物(1/4)

5.まとめ

(1) 復元案について

発掘調査における成果(第34図)として、墳端と墳端外側に広がるテラス及び周溝を確認したのが、第1・2・6・7トレーニングで、墳端のみが確認できたのが第3トレーニング、周溝の外側のみを確認したのが第5トレーニング、墳端の痕跡を確認したのが第4トレーニングであった。これらの成果を基に、墳丘測量調査の成果を合わせ、墳丘を復元すると、墳長42.3m、後円部径25.7m、くびれ幅8.8m、前方部長16.5m、前方端幅13m、後円部高4.35m、前方部高1.8mを測る前方後円墳⁽¹⁾であったと考えられる(第43図)。

墳丘測量調査では、後円部の墳端ラインが正円形に広がらず3.6mほど墳丘側に入り込み、くびれ部ラインに接合している。この平面形態は、墳丘当初からのものか削平によるものかは不明で、等高線159.00m付近から墳端ラインまでの等高線間隔が、後円部北側に比べ狭いことから削平受けた痕跡である可能性があると指摘していた。該当箇所の東側に設定された第6トレーニングと、くびれ部に設定した第7トレーニングで、その想定の解答を得ることができた。第6トレーニングでは、墳丘側のトレーニング上端から0.6m南側で墳端を確認し、第7トレーニングでは墳丘側からトレーニング東壁に沿って0.8m付近に墳端を確認した。この墳端を結ぶと後円部径25.7mとなり、第43図のように現墳端ラインより最大で1.7m程内側に削平を受けていることが確認できた。つまり後円部径は、墳丘測量調査での復元案の数値と発掘調査の成果を合わせた復元案での数値の間に1.7mの差があったことになる(第1表)。

また、くびれ部については、墳丘測量調査の成果で墳丘北側の標高156.800m、南側の標高157.800mであり、墳丘北側の方が1mの低いことを言及していた。この同地点での標高差については、くびれ部北側の第3トレーニングと南側の第7トレーニングの成果から、墳端の位置の標高差は、0.5m程度測量時の想定よりも高低差が小さいことが確認できた。また墳丘測量時の成果では、墳丘北側のくびれ部の位置に対し、墳丘主軸から見た南側のくびれ部の位置は、北側よりも2mほど主軸側に位置し、さらに2mほど後円部側に寄っていると言及していたが、発掘調査成果から、測量時の想定よりも墳丘主軸が南側にズレたことにより、ほぼ変わらなくなつたが、南側くびれ部の位置が後円部側に1.8mほどズレることが確認できた。このズレは、墳丘北側では、第3トレーニングで確認した墳端ラインと墳丘測量調査の成果を合わせると、くびれ部の墳端よりも前方部隅角の墳端ラインが測量時の想定よりも開いており、直線的に後円部に接続していることが確認できた。この復元想定で墳丘主軸に対し反転すると、墳丘南側の墳端ラインは、第7トレーニングの調査区西側端まで直線的に延びるもの、調査区の成果からトレーニング北側壁とともに並行に墳端ラインがめぐることからくびれ部に直線的に接続せず、くびれ部から3.6m程調査区と並行し、調査区西端から前方部隅角に向けて外側に開くという復元想定となつた。これは、墳丘築造時におけるくびれ部のズレを解消するため生じた現象であるか、あるいは築造当初からの設計のもと築造されたものなのか考慮する必要がある。ここで、一つ気がかりなのが、第1・2・6・7トレーニングの発掘調査で確認された墳端よりも外側に広がるテラスである。この墳端外側のテラスは、豊後大野市内における前方後円墳の特徴である⁽²⁾。各トレーニングでの検出状況から、この墳端外側のテラスは、後円部の主軸から南側くびれ部までめぐっている可能性が高いことから、築造段階で全周するように備え付けられていた可能性が高い。そこで、北側くびれ部に設定された第3トレーニングと南側の第7トレーニングをみると、第3トレーニングでは明瞭なテラスの痕跡がないと報告されているが、墳端ラインの0.5m外側に人頭大の石が墳端ラインと平行するように並んでいることから、この列石が墳端外側のテラスである可能性がある。この第3トレーニングの墳端外側のテラスのくびれ部の位置と第7トレーニングで検出した墳端外側のテラスのくびれ部の位置は、墳丘主軸に対し、前述した墳端のズレではなく、平面的にはほぼ墳丘主軸に対し対象の位置になっていることが窺える。つまり、築造前の設計段階で、この墳端外側のテラスも考慮して古墳が築造された可能性がある。



第43図 小板大塚古墳墳丘復元図 (1/400)

前方部については、墳丘測量調査の成果では、くびれ部から前方部の墳端ラインが遺存している地点と、前方部北側で見られる墳端が外側に開く状況や、前方部南側の隅角から主軸側にめぐる墳端ラインから、前方部長15.5m、前方部幅は9.5mであると推測していた。しかし、第4レンチでの発掘調査の成果より、墳丘の痕跡を示す明確な遺構や層序を確認できたなかったが、墳端の痕跡と思われる箇所をレンチ東側から2.0m程外側で確認したという発掘調査の成果を加味すると、現状の等高線のめぐり方と調査成果から前方部長15.5mであると想定できる。

周溝については、第1・2・4・5～7で確認しており、後部側よりもくびれ部から前方部にかけて周溝の幅が広がるが、古墳に沿って確認できていることから、前方後円墳形の周溝が周回していたものと考えられる。以上のことから、周溝を含む全長は、49.6mであると想定できる。ただ、前方部端部に設定した第4・8レンチで周溝の痕跡が確認できなかったことから、前方部端側ではめぐつていなかった可能性も考えられるため、全長の数値は増減する可能性がある。

(玉川)

【註】

(1) 本報告と九州考古学会で発表した時点と概報で報告した復元案に誤差があるため、下記の通りその数値一覧を作成した。

第1表 小坂大塚古墳の復元案

復元案作成時期	測量・発掘成果からの復元案	九州考古学会発表復元案	測量成果からの復元案
墳長	42.3 m	42.4 m	42.5 m
後円部径	25.7 m	24.4 m	27.4 m
くびれ部幅	8.8 m	9.4 m	8.7 m
前方部長	16.5 m	16.8 m	15.5 m
前方部前端幅	13 m	13 m	9.5 m
後円部高	4.35 m	4.35 m	4.35 m
前方部高	1.8 m	1.8 m	4.8 m
段築(後円部)	2 段	2 段	2 段
段築(前方部)	1 段	1 段	1 段

田中裕介・玉川剛司・諸岡都 令和3年度 九州考古学会研究発表「大分県豊後大野市所在重政古墳の調査」

(2) 同じ特徴は豊後大野市内の道ノ上古墳、秋葉鬼塚古墳、小坂大塚古墳など三重町の古墳と、大野川を下流に下った大分市小牧山6号墳でその存在が判明している。

【参考文献】

- 諸岡 都 1990 「三重町の前方後円墳」『おおいた考古』第3集 大分県考古学会
田中裕介 1998 「大分県の大型古墳」『大分の前方後円墳』大分県文化財報告書 第100輯 大分県教育委員会
橋本幸治 1998 「小坂大塚古墳」『大分の前方後円墳』大分県文化財報告書 第100輯 大分県教育委員会
玉川剛司 2012 「小坂大塚古墳測量調査について」『豊後大野市内遺跡発掘調査概要報告書』3 豊後大野市教育委員会
石村智規 2019 「九州島における導入期の葺石に関する一考察」『学術財研究』第1集p38～43、佛教大学「学術財研究」編集事務局

(玉川)

(2) 確認調査の結果

調査トレチで確認できた墳丘斜面の葺石について、後円部からくびれ部にかけては隙間なく丁寧な疊敷を検出している。その基底部に並ぶように配置された根石列が第1・第7トレチでみられ、墳端部としてその位置を確認することができた。さらにその外周に沿うように一定の幅で疊敷のテラス状の平坦面が設けられている。墳端テラスとも称され、その端にも根石列が並んでいる。つまり、後円部からくびれ部にかけての墳丘構築範囲の外周には、疊敷によるテラス面に囲まれている構造が認められる。墳端の標高は、地形に沿っているためか、南側より北側が0.5m程低く、わずかに傾斜して構築されている。いずれも大振りの河原石が用いられており、石材は多くが褐色や黄色のチャートで、他に砂岩や凝灰岩などがみられることから、付近の三重川沿岸より持ち込まれたと思われる。

周溝は、墳端テラス面も含めて底面から外側斜面にかけて、表面に盛土の堆積が確認されている。第6トレチでは、黒色土と地山褐色土が混合されたやや硬質の土層上に、墳端テラスの礫が敷かれている。他のトレチでも同様の堆積状況を示すことから、一度掘削した後に盛土による整地を行って築造されているものと思われる。

前方部では礫の遺存状況が良くなく、後世に失われたのか、元々葺石がなかったのかは判断できないが、墳端テラスや周溝についての状況も不明であることから、もっと範囲を広げた調査を行う必要がある。

出土遺物がなく築造年代の手掛かりについては、今のところ墳丘の特徴からの推定であるが、柄鏡形の墳丘は前期古墳の竹田市七ツ森古墳群や坊ノ原古墳に近い特徴を示していることが指摘されている⁽¹⁾。また、葺石礫が大型があることは立野古墳で検出されている⁽²⁾のに近い傾向であるとすれば、前期古墳の可能性を示唆するものと考えられる。今後の資料発見による築造時期の確認が課題である。

(諸岡)

【註】

(1)諸岡郁 2021「小坂大塚古墳2次調査」『豊後大野市内遺跡発掘調査概要報告書』11 豊後大野市教育委員会

(2)田中裕介 橋本幸治 1998「小坂大塚古墳」『大分の前方後円墳』大分県教育委員会

第2節 道ノ上古墳

1. 調査の経過

三重川流域の三重盆地を見下ろす標高150mの台地上の西側先端部に所在する前方後円墳である。三方を傾斜地に囲まれ、三重川対岸の西側台地上に重政古墳・竜ヶ鼻古墳、南方に内田古墳群を望み、当方の台地上に小坂大塚古墳を視認できる位置にある。

後円部に石碑や鳥居等が造立されており、後円部南側を宅地に、前方部西端を道路によって削平されている以外は墳丘の残りは良好である。大正時代には大型の前方後円墳として報告されるなど古くから知られ、1971(昭和46)年には初めて測量図面が作成され、翌年に大分県指定史跡に指定されている。前方部が低く小型という墳形の特徴から前期古墳とみられてきた。大野川流域最大規模の前方後円墳であるものの、当時は出土遺物や主体部などは知られず、詳細は不明であった。

2000(平成12)年度に、墳丘周辺で利用されていた資材置場の拡張整備も含めた開発計画に対して、保護を図る上で遺跡範囲を把握するため、旧三重町教育委員会で墳丘測量及び確認調査を実施している。その結果、後円部東側には幅6mの周溝があり、北側くびれ部や後円部側の墳端やテラス部分を検出している。遺物は円筒埴輪や壺形埴輪片を確認することができ、中期初頭の築造と推定された。

その後、豊後大野市教育委員会による市内遺跡事業で主要古墳の調査を進める中、道ノ上古墳の墳丘測量図が20年が経過して精度的にも古く、世界測地系の座標を用いた測量図として資料化するため、墳丘測量調査を実施した。調査は別府大学考古学研究室の協力により2018~19(平成30~31)年度に実施した。(諸岡)



第44図 道ノ上古墳周辺地形図 (1/12000)

2. 墳丘測量調査

(1) 測量調査に至るまでの経過

道ノ上古墳は、1971(昭和46)年に大分県教育委員会が実施した墳丘測量調査ではじめて紹介された(玉永 1987、諸岡 1990、綿貫 1992、清水・田中 1998)。この調査で作成された測量図は、1m間隔の等高線図であった。この測量調査の結果、前方部一段、後円部一段で全長 71m、後円径 42m、後円部頂 6.5m、前方部幅 25~30m 前方部長 33m、前方部頂 4m、くびれ幅 20m の前方後円墳であると報告された。

その後、2000(平成12)年に豊後大野市教育委員会により、詳細な墳丘測量図の作成と規模・範囲確認のための発掘調査が行われた。この調査での測量図は、25センチ間隔の等高線図で作成された。測量調査の結果、後円部については、「東西径 47m、南北径 48m を測り、ほぼ正円に近い。高さは 6~7m、墳頂部には径 16m 程度の平坦面がある。東側の台地に面した周囲には幅 2m 程度のわずかなくぼみが観察でき、周溝の存在が想定される。」と報告されている(諸岡 2002)。その後の発掘調査の成果を含め、道ノ上古墳の規模は、全長 74m、後円部径 48m、前方部長 28m、前端幅 22m、くびれ幅 19m の前方後円墳であると想定された。なお、周溝については、後円部側でのみ検出したことから、前方部側にめぐらないと推察されている(諸岡 2002)。

以上のような調査歴のなか豊後大野市では、2010(平成22)年度から市内所在の前方後円墳を対象とした、精緻な測量図の作成および、墳丘規模・周溝の有無等の確認の発掘調査を目的とした総合調査を実施している。別府大学は、これらの調査の一環として墳丘測量調査による測量図作成に協力している(玉川 2012、2014、2015、2019)。今回は道ノ上古墳が対象となり、市教育委員会の依頼のもと、これまでの市内の古墳測量でも実施してきた変化点測量法(玉川2003・2004)による墳丘測量調査を行った。墳丘測量調査実施するにあたり、市教育委員会により2000(平成12)年の測量調査で設置したプラスチック製の杭3本と新たに設置した2本のプラスチック杭に世界測地系の座標による基準点が設置された⁽¹⁾。調査はこれらの基準点をもとに、必要に応じて補助杭を設置しながら行った。

墳丘測量調査は、2ヵ年に分けて実施した。調査体制は、別府大学文化財研究所の玉川剛司の指導のもと、第1期測量調査では、高木慎太郎(別府大学大学院文学研究科2年)、吉岡拓哉、池田亘(大学院文学研究科1年)、佐伯孝央、清水航平、末光博史(別府大学文学部史学・文化財学科4年)、久保園梨左(文学部史学・文化財学科3年)、朝川千聖、高橋渉、森中明音(文学部史学・文化財学科2年)が参加した(所属等は2018年4月現在)。第2期測量調査では、吉岡拓哉(別府大学大学院文学研究科2年)、末光博史(同大学大学院文学研究科1年)、赤池麗樹、渡部浩史(別府大学文学部史学・文化財学科4年)、朝川千聖、木崎晴崇、重岡菜穂、高橋渉、向井浩太、本門拓也、森中明音、吉野徳香(文学部史学・文化財学科3年)、河野美帆、棚田優人、野上寛登、末海菜月(文学部史学・文化財学科2年)が参加した(所属等は2019年4月現在)。

測量調査期間は、第1期測量調査が2018(平成30)年7月20日~2019(平成31)年3月25日の間の計13日間、第2期測量調査が2019(令和元)年6月10日~12月4日の間の計21日間で、2ヵ年の合計は34日間であった。

測量範囲は、墳丘部を中心に 9027.141 m²を対象とし、計測点は墳丘部及び周辺地形を合わせると計 9,493 点であった。なお、今回作製した測量図は、25cm 間隔の等高線図である(第45図)。

以下、調査の成果について述べていきたい。

(2) 墳丘測量の内容と成果(第45図)

後円部 後円部南東側は、墳頂部に設けられた社殿に伴う石段と鳥居を設けるため、墳端から墳頂部にかけての墳丘斜面が削平を受けている。また、南側からくびれ部手前までは、宅地造成により墳丘が大きく削平

され、墳端と考えられる傾斜変換線は消失している。さらに墳頂部は、ほとんど等高線がめぐらないほどに平坦となっているため、社殿や石塔等を設置するために本来の墳頂よりも削平されていることが窺える。これら、後世による削平箇所を除くと、墳端と考えられる傾斜変換線が確認できることや、墳丘斜面の等高線も乱れがないことからも良好に遺存していると考えられる。

後円部北側では、墳丘主軸の後円部西側からくびれ部まで墳端と考えられる傾斜変換線が2本確認できた。一つ目は150.500m～152.000mをめぐる内側のラインで、二つ目は149.750m～151.000mをめぐる外側のラインである。両ラインは、1.5m～1.25m程度の高低差があり、後円部東側からくびれ部側にいくにつれて高くなっている。外側ラインは、ラインより上位の等高線の間隔が内側のラインまでの間で大きくなっているが、内側ラインから上位の等高線はほぼ同じ間隔で並行している。つまり、内側のラインから上位の等高線の間隔がほぼ同間隔であることから、内側ラインの方が墳端である可能性が高い。また、墳丘主軸を通る後円部中心から円を描くと、内側のラインの方がこの円形ラインとほぼ重なることからもいえる。後円部南側の墳端の削平については先にも述べたが、宅地造成の削平ラインから5.5m程東側の墳端ラインと、標高150.250mが並行する箇所は、上位の等高線が乱れず良好に墳丘斜面が遺存している。また、宅地造成の削平ラインの西側で削平ラインと接地する箇所からくびれ部にかけても墳端ラインが確認できる。このラインは、151.000～151.500m間の等高線と並行し、後円部北側のくびれ部付近と同様に、くびれ部に向けて徐々に高くなっているのが確認できた。

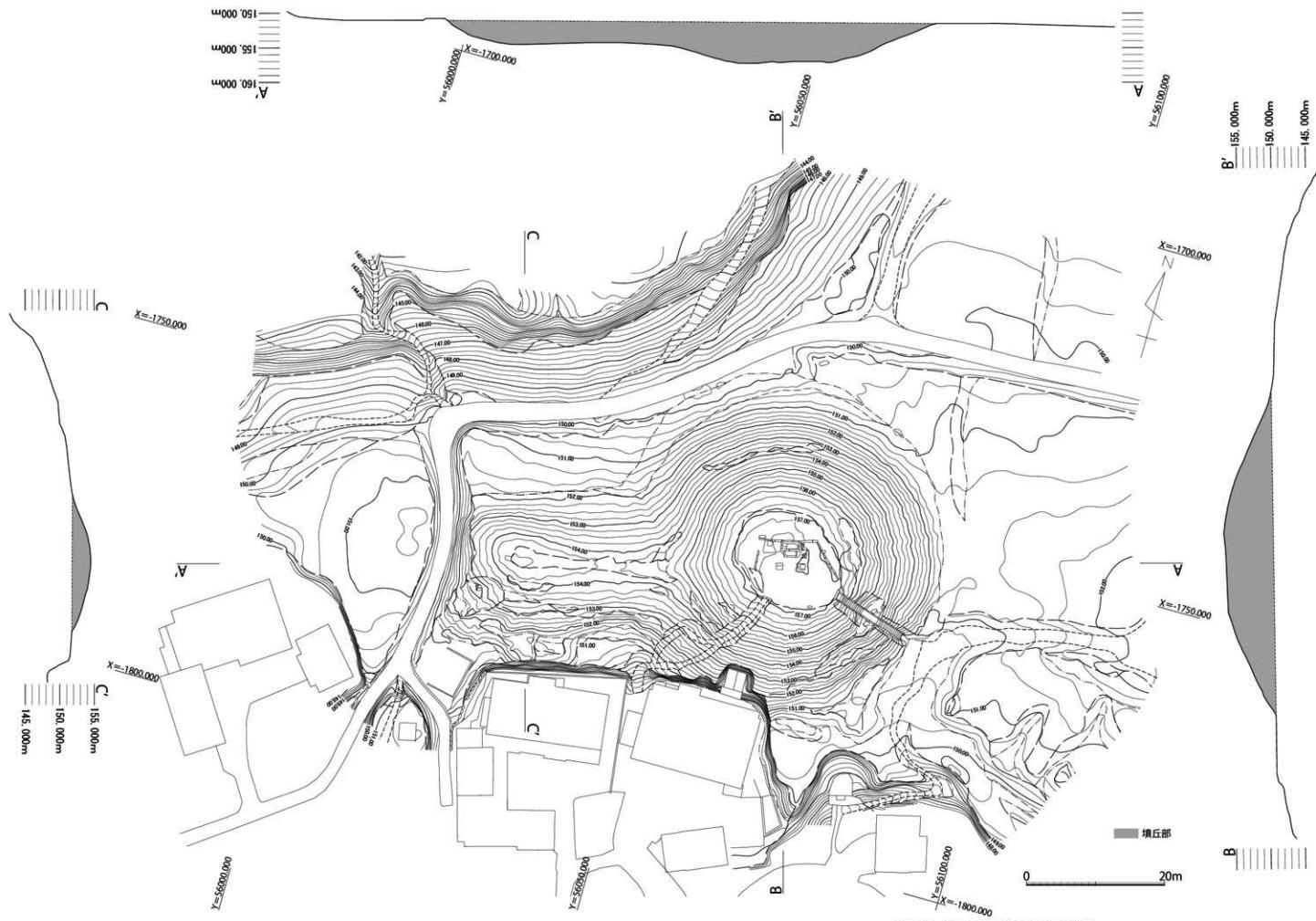
段築については、くびれ部から後円部北側で、幅1～0.6m程のテラスが標高153.000～154.000mの等高線の間に確認できた。また、後円部南側の墳頂部に至るための里道の東側で、標高154.250～154.750の等高線の間に接する箇所から隆起斜道側にかけても、幅0.9m、長さ7.2m程のテラスが確認できた。また、同地点の上位で156.250～155.750mの等高線の間に、幅1.0m、長さ3.8m程のテラスが見られる。これらのテラスは、多少高低があるものの標高154.000mの等高線を中心に確認できる。また、石段のテラスと石段の両側にみられる鳥居を設けるために削平を受けている平坦面は、標高154.000～154.500mの等高線間に設けられている。これは、本来墳丘斜面にあった段築のテラスを利用して設けられたものと推察できる。以上から、先に述べた等高線154.000mを中心に断絶している状態で確認したテラスが、一段目の段築の可能性高い。また、一段目よりも上段の段築については、後円部東側の156.250～156.500の等高線間に、幅1.5m、長さ8.0m程のテラスが確認でき、先に述べた後円部南側の里道に接している、156.250～155.750mの等高線の間にみられるテラスを合わせると2地点でしか確認できていない。しかし、156.250mの等高線を中心見られることから、二段目の段築の可能性が考えられる。葺石については、墳丘斜面の多くの地点で確認できた。

墳頂部は、社殿や石塔等により削平をうけているものの、上端ラインが大きく乱れることなく径14.4m正円形を呈している。後円部の墳頂高については、7mを測る。

以上の状況から後円部径について考えていきたい。先に述べた、墳端ラインが良好に遺存している箇所は、後円部北側で墳端ラインと標高150.500mの等高線と並行する地点と、南側の墳端ラインと標高150.250mと並行する地点、また南側くびれ部から南東側の削平ラインと墳端ライン、さらに標高151.000～151.500mとが並行する地点である。これらの3箇所の地点を結ぶ径49mが後円部径となろう。

くびれ部 墳丘北側のくびれ部は、墳端ラインと墳丘斜面の等高線が同間隔であることから良好に遺存していることがわかる。しかし、南側のくびれ部については、住宅から後円部墳頂に至る里道、畑地(果樹園)造成のため等高線が乱れ、墳端部分については改変を受けている。

墳丘北側のくびれ部については、後円部で述べた内側の傾斜変換が152.000mの等高線と並行し、前方部へと屈曲する地点がくびれ部であろう。この地点を墳丘主軸で反転した地点同士を測る18.8mがくびれ部



第45図 道ノ上古墳 墳丘測量図 (1/500)

幅であろう。

墳丘斜面の段築については、墳丘北側で標高 154.000～154.500m 間の等高線に並行するように、幅 0.7～1.2m、長さ 6.0m 程度のテラスが後円部から前方部墳頂のテラスに取りついている。墳丘南側では、幅 0.7m、長さ 3.0m 程度のテラスが標高 153.750m～154.000m の等高線間でみられ、北側のように前方部墳頂のテラスに取りついていない。これら 2 箇所のテラスが前方部に続く段築の可能性は考えられるが、現段階では判断できない。今後の発掘調査の進展に期待したい。

くびれ部の墳頂高については、墳端の標高が 152.000m で、墳頂部の標高が 154.200m であることから、その差 2.2m がくびれ部の墳頂高である。

葺石については、墳丘北側のくびれ部の墳端から墳頂にかけてみられた。また、前方部と後円部とが接する墳頂部には、後円部から流れてきた葺石が溜まった拳大から人頭大までの礫が重なるような状態で確認した。

前方部 前方部北側についてみると、後円部とくびれ部で確認した 2 本の墳端ラインが、くびれ部から 7m 西側で接続する地点がある。くびれ部からこの接続する地点までの墳端とこの墳端と並行する標高 151.750～152.000m 間の等高線は良好に遺存しており、若干ではあるがくびれ部から北側に開いているのが確認できる。この地点から西側では、墳端のラインが角度を内側に変え、墳丘主軸とほぼ並行するようになる。この墳端ラインが角度を変える箇所の 153.000～154.250m 間の等高線は、前方端にいくにつれて隅角側に開いており、墳端ラインと並行しない。つまり、墳丘斜面の等高線が大きく乱していないものの、墳端ラインに沿つて削平されている可能性が考えられる。

前方部南側については、畑地（果樹園）造成により、くびれ部から墳端と墳丘斜面が削平されている。しかし、くびれ部の墳端ラインから 11.1m 西側に幅 3.6m、長さ 3.7m の高まり確認できる。この高まりの部分は、墳端ラインが標高 151.750m の等高線と並行してめぐり、その上位の等高線が乱れず良好に遺存していることから、削平を免れた箇所である可能性が高い。この箇所からさらに西側では、畑地造成と畑地にとりつく里道のため、墳端及び墳丘斜面が大きく改変受け、隅角部分も削平されている。

前方端は、コンクリート道路を設けるため、深いところで 3.5m ほど掘削され、墳端は確認できない。前方部南側の現状の墳端と道路掘削の上端ラインが接する 151.000m 等高線よりも上位ではテラスが確認できる。このテラスの下端ラインから上の 152.000～152.500m の等高線が墳丘主軸側に屈曲し、道路掘削の上端ラインに接しているのが確認できる。この道路付設に伴う掘削は、本来の墳端の墳丘の立ち上り部分を利用して道路を通すために掘削されたものと推定できため、この道路幅の中央部分に前方端があった可能性を考慮する必要がある。

段築については、前方部南側斜面で、153.000～153.750m の等高線間に並行するように、幅約 0.6m、長さ約 5.5m のテラスと、このテラスの西側に接続するように幅約 1.3m、長さ約 6m のテラスを確認した。これらのテラスは、前方部隅角側で墓地の造成のための削平を受けているものの、2 箇所のテラスの下端ラインが等高線 153.250～153.750m と並行してみられることから、段築のテラスである可能性が高い。また、これらのテラスよりも上の標高 154.000m の等高線に並行して幅 1.1m、長さ 6.8m のテラスも確認できる。しかし、前方部墳頂の上端ラインに近いため、段築のテラスである可能性は低いと思われる。これらの状況から前方部は二段築成の可能性が高いと考えられる。

以上のことと踏まえ、前方部長と前端幅について考えていく。墳丘北側のくびれ部付近では、くびれ部から前方部隅角方向に 7m までの墳端ラインは、等高線と並行するようにめぐり、墳端ラインから墳頂部かけての等高線もくびれ部からほぼ同間隔であることから、良好に遺存しているものと考えられる。

このラインを墳端ラインと想定すると、道路掘削の上端と現状の墳端が接する箇所から上端ラインに沿って

2m北側を通る地点が、本来の前方部の墳端ラインであると想定される。この墳端ラインを墳丘主軸で反転すると、前方部南側で確認した掘削を免れた部分の墳端ラインとほぼ一致する。また、前方部南側の標高151.000m付近にテラスがみられ、このテラスより上位の等高線が墳丘主軸側に屈曲している。また、道路掘削の中央部分に前方部前端があった可能性を考慮すると、前方部端の墳端ラインは、前方部南端の151.500～151.750mの等高線の間にみられるテラス下端ラインと、道路掘削の上端ラインが接する地点を通るラインが想定できる。以上のことから、墳端ラインは前方部長28.2m、前端幅24.3mを測る規模になるものと考えられる。

前方部の墳頂部については、最大幅が3mで、最小幅が1mと全体的に幅が狭い。最高地点の標高は154.500mであり、くびれ部の最高地点の標高は154.200mであることから墳頂部はほぼフラットで、前方部高は2.75mを測る。

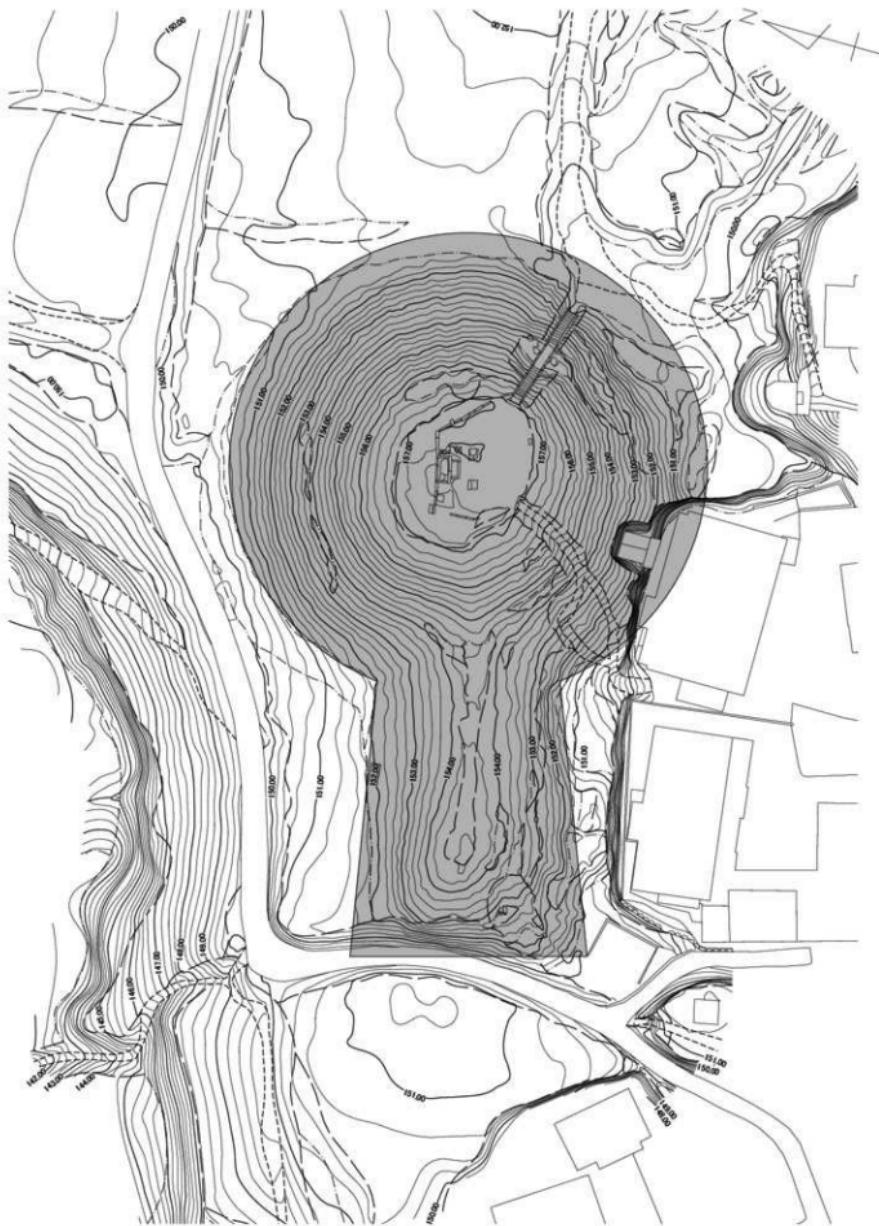
周辺部 測量図では、後円部北側から墳丘主軸の東側までの間で、墳端ラインから7.8m外側に並行するように等高線が浅い窪みを捉えている。この窪みは、周溝である可能性が高いことから、少なくとも後円部北側から墳丘主軸を通り後円部南側までは周溝があった可能性がある。この周溝の痕跡は、くびれ部や前方部では確認できていないことから、墳丘を全周する周溝が存在するかは不明である。

(3) 測量調査のまとめ

墳丘測量調査の成果から、後円部の墳端ラインが良好に遺存している箇所は、後円部北側で墳端ラインと標高150.500mの等高線と並行する地点と、南側の墳端ラインと標高150.250mと並行する地点、南側くびれ部から南東の削平ラインと墳端ラインとが接する、標高151.000～151.500mと並行する地点である。これら3箇所の地点を結ぶ径49mが後円部径であると考えられる。また、くびれ部については、南側のくびれ部は、住宅から後円部墳頂に至る里道、畠地(果樹園)造成のため等高線が乱れ、墳端部分については改変を受けている。しかし、墳丘北側のくびれ部については、151.750mの等高線と並行し、前方部へと屈曲する地点がくびれ部であろう。この地点を墳丘主軸で反転した地点同士を測ると18.8mがくびれ部であると考えられる。前方部については、墳丘北側のくびれ部から7m西側までの墳端ラインが等高線と並行するようにめぐり、同範囲の墳端から墳頂部かけての等高線もくびれ部からほぼ同間隔であることから、良好に遺存しているものと考えられる。くびれ部からこの地点を通る墳端ラインを想定すると、道路掘削の上端と現状の墳端が接する箇所から上端ラインに沿って2m北側を通るラインが、本来の前方部の墳端ラインであると想定される。また、墳丘南側の標高151.000m付近にみられるテラスの下端ラインより上位の等高線が墳丘主軸側に屈曲している。この箇所を参考にすると、前方部長28.2m、前端幅24.3mを測る規模となる。つまり、道ノ上古墳の規模については、墳長76m、後円部径49m、くびれ幅18.8m、前方部長28.2m、前端幅24.3m、後円部高7m、前方部高2.75mを測る前方後円墳であると考えられる。しかし、墳長及び前方部長については、現状で前端部が消失していることにより、今後の発掘調査により多少前後する可能性がある。また、段築については、後円部が三段築成、前方部が二段築成(三段の可能性も有)の可能性があり、今後の調査に期待したい。

また、各部位の墳丘斜面で葺石が露出している箇所があることから、全体的に葺石が敷かれていたと考えられる。

次に、古墳の立地について考えていきたい。道ノ上古墳は台地の縁辺部に築造されていることから、築造に関する視認性を意識して築造した可能性が高いものと考えられる⁽²⁾。そこで、今回の測量結果からその視認性について考察していきたい。今回実施した墳丘測量調査は、冒頭でも述べたように墳丘斜面の変化点の座標を計測し、その座標データから測量図を作製したものである。つまり一次データとしては、X、Y、Zの座標値がこれにあたる。この座標値のデジタルデータから、墳丘の3D図⁽³⁾を作製したのが第47図である。



第46図 道ノ上古墳墳丘測量図（測量復元案1 S=1/500）

0 20m

第47図の1は、墳丘主軸沿って真上から観た3D図で、2は前方部側からの斜め上からの鳥瞰3D図である。3～6は墳丘北側から、7～10は墳丘南側からの3D図である。なお、1～4・7・8は平行投影で、5・6・9・10は透視投影で作製した。

真上からの1をみると、後円部の墳端については、色の濃淡で墳端がきれいな円形を呈していることがわかる。また、墳丘北側のくびれ部から前端部にかけては、墳端と考えられる色の濃淡ラインが、前方部の中ほどで内側にくびれ、前端部に向かって外側に張り出すようにめぐっていることも確認できる。3は墳丘北側からの鳥瞰3D図で、4は真横からみた3D図である。5・6は墳丘の透視投影の3D図で、5はくびれ部を中心に同じ高さから、6は古墳が立地する台地北側の谷部から古墳を見上げた際の視点である。5をみると、前方部と後円部の形状がはっきり確認できるが、6では前方部が低く後円部のみが確認できる。7は墳丘南側からの鳥観、8は真横からの3D図である。9・10は墳丘の透視投影図で、9はくびれ部を中心に同じ高さから、10は古墳が立地する台地南側の谷部から古墳を見上げた際の視点である。9をみると8と同じく後円部、前方部とも形状がはっきり確認することができる。また、10についても6よりも前方部が高く、前方後円墳の形状が見られる。

以上のことから前方後円墳であると視認できる個所は、墳丘北側の谷を挟んだ台地上と、墳丘南側の三重川が流れる谷部及びその南側の台地上である。これらの位置に古墳を認識させたい対象となるモノ（集落、道など）が存在し、その対象を意識して築造された可能性が推察される。また、豊後大野市三重町の前方後円墳（小坂大塚古墳、立野古墳を除く）は、各古墳から最低でも1基は視認できるという特徴から、当時の政治的な情勢をも包有する地域のランドマーク的な性格をもたせて築造された前方後円墳である可能性が高い。

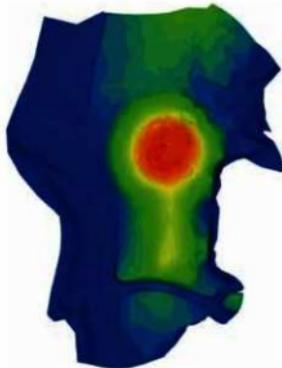
（玉川）

【註】

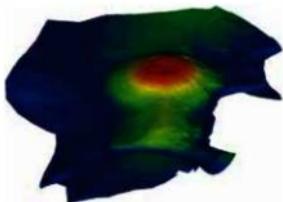
- (1)T4-1・4・5は後円部墳頂部、T4-3はくびれ部墳頂部～5、T4-2は前方部南側隅にそれぞれ設置されたものを使用した。
T4-1 : X=-1760.650, Y=56058.450, Z=157.194, T4-2 : X=-1778.006, Y=56023.248, Z=152.400, T4-3 : X=-1764.376, Y=56044.184, Z=154.298, T4-4 : X=-1757.245, Y=56071.386, Z=156.986, T4-5 : X=-1762.515, Y=56072.778, Z=157.004
(2)古墳築造における立地状況を決定する概念が存在すると考えられる。この概念は、古墳築造に当たり立地条件を決定する概念で、良好な自然地形を選定する側面のみならず、当時の政治的な情勢をも包有する地域のランドマーク的な性格をもつものと考えられる。
(3)座標値のデジタルデータから、TINデータ(近接する座標値から不整三角網生成し、地表面を三角形の集合で表現するデジタルデータ構造。)を作製し、標高値を段階的に色分けした3D図。

【引用・参考文献】

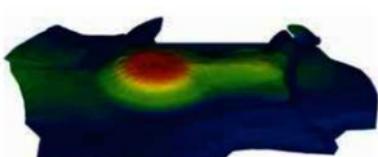
- 下村智彦・吉田和彦・玉川剛司 2003 「古墳におけるデジタル測量の研究 - 大分県下の古墳を事例として - デジタル測量」『九州考古学第78号 九州考古学会
- 清水宗昭・田中裕介 1998 「道ノ上古墳」『大分の前方後円墳』大分県文化財調査報告書第100輯 大分県教育委員会
- 田中裕介 1998 「立野古墳」『大分の前方後円墳』大分県文化財調査報告書第100輯 大分県教育委員会
- 田中裕介 2019 「豊後大野市の古墳群からみた地域社会と首長像」『古墳時代阿蘇ルートの研究』熊本大学文学部
- 玉川剛司 2004 「小熊山古墳測量調査」『文化財研究所年報』2 別府大学文化財研究所
- 玉川剛司 2012 「小坂大塚古墳測量調査について」『豊後大野市内遺跡発掘調査概報3』豊後大野市教育委員会
- 玉川剛司 2014 「漆生古墳群測量調査について」『豊後大野市内遺跡発掘調査概報4』豊後大野市教育委員会
- 玉川剛司 2015 「秋葉鬼塚古墳測量調査について」『豊後大野市内遺跡発掘調査概報5』豊後大野市教育委員会
- 玉川剛司 2016 「坊ノ原古墳群測量調査について」『豊後大野市内遺跡発掘調査概報6』豊後大野市教育委員会
- 玉川剛司 2019 「重政古墳群測量調査について」『豊後大野市内遺跡発掘調査概報9』豊後大野市教育委員会
- 玉光洋 1987 「古墳時代」『三重町誌総集編』
- 諸岡 郁 1990 「三重町の前方後円墳」『おおいた考古』第3集 大分県考古学会
- 諸岡 郁 2002 「道ノ上古墳」『三重地区遺跡群発掘調査概報VI』三重町教育委員会



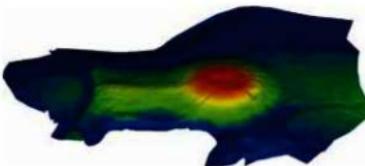
1. 墳丘真上からの3D図
(平行投影図)



2. 墳丘西側からの鳥瞰3D図
(平行投影図)



3. 墳丘北側からの鳥瞰3D図
(平行投影図)



7. 墳丘南側からの鳥瞰3D図
(平行投影図)



4. 墳丘北側真横からの3D図
(平行投影図)



8. 墳丘南側真横からの3D図
(平行投影図)



5. 墳丘北側真横からの見透し3D図
(透視投影図)



9. 墳丘南側真横からの見透し3D図
(透視投影図)



6. 墳丘北斜面下からの見透し3D図
(透視投影図)



10. 墳丘南斜面下からの見透し3D図
(透視投影図)

第47図 道ノ上古墳3D図

(玉川)



第48図 道ノ上古墳調査配置図 (1/500 玉川作図)

3. 確認調査

2000(平成12)年度調査のトレーンチの配置は、墳丘や周溝の保存状況や遺物による築造年代の確認などを目指して、後円部東側に第1、北側くびれ部に第2、前方部北側に第3、前方部西側に第4トレーンチの4箇所を設定した。

(1) 第1トレーンチ(第49図 写真図版5)

後円部東に幅1.8m、長さ14mを設定して掘下げた。トレーンチ西側の墳端付近で葺石の配置を確認し、石材は河原石と思われる円礫が多い。本来は隙間なく敷き詰められていたと思われるが、位置を動いていたり失われているものも多く、第13層の整地層と思われる土層の上に葺かれている。墳端は標高150.7m付近で傾斜角度が変化する付近と思われるが、葺石の保存状況は良くなく、根石列は確認できない。墳端の外側にテラス状平坦面があり、1m程の幅で葺石が敷かれているが、多くは転落して失われている上、中世の溝遺構による擾乱を受けて平坦面の範囲は確認できない。

墳丘東に周溝とみられる掘込みを検出しており、幅約6m、検出面よりの深さ約1.1mを測り、断面は逆台形状に掘り込まれている。溝底の最深部の標高は149.9mである。周溝の外側は遺構等はみられないが、表土層の直下に地山ローム層を検出しており、削平を受けている痕跡と思われる。

(2) 第2トレーンチ(第50図 写真図版5・6)

北側くびれ部の確認のため幅1.6m、長さ13.5mに設定し、樹木根を避けるように一部拡張した。ほぼ墳端位置に葺石の配置を確認し、良好に隙間なく敷き詰められているのを検出した。葺石は墳丘斜面には傾斜角度を変化させて敷かれているが、墳端に幅70cm程のテラス状平坦面を設けており、標高は151.3m付近でその境となっている。礫の大きさについて、後円部側は墳丘斜面に大型礫を、テラス面には小型礫が配置されているが、前方部側は逆にテラス面に大型礫の傾向がある。墳端テラスの外縁には大型の礫が並べられた根石列が確認できるが、ほぼ樹木根の位置で屈曲していることからくびれ部と考えられる。後円部側には外側には根石列が二重に配列されている状況で検出した。

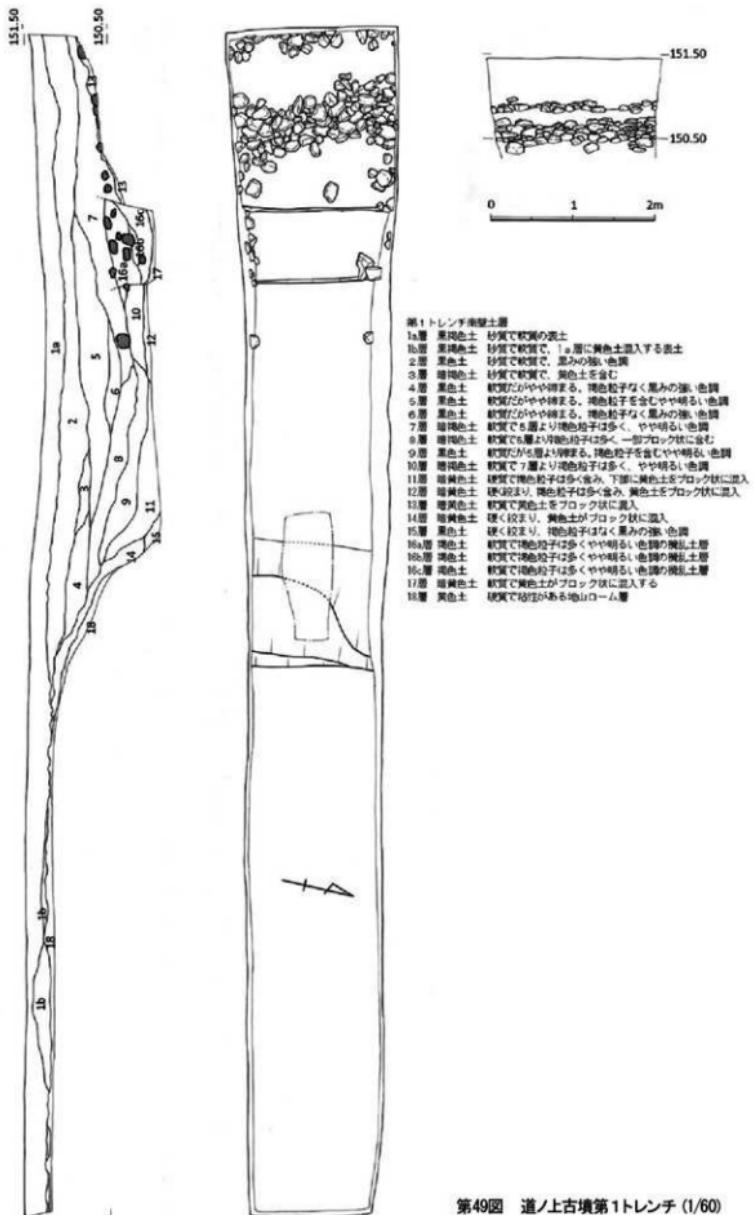
さらに外側に向かって地形に沿って下降面が続き、そのまま台地端に向かうとみられることから周溝は設けられていないとみられる。

(3) 第3トレーンチ(第51図 写真図版6)

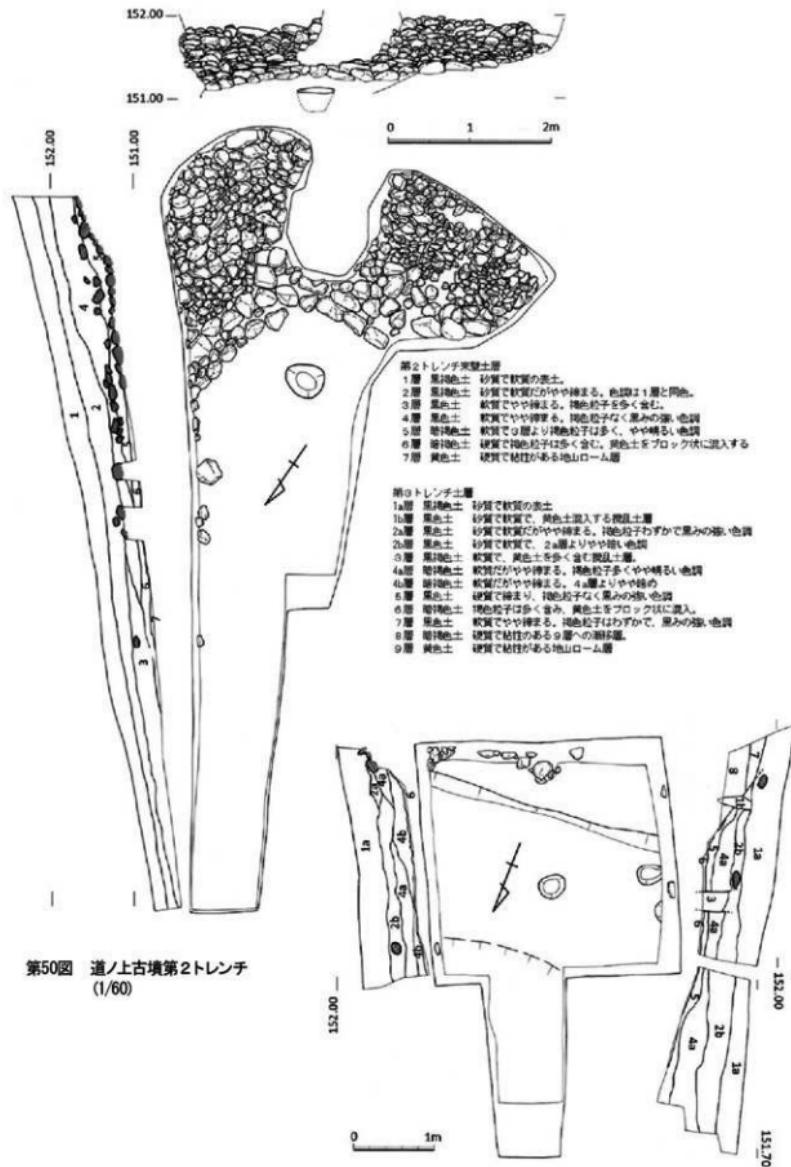
前方部北側の墳端確認のため2m四方の正方形に、北側に長さ2m幅0.8mに拡張して掘下げた。円礫は出土しているものの、葺石としての配置は確認できず、崩落あるいは取り除かれている状況である。西壁土層の観察により、墳丘盛土と思われる土層(第7・8層)や、標高151.20m付近で傾斜面が変化し、幅1.6m程の平坦面を確認した。葺石がほとんど残っていないため擾乱を受けている可能性もあるが、第2トレーンチと幅も標高もほぼ一致するため、第2トレーンチから続く墳丘端とテラスに相当する可能性も考えられる。また、掘込み状の遺構がいくつかあるものの、後世の擾乱に伴うものとみられる。

(4) 第4トレーンチ(写真図版6)

墳丘西側の遺構確認のため幅1.5m、長さ10mで設定した。表土層が約30cmあり、その下層より地山ローム層を検出したが、遺構は全く検出できなかった。道を挟んで少し距離が開いているが、前方部前端に周溝らしき痕跡はなく設けられていないものと考えられる。また、第1トレーンチ周溝東側の同様の層序で、地山ローム層上のクロボク層が全くなく、削平を受けている状態と考えられる。



第49図 道ノ上古墳第1トレンチ (1/60)



4. 出土遺物（第52-53図 写真図版7・8）

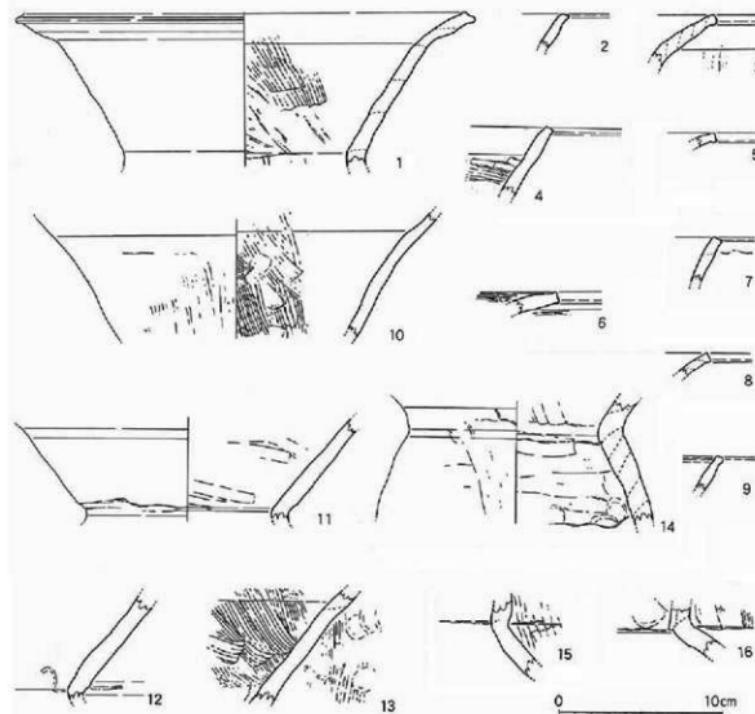
遺物は埴輪を主体に第4レンチ以外のトレンチ表土や堆積土から出土した。

第52図および第53図1～24は壺形埴輪である。調整は内面にハケ、外面にはナデであるがやや粗いものが多い。1～10・13は口縁部であり、端部は平坦で、下端に突帯状となるものや外面がわずかに厚みがあるものが多い。11・12・14～18は頸部付近で、14はやや小振りで器壁が厚手で製作されている。20～21は胴部である。図示していないが一部の胴部片には赤色顔料の確認できる破片もある。22～24は底部で焼成前成形で開放による孔がある。22・23は器壁が薄く、24には径4cm程の孔が開けられている。壺形埴輪は今のところすべて單口縁で長胴形の胴部が確認できる。

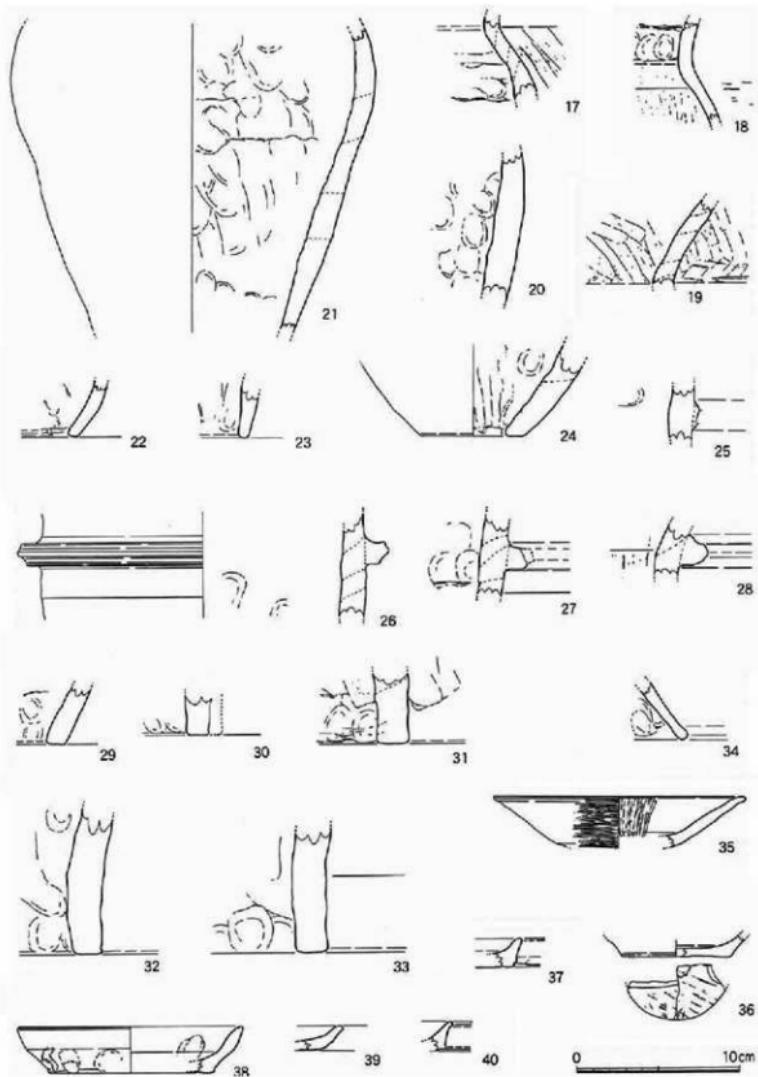
第53図25～33は円筒埴輪で、25～28は胴部、29～33は基底部である。突帯は高めで外面調整はいずれも横方向のナデ調整で、内面には指圧痕がある。壺形埴輪に比べると出土量は少なく、口縁部および透孔が判明する破片は検出されていない。34・35は高坏と思われ、34は脚部、35は表面は磨き調整の坏部である。

36～40は中世の土師器片で、第1・3トレンチの擾乱部分より出土している。36は籠ケズリ、37・38は糸切りの底部調整である。

(諸岡)



第52図 道ノ上古墳出土遺物1 (1/3)



第53図 道ノ上古墳出土遺物2 (1/3)

5.まとめ

(1)復元案について

第54図は、墳丘測量調査で作製した測量図(第45図)に、第1～4トレンチの位置を入れ、発掘調査成果を基に作製した墳丘復元図である。この図を基に各部の詳細についてまとめていきたい。

まず後円部についてみると、墳丘測量調査での成果として、墳端ラインが良好に遺存している3箇所の地点を結ぶ径49mが後円径であると想定した。しかし第2トレンチの発掘調査で、墳端の根石と根石から外側に幅0.6m程のテラス面が確認されている。このテラス面の外側には、比較的大きい石を根石として設置し、墳端に並行するようにめぐらせている。また第1トレンチでは周溝が検出され、墳端及び墳端外側のテラスの根石は攪乱により検出されていないが、地表面ラインから1～2m外側になると想定された。この第1トレンチの墳端の根石については、テラス面の土層が水平体積している状況などから、調査区の墳丘側壁の直下の石もしくは、さらに墳丘側にあると推察できる。これらの発掘調査の成果を加味すると、後円部径は46.5mで、墳端外側のテラス面を含めた径は49mを測ると規模になると考えられる。つまり、測量調査時での成果として考えていた後円部径は、墳端外側のテラスのラインを捉えていたことになる。

次にくびれ部についてみると、くびれ部北側の第2トレンチで確認したくびれ部墳端の根石位置から、墳丘主軸でくびれ部南側に反転した等高線152.250m付近がくびれ部となる。これら南北のくびれ部結ぶ17.5mがくびれ幅となろう。また、第2トレンチで検出した墳端外側のテラスの石列ラインについては、現状の墳端ラインと重なり、墳丘測量での成果で考えたくびれ部の位置と一致する。この地点を墳丘主軸で反転すると現状のくびれ部南側の墳端ラインより0.6m上の151.750mの等高線ラインの位置にある。つまり、墳端外側のテラスのくびれ部幅は18.8mとなり、測量調査の成果と同じ数値となる。

前方部には、前方部北側に第3トレンチと前方部端側に第4トレンチが設定され発掘調査が実施された。第3トレンチでは、墳丘盛土とみられる土層は確認できるものの後世による削平により墳端の痕跡は検出できず、現状の墳端ラインは本来の墳端ではないことが判明した。また、第4トレンチでも削平により造構を検出できなかった。これらの発掘調査の成果と、墳丘測量調査の成果を合わせて前方部についてみていく。前方部北側では、くびれ部から前方部隅角に向けて7m西側で現状の墳端ラインと上端の傾斜変換線が接続する地点があり、くびれ部からこの地点までの現状の墳端ラインは、等高線とも並行しているため、測量調査で墳端であると想定した。しかし、第2トレンチの成果から、この墳端ラインは墳端外側のテラスの根石の列石と重なっていることが確認されている。これらの状況から、墳端根石のラインの位置を考えると、第2トレンチで検出した墳端外側のテラスの列石ライン(現状の墳端ライン)と並行しているものと考えられる。つまり、前方部北側の墳端ラインは、くびれ部からほぼ同じ幅で直線的になっているのではなく、第54図のようにくびれ部から北側に前方部隅角が開いているのが想定できる。現状では、墳丘側に墳端ラインが入り込んでいるため、削平を受けているものと考えられる。これを示すように、この付近に設定された第3トレンチの成果でも、墳端部分が削平により検出できなかつたことが報告されている。この両ラインを墳丘主軸で反転すると、前方部南側で確認した掘削を免れた部分の墳端の傾斜変換線と、内側の墳端ラインとほぼ一致している。ここで、墳丘南側の前方端で確認した等高線が墳丘主軸側に屈曲する箇所を参考にすると、墳端のラインは151.750～152.000mの等高線の間にみられるテラス下端ラインと、道路掘削の上端ラインが接する地点を通るラインが想定できる。また、墳端より外側のテラスのラインは、この道路幅掘削の中央部分に前方端があつた可能性を考慮すると、墳端ラインよりも1m外側の位置を通るラインを推定できる。これらを踏まえると、墳端の想定ラインは前方長27.4m、前方幅22.8m、墳端外側のテラスの想定ラインは前方長28.2m、前方幅24.3mを測る規模となる。

次に、周溝についてみると、後円部に墳丘主軸上に設定された第1トレンチの発掘調査の成果として、幅



第54図 道ノ上古墳境丘復元図
(S=1/500)

約6m、深さは現地表面から最も深いところで1.3mの断面逆台形の周溝が検出されている。現状の墳端ラインから7.8m外側に対岸の上端が検出されている。墳丘測量の成果として、後円部北側から墳丘主軸の東側までの間で、墳端の傾斜変換線に並行するように等高線が浅い窪みを捉えていたため、この窪みが周溝の可能性があると指摘していた。この窪みが第1トレーンで検出した周溝の位置と一致することから、少なくとも後円部北側から墳丘主軸を通り後円部南側までは周溝があった可能性がある。この周溝の痕跡は、くびれ部や前方部では確認できず、第2トレーンでも検出していないことから、墳丘を全周するような周溝ではなく、古墳と台地とを切り離すために後円部側にのみ周溝を掘り込んだ可能性が考えられる。

以上、測量調査と発掘調査の成果を合わせ、墳丘復元案について述べてきた。これらの復元案(第54図)から道ノ上古墳は、墳長70m、後円部径46.5m、くびれ幅17.5m、前方部長27.4m、前方部端部幅22.8m、後円部高7m、前方部高2.75mを測り、後円部三段、前方部二段築成の前方後円墳であることが想定できる⁽¹⁾。

今回の測量調査では、周溝の全容や段築の有無や位置についてつかめなかつたため、今後、墳丘の保存・整備を考慮に入れた発掘調査の成果に期待したい。
(玉川)

【註】

(1) 墳丘測量調査での復元案と墳丘測量調査及び発掘調査の成果を合わせた復元案の数値の誤差は、下記の通りである。

第2表 道ノ上古墳の復元案

復元案作成時期	測量・発掘成果からの復元	測量時の復元	測量成果からの復元
墳長	70 m	74 m	74 m
後円部径	46.5 m	49 m	48 m
くびれ部幅	17.5 m	18.8 m	19 m
前方部長	27.4 m	28.2 m	28 m
前方部前端幅	22.8 m	24.3 m	22 m
後円部高	7 m	7 m	— m
前方部高	2.75 m	2.75 m	— m
段築（後円部）	3 段	3 段	— 段
段築（前方部）	2 段	2 段	— 段
墳端外側のテラス含む後円部径	49 m	— m	— m
墳端外側のテラス含むくびれ幅	18.8 m	— m	— m
墳端外側のテラス含む前方部長	28.2 m	— m	— m
墳端外側のテラス含む前方部端部幅	24.3 m	— m	— m

田中裕介・玉川剛司・諸岡郁 合和3年度 九州考古学会研究発表「大分県豊後大野市所在重政古墳の調査」

【参考文献】

諸岡 郁 2002 「道ノ上古墳」『三重地区遺跡群発掘調査概報VI』三重町教育委員会

(2) 確認調査の結果

限られた範囲の調査であったが、葺石で覆われた墳丘端の周囲にテラス状の平坦面を設ける墳丘構造が確認できた。特に第1・2トレーナーで墳端より外縁に沿うように礫敷が施されているとみられる。墳端部分には明確な根石列はないが、墳丘斜面とテラス部分に大きさの異なる石材の配置も見受けられる。さらに、テラス端に一回り大型礫による根石の配列が第2トレーナーで確認できる。

第3トレーナーでは葺石の残りが良くないためか礫敷ではなかったが、前方部墳端にもテラス状の平坦面が設けられていることが考えられる。葺石が極端に少ない理由として削平の可能性もあるため、前方部形態については広範囲な調査が必要である。

周溝については、第1トレーナーのみの確認で他のトレーナーでは土層からも周溝は見られない。地形的にも墳丘周囲全体の可能性は低く、後円部の東側周囲のみに設けられているとみられる。周溝外側の地山の削平について、中世の遺構であることから断定はできないが、墳丘構築時の可能性が考えられる。墳丘の周囲を平坦に掘削し、さらに東側のみ周溝を掘下げた土砂を利用して築造したことと推定される。

出土遺物は円筒埴輪と壺形埴輪が確認できたが、特徴として、壺形埴輪は単口縁の形態のみで、胴部は長胴化が進み、底部は開放したまま積み上げる製作技法で作られている。円筒埴輪は出土量が少なく全体像は不明な点も多いが、胴部と底部は直立気味で、厚手で全体的に荒い。焼成も穴窯焼成以前の技法でもあり、古墳時代中期前葉の築造時期と推定される。

(諸岡)

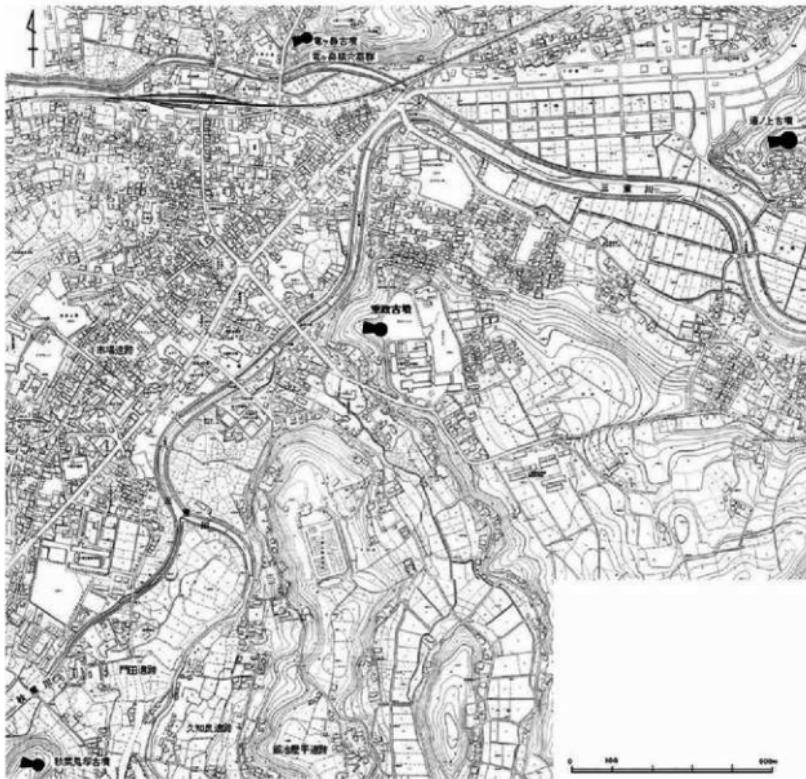
【参考文献】

- 田中裕介 2009「豊後大野市三重地域の首長墓とその動向」『地域の考古学－佐田茂先生佐賀大学退任記念論文集』
本荘昇・前田多三郎 1924「三重郷の史蹟」『大分縣史蹟名勝天然記念物調査報告』第三輯
清水宗昭・田中裕介 1998「道の上古墳」『大分の前方後円墳 三重・西国東地区編』大分県教育委員会
玉永光洋 1987「古墳時代」『大分県三重町誌総集編』三重町
諸岡 郁 2002「道ノ上古墳」『三重地区遺跡群発掘調査概報VI』三重町教育委員会

第3節 重政古墳

1. 立地と環境（写真図版9）

重政古墳は、豊後大野市三重町(旧大野郡) 大字内田字重政の、通称重政原と呼ばれる台地上に所在し、その台地から派生する西向きの尾根に前方部を載せるように構築された前方後円墳である。三重盆地中心部を東西方向から見降ろす位置にある。標高は約158m、台地下の平地との比高は25mほどである。盆地を挟んで北に対面する位置に童ヶ鼻古墳が、西方に秋葉鬼塚古墳の二つの前方後円墳が位置する。中学校の敷地内で、後円部の一部に削平を受けている以外は墳丘の保存は良好である。



第55図 重政古墳周辺地形図 (1/12000)

2. 調査の経過

重政古墳の発掘調査の目的は、①豊後大野市内で唯一墳丘平面形態や葺石の状況などは判明していない古墳であることと、②築造年代を推定する資料が乏しいため発掘調査を行って以上の資料をえることであった。主体部についての情報は乏しく現状には墳頂部には鳥居と祠があり、発掘は行わなかった。しかし主体部の情報を得るために地下レーダー探査を行っている。詳細は第7節にゆだねるが、後円部墳頂中央の石祠の直下に1か所、前方部中央に1か所墓壙の可能性のある反応を見出している。

重政古墳の調査研究史 重政古墳は大正時代の大分県史跡名勝天然記念物調査委員会の調査などすでに知られていた⁽¹⁾、そのとき前方後円墳として報告された古墳のひとつが重政古墳である。1965(昭和40)年ごろ町立三重中学校のグランド拡張工事の際に、当時当中学校の社会科教員であった故芦刈政治氏によって壺形埴輪の底部破片が採集されている⁽²⁾。そのご当时大学生であった諸岡によって測量が行われ前方部頂が水平で典型的な柄鏡型の前方部であることが報告されている⁽³⁾。1994(平成6)年には三重町教育委員会(諸岡郁)による25cm等高線による平板測量が、翌年には後円部の周辺に3本のトレンチを入れる調査が行われた。この年の調査を第1次調査とする⁽⁴⁾。

第1次調査 1994~95(平成6~7)年に行われた調査である⁽⁵⁾。三重中学校のグラウンドのバックネットフェンスの改修事業の事前調査として行われたもので、後円部の墳端と周溝の有無を確認する目的で行われた。後円部南側に設定した第1トレンチは、当初の地形を残す場所であったが、墳丘斜面から流れ落ちて堆積した葺石と若干の壺形埴輪の破片を採集したもの、明確な墳端の葺石を見出すことはできず、グランド側に設けた第2・第3トレンチでは完全に削平され、墳端どころか周溝の底部さへ見出すことはできなかった。

以来重政古墳についての調査は進展しないまま今回の第2次調査にいたった⁽⁶⁾。そこで発掘調査の再開に先立って、地下レーダー探査と再測量を実施した。

地下レーダー探査 2016(平成28)年度冬 2017(平成29)年1月28日に後円部と前方部の墳頂両平坦面の地下探査をおこなった。後円部の墳頂中央にかなり広い反応と、前方部の中ほどに主軸方向に並行する長円形の反応を確認し、後円部は中心主体が1基。前方部上に副主体が1基存在する可能性が示された。

測量調査 2017(平成29)年度夏 玉川剛司を中心に院生と学生による測量チームによって、墳丘とその周辺の測量を行った。墳長は約55mに復元されるが、後円部の周囲や前方部南側隅角などが消失していることが判明したため、墳丘各部の数値は発掘調査を待つて確定することにした。測量の結果としてはこれまで前方部両側が並行する柄鏡型の平面形をなすと考えられてきたが、南側隅角の部分が消失したためにそのように見えるのであって、実際には前方部はくびれ部から前端に向かって開いていく形態であると考えられた。

第2次発掘調査 2017(平成29)年度冬 1次調査の第3トレンチの側に設定した第4トレンチでは後円部の墳端に周溝があることが判明し、その底部に墳端の根石と石敷きの墳端テラスを確認した。墳丘斜面はすでに崩壊が激しかったので一段目平坦面を確認することができなかつたが、二段目斜面で葺石を確認した。第5トレンチでは近世の道路遺構と考えられる溝跡や土坑によってかなり破壊されていたが、前方部一段目斜面の葺石を発見した。前方部前端部に設けた第6トレンチでは、周溝こそ明確にならなかつたが、墳端と石敷きのテラス、一段目平坦面と二段目斜面を検出し、重政古墳は後円部二段前方部二段築成の可能性が強くなった。各トレンチから重政古墳に伴う埴輪の破片が出土し始め、前方部まで壺形埴輪が置かれたと考えられた。

第3次発掘調査 2018(平成30)年度冬 南側のくびれ部を確認するために設定した第7トレンチと、前方部の前端をより明確に検出するため設定した第8トレンチにおいて、ともに葺石による墳端と墳端テラスの検出に成功した。しかし南くびれ部を狙った第7トレンチでは屈折点は検出できなかつた。そこで北くびれ部を目的とした第9トレンチを設定したが、近世後期の削平によって墳裾部分が大きく削平されていることが判明した。段築については第7トレンチでくびれ部一段目平坦面を検出し、同時に後円部の一段目平坦面を見出している。埴輪の採集については、第7トレンチくびれ部一段目平坦面上において完形の壺形埴輪多数と赤色顔料が大量に付着した土師器甕を発見した。その中には円筒埴輪ではなく、壺形埴輪も単口縁形態のものばかりであった。

第4次発掘調査 2019(令和元)年度冬 南側くびれ部を確認するために第7トレンチの後円部側と二段目斜面上方に向かって拡張したところ、前方部と後円部の屈折する境界ラインと、一段目テラスの屈折部を確認し、そこに多量の壺形埴輪が折り重なるようにつぶれているのを発見した。墳端が削平されていた北側くびれ部の第9トレンチは、後円部の段築を確認するため上方に拡張した結果、一段目平坦面を確認することができた。平坦面

にも礫が敷かれていた。

第5次発掘調査 2020(令和2)年度冬 4次調査で一部着手していた前方部北斜面の第10レンチと後円部北側の第11レンチの完掘をおこなった。その結果、第10レンチでは墳端は削平をうけて失われていたが、一段目斜面上半の葺石と、砂利がまきられた平坦面と二段面斜面葺石の根石を確認した。第11レンチでは周溝とそこから立ち上がる墳端テラスと斜面の葺石を確認した。

以上の調査によって重政古墳は墳長約 53m ほどの、少なくとも後円部には周溝がめぐる、後円部二段前方部二段築成の前方後円墳であることが判明した。

3. 調査の実施と体制

(1) 第1次発掘調査 1994~95(平成6~7)年

発掘調査 当時の三重町教育委員会の諸岡郁を担当者として実施した。

(2) 地下レーダー探査 2017(平成29)年1月28日

東憲章と Dean Goodman 氏の指導の下、田中・諸岡と別府大学学生の協力で行った。参加者は以下の通り。

村田仁志・大矢健太郎・中原彰久(以上大学院1年)・吉岡拓哉(学部3年)

(3) 測量調査 同年5月12日から6月28日

玉川剛司(別府大学文化財研究所)により約9日間で 25 cm 等高線測量を実施した。参加者は以下の通り。

塙見恭平、高木慎太郎、竹永昂平(以上大学院1年)、井出基子、吉岡拓哉(以上学部4年)、佐伯孝央、清水航平(以上学部3年)

(4) 第2次発掘調査 2017(平成29)年冬

豊後大野市教育委員会と別府大学考古学研究室の合同調査団によって、現地調査は諸岡、田中を主担当者に、上野、玉川が副担当あたり、2017(平成 29)年 12 月 19 日(火)・20 日(水)に表土剥ぎを、22 日(金)~ 24 日(日)、26 日(火)~ 28 日(木)には別府大学の遺跡調査実習(集中講義)としてその後 1 月 20 日まで、間欠的に考古学研究室の学生有志により第 4 ~ 6 レンチの調査をおこなった。2018(平成 30)年 1 月 8 日には、豊後大野市の古墳文化を考える会(代表: 渡辺円世)主催で現地説明会をおこなった。参加者は以下の通り。

職員・教員 諸岡郁(豊後大野市教委)、田中裕介・上野淳也・玉川剛司(別府大学)、井大樹(大分県立埋蔵文化財センター)、橋本幸治

学生 村田仁志(大学院2年)、塙見恭平、高木慎太郎、竹永昂平、後藤佳奈(以上大学院1年)、堺高太郎、吉岡拓哉、(以上学部4年)、岡元蓮、川村有紀、佐伯孝央、清水航平、末光博史、島村夏輝、田口裕介、前田純子(以上学部3年)、久保園梨左、苔野真由、田川麻衣(以上学部2年)、下川遼、高橋涉、朝川千聖、木崎晴崇、重岡菜穂、東美月、藤田俊平、本門拓也、森中明音、松永あずみ、水ノ浦宗一郎(以上学部1年)、諸岡初音(九州大学文学部1年)

なお第2次調査概要は、翌年度に整理報告した⁽⁷⁾。その際の図面整理とデジタルトレースには小松義博・吉岡拓哉・池田亘(M1)が当たり、玉川剛司(別府大学文化財研究所)の協力を得た。

(5) 第3次発掘調査 2018(平成30)年度冬

2018(平成 30)年 12 月 18 日(火)~ 21 日(金)に表土剥ぎを、22 日(土)~ 24 日(月)、26 日(水)~ 28 日(金)には別府大学の遺跡調査実習(集中講義)として、その後断続的に 1 月 31 日まで考古学研究室の学生有志により

第5・6トレチの実測と第7～9トレチの発掘調査をおこない、2月7日に埋め戻した。その間2019（平成31）年1月14日には、豊後大野市の古墳文化を考える会（代表：渡辺円世）主催で現地説明会をおこなった。発掘参加者は以下の通り。

職員・教員 諸岡郁（豊後大野市教委）、田中裕介・上野淳也・玉川剛司（別府大学）、

学生 塩見恭平、高木慎太郎、（大学院2年）、吉岡拓哉、池田亘・小松義博、福岡幸博（以上大学院1年）、佐伯孝央、清水航平、末光博史（以上学部4年）、赤池麗樹、小川雄司、楠元里奈、久保園梨左、下川莉奈、菅野真由、根塚菜摘、田川麻衣、濱田泰資、篠原尚希、札元小春、松井智将、渡辺浩史（以上学部3年）、下川遼、高橋涉、朝川千聖、神田将希、木崎晴崇、重岡菜穂、末次孝亘、水ノ浦宗一郎、向井浩太、本門拓也、森中明音、松永あずみ（以上学部2年）、木林俊英、野上寛登、棚田優人、河野美帆、長田洗希、早瀬有美、末海菜月、山本紗季、吉岡琴美、吉倉奈々美（以上学部1年）、諸岡初音（九州大学文学部2年）

一般 児玉潤子（佐伯史談会） 德富孔一

遺構の図面整理とデジタルトレースには末光博史と朝川千聖、木崎晴崇、重岡菜穂、高橋涉、本門拓也が当たり、玉川剛司（別府大学文化財研究所）の協力を得た。遺物の整理には考古学研究室の学生の協力を得て、壺形埴輪の実測は田中と玉川のほか、高橋・向井・本門・棚田・河野・野上・幸稔温があたり、トレースは雅企画有限会社に依頼した。第3次調査概要は、翌年度に整理報告した⁽⁸⁾。

（6）第4次発掘調査 2019（令和元）年度冬

現地調査は諸岡、田中を主担当者に、上野、玉川が副担当であたり、2019（令和元）年12月20日（金）に表土剥ぎを、21日（土）～23日（月）、26日（水）～28日（金）には別府大学の遺跡調査実習（集中講義）として、その後断続的に1月28日まで考古学研究室の学生有志により第7～9トレチの実測と第10・11トレチの発掘調査をおこない、2月12日に埋め戻した。その間2020（令和2）年1月13日には、豊後大野市の古墳文化を考える会（代表：渡辺円世）主催で現地説明会をおこなった。発掘参加者は以下の通り。

職員・教員 諸岡郁（豊後大野市教委）、田中裕介・上野淳也・玉川剛司（別府大学）

学生 吉岡拓哉（大学院2年）、桑原政人、末光博史（以上大学院1年）、赤池麗樹、河野和輝、根塚菜摘、渡辺浩史（以上学部4年）、高橋涉、朝川千聖、植木麻衣子、木崎晴崇、重岡菜穂、高野愛理、中野直樹、原口友希、半沢裕生、福島勇馬、本田広太朗、水ノ浦宗一郎、光来出麗羅、向井浩太、本門拓也、森中明音、松永あずみ、下川遼、吉野穂香（以上学部3年）、木林俊英、佐藤愛、野上寛登、棚田優人、河野美帆、長田洗希、早瀬有美、末海菜月、山岡由季、吉岡琴美、吉満和花（以上学部2年）、佐藤綾音、田中良英、中村水琴、豊田淳之介、比嘉優希、福本都、銘苅セナ、幸稔温（以上学部1年）、諸岡初音（九州大学文学部3年）、佐伯孝央（熊本市教委）

遺構の図面整理とデジタルトレースには末光博史、根塚菜摘と朝川、高橋、野上、河野美帆、上野千尋、江口幸季、幸、大田悠人が当たり、玉川剛司（別府大学文化財研究所）の協力を得た。遺物の整理には考古学研究室の学生の協力を得て、壺形埴輪の選別と接合実測は田中と玉川のほか、根塚・高橋・棚田・河野・野上・秋山大海・幸・江口・江頭直希があたり、遺物トレースは雅企画有限会社に依頼した。第4次調査概要は、翌年度に整理報告した⁽⁹⁾。

（7）第5次発掘調査 2020（令和2）年度冬

現地調査は諸岡、田中を主担当者に、玉川が副担当であたり、コロナウイルス感染症が流行する中、合宿調査をあきらめ大学から毎日通える人数での少數参加の調査となった。2020（令和2）年12月26日（土）～28日（金）には別府大学の遺跡調査実習（集中講義）として、その後断続的に5月6日まで考古学研究室の学生有志により第10・11トレチの調査をおこなった。発掘参加者は以下の通り。

職員・教員 諸岡郁（豊後大野市教委）、田中裕介・玉川剛司（別府大学）

学生 末光博史(大学院2年)、高橋涉、朝川千聖、木崎晴崇、重岡菜穂、向井浩太、本門拓也、森中明音(以上学部4年)、秋山大海、木林俊英、野上寛登、河野美帆、片伯部凌、吉岡琴美、吉満和花(以上学部3年)、江口幸希、幸稔温(以上学部2年)、太田悠人、山田菜々美、吉田怜音(以上学部1年)

遺構の図面整理とデジタルトマスには朝川、重岡、向井、本門、森中(が当たり)、玉川剛司(別府大学文化財研究所)の協力を得た。遺物の整理には考古学研究室の学生の協力を得て、壺形埴輪の選別と接合実測は田中と玉川のほか、野上・幸・江口・江頭直希があたり、遺物トマスは雅企画有限公司に依頼した。

なお第2次調査は日本学術振興会科学研究費基盤研究(B)「阿蘇地域を中心とした古墳時代の九州島における情報伝達・文物交流の実証的研究」(研究代表者:熊本大学杉井健 jp26284122)の助成を受けた。

(田中)

【註】

- (1) 本庄昇・前田多三郎 1924『三重郷の古墳』『大分県史蹟名勝天然紀念物調査報告書』3 大分県史跡名勝天然紀念物調査会
- (2) 諸岡都 1994「重政古墳出土の壺形埴輪について」『三重史談』11 三重史談会
- (3) 諸岡都 1990『三重町の前方後円墳』『おおいた考古』第3集, p76 ~ 83
- (4) 諸岡都 1997『三重地区遺跡群発掘調査概報』II 三重町教育委員会, p8 ~ 10
- (5) 同上
- (6) その時点での重政古墳の調査総括として以下の文献がある。
諸岡都 1998『重政古墳』『大分の前方後円墳—三重・西国東地区編—』(大分県文化財調査報告書第100輯), p58 ~ 59 大分県教育委員会
- (7) 池田亘・小松義博・吉岡拓哉・玉川剛司・田中裕介 2019「重政古墳第2次調査」『豊後大野市内遺跡発掘調査概要報告書—平成29年度調査—』9 豊後大野市教育委員会
- (8) 末光博史・田中裕介 2020「重政古墳第3次調査」『豊後大野市内遺跡発掘調査概要報告書—平成30(2018)年度調査—』10 豊後大野市教育委員会
- (9) 末光博史・野上寛登・田中裕介 2021「重政古墳第4次調査」『豊後大野市内遺跡発掘調査概要報告書—令和元(2019)年度調査—』11 豊後大野市教育委員会

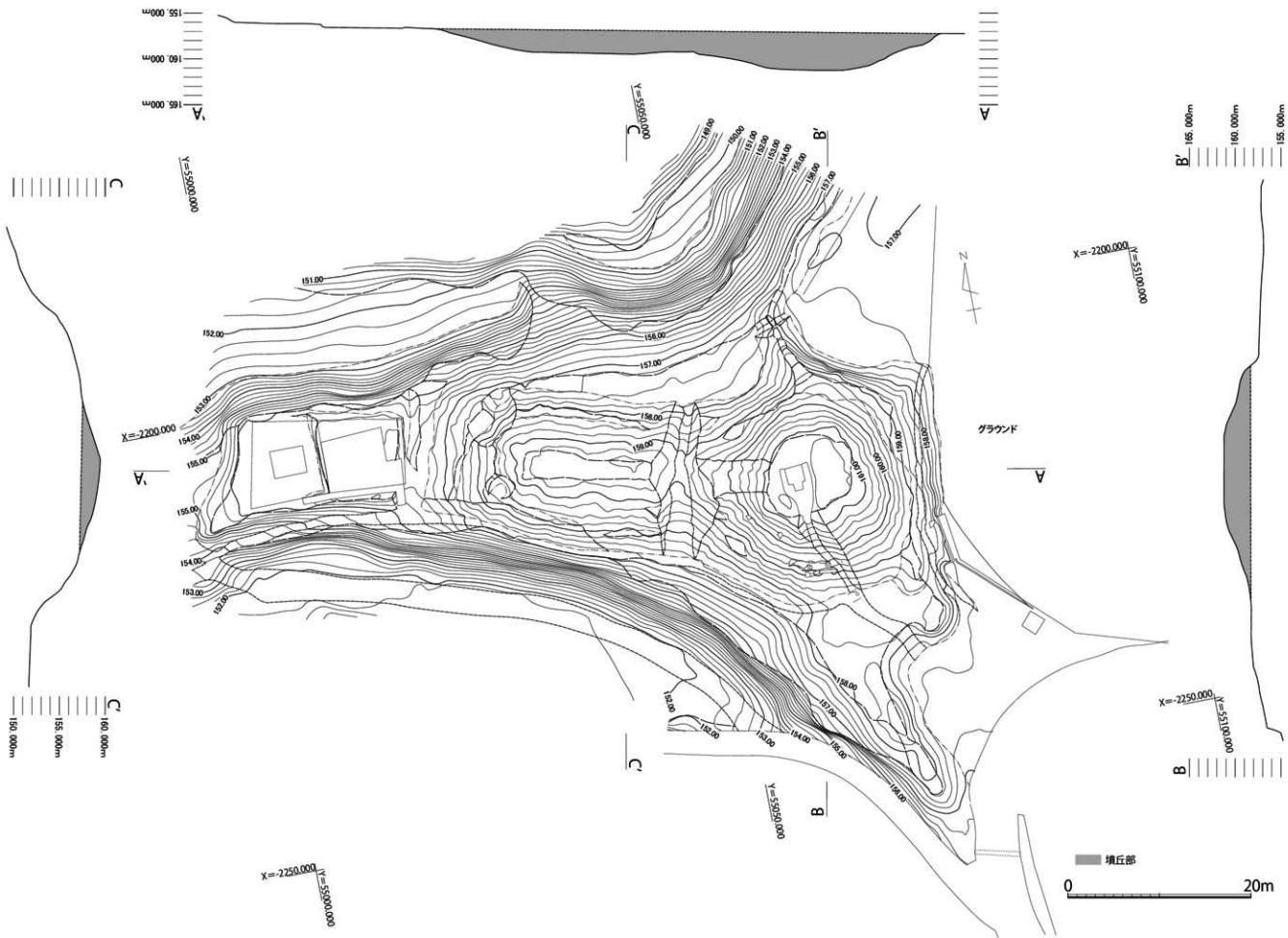
4. 墳丘測量調査

(1) 測量調査に至るまでの経過

重政古墳は、豊後大野市立三重中学校が所在する重政原と呼ばれる台地から東西側に張り出した尾根上に立地する前方後円墳である。古墳の主軸は、ほぼ東西方向で前方部を東側の三重盆地に向か築造されている。重政古墳はそれまで、諸岡氏が作成した実測図(諸岡 1990)のみであったが、1994(平成 6)年に三重町教育委員会(現豊後大野市教育委員会)が墳丘測量調査を実施した。その際に作成された測量図は、25cm 間隔の等高線図である(諸岡 1995・1997)。2010(平成 22)年度から市内所在の前方後円墳を対象とした、精緻な測量図の作成および、墳丘規模・周溝の有無等の確認の発掘調査を目的とした総合調査を実施している。別府大学文化財研究所は、これらの調査の一環として墳丘測量調査による測量図作成に協力しており(玉川 2012・2014・2015・2016)、今回は重政古墳がその対象となった。

実施した墳丘測量調査は、デジタル機器を用いた変化点測量法(玉川 2003・2004)を行った。調査実施にあたり、あらかじめ市教委が準備した計 2 本の世界測地系の座標による基準点⁽¹⁾をもとに必要に応じて補助杭を設定した。

墳丘測量調査は、別府大学文化財研究所の玉川剛司の指導のもと、塙見恭平、高木慎太郎、竹永昂平(別府大学大学院文学研究科 1 年)、井手基子、吉岡拓哉(別府大学史学・文化財学科 4 年)、佐伯孝央、清水航平(同 3 年生)が参加した(所属等は 2017 年 4 月時点)。なお、測量調査期間は、2017(平成 29)年 5 月 12 日から 6 月 28 日の計 9 日間であった。測量範囲は、墳丘部を中心に 4866.829 m²を対象とし、計測点は墳丘部及び周辺地形を合わせると計 3,983 点であった。なお、今回の測量調査の成果として、25cm 間隔の等高線図を作製した(第 56 図)。以下、調査の成果について述べていきたい。



第56図 重政古墳填丘測量図 (1/400)

(2) 墳丘測量の内容と成果(第56図)

後円部 墳端の現状をみると、北側に幅1m程の土橋状に削平を免れ、墳丘斜面と墳端の一部が確認できるものの、その西側からくびれ部にかけては、墳端と墳端から高さ1.5mにかけての墳丘斜面が里道の造成により大きく削平されている。また、土橋状に残る墳端部分から墳丘の南東側にかけては、グラウンドの造成により墳端及び墳丘斜面が削平され、グラウンドから1.5mの高さまでの墳丘斜面が改変を受けている。一方、墳丘南側から南側くびれ部にかけては、墳端ラインと等高線が並行にめぐっていることから、比較的良好に遺存していると考えられる。しかし、墳頂部にまで続く参道付近は、墳端ラインが直線的となっており、その上位の等高線も墳端ラインと並行するように直線的にめぐっていることから、墳頂部の石殿に取りつくための参道を設ける時に改変されたものと考えられる。また、墳丘南側からくびれ部にかけての墳端ラインは、75cmほど高低差があることから、里道造成にともなう削平または、客土による盛土がなされていると考えられる。

墳丘斜面については、段築の痕跡と考えられるテラスが4箇所確認できる。これら4箇所のテラスの内、くびれ部側の標高159.000m前後の等高線に沿って、墳丘北側に幅2m、長さ3m、南側の斜面に幅1.4m、長さ3mの2箇所のテラスがみられる。また、墳丘北側では、土橋に残る墳丘斜面から東側にかけて、標高159.000m～159.500mの等高線に沿って幅2mのテラスが確認できる。南側の参道から西側でも、標高159.250m～159.500mに沿って幅1m、長さ5mのテラスがみられるが、鳥居の破片や石材が散乱していることから、本来あつた平坦面を利用したものと考えられる。これら4箇所のテラスは、4箇所とも標高159.000mの等高線前後であることから、段築である可能性が高いと考えられる。また、墳頂部から西側のくびれ部にかけての斜面では、隆起斜道が確認できるが、両くびれ部をとおる里道の造成により掘削状に削平を受けている。

墳頂部は石殿が構築されているが、上端ラインが直径10mほどのほぼ円形にめぐっており、上端ラインよりも下位の等高線も大きく乱れていないことから、良好に遺存しているものと考えられる。墳頂部の最高標高は、161.349mで後円部高は3.1mである。

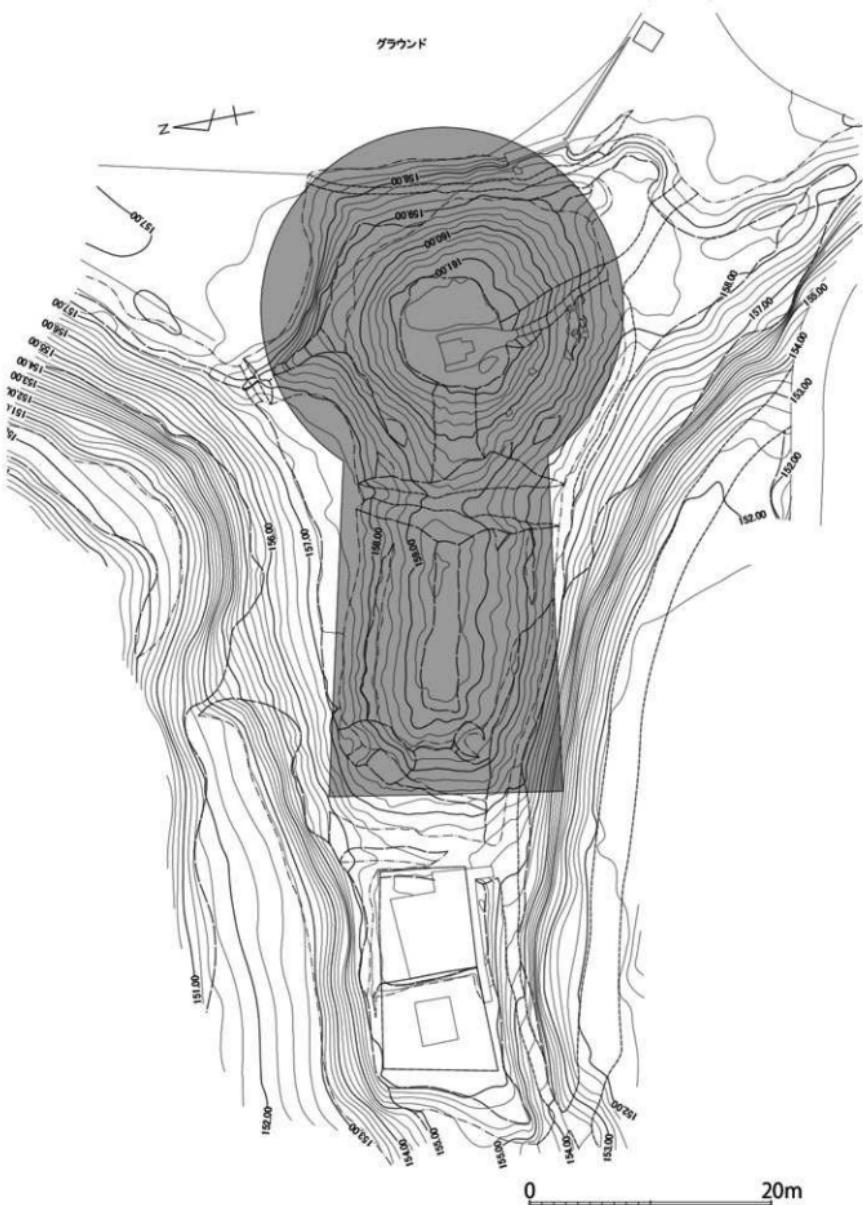
以上の状況から後円部径について考えたい。まず、墳丘北側の土橋状に遺存している墳端(標高158.250m)。次に、墳丘南側の里道が段落ちする東側上段の等高線158.250mを通る墳端。これら2箇所の墳端を通る、直径30mが後円部径であると考えられる。

後円部の測量成果をまとめると、後円部径30m、後円部高3.1mを測る規模で、二段築成であったものと想定される。

くびれ部 くびれ部は、後世の里道造成により、最大6.8幅m、深さ0.3mの掘削状に削平されており、現状では本来のくびれの位置も明確には確認できない。しかし、後円部の後円部径と等高線の形状から、くびれ部の規模について考えていきたい。前述した後円部の後円部径と、前方部から廻る等高線をみると、南側くびれ部については、掘削状の上端ラインよりも2.5mほど後円部側で、標高158.250mの等高線に接する箇所であると考えられよう。一方北側のくびれ部は、里道の後円部側の上端ラインと現状の墳端が接する地点から1.3m後円部側付近がくびれ部となる。墳丘の南北のくびれ部同士を結ぶと、現状のくびれ幅は16mとなる。しかし、後円部が大きく削平され、さらに前方部から続く墳端ラインと等高線がくびれ部に向かうにつれて墳丘側に抉れしているなどを考慮すると、現状のくびれ位置である可能性は低いものと考えられる。むしろ、南側のくびれ部の位置を墳丘主軸で反転した、位置同士を測ると16.9mとなり、この数値がくびれ幅となる可能性が高いと思われる。

くびれ部の墳頂部をみると、標高160.000m以上の等高線の間隔は狭く、159.750m以下の等高線の間隔は広くなっていることから、くびれ部墳頂部の標高は159.750mで、1.75mがくびれ高であると考えられる。またくびれ部の段築については、確認できなかった。

くびれ部の位置については、発掘調査による確認が必要であろう。



第57図 重政古墳墳丘測量図(測量復元案1/400)

前方部 前方部南側は、6m下の畠や里道を掘削する際に、墳端の大半は消失しており古墳築造当初の状況はほとんど残っていない。しかし、くびれ部の堀割状の里道掘削に伴う上端ラインと現状の墳端が接する地点から隅角に向けて6m先までは、墳端ラインの等高線間隔が墳頂部からほぼ等間隔にめぐり、墳端ラインと並行していることから、墳端ラインが比較的良好に遺存しているものと考えられる。一方、前方部北側の墳端ラインは、復元したくびれ部側から隅角方向に14.3mまでは墳端ラインが墳丘側に若干抉れているが、標高157.250～157.500mの等高線前後で並行し、前方部端に廻っていることから、比較的良好に遺存していると思われる。

また、墳丘斜面の段築についてみると、前方部南側で、くびれ部の堀割状の里道の西側上端ラインと158.000mの等高線が接する地点から、長さ6.3m、幅0.6mのテラスが確認できた。また、このテラスの2.7m西側の地点から前方部端側の風倒木痕に接する地点までの範囲に、幅0.8mのテラスがみられる。前方部北側では、くびれ部の堀割状の里道の上端ラインから1.8m隅角側に進んだ地点から、隅角の堀削ラインに接する地点までの範囲でテラスが確認できる。さらに前端部側では、前方部北側で確認したテラスが接する風倒木痕と南側隅角の堀削ラインとの間に、幅0.5mほどのテラスが確認できた。これらのテラスは、ほぼ同じ標高(158.000m～158.500mの等高線間に並行)でめぐっていることから、一段目の段築の痕跡であると考えられることから、二段築成であると想定できる。

前端をみると、先ほど述べた段築のテラスよりも4.3m前端側にテラスがみられる。このテラスの下端ラインは、前方部南側では、里道による掘削を受けその上端ラインと157.250mの等高線付近で接している。一方、前方部北側では、風倒木痕の上端と下端ラインが接する地点に合流している。この下端ラインが前方端の墳端ラインである可能性が高い。つまり、前方部長は27.5mを測り、この前方端の墳端ラインと復元した後円径までの55mが墳長の数値となる。

また、隅角についてみると、前端の墳端ラインを北側に延長し、さらに前方部北側の墳端ラインを延長した先で合流する地点が本来の隅角であると考えられる。この隅角と墳丘主軸で反転復元すると、前端幅19.3m程になる可能性が高い。墳端ラインよりもさらに上段には、幅0.5m程のテラスが標高158.500mの等高線前後でみられる。風倒木痕により現状では接続していないが何らかの古墳に伴う痕跡である可能性がある。発掘調査による確認が必要となろう。

墳頂部については、幅2.7mと狭いのが特徴で、等高線と傾斜変換線に大きな乱れもなくほぼ平坦であることから、良好に遺存していることが窺える。前方部高は2mである。

(3) 測量調査のまとめ

墳丘測量調査において、各部で確認できた現状で比較的良好に遺存していると考えられる墳端ラインや、墳丘主軸で反転した想定などから、重政古墳の規模は以下のとおりとなる。墳長55m、後円部径30m、くびれ幅16.9m、前方部長27.5m、前端幅19.3mの規模で、後円部高3.1m、前方部高2mの規模で、後円部、前方部とともに二段築成の前方後円墳であると考えられる(第57図)。また、重政古墳は、これまで豊後大野市で測量調査をしてきた前方後円墳と同様、前方部があまり広がらず、低く平坦であるという特徴を持つ。これは、第57図の墳丘測量図からもわかるが、測量で計測した座標から作製した3D図(第58-1図)⁽²⁾でも明瞭に確認できる。

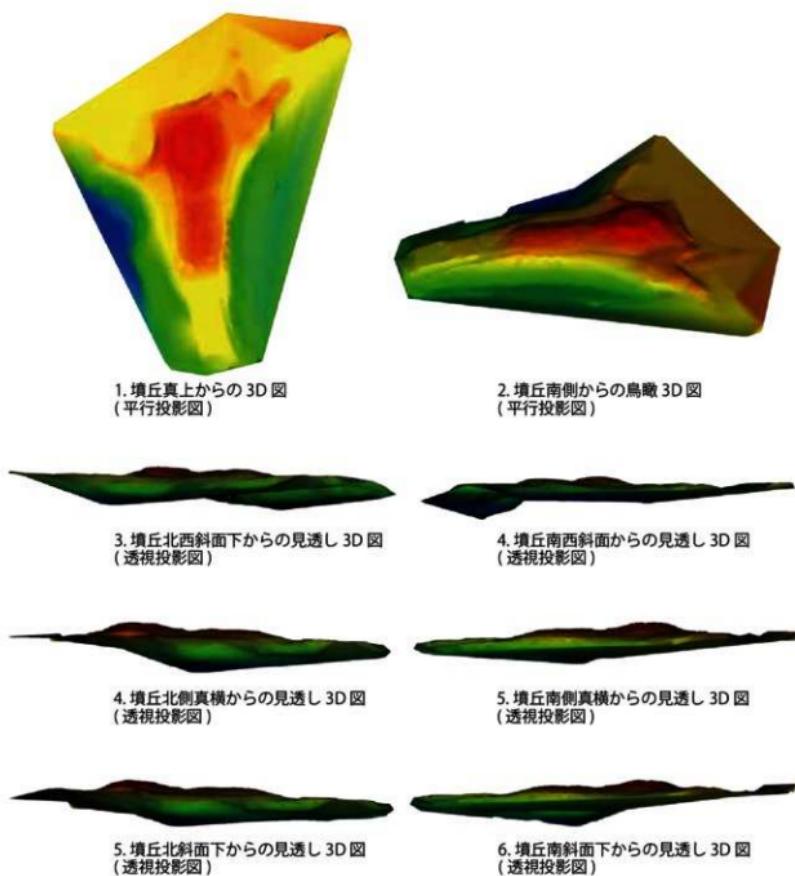
さらに、重政古墳の立地についても考えたい。重政古墳が前方後円墳であることを視認させるためには、台地または丘陵上の縁辺部に築造されているという想定⁽³⁾から、第58-3～6図でもわかるように後円部側の東側や前方部がある西側からでは前方後円墳であることは認識することは困難である。つまり、北東から北西方向か南東から南西方向の範囲に認知させたい対象があった可能性がある。これらを裏付けるように、重政古墳から1.2km北東方向には道ノ上古墳が、1.4km南西方向には秋葉鬼塚古墳が立地しており、両古墳のほぼ中間地点に立地している。それぞれの古墳間には台地や尾根等の障害物がないことから、築造当時は重政古墳から両古墳が視認できていた可能性が高いものと考えられる。今後、墳丘形態や築造時期、墳丘築造の選地⁽³⁾について総

合的に考えていいたい。

(玉川)

【註】

- (1) それぞれ後円部の墳頂部に K-1 とくびれ部付近の墳頂部に K-2 設置。
K-1 : X=-2217.467, Y=55057.791, Z=161.216, K-2 : X=-2210.870, Y=55028.525, Z=158.814
- (2) TIN データにより 3D 図を作製。TIN データとは、不規則三角形網(Triangulation Irregular Network の略)というデータで、地形表現に優れているという特徴がある。点群からそれぞれにもっとも近い三点とつなげ、三角形の集合体で立体物を表現するものである。
- (3) 古墳築造に当たり立地条件を決定する概念で、良好な自然地形を選定する側面のみならず、当時の政治的な情勢をも包有する地域のランドマーク的な性格をもつものである。今後、大野川中流域と上流域の集落及び古墳との関係性をふまえて研究することにより、当時の奥豊後の社会構造が見えてくるものと思われる。



第58図 重政古墳3D図

5. 確認調査

各トレンチは墳丘の規模を確定するために墳端の検出、つまり葺石、基底石と周溝の発見、および段築・埴輪の配置の状況を含む墳丘構造の調査の二つの目的をもって設定した。目的と達成状況は表3のとおり。

第3表 重政古墳の調査区一覧表

調査区	調査年次	位置	周溝	墳端	第1段平坦面	第2段斜面	備考
第1トレンチ	第1次(1994)	後円部南側	確認	未確認	—	—	周溝未完掘
第2トレンチ	第1次(1995)	後円部東側	削平	削平	削平	削平	造成による
第3トレンチ	第1次(1995)	後円部北側	削平	削平	削平	削平	造成による
第4トレンチ	第2次(2017)	後円部南側	○	○テラス	○	不明瞭	
第5トレンチ	第2・3次(2017・18)	南くびれ部	近代の道路遺構	破壊	△	土壤	近代の道路と土壤により消失
第6トレンチ	第2・3次(2017・18)	前方部前端	△	○テラス	○	○	二段築成
第7トレンチ	第3・4次(2018・19)	南くびれ部	△	○テラス	○	○	二段築成
第8トレンチ	第3・4次(2018・19)	前方部前端	△	○テラス	—	—	
第9トレンチ	第3・4次(2018・19)	北くびれ部	近世の造成	破壊	○	○	二段築成
第10トレンチ	第4・5次(2019・20)	前方部北側面	近世の造成	破壊	○	○	二段築成
第11トレンチ	第4・5次(2019・20)	後円部北側	○	○テラス	△	○	二段築成

基本層序 古墳群の造られた丘陵は阿蘇4溶結凝灰岩の堆積浸食により形成された丘陵の上にローム層が堆積したものである。基盤層はこの黄色のローム層が風化して軟化した土質である。現表土の腐植土層を第1層、その下の自然流土地層を第2層、盛土等の人為堆積層を第3層、基盤のローム層を第4層とした。このような層序の間には、周溝など基盤層を掘削する際に生じた境界面としてA面、盛土・葺石等を造成した際に生じたB面、墳丘の自然崩壊によって生じたC面、近世・近代の道などの掘削によって生じたD面などの、層序理解のポイントとなる境界面が存在する。

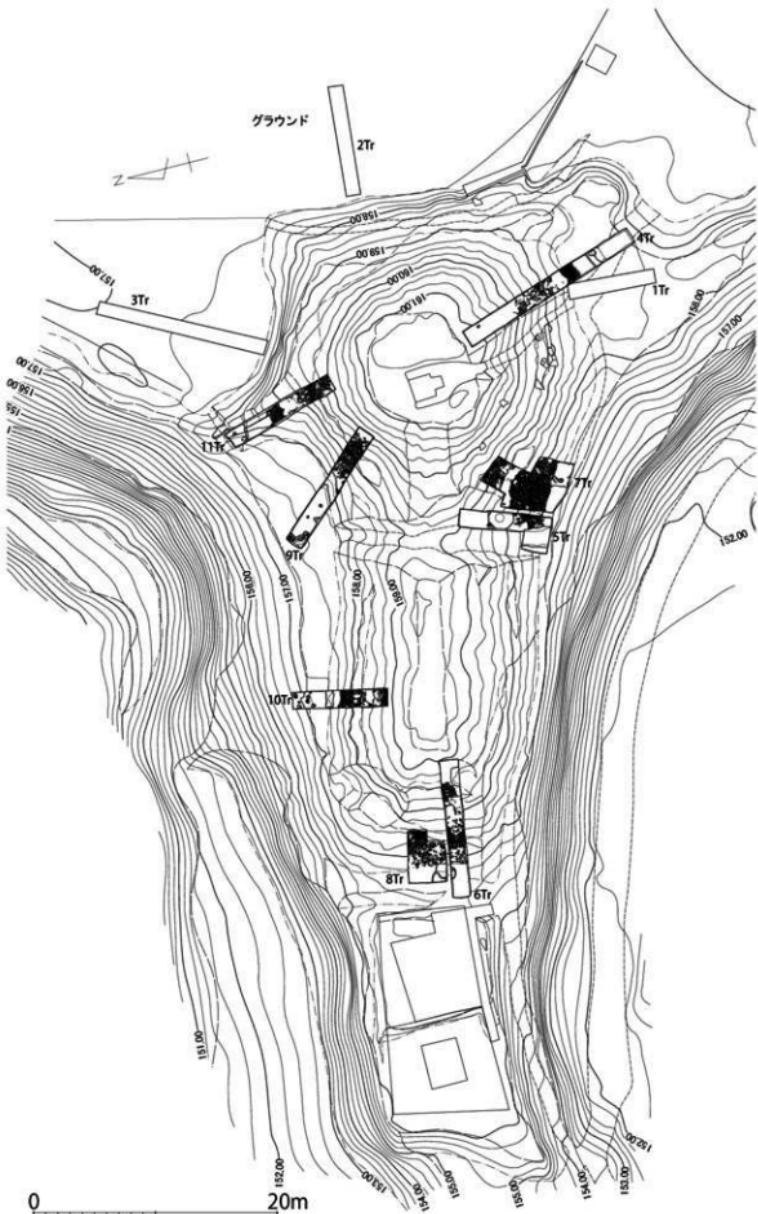
1990年代に市町村合併前の三重町教育委員会によって調査された第1～3トレンチについては調査概報をもとに再構成する⁽¹⁾。

(1) 第1トレンチ(写真図版9)

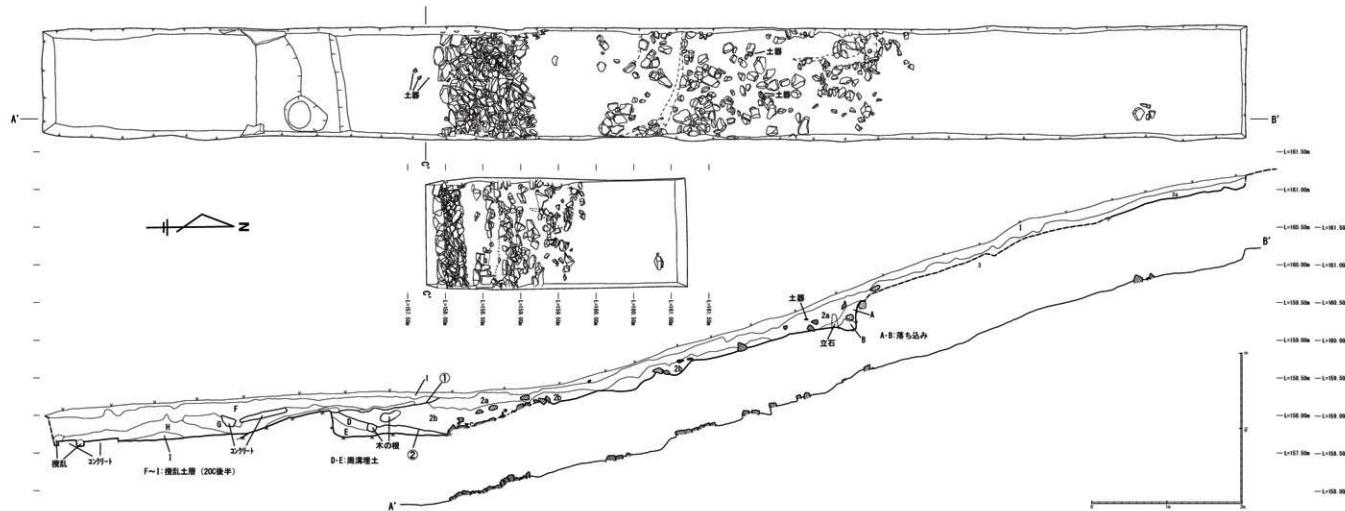
1994(平成6)年度に後円部南側の周溝と墳端の確認を目的に設定されたトレンチである。墳裾に当たる位置から「葺石とおもわれる角礫が崩れ落ちた状態で検出でき、浅く狭い周溝状の掘り込みが確認できたが、外側が攪乱・造成により遺構保存状態は良くない。」とされる。2017(平成29)の第2次調査でこのトレンチを再検討するため、接する位置に第4トレンチをもうけた結果、墳端と周溝を確認できた。第1トレンチで墳端が確認できなかつたのは、周溝掘り下げの深度があさく、遺構面に達しなかつたためであると考えられる。

(2) 第2・3トレンチ(写真図版9)

中学校運動場の造成により墳丘が一部失われたと考えられる位置にいたれた2本のトレンチである。いずれもすでに削平がひどく、墳端はおろか周溝の痕跡も発見できなかった。2019(令和元)年度の第4次調査で行った第11トレンチの調査において検出した周溝の底面の標高は、グランド現表面より高い位置にあり、このトレンチの調査結果を検証することになった。グラウンド造成の際に削平されたものと考えられた。



第59図 重政古墳調査区配置図 (1/400)



番号	色調・性質	地物名	層位	備考
1層	褐色土	毛葉多い	表土	-
2層	暗褐色褐色粘土	角礫と小石點々含む	二分洪土	黒石洗出後の堆積
3層	褐褐色粘土	角礫と断続的塊状多く含む	洪土	堆溝帶、道筋線上に有り
4層	褐色粘土	-	堆疊帶の上位と地盤無い	-
5層	褐色土	角礫（底部）含む	P1・1層土	島嶼の沖合か？
6層	褐色土	角礫（底部）含む	P1・2層土	-
7層	褐色土	-	現代の堆土	-
8層	褐色土	角礫（底部）含む	堆積土	堆積带の上位と地盤無い
9層	褐色土	角礫と「さく鐘乳」含む	堆積土	周溝帶の人为的堆土
10層	褐色土	角礫と「さく鐘乳」含む	堆積土	周溝帶の人为的堆土
11層	褐色土	角礫と「さく鐘乳」含む	堆積土	周溝帶の人为的堆土

第60図 重政古墳第4トレンチ (1/50)

(3) 第4トレンチ(第60図 写真図版9・10)

後円部の墳端と斜面における葺石の状況の確認、墳丘斜面における段築の有無、周溝の存否確認のため後円部南側の斜面から外周にかけて幅約1.5m×長さ11.5mの調査区を設定した。その際第1次調査の第1トレンチと重複しないように設定した。

周溝周辺の擾乱 表土第1層を剥ぐと、トレンチ南側の墳丘外平坦面にはコンクリートなどが投げ込まれた、ごく最近の擾乱がみつかった。その境界面が①である。F～I層は擾乱の互層である。

墳丘構造 この擾乱層を除去すると、角礫、小土器片が含まれた軟質な暗黄褐色の層(流土第2a層)が検出された。これは斜面上部から落下した土砂と葺石の堆積と判断された。これを除去すると、墳丘斜面下部では葺石直上に堆積した黒褐色土層(流土第2b層)が露出了。この層には大量の葺石が含まれ、擾乱層の下から現れた墳丘外の基盤層の高さよりも下に堆積しているので、周溝内の埋土と考えられた。いっぽう墳丘斜面中央からは一見平坦面のような堀込みが見つかり内部にやわらかい二次堆積層(A・B層)があり、さらにその掘り込みの中に縦方向の立石の挿入があり、木柱を固定した後世の柱穴と考えられた。この付近には現在石製の鳥居があるので、この掘り込みは、石製以前の木製の鳥居がこの位置に存在した可能在を示すものと推定される。斜面上方では葺石はほとんど流出し、盛土第3層と考えられる土層が露出した。一段目段築平坦面は検出されず、第2層形成中に削平された跡(破線部分)があり、一段目の段築平坦面は削平をうけたと考えられる。

周溝と墳端 トレンチ下部では第2b層を掘り下げると墳端と一段目斜面の葺石および幅2.5mの周溝が検出された。墳端部の根石は長さ20～30cm程の角礫であるに対し、その他の葺石はやや小さく20cm以下となっていた。墳端部は周溝幅の三分の一まで平坦に葺石を敷く墳端テラスが約80cmほど続き、その先端に根石が並んでいた。テラスと一段目斜面葺石の変換ラインには根石列ではなく、葺石はそのまま敷石テラスから葺き上げている構築状態であった。

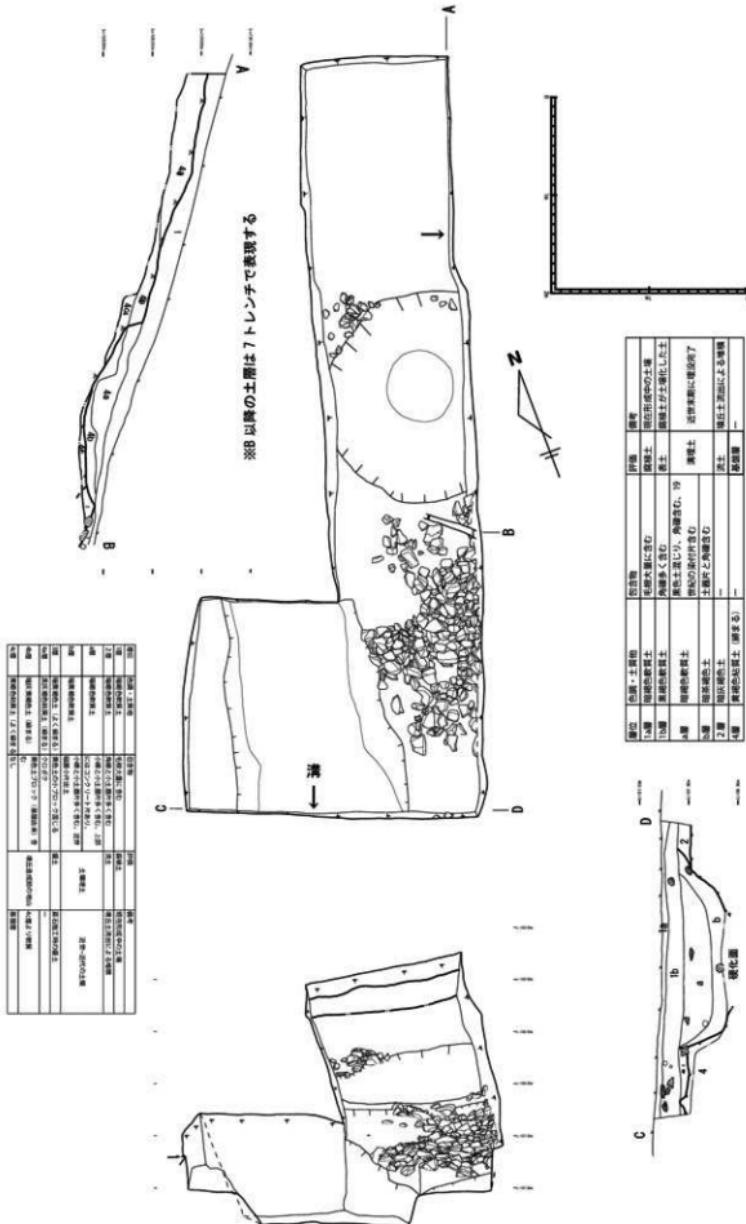
周溝内には墳丘斜面から動いた葺石とともに自然に崩壊した堆積土からなっている黒褐色土第2b層が堆積していた。その下はD・E層からなる埋土があり、この層が墳端部の根石の下に潜り込んでいたため、いつたん掘削した溝に埋土を行って周溝の底を整形したものと考えられ、その境界面②が葺石完成時の周溝の底面であると考えられる。さらに、その層を完掘すると、墳丘完成以前の周溝の垂直な掘り込み跡が確認された。

出土遺物と出土状態 流土第2a層および第2b層から壺形埴輪の各部の破片が出土している(第72図)。いずれも、10cm以下の小破片で、葺石上に散在しており、供獻当初の位置を示すものではなく、墳頂などに置かれていたものが壊れて流れ落ちたものと推定される。

(4) 第5トレンチ(第61図 写真図版10)

くびれ部の位置を確認することを第一の目的に、くわえてくびれ部の周溝、段築の有無、斜面の葺石の状況を確認するため、墳丘測量の結果から南側墳丘の前方部と後円部の接合部と想定される箇所に、幅1.5m×長さ8mの第5トレンチ調査区を設定した。さらに調査期間の後半に、西側に幅1.5m×長さ2.4m調査区を拡張した。結論を先に述べれば、実際のくびれ部はさらに後円部寄りで、しかも5トレ調査区には後世の切通の道路跡と、それに付随する土壤により墳丘が大きく損壊し、東側に第7トレンチを設定することになった。

葺石 トレンチ南東部において、前方部南側第一段斜面に当たる位置から人頭大の角礫を用いた葺石が確認できたが、墳丘上部にあたるトレンチ北側では、土壤の掘削や削平など二次的な改変により葺石は明確には確認できなかった。しかし一段目斜面の葺石とそこから墳裾にのびる墳端テラスの葺石を検出した。しかし葺石端の根石についてはすでに消失していた。



第61図 重政古墳第5トレンチ (1/50)

近世の遺構による破壊 墳丘一段目の平坦面にあたるトレチ中央部から円形の土壤の掘り込みが検出され、その上層からは近代のカミソリらしき金属片が見つかり、後世の掘り込みが基盤層まで達していることが判明した。また、墳丘下部の調査区拡張部からも、前方部墳丘に対して直交方向に走るような溝状遺構を検出した。堆積土中から近世の陶磁器片を確認した点に加えて、測量図に見える溝状の緩い落ち込みの位置と一致する点から、後世の小規模な里道掘削によって切り通された溝と考えられる。上記の掘り込みや溝によって、その遺構範囲内の葺石は取り除かれており、段築の存在は不明確である。周溝もまた調査区内の範囲からは検出されなかった。

層序 まず腐葉土の堆積層第1層があり、その下層は墳丘上部と下部で堆積の状況が異なる。墳丘上部では、すぐに黒色土が露出する。これは墳丘造成前の地山であり基盤層第4層と解釈した。墳丘下部では、腐葉土層の下位に盛土の流土と思しき黒褐色土層(第2層)の堆積が見られ、その層中から土師器・埴輪片や、葺石を検出した。この層の下位面からは、築造当初の葺石が検出された。調査の結果、第一の目的であったくびれ部の位置は確認することが出来なかつた。

出土遺物と出土状態 壺形埴輪が破片にして數十点に上り、前述した通り黒褐色土層(流土第2層)に多く、一部腐食土層にも見られ、集中した様子はない。

(5) 第7トレチ(第63図 写真図版10~12)

第5トレチの東側下部に第7トレチを設置し、当初の目的のくびれ部の確認のため、上底が長く下底が短い台形状のトレチを設定した。その後一段目斜面及び平坦面、二段目斜面とくびれ部を確認するため上方北側と東側の二方向に合計2回の拡張を行った。最初に設定した区画の北部に一段目平坦面と二段目斜面の検出を目的に正方形の拡張(1回目=7トレ北拡張区)を行い、さらにトレチの東部に拡張(2回目=7トレ東拡張区)を行つた。

墳丘斜面の堆積状態 最初に設定した区画を掘り下げるところ葉土(第1層)の下の流土第2a層から角礫が出土し、その層から壺形埴輪の小片が出土した。流土層を下げるところ端テラスと考えられる根石と葺石及び一段目斜面の葺石も確認できた。北拡張区では、腐葉土第1層を掘り下げるところ第2a層があり、一部上部から流れ落ちた葺石と思われる角礫と壺形埴輪片が出土している。流土層第2b層の掘り下げを進むと一段目斜面上りも比較的大きな葺石が確認でき二段目斜面と根石が検出できた。この拡張区では、流土層や一段目平坦面直上から多くの壺形埴輪片が出土し、転落してきた壺形埴輪がそこでおりかさなって積れた出土状況から数個体分あることが確認できた。東拡張区では、腐葉土第1層を掘り下げ、流土層の下層(第2b層)では1段目斜面と考えられる葺石が確認できたが、後世の削平により墳端テラスは確認できない状況であった。

墳端と段築 第7トレチの調査結果として、墳端テラス、一段目斜面、一段目平坦面、二段目斜面、くびれ部の位置を確認することができ、それに伴う根石や葺石も良好な保存状態であった。墳端テラスは、前方部側は墳端から南部に約1.2mの範囲で広がり、根石も確認することができた。テラスの敷石についても密度が高く、角礫が主に用いられ円礫も少数であるが用いられている。一段目斜面については、墳端となる根石(aライン)から約2m北側で一段目斜面の葺石が確認できない状況であり、一段目平坦面となるbラインまでの約0.8mの範囲で葺石が確認できず、一段目斜面と一段目平坦面の傾斜変換ラインは確定できなかつた。その部分は後世流出したものと考えられる。bラインからcラインは残りの一段目平坦面と考えられる。一段目平坦面は、3cm~14cmの大いな小礫が多く散布し、第6トレチの一段目平坦面と同様の標高が確認できた。この平坦面では、特に出土遺物が多く、流土第2層に壺形埴輪の破片や底部・頭部の出土があり、上部から流れ落ちたと考えられる。一段目平坦面で確認できた4個体の壺形埴輪(第63図1~3・第70図5)は平坦面より底部が5cm~10cm以上で浮いて出土していることから墳頂などの上位から流れ落ち一段目平坦面に堆積したものと思われる。壺形埴輪の堆積の中に赤色顔料を内部に厚くつけた2個体の土師器甕が含まれていた。壺形埴輪とともに墳頂部から流

れ落ちたものと考えられる。cラインから上部は二段目斜面であり、斜面に伴う根石と一段目斜面の葺石はより大きな角礫が使用されている。くびれ部に関しては、平面図に矢印で示したところがトレンチの東部・西部で葺石の大きさが変化するラインでもあり、矢印の東は後円部、西は前方部と判断した。くびれから後円部側では一段目の墳端の根石も墳端テラスもすでに削平されていた。また周溝に関しては、第7トレンチでは確認することができずトレンチ東部の後円部と考えられる箇所では削平により周溝の確認ができなかった。

出土遺物と出土状況 第7トレンチで底部や胴部など壺形埴輪が出土し、葺石直上で少量の壺形埴輪片が確認されている(第69~73図4.22.24.29.36.39.40.42.44)。北拡張区では、他のトレンチよりも遺物の出土点数が多く、赤色顔料が付着した土師壺や壺形埴輪が一段目平坦面のある一定の範囲で同一個体が出土している(第69~73図1~3.4~10.18.25~28.45.46)。また、流れ落ちた葺石にまじり多数の壺形埴輪片が出土している。

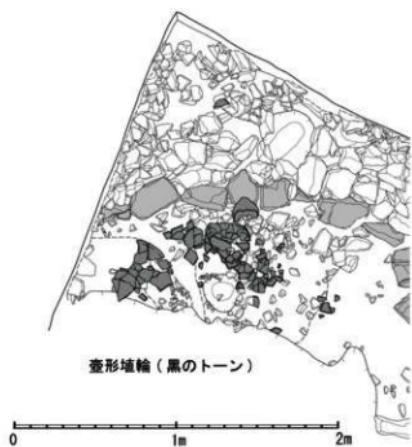
(6) 第6トレンチ(第64図 写真図版10・11)

前方部の墳端と段築の有無、および周溝の存在を確認するための調査区であり、前方部西側の前端斜面に幅1.5m×長さ12mの範囲でトレンチを設定した。

墳端と壺丘斜面 トレンチ全体で葺石が確認でき、墳端テラスを形成する敷石、墳端から一段目斜面を形成する葺石や根石、一段目平坦面の敷石、二段目斜面の葺石と根石が順次検出された。第64図のaラインより西は墳端テラスであり、西側に行くほど上端の葺石よりも比較的大きくなり、石の平坦面を上に向けて並べている。その西では敷石は検出されず、50cm幅程度の近世の土坑が確認された。この土壤の続きは第8トレンチでも確認されている。また第4トレンチのような周溝は確認できなかった。一段目斜面では、面をそろえた大型の角礫を横置きして並べたaラインの石列を墳端の根石と判断した。根石付近は二段目斜面と一段目平坦面の角礫と比べ葺石が比較的大きい。また一部後世の土坑(風倒木か?)による破壊も見られる。トレンチの東側では一段目平坦面とそこから上方に伸びる二段目斜面の葺石があらわれた、傾斜が変化するcラインでは石の目地が通つておらず、平坦面の敷石を行ってから、二段目斜面を葺きあげたことが観察された。平坦面には拳大の礫を敷く詰めたなかに3cm大の砂利石のような小さい円礫の集まる箇所が2か所見つかっている。壺形埴輪をすえた場所の可能性もあるが、土器片がなかったので断定はできない。一段目と二段目の斜面には後世の掘削も所々に見られ、bライン付近の西側は、1段目平坦面から流失した角礫である可能性が高く、流れ落ち堆積したものと思われる。

層序と埋没過程 まず腐葉土である暗茶色土層(第1層)、続いて墳丘が崩れて堆積した流土第2層である。その下層(2b層)はトレンチの上部と下部で堆積が異なる。そしてトレンチの上部では、標高157.50cm付近から上は盛土層(第3層)、それより下のトレンチ下部では葺石の下に地山となる明茶褐色土層(第4層)の堆積が見られる。

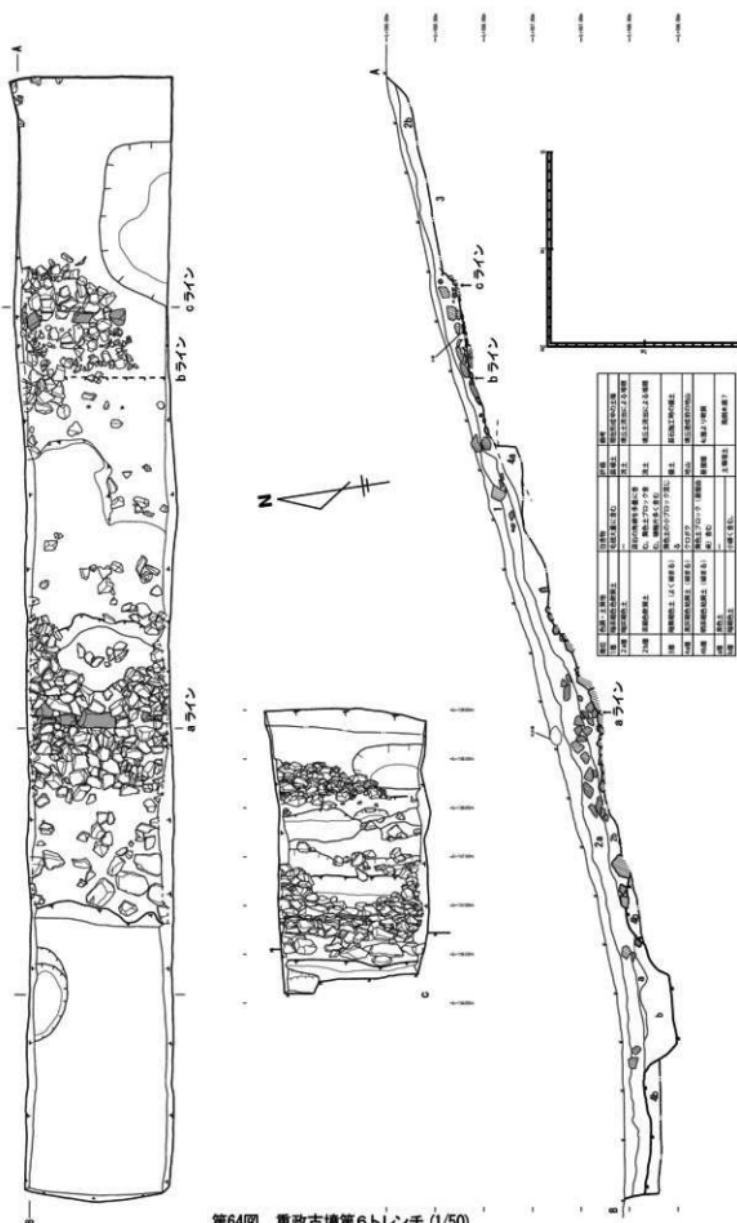
出土遺物と出土状況 壺形埴輪の破片が出土している。遺物出土状況は、葺石の集中した箇所からの出土が



第62図 重政古墳第7トレンチ出土状況(1/30)



第63図 重政古墳第7トレンチ (1/50)



第64図 重政古墳第6トレンチ (1/50)

多く、調査区南側の墳端にかけて土器片が多く出土し、壺形埴輪の口縁部や頸部などが出土している。

調査結果 前方部前端を区切る周溝は確認されなかった。墳端の位置は確定できたが、墳端テラスの平坦面の広がる範囲などを特定することができなかつたため、北側に第8トレチを設定して調査を続行した。

(7) 第8トレチ（第65図 写真図版10・11）

本調査区の目的は、前方部の墳端と段築、周溝の有無の確認と第6トレチで不明確であった前端テラスの先端を確かめるため、第6トレチの北側に隣接するように幅4.2m×長さ4mの範囲の調査区を設置した。

層序 腐植土第1層を掘り下げる土第2層になり、葺石や壺形埴輪の破片が出土していく。この土層を掘り下げるトレチ下部では、基盤第4層が確認され葺石などは検出できなかつた。トレチ上部の方では、盛土第3層上に密集した葺石が確認でき壺形埴輪の破片なども出土している。

墳端の構造 墳端と墳端テラスが確認でき、それに伴う一段目斜面の根石や葺石も検出され、東側から西側にかけて葺石の密度が低くなっていく状況であった。トレチ東端のaラインは目地の通った石列を発見し、そのラインで傾斜角度が変化することから墳端の根石と考えられ、この根石を境に一段目斜面の葺石が小型化し、5cm～7cm大の葺石が墳端部より東側で多数見られた。葺石の多くは、円礫も含まれるが角礫が大半を占めている。ここで確認できた墳端部の根石は、第6トレチで検出されている墳端部の根石と同様のaライン上に位置している。次に、aラインとbラインの間は墳端テラスと考えられ、構成する根石と敷石が確認できた。敷石は、一段目斜面の葺石より密度が低いが、大ぶりな円礫や角礫で構成されている。またトレチの南側は、木の根により葺石の残存状況が良好ではなかつたが、根石に関しては、第8トレチでは、bライン上で根石と考えられる大型角礫の並びが確認できた（トーンの石）。このことから墳端部aラインから西側に約1.5mの範囲で墳端テラスを形成していたと考えられる。bラインより西では、流れた葺石の堆積と幅約1m×長さ1.5mの土坑が確認できたが、土坑の時期は不明である。また周溝については、第6トレチと同様に確認できなかつた。

遺物の出土状況 壺形埴輪の破片が調査区全体から確認でき、土第2層、特に下部の第2b層から壺形埴輪の頸部と壺形埴輪の小破片が出土している。葺石の直上（第72図32）や基盤第4層の直上からも壺形埴輪の破片が出土し、頸部や胴部の破片が多く占めている。いずれも前方部の墳頂あるいは一段目平坦面に置かれた壺形埴輪が長い期間かけて割れて破片化して流下堆積したものと推定される。

(8) 第9トレチ（第66図 写真図版12）

第9トレチは、後円部の北西側にあたる。第3次調査において後円部北側のくびれ部と、周溝の有無や斜面・段築の有無の確認のため、幅1.5m×長さ10mの調査区を設定した。

墳端の削平 墳端はすでに後世の削平により消失していた。そこで第4次調査では、墳頂側（南東方向）に後円部二段目平坦面の確認をするため、さらに1.5m調査区の拡張を行った。トレチの北側では墳端や一段目傾斜部の下半は、近代による削平をうけており確認できなかつた。周溝の有無に関しても同様である。またトレチの西端では構造遺構及び柱穴が検出された。この構造遺構は第5トレチで検出されたものと同一の近世の道である。構埋土b層の上位から19世紀の土師器や近世の陶磁器が出土したことからこの削平面も19世紀のものと考えられる。

葺石と段築 トレチ南側の墳丘部では、二段目斜面下半の葺石と根石、一段目平坦面の敷石、二段目斜面上半の葺石が検出された。一段目斜面下半や墳端、墳端テラスの平坦面、周溝などは、後世の造成により削平され、確認することができなかつた。aラインにおいて葺石の密度と傾斜が変化し葺石の目地が通る地点を見出した。一段目平坦面から二段目斜面に変化する地点と考えられ、後円部には極めて狭い平坦部が存在したと推察される。葺石には後円部の第4トレチと同様な6～40cm大の角礫・円礫が用いられていていたが、くびれ部第



第65図 重政古墳第8トレンチ (1/50)

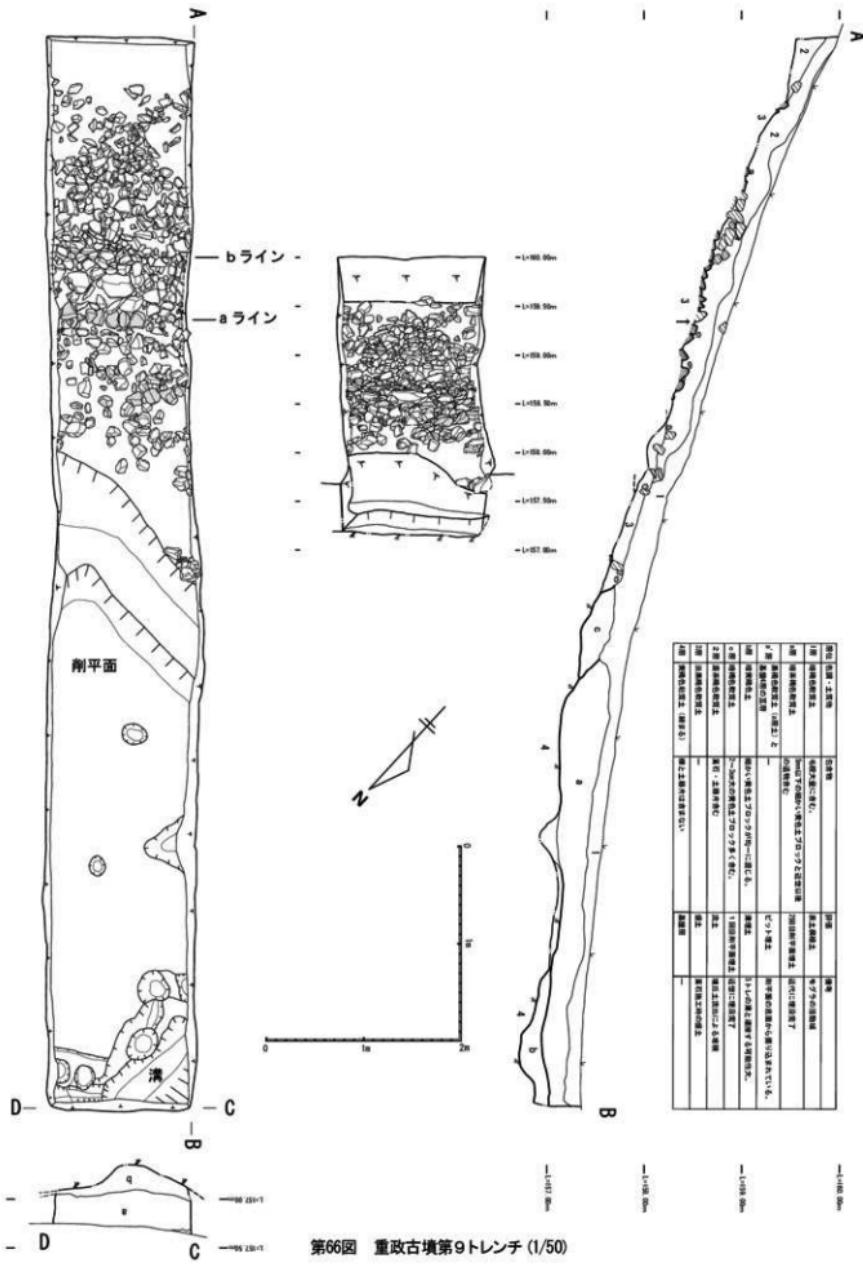
7トレンチのような密度は見られなかった。また、葺石のサイズとして一部40cm大の大型のものがみられるが、平均的に13cm程度である。そして、a～bラインにかけてはよく、葺石が残存している。

層序 腐植土の堆積層(第1層)があり、その下に遺物・流下した葺石を包含する流土第2層がある。これより下層はトレンチ上部と下部で異なる。上部では墳丘盛土第3層があり、下部では墳丘盛土層と地山(第4層)を削る形で、二度の削平面の埋土(c層・a層)が確認された。そして、地山を削る形で溝の埋土であるb層が確認された。

出土遺物と出土状況 削平面の埋土a層からは16世紀後半の基筒底を呈す、菊花文が施された青花の小皿の小片(第74図50)と19世紀の土師器片(第74図53)が出土している。そのため19世紀以後削平されたと思われる。溝状造構埋土b層の上層より土師質土器杯の口縁片(第74図51)が出土しており、削平面に切られている溝状造構は16世紀にさかのぼる可能性が高い。壺形埴輪片が葺石直上の流土層及び削平後の埋土中から数十点出土した(第72図33.35)。しかしいずれも原位置を留めておらず、集中する様子も見受けられなかった。また口縁部等の埴輪の部位が同定できる遺物がいくつか見られたが、基本的に小片であった。

(9) 第10トレンチ (第67図 写真図版13)

前方部東側の墳端と段築の位置の確認を目的とした調査区である。前方部北西側に幅1.5m×長さ8mのト



第66図 重政古墳第9トレンチ(1/50)

レンチを設定し掘削作業を行い、前方部東側の墳端と段築の位置の確認を目指した。

葺石と段築 一段目斜面と一段目平坦面が確認され、平坦面に伴う玉砂利による敷石及び二段目斜面葺石の根石が検出された。この平坦面は一部西側が後世に削平されている。玉砂利に関しては、東側では高密度で集中するが、西側ではまばらに散乱するのみであった。一段目斜面の葺石は良好に残っているが、一部樹木による損壊により葺石が見られない箇所があった。葺石は、地山より5cm程度盛土を行った(第3層)後に葺いていたようである。流土第2層中に動いた葺石が見られるが、これは流土(第2層)と共に上位から流れ込んできたものである。

墳端の削平 当初目的としていた墳端に関しては、後世の掘削により大きく破壊されており、確認できなかった。この掘削は二度行われており、まず最初に現存の葺石下部からトレーニング下端にかけて大幅に削った後に第a層が堆積し、それをさらに掘削後に第c層が堆積したと考えられる。その後整地層として第b層が入る。さらに東側に関しては、整地層(第b層)の後に溝様の土坑が掘られ第e層が堆積している。また、前年度までの調査区である第9トレーニングにおいてもトレーニング下部に大幅な掘削が見られるが、このトレーニングにおいて見られる二度の掘削は、これと同時期に行われたものと思われる。

出土遺物と出土状況 一段目平坦面の玉砂利上からほぼ直上(第2層)に壺形埴輪の破片が出土している(第71図13.14.16.19~21)。この他にも少量出土しているが、いずれも墳丘築造時に伴うものではなく、流れ込んできたものである。

(10) 第11トレーニング(第68図 写真図版13)

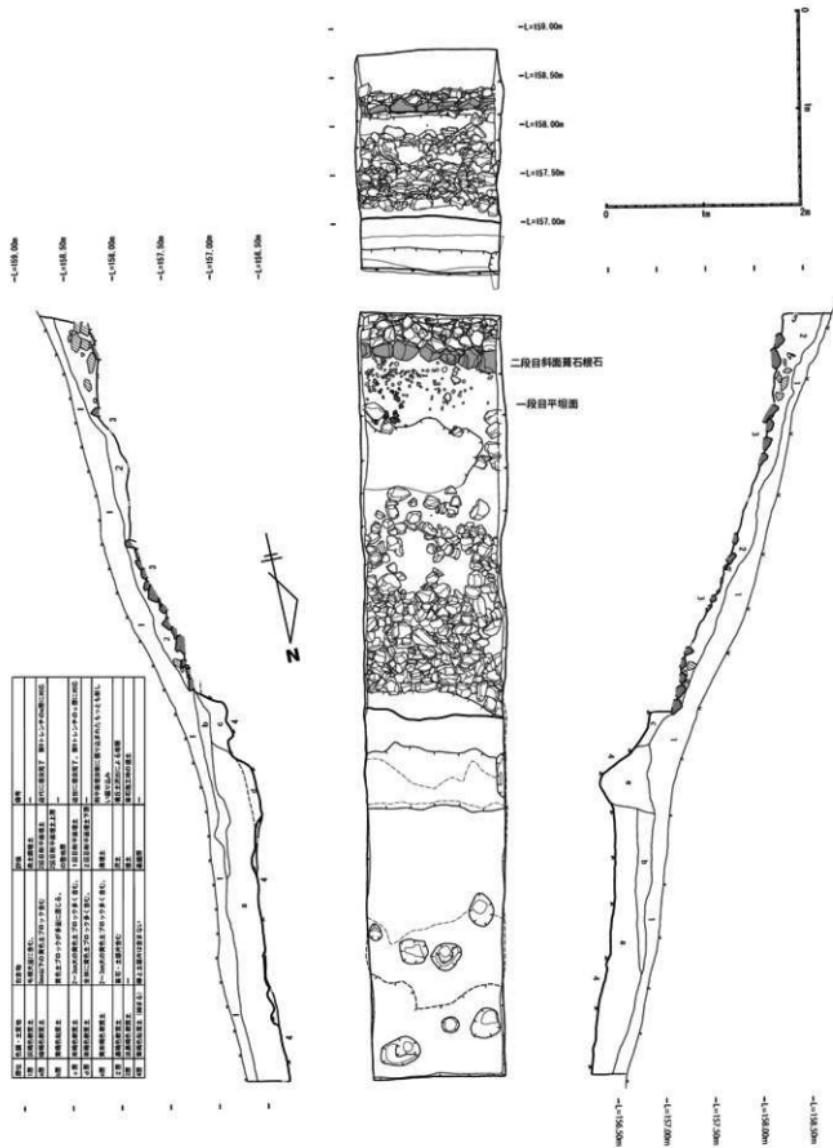
後円部東側の墳端と段築構造を明らかにするため幅約1.5m×長さ9.5mの調査区を現状で陸橋状に残されていた墳丘残存部に設定した。トレーニングの大半には三重中学のグラウンド造成時の土砂を盛り上げた二次堆積土(第1層)が厚くもり、その下部からトレーニング上半では葺石を検出し、下部では周溝の掘方と近世の削平面の一部を検出し、葺石の墳端を確認することができた。

周溝周辺の削平 第1層を除去すると、トレーニング南側ではまず南北方向の掘り込みがみられ、その埋土a層は、第9トレーニングと第10トレーニングで確認された削平面の埋没土と同一のものであり、近世の段階で墳丘北側の前方部掘からくらびれ部を破壊して、第11トレーニングまで達する削平が行われていたことが判明した。

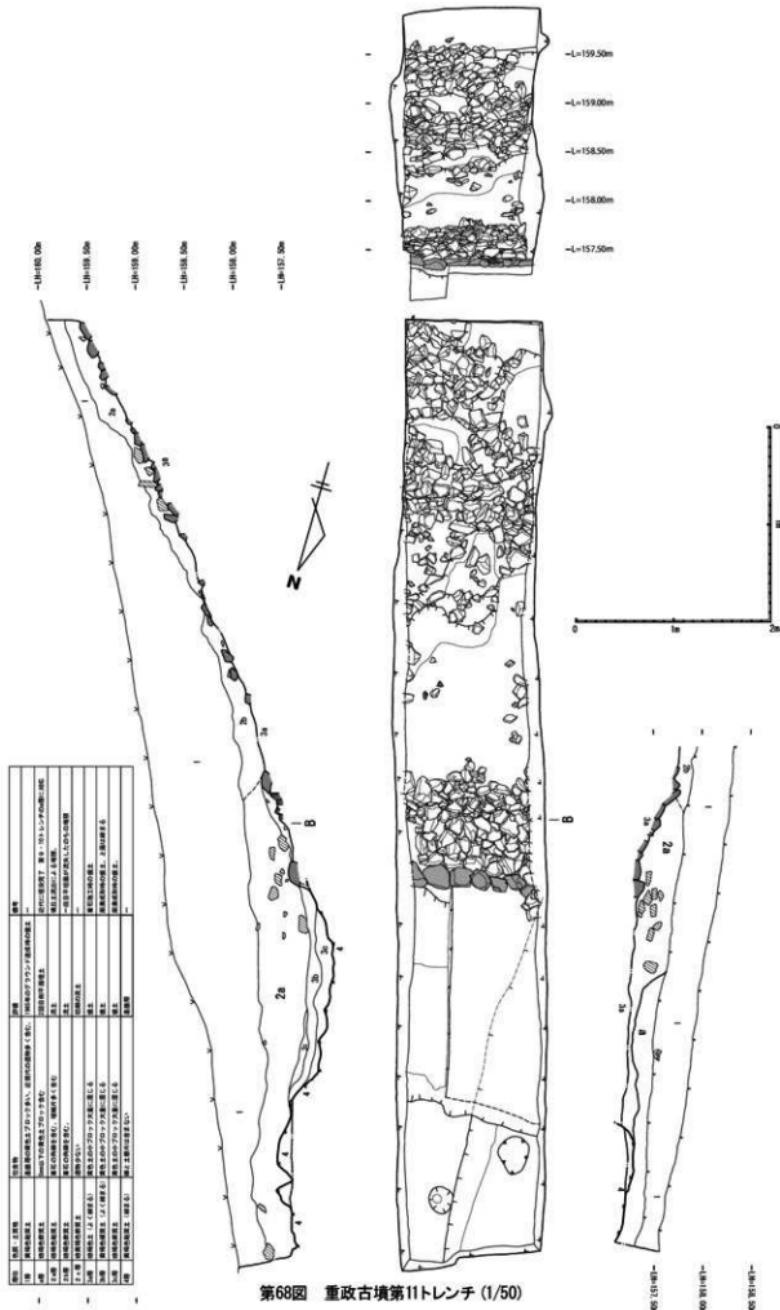
墳丘構造 いっぽう墳丘側では第1層を除去すると、角礫、小土器片が含まれた軟質な暗褐色の第2層が検出された。この層には大量の葺石が含まれ、斜面上部から落した土砂と葺石の堆積と判断された。そのうち第2b層とした部分は、この部分の下部本来あるべき一段目斜面と平坦面が、葺石とともに失われていたため、上下の第2a層とは性格のことなる層とみて書き分けているが、土質色調上の差はなかった。これらの第2層群を除去すると、墳丘斜面下部では第2a層が墳丘外の基盤層の高さよりさらに下に堆積し、幅2.5m深さ25cmほどの落ち込みが発見され、その溝は周溝と考えられた。葺石は一段目斜面の途中から突然無くなり2mにわたって葺石の空白が続き、その上方で再び良好な葺石が観察された。その間に一段目段築平坦面は検出されず、一段目の段築平坦面は削平をうけたと考えられる。

周溝と墳端 トレーニング下部では第2層群を掘り下げるごとに墳端と一段目斜面の葺石および幅2.5mの周溝が検出された。墳端部の根石は長さ20~30cm程の大型角礫であるのに対し、その他の葺石はやや小さく20cm以下のものが多い。墳端部は平坦に葺石を敷く墳端テラスが約50cmほど続き、そこから急に屈折して一段目斜面を形成する。テラスと一段目斜面葺石の変換ライン(B点)には根石列ではなく、葺石はそのまま敷石テラスから葺き上げている構築状態であった。後円部南側の第4トレーニングの周溝幅と一致し、墳端テラスの状況と酷似する。

周溝内の第2a層と第2c層を除去すると、第2層群より締まって固い第3b層があらわれ、この層が墳端部の根石の下に潜り込んでいたため、いったん掘削した溝に埋土を行って周溝の底を整形したものと考えられた。した



第67図 重政古墳第10トレンチ (1/50)



第68図 重政古墳第11トレンチ (1/50)

がって第3b層の上面が葺石完成時の周溝の底面であると考えられる。さらに、下部の第3c層を完掘すると、墳丘完成以前の周溝構築時の掘り込み跡が確認され、基盤層4層との境界は凸凹していた。

出土遺物と出土状態 流土第2層から壺形埴輪の各部の破片が出土している(第70~73図 11.12.15.17.23.30.31.34.41)。いずれも、10cm以下の小破片で、葺石上に散在し、周溝内からはある程度まとめて出土したが、供獻当初の位置を示すものではなく、墳頂などに置かれていたものが壊れて流れ落ちたものと推定される。この流土からは土師器高坏の小片(第73図47)や、最上層からは青磁片(第74図48.49)が出土している。なお周溝構築土の第3層からは埴輪の出土ではなく、土師質の土器小片が数点出土したのみである。

6. 出土遺物(第69~73図 第45表 写真図版14~16)

(1) 出土状況と土器の構成

後円部と前方部の各トレンチから量の差はあるものの満遍なく壺形埴輪の破片が出土している。なかでも南くびれ部一段目平坦面に当たる第7トレンチ拡張区から集中的に土師器及び壺形埴輪が出土した。この土器群は、崩壊転落した葺石および流出土層中に数個体の壺形埴輪が大型破片のままつぶれた状況で平坦面直上から流土中上位にかけて何重にもみつかる出土状況から推測して、重政古墳の一段目平坦面に樹立していた壺形埴輪に加えて、墳頂部あるいは隆起斜道上に置かれていた壺形埴輪と土師器群が転落堆積したものと推定される。なお円筒埴輪・家形埴輪や器財埴輪の類は発見されなかった。

古墳に伴う土器群とは別に、後世の開削や道路開削に伴う、輸入陶磁器と土師質土器、さらに後円部に後世もうけられた17世紀の近世墓の墓石3基がある。それらは遺物記載の最後に触ることにして、重政古墳にともなう土器類は以下に分類される。

壺形埴輪	底部から見て23個体以上。
土師器 瓢	2個体以上
高坏	1個体以上

出土量は壺形埴輪が圧倒的に多く、墳丘全体の面積の中で発掘したトレンチの面積は5%にも満たないので、築造当初に供獻・樹立された壺形埴輪の量は100個体を下ることはないであろう。各トレンチの出土状況からみて後円部前方部の墳頂部と一段目平坦面に一定の間隔で樹立されていたと考えられる。いっぽうまとった出土はなかったので墳端テラス上には樹立はなかったものと推定される。土師器甕の2個体と高坏は後円部墳頂上に供獻されたものが、くびれ部一段目平坦面や墳丘斜面に転落したものと考えられる。以下に出土遺物の特徴を記載する。

(2) 壺形埴輪(第69図1~44)

共通する特徴をまず記載する。砂粒を多く含む粗い胎土であるが、角閃石や小石英を含む在地の胎土であり、土師器も同じである。外部からの搬入品は含まれていないと考えられる。また壺形埴輪の胴部外面には黒斑があり、焼成は穴窯ではないことがわかる。成形は粘土紐を内傾接合に積み上げていくもので、底部には円盤状の粘土をおくものと、そうでないものがある。

全体に二重口縁になる破片はなく、いずれも單口縁で頸部の上位で外方に屈折するという特徴がある。屈折の在り方に稜をつけて直線的に屈折するものと、滑らかに曲線的に外反するものがある。また頸部は外に向かってエンタシス状に膨らむという特徴をもつ個体が一定数存在する。

外面に赤色顔料の塗布が行われている例が多く、内面にしたりを観察できる。保存状態の問題もあり、塗布しない個体があったかどうかは断定できない。

1は器高約42.3cm、口縁部復元径約27.1cm、頸部径約13.8cm、胴部最大径約22.6cm、底径約8.0cmの長胴化

した壺形埴輪である。頸部はやや内湾して上方に伸び、口縁部で直線的に外反し、口縁端部は面をつける。頸部中央には上部が丸く延びた隅丸三角形の透穴が2か所以上やや段違いに外側から穿孔されている。胴部最大径はやや上位にあり、底部は平底で焼成前の穿孔を施す。工具ではなく指で抜いたような造りである。底部の内外には指頭圧痕があり、胴部内面上半に粘土紐の接合痕が残る。外面胴部中位には亀裂が走り、その上から下半ではナデ、上方から口縁外面はタテハケを施し、内面はナデで仕上げる。焼成時の黒斑が外面下半に残る。**2**は底部の一部を除いて復元できた個体で、単口縁の口縁部形態は1と異なり頸部は直線的に外方に伸び、口縁部は曲線的に外反し、端部は丸く收める。器高約38.6cm、口縁部復元径約23.2cm、頸部復元径約14.0cm、胴部復元最大径約21.1cm、底径約9.0cmである。調整や黒斑があることは1と同様だが、こちらは丁寧な造りで器表面に接合痕を残さず、口縁の内面には赤色顔料の付着が残る。**3**は胴部下半を欠く個体であるが、口縁部径約21.2cm、頸部径約12.9cm、胴部最大径約19.0cmをはかる。口縁部はやや膨らみながら上方に伸びる頸部と曲線的に屈折して端部が小さく丸くおさまる。**1・2**とも形態がやや異なり、刷毛目を胴部内面まで施す点も異なる。**4**は口縁部復元径約24.4cm、頸部径約11.8cm、胴部最大径約20.0cmで、調整面や方法は**1・2**とほぼ同様であるが、口縁部の形態は**1**に近く、**2・3**と同様透穴はない。**5**は器高約34cm以上、頸部径約12.0cm、胴部最大径約19.8cm、底径約8.0cmをはかり、胴部最大径の位置より下部がすぼまりながら伸びる長胴化した壺形をなす。頸部はやや内湾して上方に伸び、端部で外反すると考えられる。底部は平底穿孔を施さない。底部の内外には指頭圧痕があり、胴部内面上半に粘土紐の接合痕が残る。外面胴部中位には亀裂が走り、その上から下半では縦方向の大きなナデ、上方から口縁外面はタテハケを施し、内面は幅広い刷毛目原体を用いた横ハケで仕上げる。焼成時の黒斑が外面下半に残る。**6**は頸部から口縁が復元できた個体で**5**と同一の口縁部形態になると考えられる。頸部が内湾して上方に伸び、口縁部で外反する。復元口径19.8cm、頸部径11.3cmである。**7**は強く外方に直線的に屈折する復元口径28.2cmの口縁片であるが、**6**に比べて器壁も厚く、頸部径は12.2cmに復元され**5・6**とそれほど変わらない。外面には赤色顔料が前面に塗られ、内面には縦方向のしたたりがある。内外に一部接合痕が残り、頸部の接合部内面には肥厚部がある。口縁部の外方屈曲は8~14でも認められるが、いずれも**7**に比べると薄く粗雑なつくりである。**8**は復元口径26.4cm、頸部径12.6cmの緩く内湾したのち外に屈折する内外ともナナメハケで仕上げ、接合痕を残さない。三角形の透穴も端正であり、9・10よりも丁寧に作られている。**9**は復元口径31.2cmの直線的な頸部に、直線的に屈折し、内外ともナナメハケで仕上げ、接合痕が良く残る外面はヨコハケ、内面はナナメハケで調整し、角の丸い三角形の透穴を外面から穿孔する。**10**は復元口径24.2cmの9とよく似た口縁部であるが別個体。同じく三角形の透穴を穿孔する。**11**は復元口径24.8cmの5とよく似た口縁部であるが別個体。**12**は復元口径28.2cmの口縁部片。**13・14**は口縁部を屈曲させるタイプ。**15**は外反するタイプの口縁部片。**16**は円形と逆三角形の透穴が3個以上並行して交互に穿たれた頸部片。透穴の間の外面には下向きの粗雑な鋸歯文が線刻されている。**17**も小円形の透穴が穿孔された頸部片。**18**は復元頸部径約12.5cmの直線的に開く頸部片。**19**は**16**と同様に円形と逆三角形の透穴の痕跡が残り、その間に方格の線刻が残る頸部片。**20**と**21**も同様に透穴と線刻が共存する頸部片。**22~24**も円形あるいは逆三角形の透穴が観察される頸部片。**25**は復元胴部最大径約20.2cmの胴部片。**19・22~24**の四片はいずれも透穴のある口縁部破片である。

26~44は焼成後穿孔が施された底部を含む胴部下半の破片である。底部外面はいずれも未調整で成型時の敷物として使われた繊維あるいは木の葉の圧痕が残り、**29**には広葉樹の葉の痕跡が明瞭に残る。外面はナデ調整、内面は指ナデあるいは指ケズリといえるほど深い痕跡を残し、胴部中位になるとハケ目が顔を出す。底部は厚い平底に成形され、底部外面から穿孔を施すが、穿孔部の太さ、形状は一様ではなく、穿孔の位置も中央とは限らない。一個体一個体で穿孔の状態が異なると言ってもよい。口縁部以上に底部の造りは異なっている。

壺形埴輪底部の形状および穿孔は、きわめて変化に富む。とくに5と40～42は底部に穿孔がない。穿孔が行われていない壺形埴輪が3個体となり、無視できるイレギュラーではなく、故意に穿孔しない壺形埴輪が製作配置されたものと考えられる。

26・27と31は底を分厚く作り深く穿孔したもの。26は底部径8.5cmで穿孔位置が偏っている。27は底部径8.7cmに復元される底部。31は底径9.0cm。28～30、32～44までは底部が薄いタイプである。そのうち30・36・43は1と同様に工具による穿孔ではなく、指で穿ったような粗雑な穿孔である。穿孔の穴も円形に丁寧に作られたものではなく、35・37・38のように、径数ミリの小さな穿孔もある。

(3) 土師器（第73図45～47）

内面に赤色顔料がべつとりと付着した2個体の甕の胴部破片が出土している。胎土はいずれもこの地域の地質を特徴づける火山堆積物に由来する角閃石が目立ち、壺形埴輪と同一である。45は丸底球形胴で、頸部は丸く屈折する甕である。頸部径11.0cm、胴部最大径18.3cm。外面はタテハケ、内面底部はヘラ削りの後ヨコハケを施す。内面頸部まで赤色顔料が厚く残存している。46は45と異なりなで肩の胴部上半片、調整と赤色顔料の状態は同じである。47は高坏の杯部片である。脚部との接合は差し込みによるものとみられる。

(4) 中近世の遺物（第74図48～56）

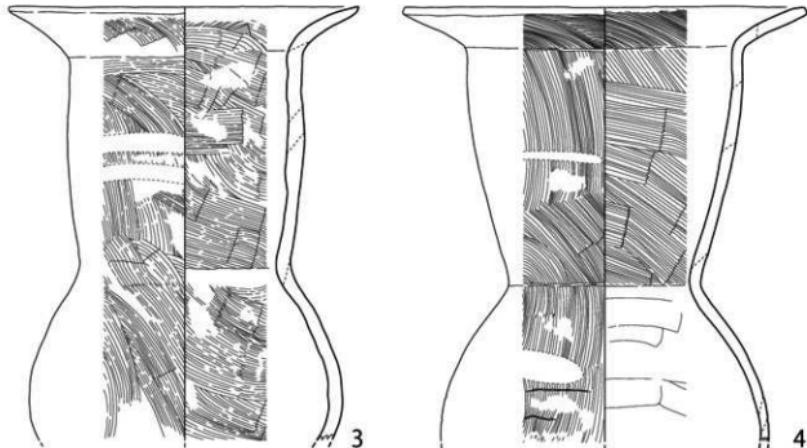
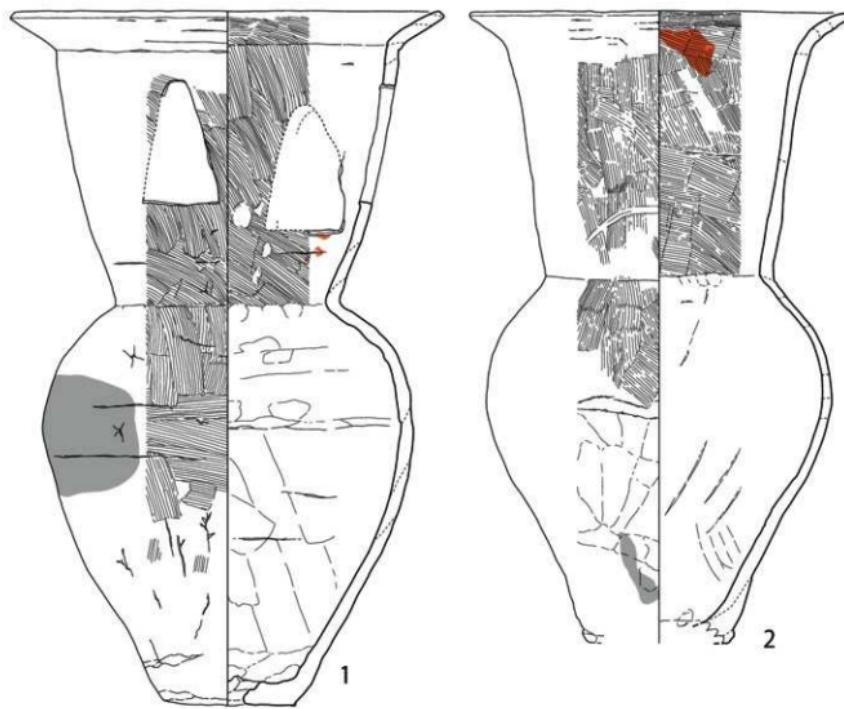
重政古墳は後世中世から近世にかけて、古墳としての聖域の観念はなくなり、まず前方部と後円部を切断するように切通の狭い里道が溝状に掘削され、さらにその溝の埋没後北側が大きく削平されて、平坦面が形成される。柱穴が点々と認められるので、何らかの施設があったものと考えられる。さらに墳頂部には現在は鳥居と石の祠が存在するが、斜面には17世紀の紀年銘をもつ墓石が3基転がされており、17世紀には後円部墳頂は墓地として利用されている。このような後世の墳丘再利用に伴う遺物は以下のものである。

48と49は後円部北墳丘土内からみつかった青磁碗の破片。48は13世紀の同安窯製、49は15世紀の龍泉窯製、対応する時期の造構はない。50は墳丘北側の削平面出土の墓筒底の青花小皿、16世紀後半の景德鎮製か。51は、15～16世紀ごろの土師質土器杯口縁部、溝状造構埋土から出土しており、50とあわせて、16世紀後半のある時点で、古墳を横断する切通が掘削されたと推定される。52は土師質土器杯の底部。53は近世後期の土師質土器小皿底部で、きわめて薄い製品。墳丘北の削平面から出土しており、削平面の使用時期を示唆する。

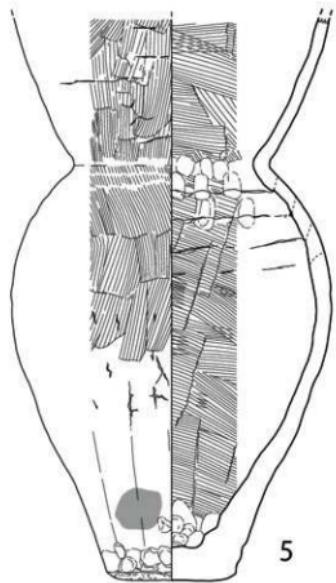
54～56はいずれも板碑形の近世墓石。54は上下の欠損が激しいが、承応二年(1653)の銘文が明瞭に残る。55は基部に枘突起を作っており、台石に建てたものである。正保三年(1646)の銘が残る。56の基部はそのまま台石を用いて地面に樹立する仕様。銘文は剥離消失。いずれも月輪に墨書は認められない。二条線と月輪の円文を刻む。17世紀中葉の豊後南部の近世墓碑の典型である。

(5) 壺形埴輪のまとめ

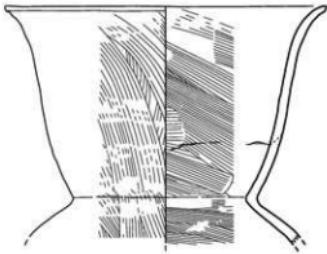
重政古墳で出土した埴輪はすべて単口縁の壺形埴輪のみである。円筒埴輪は発見されず、二重口縁の壺形埴輪もない。埴輪が集中して出土した南くびれ部において、この状況が認められたので、古墳全体に敷衍しても間違いないものと考えられる。粗粒大小の違いはあるが、頸部が上方に向かってひらき口縁部が屈折外反する特徴は同じである。頸部には直線的に開くものと、エンタシス状に外に膨らむ者の2種があり、後円部も稜をもって屈折し直線的に外上方に伸びる口唇部と、稜を作らず外反する口唇部がある。すなわち次のように分類される。なお〇囲い数字は透穴のある個体である。下線を引いた数字の個体は、接合痕を残さない丁寧な造りの個体である。かなり多様な造りであることがわかる。



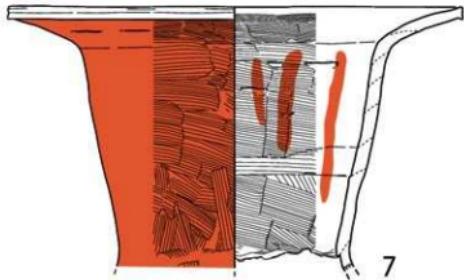
第69図 重政古墳出土遺物1 (1/3)



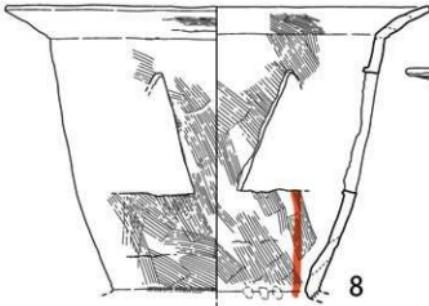
5



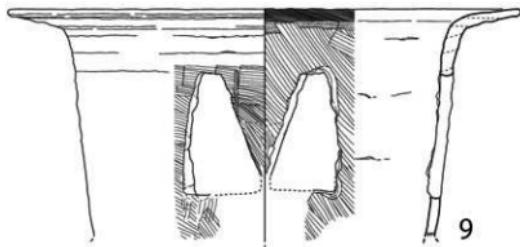
6



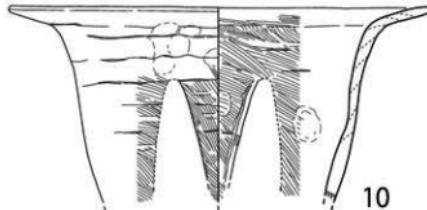
7



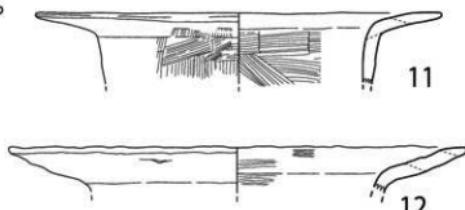
8



9



10



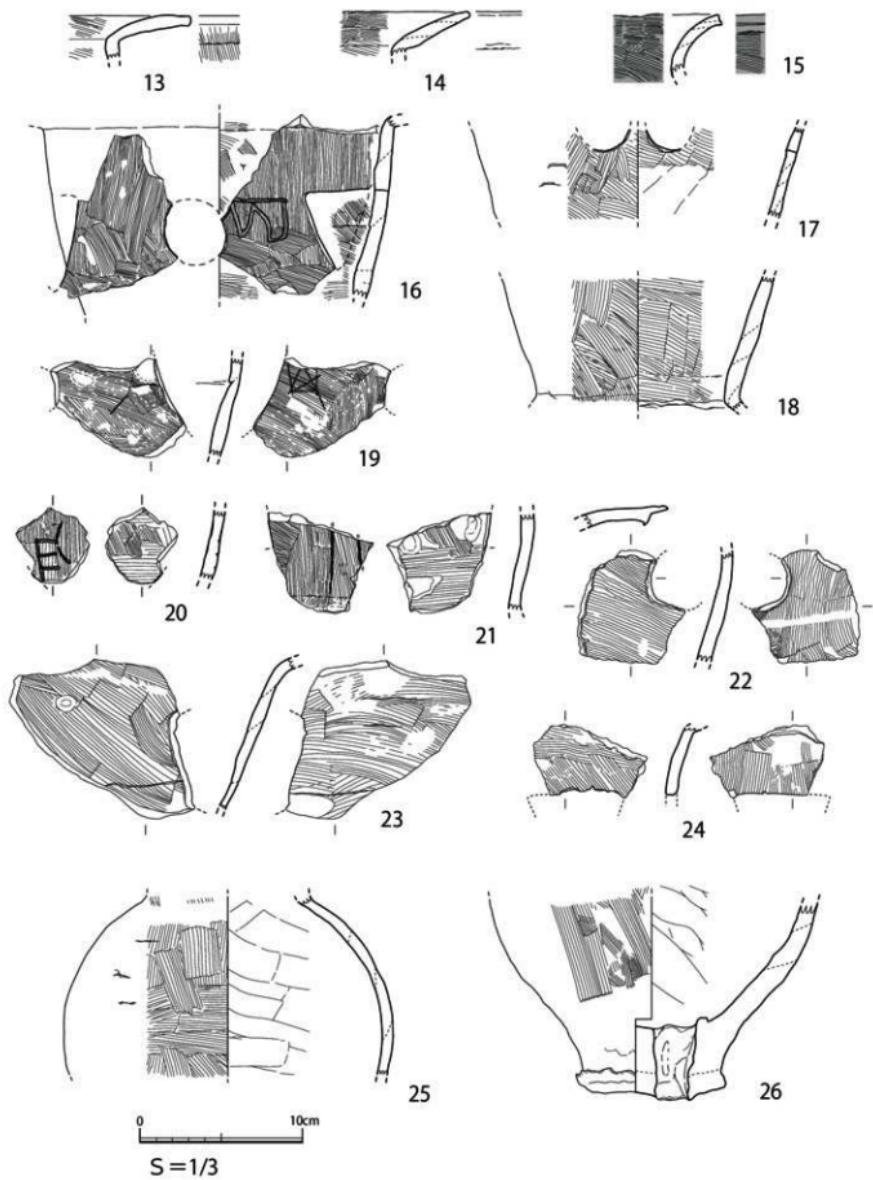
11



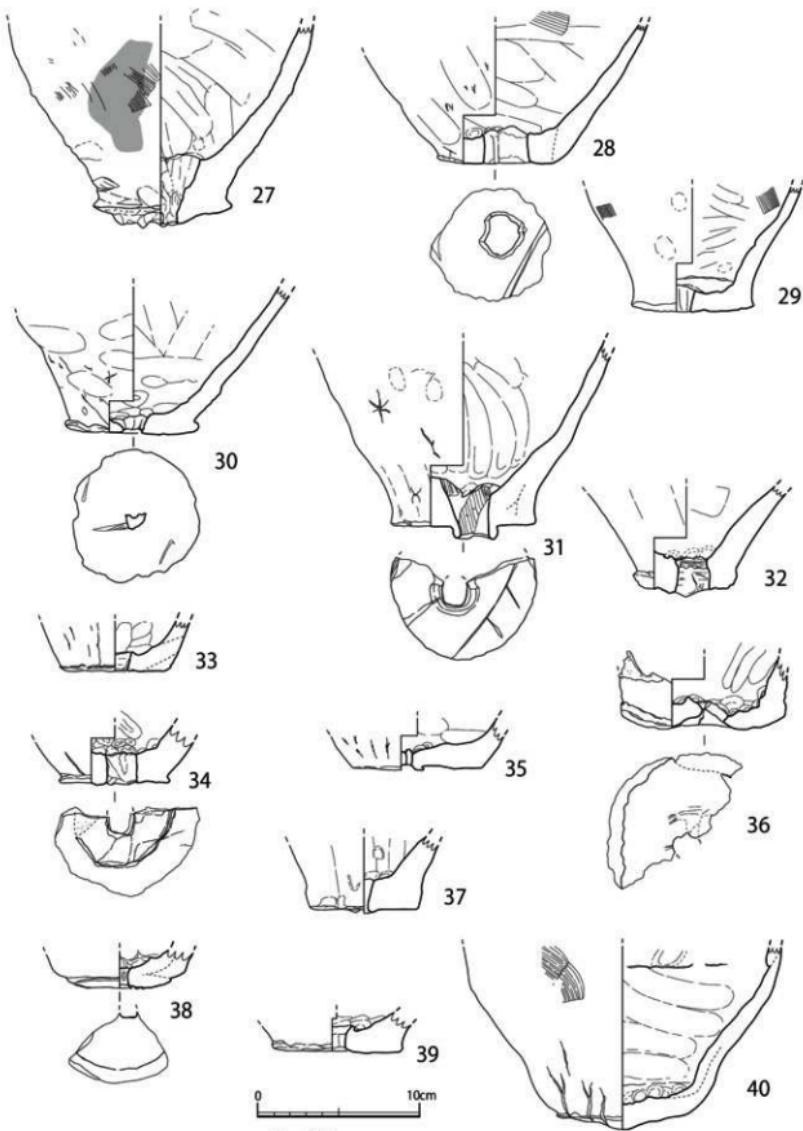
12

A scale bar at the bottom of the page, ranging from 0 to 10 cm.

第70図 重政古墳出土遺物2 (1/3) S=1/3



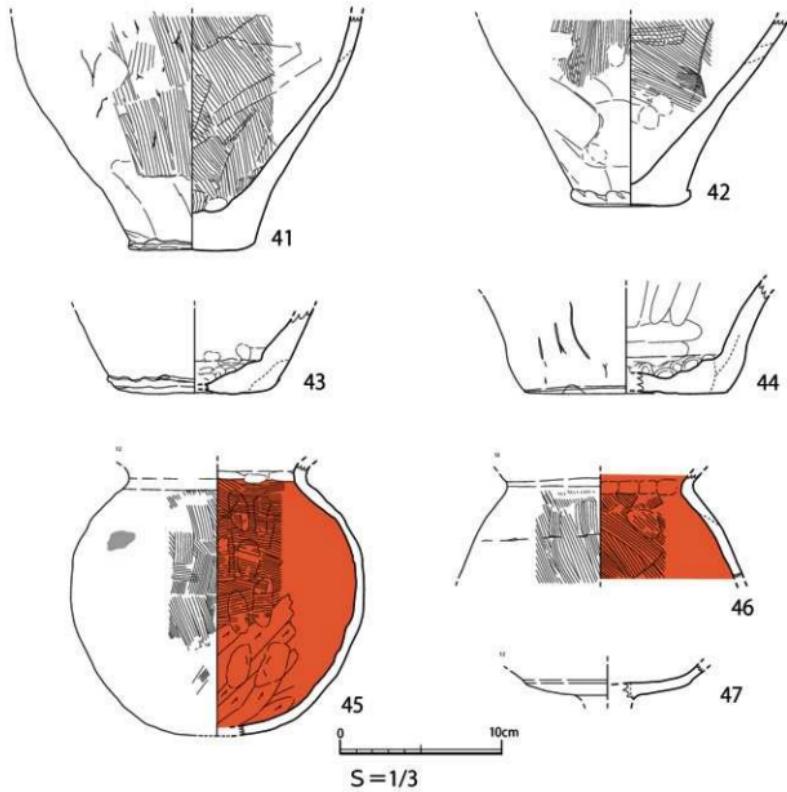
第71図 重政古墳出土遺物3 (1/3)



第72圖 重政古墳出土遺物4 (1/3)

頸部直線的一口緣部屈折···⑨、⑩、⑫
頸部直線的一口緣部外反···②、⑦

頸部外彎曲一口緣部屈折···①、③、④、
頸部外彎曲一口緣部外反···⑥、⑧、⑯

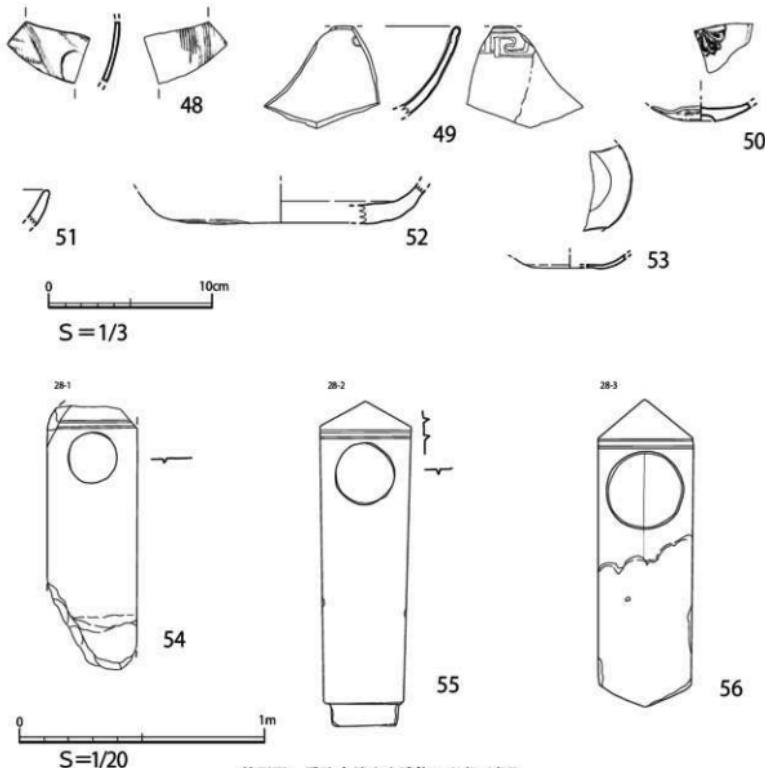


第73図 重政古墳出土遺物5 (1/3)

頸部に三角形の透穴を入れる個体とそうでない個体がある。胴部は最大径の位置が上位にあり、胴部下半が伸びて全体に長胴化している。底部は平底を作り出したのち焼成前に穿孔する点で共通する。しかし3個体には底部穿孔はない。このような壺形埴輪は秋葉鬼塚古墳でも1例知られている。以上のような底部の製作技法の壺形埴輪は大分県中津市勘助野地1号墳で知られている⁽²⁾。また口縁部の外方屈曲は、近接する三重地域の道ノ上古墳と秋葉鬼塚古墳でも知られている⁽³⁾。この地域の特徴といえる。頸部の三角透穴は重政古墳が初見である。

(6) 壺形埴輪の時期

第1の特徴は壺形埴輪の外面に黒斑が多く残ることである。そこからこの三重地域に穴窯焼成が導入される以前の焼成技法で製作されていることが容易に推測される。つぎに壺形埴輪の形式構成として二重口縁がなく単口縁に限られるのは、大分における壺形埴輪では最も新しい時期のものである。また胴部型式も長胴化するのと同じくもっとも新しい時期である。埴輪製作における穴窯焼成技法の導入は、前方後円墳集成編年⁽⁴⁾の6期からとされ、大分県内最古の穴窯焼成の埴輪は大在古墳の埴輪⁽⁵⁾であり、全国的動向と一致する。しかし熊本



第74図 重政古墳出土遺物6 (1/3・1/20)

阿蘇地方の長目塚古墳の黒斑の残る埴輪群の最近の報告では集成編年6期と報告されている⁽⁶⁾。大在古墳の所在する別府湾岸と熊本県阿蘇地方の中間に三重盆地が位置することを考えれば、集成5期の特徴をもつ壺形埴輪が集成6期まで残る可能性も考慮すべきであるが、底部の特徴を共有する豊前の勘助野地1号墳の壺形埴輪はその第1主体部の副葬品や土師器群から集成5期と考えられていることから、現状では古墳時代中期前葉の集成5期の埴輪と考えておきたい。

(田中)

【註】

- (1) 諸岡 郁 1997『三重地区遺跡群発掘調査概報』II 三重町教育委員会 p8 ~ 10
- (2) 田中裕介・村上久和(ほか) 1988『勘助野地遺跡』『一般国道雄10号線中津バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書』(I) 大分県教育委員会
- (3) 田中裕介 2015「秋葉鬼塚古墳出土遺物」『豊後大野市内遺跡発掘調査概要報告書』5 p27~29 豊後大野市教育委員会
- (4) 広瀬和雄 1992「前方後円墳の畿内編年」『前方後円墳集成』九州編 山川出版社
- (5) 村上久和・宮内克己・田中裕介 1995『大在古墳・浜第2遺跡』大分県教育委員会
- (6) 杉井健編 2014『長目塚古墳の研究』熊本大学文学部

第4表 重古宮出土遺物觀察表(数値の単位はcm)

%	遺物	出土位置	出土状況	形態	量	種類	性質	大きさ	特徴	
1	土器	南びじれ窓 レ・北張口 区	一晩自上 埋立地	伊勢型多孔 石、白石、 白色の粒子を 地に吹きこむ 形状穿孔	8.0	陶土 粘土被覆土 内緑苔付	内裏：タッパー×2コハーフ(6本 下)、マグネット(1本)、 内緑苔付(2本)、 内緑苔付(2本)、 内緑苔付(2本)、 内緑苔付(2本)	良好	陶土二面に長い 溝の三角窓かし穴 (下7.8cm、直径6.6 cm)を3方に開いた うつ口に彩色顔料の 付着あり	
2	土器	口縁と生 物山には死 神に坐す	南びじれ窓 レ・北張口 区	岩質灰 土中	38.6 (32.2) (140) (21.1) (9.0)	砂質多い、角閃 石、チーク、 白色の粒子を 地に吹きこむ 形状穿孔	陶土 粘土被覆土 内緑苔付	内裏：タッパー×2コハーフ(6本 下)、マグネット(1本)、 内緑苔付(2本)、 内緑苔付(2本)、 内緑苔付(2本)	良好	口縁部内裏に彩色 顔料の付着あり
3	土器	口縁と生 物山には死 神に坐す	南びじれ窓 レ・北張口 区	陶質灰 土中	29.4 (21.2) (12.9) (19.0)	砂質多い、角閃 石、石英、長 石、白色の粒子 地に吹きこむ 形状穿孔	陶土 粘土被覆土 内緑苔付	内裏：タッパー×2コハーフ(7.8 cm)、マグネット(1本)、 内緑苔付(2本)	良好	内裏に彩色顔料の 付着あり
4	土器	口縁と生 物山には死 神に坐す	南びじれ窓 レ・北張口 区	陶質灰 土中	35.4 (24.4) (11.8) (20.0)	砂質多い、角閃 石、石英、長 石、白色の粒子 地に吹きこむ 形状穿孔	陶土 粘土被覆土 内緑苔付	内裏：タッパー×2コハーフ(6本 下)、マグネット(1本)、 内緑苔付(2本)	良好	内裏に彩色顔料の 付着あり
5	土器	口縁と生 物山には死 神に坐す	南びじれ窓 レ・北張口 区	陶質灰 土中	— (12.0) (19.8) (8.0)	砂質多い、角閃 石、石英、長 石、白色の粒子 地に吹きこむ 形状穿孔	陶土 粘土被覆土 内緑苔付	内裏：タッパー(6.7cm×10cm)、 マグネット(1本)、 内緑苔付(2本)	良好	内裏部窓 が空いた
6	土器	口縁と生 物山には死 神に坐す	南びじれ窓 レ・北張口 区	陶質灰 土中	14.3 (19.8) (11.3) (—)	砂質多い、角閃 石、石英、長 石、白色の粒子 地に吹きこむ 形状穿孔	陶土 粘土被覆土 内緑苔付	内裏：タッパー(6.7cm×10cm)、 マグネット(1本)、 内緑苔付(2本)	良好	内裏に彩色顔料の 付着あり
7	土器	口縁と生 物山には死 神に坐す	南びじれ窓 レ・北張口 区	陶質灰 土中	18.5 (28.2) (12.2) (—)	砂質多い、角閃 石、石英、長 石、白色の粒子 地に吹きこむ 形状穿孔	陶土 粘土被覆土 内緑苔付	内裏：タッパー(6.7cm×10cm)、 マグネット(1本)、 内緑苔付(2本)	良好	内裏に彩色顔料の 付着あり
8	土器	口縁と生 物山には死 神に坐す	南びじれ窓 レ・北張口 区	陶質灰 土中	18.1 (26.4) (12.8) (—)	砂質多い、角閃 石、石英、長 石、白色の粒子 地に吹きこむ 形状穿孔	陶土 粘土被覆土 内緑苔付	内裏：タッパー×2コハーフ(7 cm)、マグネット(1本)、 内緑苔付(2本)	良好	内裏に彩色顔料の 付着あり
9	土器	口縁と生 物山には死 神に坐す	南びじれ窓 レ・北張口 区	陶質灰 土中	14.6 (31.2) (20.8) (—)	砂質多い、角閃 石、石英、長 石、白色の粒子 地に吹きこむ 形状穿孔	陶土 粘土被覆土 内緑苔付	内裏：タッパー×2コハーフ(5 cm×10cm)、マグネット(1本)、 内緑苔付(2本)	良好	内裏に彩色顔料の 付着あり
10	土器	口縁と生 物山には死 神に坐す	南びじれ窓 レ・北張口 区	陶質灰 土中	— (24.2) (—) (—)	砂質多い、角閃 石、石英、長 石、白色の粒子 地に吹きこむ 形状穿孔	陶土 粘土被覆土 内緑苔付	内裏：タッパー×2コハーフ(6 cm×10cm)、マグネット(1本)、 内緑苔付(2本)	良好	内裏に彩色顔料の 付着あり
11	土器	口縁	後内鄭 11号	二段目削 除後土中	— (24.6) (—) (—)	砂質多い、角閃 石、石英、長 石、白色の粒子 地に吹きこむ 形状穿孔	陶土 粘土被覆土 内緑苔付	内裏：タッパー×2コハーフ(7 cm)、マグネット(1本)、 内緑苔付(2本)	良好	内裏に彩色顔料の 付着あり
12	土器	口縁	後内鄭 11号	削除後 土中	— (25.2) (—) (—)	砂質多い、角閃 石、石英、長 石、白色の粒子 地に吹きこむ 形状穿孔	陶土 粘土被覆土 内緑苔付	内裏：コハーフ(7cm×10cm) マグネット(1本)、 内緑苔付(2本)	良好	内裏に彩色顔料の 付着あり
13	土器	口縁(6 cm×8cm)	前方北 10号	削除後 土中	— (—) (—) (—)	砂質多い、角閃 石、石英、長 石、白色の粒子 地に吹きこむ 形状穿孔	陶土 粘土被覆土 内緑苔付	内裏：タッパー(7cm×10cm) マグネット(1本)、 内緑苔付(2本)	良好	内裏に彩色顔料の 付着あり
14	土器	口縁(6 cm×8cm)	前方北 11号	削除後 土中	— (—) (—) (—)	砂質多い、角閃 石、石英、長 石、白色の粒子 地に吹きこむ 形状穿孔	陶土 粘土被覆土 内緑苔付	内裏：コハーフ(7cm×10cm) マグネット(1本)、 内緑苔付(2本)	良好	内裏に彩色顔料の 付着あり
15	土器	口縁(7 cm)	後内鄭 11号	削除後 土中	— (—) (—) (—)	砂質多い、角閃 石、石英、長 石、白色の粒子 地に吹きこむ 形状穿孔	陶土 粘土被覆土 内緑苔付	内裏：コハーフ(7cm×10cm) マグネット(1本)、 内緑苔付(2本)	良好	内裏に彩色顔料の 付着あり
16	土器	口縁	前方北 10号	一晩自上 埋立地	— (—) (—) (—)	砂質多い、角閃 石、石英、長 石、白色の粒子 地に吹きこむ 形状穿孔	陶土 粘土被覆土 内緑苔付	内裏：タッパー(10cm×10cm) マグネット(1本)、 内緑苔付(2本)	良好	内裏に彩色顔料の 付着あり
17	土器	口縁(6 cm×8cm)	後内鄭 12号	削除後 土中	— (—) (—) (—)	砂質多い、角閃 石、石英、長 石、白色の粒子 地に吹きこむ 形状穿孔	陶土 粘土被覆土 内緑苔付	内裏：タッパー(10cm×10cm) マグネット(1本)、 内緑苔付(2本)	良好	内裏に彩色顔料の 付着あり
18	土器	口縁	後内鄭 12号	削除後 土中	— (—) (—) (—)	砂質多い、角閃 石、石英、長 石、白色の粒子 地に吹きこむ 形状穿孔	陶土 粘土被覆土 内緑苔付	内裏：タッパー(10cm×10cm) マグネット(1本)、 内緑苔付(2本)	良好	内裏に彩色顔料の 付着あり
19	土器	口縁	前方北 10号	一晩自上 埋立地	— (—) (—) (—)	砂質多い、角閃 石、石英、長 石、白色の粒子 地に吹きこむ 形状穿孔	陶土 粘土被覆土 内緑苔付	内裏：タッパー(10cm×10cm) マグネット(1本)、 内緑苔付(2本)	良好	内裏に彩色顔料の 付着あり
20	土器	口縁	前方北 10号	土中	— (—) (—) (—)	砂質多い、角閃 石、石英、長 石、白色の粒子 地に吹きこむ 形状穿孔	陶土 粘土被覆土 内緑苔付	内裏：タッパー(10cm×10cm) マグネット(1本)、 内緑苔付(2本)	良好	内裏に彩色顔料の 付着あり
21	土器	口縁	前方北 10号	削除後 土中	— (—) (—) (—)	砂質多い、角閃 石、石英、長 石、白色の粒子 地に吹きこむ 形状穿孔	陶土 粘土被覆土 内緑苔付	内裏：タッパー(10cm×10cm) マグネット(1本)、 内緑苔付(2本)	良好	内裏に彩色顔料の 付着あり
22	土器	口縁(6 cm×8cm)	南びじれ 窓	削除後 土中	— (—) (—) (—)	砂質多い、角閃 石、石英、長 石、白色の粒子 地に吹きこむ 形状穿孔	陶土 粘土被覆土 内緑苔付	内裏：タッパー(10cm×10cm) マグネット(1本)、 内緑苔付(2本)	良好	内裏に彩色顔料の 付着あり
23	土器	口縁(6 cm×8cm)	後内鄭 11号	削除後 土中	— (—) (—) (—)	砂質多い、角閃 石、石英、長 石、白色の粒子 地に吹きこむ 形状穿孔	陶土 粘土被覆土 内緑苔付	内裏：タッパー(10cm×10cm) マグネット(1本)、 内緑苔付(2本)	良好	内裏に彩色顔料の 付着あり
24	土器	口縁(6 cm×8cm)	南びじれ 窓	削除後 土中	— (—) (—) (—)	砂質多い、角閃 石、石英、長 石、白色の粒子 地に吹きこむ 形状穿孔	陶土 粘土被覆土 内緑苔付	内裏：タッパー、コハーフ マグネット(12cm×10cm)、 内緑苔付(2本)	良好	内裏に彩色顔料の 付着あり
25	土器	口縁	南びじれ 窓	一晩自上 埋立地	— (30.2) (—) (—)	砂質多い、角閃 石、石英、長 石、白色の粒子 地に吹きこむ 形状穿孔	陶土 粘土被覆土 内緑苔付	内裏：タッパー、コハーフ(15cm× 10cm)、マグネット(12cm×10cm)、 内緑苔付(2本)	良好	内裏に彩色顔料の 付着あり
26	土器	口縁	下平半 レ・北張口 区	陶質灰 土中	— (—) (—) (—)	砂質多い、角閃 石、石英、長 石、白色の粒子 地に吹きこむ 形状穿孔	陶土 粘土被覆土 内緑苔付	内裏：タッパー、コハーフ(6cm× 10cm)、 内緑苔付(2本)	良好	内裏に彩色顔料の 付着あり
27	土器	口縁	下平半 レ・北張口 区	陶質灰 土中	— (—) (—) (—)	砂質多い、角閃 石、石英、長 石、白色の粒子 地に吹きこむ 形状穿孔	陶土 粘土被覆土 内緑苔付	内裏：タッパー、 内緑苔付(2本)	良好	内裏に彩色顔料の 付着あり
28	土器	口縁	南びじれ 窓	陶質灰 土中	— (—) (—) (—)	砂質多い、角閃 石、石英、長 石、白色の粒子 地に吹きこむ 形状穿孔	陶土 粘土被覆土 内緑苔付	内裏：タッパー、コハーフ(5cm× 10cm)、 内緑苔付(2本)	良好	内裏に彩色顔料の 付着あり
29	土器	口縁	南びじれ 窓	陶質灰 土中	— (—) (—) (—)	砂質少ない、角 閃石、石英、長 石、白色の粒子 地に吹きこむ 形状穿孔	陶土 粘土被覆土 内緑苔付	内裏：タッパー、 内緑苔付(2本)	良好	内裏に彩色顔料の 付着あり
30	土器	口縁	南びじれ 窓	陶質灰 土中	— (—) (—) (—)	砂質少ない、角 閃石、石英、長 石、白色の粒子 地に吹きこむ 形状穿孔	陶土 粘土被覆土 内緑苔付	内裏：タッパー、 内緑苔付(2本)	良好	内裏に彩色顔料の 付着あり

番号	器種	部位	出土位置	出土層位	基質	口径	縦幅	横幅	高さ	成形	調査	造成	色図	文様等	特記事項	
31	豊形埴輪	腹部	後円部北 120cm所	後円部北 111cm	後円部北 111cm	陶土	20.0	11.5	9.0	砂利混入、角閃 石、白石、赤色子 等。	外側、直筒上部 内側、直筒下部 底面	内面、青子地 外面、青子地 内面、青子地	良好	内・外・明褐色 黄褐色	—	
32	豊形埴輪	腹部	前方部前頭 部分	後円部北 111cm	後円部北 111cm	陶土	20.0	6.7	4.7	砂利混入、角閃 石、白石、赤色子 等。	外側、直筒上部 内側、直筒下部 底面	外側、上方の内子ナ 内側、下方の内子ナ 底面外部、内側	良好	内・外・明褐色 内面・青褐色	豊形埴輪 丸孔の内側に 縫合跡がある。	
33	豊形埴輪	腹部	後円部北 111cm	後円部北 111cm	後円部北 111cm	陶土	20.0	2.9	7.0	砂利混入、角閃 石、白石、赤色子 等。	外側、直筒上部 内側、直筒下部 底面	外側、ナガリ子地 内側、ナガリ子地 底面	良好	内・外・明褐色 内面・青褐色	—	
34	豊形埴輪	腹部	後円部北 111cm	後円部北 111cm	後円部北 111cm	陶土	20.0	3.8	—	(4.4)	砂利混入、角閃 石、白石、赤色子 等。	外側、直筒上部 内側、直筒下部 底面	外側、ナガリ子地 内側、ナガリ子地 底面	良好	内・外・明褐色 内面・青褐色	—
35	豊形埴輪	腹部	南平野 111cm	南平野 111cm	南平野 111cm	陶土	20.0	2.1	—	(7.0)	砂利混入、角閃 石、白石、赤色子 等。	外側、直筒上部 内側、直筒下部 底面	外側、ナガリ子地 内側、ナガリ子地 底面	良好	内・外・明褐色 内面・青褐色	—
36	豊形埴輪	腹部	南くびれ部 7.8cm	南くびれ部 7.8cm	南くびれ部 7.8cm	陶土	20.0	4.4	—	9.8	砂利混入、角閃 石、白石	外側、直筒上部 内側、直筒下部 底面	外側、ナダ 内側、直筒下部、ナ 子地	良好	内・外・明褐色 内面・青褐色	手元は工具 では無く、古 い物で押しつけ て作られた。
37	豊形埴輪	腹部	後円部北周 41cm	後円部北周 41cm	後円部北周 41cm	陶土	20.0	4.5	—	(4.6)	砂利混入、角閃 石、白石、赤色子 等。	外側、直筒上部 内側、直筒下部 底面	外側、ナダ 内側、直筒下部、ナ 子地	良好	内・外・明褐色 内面・青褐色	豊形埴輪 無い。
38	豊形埴輪	腹部	後円部北 111cm (20cm)	後円部北 111cm (20cm)	後円部北 111cm (20cm)	陶土	20.0	2.3	—	(5.2)	砂利混入、角閃 石、白石	外側、直筒上部 内側、直筒下部 底面	外側、ナダ 内側、直筒下部、ナ 子地	良好	内・外・明褐色	豊形埴輪は 無い。
39	豊形埴輪	腹部	南くびれ部 7.8cm (30cm)	南くびれ部 7.8cm (30cm)	南くびれ部 7.8cm (30cm)	陶土	20.0	2.3	—	(5.0)	砂利混入、角閃 石、白石、赤色子 等。	外側、直筒上部 内側、直筒下部 底面	外側、ナダ 内側、直筒下部、ナ 子地	良好	内・外・明褐色 内面・青褐色	—
40	豊形埴輪	腹部	南くびれ部 7.8cm	—	—	陶土	20.0	11.2	—	9.5	砂利混入、角閃 石、白石、赤色子 等。	外側、直筒上部 内側、直筒下部 底面	外側、ナダ 内側、直筒下部、ナ 子地	良好	内・外・明褐色 内面・青褐色	九段の蓮瓣 を前面に押 し付いた平 型にしている。
41	豊形埴輪	腹部	後円部北 111cm	後円部北 111cm	後円部北 111cm	陶土	20.0	14.5	—	7.8	砂利混入、角閃 石、白石、赤色子 等。	外側、直筒上部 内側、直筒下部 底面	外側、ナダ 内側、直筒下部、ナ 子地	良好	内・外・明褐色 内面・青褐色	腹部に墨跡 がある。
42	豊形埴輪	腹部	南くびれ部 7.8cm	—	—	陶土	20.0	11.4	—	7.5	砂利混入、角閃 石、白石、赤色子 等。	外側、直筒上部 内側、直筒下部 底面	外側、ナダ 内側、直筒下部、ナ 子地	良好	内・外・明褐色 内面・青褐色	腹部に墨跡 がない。
43	豊形埴輪	腹部	後円部北 10.0cm (8.0cm)	後円部北 10.0cm (8.0cm)	後円部北 10.0cm (8.0cm)	陶土	20.0	5.2	—	(10.0)	砂利混入、角閃 石、白石、赤色子 等。	外側、直筒上部 内側、直筒下部 底面	外側、ナダ 内側、直筒下部、ナ 子地	良好	内・外・明褐色 内面・青褐色	左脇の蓮瓣 を前面に押 し付いた平 型にしている。
44	豊形埴輪	腹部	後円部北 10.0cm (8.0cm)	後円部北 10.0cm (8.0cm)	後円部北 10.0cm (8.0cm)	陶土	20.0	6.5	—	(12.0)	砂利混入、角閃 石、白石、赤色子 等。	外側、直筒上部 内側、直筒下部 底面	外側、ナダ 内側、直筒下部、ナ 子地	良好	内・外・明褐色 内面・青褐色	—
45	土師器・蓋	全体	南くびれ部 7.8cm トレス北端	—	—	土師器	16.0	16.0	11.0	18.3	丸底	外側、直筒上部 内側、直筒下部 底面	外側、ナダ 内側、直筒下部、ナ 子地	良好	内・外・明褐色 内面・青褐色	左脇の蓮瓣 を前面に押 し付いた平 型にしている。
46	土師器・蓋	全体	南くびれ部 7.8cm トレス北端	—	—	土師器	16.0	16.0	—	(11.6)	砂利混入、角閃 石、白石、赤色子 等。	外側、直筒上部 内側、直筒下部 底面	外側、ナダ 内側、直筒下部、ナ 子地	良好	内・外・明褐色 内面・青褐色	内全体に色々な 色柄が施す 色柄割れは 生体剥離?
47	土師器・蓋	全体	後円部北 111cm	後円部北 111cm	後円部北 111cm	陶土	20.0	—	—	—	砂利混入、角閃 石、白石	外側、直筒上部 内側、直筒下部 底面	外側、ナダ	良好	内・外・明褐色	—
48	青磁・碗	全体	後円部北 111cm	後円部北 111cm	後円部北 111cm	青磁	—	—	—	—	磁體	外側、成形→ 内側、成形	外側、青磁	良好	内・外・青磁	19世紀
49	青磁・碗	全体	後円部北 111cm	後円部北 111cm	後円部北 111cm	青磁	—	—	—	—	磁體	外側、成形→ 内側、成形	外側、青磁	良好	内・外・青磁	20世紀
50	青花・小皿	全体	南平野 111cm	南平野 111cm	南平野 111cm	青花	—	—	—	(1.1)	磁體	外側、成形→ 内側、成形	下池白地、青 花	良好	内・青花	19世紀 後半、明治後 半
51	土師器・蓋	全体	南くびれ部 7.8cm	—	—	土師器	—	—	—	—	砂利混入、角閃 石、白石、赤色子 等。	外側、水洗	ヨコナダ	良好	青褐色	—
52	土師器・蓋・杯	全体	後円部北 111cm (3.5×3.5cm)	後円部北 111cm (3.5×3.5cm)	後円部北 111cm (3.5×3.5cm)	土師器	—	—	—	(13.8)	砂利混入、小 砂利混入、赤色 石、白石等。	外側、回転コナダ→回転 内側、回転コナダ→回転 底面	外側、青褐色 内側、青褐色	良好	内・外・青褐色	—
53	土師器・蓋・小皿	全体	南平野 111cm	南平野 111cm	南平野 111cm	土師器	—	—	—	(4.0)	磁體	外側、水洗→ 内側、回転コナダ	外側、青褐色 内側、青褐色	良好	内・外・青褐色	後晩唐

第5表 重政古墳石造物觀察表 (数値の単位はcm)

地點	說明	出土品種	年份	文獻	列名	特點	西周	
45號碑基石 井亭大廈	西周中期	37.5 美石	崇二乙危	召世祖廟 九月廿六日	舉災謹	刻題記	二圭次謹	1453年
46號碑基石 井亭	西周中期	36.5 美石	正厲年	夏侯定宮 九月廿六日	舉災謹	刻題記	二圭次謹	1446年
47號碑基石 井亭內廊柱	西周中期	38.5 美石		(鄭文消滅)	舉災謹	刻題記	二圭次謹	—

7. まとめ

(1) 復元案について

墳丘測量図の成果をもとに、墳丘規模と構造、築造年代を確認するために、計8本のトレンチを設定し発掘調査を実施した。後円部に第4・9・11トレンチ、くびれ部に第5・7トレンチ、前方部北側に第10トレンチ、前方部の前端に第6・8トレンチを設定し発掘調査を実施した。調査の成果については、前述のとおりである。ここでは墳丘測量図を基に、これらの発掘調査成果から墳丘の復元案について考えたい。

填丘測量調査の成果では、填長 55m、後凹部径 30m、くびれ幅 16.9m、前方部長 27.5m、前端幅 19.3m の

規模で、後円部高 3.1m、前方部高 2m の規模であると想定した。そこで、発掘調査において得られた成果より、復元案について考えてみたい。

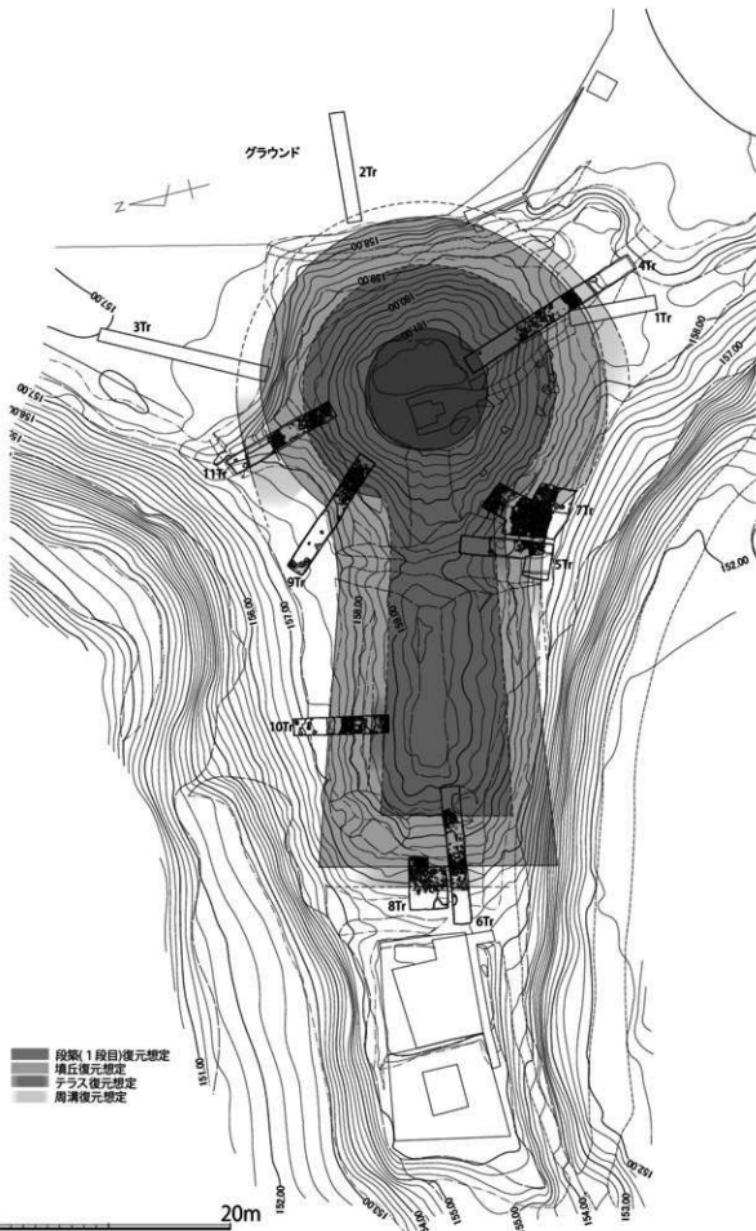
各トレンチにおける発掘調査では、墳端の根石、その外側に広がる墳端テラスを確認できた。この墳端テラスおよび墳端の根石を検出したトレンチは、4・6～8・11トレンチである。この墳端から外側にテラスを設けるという状況は、豊後大野市の前方後円墳では一貫してみられる特徴である⁽¹⁾。墳端の根石を検出したトレンチの成果から、墳丘の復元を行った。

後円部については、くびれ部の第7トレンチで確認した墳端から、第4トレンチで確認した墳端ライン、第11トレンチで確認した墳端ラインを通る径 28m が後円部径となる。また、後円部では、第4・11トレンチで周溝を確認しているが、くびれ部北側に設定した第9トレンチと南側に設定した第7トレンチでは、周溝は確認できなかつた。また、前方部に設定した6・8・10トレンチでも、周溝が確認できなかつたことから、周溝は前周せず台地と古墳との境界として後円部のみに設けられると考えられる。後円部の段築については、第7・9トレンチで1段目のテラスから墳丘斜面に傾斜変換する根石が確認されており、これら2箇所を通り、後円部段築と前方部段築が接続すると仮定すると、第75図のような復元となる。この復元ラインについては、第11トレンチと第4トレンチの間の等高線 159.250～159.500 でみられるテラスの下端ラインとほぼ重なることから、大きな誤差はないものと考えられる。

くびれ部については、墳丘南側の第7トレンチで確認したが、北側の第9トレンチでは削平により検出できなかつた。そこで、第7トレンチで検出したくびれ部から前方部にかかる墳端ラインを基に、墳丘主軸で反転復元すると、第9トレンチの中央から北側で確認された近世の道で削平されたラインとほぼ重なる。これらのくびれ部の墳端間を測ると 17.5m となり、この数値がくびれ部幅となる。なお、周溝については、さきにも述べた通り検出されていないことから、くびれ部まではめぐってないと考えられる。段築については、後円部でも述べたとおり、第7トレンチの墳丘側で一段目テラスから墳丘斜面への根石の列石が後円部から前方部にかけて確認されている。この根石の列石のラインの墳端側では、テラスに敷かれた玉砂利と一段目斜面の葺石との間がライン状に空白になっており、この空白の範囲が列石と並行していることと、墳丘測量図のテラスと等高線の状況から、このライン状の空白の範囲に段築の上端ラインがあったものと考えられる。

前方部については、第7トレンチで確認した墳端ラインから復元ラインを考えると、くびれ部から若干墳丘主軸側に入り込み、第5トレンチの西壁から隅角に向けては、墳丘測量による等高線から前方部隅角に向けて開くような復元ラインとなると考えられる。前方部北側の第10トレンチでは、削平により墳端部分が消失している。そのため、前方部南側で復元した墳端ラインを墳丘主軸で反転復元すると、第10トレンチで確認された2度目の堀込の溝状遺構のほぼ中央を通り、墳丘測量図の現状の墳端ラインとほぼ重なることになる。前端については、第6・8トレンチで検出した墳端が、墳丘測量図で指摘した墳端ラインとほぼ重なることが確認できた。そこで、この前端の墳端ラインを延長し、くびれ部から続く復元ラインが接する箇所を隅角であると想定した。この復元した前端と隅角から前方部は、前方部長 29m、前端幅 19.5m の規模になると考えられる。また、前方部の段築については、第6・10トレンチで段築のテラスから墳頂部にかけての傾斜変換となる根石の列石を検出しており、特に第6トレンチでは根石の列石ラインが墳丘測量図のテラスの位置ほぼ重なることが確認できた。前方部の平面観については、くびれ部から前方部隅角まで若干外側に開く形態ではあるが、ほぼ直線的に墳端ラインが延びている。この事象は、前方部側が狭くなるという古墳が立地している地形の影響を受けている可能性がある。

以上のことから重政古墳は、墳長 53m、後円部径 28m、前方部長 29m、くびれ部推定幅 17.5m、前方部前端の推定幅 19.5m、後円部高 3.1m、前方部高 2.0m を測り、後円部二段、前方部二段築成の前方後円墳（数值はテラス内側の墳端で計測）であったと考えられる⁽²⁾。



第75図 重政古墳墳丘復元図(1/400)

各調査区における成果をもとに、墳端ラインと、段築、周溝の復元について述べたが、第4・7・8・11トレチで検出した墳端根石の外側に広がるテラスについても考えてみたい。これらのトレチで確認した墳端外側のテラスは、墳端の根石のラインに並行し、墳端の根石よりも大きい石材を墳端外側のテラスの根石として設置しているのが検出されている。南側のくびれ部の設定された第7トレチでは、墳端ラインの外側に1.2mのテラスがくびれ部から前方部に向けて検出され、後円部の方にも広がっている可能性が高い。また、第4トレチでも幅0.8mのテラス、後円部北側の第11トレチでは幅0.5mと短いテラスが、前端部の第8トレチでは幅1.5mほどのテラスを確認している。これらの墳端外側のテラスについては、周溝が確認されている箇所では、幅が短く、周溝が確認されていない箇所については幅が広いという特徴があり、本来墳端ラインに並行して周囲していたものと考えられる。これらのテラスまで含めると、全長55mを超える規模となる墳丘復元案が考えられる。

測量調査と発掘調査の成果を合わせて、復元案を考察してきたが、後円部で確認された周溝がどのように消失していくのか、想定のすることしかできなかった。今後、発掘調査により、この周溝がどのようにめぐらかの確認が必要となろう。

(玉川)

第6表 重政古墳の復元案

復元案作成時期	測量・発掘からの復元案	九州考古学会発表復元案	測量時の復元案
墳長	53 m	53.6 m	55 m
後円部径	28 m	27.4 m	30 m
くびれ部幅	17.5 m	16 m	16.9 m
前方部長	29 m	28 m	27.5 m
前方部前端幅	19.5 m	19.3 m	19.3 m
後円部高	3.1 m	3.1 m	3.1 m
前方部高	2 m	2 m	2 m
段築（後円部）	2 段	2 段	2 段
段築（前方部）	2 段	2 段	2 段
墳端外側のテラス含む全長	55 m	- m	- m

【註】

- (1) 小坂大塚古墳や道上古墳、秋葉鬼塚古墳と同様に墳端の外側にテラスを形成し、周溝へと接続するという特徴。
- (2) 本報告と九州考古学会で発表した時点と年報で報告した復元案に誤差があるため、下記の通りその数値一覧を作成した。田中裕介・玉川剛司・諸岡郁 令和3年度 九州考古学会研究発表「大分県豊後大野市所在重政古墳の調査」2021-11

【引用・参考文献】

- 綿貫俊一 1992 「第5章大分県 重政古墳」『前方後円墳集成 九州編』山川出版社
 田中裕介 1995 「東九州における古墳時代の首長系譜の変遷と両期（上）- 墳輪と墳丘形態からみた大分の首長墳の編年 -」『おおいた考古』第7集大分県考古学会
 諸岡 郁 1990 「三重町の前方後円墳」『おおいた考古』第3集 大分県考古学会
 諸岡 郁 1995 「大分県三重町重政古墳の測量調査と採集埴輪について」『おおいた考古』第7集 大分県考古学会
 諸岡 郁 1997 「重政遺跡」『三重地区遺跡群発掘調査概報II』三重町教育委員会
 諸岡 郁 1998 「重政古墳」『大分の前方後円墳』大分県文化財報告書 第100号 大分県教育委員会
 下村智・吉田和彦・玉川剛司 2003 「古墳におけるデジタル測量の研究 - 大分県下の古墳を事例として - デジタル測量」『九州考古学第178号九州考古学会
 玉川剛司 2004 「小熊山古墳測量調査」『文化財研究所年報』2 別府大学文化財研究所
 玉川剛司 2012 「小坂大塚古墳測量調査について」『豊後大野市内遺跡発掘調査概報3 - 平成22年度調査 -』豊後大野市教育委員会
 玉川剛司 2014 「漆生古墳群測量調査について」『豊後大野市内遺跡発掘調査概報4 - 平成23-24年度調査 -』豊後大野市教育委員会
 玉川剛司 2015 「秋葉鬼塚古墳測量調査について」『豊後大野市内遺跡発掘調査概報5 - 平成25年度調査 -』豊後大野市教育委員会
 玉川剛司 2016 「坊ノ原古墳測量調査について」『豊後大野市内遺跡発掘調査概報6 - 平成26年度調査 -』豊後大野市教育委員会

(2) 確認調査の結果

保存状況と後世の改変 後円部の東側墳裾と墳丘北側の後円部からくびれ部、前方団の墳裾は周溝をふくめて近世後期及び近代のグラウンド造成で削平されている。それ以外の部分は残されているが、前方部南側は自然崩落によって、周溝や墳裾の一部が消失していると推定される。前方部前端の周溝の存否は墓地造成のため不明である。

墳丘構造 重政古墳は墳長53mの前方後円墳である。後円部径は28m。前方部長は29m、くびれ部幅は17.5m、前方部前端幅は19.5m。後円部二段、前方部二段築成である。墳丘装飾の状況は、一段目と二段目の斜面には人頭大から拳大の角礫を中心に円礫をまじえた葺石を施している。墳端部分では葺石を水平に延長し、墳端テラスの平坦面敷石を構築する。墳端テラスは墳丘を全周するが、後円部では50cmほどと狭く前方部では1mをこえる。これは一段目平坦面にもいえ、後円部の一段目テラスは狭く、前方部は広い。一段目平坦面上にはくびれ部では砂利敷き、前方部前端と後円部ではこぶし大の礫敷きをおこなっている。周溝については後円部で幅2.5mの溝を確認したが、くびれ部と前方部では同様の構造は確認できなかった。

埴輪の樹立 壺形埴輪の出土量からみて墳丘上では一段目平坦面と墳丘頂に樹立していたと考えられる。配置の方法は不明だが、前方部前端では、敷石の中に径20cmの円形の砂利敷きが確認できた。円筒埴輪の使用は認められない。

主体部 墳頂部には宗教施設があり、近世には墓地になっていることは確実に思われたので調査は控えたが、地下レーダー探査の結果、後円部中央に一ヶ所、前方部中央北寄りに一ヶ所、主体部らしき反応が確認されている。

(3) 重政古墳の特徴と築造時期

墳端テラス 墳端に葺石の敷設したテラスを設けるのは、三重地域の前方後円墳では、道の上古墳、小坂大塚古墳、秋葉鬼塚古墳で見ることができる。この地域の古墳の構築の特徴と考えることができる。同一の特徴は別府湾岸の諸古墳では観察できないが、唯一大野川下流域の前方後円墳である大分市小牧山6号墳でその存在が判明している⁽¹⁾。いずれも前期末から中期前葉の古墳である。この墳端に石敷きのテラスを設ける点は、宮崎市生目古墳群前期後半の1号と3号墳などで顕著に観察され、この種の墳端テラスの敷石を集成した石村智規氏は、九州では大分県と宮崎県に類例が集中し、その初現形態は大阪府の玉手山古墳群にあることを指摘している⁽²⁾。古代の駅路のルートから推定できるように、三重盆地は別府湾岸から日向に向かう陸路の拠点であることを考えれば、墳端の敷石テラスは日向との交流の中から取いれられた要素の可能性を考えるべきであろう。

壺形埴輪の特徴 土師器を除く埴輪群の形式組成の特徴は、①円筒埴輪が伴わないことである。トレンチはほぼ全体にわたって入れているので、円筒埴輪と考えられる破片が皆無であるから、円筒埴輪は重政古墳においては用いられていないと考えられる。

②壺形埴輪は、通常二重口縁タイプと単口縁タイプが存在するが、二重口縁タイプの壺形埴輪は全く出土せず、すべて単口縁タイプである。このような单一形式からなる壺形埴輪ばかりであり、その形態的特徴は、口縁部が上方に発達して外方に伸び、口唇部が屈曲し、頸部が膨らむ胴張の傾向がある。胴部下半は長胴化して、底部をいったん平底につくり、焼成前に穿孔している。単口縁タイプのみからなるのは豊後南部の中期前葉の壺形埴輪の特徴である。さらに口縁部に三角形ないし小型円形の透かし穴がうがたれ、様々な線刻文様が刻まれていることが判明した。頸部が胴ふくらみになって、透かし穴が2ないし3ヵ所穿たれたる壺形埴輪は、実は重政古墳に隣接する秋葉鬼塚古墳でも発見されており(第93図6~8)、管見の限り2例目である⁽³⁾。この豊後大野地域に集中していると考えられる。このような口縁部が発達しそこに透穴を穿つ壺形埴輪は、長野県森将軍塚

古墳や山梨県甲斐銚子塚古墳など中部以東の東日本の前期古墳において幾つか例が知られているが、西日本では極めてまれである。また底部の特徴も以前から指摘したように、大分県中津市の中期前葉の方墳勘助野地1号墳⁽⁴⁾の類例があり、勘助野地1号墳は副葬品からも中期前葉に考えられており、壺形埴輪も同一の時期の埴輪ということになり、両者の関係が注目される。

以上のように口縁部と底部の特徴において重政古墳の壺形埴輪は、通常の壺形埴輪の製作ルールを明らかに逸脱している。その特徴は東日本の前期後半から末の壺形埴輪との類似を指摘できる。しかし目を九州に転じれば、逸脱の方向は異なっているが、宮崎市生目古墳群生目5号墳の壺形埴輪、熊本県阿蘇の長目塚古墳や菊池市慈恩寺京塚古墳などで、形態や製作のルールを逸脱した埴輪が製作されており、それらの埴輪はいずれも中期の前葉から中葉の古墳であり、壺形埴輪の製作において中央や北部九州から離れて、中九州から南九州にかけて独自な動きが現れたものと考えられる。

重政古墳の築造年代 壺形埴輪の形態から中期前葉と推定される。また壺形埴輪の特徴の一一致から、近接する前方後円墳秋葉鬼塚古墳は、ほぼ同時の築造と考えてよい。このことは墳丘形態の比較からも支持される。

(田中)

【註】

- (1) 池邊千太郎「大分市松岡所在の小牧山古墳群について」『おおいた考古』第7集 大分県考古学会
- (2) 石村智規「九州島における導入期の葺石に関する一考察」『学術研究』第1集、2019 p38～43、佛教大学『学術研究』編集委員会
- (3) 田中裕介「秋葉鬼塚古墳出土遺物」『豊後大野市内遺跡発掘調査概要報告書』5、2015、p27～29、同「秋葉鬼塚古墳出土遺物(ほか)」『豊後大野市内遺跡発掘調査概要報告書』6,2016、p31・32、豊後大野市教育委員会
- (4) 村上久和・田中裕介(ほか)「勘助野地遺跡」『一般国道10号線中津バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書』(1)大分県教育委員会

第4節 秋葉鬼塚古墳

1. 調査の経過

秋葉鬼塚古墳は三重盆地を南側から見下ろす標高166m程の台地先端上に立地する前方後円墳である。台地の周囲は入り組んだ谷地形であり、三方向を見下ろせる環境である。そのうち東側の谷には現在国道326号線が通り、古代官道以来の歴史を持つ日向街道としての交通路を見下ろす位置である。

墳丘は東側から南側にかけて掘削により大きく損なわれているなど改変を受けていることが観察でき、周囲には葺石とみられる礫が数多く散乱している。地元には盗掘を受けた伝承もあるものの、主体部の状況や出土遺物等は知られていない⁽¹⁾。戦後には古墳と認識はされて円墳との記述があるが⁽²⁾、1975(昭和 50) 年頃には前方後円墳として周知されている。

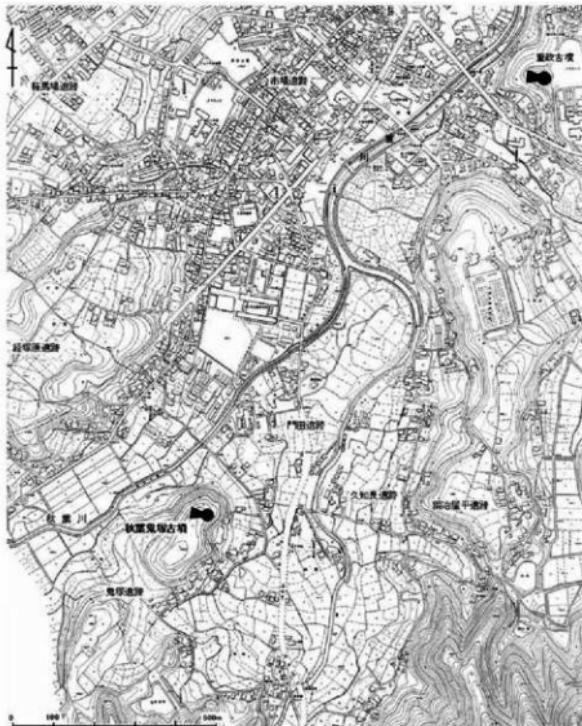
1993(平成5)年に測量図の作成が行われ、その後大分県指定史跡となっている⁽³⁾。旧状を残す北側墳丘から推定して、全長は50m程の規模との見方もあるが、築造時期や墳丘規模など詳細は不明な点が多く、また当時は鬱蒼とした竹林で墳丘全体が荒れていたことにより、長らく立入りにくい状態が続いていた。

2010年頃より地元鬼塚区民による清掃とともに登山道の整備が行われるようになった。史跡の環境が向上した機に、築造当初の墳丘規模や形態及び築造時期の把握を目的として、豊後大野市教育委員会で調査を行った。調査は測量調査を2013(平成25)年度に、トレンチ12箇所による範囲確認調査を2013年度に1次、翌年度に2次調査を実施した。

(諸國)

【註】

- (1) 玉永光洋 1987「古墳時代」『大分県三重町誌総集編』三重町
 - (2) 中島宗方 1966「古墳時代」『三重町誌沿革編』三重町
 - (3) 諸岡郁 1998「秋葉鬼塚古墳」『大分の前方後円墳 三重・西国東地区編』大分県教育委員会



第76図 秋葉鬼塚古墳周辺地形図(1/12000)

2. 墳丘測量調査

(1) 測量調査に至るまでの経過

秋葉鬼塚古墳は、鬼塚・秋葉地区に位置する南西から北東方向に延びる台地上の北東側縁辺部に主軸をほぼ東西に向けて築造されている三重盆地最西端の前方後円墳である。台地東側には、豊後国府から日向国府へと続く古代の道が想定(田中 2004)されており、古代以前より交通の要衝であったことが推定される。

本古墳は、1990(平成 2)年に『おおいた考古』にて略測図が紹介(諸岡 1990)され、1993(平成 5)年には三重町教育委員会(現豊後大野市教育委員会)が中心となった墳丘測量調査が実施された。当時の測量は、基準点よりトラバースを組んで、平板測量にて 25cm 間隔の等高線図を作製している(諸岡 1998)。このような調査過程のなか、豊後大野市では 2010(平成 22)年度より、市内に所在する前方後円墳の精緻な測量図の作成および、墳丘規模・周溝の有無等の確認するための発掘調査を目的としたプロジェクトが実施されている。その一環として、秋葉鬼塚古墳についても、世界測地系の座標による測量図が必要となった。そこで、豊後大野市教育委員会の依頼により、変化点測量法(玉川 2003・2004)による、墳丘規模・形態等の確認のための墳丘測量調査を行った。測量調査に実施にあたり、あらかじめ市教委が準備した計 2 本の基準点⁽¹⁾をもとに必要に応じて補助杭を設定した。

墳丘測量調査は、別府大学の玉川剛司の指導のもと、嶋谷雄紀(別府大学大学院文学研究科 2 年)、井大樹、安部和城、井樋豪太、木場浅葱、藤川貴久、松園菜穂(別府大学史学・文化財学科 3 年)、鮎川和樹、田中光子、松尾智也(別府大学史学・文化財学科 2 年)、有村源基、高木慎太郎、塙見恭平(別府大学史学・文化財学科 1 年)が参加し、2 班に分けて実施した。なお、測量調査期間は、2013(平成 25)年 10 月 19 日から 2014(平成 26)年 3 月 23 日の計 14 日間であった。測量範囲は、墳丘部を中心に 7,028.209 m²を対象とし、計測点は墳丘部及び周辺地形を合わせると計 5,200 点を計測した。

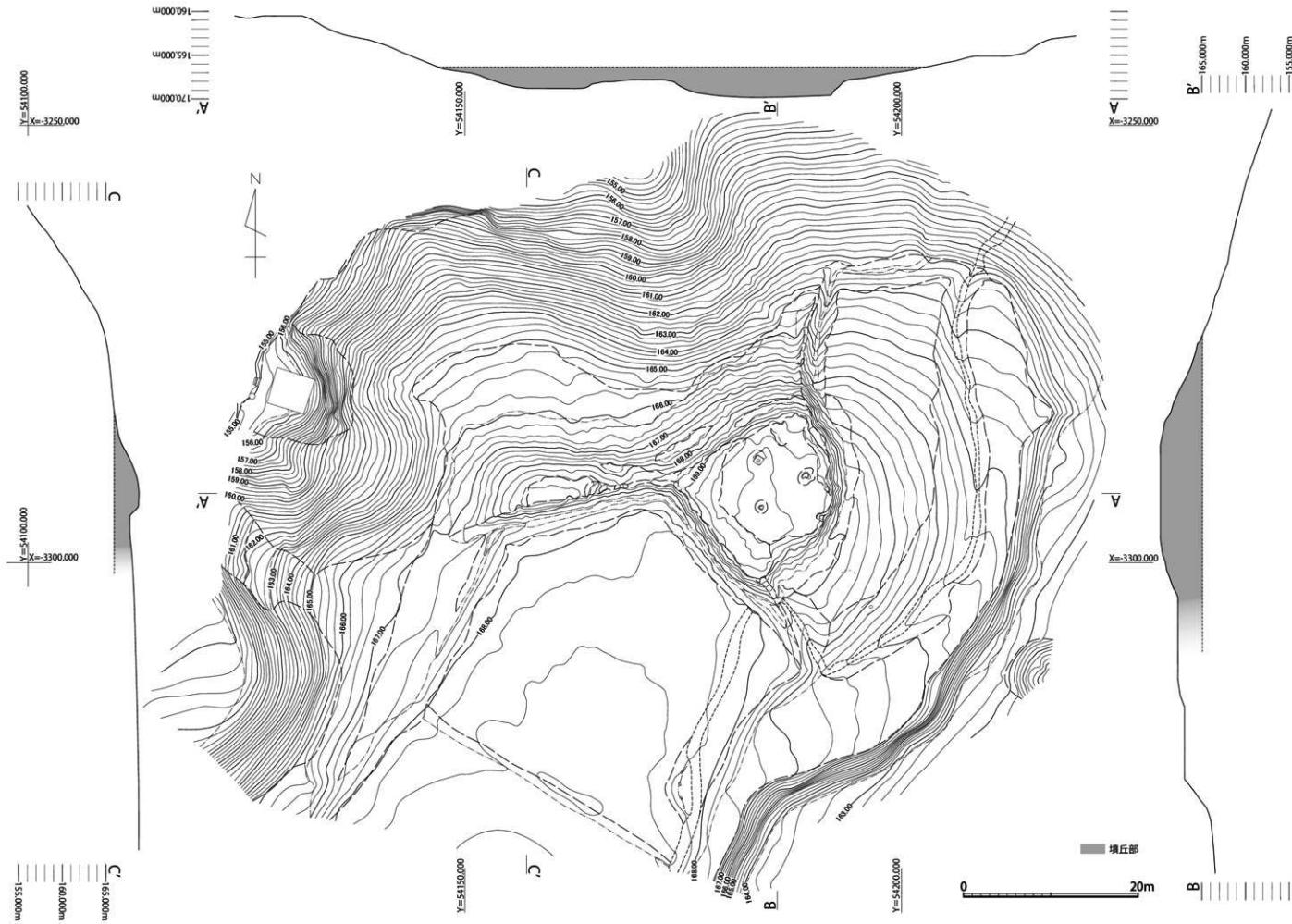
以下、調査の成果について述べていきたい。

(2) 墳丘測量の内容と成果(第77図)

後円部 墳丘の現状は、後円部東側から南側くびれ部まで墳丘が大きく削り取られているため、墳端から墳丘斜面まで比較的良好に遺存しているのは後円部北側のみである。また、その後円部北側についても、台地の斜面と接しているため、明瞭な墳端ラインはみられない。しかし標高 166.000m に沿って、くびれ部と墳丘西側削平面に接する間の一部に墳端と思われる明瞭な傾斜変換線がみられる。これら 2 地点の墳端を結ぶ、径約 33m が後円部径になると想定される。また、第77図をみると後円部東側が大きく削平されているにもかかわらず、等高線が南側に向かって弧を描いてめぐっている。これは、旧地形に沿って墳丘が削平されたと考えられる。これを示す通り、計測点より作製した 3D 図(第79図 1)⁽²⁾でも鮮明に確認でき、後円部が円形を呈しているのが確認できる。

墳頂部については、後世の削平により平坦面が形成され、測量調査中に表探した 16 世紀～16 世紀末の陶磁器片から、少なくとも 16 世紀には墳頂部が削平されていたことが窺える。また、北東側の溝状を呈している里道や北側のくびれ部周辺のテラス面、南側の掘削面では、拳大から人頭大の片岩系の礫を多く確認した。これらの礫は、本台地が阿蘇溶結凝灰岩系の台地であることから本来含まれる礫ではないため、葺石として持ち込まれたものと考えられる。現状の後円部墳頂高は、3.5m である。

段築については、明確なテラスが確認できない。しかし、北側くびれ部の上段の標高 167.500～167.750m の間に長さ 8m 程のテラス面がみられる。このテラスは、段築の痕跡である可能性があるが、発掘調査による確認が必要である。また、このテラスの東側にも、標高 168.000～168.500m の間にテラスが存在するが、現状では両者は接続せず、現状墳丘上端ラインに近いことから、東側のテラスは後世の盛土掘削に伴うものであるとみら



第77図 秋葉鬼塚古墳填丘測量図 (1/400)

れる。

くびれ部 墳丘北側のくびれ部については、等高線の乱れもなく傾斜変換線が確認できることから遺存状態が良い。一方、南側のくびれ部は、後円部から続く削平により墳丘部の半分以上が消失している。両側のくびれ部の標高を確認すると、北側くびれ部の標高は166.250mで、南側のくびれ部と想定される地点の標高は168.250mであることから、北側くびれ部のほうが2.0m低い。この高低差は、小坂大塚古墳と同様に一方向からの視覚を意識した築造なのか、本来同標高であったものが墳丘の南側部分を掘削した際の造成で埋まってしまったものかは判断できなかった。

くびれ部の墳頂部及び隆起斜道については、後世の南側墳丘斜面の掘削と浸食作用による崩落している。段築については、確認できなかった。

また、葺石については、北側墳丘斜面にみられ、くびれ部の墳端ライン付近には落ち込みと考えられる拳大から人頭大の片岩系の礎が多く確認できた。

前方部 前方部は、後円部やくびれ部と同様に、墳丘の北側と南側で遺存状況が大きく異なる。北側については、標高165.750～166.000mの等高線に沿って、墳端ラインが巡っている。しかし、南側については、くびれ部から続く掘削により墳丘盛土が消失しているため、くびれ幅については現状では判断できない。隅角については、北側のみ確認できるが、等高線をみると明瞭な稜線がつかないところから、若干ではあるが盛土が流出しているものと考えられる。前端部については、北側隅角の墳丘盛土の流出により、北側の隅角よりやや南西側に振って等高線が巡っているように見えるが、墳端ラインは南北方向である。また、南側の掘削面にて円筒埴輪片(第93図2)を表探した。川西編年Ⅲ期であると考えられる。段築については、墳丘北側斜面の167.750mの等高線に沿って長さ2.5m、幅0.8mのテラスが確認できる。このテラスは、後円部で確認した段築と考えられるテラスとほぼ同じ標高であることから、段築の痕跡である可能性が高い。なお、前方部の墳頂高は、2.25mである。

周辺部 墳丘の立地が台地上縁辺であるため、墳丘北側及び西側は傾斜地となっている。特に北側の後円部については、墳端と考えられる傾斜変換線とほぼ接している。また、前方部端部である西側については、台地の崩落に伴う上端ラインと墳端ラインとの間が1.0mと狭い。これは、崩落ラインと台地の下段にある社殿造営に伴う背面の掘削ラインとがそれぞれ並行していることから、社殿造営に伴う掘削が要因の一つであると考えられる。墳丘保護の観点から、今後何らかの方策を講じる必要があるだろう。

一方、墳丘の南側については、墳丘を削平し畑地耕作の区画による平坦面が広がっている。これらの状況から、墳丘周辺からは、周溝や造出等の墳丘に伴う外部施設が現状で確認できなかった。

(3) 測量調査のまとめ

後円部東側から前方部南側隅角にかけて、後世に大きく削平を受け、墳丘の1/3が消失している。しかし、先述した後円部径の数値と、測量調査中に実施していた1次調査の成果から墳丘の復元案としてまとめてみたい(第78図)。

測量調査の結果から、後円部径については後円部北側に遺存している墳端ラインから、直径約33mの円を想定した。この墳端ラインは、墳端外側のテラスの端部と符合するもので、第78図の内側の網掛けは墳丘の復元想定で、外側はテラスの復元想定である。また、全体的に後円部がくびれ部にかけて窄んでいるため、橢円形を呈している。

後円部についてみると、測量調査の成果から後円部北側のくびれ部から墳頂部まで伸びる里道までの範囲は、墳端が比較的良好に遺存していると考えられ、径33mの規模になるとえた。しかし、くびれ部南側に設定した第3トレーニチと後円部南側に設定した第2トレーニチで、墳端の外側にテラスが設けられ、そのテラス外側の端部に墳端の根石に使用されている石材とほぼ同じサイズの石材が並べられているのが確認された。この墳端

外側テラスの端部の列石がこの径 33m のラインと重なることが分かった。そこで、両トレンチ調査で確認された墳端根石のラインで改めて想定すると、径 29m の楕円形になると考えられる。また、後円部墳頂部については、削平が著しく、第 77 図の断面図より築造当初には現状より 2m 以上高かったと推定できるため、後円部の主体部は残存していない可能性も考慮する必要がある。

くびれ部については、墳丘北側のくびれ部については、等高線の乱れもなく傾斜変換線が確認できることから遺存状態が良好である。一方、南側のくびれ部は、後円部から続く削平により墳丘部の半分以上が消失しているという状況であった。しかし第 3 レンチの発掘調査において、くびれ部の墳端と墳端外側のテラスが検出されたことにより、両側のくびれ部の位置の想定が可能となり、くびれ幅は 15m であると想定できた。しかし、北側のくびれ部については現況の墳端ラインであるため、今後発掘調査により変動する可能性がある。

前方部については、墳丘北側の前方部は標高 165.750 ~ 166.000m の等高線に沿って、墳端ラインが確認され、墳端ライン周辺の等高線も大きな乱れがないことから良好に遺存していると考えられる。一方、墳丘の南側の前方部については、後円部から続く削平により大きく掘削され、前方部の 1/2 が消失している状況であった。しかし、先ほどくびれ部で述べた第 3 レンチの成果より、墳丘主軸の位置の推定が可能となったことから、前方部北側の現状の墳端ラインから墳丘主軸で反転復元することで、前方部長 21m、前端幅 17m を測る規模の前方部であった可能性が想定できるようになった。

復元の結果は、墳長 51m、後円部径 29m、くびれ幅 15m、前方部前端幅 17m、前方部長 21m を測る前方後円墳であったと考えられる。しかし、墳端外側のテラスについては、全周するかどうかは不明である。今後、墳丘北側への発掘調査が必要であろう。

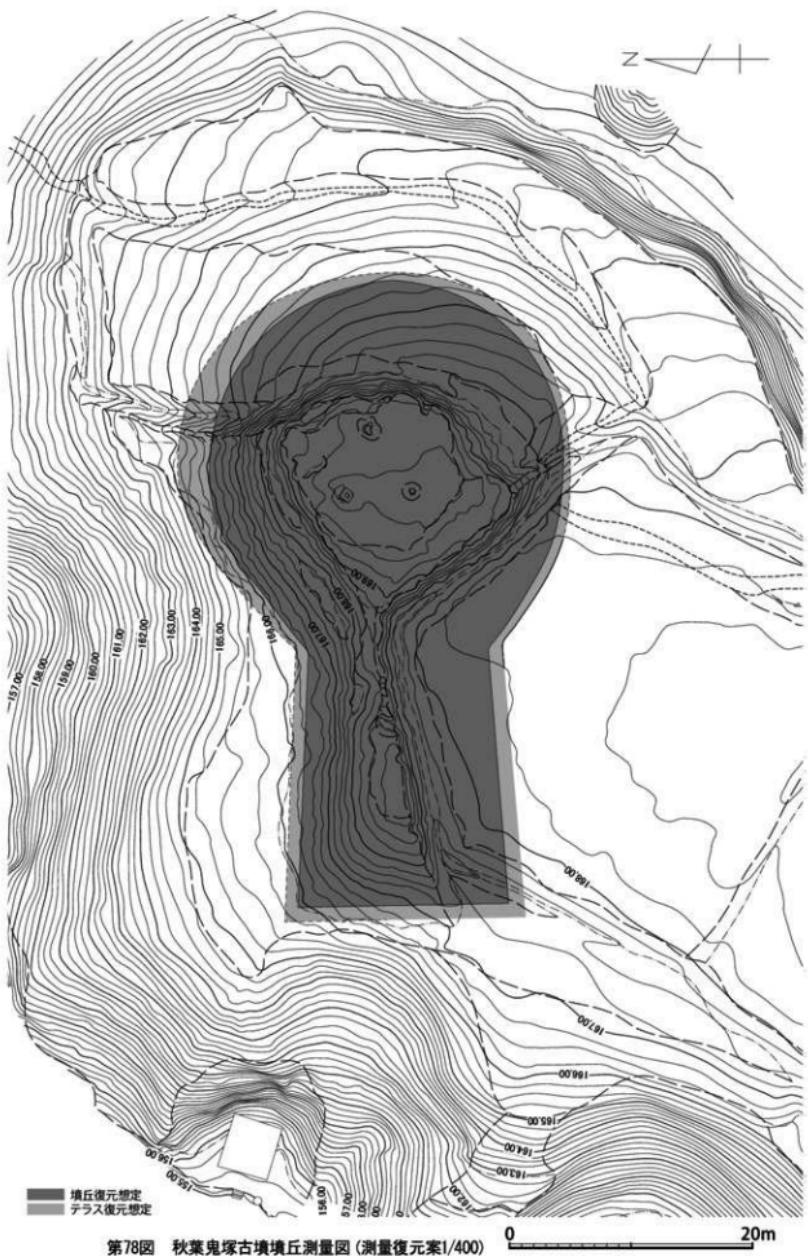
次に、秋葉鬼塚古墳の立地と周辺からの視認性について考察したい。

秋葉鬼塚古墳は、三重盆地の西端に位置し、南西方向から延びる台地の北側の縁辺に立地しているという特徴を持つ。また、古墳の主軸は東西方向で後円部が東側を向いている。これらの立地から、墳丘の北側からの視認性を考慮した築造である可能性が高い。これは、第 79 図の真上からの 3D 図からもうかがえる。そのため、台地の縁辺に立地している状況をみるために、4 は後円部側の真横から、5 は前方部側の真横からみた 3D 図を作製した。4 では図の左側、5 では図の右側が盆地側となる。また、墳丘北側からの視認性を確認するため、5 ~ 8 の 3D 図を作製した。3D 図を作製するにあたり、実際の現地での見え方も考慮するために透視投影（中心投影）の 3D 図も作製した。5 は真横の平行投影の 3D 図、6 は 5 と同じ位置からの透視投影（中心投影）の 3D 図、7 は台地下から墳丘を仰ぎ見た平行投影 3D 図、8 は 7 と同じ位置からの透視投影（中心投影）の 3D 図である。前方後円墳であることを視認するためには、古墳が立地する台地の北東から北西から方向からの視認性が良好であることがわかる。つまり、これらの方向に古墳を見せたい対象があった可能性がある。これに関連して、秋葉鬼塚古墳の北西方向には前方後円墳である重政古墳が立地し、築造当時植生がなかったことを考えると、両古墳間に障害物がないことから良好に視認できたものと考えられる。今後、古墳周辺の調査が進むことで、古墳立地の研究が進展することを期待したい。

(玉川)

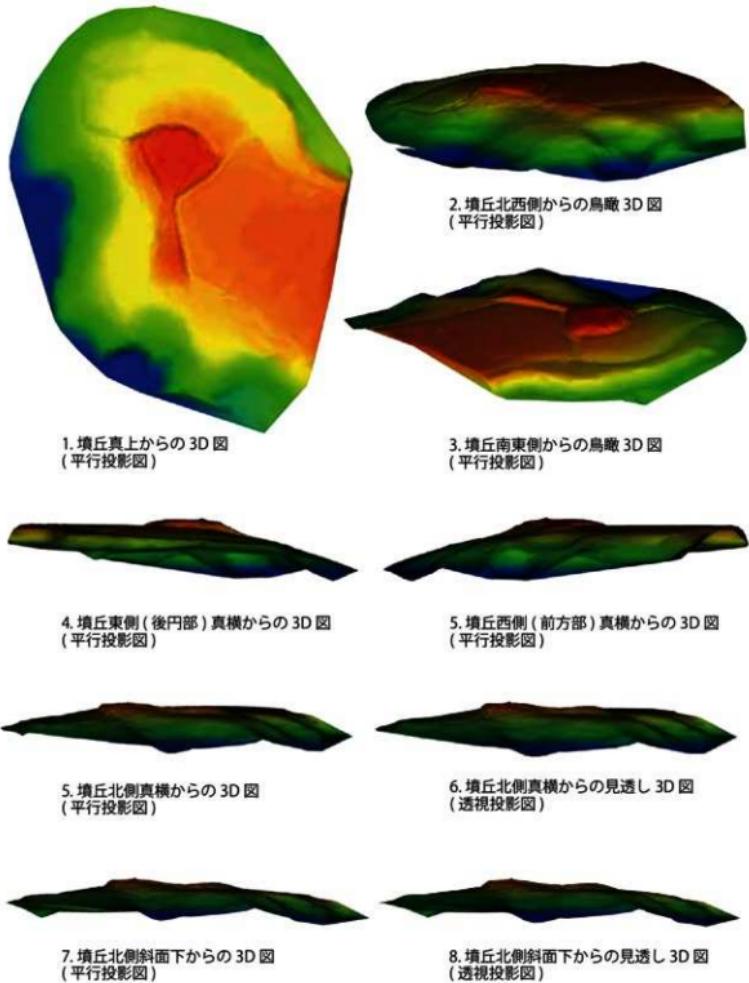
【註】

- (1) 基 -1・2 をそれぞれ後円部とくびれ部付近の墳頂部に設置。
基 -1 X=3291.659, Y=54190.063, Z=169.725, 基 -2 X=-3290.507, Y=54172.336, Z=168.653
- (2) TIN データにより 3D 図を作製。TIN データとは、不規則三角形網 (Triangulation Irregular Network の略) というデータで、地形表現に優れているという特徴がある。点群からそれぞれに最も近い三点とつなげ、三角形の集合体で立体物を表現するものである。



第78図 秋葉鬼塚古墳埴丘測量図(測量復元案1/400)

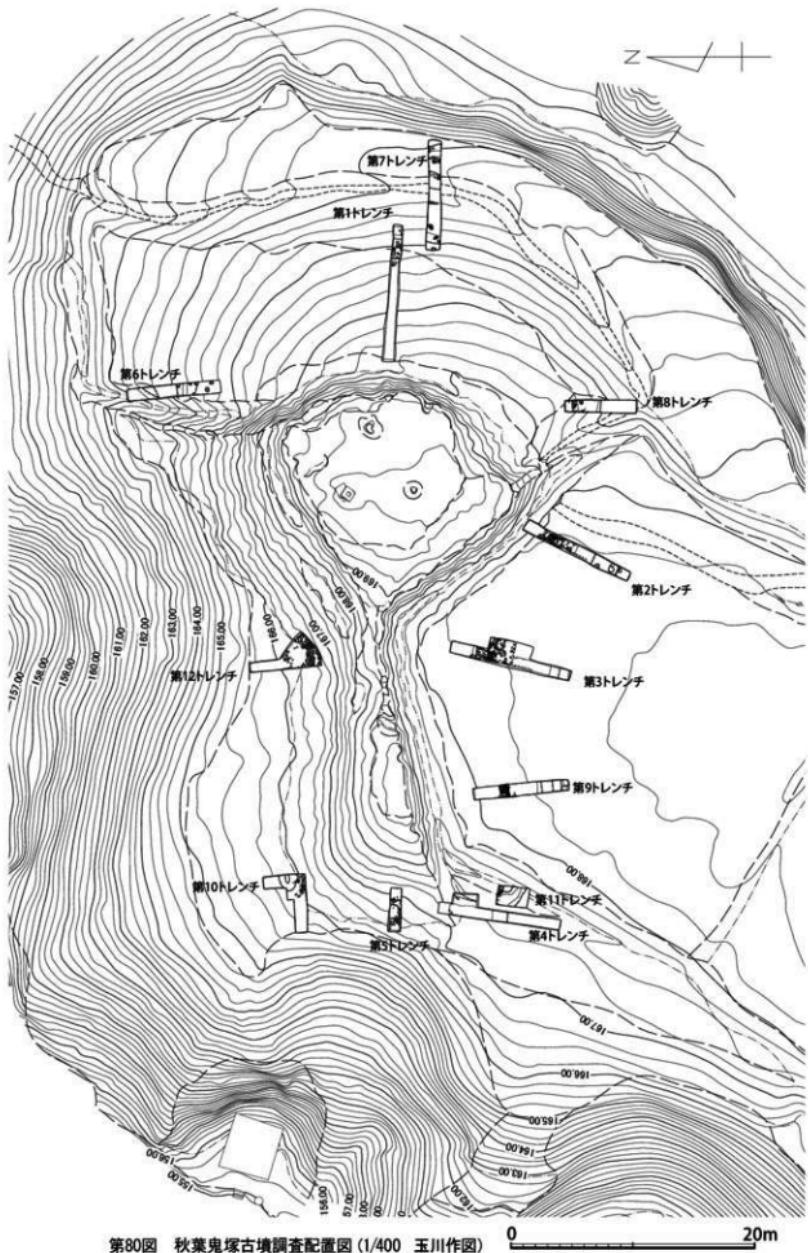
0 20m



第79図 秋葉鬼塚古墳3D図

3. 確認調査

調査トレンチは掘削された墳丘の復元として墳端検出や保存状況、及び遺物による築造年代の確認を目指して、2013(平成25)年度の第1次調査では第1～第5トレンチの5箇所で、翌年度の第2次調査では第6～第12トレンチの7箇所を設定した。



第80図 秋葉鬼塚古墳調査配置図(1/400 玉川作図)

(1) 第1トレーニング (第81図 写真図版17)

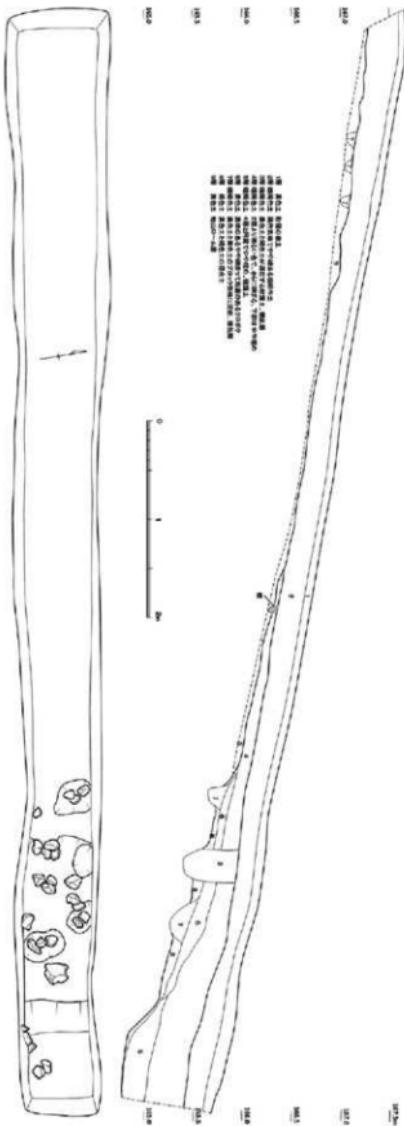
後円部の東端検出を目的に幅1m長さ11.2mで設定した。トレーニング西側より中央付近にかけては、表土擾乱層直下に地山ローム層が現れたが、擾乱が多く特に遺構は検出できなかった。一方、トレーニング東側の標高166.0m付近よりでは黒色土の堆積土層及び、黒土と黄色土の混合土(8層)と共に葺石と思われる礫を検出した。礫は拳大のやや角のある川原石で、約3mの範囲で出土しているが、部分的しか残っていない。基底石らしい大型の礫も見られるものの、後世の遺構による擾乱等で移動しているとみられる。さらに東側の標高は165.2m付近で地山が急角度で落込むように掘込まれた遺構を検出しているが、後述する第7トレーニングの状況から判断して、周溝に関係する遺構と考えられる。礫は墳端テラスの葺石の可能性があり、墳端を含む墳丘は削平により失われていると思われる。

樹木により阻まれて本トレーニングではこれ以上の拡張は行っていないが、7トレーニング同様にこのまま自然地形に沿って下降すると思われる。遺物は全く出土していない。

(2) 第2トレーニング (第82図 写真図版17)

後円部の南端検出を目的に幅1m、長さ9.5mで設定し、墳端部の葺石と周溝を検出した。

調査区北側には墳丘が削平された痕と思われる地山ローム層があり、調査区中央付近は周溝及び墳裾部分と考えられる葺石敷設面が約2.5mの範囲で検出したため、墳丘を約3m程掘削されていることがわかる。葺石面は途中で傾斜角度が変化する標高167.2m付近が墳端と思われ、墳丘側1m程は30°の急傾斜であるのに対し、外側は緩やかに傾斜するように設けられている。他のトレーニングからの状況から幅1.7m程のテラス状の平坦面が墳丘周囲を巡らせていていると思われる。葺石の石材はやや角のある河原石であり、墳丘斜面からテラスにかけ隙間なく敷設されている。部分的に失われた



第81図 秋葉鬼塚古墳第1トレーニング (1/50)

箇所が多いが、墳端根石も含めて傾斜角度以外には礫の配置に区別はなく、テラス端のみやや大きめの礫が使用されているのが観察できる。

周溝は墳端から幅4m程の断面は逆台形で、黒色とやや褐色気味の土層が交互に堆積し、層中に転落した葺石礫が多数含まれている。テラス端の葺石より南に40cm付近が周溝底で最も低く、標高166.9mである。溝底にはローム土と黒色土の混合土(9層)が約10cmの厚さで堆積し、周溝掘込み後の整地層と思われる。

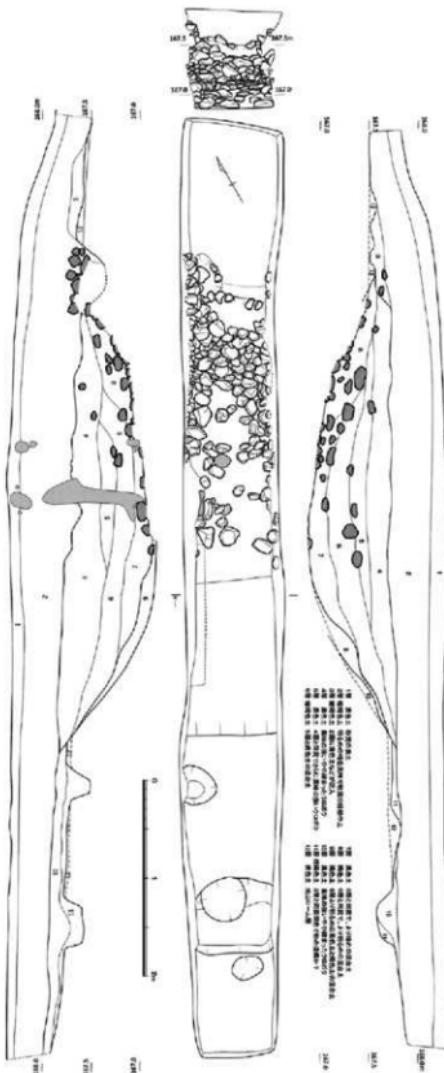
周溝より南側に浅い溝等いくつかの掘り込みがあり、後世の擾乱とみられるが、周辺より縄文・弥生時代の土器片が採集されていることから、古墳築造以前の遺構の可能性がある。なお、周溝堆積土の5層の黒色土層より青磁片も出土しており、周溝が完全に埋没するのは中世以降と思われる。

遺物は埴輪片を含む土器片が周溝堆積土の各層より流れ込みの状態で出土している。

(3) 第3トレーナ (第83図 写真図版17・18)

南側くびれ部の検出を目的に幅1m長さ10mに、東側に1m×2.4mを拡張して設定し、くびれ部墳端部の葺石と周溝を検出した。

第2トレーナと同様に調査区北側は墳丘が削平された痕と思われる地山ローム層があり、調査区中央付近は周溝及び墳裾部分と考えられる葺石敷設面が約2.5mの範囲で検出した。標高167.0m付近で傾斜角度を変えて敷かれており、墳丘側1m程は32°の急傾斜で、外側には幅1.5mの緩傾斜になっていることから、墳端テラスと思われる。葺石も第2トレーナと同様の石材で、墳端も含めて礫の大きさに区別はないが、テラス端寄りにやや大きめの傾向が見受けられる。テラス端は調査区東よりわずかに



第82図 秋葉鬼塚古墳第2トレーナ (1/50)

屈曲しており、くびれ部の形と推定される。

周溝は、テラス端より南側約1.7m付近まではやや下降し、標高は166.4mで次第に上昇して立ち上がる。テラス端より5.3m幅で、第2トレンチより幅・深共に規模が大きく掘り込まれている。溝底には墳丘面にかけて最大約20cmの厚さで整地層の堆積が確認されている。

周溝内は、2トレンチと同じく黒色とやや褐色気味の土層が交互に堆積し、堆積土層中に葺石の崩落した礫と思われる多数の礫が含まれている。

遺物は壺形埴輪片が多数出土しており、完形近くに復元できた個体(第93図3)もあるが、いずれも墳端テラス直上付近に転落したと、推測される状態で出土している。

(4) 第4トレンチ(第84図 写真図版18)

前方部の南端検出を目的に幅1m長さ10mに追加して東側に1m×2m程度を拡張して設定した。葺石の崩落とみられる礫を検出したが、葺石としての配置は確認できなかった。トレンチ北寄りに周溝状に浅くゆるやかな逆台形の掘り込みが検出されたが、底部の標高は166.2mで、後述の第11トレンチから続くものとみられる。

東側拡張部分に地山の傾斜面を検出し、黒色土と褐色土の混合した土層も見られることから前方部墳端の残存とも思われる。葺石の遺存が良くないこと、擾乱も著しく不明確な土層堆積状況であるため、調査当日では墳端の確認はできなかったが、第11トレンチで隅角の盛土から推定して、墳丘端部の一部と考えられる。遺物もわずかな破片のみの出土である。

(5) 第5トレンチ(第85図 写真図版18)

前方部の西端検出を目的に、幅1m長さ3.8mで設定した。表土層直下より葺石を検出し、西側に傾斜して検出しているが、部分的しか残っていない上に土層も軟質のため、転落など移動している可能性があり、本来の配置かどうか不明である。標高166.3m付近に傾斜が変化するように見え、人頭大の大型礫もあるが、墳端かどうかは不明確である。なおトレンチの西側は台地縁辺の傾斜地形へと続く上、崩落の痕跡と考えられているため、周溝の確認は行わなかった。

(6) 第6トレンチ(第86図 写真図版18)

後円部を中心に関形状に等高線が巡る畠跡の傾斜地上で、後円部北端の検出を目的に幅1m長さ7.7mをほぼ南北に設定した。トレンチ中央よりやや南により溝状の掘込みを検出し、溝の幅は約1.6m、検出面より深さは0.4mで、溝底部の標高は164.25mである。溝内部の覆土は黒色土と地山黄褐色土の混入土が交互に堆積することから、周溝と思われる。墳丘側南斜面には1次調査でみられた盛土と考えられる土層(7層)に礫が若干混入しているのが確認できるが、残りは良くなく葺石としての配置ではない。墳端あるいはテラスの可能性もあるが、周溝は著しく削平された状態での検出とみられ、共に確認できない。遺物はわずかな土器片のみの出土である。

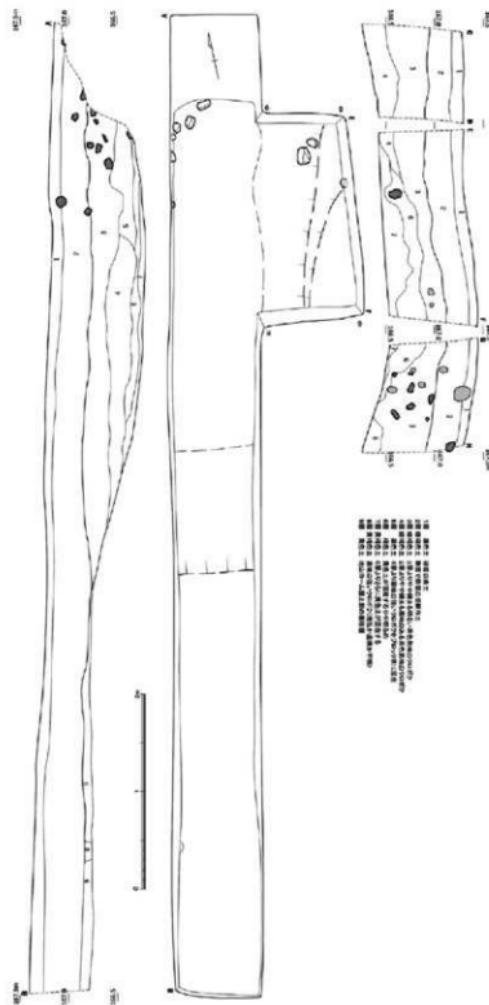
また、トレンチ北端の溝状掘込みは畠跡に伴うもので、他に時期不明の柱穴状の掘込みもいくつかあるが、いずれも後世のものとみられる。

(7) 第7トレンチ(第87図 写真図版19)

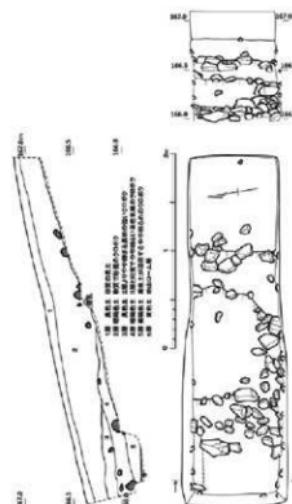
第1トレンチの南側に並行して後円部の東端検出を目的に設定し、幅1m長さ9.1mで東西方向で設定した。地形は後円部掘削面より東側へ下降する傾斜面から幅1mの里道跡を含むほぼ平坦面があり、さらに切岸状の急崖へと続くが、トレンチは傾斜面より里道跡を挟んで急崖直前までの範囲である。



第83図 秋葉鬼塚古墳第3トレンチ (1/50)

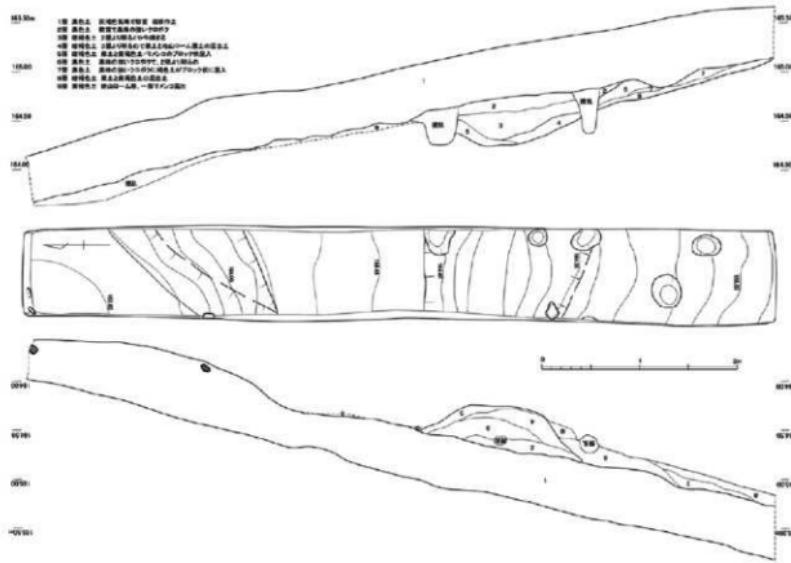


第84図 秋葉鬼塚古墳第4トレンチ (1/50)



第85図 秋葉鬼塚古墳第5トレンチ
(1/50)

トレンチ西側で地山層の傾斜変化する落込みを検出し、標高は165.2mで第1トレンチと同様の位置である。疊はいくつか確認できたがやはり葺石としての配置ではなく、柱穴状の掘込みに堆積した状況である。この位置の土層などから周溝底部の一部の可能性もあり、傾斜変化の落込みは墳端かテラス端の痕跡とも考えられるが、削平が著しいため不明確である。遺物は全く出土していない。



第86図 秋葉鬼塚古墳 第6トレンチ (1/50)

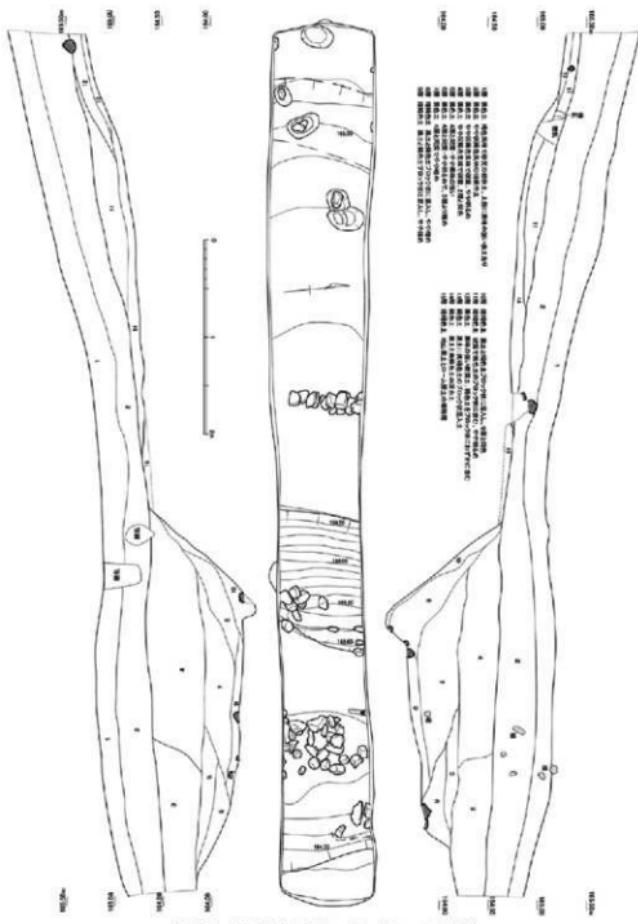
トレンチ中央付近の里道跡付近の位置で石列を検出している。石材は葺石とほぼ同じ円錐で、2~3段に積まれて南北に続いている。土星状の造構の石積みにも見えるが、擾乱土層中のため古墳に伴うものではないと考えられる。

トレンチ中央より東側に規模の大きな掘込みが検出されている。幅は約3.5m、溝底付近の標高は163.5mで、検出面からの深さは1.2mにもなる。断面逆台形状の溝と思われるが、西側の傾斜面は50°の急角度で、底部は一段深く掘込まれて外側に向かってゆるやかに上昇して崖際へと続く。礫が堆積し、葺石の一部が転落したものと思われる。遺物は全く出土せず時期は不明であるが、覆土の層が周溝とは異なり擾乱層に似ていることや、深さや断面形態などから、古墳の周溝ではなく後世の造構と考えられる。

(8) 第8トレンチ (第88図 写真図版19)

後部南端の検出を目的に幅1m長さ5.9mで、第6・第7トレンチと同じ烟跡の傾斜地形上に設定した。トレンチ北側で溝状の掘込みおよび墳丘側北斜面に礫の集中箇所を確認できた。礫は盛土層の斜面上に河原石を配置していることから墳端の根石と思われる。しかし残りは良くなく部分的に本来の位置を留めているのみで、確實な根石は確認できない。墳端の標高は166.8mであろうか。テラスについては縁が残ってなく明確ではないが、1m程の平坦状の土層がみられ存在が示唆される。

溝底部には整地層などの堆積状況により周溝と考えられる。断面は逆台形状を呈すると思われるが、削平によるためか検出面からの深さは20cmと浅く、トレンチ中央付近で掘込みの立ち上がりをわずかに検出できた程度である。検出幅は2.3m、標高は溝底付近で166.5mである。



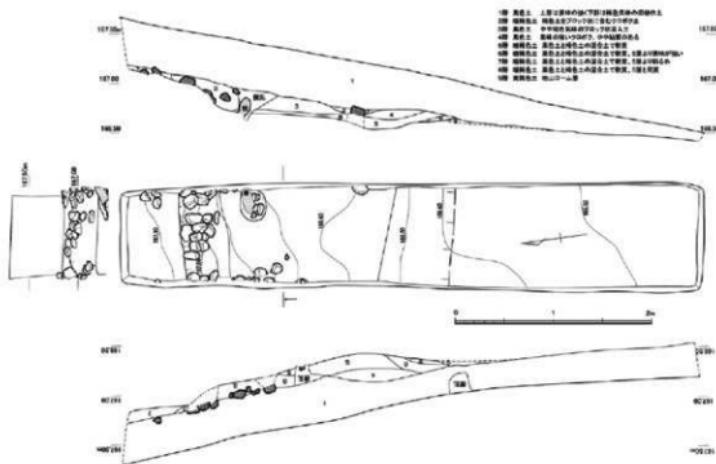
第87図 秋葉鬼塚古墳 第7トレンチ (1/50)

出土遺物について、菱形土器の胴部片(第94図18)が葺石直下の盛土層内より出土するなど土師器片のみで、埴輪については全く出土していらない。

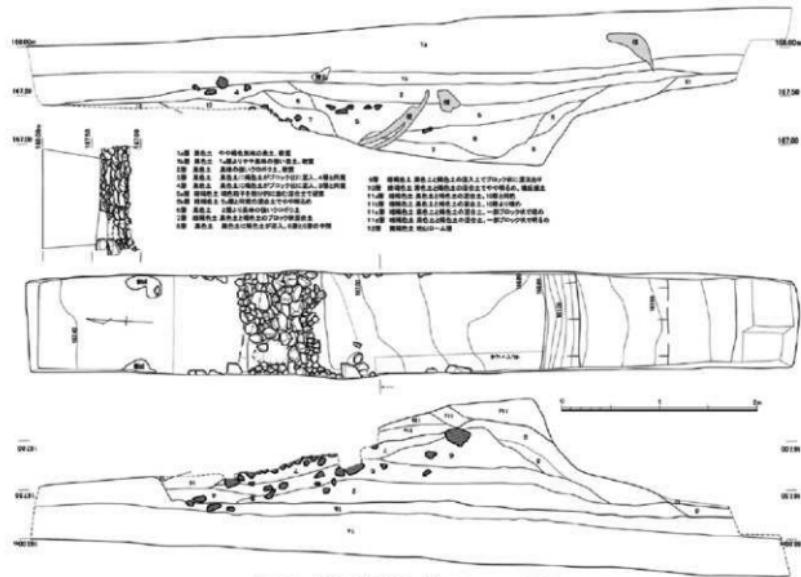
(9) 第9トレンチ (第89図 写真図版19)

1次調査の第3・第4トレンチ間の前方部南端の検出を目的に、幅1m長さ7.3mを設定した。トレンチ中央付近には周溝及び葺石を検出し、第2・3トレンチとほぼ同じ黒色土と褐色気味の土層の堆積状況から周溝と思われる。盛土層(10層)に葺石を配置しており、傾斜面の基底部に大振りの礫による根石を検出している。墳端は標高167.2mを境に、平坦状のテラスを設けて、小型の礫が敷かれている。テラスの礫は端までは残っておらずテラ

ス幅は明確ではないが、土層より 40～60 cm 程で第3トレーナーより幅は狭まるとみられる。



第88図 秋葉鬼塚古墳 第8トレンチ (1/50)



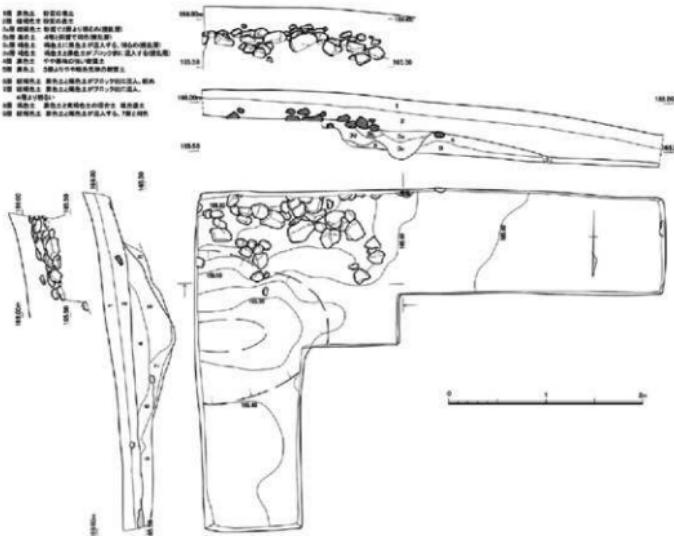
第89図 秋葉鬼塚古墳 第9トレンチ (1/50)

周溝底部は南側に向かってやや深めに掘られ、約2m幅で急角度に立ち上がるが、途中で傾斜を変化させている。底部標高はテラス付近では167.1m、外側は166.8mで、溝の幅は4.3mである。周溝は地山ローム層を掘り込んでいるが、盛土(11a～d層)による整地層が約20cmの深さで検出されている。

(10) 第10トレンチ (第90図 写真図版20)

前方部の北端隅の確認を目的に、L字状に延べ7.7m²で設定した。トレンチ東南隅付近で褐色土の盛土に礫が集中することから、前方部隅角付近の墳丘と思われるが、擾乱の痕跡もあり葺石の残りも良好とはいえない。礫は大型のものがいくつかみられるが、墳端の根石やテラスは確認できない。

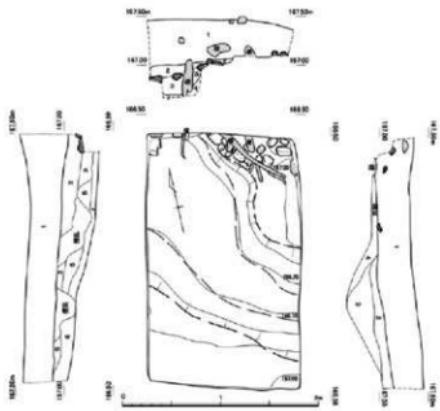
葺石の北側に接して南北幅は1.4m検出面からの深さは0.3mの浅い掘込みがあり、東側調査区外に向かって続くことからの周溝とみられる。しかし調査区内で次第に浅くなり1.3m程検出して途切れていることから、前方部側面のみ設けられているように見える。遺物は壺形埴輪片がわずかに検出している。



第90図 秋葉鬼塚古墳 第10トレンチ (1/50)

(11) 第11トレンチ (第91図 写真図版20)

前方部の南端隅の検出を目的に、1次調査の第4トレンチに隣接して幅1.6m長さ2.6mで設定した。トレンチ北西から南東方向へやや屈曲して続く溝状の掘込みと、北東側で盛土層(4層)の堆積を検出した。盛土は一部樹木根などによる擾乱が著しいが、略方形を呈していて礫がわずかに確認できる。北側延長上は第4トレンチで検出した盛土部分に続く位置でもあるため、前方部の南側隅角と考えられる。葺石の残りも良好でなく、墳端の根石、テラスは確認できない。溝は幅が1m、検出面からの深さが40cmと極端に狭く浅いが、第9トレンチから続く周溝であると考えられ、溝底部の標高は166.7mで第3～4トレンチ間をほぼ同じレベルで設けられていると思われる。

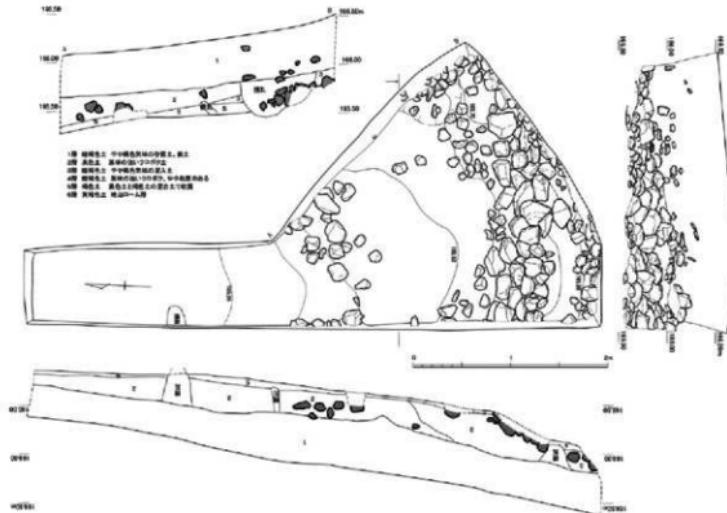


第91図 秋葉鬼塚古墳 第11トレンチ (1/50)

確なテラス面として確認できなかつた。

トレーニング北側は傾斜地形に続くため、周溝らしき掘込みは確認できない。第10トレーニングで確認できた周溝は12トレーニングまでは続いているのか、あるいは土砂流失により失われたのか判断できない。

(諸圖)



第92図 秋葉鬼塚古墳 第12トレンチ (1/50)

4. 出土遺物（第93・94図 第7表 写真版21）

各トレンチから出土した遺物は大きく二群に分かれる。周濠埋土上層から出土する中世土器および青磁片などの貿易陶磁器と、周濠下層を中心に秋葉鬼塚古墳のくびれ部にあたる第3トレンチから集中的に出土した土師器及び埴輪片である。前者の中世土器群は前方後円墳の北側に中世から近世にかけて存在した宅地に関わって周濠内に流入したものと考えられる。後者の古墳時代土器群は崩壊転落した葺石の中に混入するという出土状況から推測して、秋葉鬼塚古墳の埋葬時の儀礼のために供獻された土器群と推定される。

古墳時代の秋葉鬼塚古墳に伴う土器は埴輪と土師器に大きく分かれ、土師器と円筒埴輪は小量で、大多数は壺形埴輪の破片である。その中に3点であるが円筒埴輪の破片が見つかった。器財・形象埴輪にあたる破片は出土していない。

（1） 売輪（第93図1～16）

出土破片数からみると円筒埴輪破片は3点のみ、壺形埴輪の破片は150点以上、最小10個体以上である。ごく少数の円筒埴輪と大多数の壺形埴輪からなる構成である。いずれも胎土は砂粒を多く含む粗い胎土であるが、土師器とは異なり角閃石が少なく、かわりに比較的大きな石英粒をふくむ。また壺形埴輪の破片には黒斑があり、埴輪の焼成は穴窯ではないことがわかる。

円筒埴輪 出土した3点の円筒埴輪のうち図示できるのは以下の2点である。第93図1は第9トレンチから出土した円筒埴輪の胴部突帯付近の破片である。2は表表の胴部片である。いずれも胎土は砂粒を多く含む粗い胎土であるが、土師器とは異なり角閃石が少なく、かわりに比較的大きな片岩をふくむ。胎土は壺形埴輪と共通する。胴部径や器高など復元することは困難な破片であるが、器厚は1センチを超える厚みのある破片である。1は上部が欠けているため突帯の断面形状ははつきりしないが、突帯貼り付け前の粗い1次調整のタテハケが残り、内面は指圧痕の残るナデ調整である。2はやや不整な円形透かし穴がこる破片で、1と同じ粗い外面タテハケ、内面ナナメナケが残る。ハケの条痕は1センチ当たり3～4本できわめて粗い。厚さは2点とも1センチをこえる厚さで、2の破片外面には黒斑が残る。

壺形埴輪 二重口縁形態の口縁部破片は1点もなく、すべて單口縁形態の壺形埴輪からなる。口縁部、頸部、胴部、底部などの破片となって出土したが、唯一口縁部から底部まで接合した3を見ながら説明する。3は第3トレンチ南くびれ部墳端テラス上から出土した器高約31cm、復元口径約21cm、頸部径約12.5cm、胴部最大径約20cm、底径約11cmの比較的小ぶりな壺形をなす。埴輪と考える根拠となるのは底部があらかじめ開放されたまま成形されていることにある。口縁部は上位から三分の一付近で外側に屈曲外反する特徴がある。胴部は長胴化し、底部は成形時開放して作られ、乾燥時に渡した棒状の工具によるへこみが顕著に観察される。内面は口縁部下半から胴部内面上にかけて粘土紐の接合痕が数段残り、下半は粗い指ヶズリがみとめられる。特に底部下半のつくりは粗雑で、そのまま墳丘上に樹立することを前提とした形態のまま成形工程の手抜きが行われている。胴部上半から口縁外面と内面上半にはハケ目が施され、内外面に丹塗りの痕跡がある。4と5は第3トレンチから出土した口縁部先端破片で外上方に大きく開くよう復元できる。4は復元口径20.5cm、5は推定16.3cm。6は第3トレンチから出土した頸部に大きく三角形の透かし穴を複数穿孔した破片である。内面下半はほとんど未調整で粘土紐の接合痕が数条認められる。外面はタテハケで調整したのち横方向の線刻が数条認められる。穿孔・線刻以外はほかの壺形埴輪の口縁と同じである。口縁部の外方屈曲は4～6でも認められる。7は北くびれ部の第12トレンチから出土した6と同様な特徴を内外面にもつ口縁片であるが、外面に三角形に想定できる透かし穴と横方向の2本の沈線とその間に鋸歯文が線刻されている。8も同じ部位の破片であるが、上下に伸びた逆三角形の線刻がある。前方部の第9トレンチから出土した。9と10は第3トレンチから出土した同様な口縁片であるが、口唇端部がない。外面はタテハケ調整、内面下半までヨコヘナナメハケメが丁寧に施され接合痕を消している。9の頸部径は復元10.8cm、10は12.0cm。11は南くびれ部の12トレンチから出土した頸部径12.0cm、

胸部最大径19.8cmの胸部上半から口縁部下半にかけての壺形埴輪であるが、胸部は内外面とも接合痕が残り、ハケ調整が行き届いているのは口縁のみで、最終的な仕上げを省略したように見える個体である。12は同じく12レンチ出土の復元最大径20.0cmの胸部片、この個体も外面の刷毛目が不十分で接合痕がよくのこる。内面は指ナデ・指圧痕が残る。13～15は1と同様な調整が残る底部である。13は第3レンチから出土した胸部最大径19.7cmに復元される胸部下半。14と15の底部の器壁は非常に厚くかつ粗い作りである。14は第3ないし第12レンチから出土した胸部復元値21.0cm、復元底径11.6cmの胸部下半。15は北くびれ部の第12レンチから出土した胸部最大値19.7cm底径13.4cmの胸部下半、内面には赤色顔料のしたたりが付着している。16は第2トレンチから出土した特筆すべき壺形埴輪の底部片で、平底に作り底部穿孔を施していない。同一の形態の底部を持つ壺形埴輪が、隣接する重政古墳で数個体確認されているので、壺形埴輪の底部とした。

(2) 土師器(第94図17～20)

壺と甕、高坏の破片が～2個体ずつ出土している。胎土はいずれもこの地域の地質を特徴づける火山堆積物に由来する角閃石が目立つ。17は南くびれ部の第12レンチから壺形埴輪の破片に交じて出土した頸部径11.0cmの短く直立したち屈曲する二重口縁の壺頭部片である。壺形埴輪の調整の粗さとは異なり土師器とした。18は後円部南側の第8レンチの葺石の下の盛土層に含まれていた破片で、胸部径が30cmを超える大型の甕の甕部上半で、なで肩の形態から布留式の系譜をひとと考えられ、内外面を細かくハケで丁寧に調整する。外面に煤の付着した日常品である。19は第2レンチから出土した高坏の頸部片で、坏部から脚部を連続成形してその後坏側から円盤充填を行う。外面にはタテハケ、坏部内面にはミガキが行われている。20は第2レンチから出土したハ字状に開く高坏脚部で外面ナデ、内面はヨコ方向の工具痕が見られる。

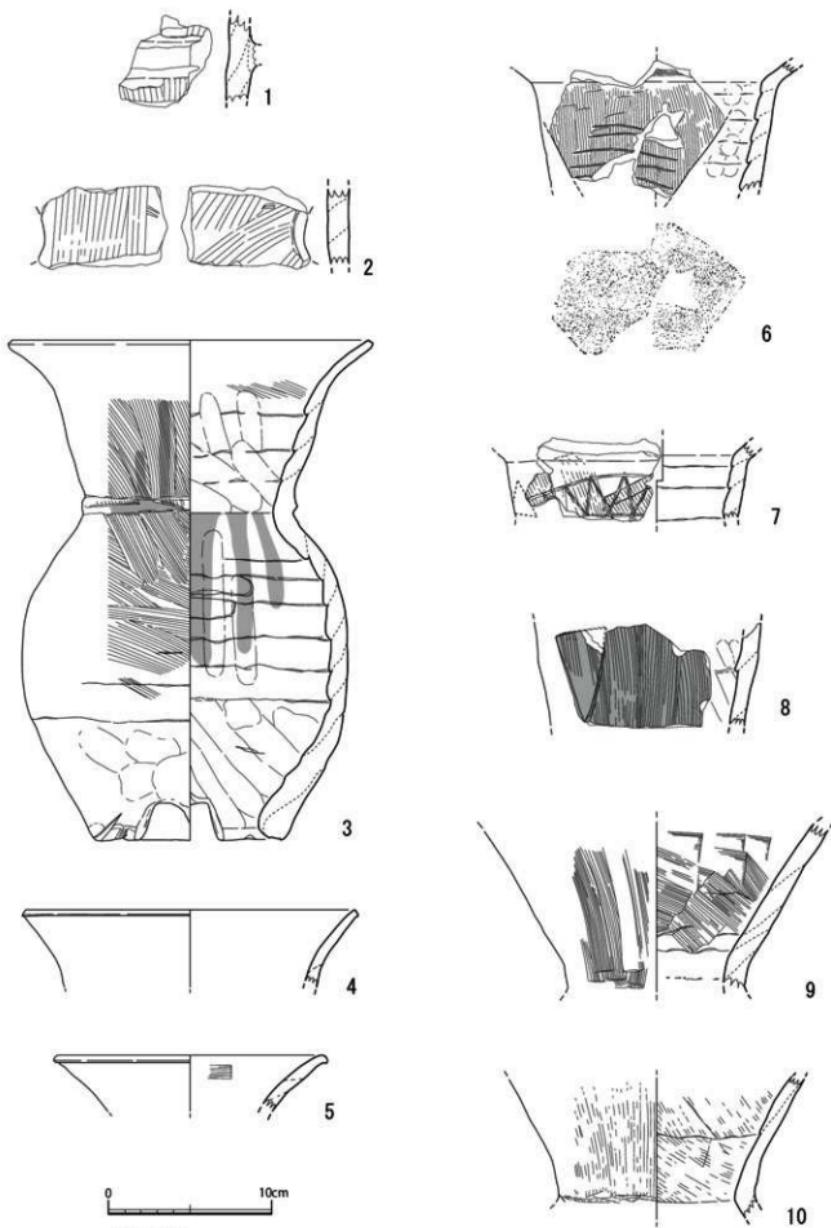
なお秋葉鬼塚古墳の周溝内からは、縄文時代晚期の無刻み目突帶を持つ深鉢口縁片、平底の弥生時代壺底部片、中世の土師質土器の破片などが出土している。

(3) まとめ

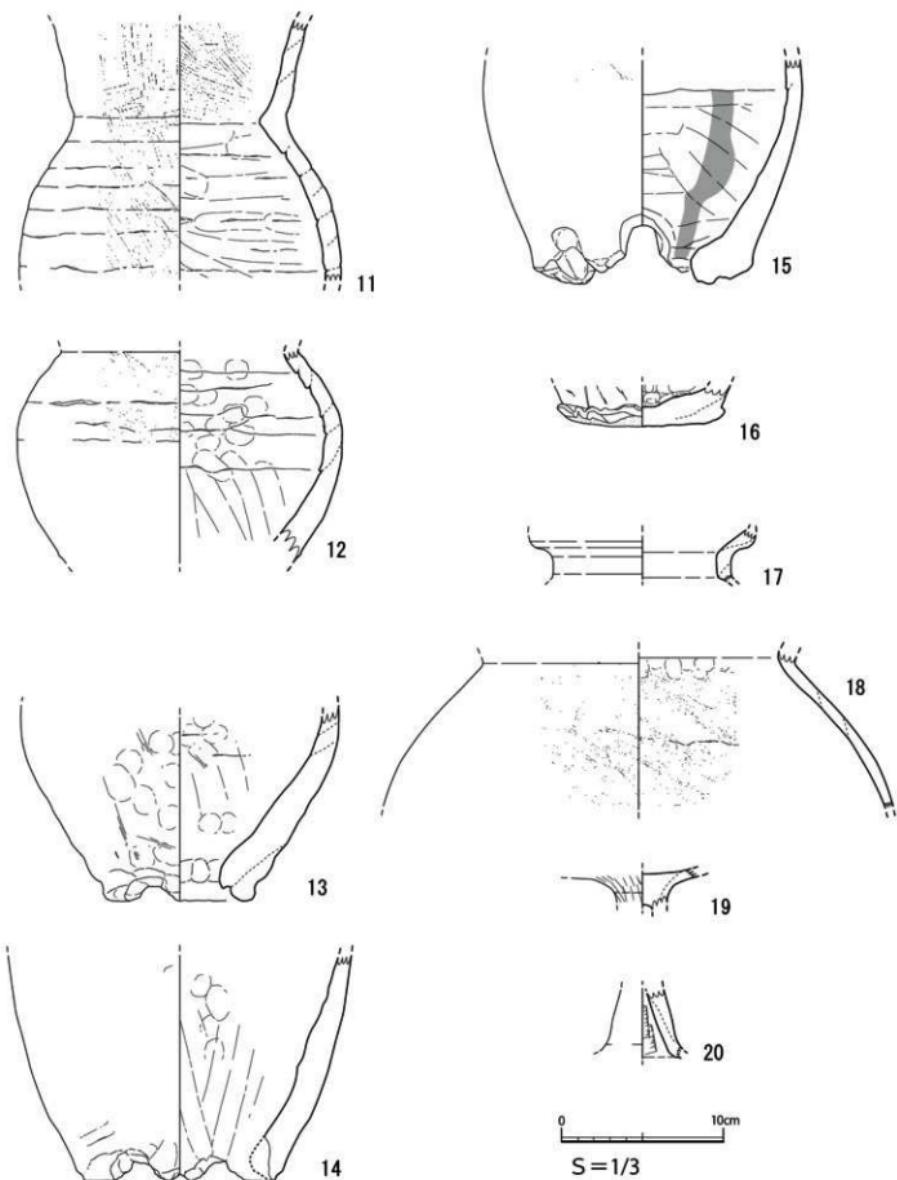
今回報告する秋葉鬼塚古墳に直接かかわる遺物は土器に限られている。その中で埴丘盛土に含まれていた18の土師器甕を除くすべてが、秋葉鬼塚古墳の築造時の埋蔵儀礼にともなって樹立あるいは供獻された埴輪と土師器であると考えられる。以下に幾つかの視点から整理する。

埴輪の出土状態と配置 まず確認しておきたいことは樹立位置を保存した破片ではなく、いずれも周溝あるいは葺石上に上部から破片化して流れ落ち堆積したものであった。したがって埴輪が当初どのように配列配置されたものか厳密にいえばわからない。しかし出土したトレンチでの位置と数量などから推測は可能である。まず円筒埴輪は3点のみと個体数も2・3個体であった可能性が高く、しかも壺形埴輪が多数出土したくびれ部からは一点の出土もなく、壺形埴輪が配置された後円部には配置されず、前方部頂に点的に配置された可能性が高い。また多数の個体が出土した壺形埴輪もくびれ部に当たる3トレと12トレに集中し、前方部のトレンチからは少数出土したが、後円部のトレンチからはほとんど出土していない。このような壺形埴輪の出土分布の不均等は、その配置が埴輪列をなして埴丘全体に均等に配置したものではなく、くびれ部に近い後円部埴丘頂部や前方部の一部に偏在した配置を考えさせる。このように秋葉鬼塚古墳の埴輪祭祀においては壺形埴輪が一定の量をともなって中心的に使用されたことは容易に想像できるが、一方、家形埴輪や器財埴輪等は一点もなく、円筒埴輪もきわめて少數がつけたし的に使用されたと考えられる。また埴輪が囲繞配列とは異なる方法で使用されたのではないかと推定される。

埴輪の機種構成とその特徴 円形透穴を持つ円筒埴輪と壺形埴輪の二器種からなる。壺形埴輪は全体に二重口縁になる破片はなく、いずれも単口縁で上位で外方に屈折する。さらに壺形埴輪には頸部に線刻や透かし穴を施す例が散見され、底部も開放して成形し、乾燥時の支持具の痕跡が明瞭な特徴的な製作痕を残している。一個体のみ穿孔無しの平底成形の底部が発見された。頸部から口縁部の形態とともに重政古墳との



第93図 秋葉鬼塚古墳出土遺物1 (1/3)



第94図 秋葉鬼塚古墳出土遺物2(1/3)

第7表 秋葉鬼塚古墳出土遺物観察表

名	埋蔵	部位	出土位置	出土状況	断面	口径	高さ	形状	表面	底面	内面	文様等	特記事項
1 円筒埴輪 頭部先端(5 ×5cm)	口縁	平底	—	—	—	—	—	砂利多い、外側 白土、内側灰土 子→住土の土色	粘土埴輪上 内側組合せ	内面：1次タハケ(4cm/1 回)、2次タハケ(4cm/1 回)、3次タハケ(4cm/1 回)	外縁：黒褐色 内縁：黄褐色	—	内縁のハナメ は大変細い。
2 円筒埴輪 A7	頭部(5×8cm)	直縁	—	—	—	—	—	砂利多い、外側 白土、内側灰土 子→住土の土色	粘土埴輪上 内側組合せ	内面：1次タハケ(4cm/1 回)	外縁：黄褐色 内縁：黄褐色	内縁直穴	全縁に断続的 凹戸ではな い。底部直穴 底部
3 壺形埴輪 底部接合	口縁部	壺形テラ 火薬石蓋 上	30.6	21.2	12.4	20	11	砂利多い、外側 白土、内側灰土 子→住土の土色	粘土埴輪上 内側組合せ	内面：タハケ(4cm/1 回)、2次タハケ(4cm/1 回)、3次タハケ(4cm/1 回)	外縁：良好 内縁：良好	内縁直穴	全縁に断続的 凹戸ではな い。底部直穴 底部
4 壺形埴輪 口縁直接	口縁部	直土中	—	(20.5)	—	—	—	砂利多い、外側 白土、内側灰土 子→住土の土色	粘土埴輪上 内側組合せ	内面：タハケ(4cm/1 回)、2次タハケ(4cm/1 回)、3次タハケ(4cm/1 回)	外縁：良好 内縁：良好	内縁直穴	全縁に断続的 凹戸ではな い。底部直穴 底部
5 壺形埴輪 口縁直接	口縁部	直土中	—	(16.3)	—	—	—	砂利多い、外側 白土、内側灰土 子→住土の土色	粘土埴輪上 内側組合せ	内面：タハケ(4cm/1 回)、2次タハケ(4cm/1 回)、3次タハケ(4cm/1 回)	外縁：良好 内縁：良好	内縁直穴	全縁に断続的 凹戸ではな い。底部直穴 底部
6 壺形埴輪 口縁部	直土中	—	—	—	—	—	—	砂利多い、外側 白土、内側灰土 子→住土の土色	粘土埴輪上 内側組合せ	内面：タハケ(4cm/1 回)、2次タハケ(4cm/1 回)、3次タハケ(4cm/1 回)	外縁：良好 内縁：良好	内縁直穴	全縁に三角窓の透穴二 列、透方角の透孔斜列
7 壺形埴輪 口縁部(3×8 mm2枚合)	直土中	—	—	(14.8)	—	—	—	砂利多い、外側 白土、内側灰土 子→住土の土色	粘土埴輪上 内側組合せ	内面：タハケ(4cm/1 回)、2次タハケ(4cm/1 回)、3次タハケ(4cm/1 回)	外縁：良好 内縁：良好	内縁直穴	三角窓と底定窓の 透穴。透し方に透 方角の透孔斜列
8 壺形埴輪 口縁部	直土中	—	—	(12.8)	—	—	—	砂利多い、外側 白土、内側灰土 子→住土の土色	粘土埴輪上 内側組合せ	内面：タハケ(4cm/1 回)、2次タハケ(4cm/1 回)、3次タハケ(4cm/1 回)	外縁：良好 内縁：良好	内縁直穴	内面に透穴直列 底部透孔上間に透 方角の透孔
9 壺形埴輪 口縁部	直土中	—	—	(10.8)	—	—	—	砂利多い、外側 白土、内側灰土 子→住土の土色	粘土埴輪上 内側組合せ	内面：タハケ(4cm/1 回)、2次タハケ(4cm/1 回)、3次タハケ(4cm/1 回)	外縁：良好 内縁：良好	内縁直穴	内面に透穴直列 底部透孔上間に透 方角の透孔
10 壺形埴輪 口縁部+端 部	直土中	—	—	(12.0)	—	—	—	砂利多い、外側 白土、内側灰土 子→住土の土色	粘土埴輪上 内側組合せ	内面：タハケ(4cm/2 回)、2次タハケ(4cm/2 回)、3次タハケ(4cm/2 回)	外縁：良好 内縁：良好	内縁直穴	内面に透穴直列 底部透孔上間に透 方角の透孔
11 壺形埴輪 口縁部+端 部上	直土中	—	—	12.0	19.8	—	—	砂利多い、外側 白土、内側灰土 子→住土の土色	粘土埴輪上 内側組合せ	内面：タハケ(4cm/1 回)、2次タハケ(4cm/1 回)、3次タハケ(4cm/1 回)	外縁：良好 内縁：良好	内縁直穴	内面に透穴直列 底部透孔上間に透 方角の透孔
12 壺形埴輪 頭部	12トレ	直土中	—	(14.2)	(20.0)	—	—	砂利多い、外側 白土、内側灰土 子→住土の土色	粘土埴輪上 内側組合せ	内面：タハケ(4cm/1 回)、2次タハケ(4cm/1 回)、3次タハケ(4cm/1 回)	外縁：良好 内縁：明赤 透色	内縁直穴	内面に透穴直列 底部透孔上間に透 方角の透孔
13 壺形埴輪 頭部下半(透 窓)	直土中	—	—	(19.7)	(8.0)	—	—	砂利多い、外側 白土、内側灰土 子→住土の土色	粘土埴輪上 内側組合せ	内面：タハケ(4cm/1 回)、2次タハケ(4cm/1 回)、3次タハケ(4cm/1 回)	外縁：良好 内縁：透色	内縁直穴	内面に透穴直列 底部透孔上間に透 方角の透孔
14 壺形埴輪 頭部下半(透 窓)	直土中	—	—	(21.0)	(11.1)	—	—	砂利多い、外側 白土、内側灰土 子→住土の土色	粘土埴輪上 内側組合せ	内面：ナデ 内面：ナデ、ナダ 内面：ナダ、ナダ、ナダ	外縁：良好 内縁：良好	内縁直穴	内面に透穴直列 底部透孔上間に透 方角の透孔
15 壺形埴輪 頭部下半(透 窓)	直土中	—	—	(19.7)	(13.4)	—	—	砂利多い、外側 白土、内側灰土 子→住土の土色	粘土埴輪上 内側組合せ	内面：ナデ 内面：ナデ、ナダ 内面：ナダ、ナダ、ナダ	外縁：良好 内縁：良好	内縁直穴	内面に透穴直列のした たり
16 壺形埴輪 頭部下底平 底	直土中	—	—	—	10.2	—	—	砂利多い、外側 白土、内側灰土 子→住土の土色	粘土埴輪上 内側組合せ	内面：ナデ 内面：ナデ、ナダ 内面：ナダ、ナダ、ナダ	外縁：良好 内縁：良好	内縁直穴	内面に透穴直列のした たり
17 土師器 蓋	頭部上	直土中	—	—	(11.0)	—	—	砂利多い、外側 白土、内側灰土 子→住土の土色	粘土埴輪上 内側組合せ	内面：ナデ 内面：ナデ、ナダ	外縁：良好 内縁：良好	内縁直穴	内面に透穴直列のした たり
18 土師器 蓋	頭部上	直土中	—	—	(18.2)	30以上	—	砂利多い、外側 白土、内側灰土 子→住土の土色	粘土埴輪上 内側組合せ	内面：ナデ 内面：ナデ、ナダ 内面：ナダ、ナダ、ナダ	外縁：良好 内縁：良好	内縁直穴	内面に透穴直列のした たり
19 土師器 蓋	複合合	直土中	—	—	—	2.3	—	砂利多い、外側 白土、内側灰土 子→住土の土色	粘土埴輪上 内側組合せ	内面：ナデ 内面：ナデ、ナダ 内面：ナダ、ナダ、ナダ	外縁：良好 内縁：良好	内縁直穴	内面に透穴直列のした たり
20 土師器 蓋	頭部	直土中	—	—	—	—	—	砂利多い、外側 白土、内側灰土 子→住土の土色	粘土埴輪上 内側組合せ	内面：ナデ 内面：ナデ、ナダ 内面：ナダ、ナダ、ナダ	外縁：良好 内縁：良好	内縁直穴	内面に透穴直列のした たり

密接な関係を示唆するものである。胎土はいずれも豊後大野市内の土器と共に阿蘇溶結凝灰岩由來の砂礫をふくみ、搬入品ではないと考えられる。壺形埴輪は製作技法が極めて画一的で同一工房で作られたと考えられるが、円筒埴輪は刷毛目が壺形埴輪とは異なる工人の製作である。

埴輪の製作時期 墳輪群と土師器が、異なる時期の遺物の混涙とみなせる出土状況はない。まず時期を検討する。第1の特徴は円筒埴輪・壺形埴輪の両埴輪片の外面に黒斑が多く残ることである。そこからこの三重地域に穴窯焼成が導入される以前の焼成技法で製作されていることが容易に推測される。つぎに壺形埴輪の形式構成として二重口縁がなく単口縁に限られるのは、大分における壺形埴輪では最も新しい時期のものである。また胴部型式も寸胴に長胴化するのは同じくとも新しい時期の特徴である。埴輪製作における穴窯焼成技法の導入は、前方後円墳集成編年⁽¹⁾の6期からとされており、大分県内最古の穴窯焼成の埴輪は大在古墳の埴輪⁽²⁾であり、また三重地域の円筒埴輪における穴窯焼成の確実な例は集成7期の竜ヶ鼻古墳からである。したがって秋葉鬼塚古墳の以上の埴輪は集成6ないし7期以前であろう。また大分県内の壺形埴輪は集成編年の2期から5期ごとに存続した⁽³⁾ことが判明しているので、その最新の時期となる集成5期となるが、集成6期の壺形埴輪の存否は現状では不明である。したがって秋葉鬼塚古墳の埴輪群は集成5期から6期にかけて古墳時代中期前半とほぼ推測できる。

埴輪から見た他古墳との関係 単口縁のみからなる壺形埴輪の器種構成と壺形埴輪の口縁部が外方に屈折する特徴を、おなじ三重盆地内に所在する道ノ上古墳の壺形埴輪と重政古墳が有することを指摘できる。道ノ上古墳は墳長75m近い大野川中上流域最大規模の前方後円墳でかつてはその埴形から前期にさかのぼる古墳ではないかといわれたが、2001(平成13)年の三重町の調査⁽⁴⁾によって川西3期の円筒埴輪が壺形埴輪とともに出土し、中期前半の古墳群であることが判明した。重政古墳においても壺形埴輪の特徴からやはり中期にまで下る壺形埴輪が使用されていることが判明している。秋葉鬼塚古墳と重政古墳の築造推定年代が同時期に近く、使用された壺形埴輪が同一型式ともいえること、さらに平底にあって穿孔しない同一型式の壺形埴輪底部が両古墳で出土したことを考えると、この両古墳は密接な関係のもとに同時代をいたした首長の奥津城であるといえる。円筒埴輪がきわめて少ない埴輪の構成は道ノ上古墳でも指摘される⁽⁵⁾。地域最大の古墳道ノ上古墳と同時に近く、かつ両者は密接な関係をもつと考えられる。

なお出土遺物の実測には井大樹・藤川貴久、宮木貴史・千原和己、江口寛基と田中があたった。(田中)

【註】

- (1) 広瀬和雄 1992『前方後円墳の畿内編年』『前方後円墳集成』九州編 山川出版社
- (2) 宮内克巳・田中裕介 1995『大在古墳』『大在古墳・浜第2遺跡』大分県教育委員会
- (3) 田中裕介 2000『大分県における埴輪の変遷と地域性』『九州の埴輪』九州前方後円墳研究会
- (4) 諸岡郁 2002『道ノ上古墳』『三重地区遺跡群発掘調査概報』VIII 三重町教育委員会
- (5) 田中裕介 2009『豊後大野市三重地域の首長墓とその動向』『地域の考古学』佐田茂先生佐賀大学退官記念論文集

5.まとめ

(1) 復元案について

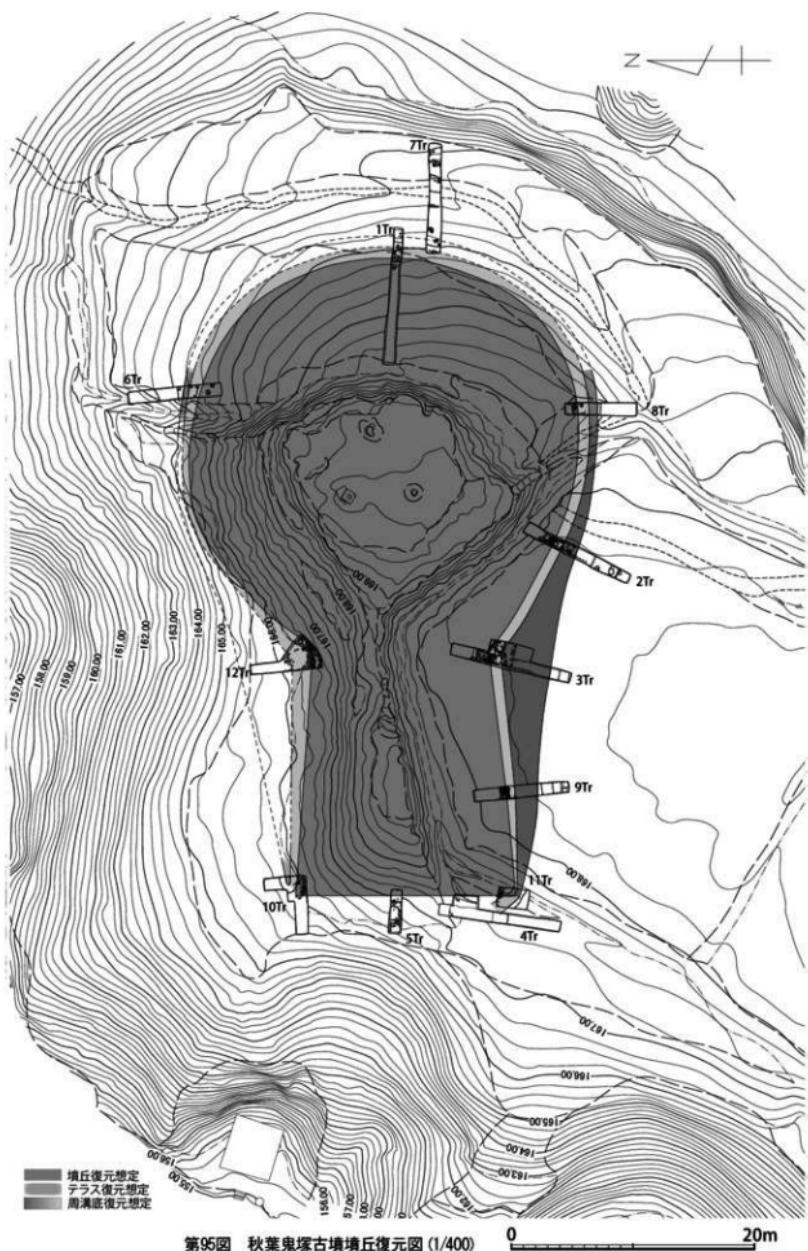
前節で埴丘測量調査と第1次調査の発掘調査の成果の一部を踏まえて、埴丘復元案について考察した。ここでは、埴丘測量調査と第1次調査と第2次調査の発掘調査の成果を合わせ、復元案について述べたい。

発掘調査は、後円部に第1・2・6・7・8・トレンチ、南側くびれ部に第3トレンチ、北側くびれ部に第12トレンチ、前方部には第4・5・9・10・11トレンチの計12箇所で行われた(第80図)。各トレンチでの発掘調査の成果として、埴端、埴端外側に広がるテラス、周溝のすべて、もしくは一部が確認できた。なかでも、埴端、埴端外側テラス、周溝が確認できたのは、第2・3・8・9トレンチで、いずれも埴丘南側の埴丘が大きく削平されている箇所である。また、埴端と埴端外側テラスが確認できたのは、第1・12トレンチで、第1トレンチについては、削平が著しく埴端とテラスであろう痕跡の検出であった。第12トレンチは北側のくびれ部で、測量調査でも埴端ラインが良好に遺存していると想定していた箇所であった。周溝のみが確認できたのは、第4・6・10・11トレンチで、いずれも周溝底部が痕跡として確認できた箇所となる。特に、前方部側では周溝が確認できたものの、隅角に向けて溝の深さが浅くなっていく状況であることが指摘されている。これらの成果を基に埴丘測量図に反映させ、作製した復元案が第95図である。第95図では、網掛け部分として、埴端、埴端外側のテラス、周溝底部の外側の下端で、それぞれ網掛けの濃度を変えている。

以下、各部の状況について、第95図をもとにみていきたい。

後円部については、くびれ部から埴丘主軸に向けては前回の復元ラインとほぼ変わらないが、第8トレンチと第1トレンチ、第6トレンチで埴端と周溝の痕跡が確認できることにより、埴端の復元ラインが東側に延びることとなった。その結果、以前の復元案では後円部径29mと想定していたが32mと大きくなる。しかし、以前の復元案と同様に、平面観としては橢円形を呈し、くびれ部に向けて窄まる形態となる。

くびれ部については、以前の復元で北側のくびれ部は、現状の埴端ラインで復元案を示しており、くびれ幅が15mであると想定していた。しかし第12トレンチの調査においてくびれ部の埴端が検出されたことにより、くびれ幅14.5mとなり、若干短くなるものほぼ以前の復元ラインと重なることが確認できた。



第95図 秋葉鬼塚古墳墳丘復元図(1/400)

前方部については、以前の復元案では、第3トレンチのくびれ部から前方にかけての墳端と、墳丘北側の前方部の墳端ラインより前方部長21m、前端幅17mを測る規模となると想定していた。しかし、第9トレンチにおいて、墳端を検出したことにより、墳丘南側の墳端ラインが想定よりも外側に開くこととなった。また、第4・10・11トレンチでは、周溝と墳丘盛土の一部が確認されたことにより、想定よりも隅角の位置が若干くびれ部側に寄り、前方部長20m、前方部前端幅18mを測る規模となることが判明した。

墳端外側のテラスについて、以前の復元案でも第2・3トレンチで検出したテラスをもとに墳端と並行し、全周する復元案を示した。しかし、前方部南側の隅角付近に設定された第9トレンチで検出したテラスの幅が、くびれ部で確認したテラスの幅よりも狭くなっていることが指摘され、隅角の第11トレンチではテラスが明確に確認ができなかったと報告されている。つまり、少なくとも墳丘南側の状況としては、くびれ部から隅角にいくにつれ狭くなっていくことが窺える。また、前方部端部に設定された第5トレンチでは、カクランにより墳端及び墳端外側のテラスが確認できなかった。現段階では前端部までテラスが廻っていた可能性は低いものと考えられる。一方墳丘北側の墳端外側のテラスについては、第12トレンチでその痕跡が検出され、隅角の第10トレンチでは確認できていないことから、南側と同じ状況であると考えられる。

周溝については、後円部の第6トレンチから前方部南側の隅角の第11トレンチまで確認できている。さらに、第11トレンチでは、隅角から前端部まで周溝がまわりこんでいる状況も検出していることから、全周していた可能性がある。しかし、前端部と後円部北側が台地斜面と接している状況から築造当初の旧地形が遺存している可能性は少なく、現段階では全周していた可能性があるという指摘だけだとどめておきたい。

以上より、測量調査と発掘調査の成果を合わせた、秋葉鬼塚古墳の復元案としては、墳長52.4m、後円部径32m、くびれ幅14.5m、前方部前端幅18m、前方部長20mを測る前方後円墳であると考えられる⁽¹⁾。段築については、墳丘測量調査で指摘したとおり後円部と前方部とともに2段築盛の可能性がある。後円部の墳端外側のテラスを含めた後円部径は33.8m、周溝底部の対岸までの距離は34.5m程である。また、くびれ部の墳端外側のテラスの幅は17.5mを測る規模となる。

第95図の墳丘復元の平面觀についてみると、くびれ部から前方部隅角にかけてあまり広がらないことや後円部が梢円形を呈していること、台地縁辺部の立地などの特徴から、同市内の重政古墳と形態的に類似しているものと考えられる。三重盆地という狭い空間にはほぼ同時期の前方後円墳が造営されていることも含め、政治的な都合上で築造された前方後円墳である可能性が高いと考えられる。今後の調査の進展に期待したい。（玉川）

第8表 秋葉鬼塚古墳の復元案

復元案作成時期	測量・発掘成果からの復元	測量成果からの復元
墳長	52.4 m	51 m
後円部径	32 m	29 m
くびれ部幅	14.5 m	15 m
前方部長	20 m	21 m
前方部前端幅	18 m	17 m
後円部高	3.5 m	3.5 m
前方部高	2.25 m	2.25 m
段築(後円部)	一 段	一 段
段築(前方部)	一 段	一 段
墳端外側のテラス含む後円部径	33.8 m	— m
墳端外側のテラス含むくびれ幅	17.5 m	— m
墳端外側のテラス含む前方部長	— m	— m
墳端外側のテラス含む前方部端部幅	— m	— m

【註】

(1) 墳丘測量時の報告と本報告での復元案数値に差があるため下記の一覧表を作成した。

【参考文献】

諸岡 郁 1990 「三重町の前方後円墳」『おおいた考古』第3集 大分県考古学会
田中裕介 1995 「東九州における古墳時代の首長系譜の変遷と画期(上)-埴輪と墳丘形態からみた大分の首長墳の幅年-」
『おおいた考古』第7集 大分県考古学会

諸岡 郁 1998 「秋葉鬼塚古墳」『大分の前方後円墳』大分県文化財報告書 第100輯 大分県教育委員会

諸岡 郁 2002 「道ノ上古墳」『三重地区遺跡群発掘調査概報VI』三重町教育委員会

下村智・吉田和彦・玉川剛司 2003 「古墳におけるデジタル測量の研究 - 大分県下の古墳を事例として - デジタル測量」『九州考古学第78号』九州考古学会

玉川剛司 2004 「小熊山古墳測量調査」『文化財研究所年報』2 別府大学文化財研究所

田中裕介 2004 「豊後國」『日本古代道路辞典』八木書店

玉川剛司 2012 「小坂大塚古墳測量調査について」『豊後大野市内遺跡発掘調査概報3-平成22年度調査-』豊後大野市教育委員会

(2) 確認調査の結果

計12カ所のトレチによる調査の結果、後円部東側の掘削面に近い第1・6・7トレチは、周溝の底がわずかに検出できた程度で墳端位置は特定はできなかった一方、墳丘南側掘削面の第2・3・9トレチでは削平が墳端までは及ばず、周溝及び葺石も一部失われた程度で、墳端位置を確認できた。また、墳端外周にテラス状平坦面が確認でき、墳丘斜面から外周にかけて礫敷きで構築されていたと思われる。葺石の残っていない11・12トレチにも平坦な整地層があることから、墳丘周囲に施されていた可能性がある。前方部も第4・5・10・11トレチでいずれも葺石の残りは良くないが、盛土層の範囲から規模の推定の手掛かりになると思われる。

葺石の石材について、黄土色のチャートが特に多く、他に砂岩・安山岩・凝灰岩などが散見できる。墳丘の立地する台地の東側の三重川や西側の秋葉川の川原石と共に通することから、両河川より運ばれたと考えられる。硬質の石材が多い傾向があるため、葺石は意図的な選別が行われた可能性が推定される。⁽¹⁾

各トレチの墳端及び周溝底の標高は、墳丘南側に比べ北側は低く、最大2m以上の高低差があつて南北方向に傾斜して築造されている。台地上の先端という立地地形に起因することも考えられるが、三重盆地側に面している北方からの側面観をより重視して築造された可能性が指摘されている(玉川 2015)。北側周溝の掘込みが浅いことや、墳丘の葺石礫の大きさに現れているとも考えられる。

築造時期については壺形埴輪の出土により中期前葉と考えられるもので、この三重古墳群では道ノ上古墳や重政古墳とほぼ同時期である(田中 2015)。特に第3・12トレチのくびれ部に出土量が集中していたが、すべて覆土からで樹立位置を推定できる状況ではなかった。円筒埴輪は小破片がわずか3点のみで壺形埴輪より圧倒的に少ないが、いずれも前方部側で確認されていることから、前方部に少數の配置であった可能性がある。

なお、古墳に伴わないと思われる溝や柱穴状掘込み等の遺構が一部のトレチで検出されているが、共伴する遺物が全くなく詳細は不明である。今回は古墳以外の視点での考察は行っていないが、出土遺物に縄文土器から近代の陶磁器まで様々な時期があり、特にトレチ内や墳丘表面には中世の遺物が見られることから、墳丘の削平が中世から行われていた可能性も指摘されている(玉川 2015)。第7トレチ東端で確認できた溝状遺構も、こうした中世の堀を持つ施設の一部であったと考えられる。

(諸岡)

【註】

(1) 佐藤裕一郎氏より教示

【参考文献】

玉永光洋 1987 「古墳時代」『大分県三重町誌総集編』三重町

諸岡 郁 1998 「秋葉鬼塚古墳」『大分の前方後円墳 三重・西国東地区編』大分県教育委員会

諸岡郁編 2015 「秋葉鬼塚古墳」『豊後大野市内遺跡発掘調査概要報告書5』豊後大野市教育委員会

玉川剛司 2015 「秋葉鬼塚古墳測量調査」『豊後大野市内遺跡発掘調査概要報告書5』豊後大野市教育委員会

田中裕介 2015 「秋葉鬼塚古墳出土遺物」『豊後大野市内遺跡発掘調査概要報告書5』豊後大野市教育委員会

諸岡郁編 2016 「秋葉鬼塚古墳(2次調査)」『豊後大野市内遺跡発掘調査概要報告書6』豊後大野市教育委員会

第5節 竜ヶ鼻古墳

1. 調査の経過

三重川流域の三重盆地を見下ろす台地上の、西向きに突き出た尾根地形上の標高151mの先端部に所在する前方後円墳である。盆地中央部を北から見下ろす位置で、東方に道ノ上古墳、南方に重政古墳、秋葉鬼塚古墳などを視認することができる位置でもある。また、南側崖下には6世紀末から7世紀にかけて造営されたとみられる竜ヶ鼻横穴墓群が所在し、古くから多くの遺物が伝わっている。発見についての経緯は明確ではないが、戦後すぐには古墳と認識されており、1966(昭和41)年の文献にはすでに前方後円墳として記述されている⁽¹⁾。全長は現況で32m程を測り、長円状の墳形が観察できるが、全体的に墳丘土の流出や改変のためか保存は良くない。頂部に壇掘跡の痕跡のような産みがあるがその経緯については何も伝えられていない。地形からの推定で前方後円墳として周知されていたものの、出土遺物も知られず、古墳としての確証は皆無であった⁽²⁾。

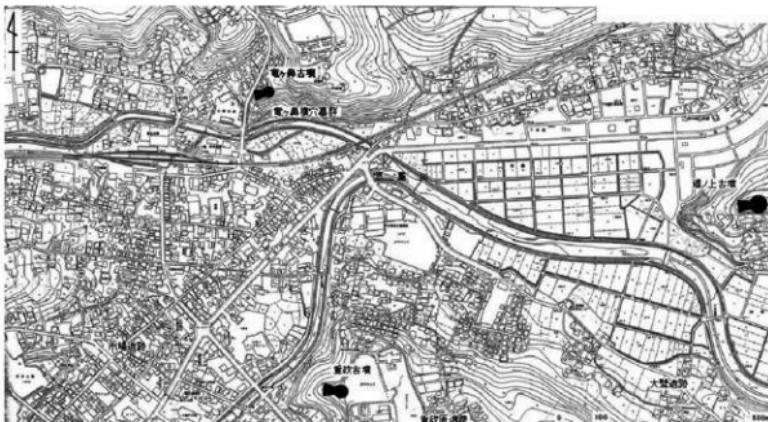
1998(平成10)年に宅地開発に伴う竜ヶ鼻横穴墓群の調査が行われた際、B群1号横穴墓の前庭部からの出土遺物の中に円筒埴輪が含まれ、崖上に位置する竜ヶ鼻古墳から転落した可能性が考えられたことが調査のきっかけである。そこで調査を延長して竜ヶ鼻古墳にも確認調査を行った結果、円筒埴輪が出土し、初めての築造時期を推定できる資料を確認することができた⁽³⁾。同時に測量図面の作成も行われ、2002年には大分県指定史跡に指定されている。

その後、豊後大野市教育委員会による市内遺跡事業で主要古墳の範囲確認の調査を進めるにあたり、墳丘測量図が20年が経過して精度的にも古く、世界測地系の座標を用いた測量図として資料化するため、事前に墳丘測量調査を実施した。調査は別府大学文化財研究所と同大学考古学研究室の協働により2020(令和2)年度に実施した。

(諸岡)

【註】

- (1) 中島宗方 1966「古墳時代」『三重町誌沿革編』三重町
- (2) 玉永光洋 1987「古墳時代」『大分県三重町誌総集編』三重町
- (3) 諸岡郁編 2002『三重地区遺跡群発掘調査概報VI』三重町教育委員会



第96図 竜ヶ鼻古墳周辺地形図 (1/12000)

2. 墳丘測量調査

(1) 調査に至るまでの経過

竜ヶ鼻古墳は、三重盆地の縁辺に立地する前方後円墳で唯一盆地北側に立地する前方後円墳である。古墳が立地する地形は、台地から北東側に突出した尾根上に造営されている。なお、この尾根の南側斜面には、6世紀後半から7世紀初頭に造営された総数20基以上の横穴墓からなる竜ヶ鼻横穴墓群が存在する。

古墳は、後世の削平等により全体的に前方後円墳であると推定できる程度しか残存しておらず現状で段築や葺石等も確認できない。これまでの調査で、後円部が東側を向く前方後円墳であると考えられている。

最初に紹介された古墳の測量図は、50cm間隔の等高線の測量図であった(諸岡1990)。そこで、1998(平成10)年には、下段で確認されていた竜ヶ鼻横穴墓群の発掘調査に関連して、竜ヶ鼻古墳の発掘調査が実施されることとなり、その前に平板測量による25cm間隔の等高線の測量図が作成された(諸岡2000)。

以上のような調査歴のなか、豊後大野市が実施している市内古墳の総合調査の一環で、これまで同市内で墳丘測量調査を行ってきた(玉川2012・2014・2015・2016・2019・2021)別府大学文化財研究所に、市内古墳の墳丘測量調査と同じ方法での調査実施の依頼し、墳丘測量調査を行うこととなった。

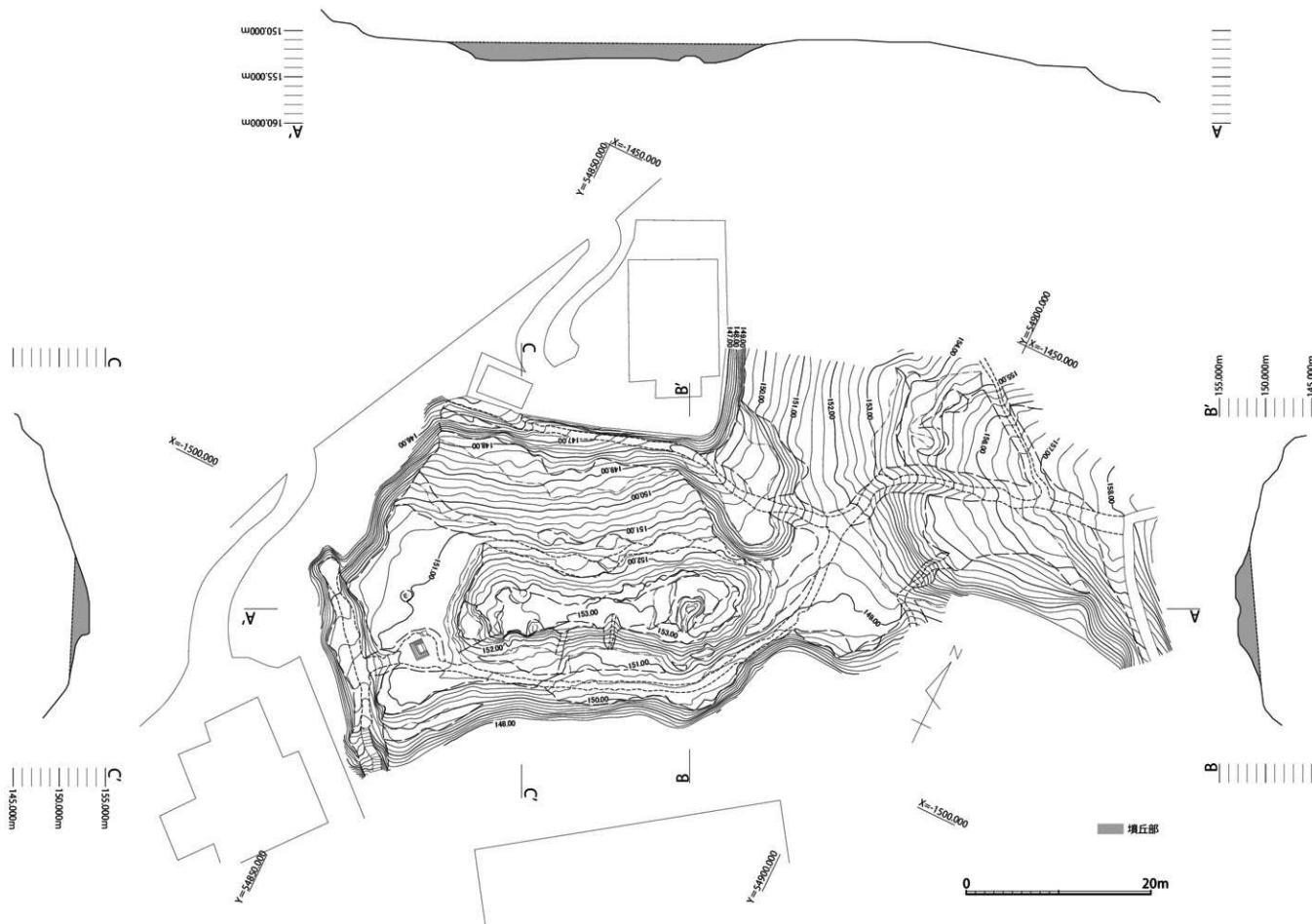
墳丘測量調査は、デジタル機器を用いた変化点測量法(玉川2004)により行い、別府大学の玉川剛司の指導のもと、末光博史(大学院博士前期課程文化財学専攻2年)、朝川千聖、木嶋晴崇、重岡菜穂、高橋渉、森中明音、向井浩太(大学部史学・文化財学科4年)、河野美帆、山岡由季(同学科3年)、江口幸希(同学科2年)、伊藤一道(同学科1年)と一緒に実施した。測量調査期間は、2020(令和2)年7月17日から11月16日までの14日間で行った。測量範囲としては、墳丘部を中心に2705m²で、計測点は墳丘および周辺地形を合わせて4755点で、そのうち墳丘部は2400点ほどであった。測量調査を実施するにあたり、あらかじめ市教育委員会が設置した合計4点の基準点⁽¹⁾を使用し、必要に応じて補助杭および測量鉛を設置して測量調査を行った(第97図)。

以下、測量調査の成果について述べたい。

(2) 墳丘測量の内容と成果(第97図)

墳丘部は全体的に削平等により墳丘盛土が消失しており、現状では明確に後円部か前方部であるかを認識するのが困難である(第97図)。これまでの調査等(諸岡2000)で、後円部は現状墳丘の東側であると考えられており、墳頂部の壺掘坑位置や墳頂部平坦面の広さから、墳丘東側が後円部であるという認識で間違いないと考えられる。以下、前方後円墳の各部についてそれぞれみていきたい。

後円部 後円部は、墳端から墳頂部まで全体的に掘削を受けているため円形状を呈しておらず、残存している墳丘盛土の状態は細長い卵形のような形態である。現状では、くびれ部の明確な位置を判別するのが困難である。しかし、墳丘主軸から墳丘南側の墳端から墳頂部に登る里道がある地点までの範囲の等高線が弧を描くようにめぐり、この地点から直線状に開くように廻っていることからこの地点がくびれ部となる可能性が高い。一方、主軸から墳丘北側については、現状墳端に沿って里道があることにより等高線がかなり乱れている。この里道よりも下段の151.250mの等高線に沿って長さ4m、幅1.5mほどのテラスがみられ、このテラス付近から墳丘西側かけて開いて等高線が直線的にめぐっていることから、この付近が北側のくびれ部であると想定される。また、後円部の墳丘主軸側についてみると、主軸から若干北側では現状の墳端ラインよりも上位の等高線の間隔が等間隔であることから、墳丘盛土が比較的に残存している個所であると考えられる。この箇所の現状の墳端ラインの外側をとおる151.500mの等高線と、墳丘南側を通る里道の上端ラインが接する地点付近が、おそらく墳端であると思われる。この3箇所を通る径19.4mが後円部径であると推定できる。しかし、前述したように、墳丘盛土の消失が多いため、トレンチ調査による確認とその成果が必要となる。なお、墳丘主軸側については、1998(平成10)年にトレンチによる発掘調査が実施されている。



第97図 竜ヶ鼻古墳墳丘測量図(1/400)

墳頂部については、南側斜面の等高線153.000mの等高線付近から後円部中央方向に、長さ3.8、幅3m深さ1.1mの盗掘坑がみられる。この盗掘坑がある墳頂部のテラスより西側では、長さ2mほどの斜面が続き、一段下にテラスがみられる。この一段下のテラスから墳頂部に至る斜面が隆起斜道の痕跡である可能性がある。現状の後円部の墳頂部の最高標高は153.610mで、墳頂高は2.6mとなるが、本来さらに1.5m以上高かったものと考えられる。

くびれ部 後円部の説明において、墳丘両側のくびれ部の位置を推定した。この両くびれ部の想定地点間を測る10mが、くびれ幅であると考えられる。くびれ部の墳頂部の最高標高は、152.925mで、後円部の墳頂高との差は0.685mしかなく、くびれ部の墳頂部についても削平されている可能性が高い。

前方部 墳丘南側では、前方部中ほどの墳頂に至る里道から西側で、テラス下端ラインから墳頂部にかけての斜面の崩落が進み等高線間隔もかなり狭くなっている、墳丘斜面の遺存状況がかなり悪いことが窺える。

一方、墳丘北側では、墳丘斜面の遺存状態が良好である。まず北側からみると、墳丘北側のくびれ部を想定したテラスから1.4m西側に151.000mの等高線に沿って、長さ5m、幅1.4mほどのテラスが確認できる。さらにこのテラスから4.6m西側にも、等高線150.500～150.750mの等高線に沿って、長さ10m、幅0.9mほどのテラスが確認できる。これらのテラスは、断続しているものの本来同じテラスであった可能性が高く、墳丘側の斜面からこれらのテラスの傾斜変換の下端ラインが、墳端ラインであると想定できる。この想定した墳端ラインと、その上位の等高線をみると、里道の範囲以外は大きな乱れもなく、ほぼ同間隔でくびれ部から開きながら直線状にめぐっていることからもいえよう。

前端部については、墳丘主軸付近が現状で墳丘が残存していることから、この箇所の現状墳端を参考に前端部の復元墳端ラインとしたい。墳丘北側の復元した墳端ラインと前端部の墳端に参考としたラインが接する地点を墳丘北側の隅角として反転復元すると、前方部長18.5m、前端幅18mの前方部であった可能性が考えられる。

段築については、墳丘北側の墳端ラインの上位の151.750mの等高線に沿って、現在里道がめぐっている。この里道は、墳端ラインとも並行していることから、本来一段目の段築であった箇所を里道として再利用された可能性が窺えることから、二段築成であったと思われる。

前方部の墳頂部については、最高標高153.483mで、前方部高は2.2mである。

周辺部 墳丘南側では、現在墳丘の裾をおよぶ里道からすぐに、竜ヶ鼻横穴墓群が造営された崖面が存在することから、竜ヶ鼻古墳はもともと狭い尾根上に築造された前方後円墳であったことが窺える。そのため、このような狭い尾根上の立地から、周溝は墳丘を全周しているとは考えにくい。現在、墳丘西側の台地からおりて古墳に至る箇所は谷地形を形成しており、この谷地形が尾根と古墳を切り離すための堀切状の溝の痕跡である可能性が高い。

(3) 測量調査のまとめ

以上、各部ごとに説明してきた。これらをまとめると、現在後世の削平や土取りの影響で、墳丘の形状が不明確であるものの、墳長36.5m、後円部径19.4m、くびれ幅10m、前方部長18.5m、前端幅18mを測り、後円部高2.6m、前方部高2.2mの前方後円墳であると考えられる(第98図)。また、段築については、前方部の北側で現在里道として利用されているテラスが段築であると仮定すると、後円部、前方部とも二段築成の可能性がある。周溝については、全周せずに後円部側に台地から続く尾根と古墳とを切り離すための堀切状の溝が存在すると考えられる。また、葺石については確認できなかった。

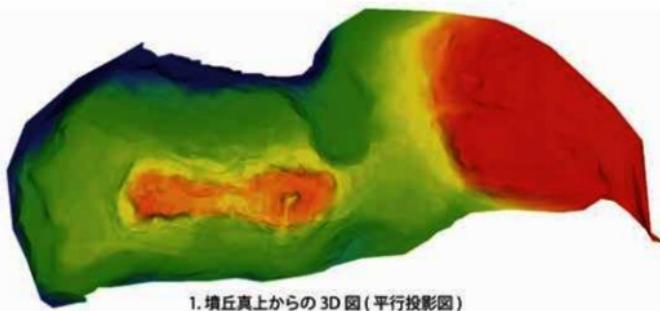
次に、古墳の立地について考えていく。古墳は三重盆地の北側の縁辺部に築造された唯一の前方後円墳である。また、古墳の墳丘主軸が盆地側の谷と並行するように築造されていることから、南西から南東方向を意識した築造である可能性が高い。このことを確認するために、測量データ(座標データ)から3D図(第99図)¹²⁾を作製した。第99図-1は、真上からの3D図(平行投影)で、2は墳丘東側からの鳥瞰3D図である(平行投影)。



第98図 竜ヶ鼻古墳墳丘測量図（測量復元案1/400）

3・5は平行投影で作製した3D図で、4・6は実際に現地で見た視点と同じ中心投影で作製した3D図である。なかでも3・4は真横からの視点、5・6は盆地内から見た視点の3D図である。この竜ヶ鼻古墳から1.2km南東には道ノ上古墳、730m南には重政古墳、1.9km南東には秋葉鬼塚古墳が立地しており、築造当初は三重盆地のすべての前方後円墳が視認できていたと考えられる。これらの古墳からは、第99図一4の3D図のように視認できていた可能性がある。また、古代駅路が秋葉鬼塚古墳の東側をとおり、重政古墳の西側をとおって、竜ヶ鼻古墳の東側の脇から台地を登っていたと推定されていることからも、台地に登るためのランドマークとして意義も加味された築造であった可能性も考慮する必要がある。今後、古墳と古墳周辺の調査が進み、古墳立地についての研究が進展することを期待したい。

（玉川）



1. 墳丘真上からの3D図(平行投影図)



2. 墳丘東側からの鳥瞰3D図(平行投影図)



3. 墳丘南側 真横からの3D図
(平行投影図)



5. 墳丘南側 真横からの3D図
(中心投影図)



4. 墳丘南側からの仰角3D図
(平行投影図)



6. 墳丘南側からの仰角3D図
(中心投影図)

第99図 竜ヶ鼻古墳3D図

【註】

- (1) 墳丘東側にT-1・T-3、塚丘西側にT-2・T-4の計4本の世界測地系座標の基準点を基に測量を実施。なお、T-1・2は測量を開始する直前に設置され、T-3・4は1998(平成10)年の測量調査で設置されたプラスチック杭に改めて計測した基準点である。
T-1:X=-1489.362, Y=54880.965, Z=156.602, T-2:X=-1500.209, Y=54862.400, Z=153.400
T-3:X=-1490.909, Y=54881.615, Z=153.609, T-4:X=-1498.516, Y=54863.640, Z=153.363
- (2) 座標値のデジタルデータから、TINデータ(近接する座標値から不整三角網生成し、地表面を三角形の集合で表現するデジタルデータ構造。)を作製し、標高値を段階的に色分けした3D図

【参考文献】

- 田中裕介 1998「立野古墳」『大分の前方後円墳』大分県文化財調査報告書第100輯 大分県教育委員会
 田中裕介 2019「豊後大野市の古墳群からみた地域社会と首長像」『古墳時代阿蘇ルートの研究』熊本大学文学部
 玉川剛司 2004「小熊山古墳測量調査」『文化財研究所年報』2 別府大学文化財研究所
 玉川剛司 2012「小坂大塚古墳測量調査について」『豊後大野市内遺跡発掘調査概報3』豊後大野市教育委員会
 玉川剛司 2014「漆生古墳群測量調査について」『豊後大野市内遺跡発掘調査概報4』豊後大野市教育委員会
 玉川剛司 2015「秋葉鬼塚古墳墳丘測量調査について」『豊後大野市内遺跡発掘調査概報5』豊後大野市教育委員会
 玉川剛司 2016「坊ノ原古墳墳丘測量調査について」『豊後大野市内遺跡発掘調査概報6』豊後大野市教育委員会
 玉川剛司 2019「重政古墳墳丘測量調査について」『豊後大野市内遺跡発掘調査概報9』豊後大野市教育委員会
 玉永光洋 1987「古墳時代」『三重町誌総集編』
 諸岡 郁 1990「三重町の前方後円墳」『おおいた考古』第3集 大分県考古学会
 諸岡 郁 2000「竜ヶ鼻古墳」『三重地区遺跡発掘調査概報』三重町教育委員会



3. 確認調査

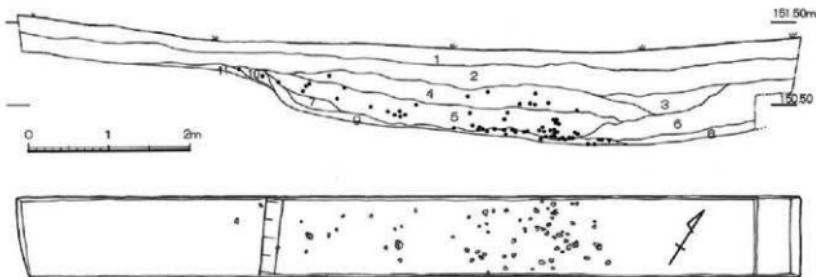
(1) 調査成果 (写真図版22)

竜ヶ鼻横穴墓より出土した円筒埴輪の原位置確認と併せ、墳丘規模の把握を目指して、後円部東側に第1トレンチ、前方部西側に第2トレンチの2箇所を設定した。

第1トレンチ(第101図)の後円部東側は台地地形から続く尾根地形上の稜線上で、傾斜面と墳丘斜面の間の平坦面である幅12m程の鞍部地形上に長さ9m、幅1mで設定した。墳丘裾側から約3m程の傾斜の緩やかな平坦面上に盛土された土層が続くのが検出され、表土層に削平を受けたことも考えられるが、墳端部のテラス状の遺構と考えられる。テラス東側に接するように掘り込みがあり、底部は標高150.00m程まで緩やかに下降しているのを確認した。堆積土層中には埴輪などの遺物が出土したが、葺石と思われる礫は全く出土していない。掘込みも地形に沿って幅6mを超えるものと思われ、底部はゆるやかに傾斜する。

1層	褐色土	表土で左底でサラサツしている
2層	褐色土	1層と同色の表土でやや硬質
3層	暗褐色土	2層と同層の中間色でやや硬質 褐色粒子を多く含む堆積土
4層	黒色土	堆積土で褐色粒子を含む軟質土
5層	黒色土	4層より黒みの強い堆積土で褐色粒子を わずかに含む
6層	暗褐色土	3層と同色同質の堆積土で砂利を含む

7層	暗褐色土	黄色・褐色粒子を含む軟質土
8層	褐色土	9層と同じ・同質の堆積土
9層	暗褐色土	7層とは同質で黄色土をブロック状に 含む堆積土
10層	褐色土	2層より明るい色調で軟質の堆積土
11層	褐色土	1層と同じで黄色土ブロックを含む 堆積土か

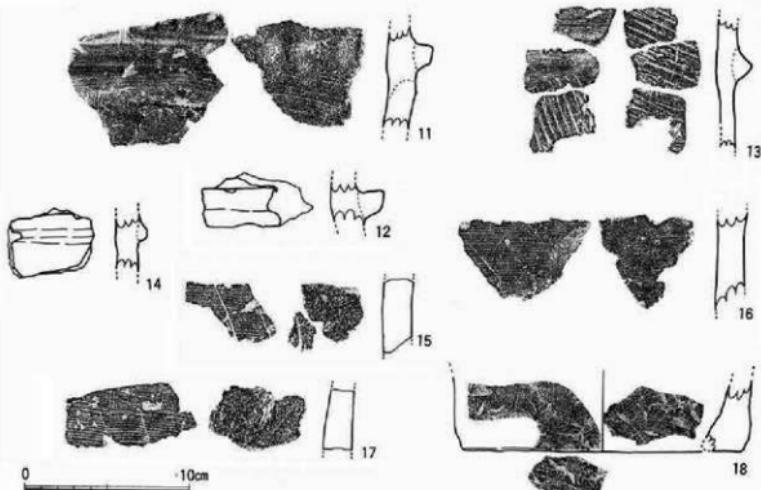
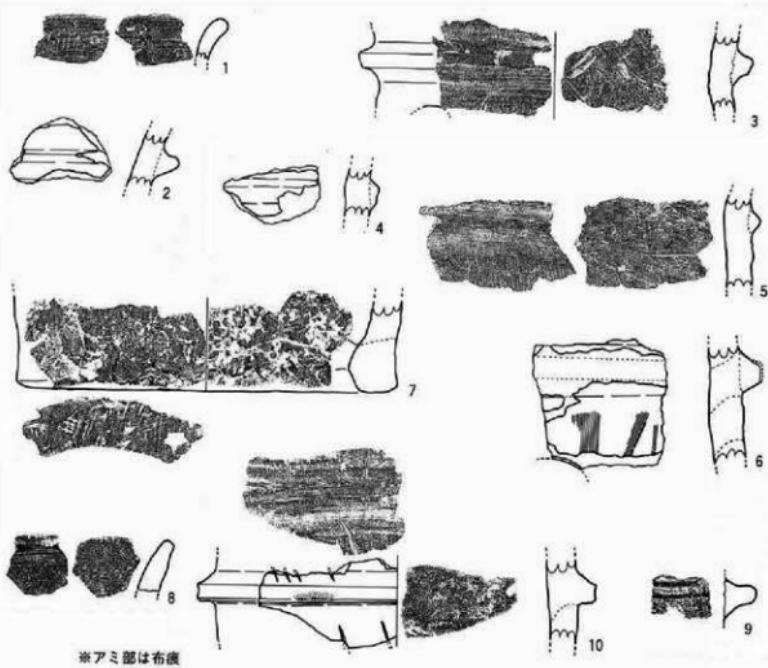


第101図 竜ヶ鼻古墳第1トレンチ (1/60)

第2トレンチは前方部西側の平坦地形上に長さ7m、幅1mで設定し掘下げたが、遺構は何も検出できなかった。墳裾側から2.8m程で地山が落込む土層が見られたが、第1トレンチの土層とは異なることから、擾乱の可能性もあり判断できなかった。遺物もわずかな不明土器片のみで埴輪の出土はなかった。

(2) 出土遺物 (第102図 写真図版23)

第102図1～7は竜ヶ鼻横穴墓B群1号墓より出土した円筒埴輪で、8～18の第1トレンチ出土資料と比較して色調がやや暗いものが多い。1は端部の丸い口縁部で、2は開き気味の口縁に近いものと考えられることから朝顔形埴輪の可能性がある。3～6は胴部で外面に縱方向のハケメがある。3・6は断面が台形状の高い突帯で4は低い突帯、5は三角状の低い突帯である。7は底部である。8は端部が平らな口縁部で、9は断面が丸い突帯、10～12の突帯は台形状で高く、14の突帯は低い。13は器壁が薄く、外面は粗いハケで三角形状の突帯がある。15～17の外面にはB種ヨコハケがあり、18は底部である。なお、円形状の透穴があるもの(3・6)、外面に斜め方向の線刻があるもの(8・10・15)、突帯貼付位置に2条の沈線の痕跡が確認できるもの(3・9)がある。



第102図 竜ヶ鼻古墳出土遺物(1/3) (諸岡2002)

4.まとめ

第1トレンチで検出した掘込みについて、その範囲までは確認できていないが、尾根状地形の区画するために掘られた溝と考えられ、周溝として全周には設けられてはいないと思われる。墳端の平坦面について、調査当時は墳丘端を削平されたことによる平坦面と判断していたが、その後の市内の古墳調査事例から墳端外周に設けられたテラス状の平坦面の可能性が考えられる。幅3mとかなり広く、葺石が存在しないため当初から墳端外周に構築された平坦面かどうかは確認できないが、当時の概報を修正して墳丘全長は測量調査の結果である36.5mと考えられる。

出土した円筒埴輪について、穴窓焼成の製作であり、朝顔形埴輪らしい破片も出土しているが、それ以外の種類の埴輪は今のところ出土していない。円筒の口縁部は軽く外反し、突帯は粗雑な台形から三角形までの幅があり、川西編年のIV期、集成編年では7期の中期中頃から後半の時期が考えられ、市内では最も時期が下る前方後円墳と考えられている。

第1トレンチ出土資料と発見の契機となった竜ヶ鼻横穴墓B群1号墓からの出土資料とは、両者比較して色調や調整方法などに差違があるが、形態的にはほぼ同一時期とみられることから、当古墳からの転落したものと判断される。竜ヶ鼻横穴B群1号墓はくびれ部から前方部の南側崖下に位置することから、その出土資料は南側くびれ部から前方部にかけて樹立されていた可能性が高いもので、第1トレンチ出土品とは配置場所の異なる個体差とも考えられる。

(諸岡)

【註】

- (1) 中島宗方 1966「古墳時代」『三重町誌沿革編』三重町
- (2) 玉永光洋 1987「古墳時代」『大分県三重町誌総集編』三重町
- (3) 諸岡郁編 2002『三重地区遺跡群発掘調査概報VI』三重町教育委員会
- (4) 田中裕介 2009『豊後大野市三重地域の首長墓とその動向』『地域の考古学 佐田茂先生佐賀大学退官記念論文集』

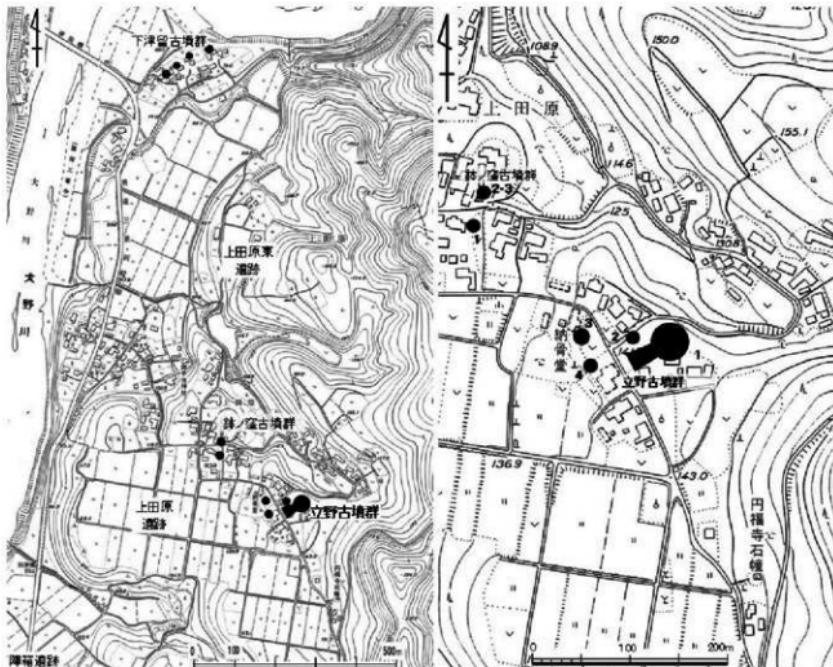
第6節 立野古墳

1. 確認調査の経過と概要

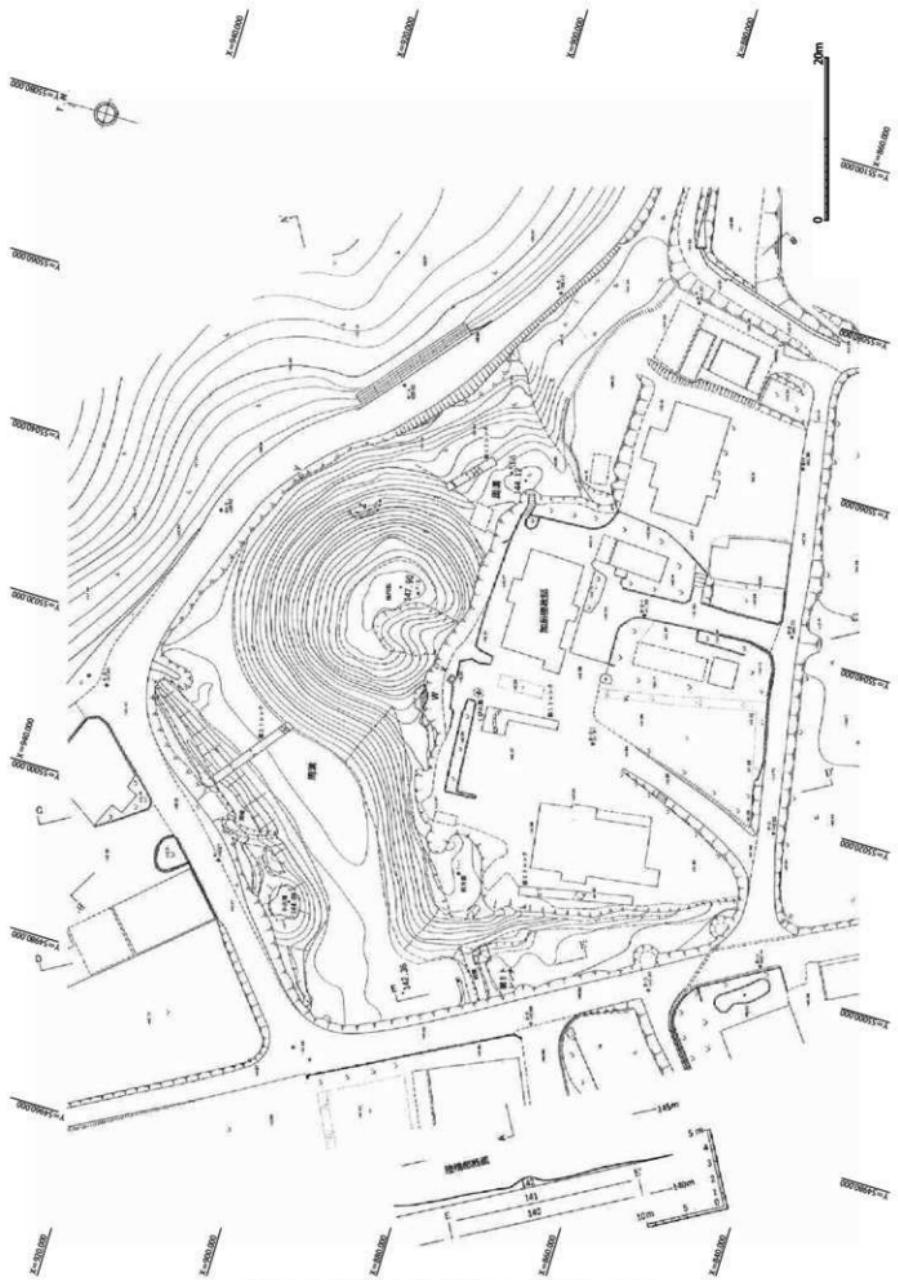
立野古墳は大野川本流に近い標高142m程の台地上に立地する前方後円墳である。3基の小円墳が隣接して古墳群として形成している他、下津留古墳群や鉢ノ窪古墳群などの小円墳群が近距離で分布する地域として知られている。その中で立野古墳が唯一の前方後円墳で、最も標高が高い周囲に展望が開ける位置である。また、600m程北に位置する上田原東遺跡より、古墳時代を含む集落跡が近年発見されている。

墳丘南側に宅地による掘削により失われているが、墳丘北側には周溝及び周堤を確認することができ、周囲に葺石とみられる礫が地表面に現れていることから、葺石に覆われた墳丘であったと推定されていた。後円部墳頂部は大きく窪んでおり盗掘の痕跡と考えられるが、主体部の状況は不明である。前方後円墳として確認されたのは1988(昭和63)年と比較的新しく、その際に、円筒埴輪や壺形埴輪が市内の古墳で初めて発見されている。その後1989年に測量図作成が行われ、1992(平成4)年大分県史跡指定となっている。

1995(平成7)年度に大分県教育委員会による測量調査及び確認調査が行われた。確認調査は築造当初の規模や形態の把握を目的として5箇所計51m²を設定され、くびれ部から前方部幅の確認に第1・2トレーナ、周堤や周溝の確認で第3トレーナ、後円部東端の確認で第4トレーナ、前方部前端の陸橋部の確認で第5トレーナを設定して行われた。その成果としてまとめられている調査報告書『大分の前方後円墳』(田中1998)をもとに再構成する。



第103図 立野古墳周辺地形図(左1/12000・右1/5000)



第104図 立野古墳境丘測量図(1/600) 報告書より一部改変

2. 墳丘測量調査

墳丘測量は25cm等高線で国土座標に入れて作成された結果、墳長は65mに達し、前方部頂は平坦で高まりを持たない柄鏡状の墳丘形態であることが観察できる。(第104図) 墳丘上には段築面を推定できる地形も確認できず、段築は仮にあるとしてもかなり幅の狭いものであると推定される。前方部前端に陸橋らしい土星状地形が西側に伸びているのが確認される。墳丘表面に葺石があり、埴輪はあまり拾えていないことなどが観察できた。

後円部東端は台地崖際の位置で周溝が存在した可能性はないことから、周溝は当初から全周しない設計で構築されている。第4トレチ付近は南側周溝の可能性が高い。墳丘北側の周溝に沿って周堤とされる土星状に高まっていて、その西端に小円墳の可能性がある径10m弱の高まりがあり、周堤はその付近で途切れている。

この結果、前方部形態や周堤の構造、南側の周溝や陸橋の存在を確認するため調査を行った。

3. 確認調査

(1) 第1トレチ(第105図 写真図版24)

南側くびれ部検出や出土遺物の検出を目的に幅1m長さ7.5mで設定したところ葺石の根石を検出し、さらに西側に拡張してくびれ部墳端の根石列を検出した。根石以外は宅地造成時に抜取られて失われているが、裏込めの土(Vb層)で固定し、硬い暗褐色土(Va層)で根石正面を押さえるように貼付けられているのが確認されている。根石礫は凝灰岩角礫が使用されており、赤黄褐色礫や黒灰色の凝灰岩角礫など3種類の角礫のほか根石からは川原石の円礫で葺き上げていたと考えられている。その下層及び墳丘部は地山のローム層(E層)で墳丘は地山を削り出して造られている。

トレチ南端でも周溝の立ち上がりは検出できず、周溝外線はさらに南側になると思われる。周溝の底面を平坦にするために敷かれた整地層と見られる土層を検出している。

遺物は、根石列全面の周溝内流土より埴輪片が多く出土し、円筒埴輪・壺形埴輪等の破片がいずれも転落した状態で出土した。

(2) 第2トレチ(第106図 写真図版24)

前方部南側の墳端及び周溝の確認として幅1m、長さ14mで設定したが、後世の土壌や溝などにより大きく破壊されていた。土壌と溝の間に周溝埋土とみられる土層、及び周溝底面がわずかに残っていたものの、墳端や周溝外線共に失われている。墳丘は削り出しとみられ、葺石と思われる礫はすべて転落した状態である。

土壌埋土から近世陶磁器のほかに埴輪片も含まれて出土している。

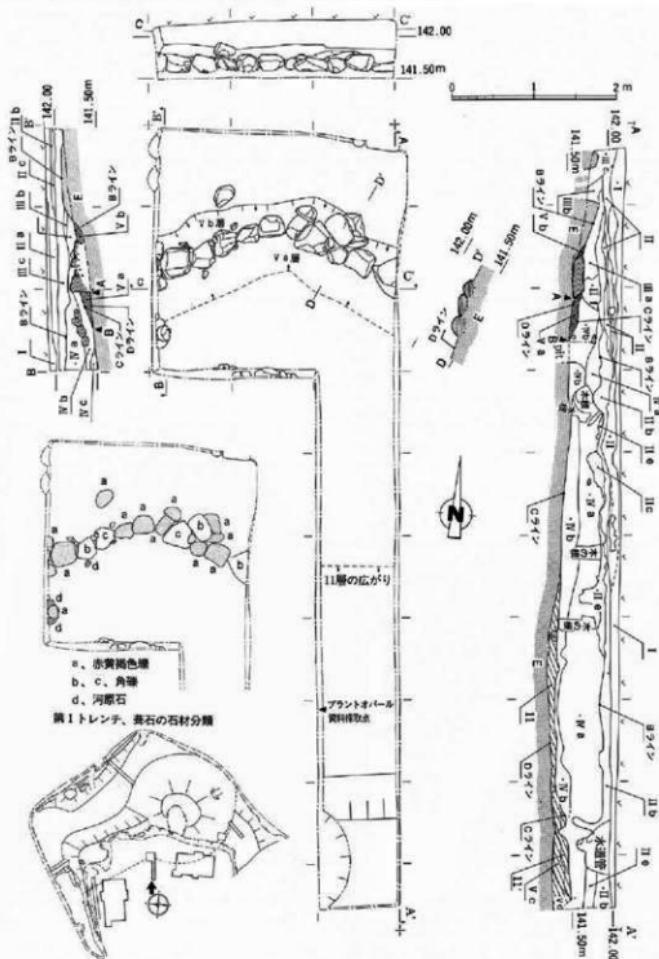
(3) 第3トレチ(第108図 写真図版24・25)

後円部北側から周溝周堤の構造を確認するため幅1m、長さ12mで設定した。葺石の根石列とそれに続く葺石を検出し、周溝の外側が2段となっている。また、土星状の高まりである周堤は盛土ではなく削り残された自然地形である可能性が高いことが判明した。

葺石は大型の凝灰岩角礫を根石とし、斜めに貼るように据えている。第1トレチと同じ前面には抑えの土(Va層)で固めているが、第1トレチより礫は大型である。根石列のみ大型礫で、それより上には人頭大の赤黄褐色礫と円礫が利用されている。墳端の高さは第1トレチくびれ部より約20cm低く検出している。周溝はトレチ西側ですぐに地山ローム層に達したのに対し東側では1m以上掘下げて周溝底面に達し、外側は2段になるよう構築されている。溝底の標高は141.2mで他のトレチよりやや深い。この溝底面は黄色土の自然層ブロックや粒子の混ざる層位(V層群)が続いている。周溝削時に盛土採取で一旦深く掘った後、墳丘整形時に再び埋めて周溝底面を整えた層と推定されている。周堤は表土層下より自然堆積層が現われ、他のトレ

ンチとも高さが合うことから、周堤状の高まりは人工的な盛土構築ではないことが判明している。削り残して周堤としたか、または自然地形の名残と考えられている。

出土遺物は葺石上より埴輪片を検出したのみで壺形埴輪が大半である。

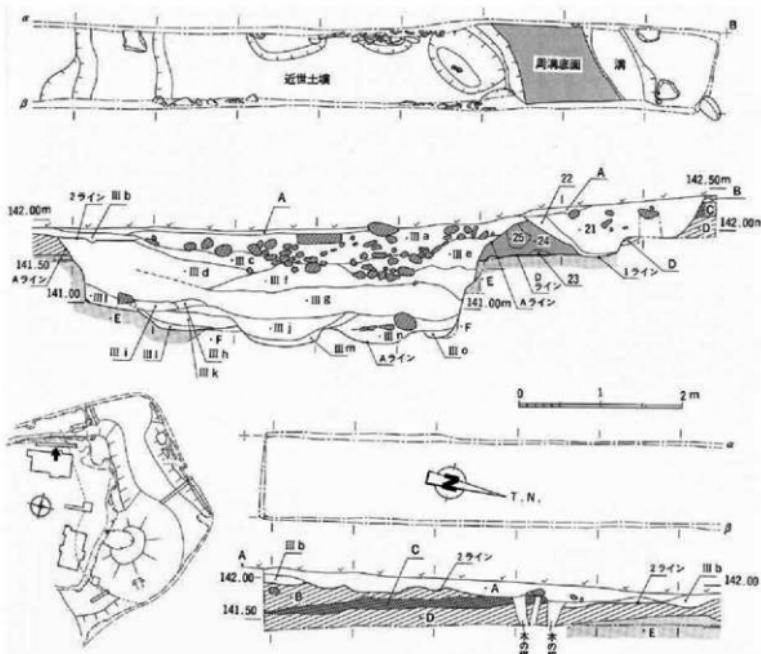


第105 図 立野古墳第1トレンチ(1/60) 報告書より転載

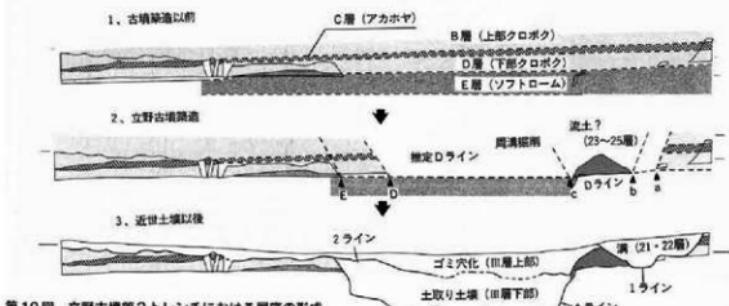
(4) 第4トレンチ (第109図 写真図版25)

後内部南側の埴端と周溝の確認を目指して設定して幅1m長さ7.5mで設定している。葺石根石列を2箇所で検出したことから埴溝にはテラス状の施設を確認している。葺石は下段に大型凝灰岩角礫を貼付けた根石列と、上段に大型円礫の根石列の二列を検出し、その間は小円礫を用いた敷石が施された緩やかに傾斜するテラス

状の平坦面が造り出されている。テラスの高さは142.5mで、下段の根石に凝灰岩角礫を用いることから墳端とみられ、その高さは141.9mである。また墳端から周溝底にかけて根石の固めと周溝整形土(V層)がある。周溝については墳端から南が底面で、高さは141.7~8mで、第1トレーナーよりやや高くなっている。出土遺物は少なく葺石上より円筒埴輪片を検出している。

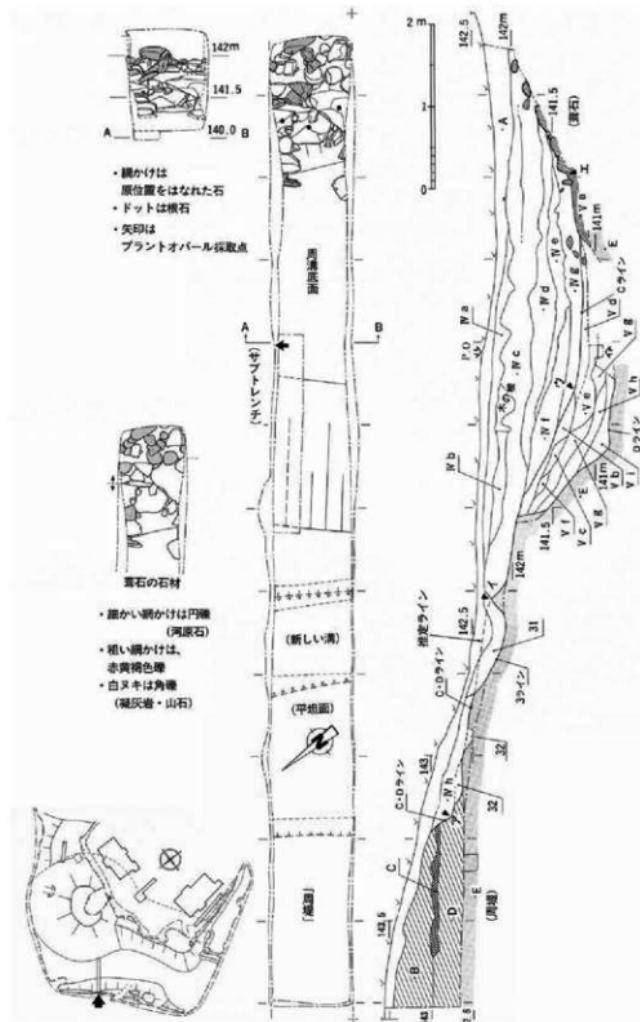


第106図 立野古墳第2トレンチ (1/50)



第10回 立野古墳第2トレンチにおける層序の形成

第107図 立野古墳第2トレンチにおける層序の形成 報告書より転載



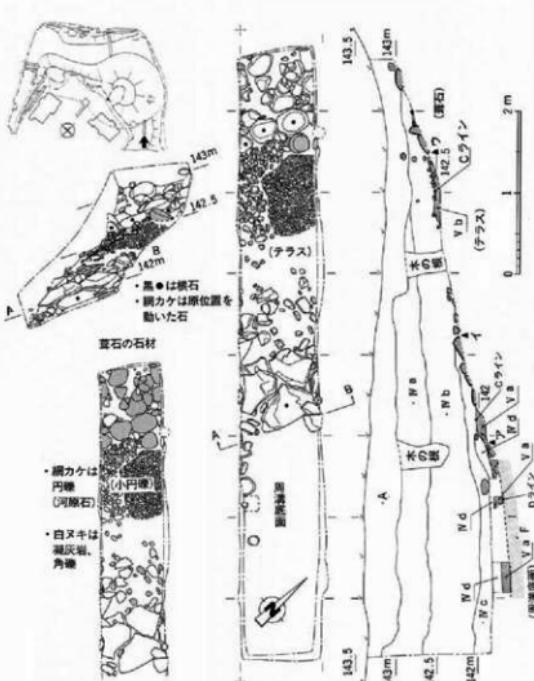
第108図 立野古墳第3トレンチ (1/60) 報告書より転載、一部改変

(5) 第5トレンチ (第110図 写真図版25)

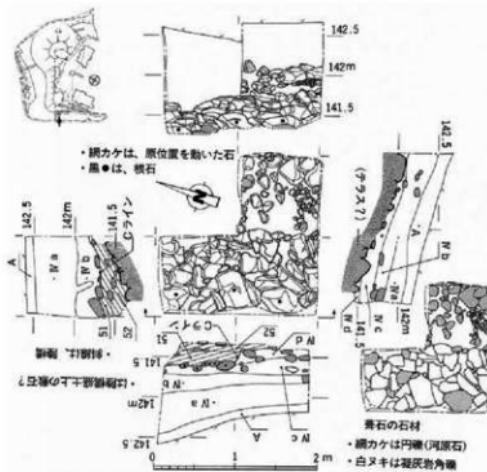
前方部前端の確認のため幅1m長さ2mで設定し、陸橋の存否を目的として北に1m拡張して約3m²で設定した。葺石の根石とみられる大型礫を確認し、陸橋は墳丘完成後に土を盛って付設された可能性が高いことが判明した。

葺石はトレーン西端で根石列と判断される大型凝灰岩角礫を確認し、墳端はそのすぐ西側で高さは 141.2m と推定される。石材は根石付近で河原石が一部混じるものの大半が人頭大の凝灰岩角礫で斜面上にいくほど河原石に変わっていくが、途中角礫から円礫に変わることで石が少なく傾斜が鈍る面があり、狭いテラスの可能性もある。

陸橋付近の掘下げ途中で、円礫の集中箇所があり、その下に埴輪をほとんど含まない層(51・52 層)が陸橋の下のみに存在する。その下層には葺石が存在していることから立野古墳に伴う構築物かは不明である。上層の流土堆積状況からも後世の付加とも思われないため、古墳完成後の埴輪が崩落しない近い時期に前方部前端中央に盛土の陸橋を構築し広い意味での古墳の施設と推定される。



第109図 立野古墳第4トレンチ (1/60) 報告書より転載



第110図 立野古墳第5トレンチ (1/60) 報告書より転載

第9表 立野古墳トレンチ層位一覧表

4. 出土遺物（第111～113図 写真図版26・27）

トレンチ調査のほか古墳確認時の採集品（Z 地点）とその後台風で崩落した際の採集試料（W 地点）で多くの出土遺物があるが、古墳時代の遺物について図示している。

まず埴輪について、円筒埴輪と壺形埴輪が多くを占めている。その属性について、胎土に1mm大の小角閃石と長石が含まれ、雲母は一切含まれない。また、3~5mm大の大型白色石英粒子が含まれており、この特徴は大野川以東の佐賀関半島周辺の海部地域との関係が示唆されるものである。壺形埴輪と円筒埴輪ともに観察されることから、製作には海部地域との関係が深いことが示唆されるが、結晶片岩の粒子は含まれないことから产地は海部地域とは断定できず、古墳周辺在地の製作と考えられる。

成形技法として、円筒埴輪・壺形埴輪ともに接合面を内傾させる粘土帶積上げ方法で共通している。焼成技法は淡褐色から赤褐色系の色調で供献された土師器壺より明るい色で堅微な焼き上がりである。黒斑は観察できないが穴窯焼成ではなく野焼きと推定される。また円筒埴輪・壺形埴輪共に外面に赤色顔料が観察される。濃赤色で同一の顔料を使用したと推定される。特に円筒埴輪は底部まで丹塗りが及んでおり、完成時には真っ赤な色調だったと思われる。

以上のように立野古墳の埴輪製作には工程の各段階、胎土作り・成形調整・焼成・丹塗りで各埴輪に共通している。この事実は胎土作りから焼成に至る一貫した埴輪製作技術をもつ工人集団が携わった結果と推定されている。

(1) 円筒埴輪(第112図1~8、第113図26~32-35)

全周復元例がなく判断できないが、横断面は正円の個体であったと推定される。側面觀は上段口縁部が大きく外反し、胴部が円筒状である。基底部は下がすぼまるようである。規格は口径36cm前後で胴部計は24~27cm程になり、基底部径は約20cmと思われる。最上段と基底部には透穴がないので、突帯間にのみ透穴が施されたとすると少なくとも3条の突帯があったと復元できる。ここまで円筒埴輪共通の規格であるが突帯間幅などから次の2種類に分れる。

円筒埴輪a類は、復元できる高さは約66cmと高く、器壁が1cm未満と薄く、透穴は方形で文様は格子形の線刻を特徴とする。円筒埴輪b類は3条突帯で復元すると高さは45cmほどでも少し突帯数がまだ多かった可能性がある。また器壁が1.5cmと厚く透穴は方形と三角形で、文様は三角形の線刻を特徴としている。

外面調整は1次調整タテハケのみが丁寧に施されている。内面調整はa類は丁寧なタテハケ調整とナデを併用し、基底部では指圧痕を残すものの、接合痕を残さないように仕上げている。これに対し b類は一部にハケメが認められるが、ナデ調整が基本であるが粘土接合痕が明顯に残る例が多い。

基底部は厚い粘土帶貼り合わせずそのまま積上げていくと考えられ、底部は比較的薄い作りである。特別な調整はなく、乾燥時についたと推定される圧痕が残っている例が多い。口縁部は端部が水平になるまで外反する形態で、口唇部は下端が少し飛び出すように仕上げている。突帯の断面形態は高く突出した台形であるが、あまり高くない例もある。上面と側面に比べて突帯下面に接合痕や指圧痕が残る例が多い。突帯の接合方法で接合面に沈線を施す破片はなかったが、1条のヨコナデを入れてハケメが消える例がある。

透穴の形態には方形(2・3・7・26)と三角形(4・5・27・31)で円形透かしはなかった。方形透穴は一边7cm程の正方形で、a類は突帯間の上位に穿孔して(2・3)おり、b類は同じ大きさの透穴を狭い突帯間に穿孔するので中央いっぱいになる(26)。またa類では突帯上下の同じ位置に配される例がある(2)。三角透穴は今のところb類のみにあり、4の同一突帯間に近接して多数配されると考えられる例があり、その場合上下の突帯間では交互に配されたとみられる。

文様としてヘラ描き沈線による三角形・格子形・X字形の3種類が認められる。ヘラには透穴穿孔と同じ鋭利な工具を使用したもののがほとんどだが、植物の茎を使用したと推定される例もある(26)。三角は二重線をなす4・26があり、格子は6・7、X字形は31で、三角透穴の横に配されている。

円筒埴輪は、普通円筒埴輪のみで朝顔形円筒埴輪は使われていないと推定される。普通円筒埴輪はa類とb

類の2種があり、形態的にはほぼ同じであるが、規格は異なっており透穴と文様構成も異なる傾向がある。胎土・焼成・色調は共通してそれだけでは区別が付かないことから同一時に同一工房で立野古墳のために製作された可能性が高く、ab2者が意図的に作り分けたとみられる。

(2) 壺形埴輪(第112図9~20、113図23~25、33、34~41)

まず底部は、成形時に開放して作る成形時開放の技法で造られていて、焼成前に穿孔する形式は見いだせない。さらに底部端面外側に粘土帯を重ねて厚くしつかり底部をつくるa類(13・14・24・34・40)とそのまま薄く仕上げるb類(17・18・19・20・41)がある。成形技法も違いがあり、a類は内面に接合痕を残すタテ方向の指ナデで仕上げ、外面もナデ仕上げのものが多い。一方b類は内外面ともハケメ調整で仕上げ、特に内面底部までハケメが及ぶ点に特徴がある。b類が土師器壺の調整に近く、a類は調整をかなり省略した形式である。

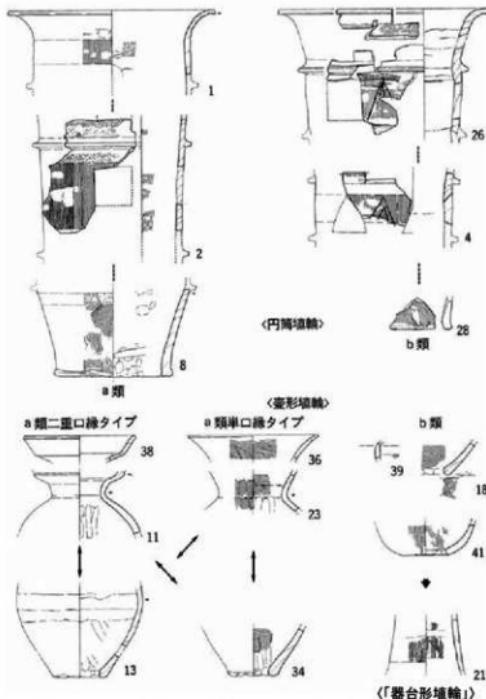
側面観や規格として二重口縁タイプ(9・11・37・38・39)と単口縁タイプ(23・25・36)がある。a類の単口縁タイプは口径22cmほどで、胴部径は22~24cm程度で、底部は約9cmとなる。器高は30cm強と推定される。胴部はいわゆる長胴形に近い。b類は口縁部の破片はないが、39からみて頸部が直立する二重口縁タイプが存在する。規格は判らないが破片からみてa類より小振りになる。埴輪化の進行したa類と、やや小型でまだ土師器壺の面影を残すb類があり、二重口縁と単口縁があるが単口縁が少なくa類よりb類が多い。

(3) 「器台形埴輪」(第113図21)

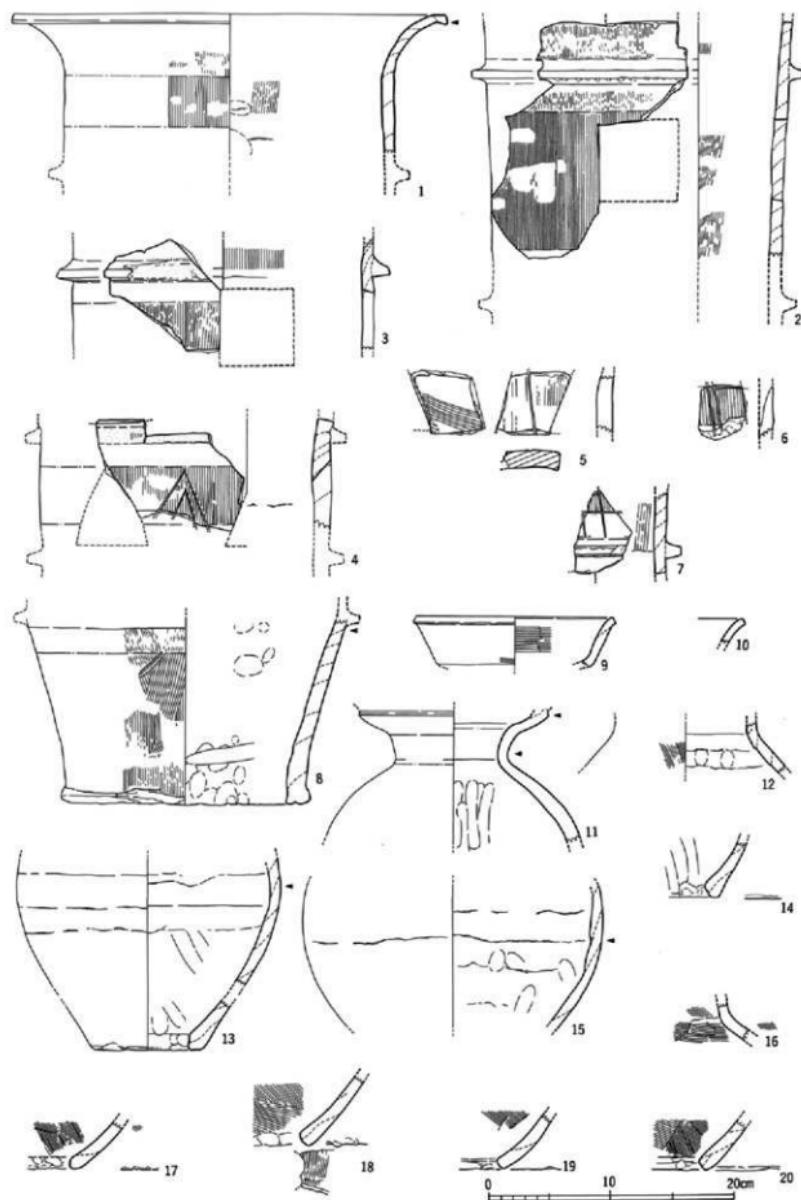
胎土・焼成・色調・丹塗りの点で埴輪と同一の破片であるが、粘土帯が外傾接合で製作技法は異なる。報告書当時は資料が乏しく、他の古墳の類例から器台形埴輪と考えられていたが、その後市内出土壺形埴輪の資料が増加し、頸部の形態上の類似性から壺形埴輪頸部の可能性も考えられるようになっている。

(4) 土師器壺(第113図22)

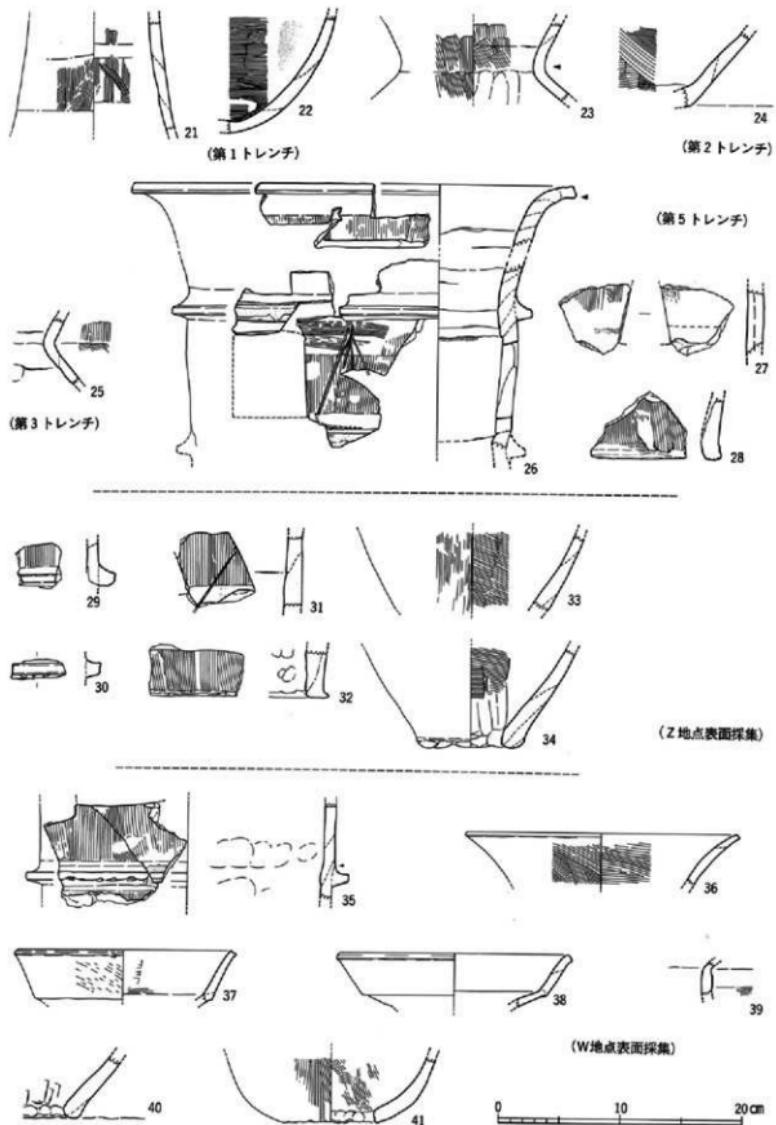
1個体のみ第1トレントから埴輪と共に出土したもので、胎土は埴輪と同じく大型石英粒が入るが、焼成と色調は異なり、やや暗くもろい感じを与えている。破片の内面と割れ口に赤色顔料が付着しており、埋葬に関わる土器の可能性が高く、在地形式の丸底の壺とみられるが、埴輪と同時・同一工房の製作ではなく、赤色顔料の容器とみられる点から見て海部地域からの搬入品の可能性もある。



第111図 立野古墳出土埴輪の分類と形式組成 報告書より転載



第112図 立野古墳出土輪1 (1/4) 報告書より転載



第113図 立野古墳出土埴輪2(1/4) 報告書より転載

5.まとめ

墳丘構築について台地上の傾斜際の位置に後円部墳端を起点として墳丘が完全な形に築造できるような設計が行われ、周溝は当初から全周しないと考えられる。前方部の方向は方位角237度でおおよそ西南西に向いているが、これは三重町内5基の前方後円墳の方位とほぼ共通しており、関連性が推定されている。

各トレチの根石端を墳端ラインとし、第4トレチ付近のみテラスが張出しが、後円部はほぼ正円に復元される。前方部もほぼ平坦であることから柄鏡形の平面規格であり、前方部陸橋は当初の設計になかったと考えられる。墳丘規模は墳長65.0m、後円部径約38.5m、前方部長約26.5m、くびれ幅・前方幅共に約20mとなる。また後円部高約6.5m、前方部高3.5mと推定され、前方部と後円部の比高差は約3mである。周堤の上端から見て後円部の周溝幅が約10mで、周溝の平面形は前方部に向かって狭まるかなり極端な馬蹄形と推定される。

墳丘構築の特徴として、旧地形が斜面にも関わらず基底線は水平であること、墳丘盛土は周溝掘削土を利用し、周堤には盛土はみられないこと、周溝は一部深く掘った後に整地していることが推定されている。葺石は大型凝灰岩角礫を根石に使用し、他は河原石を使用しており、前者は山地から後者は大野川採集したと考えられる。主体部は不明であるが前方部に陸橋が後に付設されていることから追葬あるいは複数主体の可能性がある。築造時期について、墳丘規格が柄鏡形で周溝が前方部が狭まる馬蹄形であることから、古墳時代前期後半の特徴である。円筒埴輪の特徴は川西編年の第1期に近く、集成編年の3期の古い時期と推定される。杵築市の小熊山古墳と葺石の特徴が共通することも3期の想定を示唆される。

立野古墳の埴輪樹立について
は、後円部墳頂に壺形埴輪a類
の樹立配列と、壺形埴輪b類や
円筒埴輪a類と少数のb類のみ
が少数供献されていたとみられ、
前方部頂の端部近くには円筒埴
輪b類のみが供献されていたと
推定される。埴輪形式の組成上
は、壺形埴輪が主役で円筒埴輪
が脇役であり、壺形埴輪中心の
葬送儀礼に円筒埴輪が一定の
役割を果たしているものと評価さ
れている。
(田中・諸岡)

【引用文献】

田中裕介 1998『大分の前方後円
墳』三重・西国東編 大分県文化
財調査報告書第100報
大分県教育委員会



第114図 立野古墳の墳丘企画想定案(1/800)報告書より転載

第7節 地中レーダー探査報告

NPO法人 iさいと 地中探査研究所

1. はじめに

平成28・29年度の2ヵ年で大分県豊後大野市三重古墳群の前方後円墳6基の中地レーダー探査を行った。これらの古墳は、前期から中期にかけて築造されたものと考えられているが、主体部について一部盗掘に遭った痕跡を有するものの、埋葬主体に関する情報は伝えられていない。今回の探査では、古墳主体部に関する情報を得ることを目的として、2017年1月28日に秋葉鬼塚古墳と重政古墳を、2018年1月27、28日に竜ヶ鼻古墳・小坂大塚古墳・道ノ上古墳・立野古墳で実施した。

(1) 地中レーダー探査

地中レーダー探査は、GSSI社製SIR-3000型デジタルパルスレーダーシステムに500MHzと270MHzのパルスアンテナを使用した。500MHzアンテナは、一般的に用いられるアンテナの中で、地表面から比較的浅い位置のものを高画像で描きだすのに適している。270MHzアンテナは、やや深い位置までの状況を描きだすのに適している。

SIR-3000システムは連続モードで使用し、現場に設定された基準杭を基に、1m単位を表示したテープに沿って走査した。

データは、50スキャン／秒で収集した。平均して通常歩行及び手引きのペースで2cm毎に1スキャンのデータを収集したことになる。

レーダー波は、その所要時間と深さによって希薄となるため、リニアゲインカーブの拡大処理をし、データは16ビットで記録し、512サンプル／スキャンでデジタル化した。

(2) 地中レーダー浸透深

レーダー探査を実施するにあたり、時間帯(Time Window)を設定し、実際のレーダー波のデータを記録する。タイムウインドウは、ナノ秒(NS)を単位とし、レーダー波がアンテナから地表面下の物質に向けて進み、物質からの反射がアンテナに戻ってくるまでの時間を記録する。よって推定マイクロ波速度からレーダー波浸透の深さを計算することができる。

マイクロ波速度を検討するには、いくつかの方法があるが、本現場では正関数を利用した方法をとった。この方法には、地下の物体からのレーダー波の反射が双曲線状(パラボラ形)となることを利用したものがある。地下の円柱状(もしくは球状)の物体からの反射がパラボラ状となってデータとして表示されるが、これはレーダー波がアンテナから地下物体に当たって戻ってくるまでの往復の時間が、比較して短いか長いかの違いによって表示されるものである(第115図)。

地下埋蔵物体へのレーダー波浸透深は: $T = 2 * \text{sqr}(x^2 + z^2) / v$

→Tは往復のレーダー波浸透深時間

xは地下埋蔵物体への水平距離

zは地下埋蔵物体への深さ

vはその土地のマイクロ波浸透速度

パラボラ形のT対Xのグラフの形は、浸透速度が速い場合はパラボラが幅広い形、遅い場合は細長い形というように、速度を推定することもできる。

本探査でのレーダー波浸透深は、現場で推定計算した。現場で得られた断面図を、GPR-SLICE v7.0ソフトウェアのフィルターメニューで処理すると、浸透度18.4、速度約7.0cm／ナノ秒に対応すると推定される(第116図)。

マイクロ波は、地中を伝導する振動による分散的なものと言える。その伝導には多少の誤差が生じるが、平均した数値を使用することが妥当と思われるため、本探査では、平均値7.0cm／ナノ秒として解析した。

推定マイクロ波浸透深を計算する式は、次のとおりである。

$$\text{推定マイクロ波浸透} = \text{タイムウインドウ} \times \text{推定マイクロ波速度} / 2$$

(3) 地中レーダー解析

データ・プロセッシング 地中レーダー探査は、アンテナから地中に向けて放たれたレーダー波が地中の物体に反射してアンテナに戻ってくるまでの時間と強さによって地中の情報を得るものである。レーダー波は地中の状況により著しく減衰したり、得られるデータに多くのノイズを含んだりすることがある。こうした場合に、リゲーニング(増幅)や各種のフィルター加工により、より鮮明なイメージを得られるような処理を行う。GPR-SLICE v7.0ソフトウェアでは、こうしたデータ加工処理が可能である。データ処理においては、バンドバス・フィルター(Bp)、を用いて解析を行った。(第117図)

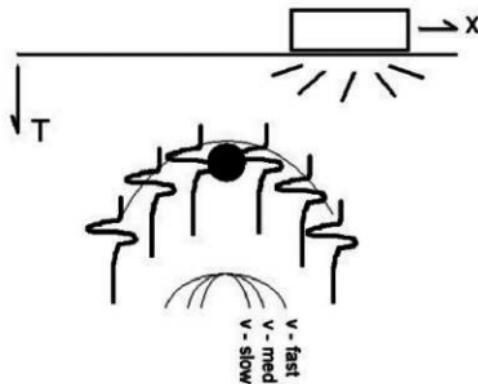
タイムスライス解析 断面図(Radargram)は、現場の地下を垂直にスライスしたものであり、アンテナを走査した部分の地下の状況を示したものである。

現場の地下を横切りにした平面図であるタイムスライス(Time Slice)は、全ての断面図データを利用して作成される。タイムスライスによって各断面データにまたがる反射の変化を知ることが可能となる。タイムスライスとは、現場のデータの一一定の時間帯のデータをつないでピクセルマップ化したものであり、地下構造などの深さ・位置などの情報限定が容易となる。(第118図)

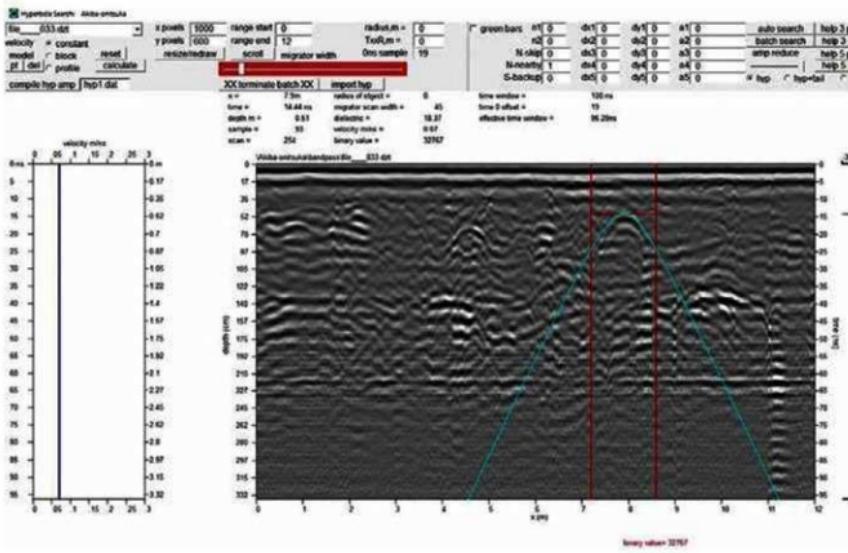
設定時間内におけるレーダーシグナルを、垂直もしくは水平方向で平均化処理し、反射の四方拡大は、断面方向に向けて0.25m毎にコンピュータ処理した。

連続したタイムスライスは、50%でオーバーラップさせた。オーバーラップ加工は、3D画面を作成する際に、よりスムースで高画像をイメージするのに適している。

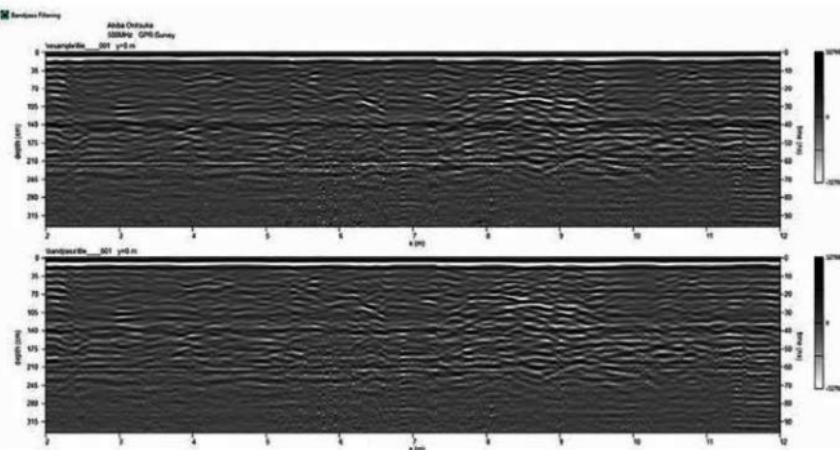
タイムスライスは、インバースディスタンス、又は、クリギングアルゴリズムを利用し計算している。ピクセルマップにおいては、明色は強い反射を、暗色は弱い反射を示す。いくつかの場合において、一次二次などの方程式利用により反射データの色変換を行い、色のコントラストを増した。又、最強弱の限界値の設定は、不規則変化の推定に役立つが、個々のタイムスライスで色配分を行うため、個々のタイムスライスで示す同色が、同じ反射の強さを示すものではないことを明記しておく。



第115図 円筒状の埋蔵物からの反射で記録されるパラボラ形の表示形式

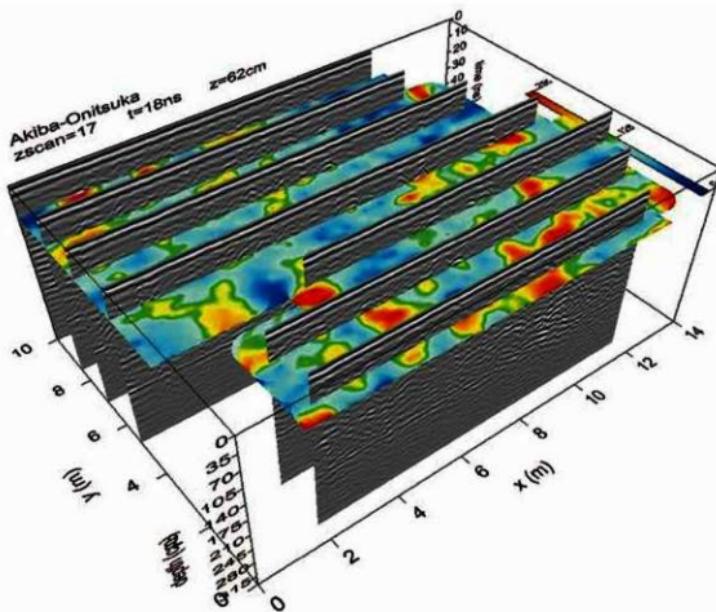


第116図 秋葉鬼塚古墳の断面データから想定されるレーダー波速度
7.0cm/ナノ秒でのレーダー浸透



第117図 500MHzアンテナで収集したデータにフィルター処理をしたもの

生データには、多くのノイズが見られるが、Bandpass等のフィルター処理により、ノイズを軽減できる。



第118図 断面データから水平なタイムスライスを作成するイメージ

実際には全ての断面データからタイムスライスを作成する

2. 地中レーダー探査の結果

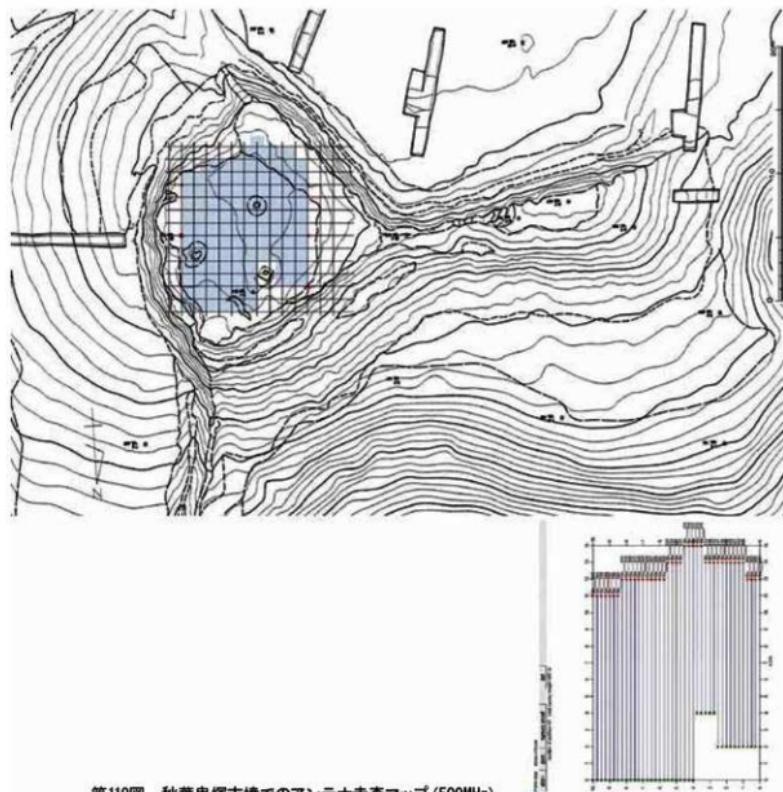
(1) 秋葉鬼塚古墳

秋葉鬼塚古墳では、500MHzアンテナを使用した。後円部墳頂平坦面に設定された杭の北西隅を基準点として、X方向(略南北)にアンテナを走査し、0.25m毎にY方向(略東西)に平行移動した。測定したデータ収集の総延長距離は467mである(第119図)。

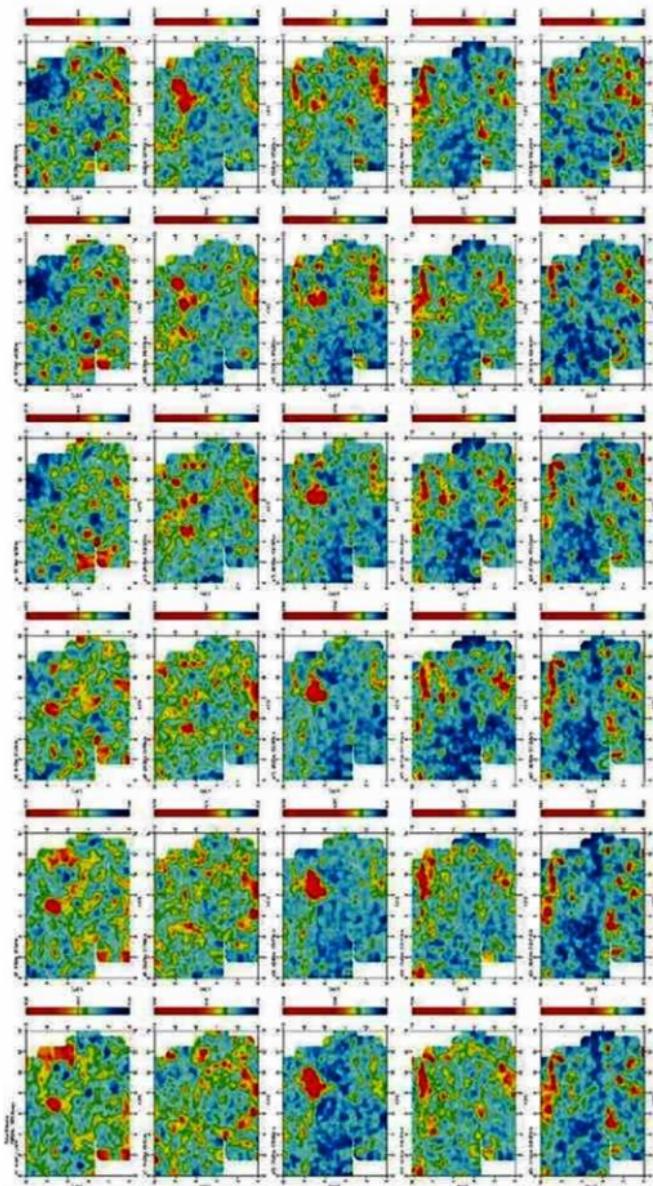
秋葉鬼塚古墳の500MHzデータは、タイムウインドウを6.45ナノ秒(23cm)毎にスライスした。

タイムスライス分析では、アンテナが接地する地表面から一定の深さのデータを表示するものである。これに対して、地表面の高低差(地形情報)を加味して処理する解析法も可能である。この地形修正処理タイムスライスは、地形の変化に左右されず、標高に沿って水平にスライスしたものであり、標的に同じ深さに位置するデータを表示するものである。

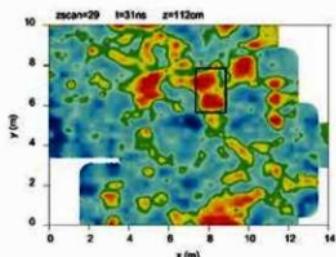
今回の秋葉鬼塚古墳では、後円部の墳頂平坦面のみの探査であり、対象範囲は概ね平坦であることから地形修正は行わなかった。



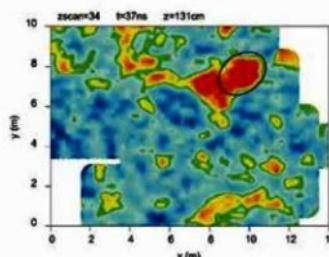
第119図 秋葉鬼塚古墳でのアンテナ走査マップ(500MHz)



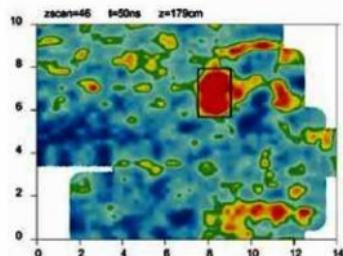
第120図 秋葉鬼塚古墳 500MHz7データによるタイムスライス



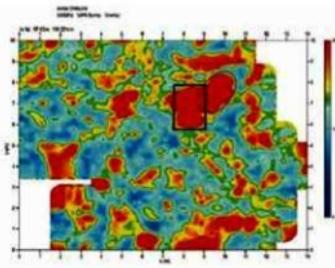
第121図 秋葉鬼塚古墳 地表下100cm前後の長方形の反射 (500MHzデータ)



第122図 秋葉鬼塚古墳 地表下130cm前後の橢円形の反射 (500MHzデータ)

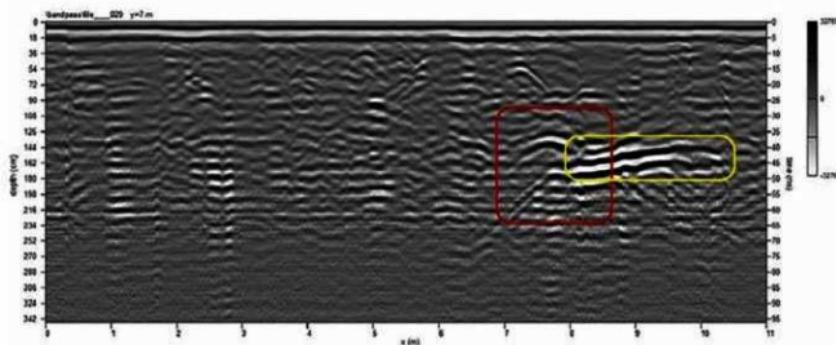


第123図 秋葉鬼塚古墳 地表下180cm前後の長方形の反射 (500MHzデータ)

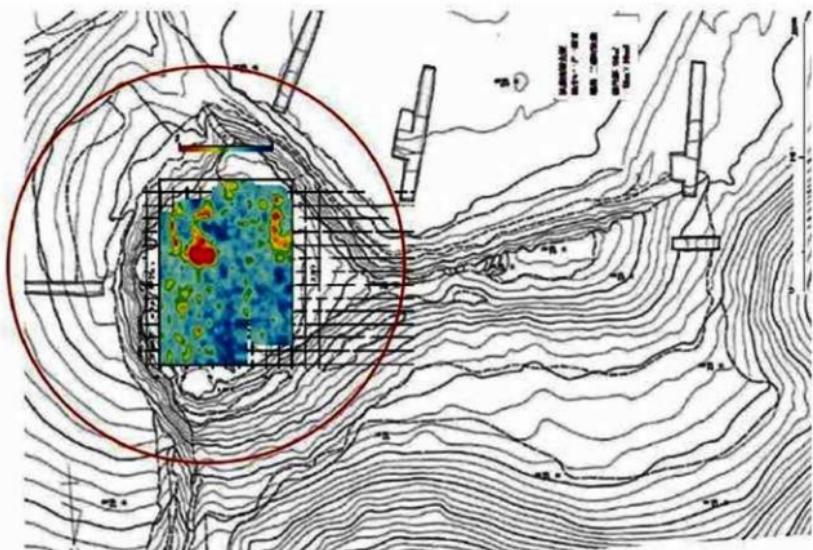


第124図 秋葉鬼塚古墳 後円部の反射オーバーレイ (500MHzデータ)

Akita Onsaka
500MHz GPR-Survey



第125図 秋葉鬼塚古墳 後円部の反射レーダーグラム (500MHzデータ)
二つの反射が重なる様子が分かる



第126図 秋葉鬼塚古墳 後円部の復元ラインと主体部位置

解析結果の判読

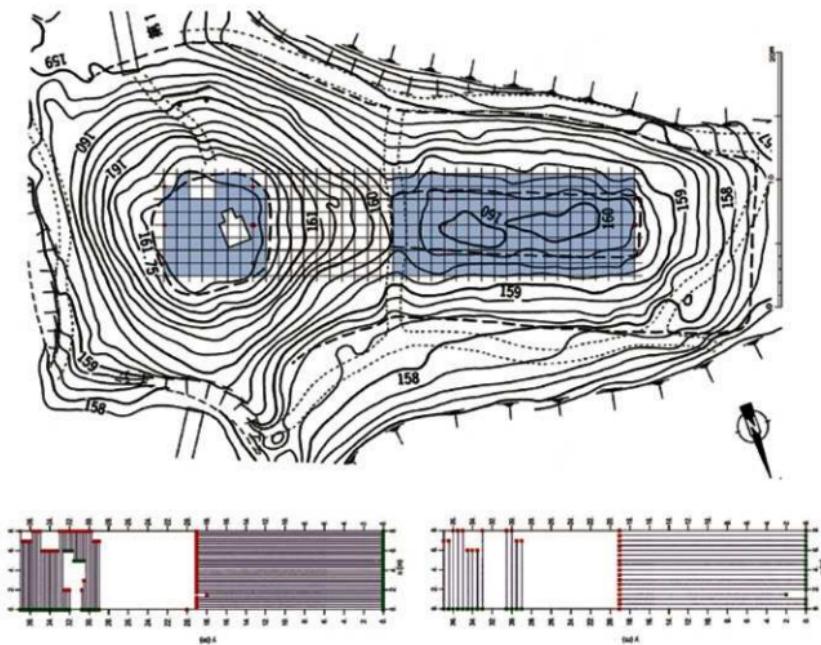
- 1) 秋葉鬼塚古墳は、前方部の南面及び後円部の東から南面にかけて大きく破壊を受けており、後円部墳頂平坦面も若干の削平を受けている可能性が高い。
- 2) タイムスライスにおいて、地表下90cm～150cm、X=7～8.5m、Y=6～8mの範囲において、略長方形状(1.5×2.5m)の強い反射が認められる(第121図)。
- 3) 2)の反射は、地表下100～150cm、X=8～10.5m、Y=6.5～8.5mに現れる強い反射と結合するように見られる(第122図)。
- 4) 3)の反射は、地表下170cmのあたりまでで消え、それ以降は2)の反射のみが認められ(第123図)、地表下220cm付近で消える。

(2) 重政古墳

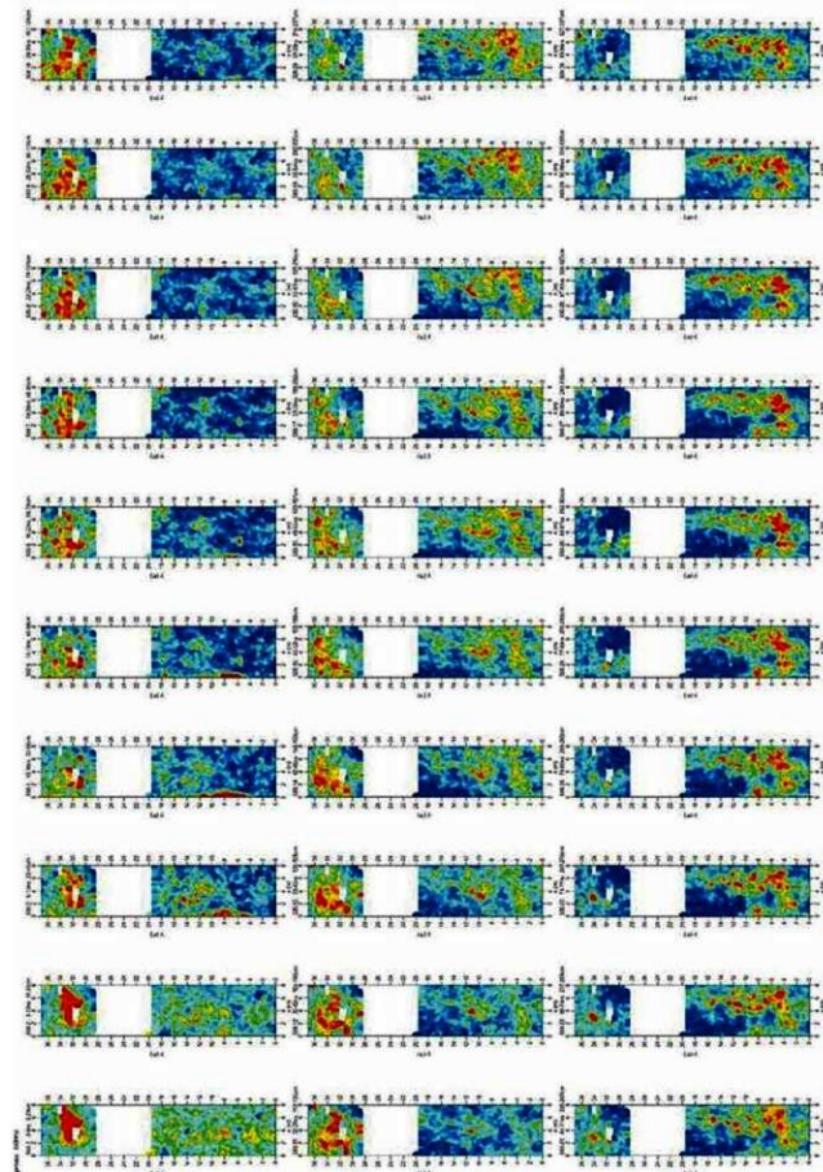
重政古墳では、500MHzと270MHzの二つのアンテナを使用した。前方部及び後円部に設定されたグリッドの北西隅を基準点として、前方部ではY方向(略東西)に、後円部ではX方向(略南北)にアンテナを走査した。500MHzアンテナでは、0.25m毎に平行移動し、データ収集の総延長距離は832mである(第127図左)。270MHzアンテナでは、0.5m毎に平行移動し、データ収集の総延長距離は415mである(第127図右)。

重政古墳の500MHzデータは、タイムウインドウを6.45ナノ秒(23cm)毎にスライスを行った。270MHzデータは、タイムウインドウを7.81ナノ秒(27cm)毎にスライスした。

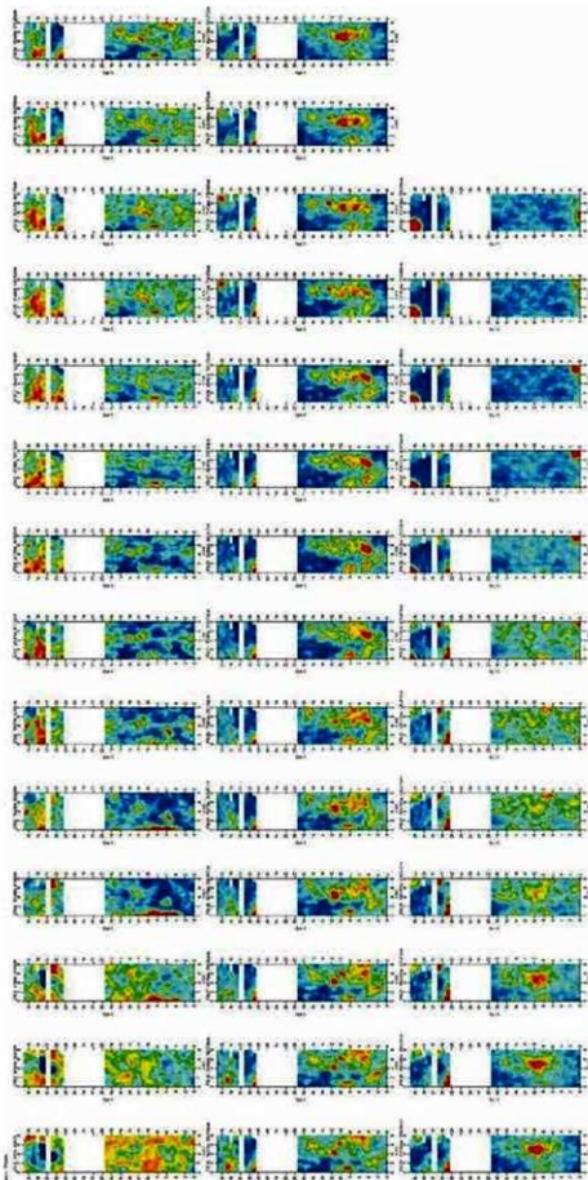
今回の重政古墳では、前方部及び後円部の墳頂平坦面の探査であり、対象範囲は概ね平坦であったことから、地形修正は行わなかった。



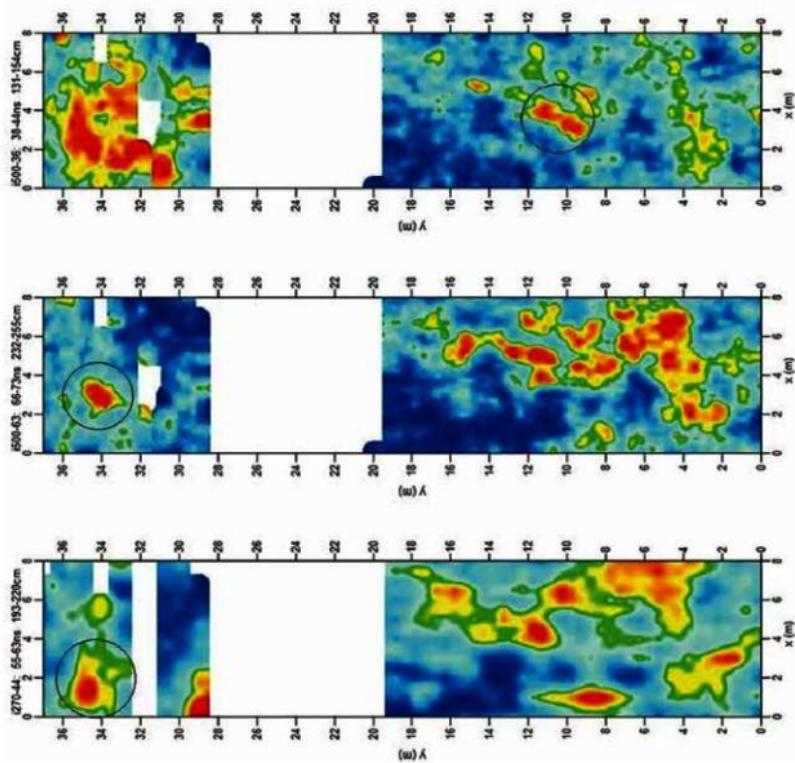
第127図 重政古墳でのアンテナ走査マップ(左:500MHz 右:270MHz)



第128図 重政古墳 500MHzデータによるタイムスライス



第129図 重政古墳270MHz データによるタイムスライス

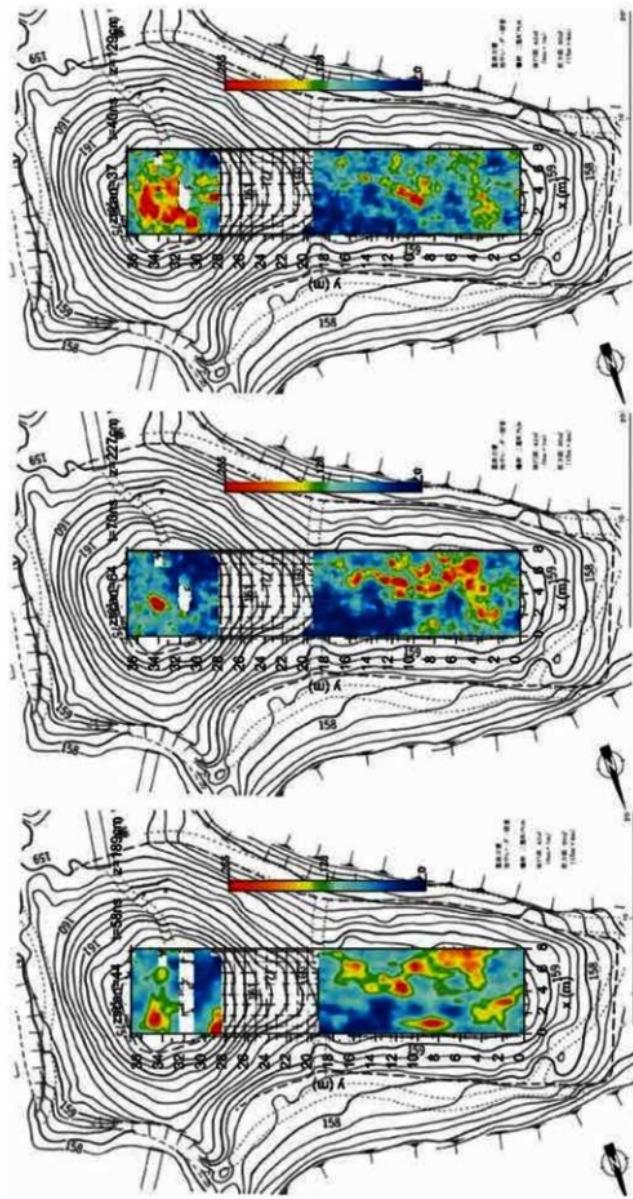


第130図 重政古墳 地中レーダー探査結果

上:500MHzデータ 地表下130cm前後の反射

中:500MHzデータ 地表下230cm前後の反射

下:270MHzデータ 地表下200cm前後の反射



第131図 重政古墳
地形図+タイムスライス
上:500MHz
地表下130cm前後
中:500MHz
地表下230cm前後
下:270MHz
地表下200cm前後

解析結果の判読

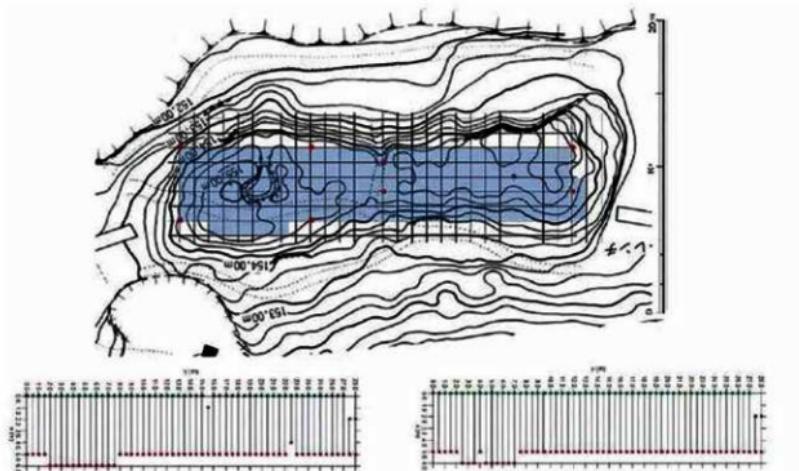
- 重政古墳は、後円部上にコンクリートの基礎を伴う石造りの社(金刀比羅神社)が設けられており、探査データにも影響が見られた。
- 500MHz データにおいて、前方部では深さ 120 ~ 190 cm、X=2.5 ~ 4.5m、Y=9 ~ 11.5m の範囲において長方形状(1×2.5m)の強い反射が認められる(第130 図上)。
- 500MHz データにおいて、後円部では深さ 210 ~ 270 cm、X=2 ~ 4m、Y=33.5 ~ 35m の範囲において長方形状(1×2m)の強い反射が認められる。この反射については、地表面から続く影響(金刀比羅社建立に伴うものか)が薄れる深さ 170 cm 前後から、やや広い範囲での反射が認められる(第130 図中)。
- 270MHz データにおいて、後円部で深さ 180 ~ 250 cm、X=0.5 ~ 2.5m、Y=33.5 ~ 35.5m の範囲において長方形状(1.5×2m)の強い反射が認められる(第130 図下)。

(3) 竜ヶ鼻古墳

古墳の周囲は雑木林で、墳丘上にも立木が見られたが、墳頂部は比較的見通しが良く、下草等も処理されていたことから、探査に支障はなかった。

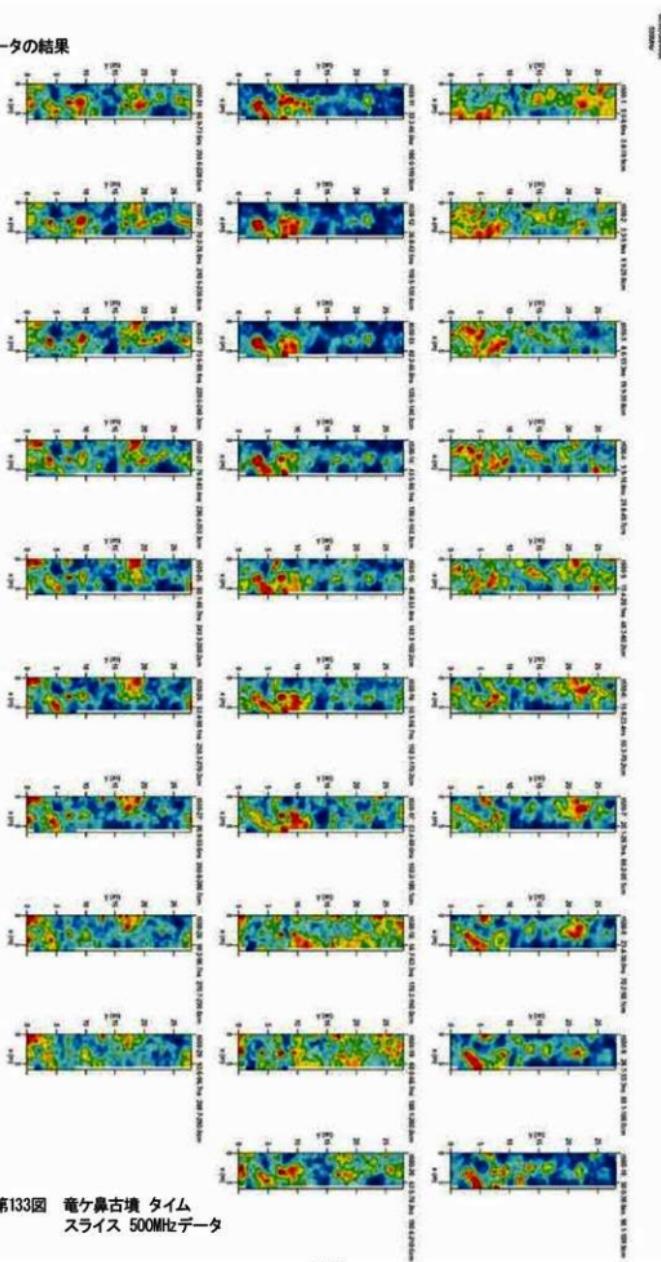
後円部墳頂平坦面のほぼ中央には、長径約 3 m、短径約 2 m で、周囲よりも 50 ~ 80 cm 低くなった不整形の落ち込みがあり、墳丘の西側斜面へ続いていた、盗掘坑の痕跡の可能性がある。

古墳上に配置された杭のうち、後円部南西隅の杭を(X, Y=0, 0)の基準とした。500MHz と 270MHz の両アンテナとも X 方向(東西)にアンテナを走査し、Y 方向(南北)に 50 cm ずつ移動しながらデータを収集した。後円部から前方部まで続けて探査を行い、測線距離は、500MHz で 291m、270MHz で 290m となった。(第132 図)

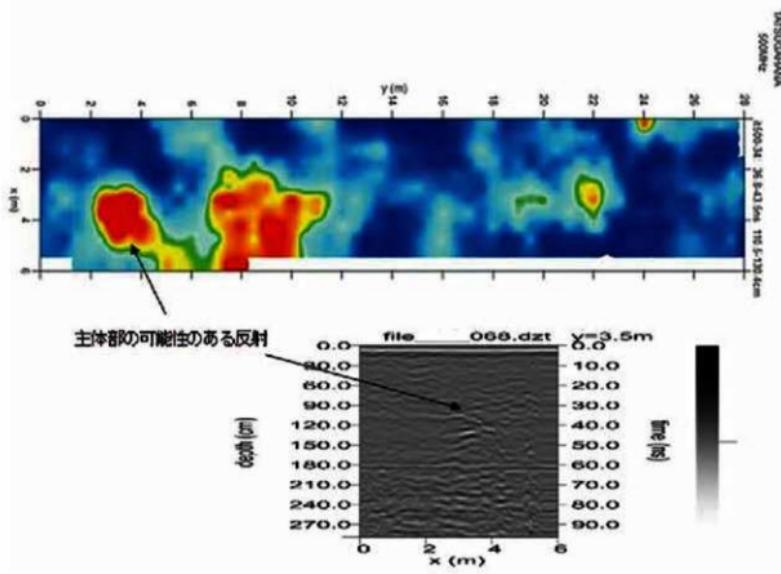


第132図 竜ヶ鼻古墳の探査範囲とアンテナ走査マップ(左:500MHz 右:270MHz)

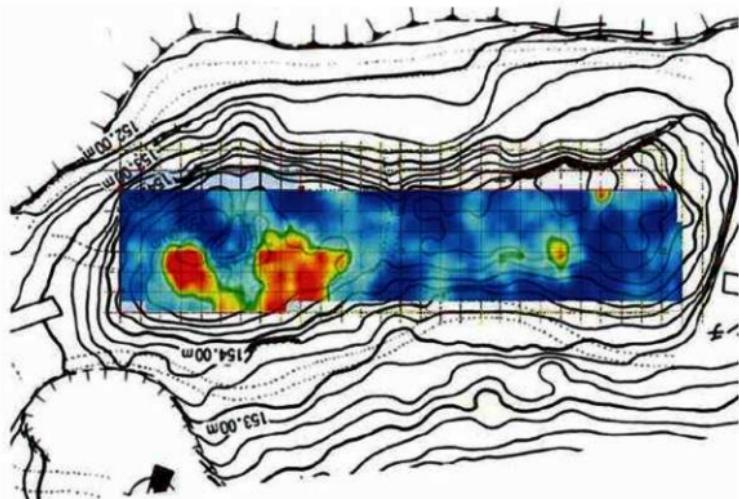
500MHzデータの結果



第133図 竜ヶ鼻古墳 タイム
スライス 500MHzデータ



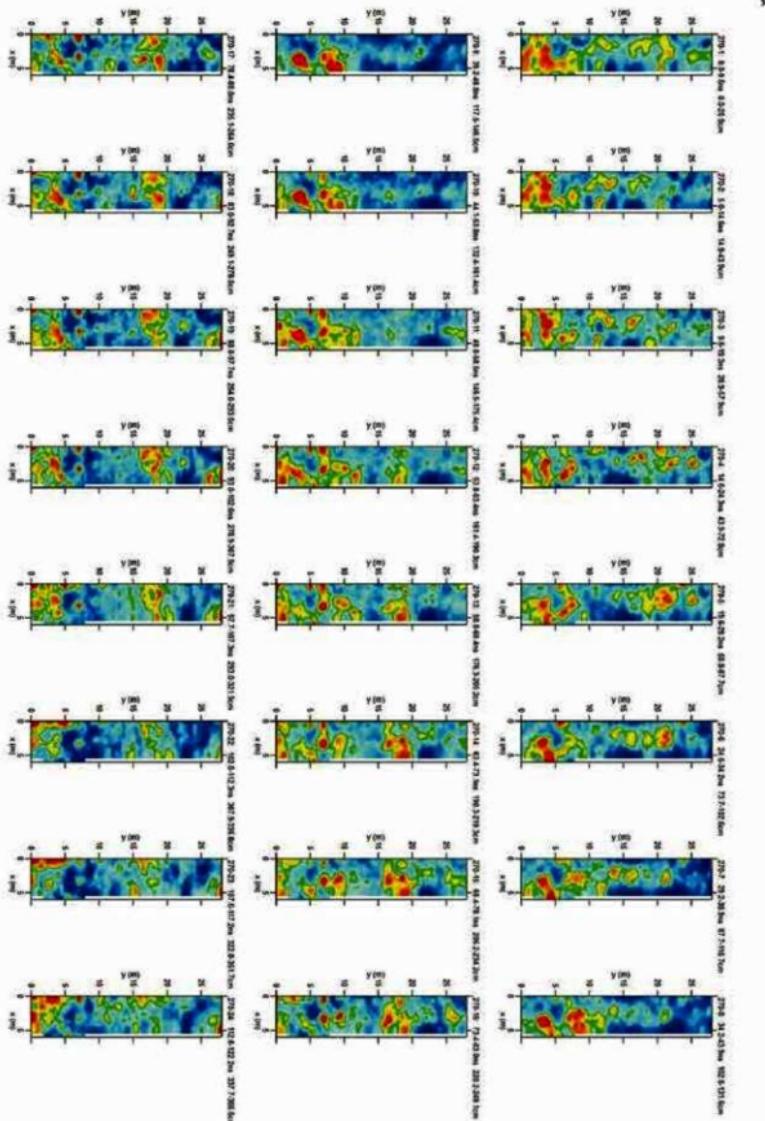
第134図 竜ヶ鼻古墳 タイムスライス・レーダーグラム 500MHzデータ



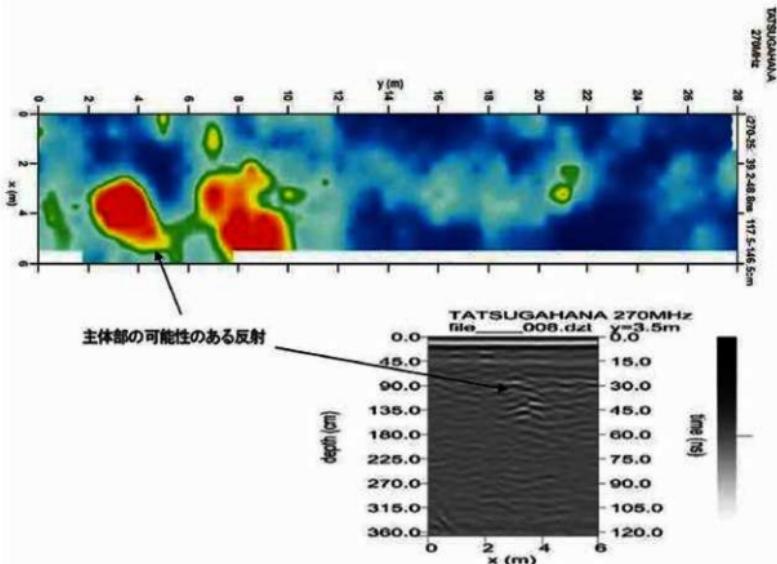
第135図 竜ヶ鼻古墳の測量図と探査結果 500MHzデータ

後円部墳頂平坦面のやや南東寄りに、主体部の可能性のある反射が見られた。反射は約2m四方の正方形状であるが、後円部中央に残る盃掘坑と思われる落ち込みに隣接する位置であり、一部が破壊されている可能性もある(第134図)。

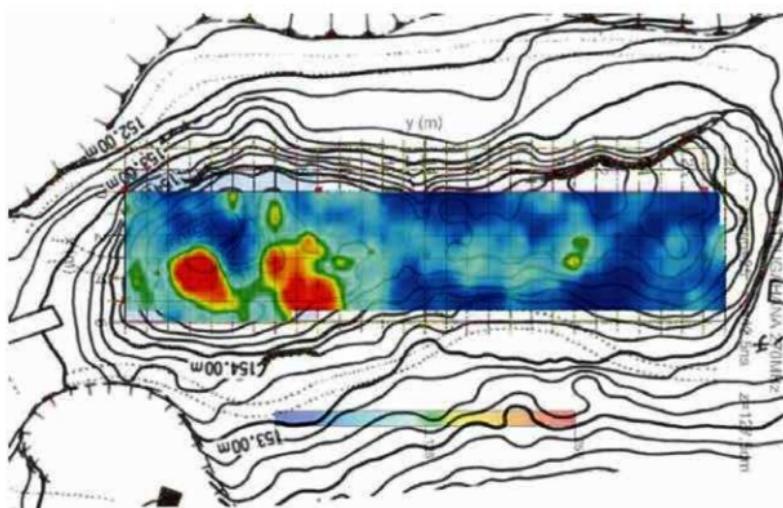
270MHz データの結果



第136図 竜ヶ鼻古墳 タイムスライス 270MHzデータ



第137図 竜ヶ鼻古墳 タイムスライス・レーダーグラム 270MHzデータ



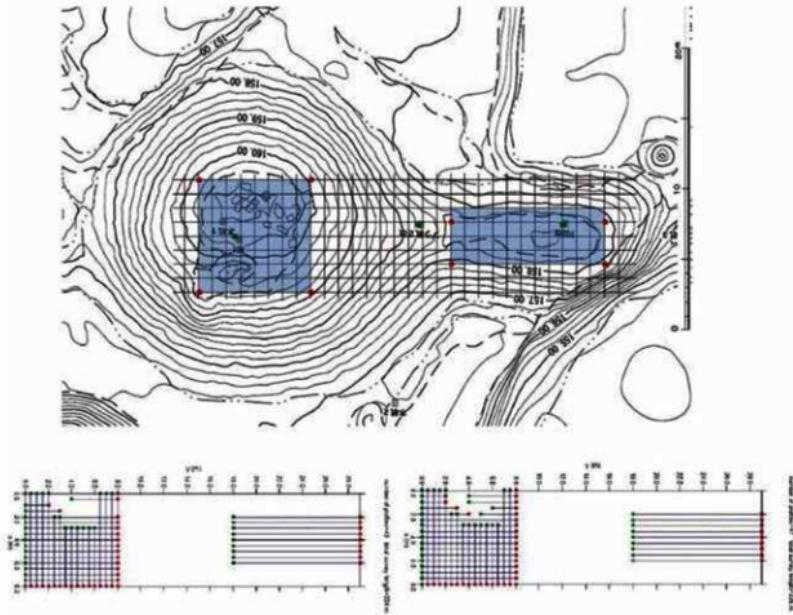
第138図 竜ヶ鼻古墳の測量図と探査結果 270MHzデータ

500MHzデータと同様に、後円部墳頂平坦面のやや南東寄りに、主体部の可能性のある反射が見られた(第137図)。

(4) 小坂大塚古墳

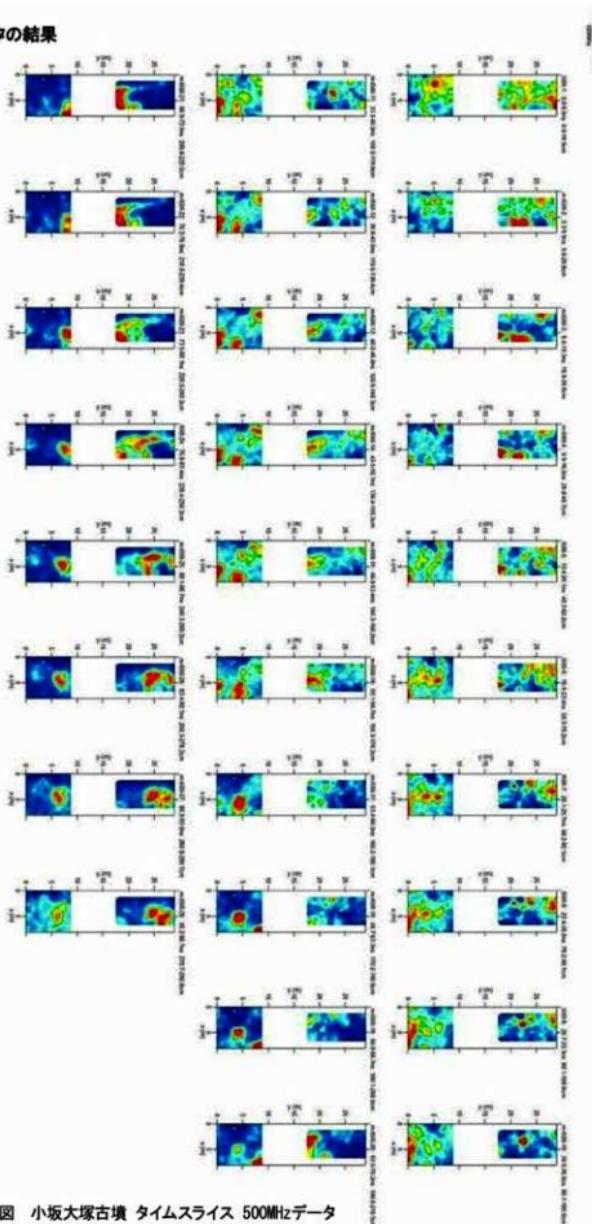
古墳の周囲は雑木林で、前方部上にも立木が多く存在したが、後円部上には多くの石塔や板碑が設置されており、立木は見られなかった。全体的に見通しが良く、下草等も処理されていたことから、探査に支障はなかった。石塔等については、それらを避けてアンテナを走査した。後円部墳頂平坦面の東端には、長径約2m、短径約1.5mの不整形の落ち込みがあり、盜掘坑の痕跡の可能性がある。

古墳上に配置された杭のうち、後円部南西隅の杭を(X, Y=0, 0)の基準とした。500MHzと270MHzの両アンテナとも、後円部ではX方向(東西)とY方向(南北)に、前方部ではY方向(南北)にアンテナを走査し、50cmずつ移動しながらデータを収集した。測線距離は、500MHzで338m、270MHzで334mとなった(第139図)。

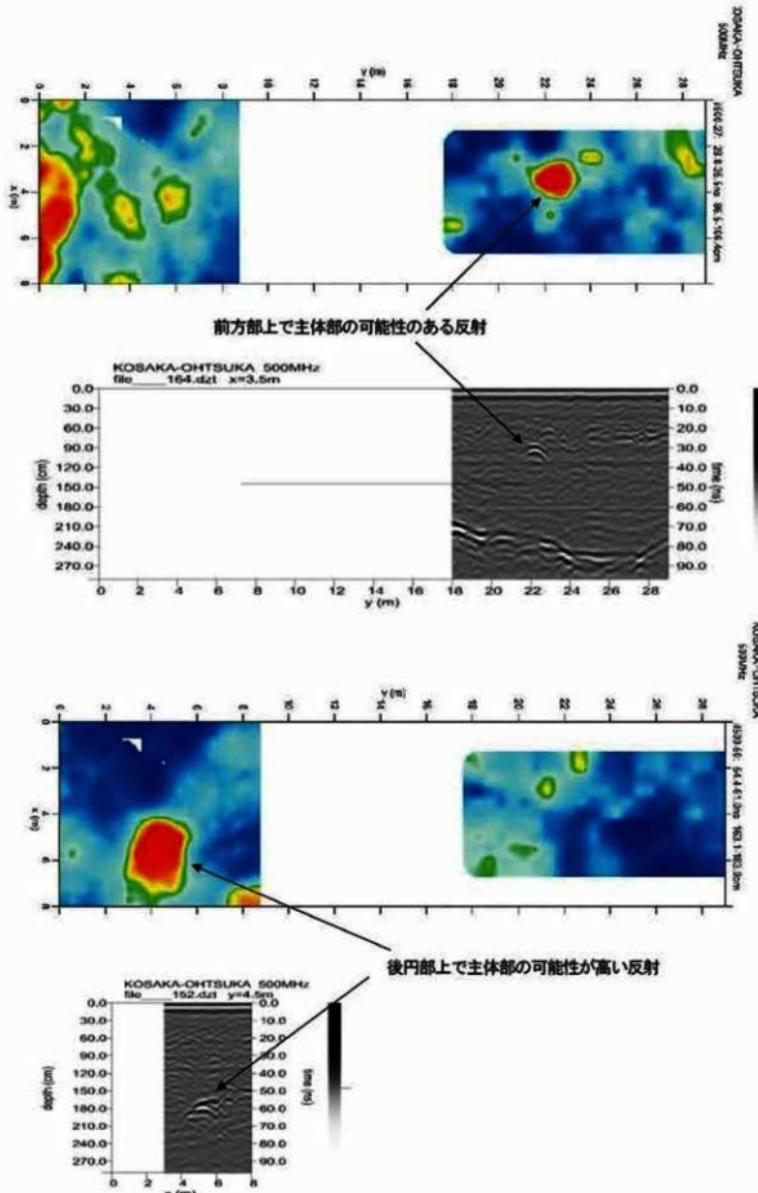


第139図 小坂大塚古墳の探査範囲とアンテナ走査マップ(左:500MHz 右:270MHz)

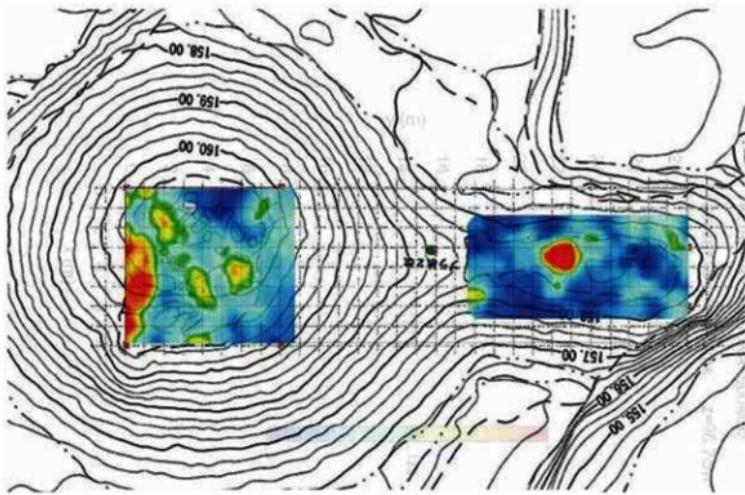
500MHz データの結果



第140図 小坂大塚古墳 タイムスライス 500MHzデータ

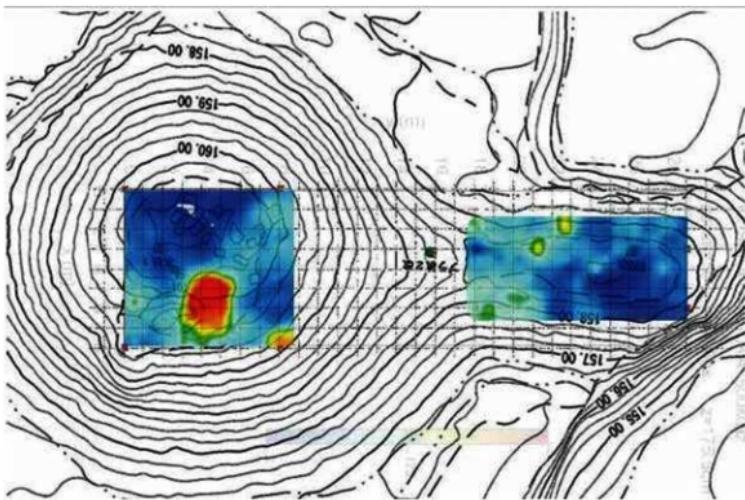


第141図 小坂大塚古墳 タイムスライス・レーダーグラム 500MHzデータ



第142図 小板大塚古墳の測量図と探査結果 500MHzデータ①

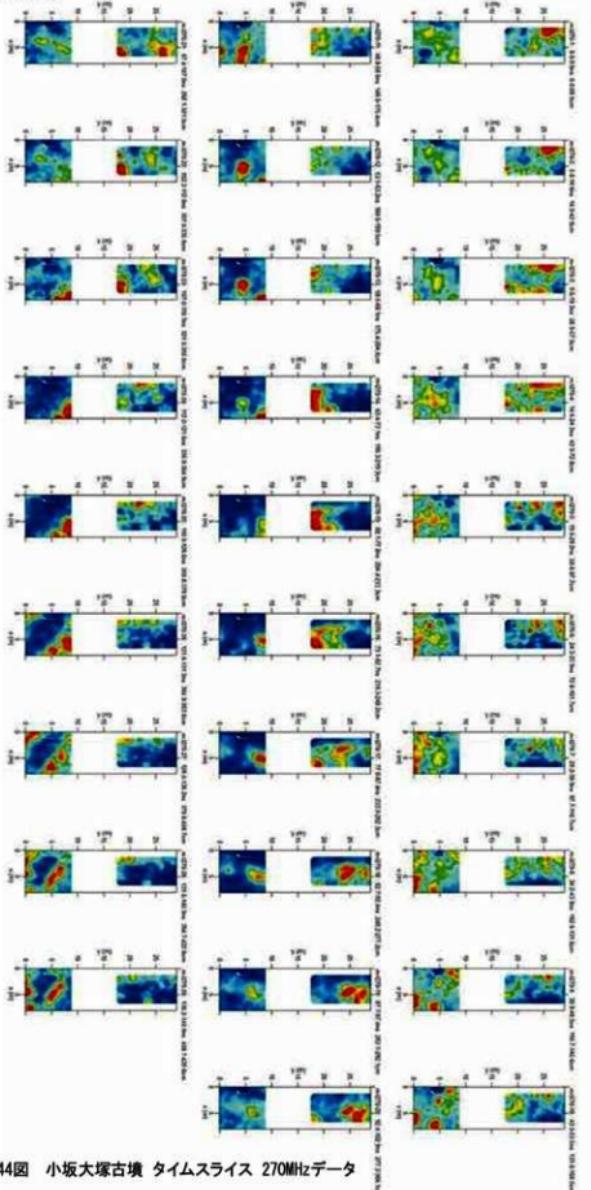
前方部上の反射は、地表下 80～120 cm の位置で反応している(第141図上)。



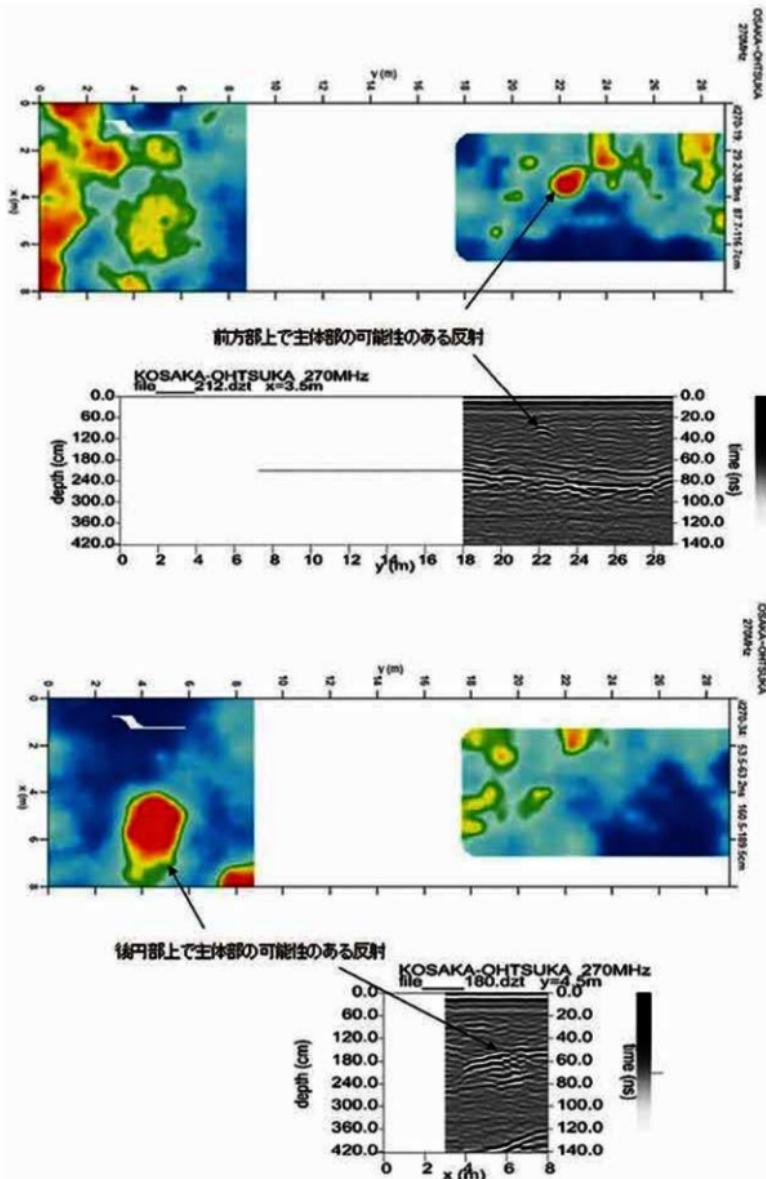
第143図 小板大塚古墳の測量図と探査結果 500MHzデータ②

後円部上の反射は、地表下 150～200 cm の位置で反応している。後円部東端に見られた落ち込みの位置とは僅かにずれている(第145図下)。500MHz データと整合している。

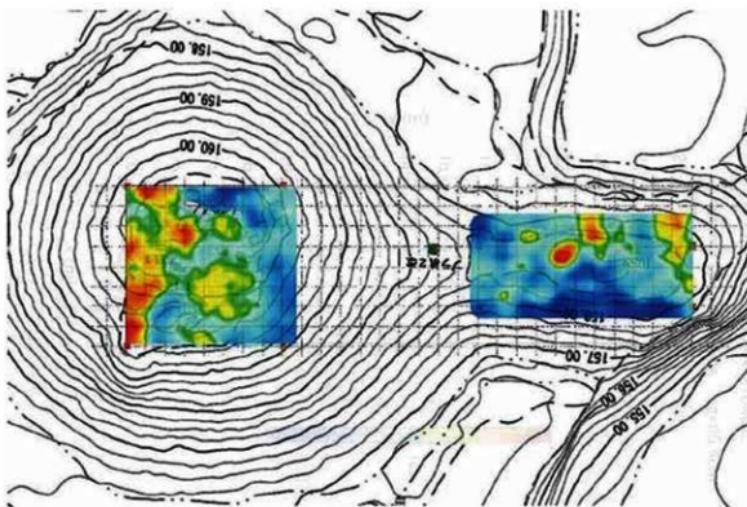
270MHz データの結果



第144図 小坂大塚古墳 タイムスライス 270MHzデータ

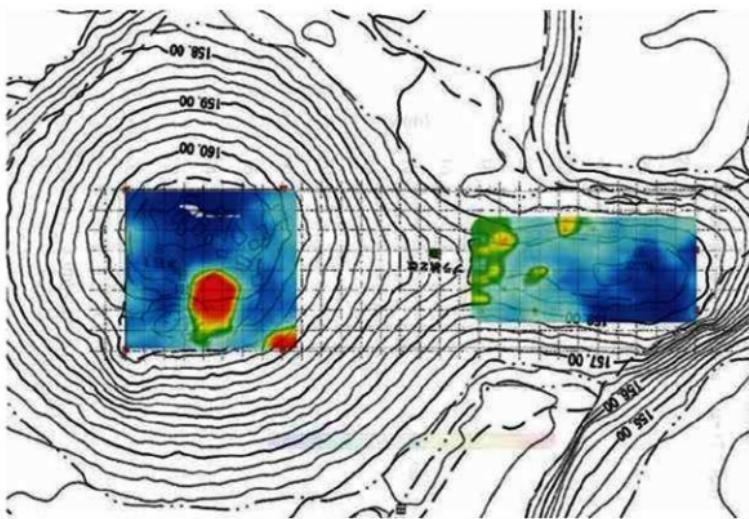


第145図 小坂大塚古墳 タイムスライス・レーダーグラム 270MHzデータ



第146図 小坂大塚古墳の測量図と探査結果 270MHzデータ①

前方部上の反射は、地表下80~120cmの位置で反応している(第145図上)。



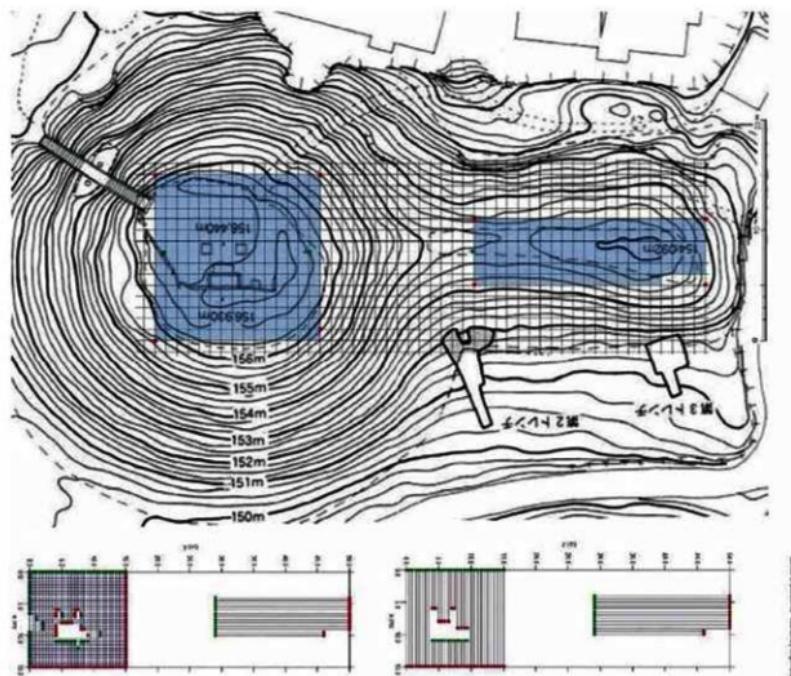
第147図 小坂大塚古墳の測量図と探査結果 270MHzデータ②

後円部上の反射は、地表下150~200cmの位置で反応している。後円部東端に見られた落ち込みの位置とは僅かにずれている(第145図下)。500MHzデータと整合している。

(5) 道ノ上古墳

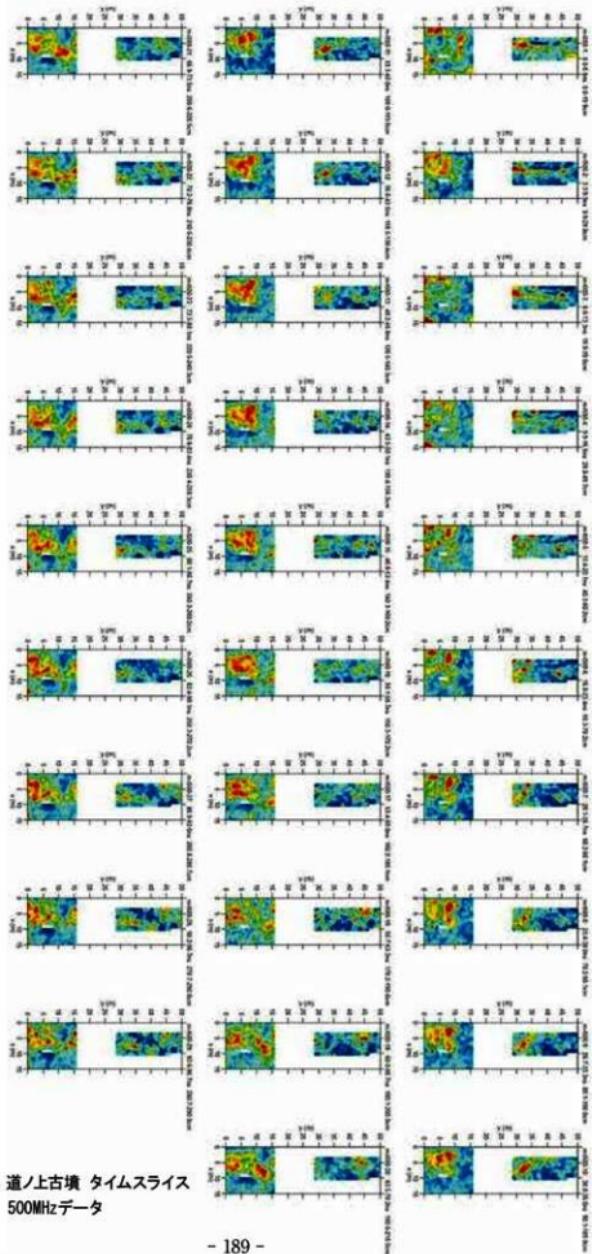
古墳の周囲は雑木林であるが、後円部墳頂部及び前方部上は伐採されており探査に支障は無かった。後円部上には、石塔や石碑が点在しており、それらを避けてアンテナを走査した。

古墳上に配置された杭のうち、後円部南東隅の杭を(X, Y=0, 0)の基準とした。500MHzアンテナでは、後円部をX方向(南北)とY方向(東西)に、前方部ではY方向(東西)にアンテナを走査し、50cmずつ移動しながらデータを収集した。270MHzアンテナでは、後円部をX方向のみ、前方部をY方向のみでアンテナを走査した。測線距離は、500MHzで1123m、270MHzで690mとなった(第148図)。

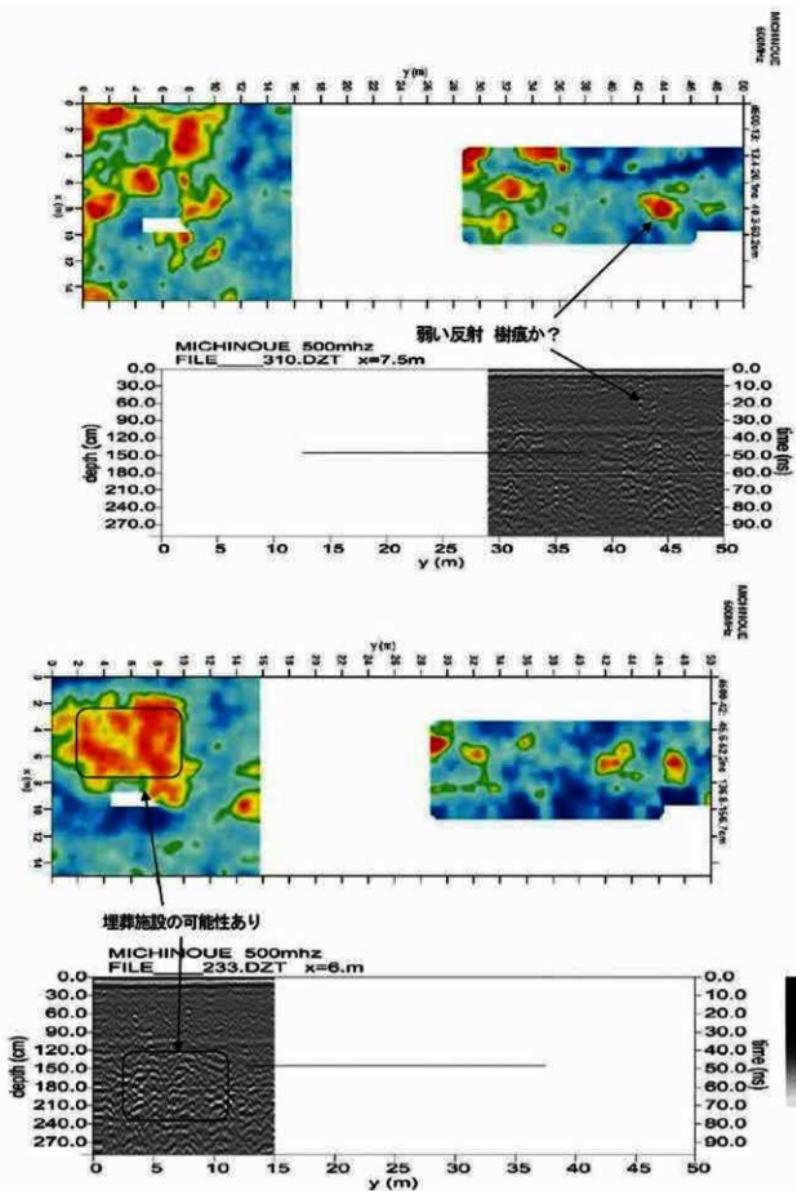


第148図 道ノ上古墳の探査範囲とアンテナ走査マップ(左:500MHz 右:270MHz)

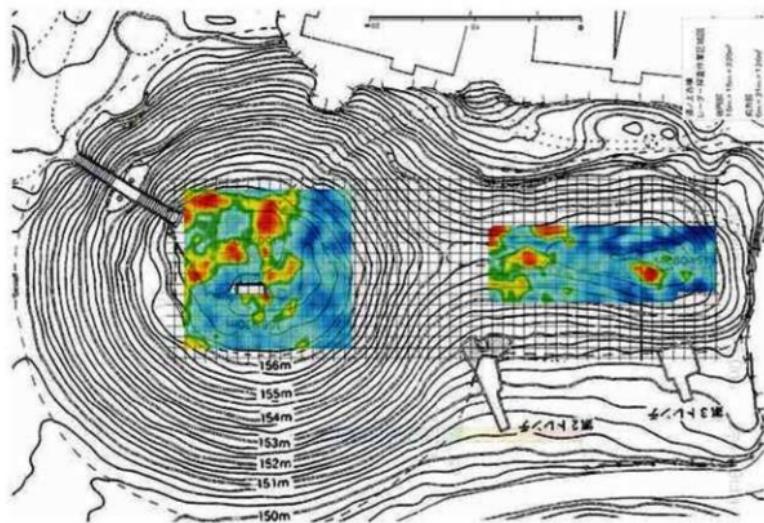
500MHz データの結果



第149図 道ノ上古墳 タイムスライス
500MHzデータ

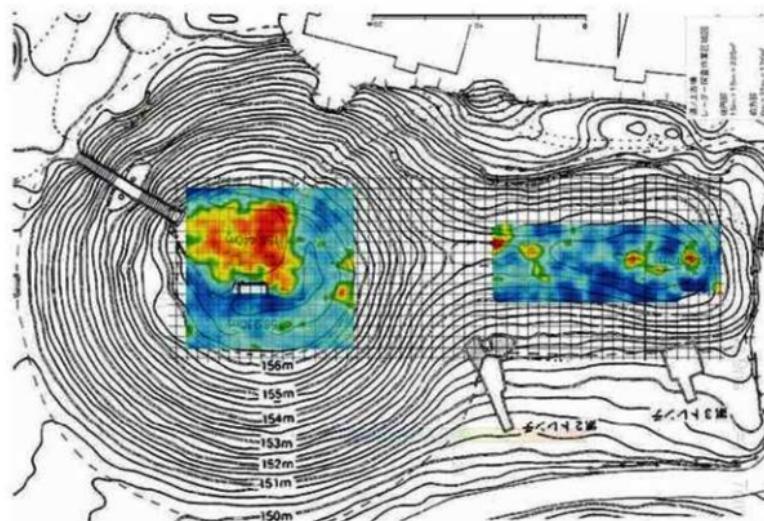


第150図 道ノ上古墳 タイムスライス・レーダーグラム 500MHzデータ



第151図 道ノ上古墳の測量図と探査結果 500MHzデータ①

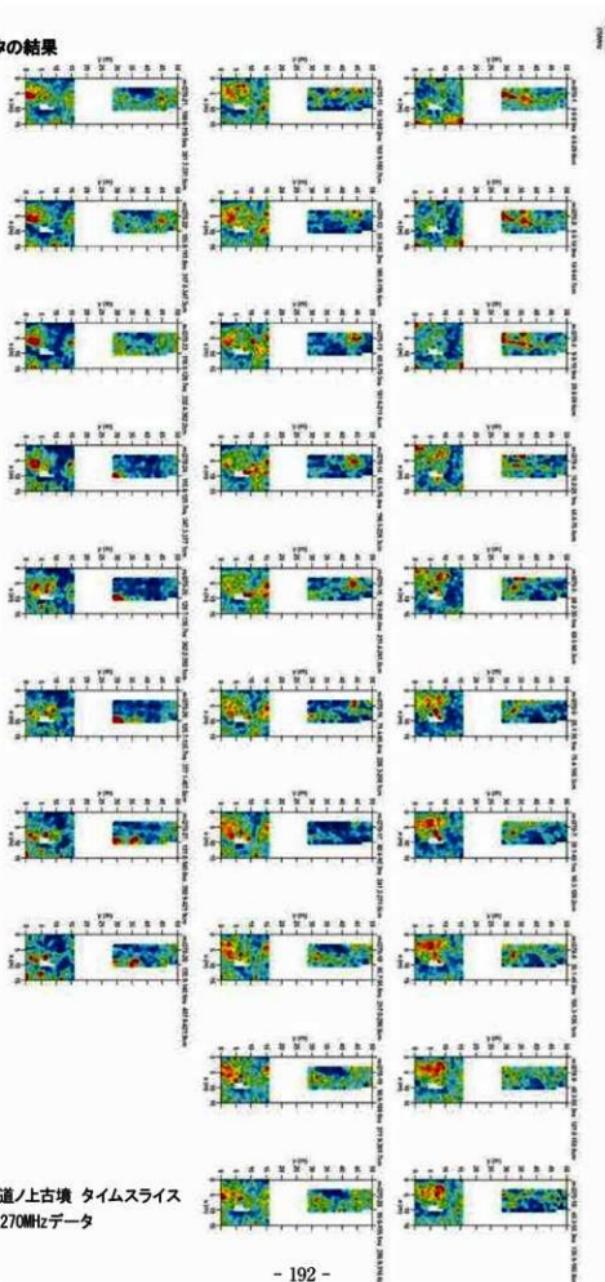
前方部上で、地表下40～65cmの位置に弱い反射が見られる(第150図上)。



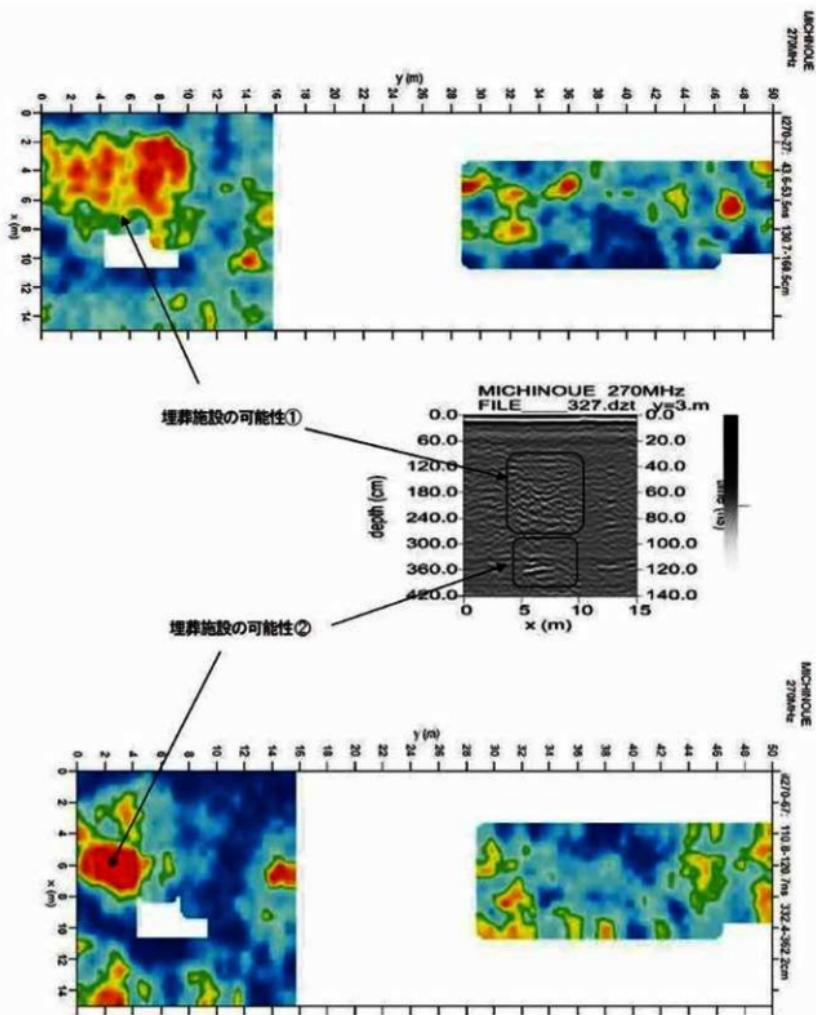
第152図 道ノ上古墳の測量図と探査結果 500MHzデータ②

後円部上の反射は、地表下約70cmから始まり、150cm前後が最も明瞭となる(第150図下)。

270MHzデータの結果

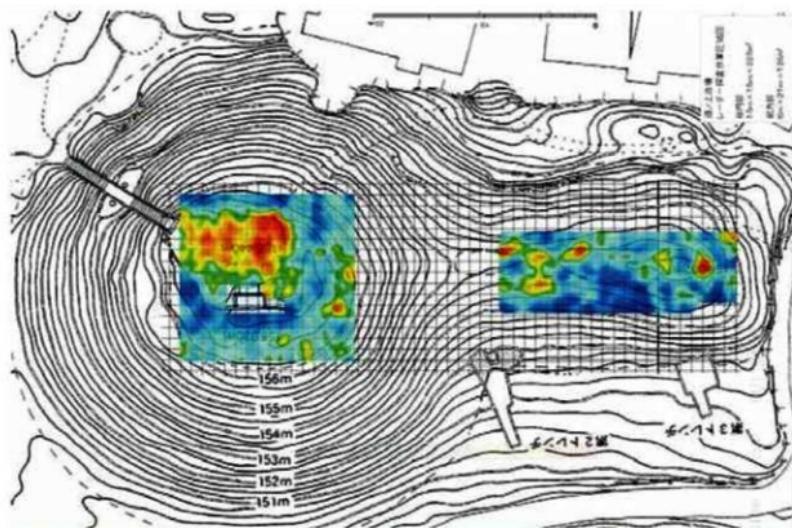


第153図 道ノ上古墳 タイムスライス
270MHzデータ

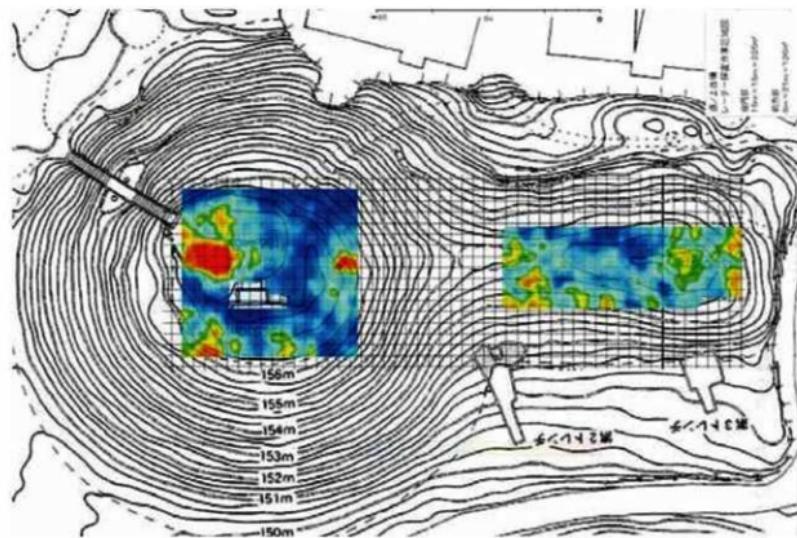


第154図 道ノ上古墳 タイムスライス・レーダーグラム 270MHzデータ

270MHzデータでは、後円部上の深い位置(地表下約320cm以下)にも強い反射が認められる。これは、500MHzアンテナではとらえられなかったものである(第154図)。



第155図 道ノ上古墳の測量図と探査結果 270MHzデータ①

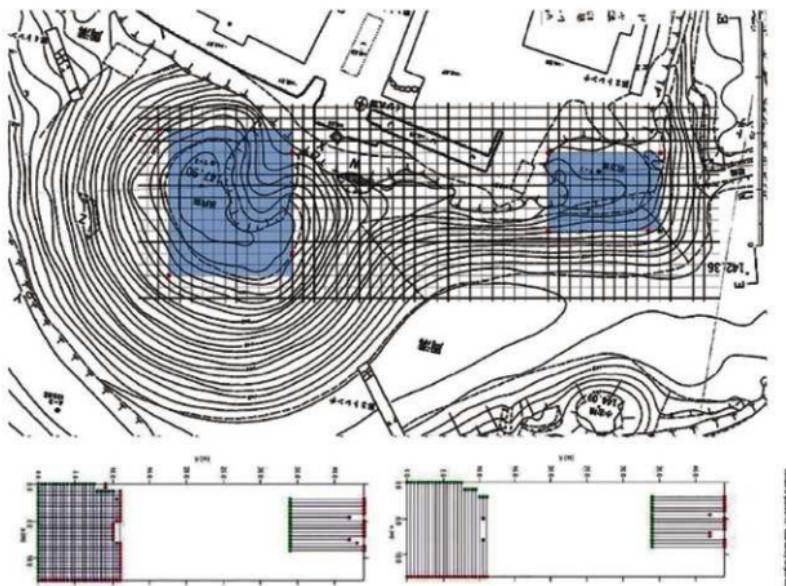


第156図 道ノ上古墳の測量図と探査結果 270MHzデータ②

(6) 立野古墳

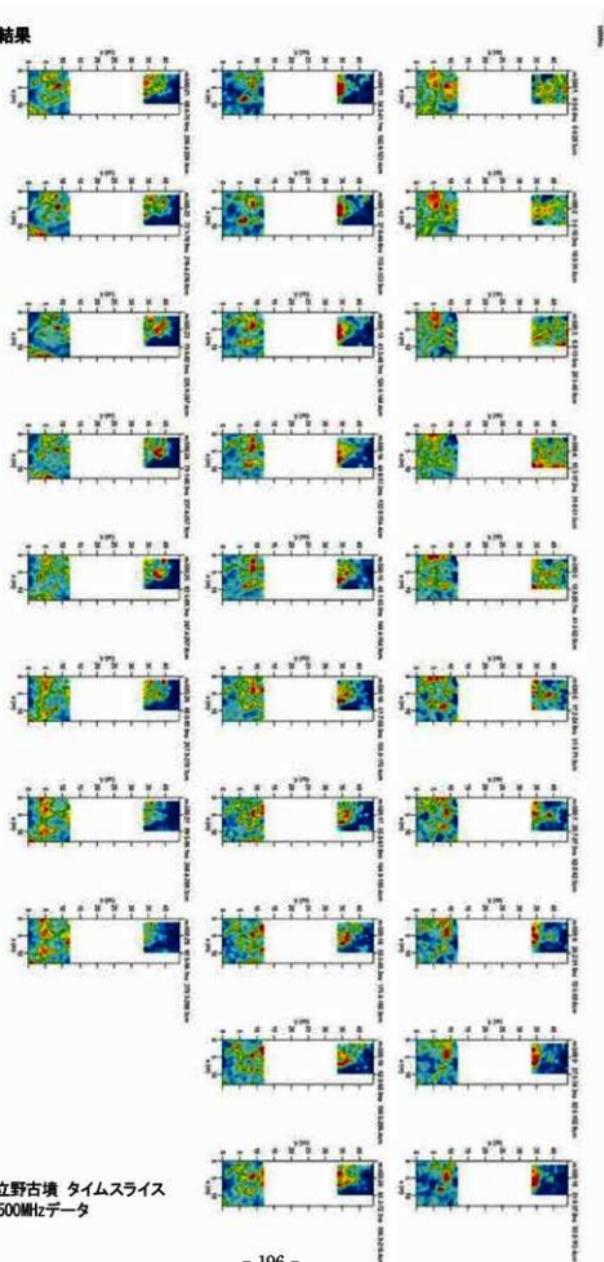
古墳の周囲は雑木林であるが、後円部及び前方部上は樹木も少なく、探査に支障は無かった。前方部から後円部にかけて墳丘東半部が大きく抉られており、特にくびれ部から前方部にかけては古墳の主軸線まで削られた状態である。後円部上には東側から中央部にかけて落ち込みが見られ、盗掘痕の可能性がある。

古墳上に配置された杭のうち、後円部北東隅の杭を(X, Y=0, 0)の基準とした。500MHz アンテナでは、後円部を X 方向(東西)と Y 方向(南北)に、前方部では Y 方向(南北)にアンテナを走査し、50 cm ずつ移動しながらデータを収集した。270MHz アンテナでは、後円部を X 方向のみ、前方部を Y 方向のみでアンテナを走査した。測線距離は、500MHz で 720m、270MHz で 430m となった(第157図)。

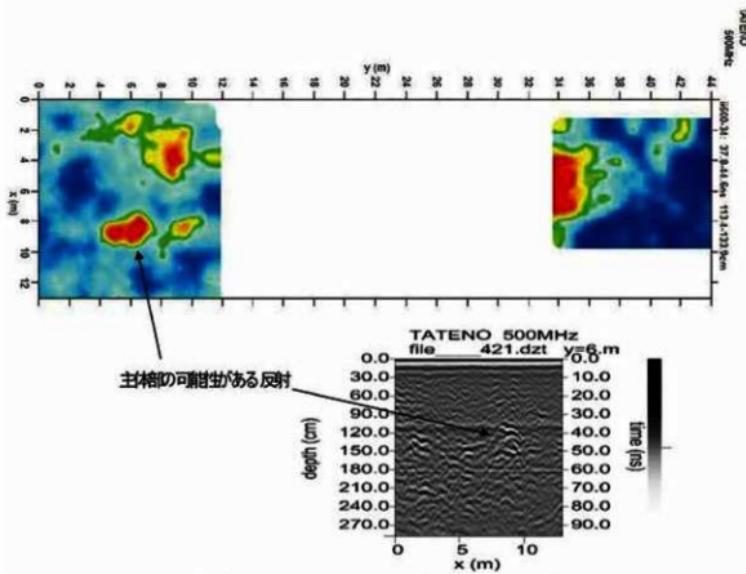


第157図 立野古墳の探査範囲とアンテナ走査マップ(左:500MHz 右:270MHz)

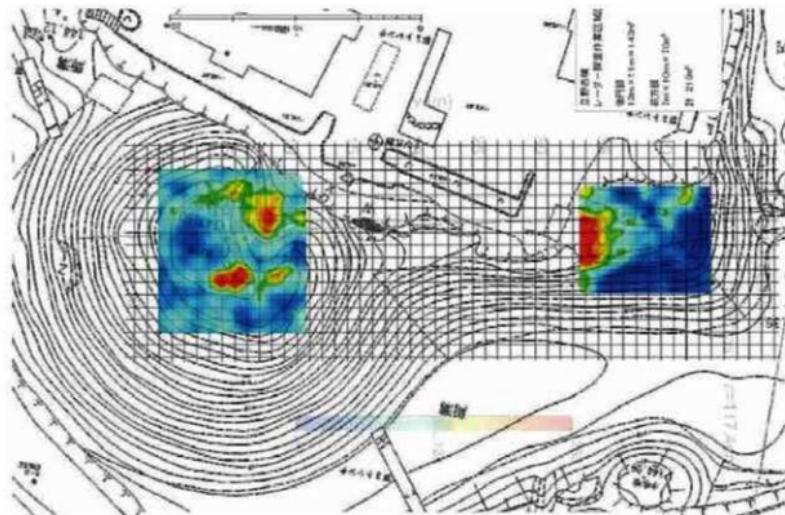
500MHz データの結果



第158図 立野古墳 タイムスライス
500MHzデータ



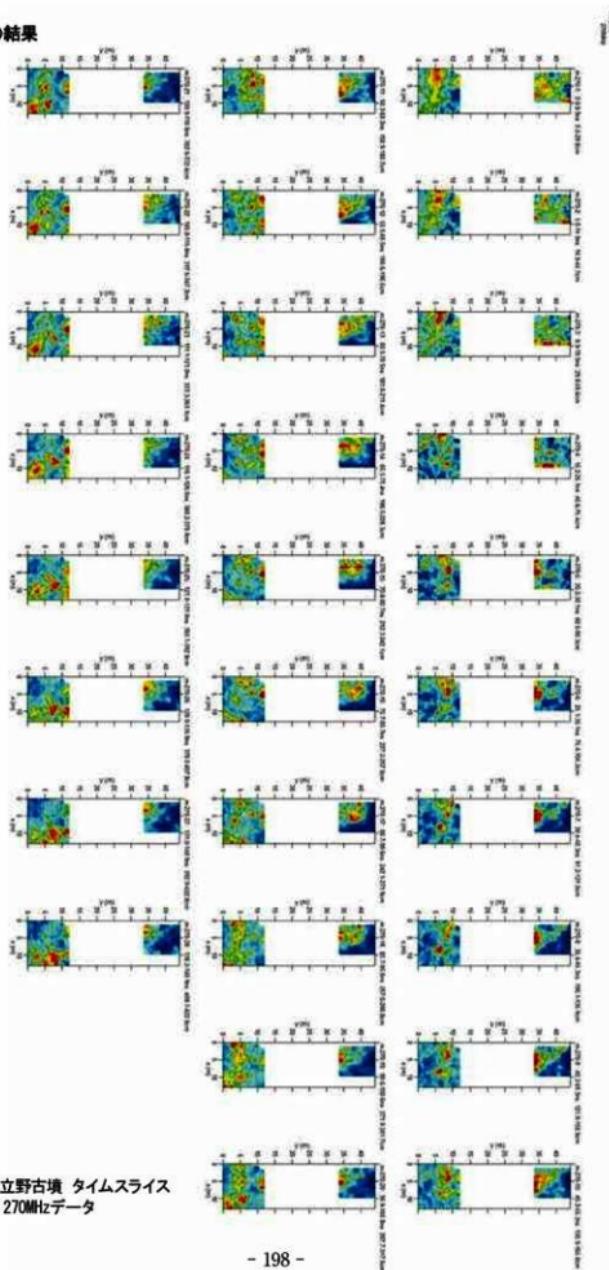
第159図 立野古墳 タイムスライス・レーダーグラム 500MHzデータ



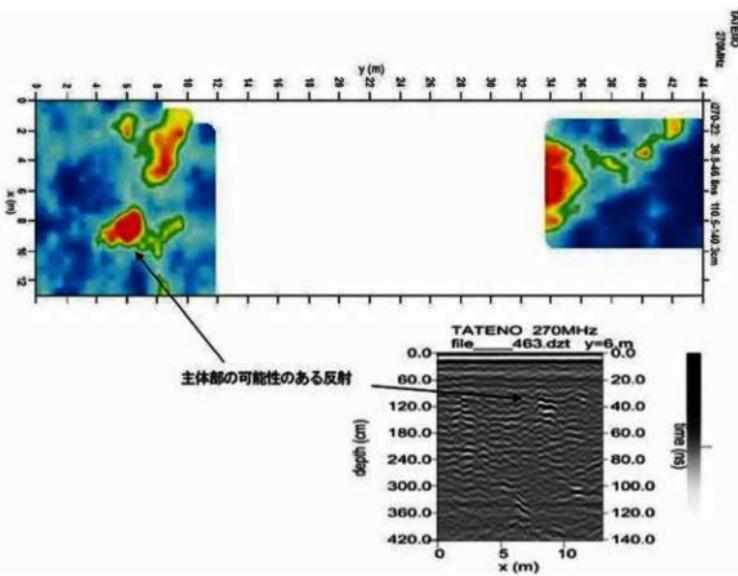
第160図 立野古墳の測量図と探査結果 500MHzデータ

後円部中央やや西寄りに、主体部の可能性のある反射が見られる(第159図)。

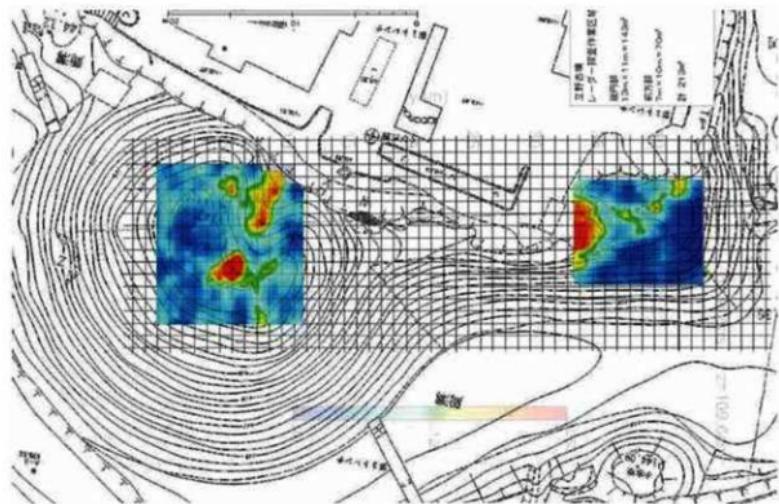
270MHz データの結果



第161図 立野古墳 タイムスライス
270MHzデータ



第162図 立野古墳 タイムスライス・レーダーグラム 270MHzデータ



第163図 立野古墳の測量図と探査結果 270MHzデータ

500MHzデータと同じく、後内部中央やや西寄りに、主体部の可能性のある反射が見られる(第162図)。

3. 総合評価

解析結果の判読を踏まえ、いくつかの可能性を指摘しておきたい。

(1) 秋葉鬼塚古墳

探査範囲の中心からやや南東寄りに認められた略長方形状(1.5×2.5m)の強い反射は、当古墳の主体部に関わるものと認められる。この反射の主軸は、墳丘主軸にはほぼ一致している。また、東および南面が削られている後円部の本来の形状を復元すると、この強い反射は後円部の中心に近い位置にあることがわかる(第126図)。

この反射に対して、南東方向からつながるようにみえる反射は、深さが増すに従って右から左へ移動することがタイムスライスによって明らかである。これは、斜めの構造であることを示しており、盗掘等に関わるものである可能性が高い(第121、122、123、125図)。

(2) 重政古墳

後円部上に建立されている金刀比羅社の東側、約2m深の位置に強い反射が認められた。500MHzデータと270MHzデータでは、反射の中心位置に僅かなズレが認められるが、これはアンテナ周波数の違いによる分解能の差と、アンテナの大きさの差による探査時のグリッドラインのズレによるものと思われ、2つのアンテナが捉えた反射は同一のものと見てよい。この強い反射の位置は、後円部のほぼ中央にあたり、当古墳の主体部に関わるものである可能性が高い。最も強く反射が認められるのは、地表下2m以下と比較的深い位置であるが、それよりも浅い位置からやや広い範囲で不整形の反射を示していることから、主体部に関わる掘り形、あるいはそれらの上部が搅乱された結果の可能性が指摘される。

また、前方部で見られた長方形状の反射は、地表下1.5m前後で明瞭であるものの、それよりも深いレベルで見られる変移的な反射とつながるようにも見えることから、古墳の主体部である可能性も残しつつ、地山もしくは樹根の影響である可能性も指摘しておきたい(第131図)。

(3) 竜ヶ鼻古墳

後円部から前方部にかけて、さまざまな反射が認められたが、地表面からの深度の異なる平面図を連続的に表示する動画(タイムスライス動画)で確認すると、その位置や形状、大きさが不規則に変化することから、多くの反射は地中の樹根や土の不規則変移によるもので、埋葬施設等の遺構によるものとは考え難い状況であった。その中で、後円部の中心からやや南東寄りに認められた強い反射は、500MHzと270MHzの両アンテナのデータに、同じ位置、同じ深度で捉えられており、約2m四方の正方形状の反射である。約100～160cmの深度まで同じ位置で反射を示していることから、当古墳の主体部に関わるものである可能性が高い。しかし、後円部西側から中心方向に伸びる盗掘坑の痕跡と思われる落ち込みに接する位置にあることから、一部が破壊されている可能性も指摘される(第135、138図)。

埋葬施設の種別については不明であるが、見かけの断面データ(レーダーグラム)に認められる反射は、周囲に比して極端に強いものではないことから、石材を伴うものとは考えにくい(第134図、137図)。

(4) 小坂大塚古墳

タイムスライス動画による地中の変移状況をみると、一定時間帯に同じ場所で反射を示しているもの(ある程度の厚みを持った構造物と判断される)が、前方部と後円部に各1カ所ずつ認められた。

前方部の反射は、古墳の主軸線上に位置し、前方部のほぼ中央に見られた。長軸2m、短軸1.5mの橢円形状で、地表から70～100cmの深度である。反射の範囲が狭く後円部のものに比べて弱いこと、周囲に不規則反

射が多く見られたことから、樹根の影響である可能性も否定できない(第141図上、第145図上)。

後円部の反射は、後円部の中心から東に偏った位置に認められた。長軸3m、短軸2mの長方形状で、その向きは古墳の軸線に対して若干のズレが見られる。地表面から約150cmから200cmの間で強い反射を示している。レーダーグラムを見ると周間に比して各段に強い反射であることから、当古墳の主体部である可能性が高く、石棺等の石材を伴う構造物が想定される(第141図下、第145図下)。

(5) 道ノ上古墳

タイムスライスによる解析では、前方部に弱い反射が、後円部に広範囲におよぶ反射が認められた(第150図)。

前方部の反射は、270MHzアンテナでは不明瞭であるが、500MHzデータでは地表下40～65cmに弱い反射が見られる。何らかの施設の可能性もあるが、反射の継続時間(構造の厚み)も小さいことから、樹痕である可能性もある。

これに対して、後円部では比較的広範囲に反射が見られた。後円部墳頂平坦面で古墳主軸線よりも南側に寄った位置で、地表下約80cmから反射が始まり、深度を増すごとに若干の変移が認められるが、地表下約150cmで長軸8m、短軸6mの長方形状のまとまりを見せる。周間に比して強い反射が認められることから、何らかの埋葬施設に関するもの可能性がある。

270MHzのデータでも、同様の反射が地表下約80～180cmの範囲で認められるが、更に深い地表下約300～370cmの位置で長方形状の強い反射が認められる。

後円部に見られた2つの反射は、僅かに主軸方向が異なるものの、平面的な位置関係では上下に重複し、深い位置の強い反射が浅い位置の反射の範囲内に収まっていることから、墓坑と石棺などの関係を想定するともできる(第154図)。

(6) 立野古墳

500MHzと270MHzの両アンテナのデータで、後円部中央やや西寄りの位置に主体部に関わると思われる反射が認められた。地表下約90～130cmで、長軸約3m、短軸約1.5mの長方形状である。盜掘坑の可能性がある不整形の落ち込み部に隣接する位置であり、一部が破壊されている可能性もある。

埋葬施設の種別は不明であるが、平面的な形状が小さめでありながら、レーダーグラムに見られる反射は非常に強いことから、石棺等の石材を伴う構造物が想定される。

4. おわりに

地中レーダー探査は、医療におけるX線やCTスキャンのように、物体そのものの画像を写しているのではなく、レーダー波の浸透速度や反射の強弱など地中の物理的性質の変位を捉えて、イメージ化しているものである。

しかし、遺跡や古墳において収集されたデータには、遺構や遺物(一定程度以上の大きさのもの)の存在、地下地形の変化などの情報が必ず含まれている。

解析と解釈は、相互の継続的な検討によって深化するものと思われる。

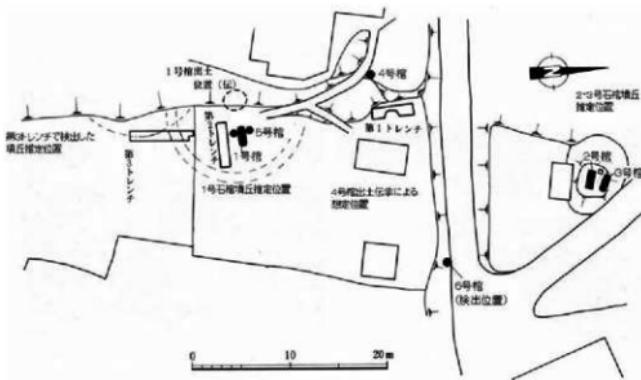
今回の地中レーダー探査は、NPO法人いさいと地中探査研究所(Saitobaru Geophysical Archaeometry Laboratory)が実施し、報告書はDean Goodmanと東憲章が共同で解析・検討を行い、執筆は東が担当した。

第8節 三重地域の小円墳

1. 鉢ノ窪古墳群

大野川流域の段丘上の上田原区中原集落内に所在し、立野古墳群の北西200m程の河岸段丘に向かって傾斜する位置である。集落内の宅地や畑などに石棺が分布しており、出土位置が不明な破片などもあわせて、計6基分が確認されている。本来古墳群であったと思われるが、現況では墳丘は失われて全く観察できず、石棺のみ狭い範囲に露出している状況である。(第164図)

調査については1980～90年代に石棺の研究による舟形石棺の考察が行われているが、1994(平成6)年度及び翌年にかけて、1号・4号棺付近に倉庫建設などの計画により確認調査を行い、未実測であった5号・6号棺の図化を行っている。その後2018(平成30)年度にも箱形石棺の2号棺と1号棺の再実測を行っている。



第164図 鉢ノ窪古墳群配置図 (1/500)

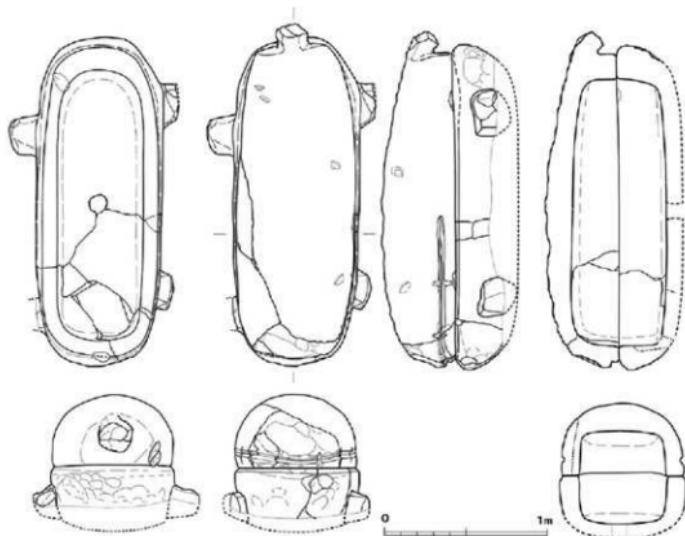
(1) 石棺群 (写真図版29・30)

1号棺 (第165図) 凝灰岩製の舟形石棺で、長辺208cm短辺79cmを測る棺身と棺蓋で構成され。平面・側面は梢円形、断面は円形に近い形状である。繩掛突起が棺身の側辺に2箇所づつ左右非対称の位置で計4箇所あり、棺蓋にも一方の小口部1箇所にある。もう一方の小口部分は長期間の露出による劣化のためか、突起の痕跡は確認できない。しかし合せ口に並行する直線状の彫り溝みが両側面中央付近まで続いていることから、これが突起の代わりの加工、あるいは後世の改変など様々な可能性が考えられる。

内法は長さ163cm、幅51cm、高さ57cmで、断面形状に割り抜かれており、内側壁面に整痕が明瞭に観察できる。棺蓋の一部に赤色顔料の付着があり、棺身の底部中央部に径10cm程の穿孔がある。

2号棺 (第166図) 1号棺の約35m北に3号棺と並んで所在する。硬質な安山岩質凝灰岩の板石を組み合わせた箱形石棺で、棺蓋は被損した4枚が載せられているがそれぞれ接合すると考えられ、本来は2枚の石材であったと思われる。棺身は側石と小口石が長方形状に組まれていて、北側石は1枚、南側石は2枚を継足すように、小口石は両端2枚の計5枚で構成されていることが確認でき、底石の有無は不明である。復元される長さは210cm幅110cmであるが、内法は長軸170cm、短軸50cm程と推定される。内部には土砂の堆積のため深さは不明であるが、50cm程と推定される。

棺材の加工痕について、蓋石の外面はほぼ自然面と思われる凹凸が多く残しているが、内面は調整加工による面取りが施され、棺身と組み合わせのための溝が彫り込まれている。棺身も内外面に面取加工がみられるが外



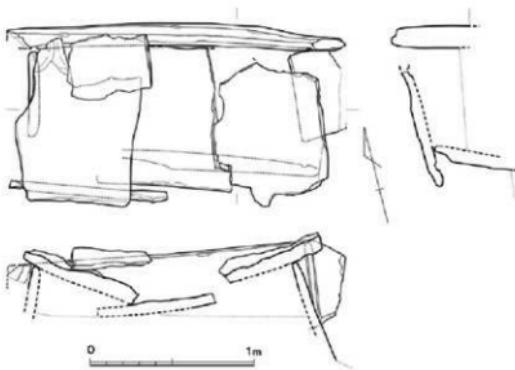
第165図 鉢ノ塚1号棺 (1/30)

面より内面の方が丁寧に加工されていることが観察できる。側石の上端部は幅も均一で直線的に施されるなど特に丁寧な加工が確認でき、蓋の溝に嵌め込む工夫と考えられる。内面の両端には小口石との組み合わせる溝がそれぞれ彫り込まれている。南側石の片方は外面に溝があるが、復元の際に誤って上下反転しているとみられる。

小口石は長方形形状で上・左右側辺部の調整は丁寧で、内外面はやや粗い面取加工が施されている。

なお、特筆される特徴として、蓋石の側縁部に、繩掛け突起の可能性ある形状が指摘されている。(清水・高橋 1982)

3号棺(第167図上) 2号棺と並んで隣接する凝灰岩製の舟形石棺で、2号棺と同じく掘り出されて復元されているが、周囲の土砂流失などにより棺材が大きく傾いている。破損した状態であるが一個体分揃っていると思われ、復元すると長さ1.9m、幅0.8mとみられ、棺身は断面半円形であるが棺蓋は扁平である。繩掛け突起は蓋の小口部と長辺部に各1個づつあり、棺身にはみられない。また、棺蓋は分割製作された2材であり、棺身の底部中



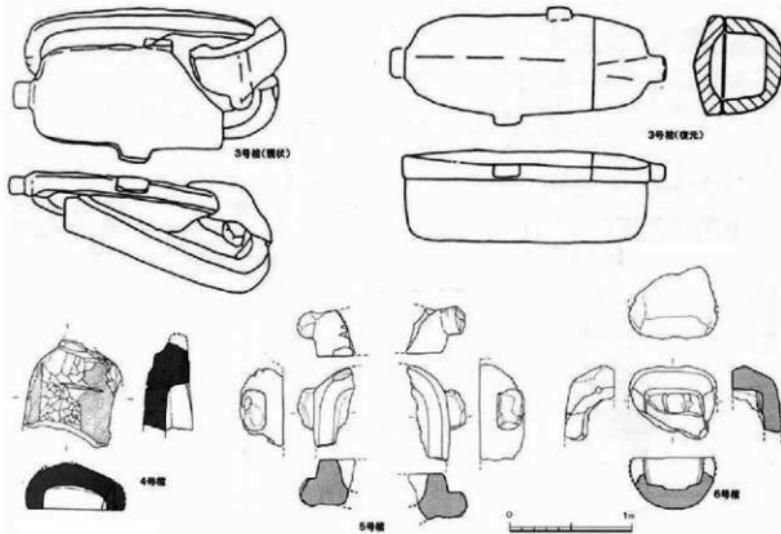
第166図 鉢ノ塚2号棺 (1/30)

央付近に穿孔がある。(神田1990 若杉1997)

4号棺(第167図下) 1号棺の北側斜面下に置かれていた凝灰岩製の舟形石棺の棺蓋の一部である。斜面上から落ちたとの伝承もあることから、出土位置は1号棺の北側付近の位置と推定されるが、1994(平成6)年度の確認調査では特に墳丘の存在は確認されていない。繩掛け突起が小口部にあり、断面形はやや扁平な半円形状で、1号棺と3号棺の中間的な断面形状と思われる。他に接合する部材は見られないが、5号棺と同一棺の可能性がある。(玉永1987)

5号棺 1号棺の脇に置かれていた棺材片2個で、同一個体とみられることから一括して5号棺としている。凝灰岩製で、1号棺と似た形状の繩掛け突起があり、舟形石棺の棺身の小口に近い位置の側辺部と思われる。出土土地や経緯などは伝えられていない。

6号棺 1号棺と2・3号棺との間の道路脇で確認された凝灰岩製舟形石棺の棺身で、小口部の一部である。平面は隅丸方形状とみられ、断面は半円形状で、繩掛け突起は確認できない。内面底部に段があり、中央にはやや彫り窪めて石枕状に膨出されており、市内の石棺では唯一の例である。本来の出土位置や他に接合する部材は不明で、現在は4号棺の脇に移されている。



第167図 鉢ノ塚3~6号棺(1/40)(清水・高橋1982、神田1990、若杉1997、諸岡1997より転載)

(2) 確認調査(写真図版28)

1994(平成6)年度より翌年にかけて、舟形石棺の1号・4号棺付近に倉庫建設計画などにより確認調査を行っている。調査地は1号棺が所在する畠地であり、1972(昭和47)年に現在位置に移される以前は3m程西側の崖面に露出していたこと、4号棺も同じように崖面より出土したと伝えられる。墳丘の痕跡が地中に存在することが予想され、遺構の有無の確認を目的として3箇所のトレンチを設定して行われている。(第164図)

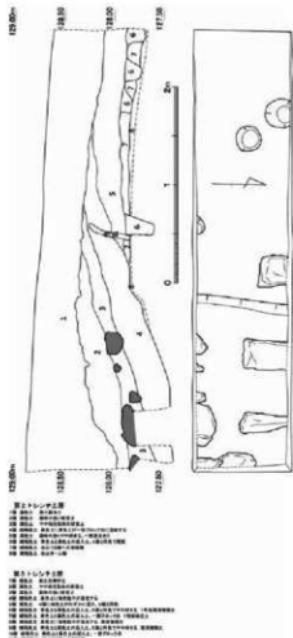
第1トレンチ 4号棺の崖上に樹木根を除く幅1m長さ4mで設定したが、樹根による擾乱のためか遺構や遺物は全く検出できず、墳丘や残りの棺材についての手がかりを得られなかった。

第2トレンチ(第168図) 1号棺南脇に幅1m長さ5mで掘下げ、墳丘盛土と考えられる黒色土と褐色土の混入土が緩やかに傾斜する土層を観察して検出した。トレンチ西側では地山ローム層を掘込んでおり、褐色土層はさらに西側調査区外へ傾斜が続いたため、墳端までは検出できていない。その上層の黒色堆積土層(3層)の、裾付近で角礫が混入している。概ね人頭大の軟質凝灰岩で、残りは良くないが葺石状に配置していた可能性もある。盛土層下の遺構等は墳丘構築以前のものとみられる。遺物は若干の土器細片のみである。

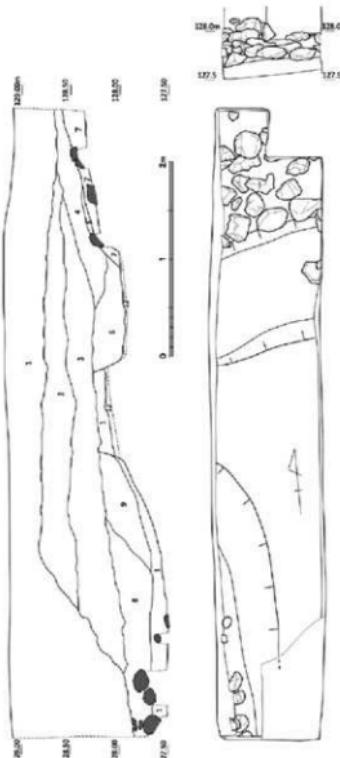
第3トレンチ(第169図) 第2トレンチの南側に幅1m長さ6m第3トレンチを設定し、トレンチ北側で盛土状の土層および周溝の掘込みを検出した。位置的にも第2トレンチの墳丘土と同一古墳とみられ、1号棺の墳丘遺構と考えられるものである。墳丘盛土は凝灰岩の角礫が配置され、周溝は幅1mで逆台形状である。遺物は土師器と思われる胴部片などが出土している。また、トレンチ南側にも周溝状の掘込みがあり、弧を描くように南西へと続く別の古墳の周溝の端と思われる。

(3) まとめ

確認調査として、1号棺出土伝承地を中心とした円墳と推定すると、形10m高さ2mほどの墳丘規模を考えら



第168図 鉢ノ塙古墳群第2トレンチ (1/50)



第169図 鉢ノ塙古墳群第3トレンチ (1/50)

れる。裾付近に凝灰岩の角礫を配置があり、数は少ないため葺石として墳丘表面全体かどうかは不明である。また、第3トレチ南側で検出できた遺構も別の古墳とみられ、2基の古墳が一部重複して、南北に並んで構築されていた可能性がうかがえる。

なお、未検出であるが4号棺の墳丘は伝承によりほぼ真北の第1トレチ付近に想定され、さらに原位置を保っていると見られる2号・3号棺はさらに真北に位置する。一方、南に聖塚と呼ばれる塚と石棺が埋納する伝承もあり、ほぼ南北に約100mの範囲に並ぶように配置された古墳群の可能性がある。立野古墳群とはわずか200m程の距離で一連の古墳群ともみられているが、今でも墳丘が残る立野古墳群と比べ、一段低い立地地形であり、一回り規模が小さかったことが想定される。

鉢ノ窪古墳群の年代は、5基の舟形石棺で編年が試みられている。外形の平面・断面や剥抜き断面形、石枕・突起などの形態的な特徴から最も古相の6号棺が中期前半で、以後1号・4号・3号の順で中期後半にかけてと推定される(神田 1990 田中 1998 若杉 1997)。その製作技術として、臼杵の白塚古墳から石棺製作技術を導入したとみられている(若杉 1997)。他にも宮崎県延岡地域の棺身側邊に角柱状突起を有するなどの特徴が共通すること(林田 1995)、平面形が橢円形に近い出雲等日本海沿岸部に類似する形状は、延岡地域や熊本県菊池川流域とも共通すること(神田 1993、林田 1995)、棺身底部の穿孔も大分の海部地域や宮崎・鹿児島の東~南九州一帯の特徴で(井 2016)、棺蓋が分割製作された特徴は大分平野から熊本県菊池川流域にかけてみられる(田中 2016)ことなど、各地域の多くの影響を受けて製作された舟形石棺であることが指摘されている。

2. 下津留古墳群（写真図版31~33）

大野川沿岸の段丘端の上田原区下津留集落内に所在し、数基の塚状地形と箱形石棺が2箇所露出する古墳群として周知されている。(第 170 図)

墳丘は残存しているものの、古くから削平・改變が著しく残りは良くなく、段丘際に沿って東西に並んで配置しているものと推定される。西側より1号～4号墳の計4基の古墳群として紹介されている(田中 1998、田中 2009)うち、1号墳・4号墳は規模も大きく石棺材が所在する。それに比べて、2号・3号墳は規模も小さく古墳としての確証はないが、墳丘表面に大小様々な礫が伴うなどの現況の共通性から墳丘と推測されている。なお、墳丘は本来の規模や形態については明確ではなく、石棺の出土に関する伝承等も伝わっていない。また出土遺物等も全く知られてないため、石棺材以外の資料は皆無の状態である。

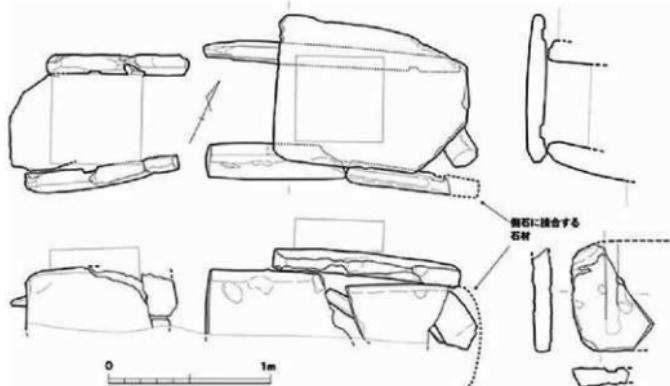
調査は1992(平成4)年頃、三重町教育委員会により1号墳が町指定史跡に指定する際の周囲の概況測量(第170図)と、2018(平成30)年に石棺の実測を行っている。



第170図 下津留古墳群配置図 (1/1000)

1号墳 墳丘は民家2棟の間に所在し、頂部に露出する石棺周辺は、宅地敷地より2m程の高さを測る。墳形は北側に緩やかに傾斜しながら20m程続く不定形な形状であることから、民家建築に伴って削られた墳丘土を北側へ移動させたようにも見える。本来の墳形は全く不明であるが、規模の大きな古墳であった可能性が高く、周囲に石垣状に積まれた大小様々な円礫は、葺石を再利用した可能性もある。

1号墳石棺（第171図） 凝灰岩製の箱形石棺で、長軸285cm、短軸100cm程を測る。出土した位置のままとみられ、概ね東西方向の主軸である。蓋石は1枚しかないが、破損面はないことから本来2枚以上継足して構成されていたと思われ、内面には側石や小口石の組合せのためコ字状に彫り込まれた溝が確認できる。棺身は破損や欠失がみられるが、側石は2枚継足しの両側で4枚、小口石は両側で1枚づつ2枚の計6枚と考えられる。底石は土砂堆積により確認できない。側石には北側側石の継足し部分に鉤状の加工があるほか、内面両端に小口石との組み合わせ面に溝が彫り込まれてあり、上部側縁端部にも丁寧な整形加工痕が見られる。石材は異なるが、鉢ノ窪2号棺や後述の下津留4号墳石棺と同じ加工痕であり、特に内面の鑿痕は良好に残っている。石材に若干の移動が考えられることから、内法は本来長軸180cm短軸55cm程と推定される。祠が2基設置されて信仰の対象として祭られているが、石棺発見についての経緯は何も伝わっていない。



第171図 下津留1号墳石棺 (1/30)

2号墳 墳丘は1号墳より約30m東の民家裏庭の敷地内に所在する。規模は東西9m、南北5mの楕円形状で、高さは1.2m程を測る。墳裾には大小の円礫が積まれており、周囲は削平を受けているとみられる。主体部については全く知られていないが、現況により古墳の可能性がある。地元では荒神様として信仰されている。

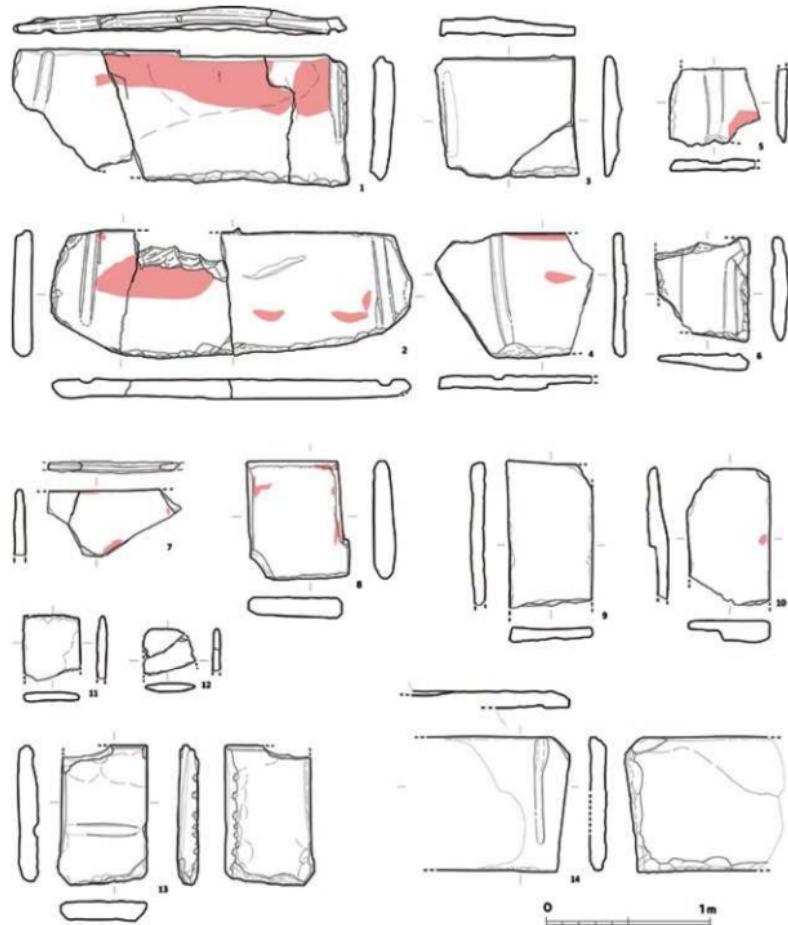
3号墳 墳丘は2号墳より約30m東の民家裏庭の敷地内に所在する。規模は東西6m、南北7mの楕円形状で、中央付近の高さは約2mを測り、大小の円礫のほか瓦などが石垣状に積まれている。また主体部については全く知られていないが、現況により古墳の可能性が高い。頂上に祠があり、地元では童王様として信仰されている。

4号墳 墳丘は集落東端に近い畠地脇から民家裏にかけて所在する。高さ1m前後の盛土及び土壘状の地形が東西25m南北24mに渡って不定形に続いて元の墳丘地形を全く残していないが、石棺材の存在により古墳であったことと判断できる。墳丘土が広範囲に分裂・移動されて著しく変容しているとみられ、複数の古墳の可能性もあるが、表面に大小の礫が散見できることや中心付近の1箇所に地元で祀られていること、棺材はほぼ1箇所に集中することなどから、ここでは4号墳として一括する。

4号墳石棺（第172図） 棺材の多くが墳丘東側に崩壊した状態で積み重ねられている。近年地元有志によつ

て復元されているが、発見に関する経緯や出土位置等は不明である。破損部の接合を試みた結果、小破片を除いて安山岩質凝灰岩製の箱形石棺の棺材13枚(第16図1~13)と、少し離れた墳丘南西側の同じ石材の1枚(第17図14)の計14枚を確認した。いずれも溝状の彫込みがあるものや、側縁の丁寧な調整加工されるなど、鉢ノ窪2号棺と酷似した加工痕が観察でき、石材も共通している。これらの形状や加工痕の特徴など、鉢ノ窪2号棺と比較して種類などを推定し、棺材それぞれの詳細については別表のとおりである。

第17図1・2は破損しているが接合により1枚の長側石に復元される。共に両端に彫込まれた溝はわずかに内傾気味で、その間隔は175~180cmを測ることから同一棺材の可能性がある。蓋との接合部である上面端部は特に丁寧な調整痕があるが、1には段、2には突起状に作り出している。他に側縁端部の調整など加工痕の特徴



第172図 下津留4号墳石棺 (1/30)

第10表 下津留4号墳石棺材一覧表

17回 No.	種類	長辺 (cm)	短辺 (cm)	平面の調整	側縁端部の調整	備考
1	側石	205	80	顔料が確認できる内面はややいびつな面取加工で、両端に丁寧に彫られた構があり。外表面は凹凸のある粗い面取加工。	上部は丁寧な調整で段あり。側部・下部は打欠きの粗い整形。	上辺は内側に湾曲。
2	側石	220	75	顔料が確認できる内面は面取加工で、両端に丁寧に彫られた構があり。外表面はやや凹凸のある粗い面取加工。	上辺は丁寧な調整で突起あり。側部・下部は打欠きの粗い整形。	上辺はわざかに外側に湾曲。
3	側石	81	72	溝状の丁寧な加工がある内面は面取加工で、外表面は凹凸のある粗い面取加工。	上部は丁寧な調整で突起あり。下部は打欠きの粗い整形で、側部は平坦に整形。	継足しの側石か
4	側石	(95)	75	顔料が確認できる内面は面取加工で、丁寧に彫られた構があり。外表面はやや凹凸のある粗い面取加工。	上部は丁寧、側部は粗い平坦加工と欠損、下部は打欠き。	
5	側石？	(55)	(44)	溝および顔料が確認できる内面は面取加工で、外表面はやや粗い面取加工。	側部・下部は打欠き整形、上部・側部は欠損。	蓋の可能性もあり
6	側石？	61	57	溝のある内面は面取加工で、溝と一部段のある丁寧な面取加工がある。外表面はやや粗い面取加工。	上面は丁寧な調整であるが大部分は欠損。側部・下部は打欠き。	継足しの側石か
7	側石	(81)	(40)	顔料が確認できる内面は面取加工で、外表面はやや粗い面取加工。	上面は丁寧な調整で、それ以外は欠損	上辺は外側に湾曲する。
8	小口石	71	57	顔料が確認できる内面および外面ともに丁寧な面取加工。	上部・側部は丁寧な調整で、下部は粗い調整。側部に段あり。	
9	小口石？	(86)	51	外表面の判別は不明。両面とも面取加工であるが、片面は粗い。	上部・側部は丁寧な調整で、下部は欠損または粗い打欠き。	
10	小口石？	(82)	50	顔料が確認できる内面は面取加工で、外表面は粗く凹凸が残る面取加工。	上部・側部は丁寧な調整であるが、側部の厚みが両側で異なる。下部は欠損または粗い打欠き。	側面は外側に湾曲する。
11	不明	36	34	外表面の判別は不明。両面とも面取加工であるが、片面は粗い。	上下は不明で、三方は粗い整形。一方は欠損	小型石材
12	不明	31	28	外表面の判別は不明。両面とも面取加工である。	上下は不明で、三方は粗い整形。一方は欠損	小型石材
13	小口石	85	53	溝のある内面は面取加工で、溝は丁寧な加工。外表面は粗い打ち欠き面および自然面。石材切出し痕か？	上部・側部は丁寧な調整で、下部は打欠き整形	溝は底石との組み合わせか？
14	側石	(95)	81	溝のある内面は面取加工、外表面は粗い面取り加工。	上部は丁寧な調整で、側部・下部は粗い打欠き調整	横転して樹立

によりNo.3・4・7・14も側石と推定でき、3にも浅い突起が端部にある。破損の著しい5・6も側石の可能性が考えられるもので、3・6は継足しによる側石の1枚とみられる。14は少し離れて横転して立てられている。それぞれの接合関係は不明であるが、棺身側石だけで少なくとも2個体以上が確認できる。小口石とみられるのが棺材8と13のほか9・10も可能性が高く、計4枚がある。No.13にある溝は底石の組み合わせであろうか。11・12は部分的ではあるが小型で、石材や加工痕から石棺材の一つとみられるものの詳細は不明である。

蓋石や底石について明確に断定できるものは未確認であるが、埋没して未発見の石材もあると思われるうえ、側石と判別のつかない可能性もある。接合や継足しを考慮しても側石は4枚、小口石も4枚を数えられることから、少なくとも2個体分以上の箱形石棺の棺材が混在していることが考えられる。

まとめ 鉢ノ塚古墳群と下津留古墳群は両者共に複数の小円墳群とみられるが、墳丘の規模・形態などについては不明確で遺物もなく、石棺材が唯一時期推定の根拠となっているのが現状である。

箱形石棺については、石材の加工痕から見れば下津留4号墳石棺と鉢ノ塚2号棺は同じ調整加工が施されており、石材も同一であることが観察できる。このほか下津留1号墳石棺も石材は異なるものの、やはり同じ調整

加工痕が観察でき、両者の箱形石棺はほぼ同じ時期であることがうかがわれる。しかし下津留古墳群には舟形石棺は確認できず、両古墳群に時期差があるとすれば下津留古墳群が後出するものとみられる(田中2009)。

市内の箱形石棺の例として、瀬平塚原石棺群では1号・3号棺に蓋石内面に長方形状の溝が彫られており(賀川1949、玉永1987)、現在残されている3号棺と思われる小口石には、側縁端部に下津留1号墳石棺と同じような調整加工痕がある。内田1号墳では石棺材の一部が検出されており、溝らしい加工痕が確認されている。詳細な加工痕は不明であるが、三重地域の箱形石棺の製作技術に共通点があることがうかがわれる。一方、前期古墳と推定される緒方町漆生古墳群の城山古墳、及び大野町ノ原古墳にも石棺材が所在しているが、時期的・地理的な要因もあるためか加工痕の共通性はみられない。今のところ三重地域と三重以外の地域との石棺の共通性は、まだ資料数が断片的でもあり明確ではない。鉢ノ塙・下津留両古墳群には石材として安山岩質凝灰岩が利用されていること、側石端部に段や突起を有するなど独特な加工も特徴的であることが挙げられる。

鉢ノ塙・下津留両古墳群の箱形石棺は海部地域でみられる特徴との類似することが指摘されており、大野川を通じて関係が推定されている(田中1998)。前期古墳である立野古墳に後続する古墳群として、墳丘規模は縮小しながらも広域的な技術交流のもとで石棺を製作していたと思われる。多くの石棺は古くからの偶発的な発見によるもので、所有者など地域で祀られて神聖視されているため、調査に限りがあるのが現状である。墳丘についても同様で両古墳群ともに規模形態についての情報はほとんど得られず、こうした墳丘についての確認調査も将来の課題として挙げられる。

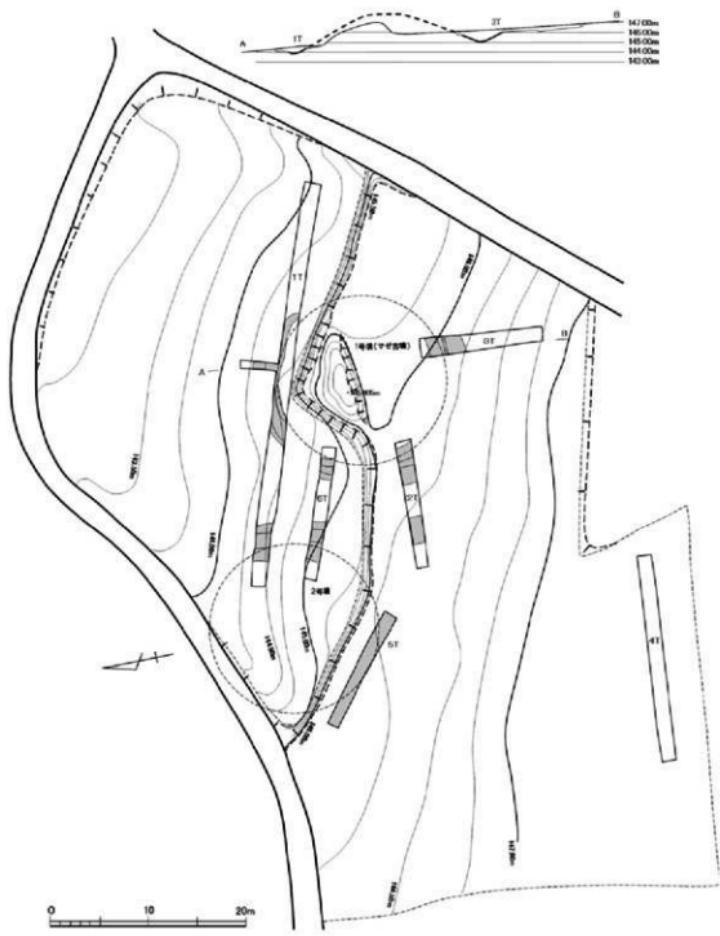
3. 内田古墳群

三重盆地東部の吉井山北側山麓の緩やかに傾斜する台地上に所在し、三重盆地内を南東側より見下ろす立地環境である。台地周辺は横田遺跡として周知されており、縄文時代から中世にかけての遺物が散布していることが知られている。この遺跡範囲内で、かつては複数の古墳があったが明治頃の開墾によって消滅したこと、その際に石棺が掘り出されて鉄劍や耳環等の出土があったことなどが伝承されている。その後内田古墳群という名称で一部の文献に紹介されているが、現在は台地上の畑の一角にマゼ古墳と呼ばれる古墳1基の墳丘の一部が残るのみである。

周囲の畑より耕作中に礫が頻繁に出土するという状況より、古墳遺構の保存を図るために、2001(平成13)年に旧三重町教育委員会で確認調査が行われている。マゼ古墳の周囲に第1～第3トレチの他、礫の出土が伝わる箇所に第4・第5トレチを設定し、古墳の周溝を確認したことにより第6トレチを追加した。その結果、東西に並んで築造された2基の古墳群であることを確認し、名称を旧名の内田古墳群とし、これまでの墳丘が残るマゼ古墳を1号墳、新たに判明した古墳を2号墳としている。



第173図 内田古墳周辺地形図 (1/12000)

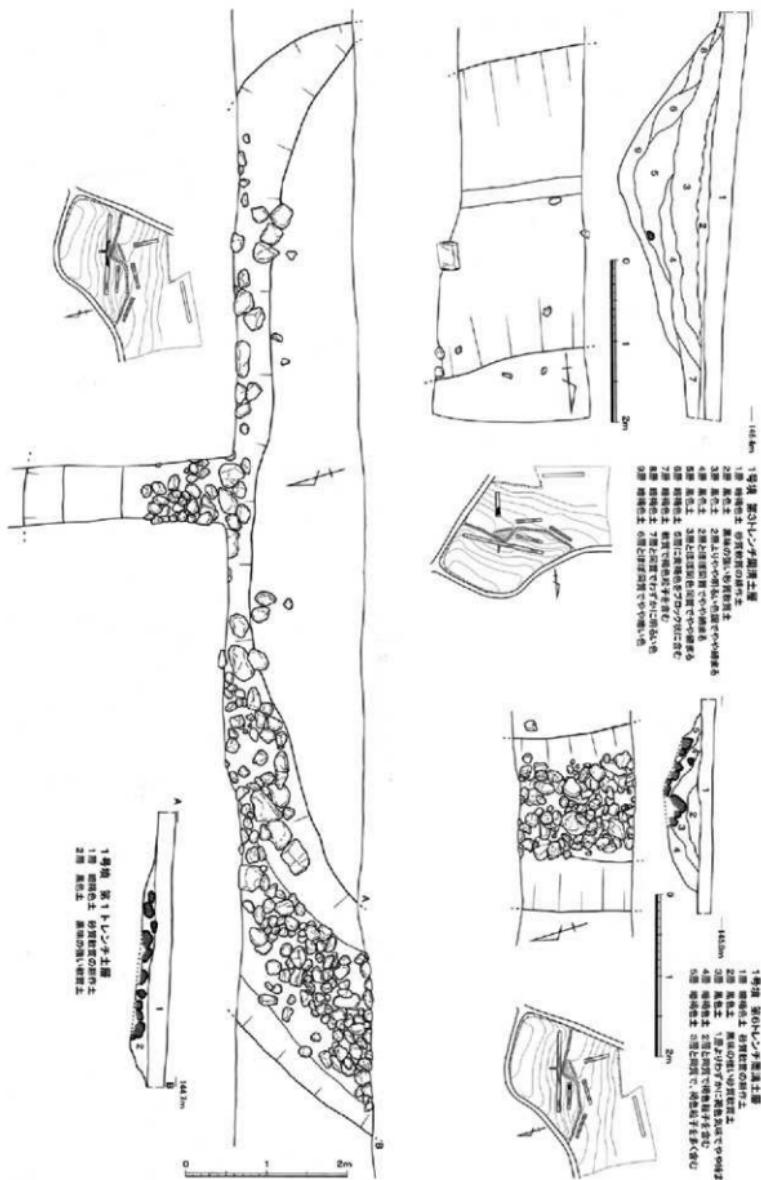


第174図 内田古墳群トレンチ配置図 (1/500)

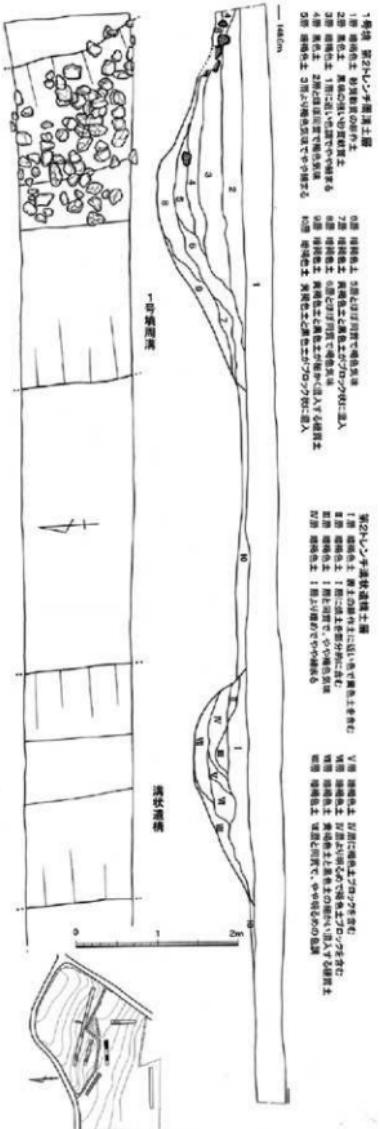
(1) 1号墳 (マゼ古墳)

北側に傾斜する台地上に築造され、周囲は段々畑状に造成されて墳丘北側と南側で段差が生じている。現状では最大長12m高さ2.5mほどを測る程度で、墳丘土の大半を失って大きく改変されている。墳丘上は耕作で出土した礫が集められている。(第174図)

周溝の検出状況は、段差のある畑地のうち上段の畑に設定した第2(第176図)・第3トレンチ(第175図)では保存は良好でV字状に掘り込まれているのを確認できた。下段の畑地に設定した第1・第6トレンチ(第175図)では浅く底部付近のみ遺存しているにすぎない。溝底の標高は北側が南側より1.1m低く、傾斜地の地形に合わせ



第175図 内田1号墳 第1(左)・第3(右上)・第6トレンチ(右下)(1/60)



第176図 内田1号墳 第2トレンチ (1/60)



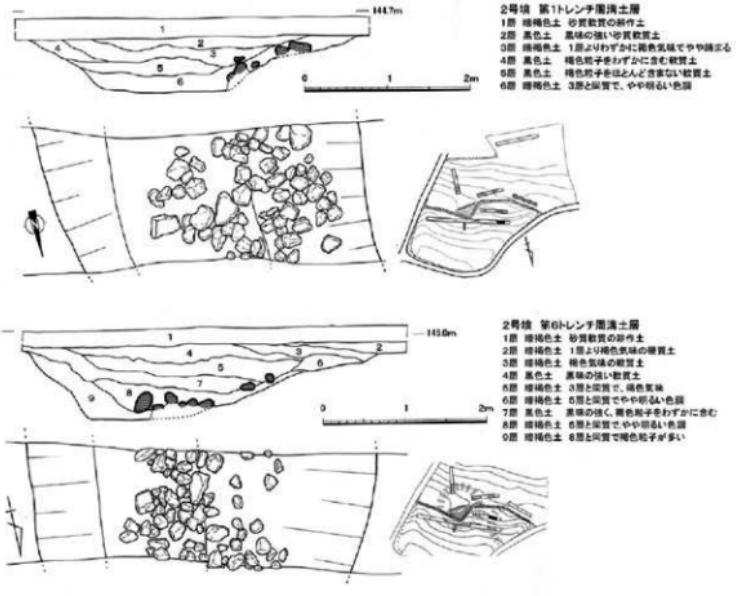
第177図 内田1号墳 石棺材 (1/20)

て周溝も傾斜するように掘込まれている。溝内の墳丘側斜面から溝底にかけて多量の礫が検出され、拳大から人頭大まで様々な大きさの河原石であることから葺石であったものが、すべて転落して溝底に溜まった状態である。第1・第6トレンチでは根石とも思われる大型礫もあるが、第2トレンチでは小型礫がほとんどで、第3トレンチでは礫自体少なく、標高の低い北側の墳丘裾に多く転落している傾向がある。周溝を検出したのは第1トレンチ中央、第2・第6トレンチ東側、第3トレンチ北側で、墳丘を中心に円形状に巡ることから円墳の周溝と推定される。遺物は第179図の土師器壺等があり、周溝内に礫と共に転落した状態で検出されている。

主体部は、墳丘の保存状況から伝承どおり失われているとみられるが、調査中に墳丘脇に石棺材と思われる板状の凝灰岩1点を発見している(第177図)。破損が著しいが、長辺70cm、短辺50cm、厚さ15cm程度で、1面に赤色顔料や溝のような加工痕が確認できることから、箱形石棺の一部と考えられる。

(2) 2号墳

地表上からはその存在をつかがい知ることはできないが、マゼ古墳の西隣に設定したトレンチのうち、第1・第6トレンチ(第178図)から周溝の遺構を検出した。1号墳に隣接する古墳の存在が確認でき、部分的な検出であるが1号墳と同規模の円墳とみられ



第178図 内田2号墳 第1・第6号坑 (1/60)

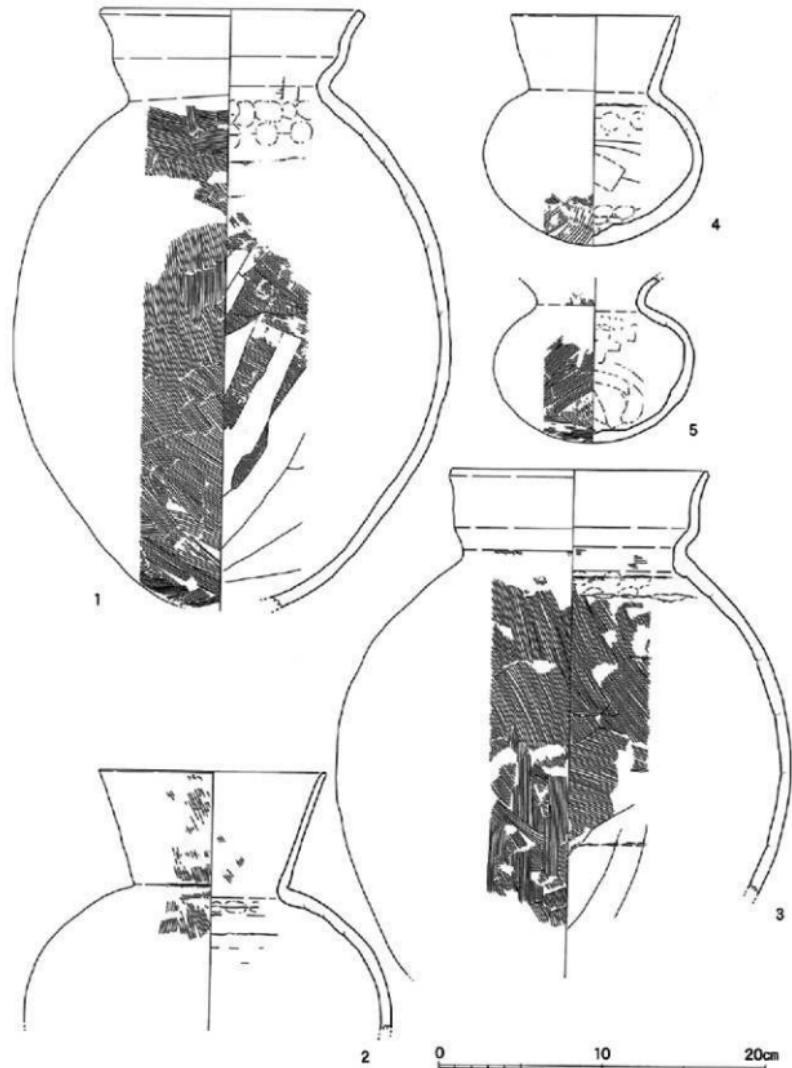
る。周溝の規模や形、土層なども1号墳とはほぼ同じで、礫が転落している様子もよく似ている。第5号坑は地権者の事情により完掘前に埋戻され詳細は不明であるが、多くの礫が出土していることから2号墳の周溝や埴丘に位置すると考えられる。出土遺物は第180図の高壙が多くみられる。主体部については不明である。

(3) その他の遺構

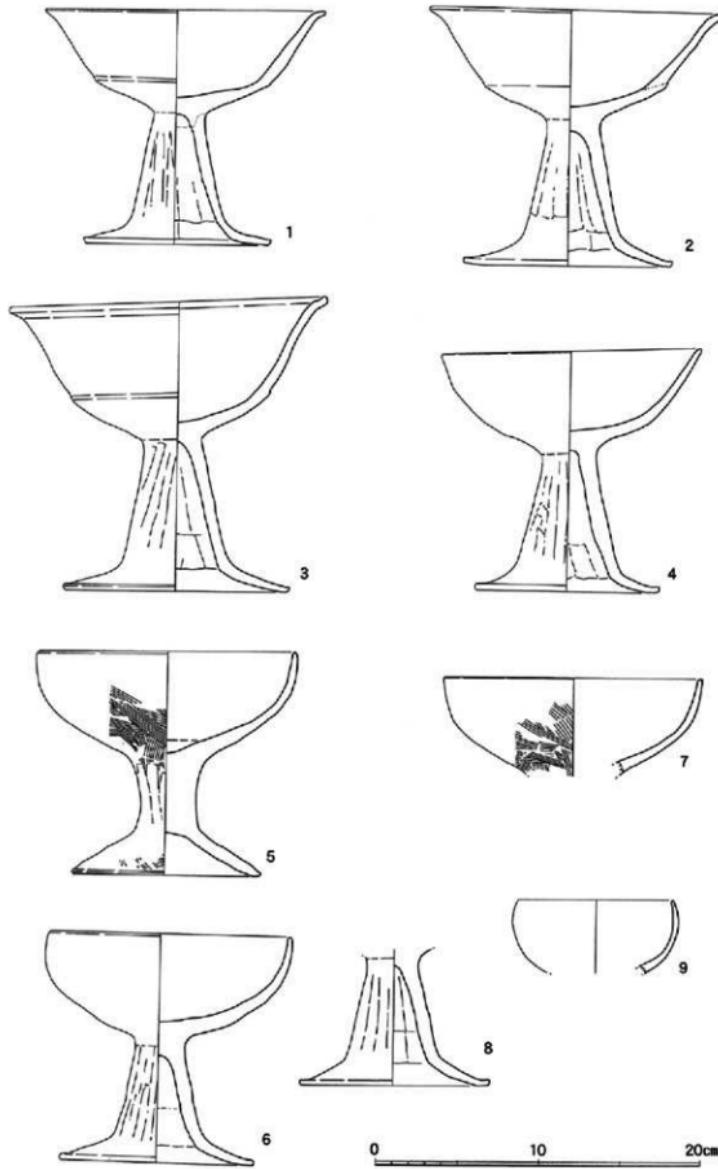
第2号坑で1号墳の西側に溝状の遺構が検出されている。(第176図) 規模的には周溝と同じであるが、礫は全くなく、土層の色調もほぼ暗褐色土のみで古墳周溝の土層とは異なる。遺物の出土ではなく、古墳とは別の遺構と考えられる。また第4号坑でも礫を検出しているが、縄文時代早期の集石と思われるもので古墳の遺構は検出していない。

(4) 出土遺物

第179図は1号墳の周溝覆土下層からの出土で、1は第6号坑、2・3・4・5は第1号坑から出土している。1と3は二重口縁の壺で1・3共に胴部外面にハケ目があり、内面上部はハケ目下部はハケメ後ヘラ削りである。1の外面に黒斑が認められる。2は単口縁の壺で、外面はハケ目の後にヨコナデが施される。4・5は小型丸底壺である。第180図は2号墳の周溝覆土上層と思われる位置からの出土で、すべて第5号坑の出土品である。1～8は高壙で、壙身の中央に段を持ち外湾しながら延びる1～3と、段を持たず丸みを帯びた4～7がある。9は鉢と思われ、直口縁でわざかに内湾する。



第179図 内田1号墳出土遺物 (1/3)



第180図 内田2号墳出土遺物 (1/3)

(5) まとめ

調査の結果2基の円墳とみられる遺構が検出でき、伝承どおり複数の古墳群であることが確認できた。1号墳の周溝は南北で約1mの標高差で掘込まれていることから、立地地形に沿うように傾斜して築造されている。葺石と思われる礫はあるが、根石の配置など本来の位置を保つものではなく墳端の位置は特定できず、周溝の底部から墳丘側傾斜変化する位置から推定して、径は17m強の墳丘規模と思われる。高さは第3トレーナーの斜面角度の延長から推定して、溝底より3~4m程と思われる。2号墳は不明な点が多いが、1号墳と同規模程度と推定される。主体部は1号墳の棺材とみられる石材から推定して、箱形石棺の可能性が高く、伝承どおり開墾により掘り起こされて放置された一部とみられる。

築造時期は出土土師器から中期前葉～後半と推定されるが、1号墳が2号墳より先行するものと思われ、規模も同じ小円墳が短期間のうちに順次築造されたと思われる。

内田古墳群の立地から三重川流域の三重盆地内を見下ろす立地条件で築造されており、周辺にはこの盆地を取り巻くように4基の前方後円墳があり、同じ環境下で築造された古墳とみられる。うち道ノ上古墳、重政古墳、秋葉鬼塚古墳とは築造時期が近いと推定されるが、特に相互に視認できる近距離の道ノ上古墳との深い関係性が推定される。このような小円墳群は、大野川本流域の鉢ノ窪古墳群や下津留古墳群、同じ三重川流域の渋平塚原石棺群も同じような古墳群であったと考えられ、それぞれ前方後円墳の被葬者と共にした背景の元で構築された墳墓と思われる。ほぼ並行しながら前方後円墳とは性格の異なる墳墓形式という当時の地域社会を示す、重要な遺跡でもある。

(諸岡)

【参考文献】

- 井 大樹 2016「大分県下の剣拔式石棺」「坊／原古墳の石棺材」『豊後大野市内遺跡発掘調査概要報告書』6 豊後大野市教育委員会
神田高士 1990「大分の舟形石棺」『おおいた考古』3 大分県考古学会
若杉竜太 1997「九州石棺考」『先史学・考古学研究』II 龍田考古会
清水宗昭・高橋徹 1982「大分の石棺」『九州考古学』第56号 九州考古学会
田中裕介編 1998『大分の前方後円墳 三重・西国東地区編』大分県教育委員会
田中裕介 2009「豊後大野市三重地城の首長墓とその動向」『地域の考古学—佐田茂先生佐賀大学退任記念論文集』
田中裕介 2019「豊後大野市の古墳群からみた地域社会と首長像」『古墳時代阿蘇ルートの研究—阿蘇地域に築かれた古墳に注目して—』熊本大学文学部
玉永光洋 1987「古墳時代」『大分県三重町誌総集編』三重町
中島宗芳 1966「古墳時代」『三重町誌沿革編』三重町
諸岡 郁 1997「鉢／窪古墳群」『三重地区遺跡群発掘調査概報』II 三重町教育委員会
諸岡 郁 2003「内田古墳群」『三重地区遺跡発掘調査概報』VII 三重町教育委員会

第9節 三重古墳群の小結

(1) 築造時期について

三重地域には最大規模の道ノ上古墳をはじめとする6基の前方後円墳と小円墳群が分布し、前方後円墳の数と規模において大野川流域の中で代表的な古墳群が形成されている地域である。

小坂大塚古墳を除くすべての前方後円墳から埴輪が出土し、築造年代の推定根拠となっている。前期後半の立野古墳より築造が始まり、中期初頭～前葉に重政古墳・道ノ上古墳・秋葉鬼塚古墳が統けて築かれるが、小坂大塚古墳も墳形及び調査結果から大きな時期差はないと考えられる。埴輪の組成は、立野古墳は円筒埴輪と二重口縁・単口縁の両種の壺形埴輪で構成されているが、道ノ上古墳や秋葉鬼塚古墳は円筒埴輪が極端少なく単口縁の壺形埴輪主体で、重政古墳は単口縁壺形埴輪のみ、竜ヶ鼻古墳は円筒埴輪のみである。壺形埴輪をみても立野古墳と、道ノ上古墳・重政古墳・秋葉鬼塚古墳のそれぞれ製作に違いがみられるが、共通する技法も多く、立野古墳以外の3基は時期的にはほぼ同時期とみられる。

小円墳が前方後円墳に代わって中期前葉～末頃まで築造がみられ、墳丘規模は大きく縮小するが、立地環境と同一で共に被葬者の間で関係のあることが考えられる。中期後半の竜ヶ鼻古墳を最後に、以後首長墳は築造を停止し、後期にかけて古墳自体の築造数も激減して横穴墓へと変わっていくことから、前期後半から中期までの比較的短期間のうちに造営された古墳群といえる。

(2) 墳丘構造の特徴

立地地形による影響もあるが、前方部が細長く小型でいわゆる柄鏡形の墳丘形態が多い。墳丘構築土について、周囲を周溝として掘下げて築造されているとみられ、立野古墳では後円部の高さ6.5mのうち2mほどが地山層であったことが確認され、他の古墳も同様の工法と思われる。周溝は立野古墳や小坂大塚古墳は馬蹄形に近く、秋葉鬼塚古墳が盾形に巡らされているとみられる。立地地形的にも全周囲を巡らせてなく、重政古墳・道ノ上古墳では後円部の周囲のみと推定される。

墳丘の外表面について、竜ヶ鼻古墳以外で葺石に覆われていることが確認されていて、墳端部に大型の礫を根石として並べた箇所もある。特に立野古墳では墳丘に河原石、墳端の根石に大型角礫、テラス状平坦面には玉砂利状の円礫があり、配置場所による礫の形や大きさに際立った差が観察できる。一方、ほぼ河原石とみられる小坂大塚古墳・道ノ上古墳・重政古墳・秋葉鬼塚古墳は、やや角のある礫が多く、三重川から運ばれたことが推定され、立地場所に近い河川を利用して敷設方法も大きな違いは見られない。そして葺石のない竜ヶ鼻古墳と併せて、三重古墳群の外表面構造の違いには時期的な変遷も考えられる。

また墳端の外周に沿って一定幅のテラス状の平坦面が確認されている。墳丘斜面からそのまま礫敷きで構築されているもので、トレンチの場所によっては、墳端の根石列により墳丘斜面との境を有しているものもあるが、根石がないものもある。平坦面の外縁にも大振りの礫による根石を配置している箇所もある。テラス面は盛土で、周溝底から続く整地層に構築されていることが、小坂大塚古墳・重政古墳・秋葉鬼塚古墳・立野古墳で確認されている。幅は立野古墳で後円部の一部に3m幅で検出され、小坂大塚古墳や秋葉鬼塚古墳、道ノ上古墳は1m前後ほどの規模である。竜ヶ鼻古墳では礫敷ではないが、約3m幅の整地によるとと思われる平坦面が後円部で検出されている。

段築は重政古墳のみの検出であるが、前方部と後円部共に二段築成であると推定され、葺石も玉砂利状の小礫が敷かれた痕跡があった。埴輪の樹立跡は確認していないが、多くの出土がみられるところから、樹立箇所の可能性が高いとみられている。また、前方部に関しては保存状況が良くないこともあるが、多くの古墳で前方部の墳端の位置は検出されていない。後円部に比べて葺石の残りは良くなかった道ノ上古墳や小坂大塚古墳や秋葉鬼塚古墳ではすべて転落した状況ではないことから、入念に葺かれていた可能性も考えられる。

(3) 主体部について

主体部に関する埋葬施設や出土遺物は判明していないが、重政古墳の後円部墳頂より石棺出土および遺物出土が伝えられ、大正時代には既に行方不明とされている。秋葉鬼塚古墳も盜掘の伝承があるものの詳細は不明であるが、調査中に結晶片岩の石片が採集され、主体部の石材の一部の可能性も考えられる。また伝承はないが、墳頂に窪みのある小坂大塚古墳・立野古墳・竜ヶ鼻古墳もすべて盜掘痕とみられ、道ノ上古墳も後世の祭祀所として改変されており、すべての古墳で盜掘の可能性がある。

主体部が判明している古墳に鉢ノ窪古墳群や下津留古墳群、瀬平塚原古墳群の小円墳には、箱形石棺や舟形石棺がある。小円墳でありながら丁寧な加工による造りであることから、前方後円墳にもこのような石棺が埋葬されていると思われるが、それ以外の詳細は不明で手掛かりはない。

地中レーダー探査による調査で、6基の前方後円墳すべてより後円部墳頂中心付近で測定された強い反射は石棺および墓坑と想定され、主体部に関する遺構の存在を示すものとみられる。しかし秋葉鬼塚古墳からは盜掘による破壊の痕跡とも考えられる斜めになった構造が示され、重政古墳からは攪乱の可能性がある範囲の広い不整形な反応が得られている。竜ヶ鼻古墳と立野古墳も、盜掘坑に接した位置に反応があり、一部が破壊されているとも推定される結果となっている。残る小坂大塚古墳では後円部中心から北よりも反応が得られていて、窪みとの位置にずれがあることから、石棺等の埋設されている可能性が高い。道ノ上古墳では後円部南側の位置で上下二つの反応があったが、同じ埋葬施設として墓坑と石棺などのそれぞれの反応と推定されている。

盜掘により旧状を改変されているものの、すべての古墳で何らかの主体部に関する遺構は残存する可能性がある。また、重政古墳と小坂大塚古墳では前方部からも反応が得られているが、樹根とも考えられるもので主体部の可能性は低いとみられている。

(4) 立地について

立地の共通点について、台地地形上の端部に接するように立地する小坂大塚古墳・秋葉鬼塚古墳・立野古墳、台地先端の尾根地形上に立地する道ノ上古墳・重政古墳・竜ヶ鼻古墳がある。いずれも周囲から視認される位置を選んだ立地環境と推定される。前方部の方向も西向きの傾向があり、地形の制約によるずれもあるが、概ね主軸方位を東西方向に揃えた統一性を持った築造と考えられる。

三重古墳群は、大野川本流域と三重盆地集団の三重地域を分布域としている。大野川本流域は東部と西部に細分できるうちの西部の上田原地区に限られる狭い範囲に所在し、前方後円墳は立野古墳の1基のみで、周囲に小円墳群を従えるように河岸段丘上の台地上に所在する。それぞれの立地は、川岸に近く段丘の低い位置にある下津留古墳群、段丘最上段から台地上へ上る途中の鉢ノ窪古墳群、台地上の立野古墳群とそれぞれの立地場所の違いがある。古墳築造における背景が示唆されるが、いずれも距離も近く狭い範囲に集中することから、大野川に近い共通する条件による立地環境と思われる。

立野古墳以外の前方後円墳5基のうち、三重盆地内を見下ろせる台地端に立地する道ノ上古墳・重政古墳・秋葉鬼塚古墳・竜ヶ鼻古墳の4基と、平野から離れた台地上に立地する小坂大塚古墳が築造されている。それぞれ約1km前後の一定の間隔で相互に視認できる距離を置いて分布しているが、立地環境の違いは本貫地とした被葬者の背景が関係していることが推定される。

いずれも三重川流域の前方後円墳には隣接する円墳ではなく、ほぼ単独での築造であるが、小坂大塚古墳には瀬平塚原古墳群が、道ノ上古墳には内田古墳群が距離を離れて同じ立地環境の中に所在し、それぞれ前方後円墳に後続する首長層により築かれたものと思われる。

(諸岡)

第4章 三重古墳群周辺地域の調査成果

本章では三重地域以外の市内主要古墳の調査として、平井川周辺地域の坊ノ原古墳と、緒方地域の漆生古墳群で実施したそれぞれの成果について、報告する。

第1節 坊ノ原古墳

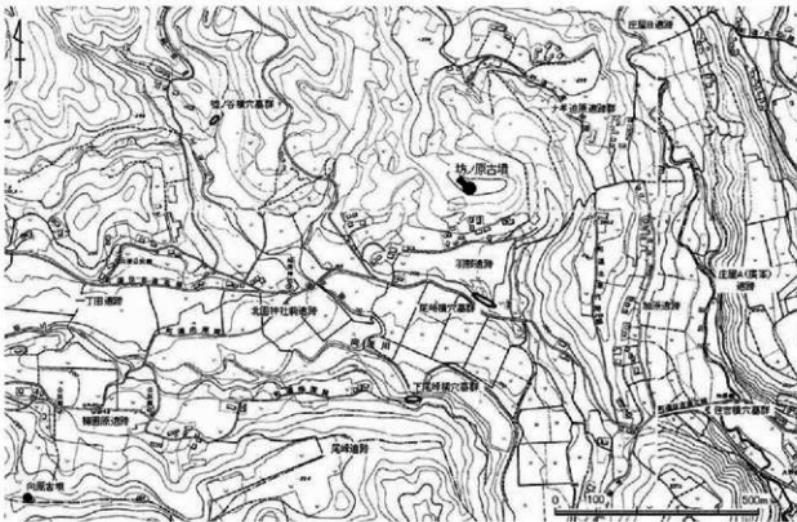
1. 調査の経過

大野町桑原区の標高約250mの丘陵上に所在する前方後円墳で、平井川の支流である向原川沿いの沖積平野を見下ろす立地環境である。周囲の古墳時代の遺跡として1.5km南西に所在する円墳の向原古墳のほか、尾崎・下屋峰・唯ノ谷の各横穴墓群があり、500m南東の加原遺跡では集落跡が確認されている。

通称ひょうたん塚と呼ばれて古くから存在は知られており、前方部上に祠があり地元では信仰の対象となっている。1976(昭和51)年度の測量調査で全長45mの規模であることが確認され、後円部の南側から西側にかけての削平痕と、前方部頂部に掘削を受けているが、概ね良好に保存されている。また、後円部墳頂に明治時代の盜掘跡と伝えられる窟みがあるが、その経緯や出土遺物などは知られていない。墳丘上には葺石と推定される円礎がみられるが、段築や周溝などは地形上からは確認できない。時期を推定できる手掛かりに乏しいが、後円部に比べ前方部が低く細長い墳丘形態から前期の築造と考えられている(清水1977、賀川1980)。また、前方部には主体部の石棺材と伝えられている石材があり、安山岩質の板石3枚のうち2枚には側面の一部に加工調整痕が確認でき、箱形石棺の一部と推定される(井2016)。

市内の主要古墳でありながら不明な点が多く、将来にわたる保護も見据えて、墳丘規模や構造、築成時期の把握を目的に遺跡範囲の確認調査を行った。2014(平成26)年度より確認調査に先立って墳丘測量を実施し(玉川2016)、2015(平成27)年度にトレンチを計8箇所(第1~8トレンチ)設定し、翌年度に2次調査として5箇所のトレンチ(第9~13トレンチ)を設定して実施した。(諸岡)

諸國



第181図 坊ノ原古墳周辺地形図(1/12000)

【参考文献】

- 清水宗昭 1977 「坊ノ原古墳」『大野原台地の遺跡 大分県大野原地区土地改良事業関係遺跡群予備調査概要Ⅱ』大野町教育委員会
- 賀川光夫 1980 「坊ノ原古墳と御塚古墳」『大分県史大野町史』大分県大野町史刊行会
- 玉川剛司 2016 「坊ノ原古墳測量調査について」『豊後大野市内遺跡発掘調査概要報告書6』 豊後大野市教育委員会
- 井 大樹 2016 「坊ノ原古墳の石棺材」『豊後大野市内遺跡発掘調査概要報告書6』 豊後大野市教育委員会
- 諸岡郁編 2017 「坊ノ原古墳」『豊後大野市内遺跡発掘調査概要報告書7』 豊後大野市教育委員会
- 諸岡郁編 2018 「坊ノ原古墳」『豊後大野市内遺跡発掘調査概要報告書8』 豊後大野市教育委員会

2. 墳丘測量調査

(1) 調査に至るまでの経過

坊ノ原古墳は、豊後大野市大野町桑原地区の北西から東西方向へと屈曲して延びる標高250mの台地上に立地する前方後円墳で、1976(昭和51)年3月30日に大分県の指定史跡に登録されている。

坊ノ原古墳が立地する地域は、1975(昭和50)年度から実施された畠地帯総合開発事業の関連で、大野原台地の大規模発掘調査が行われた。これらの関連調査の一環で、坊ノ原古墳の平板測量が実施され初めて古墳の実態が紹介された(清水1980)。この測量調査の結果、全長46m、後円径26m、後円高4m、前方長19m、幅10m(復元)、前方高2mを測る前方後円墳で、前方部が低く細長い古式の特徴を残していることから4~5世紀の築造であると推定されると報告されている(清水1980・賀川ほか1980)。その後、1988(昭和63)年9月に前方後円墳集成に関する実査が行われた(緑貴1992)。

これらの調査歴のなか、豊後大野市が実施する市内古墳の総合調査の一環で、別府大学文化財研究所に依頼があり、墳丘測量調査を行うことになった(玉川2012・2014・2015)。墳丘測量調査は、デジタル機器を用いた変化点測量法(玉川2004)により行い、別府大学の玉川剛司の指導のもと、安部和城、井大樹(大学院博士前期課程文化財学専攻1年)、塙見恭平、高木慎太郎(文学部史学・文化財学科3年)と一緒に実施した。測量調査期間は、2015(平成27)年7月3日~12月3日までの計9日間で行った。測量範囲としては、墳丘部を中心にして4595m²で、計測点は墳丘および周辺地形を合わせて4442点で、そのうち墳丘部は3690点ほどであった。測量調査を実施するにあたり、あらかじめ市教育委員会が設置した合計2点の基準点⁽¹⁾を使用し、必要に応じて補助点を設置して測量調査を行った(第182図)。

以下、調査の内容について述べていきたい。

(2) 墳丘測量の内容と成果(第182~184図)

後円部 現状は、第182図を見ると後円部東側から南側くびれ部にかけての範囲では、墳端から高さ4mにかけて墳丘斜面が大きく削平されているのがわかる。墳端ラインが比較的良好に遺存しているのは、後円部北東から北側のくびれ部までの範囲である。しかし、この範囲においても墳端ラインが部分的に削平を受けている。

くびれ部墳頂部から後円部墳頂部にかけての墳丘斜面では、等高線の幅や等高線が屈曲する状況から、北側半分の方が隆起斜道が良好に遺存しているものと考えられる。

以上の状況から後円部径については、二つ地点を基にして考えていきたい。まず一つ目は、比較的に墳端の傾斜変換線が遺存している、後円部北東側から北側くびれ部にかけての標高252.250~252.500mの等高線が接する墳端ライン。二つ目は、隆起斜道、くびれ部や前方部の墳頂部テラスを二等分する墳丘主軸である。これら二つの地点を根拠にすると、二つ目の墳丘主軸上に円の中心がきて、かつ墳端ラインが遺存している箇所を通るラインである。これら2地点を通る径27mが、後円径であると考えられる。

段築については、後円部墳丘主軸から北側の等高線253.500m～253.750mの間に、長さ4m、幅0.7mのテラスが確認できる。このテラス面には墳頂部にかけて30～40cmの葺石と考えられる石が多く見られることから、このテラスが1段目の段築である可能性が高い。しかし、このテラスから北側くびれ部にかけての墳丘斜面の遺存状況が良い箇所でテラスの痕跡が確認できないことから、発掘調査による確認が必要である。

墳頂部については、墳頂部のほぼ中央に、長さ6.1m、幅4.6m、深さ0.75mを測る楕円形の掘り込みがみられ、盗掘壙であると考えられる。この盗掘壙は、後円部から前方部方向にかけて深くなっていることから、盗掘の際に墳丘主軸の南東側から前方部に向けての掘り進められたものと考えられる。現状での後円部墳頂の最高標高は256.903mで、後円部高は4.6mである。

くびれ部 墳丘南側のくびれ部については、後円部東側から前方部隅角まで続く削平のため、築造当初の墳端ラインは確認できない。北側のくびれ部については、後円部の北側の墳端ラインと外側のテラス下端ラインとが分かれる付近からくびれ部付近にかけて、墳端ラインが直線的になっており、標高254.000mの等高線から墳端ラインまで等高線の間隔が狭くなっていることから、若干の削平を受けているものと考えられる。しかし、墳端ラインの外側のテラス下端ラインと標高252.000mの等高線とが接する付近では、くびれ部に向けて浅い窪みがみられ、等高線がくびれ部に向けて墳丘側に内湾しながらめぐっている。この地点と、現状の墳端ラインとテラス上端ラインが接する付近がくびれ部であると考えられる。この地点から墳丘主軸で反転復元した地点間の11mがくびれ幅になると想定できる。また、墳頂部の標高が254.50mであることから、北側くびれ部の墳端からの差である1.7mが、くびれ部の高さとなる。

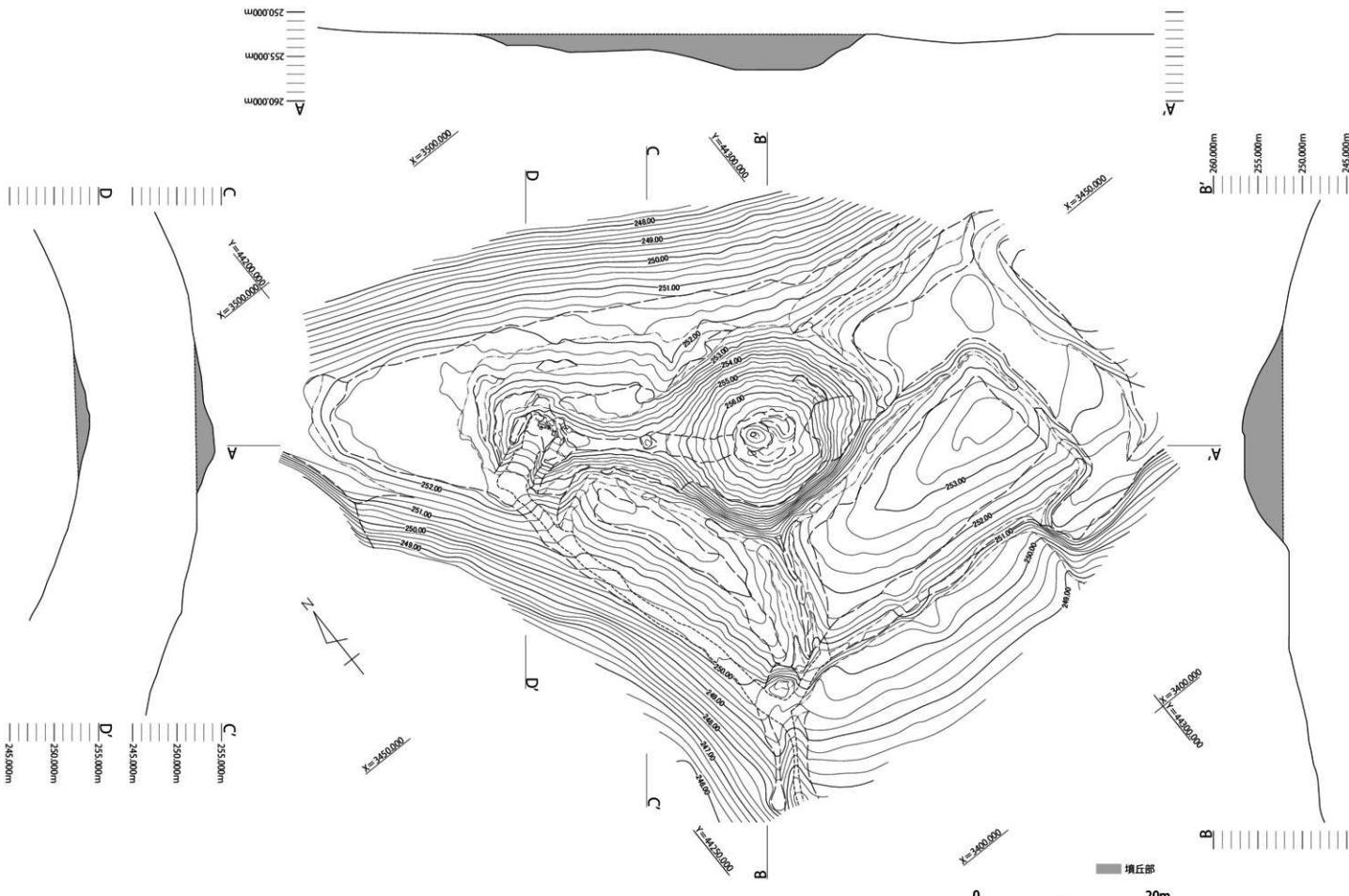
なお、両くびれ部において段築や葺石は、確認できなかった。

前方部 第182図をみると、前方部の中央ほどが、墳頂部の上端、墳端ラインと等高線とともに、墳丘側に大きく抉れている形状となっている。この形状が、「ひょうたん塚」と呼ばれる所以となったと考えられる。この抉れている両側には、現状の墳端のラインに沿って、それぞれテラスがみられる。前方部北側では、くびれ部から前方部端部にかけて長さ11m、最大幅3mを測るテラス。一方、前方部南側では、削平により北側のテラスよりも幅が狭く、長さ9.1m、最大幅0.8mを測るテラスである。

墳端ラインが遺存している個所をみていくと、前方部南側では、後円部東側から隅角まで続く墳端が削平され、さらに墳丘に沿って幅1m、深さ0.5mの溝が掘り込まれているため、墳丘斜面と墳端ラインは大きく改変されている。一方、前方部北側では、くびれ部から1.6mほど前方部側では、253.000mの等高線が外側に広がっている。これよりも隅角側では墳端ラインが大きく墳丘側に抉れていることから、このくびれ部から1.6mまでの範囲については、前方部の墳端が遺存している箇所である可能性が考えられる。また、この範囲よりも隅角側の墳端については、削平により等高線が乱れ、良好に遺存している個所は確認できない。しかし、前端部側の墳丘主軸付近で、等高線252.750～253.000mにかけてみられる長さ7.6m、幅1.5mを測るテラスは、くびれ部側に2.2mほどL字状に折れてテラスの上端と下端が接合している。このテラスが折れる下端ラインより上位の等高線は、等間隔で下端ラインと並行し、この地点と先ほどのくびれ部墳端ラインを結ぶと、等高線253.000mとほぼ並行することから、このテラスが折れる付近が前方部北側の隅角であると考えられる。このテラスの前端部側の下端ラインと、くびれ部から直線で伸ばしたラインが接する地点をもとに墳丘主軸で復元すると、前方長19.0m、前方幅16.2mの前方部であった可能性が考えられる。この隅角部分と前端部は、特に発掘調査による確認が必要であると考えられる。

段築については、現状では確認できないが、先述した一つ目のテラスが段築である可能性がある。今後発掘による確認が必要となろう。また、葺石については確認できなかった。

前方部端側の墳頂部では、北東から南西方向に長さ5.3m、幅2.4m、深さ0.5mの土壙が掘り込まれており、さらに取り付き路として前方部西側の隅角方向に向けて削平されている。この土壙内には、弘法大師堂



第182図 坊ノ原古墳填丘測量図 ($S=1/400$)

や記念碑が設置されており、さらにその周辺には古墳に伴うと考えられる組み合わせ式の石棺材などの石が集められている。現状の前方部墳頂部の最高標高は254.373mで、前方部高は2.2mである。

周辺部 墳丘に伴う外部施設として、前方部で述べた北側の墳端ラインの外側には、等高線と下端の傾斜変換線が墳端とほぼ平行して巡っている。これは、豊後大野市地域の前方後円墳の特徴である、墳端の外側に巡るテラスの痕跡である可能性がある^⑨。今後、さらに外側にあると考えられる周溝とともに、発掘調査による確認が必要である。

後円部東側から南側にかけて後円部が大きく掘削され、最大長35.6m、最大幅15.7mの方形の区画が造成されている。この方形区画内では、南側以外の周囲に溝を掘り込んだ整地がなされていることから、畠地造成によるものであるとは考えにくい。また、この区画内で中世の土師器片を表探していることから、何かしらの建造物があった可能性がある。この区画のさらに前方部側でも、最小長22.9、最大長38.1m、最大幅5.8mの台形を呈した区画が見られ、南西側以外の周囲三方向に溝が巡っている。ただ、こちら側の平坦面は狭いため、畠地や建物を造成するための区画であったとは考え難い。この区画でも中世の土師器片を表探している。また、これら両区画の間には土橋状の削り残しがみられる。

前方部端の外側には、最大長14.5m、最大幅14.5m、最小幅7.6mの大きな台形状のテラスがあり、テラス面の等高線も乱れていないことから、後世に整地され畠地等として利用されていた可能性がある。

これらの状況から墳丘周辺からは、前方部北側隅角からくびれ部で確認されたテラス以外、明確な周溝や造出等の墳丘に伴う外部施設が現状で確認できなかった。中世以降に何かしらの改変を受けている可能性が高い。

(3) 測量調査のまとめ

これまで述べてきた測量調査の結果を基に、墳丘の復元案として第183図を作製した。この図を基に各部位の詳細について考察してみたい。

後円部については、北東側で尾根斜面から続く下端ラインが墳丘下端の傾斜変換線と接合する地点、さらに北側で墳端ラインが下端ラインと分岐する地点との間にある幅5.3mの等高線が乱れていない箇所を墳端として、墳丘主軸上に中心が来る径27mが後円径となる。後円高は、4.6mである。

くびれ部については、墳丘主軸からこの後円部径と接する標高253.000mの等高線付近までの5.5mを基に反転復元した11mがくびれ幅で、くびれ部の高さは1.7mである。

前方部については、墳丘主軸上の前端側にみられるテラス下端ラインとくびれ部北側から結ぶライン接する箇所が前方部北側の隅角となる可能性が高い。このラインを基に墳丘主軸で復元すると、前方長19.0m、前方幅16.2m、前方高2.2mとなる。以上の復元想定より、45mが墳長であることから、清水氏らが想定した墳丘規模と大差が無いことがわかった。

また、段築については、後円部東側の一部のテラスと、くびれ部から前方部の墳丘主軸側までにみられるテラスの高さが等高線の253.50mを前後としてほぼ同じ高さであることから段築の痕跡である可能性が高い。

前方部前端の墳端ラインの外側では、現状の墳端ラインと想定した墳端ラインが並行して巡っている。この傾斜変換線は、豊後大野市地域所在する前方後円墳の特徴である、墳端の外側に巡るテラスの痕跡である可能性が考えられる。今後、墳丘規模及び周辺施設を確認するためにも、発掘調査を実施する必要であろう。また、前方部墳頂部に見られる石は、箱形石棺の石材の一部であること考えられ、後円部墳頂部の盜掘壙から推定すると、長軸2m程度の石棺が内部主体としてあったものと考えられる。

以上をまとめると、坊ノ原古墳は、墳長45m、後円部径27m、くびれ幅11m、前方部長19m、前端幅16.2m



第183図 坊ノ原古墳墳丘測量図（測量復元図 1/400）

を測り、後円部高4.6m、前方部高2.2mの前方後円墳であると考えられる。また、現状で確認できるテラスから、後円部、前方部とも二段築成である可能性が高い。

つぎに、坊ノ原古墳の立地について考えたい。古墳が立地する台地は、550mほど北側で、南側と南東側から延びる台地と合流するような地形となっている。つまり、北側の台地の分岐点から見ると、南側に分岐した台地に坊ノ原古墳が立地し、南東側に分岐した台地にナギ迫原遺跡群(弥生～古墳)が立地する。さらに立地の状況を詳しくみると、坊ノ原古墳は南側に延びる台地が広くなり始める地形を利用して造営されている。これらの状況を踏まえ、前方後円墳として認知できる方角を考えるために、第184図の3D図を作製⁽²⁾した。第184図1は真上からの3D図で、2は墳丘南側から、3は墳丘北側からの鳥瞰3D図である。4は後円部側からの真横から、5は前方部側からの真横から見た3D図である。6～9は墳丘北側から、10～13は墳丘南側からの各視点での3D図である。これら3D図の8・9・12・13は、実際に離れた位置から見える古墳の状況を確認するため、中心投影で作製したものである。これら作製した3D図をみると、7・9は墳丘北側から、11・13は墳丘南側の台地下の谷から見上げた視点で作製したもので、前方部が低い坊ノ原古墳の特徴から、台地から近ければ近いほど、下からの視点では前方後円墳であると認識するのは困難であることがわかる。特に古墳の北側の谷は狭く、下から見上げて視認させるための古墳の構造であるとは考えにくい。このような状況から、坊ノ原古墳を前方後円墳であると認識するためには、6・8の南西側からの視点で梅園原遺跡(弥生～古墳)が立地する台地上から、10・12の北東側からの視点で本古墳が立地する台地とつながるナギ迫原遺跡群(弥生～古墳)が立地する台地からの視点が最も視認しやすい位置であると考えられる。以上のことから、どちらかの台地から視認できることを意識した立地である可能性が考えられる。両台地に分布する遺跡の調査が今後進むことにより、坊ノ原古墳との関係について明らかになることを期待したい。

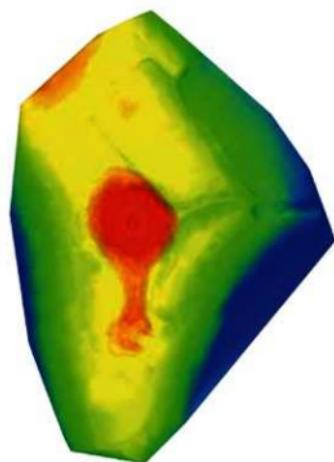
(玉川)

【註】

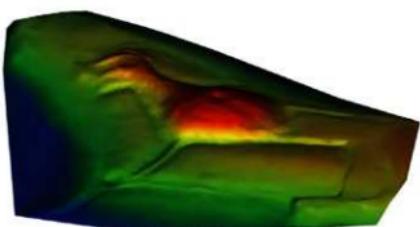
- (1) K-1は後円部南側の土橋状地形の中央、K-2は前方部南側隅角付近に設置されたものを使用した。
K-1: X=3434.293, Y=44270.790, Z=251.631, K-2: X=3475.295, Y=44252.056, Z=252.414
(2) 座標値のデジタルデータから、TINデータ(近接する座標値から不整三角網生成し、地表面を三角形の集合で表現するデジタルデータ構造)を作製し、標高値を段階的に色分けした3D図。

【引用・参考文献】

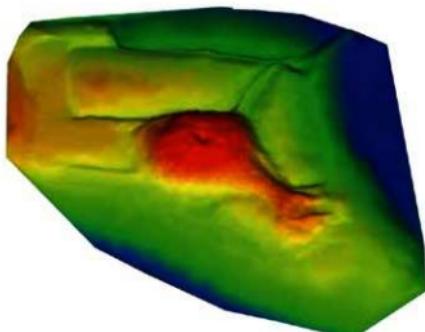
- 下村智・吉田和彦・玉川剛司 2003「古墳におけるデジタル測量の研究・大分県下の古墳を事例として・デジタル測量」『九州考古学第78号 九州考古学会
- 清水昭三・田中裕介 1998「道ノ上古墳」『大分の前方後円墳』大分県文化財調査報告書第100輯 大分県教育委員会
- 田中裕介 1998「立野古墳」『大分の前方後円墳』大分県文化財調査報告書第100輯 大分県教育委員会
- 田中裕介 2019「豊後大野市の古墳群からみた地域社会と首長像」『古墳時代阿蘇ルートの研究』熊本大学文学部
- 玉川剛司 2004「小熊山古墳測量調査」『文化財研究所年報』2 別府大学文化財研究所
- 玉川剛司 2012「小坂大塚古墳測量調査について」『豊後大野市内遺跡発掘調査概報3』豊後大野市教育委員会
- 玉川剛司 2014「諫生古墳群測量調査について」『豊後大野市内遺跡発掘調査概報4』豊後大野市教育委員会
- 玉川剛司 2015「秋葉鬼塚古墳墳丘測量調査について」『豊後大野市内遺跡発掘調査概報5』豊後大野市教育委員会
- 玉川剛司 2016「坊ノ原古墳墳丘測量調査について」『豊後大野市内遺跡発掘調査概報6』豊後大野市教育委員会
- 玉川剛司 2019「重政古墳墳丘測量調査について」『豊後大野市内遺跡発掘調査概報9』豊後大野市教育委員会
- 玉永光洋 1987「古墳時代」『三重町誌総集編』
- 諸岡 郁 1990「三重町の前方後円墳」『おおいた考古』第3集 大分県考古学会
- 諸岡 郁 2002「道ノ上古墳」『三重地区遺跡群発掘調査概報VI』三重町教育委員会



1. 墓丘真上からの3D図(平行投影図)



2. 墓丘南側からの鳥瞰3D図(平行投影図)



3. 墓丘北側からの鳥瞰3D図(平行投影図)



4. 後円部側 真横からの3D図(平行投影図)



5. 前方部側 真横からの3D図(平行投影図)



6. 墓丘北側 真横からの3D図(平行投影図)



8. 墓丘北東側 真横からの3D図(中心投影図)



7. 墓丘北東側からの仰角3D図(平行投影図)



9. 墓丘北東側からの仰角3D図(中心投影図)



10. 墓丘南西側 真横からの3D図(平行投影図)



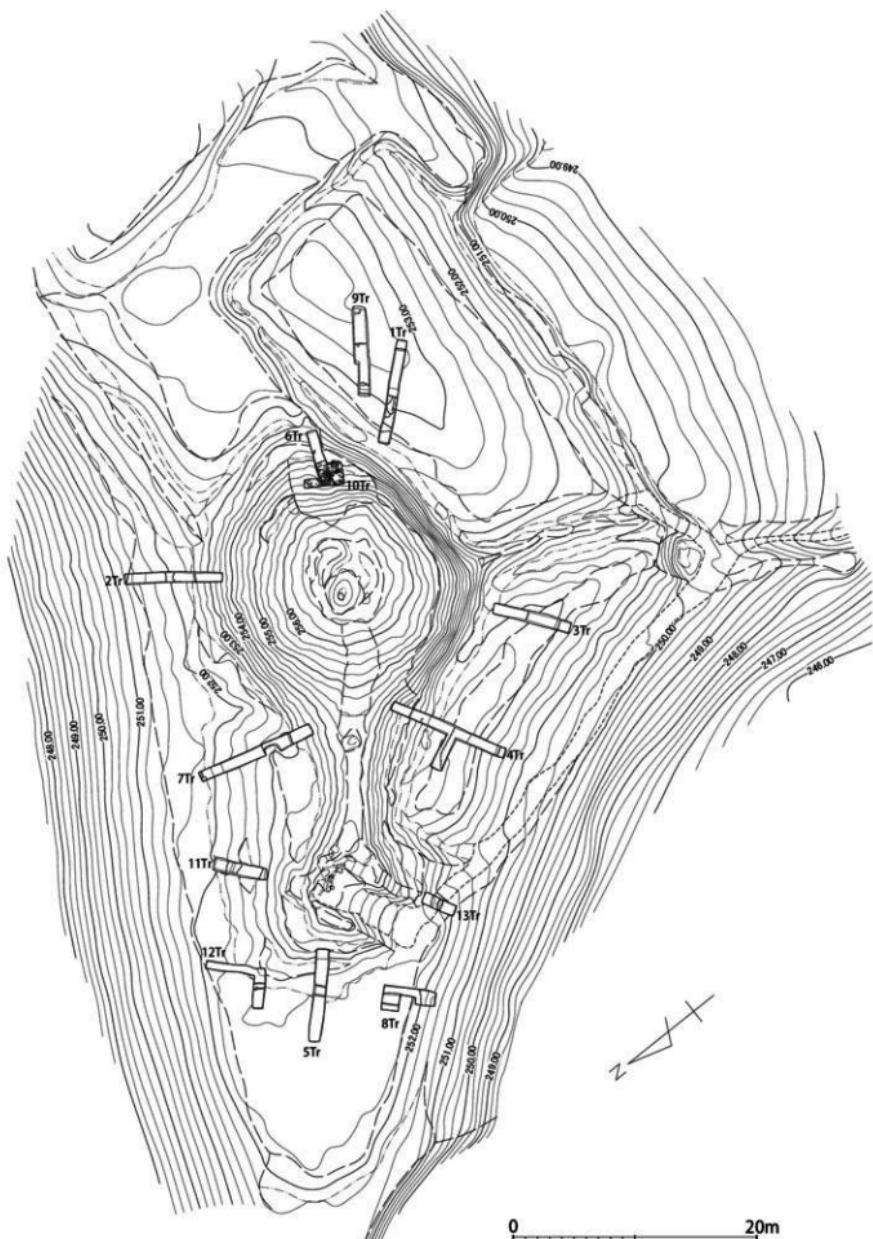
12. 墓丘南西側 真横からの3D図(中心投影図)



11. 墓丘南西側からの仰角3D図(平行投影図)



13. 墓丘南西側からの仰角3D図(中心投影図)



第185図 坊ノ原古墳調査トレンチ配置図(1/400 玉川作図)

3. 確認調査

(1) 第1トレンチ (第186図 写真図版37)

後円部南東側の墳端検出を目的に長さ8.6m幅1mで設定した。長方形状に区画されている畠地跡の山林で、後円部の一部が掘削されているとみられており、地表の樹木を避けるようにして掘り下げを行った。

地表から深さ80cmの擾乱土層があり、その擾乱から免れるようにして溝状の掘込みを検出した。幅は4m、検出面からの深さは50cm、溝底は標高251.75m程のほぼ平坦で断面は逆台形状である。内部には黒色土(4層)の堆積があるが、葺石と思われる礫や遺物等は出土していない。墳丘側は約40°の傾斜でローム層を掘り込まれており、外側はそれよりやや急傾斜であることから周溝とみられる。しかし、外側の傾斜面の地山は色調的に暗い褐色土であることから、当初は地山ローム層ではなく盛土の可能性も考えられることからサブトレンチを設定して掘り下げたものの、擾乱も多くて判断ができず、第2次調査の第9トレンチで地山層と確認した。

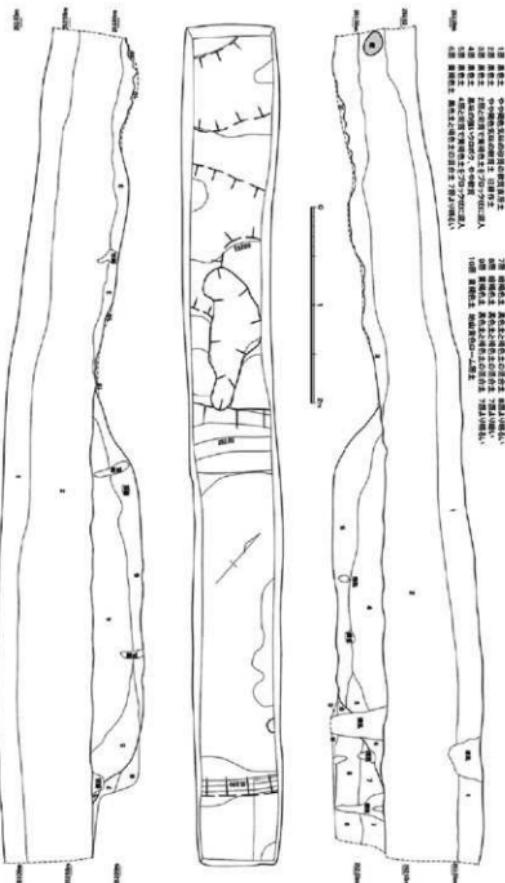
(2) 第2トレンチ (第187図)

写真図版38)

後円部北東側の墳端検出を目的に長さ8.1mで設定した。北側へ傾斜する山林内で、地形的にも当初の墳丘の形状を残していると見られている。墳丘盛土状の土層を検出したが、葺石らしい礫はほとんどみられず、転落している様子もなかった。墳丘端付近に後世の遺構がみられたが墳形を損なうほどの大規模なものではなく、出土遺物から中世以降のものとみられる。

なお墳端より1.5mの平坦面より緩やかに傾斜して、浅い溝状の掘込みがあり、外側はわずかに立ち上がってそのまま自然地形上へ続くと思われる。幅は4mを測り、自然地形の傾斜に沿って掘り込まれ、溝底は最も低いところで標高250.84mである。覆土は黒色土(3層)の堆積があり、周溝と思われる。

遺物は中世の銭貨(熙寧元宝)が出土したが、古墳に伴う遺物は全く出土していない。



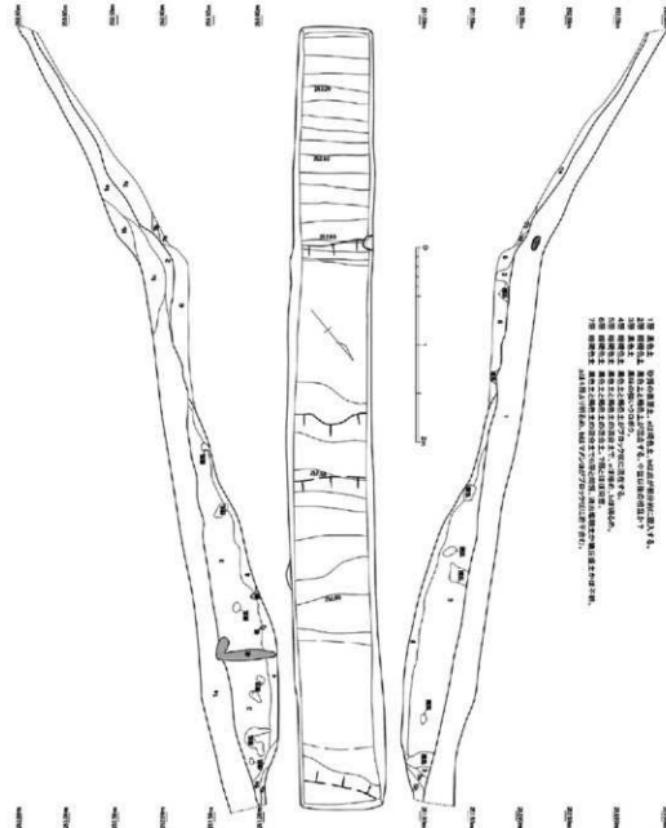
第186図 坊ノ原古墳第1トレンチ (1/50)

(3) 第3トレンチ

チ(第188図
写真図版38)

後円部南西側の墳端検出を目的に長さ6.5m、幅1mで設定した。長方形状に区画された畝地跡で、後円部の一部が掘削されているとみられている。

地表から深さ60~80cmの擾乱土層があり、墳丘側2.5mの平坦面があるが、墳丘掘削により平坦にされたとも考えられる。墳丘端から4m離れた位置で周溝と思われる地山ローム層を掘込まれた遺構を検出した。溝の



第187図 坊ノ原古墳第2トレンチ(1/50)

幅は3m程で、検出面からの深さは70cmで覆土は黒色土層等の堆積があり、溝底の標高は250.50mである。断面はV字状で、墳丘側の傾斜は約23°で緩やかになっているが外側は約60°の急傾斜となっている。墳端部分は失われているとみられるものの、葺石礫も転落している状況でなく、遺物は全く出土していない。

(4) 第4トレンチ(第189図 写真図版38)

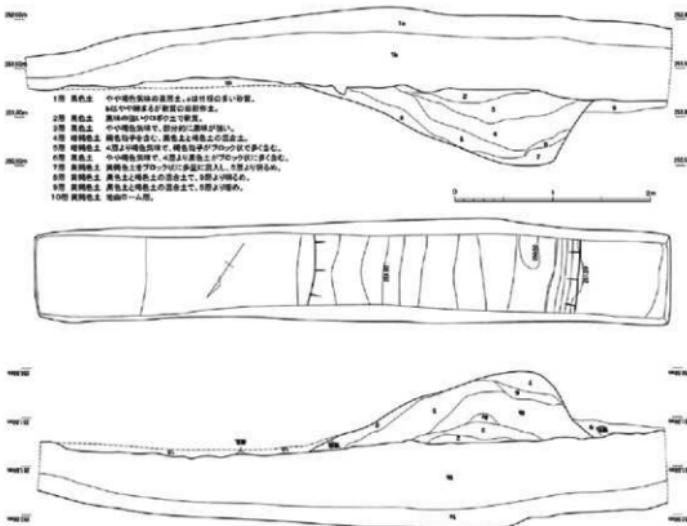
くびれ部南側の墳端検出を目的に第3トレンチと同じ畝地跡に東西に長さ10.1mで設定し、掘り下げを行った。くびれ部の把握のため、北側に長さ2.9m張り出すように追加してT字状の調査区とした。

墳丘側は表土の下に盛土層を検出したが、葺石と思われるような礫はほとんど検出できない。墳丘に段築のような緩やかな傾斜面と墳端部分は急傾斜であることが確認でき段築の可能性もある。墳端より約2.5mの平坦面があり、その外側で周溝と思われる掘込みを検出した。周溝はローム層からマメンコ層(久住軽石層)を掘り込まれており、溝幅は4.2m、検出面より深さは90cm、断面は逆台形状で覆土は黒色土(4層)の堆積

があり、溝底の標高は250.56mである。墳丘側は約28°の傾斜で緩やかになっているが外側は約44°とやや急傾斜になっている。墳端の造構はなく、葺石も転落している様子も見られない。

なお、周溝の平面形態として、拡張部分で内側掘り込みラインを検出しているが、ゆるやかに屈曲して前方部へ向けて広がるように続く様相が見られたことからくびれ部分と思われる。

遺物は図示できるほどの大きさではなかったが、4層の黒色土層下部より土師器および須恵器小破片を数点検出した。



第188図 坊ノ原古墳第3トレンチ(1/50)

(5) 第5トレンチ(第190図 写真図版39)

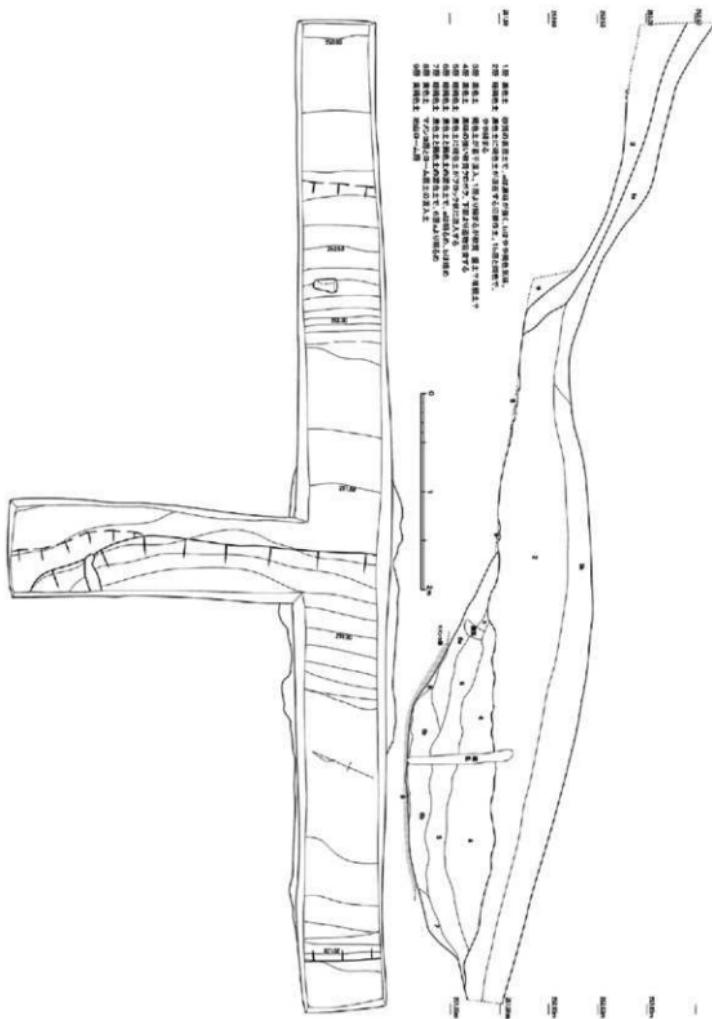
前方部前端の墳端検出を目的に長さ7.7mで設定した。尾根地形上へ続くほぼ平坦地の山林内で、墳丘の形状を残しているとみられていることから、墳端位置から約1m墳丘側から掘り下げた。

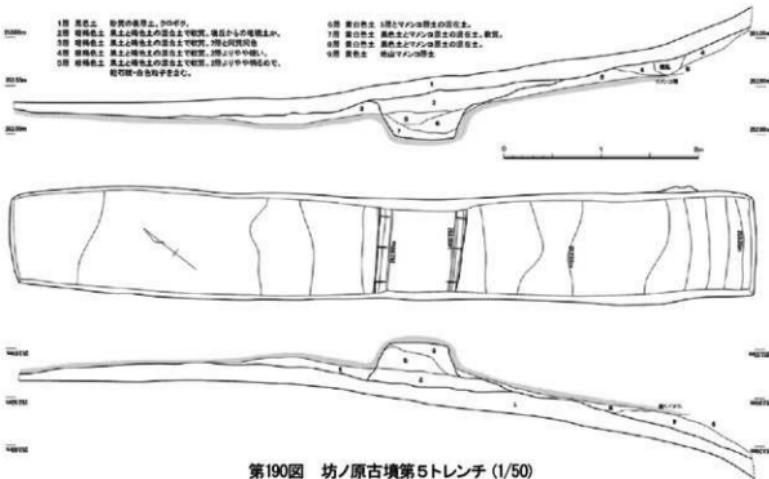
墳丘側の表土下に墳丘盛土層と思われる土層を検出したが、葺石と思われるような礫は検出できない。また墳丘外側は表土直下にマメンコ層を検出し、墳丘周囲には大幅な削平が行われていることが推定される。

墳端より外側約2mで緩やかに傾斜した溝状の掘込みを検出した。溝はローム層及びその下層のマメンコ層を掘り込んでおり、溝幅は90cm、検出面より深さは35cm程の小規模である。断面逆台形状で、覆土は褐色土が多く混入する覆土の堆積があり、溝底の標高は251.94mである。黒色土層は見られず、他のトレンチで検出した周溝とは規模や土層など様相はやや異なる。遺物も全く検出していない。

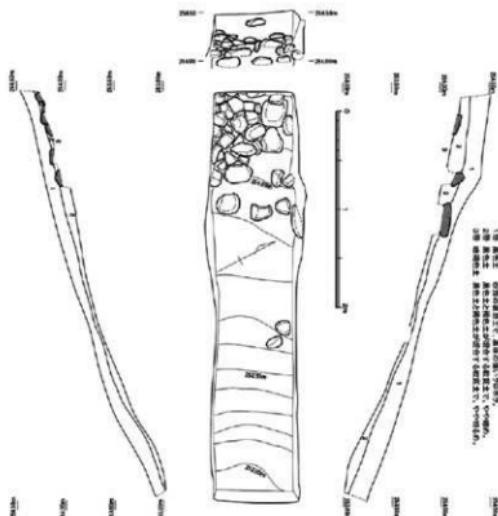
(6) 第6トレンチ(第191図 写真図版39)

墳端のトレンチで全く葺石を検出することができず、その残存状況確認の目的に、葺石と思われる礫が多くみられる後円部東側墳丘上で、長さ4.2mで設定し掘り下げを行った。傾斜面が緩やかで唯一段築テラス状の地形が確認できる位置でもある。





第190図 坊ノ原古墳第5トレンチ (1/50)



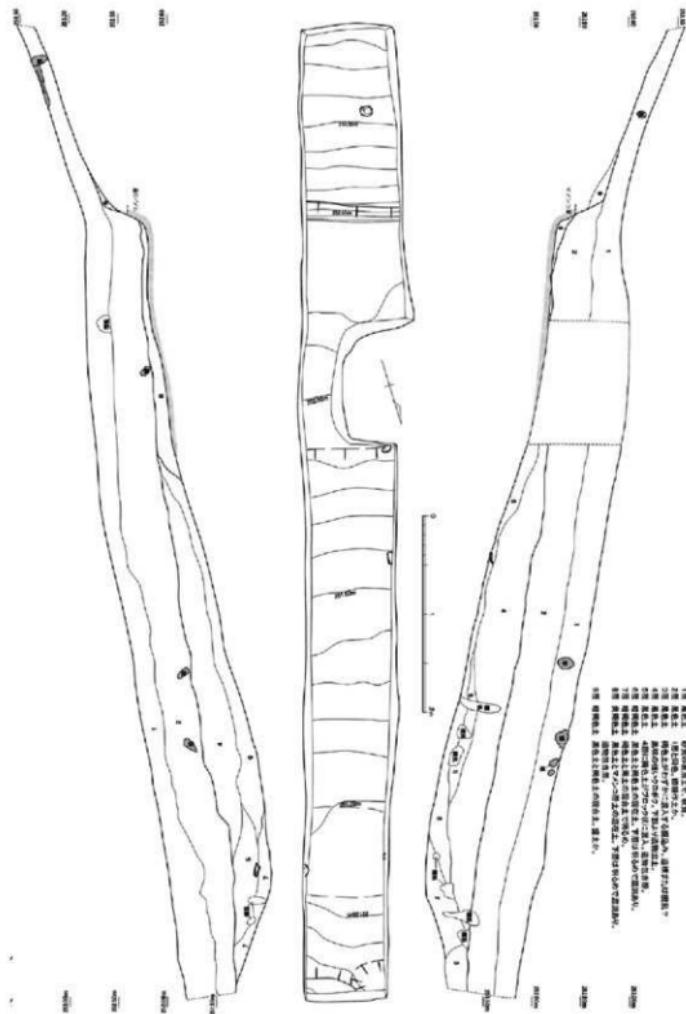
第191図 坊ノ原古墳第6トレンチ (1/50)

(7) 第7トレンチ (第192図 写真図版39)

くびれ部北側の墳端検出を目的に長さ9.8m、樹木を避けるようにして概ね1mで設定した。第2トレンチと同じく北側へ傾斜する山林内で、掘削痕はなく本来の墳形を残していると見られている。

墳丘側は表土の下に盛土層を検出したが、葺石と思われるような礫はほとんど検出していない。墳端付近は

削平を受けた痕跡があるが、その墳頂より、約2.3mの平坦面があり、そのまま緩やかに傾斜して溝状の掘り込みへと続くように検出した。溝はマンコ層およびその下層のローム層を掘り込んでおり、溝幅は5.2mで、断面逆台形状で覆土は黒色土(4層)の堆積があり、溝底の標高は250.93mである。第2トレチと同様に、自然地形にほぼ沿った緩やかな傾斜面で、外側でわずかに立ち上がって自然地形へと続いている。葺石も転落している様子



第192図 坊ノ原古墳第7トレンチ (1/50)

も見られない。

遺物は4層の黒色土層下部より高壙や甕(第199図1・2)と思われる土師器破片を検出した。

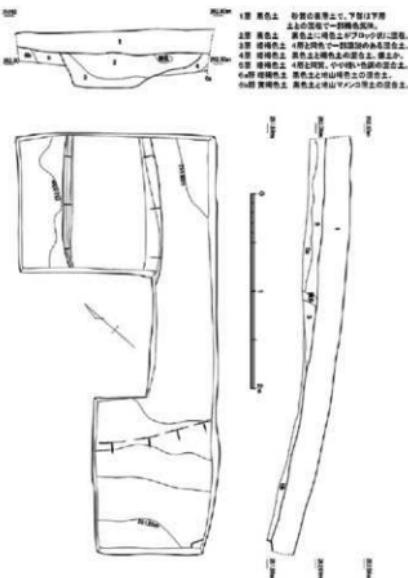
(8) 第8トレンチ (第193図 写真図版39)

前方部南側隅角及び第5トレンチの溝構造の延長検出を目的に長さ4.3m、樹木を避ける形で幅0.8m~2mで設定した。北側へ傾斜する山林内で、道跡の平坦面が統いて削平されていると見られている。

溝状の遺構を検出し、規模や位置的にも第5トレンチの溝から続く遺構と考えられる。幅は約1mで検出されたが、土層観察では1.5m程とみられる。墳丘側は約27°の傾斜で、外側は67°とやや急傾斜である。溝底の標高は251.76mである。

なお、溝は第5トレンチへ続く北東方向に直線状に続いていると思われるが、南西側は樹木による未掘部分の先では検出できていないため、途中で途切れるか別方向へ向きを変えているかは不明である。トレンチの南西側は自然地形の傾斜面へ続き、南側の隅角の遺構は確認できなかった。

葺石等も検出できず、遺物は第22図3の土器が表土から出土したのみである。



第193図 坊ノ原古墳第8トレンチ (1/50)

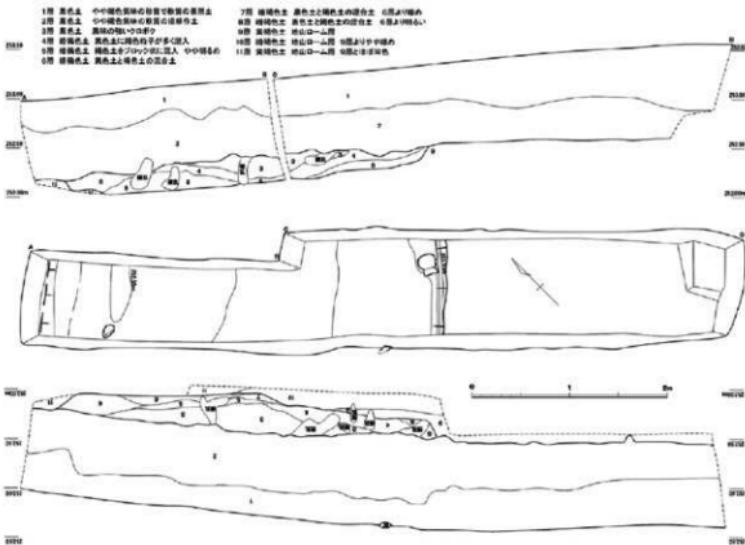
(9) 第9トレンチ (第194図 写真図版39)

後円部南東側の第1トレンチに隣接する位置で、墳頂を掘削して長方形形状に区画された旧畠地跡である。周溝外側の確認を目的に長さ7.4mに設定し、地表の樹木を避けるようにして掘り下げを行った。

地表から深さ80~90cmもの表土や擾乱土層が堆積しており、その下層より周溝を検出した。幅は4m、検出面からの深さは40cm、溝底は中央付近から墳丘側にかけて標高252.1m程度を測り、断面は逆台形状である。外側に向かってわずかに傾斜するが、堆積土の状況も含めて第1トレンチとほぼ同様の状況で検出した。

なお、第1トレンチでは周溝外側の立上りの土層の色調がやや暗く、土質が混合土とも判断できる軟質で観察できたため周堤の存在も考えられたが、今回の調査区では南側壁面沿いにサブトレンチを5.3mの長さで設定したところ、地山層であることが確認できた。盛土とも観察されていた10層(第1トレンチの8層)の上に9層のローム層(第1トレンチの7層)があり、今回9トレンチでの周溝外側の立上りが9層中で10層まで掘り込まれていないことから、10層は盛土ではないと判断した。通常より軟質で暗い色調であるが地山層と判断できるため、周堤の痕跡ではないと考えられる。

また周溝内より4世紀代の時期と推定される土師器甕(第199図3)が出土している。また、拳大の礫1点のほか、小礫がいくつか検出されているが、葺石とみられるほどの出土量ではなかった。

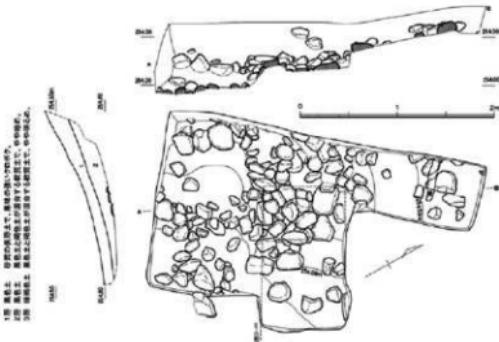


第194図 坊ノ原古墳第9トレンチ (1/50)

(10) 第10トレンチ(第195図 写真図版40)

第6トレンチで疊を多量に検出した上部を南北方向に1m拡張するように設定した。後凹部東側墳丘上で、傾斜面が緩やかで段築テラス状の地形が確認できる唯一の位置である。

出土遺物について、中世の土器器坏(第199図6)が出土している。この付近では測量時でも中世の土器片が採取されており、古墳時代の遺物は全く出土していないことから、中世の集石造構である可能性が高い。

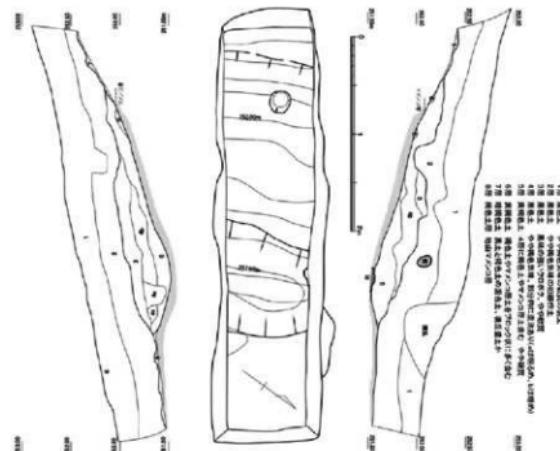


第195図 坊ノ原古墳第10トレンチ(1/50)

(11) 第11トレチ (第196図 写真図版40)

位置は前方部北側の傾斜地である山林内で、掘削跡は確認できず築造当初のまま保存されていると思われる。第7トレチより前方部側延長上の墳端検出を目的に長さ4.4m、幅1mで設定した。

墳端沿いに平坦面ではなく傾斜しながら2m程の位置で幅1mの浅い掘込み遺構を検出したが、黒味の強い黒色土(3層)とその下部(4層・5層)の範囲から推定して、墳端にはほぼ接する周溝の土層と考えられる。幅は2.6m、溝底の標高は251.50mで、地山面はローム層より下層のマメンコ層まで掘込まれている。検出面からの深さは40cmで、溝の断面は約20°傾斜する緩やかに窪む皿状となっており、周溝外側わずかに立上って攢乱層で失われている。第2トレチや第7トレチと同じく、自然地形に沿って傾斜しながら掘り込まれている状況である。位置的にも第7トレチから続く周溝の延長と考えられるが、深さは浅く幅も狭まつておらず、後述の第12トレチまでは続かないことから、前方部側面程度で周溝が途切れるものと思われる。墳丘側の周溝内で柱穴状の遺構が検出されているが、葺石と思われる砾も見られず、遺物は全く出土していない。



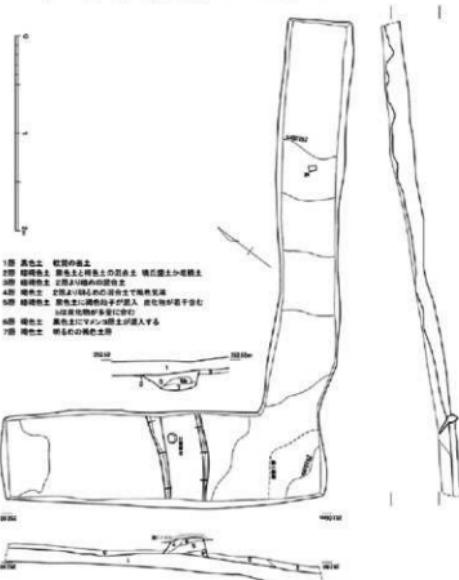
第196図 坊ノ原古墳第11トレチ (1/50)

(12) 第12トレチ (第197図)

写真図版40)

第11トレチと同じく北側へ傾斜する山林内で、築造当初の地形を残すと思われる位置である。前方部南側隅角の墳端及び第5トレチの溝の延長を確認する目的で、樹木を避ける形で東西に長さ4m幅1m、南北に長さ3.5m幅0.7mでL字状に設定した。

トレチ南隅で表土の下に黒色土と場



第197図 坊ノ原古墳第12トレチ (1/50)

色土の混合土を検出し、前方部隅角の墳丘盛土層と思われる。葺石等も検出できないが、ほぼ隅角状の範囲であり、前方部の北側隅角の一部と考えられる。

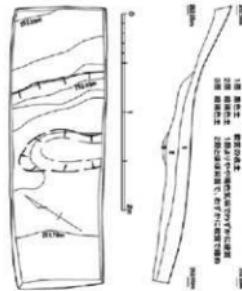
溝状の遺構を検出し、位置的にも第5トレンチの溝に続く延長の位置でもあることから同一遺構と考えられるが、幅は約0.5m前後とやや狭まっている。検出面からの深さは0.2m程の断面逆台形状で、溝底の標高は252.2mで、南側はマメンコ層まで掘り込まれている。なお、溝はやや北側へ向きを変えて傾斜面へ続く様相のため、第11トレンチの周溝とは続かないことが判明した。また、溝遺構内より土師質の壺(第199図7)が検出され、古墳の周溝ではなく中世の遺構である可能性が高い。

遺物は他に表土層より瓦片が出土しており、前方部前端の平坦地は造成によるとみられることが指摘されているが、中世以降に建物などが存在した可能性が考えられる。

(13) 第13トレンチ (第198図 写真図版40)

前方部南側の傾斜する林道上の位置で、前方部南側の墳端検出を目的に長さ2.8mで設定した。11トレンチの南側に対応する4トレンチの周溝の延長する位置を把握する目的で設定した。墳丘側の表土下に墳丘盛土層と思われる土層を検出したが、葺石と思われるような礫は検出していない。

地表面の墳端より外側約2m離れた位置で溝状の掘込みを検出した。溝はローム層及びその下層のマメンコ層を掘り込んでおり、溝幅は90cm、検出面より深さは35cm程の小規模である。断面逆台形状で、覆土は褐色土が多く混入する覆土の堆積があり、溝底の標高は251.94mである。黒色土層は見られないなど、他のトレンチで検出した周溝とは規模や土層など様相はやや異なるが、位置的に南側周溝の端部の可能性もある。遺物も全く検出していない。



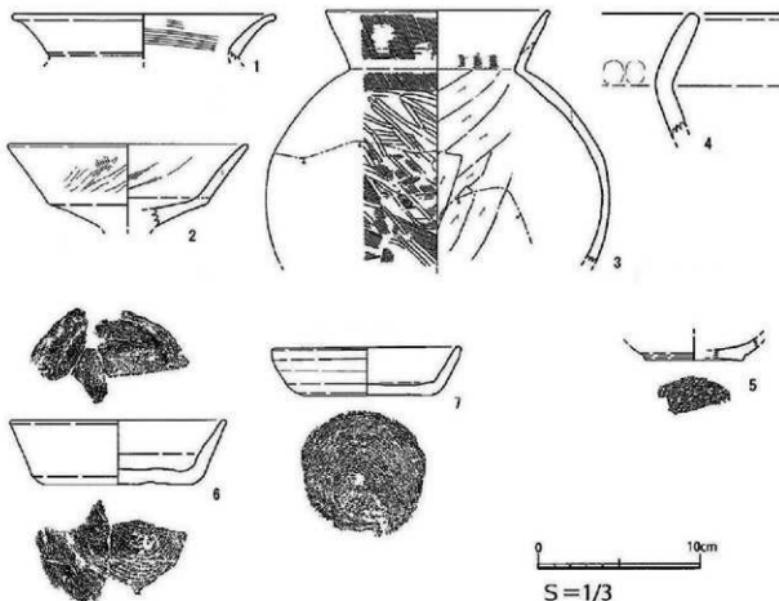
第198図 坊ノ原古墳第13
トレンチ (1/50)

(14) 出土遺物 (第199図 写真図版40)

築造年代に関わると思われる遺物は、第4・7トレンチのくびれ部及び第9トレンチ周溝内より出土している。第199図2は高壺、1は甕の口縁でともに第7トレンチからの出土で、古墳時代前期後半と思われる。3は第9トレンチ周溝内より出土した土師器甕で、単口縁甕に近い形状であるが、内外面に煤が付着しており甕と考えられる。胴部は球状で外面にハケ目の後にミガキ、内面にはヘラケズリがある。古墳時代前期後半の時期と推定される。その他図示していないが、第4トレンチから土師器のほか須恵器甕と思われる破片や、第7トレンチからは土師器甕胴部片等もある。

古墳以外の時代の出土遺物として4は弥生時代の粗製甕の口縁部、5は中世の土師器皿で底部には回転糸切の痕跡がある。4は第8トレンチ、5は第4トレンチの溝上層付近より出土している。6は第10トレンチ、7は第12トレンチの溝上層付近より出土している中世の土師質の壺で、底部には回転糸切の痕跡があり、時期は14世紀と思われる。4は胎土に雲母を多量に含み、朝地町周辺地域に分布する特徴のものである。

(諸岡)



第199図 坊ノ原古墳出土遺物 (1/3)

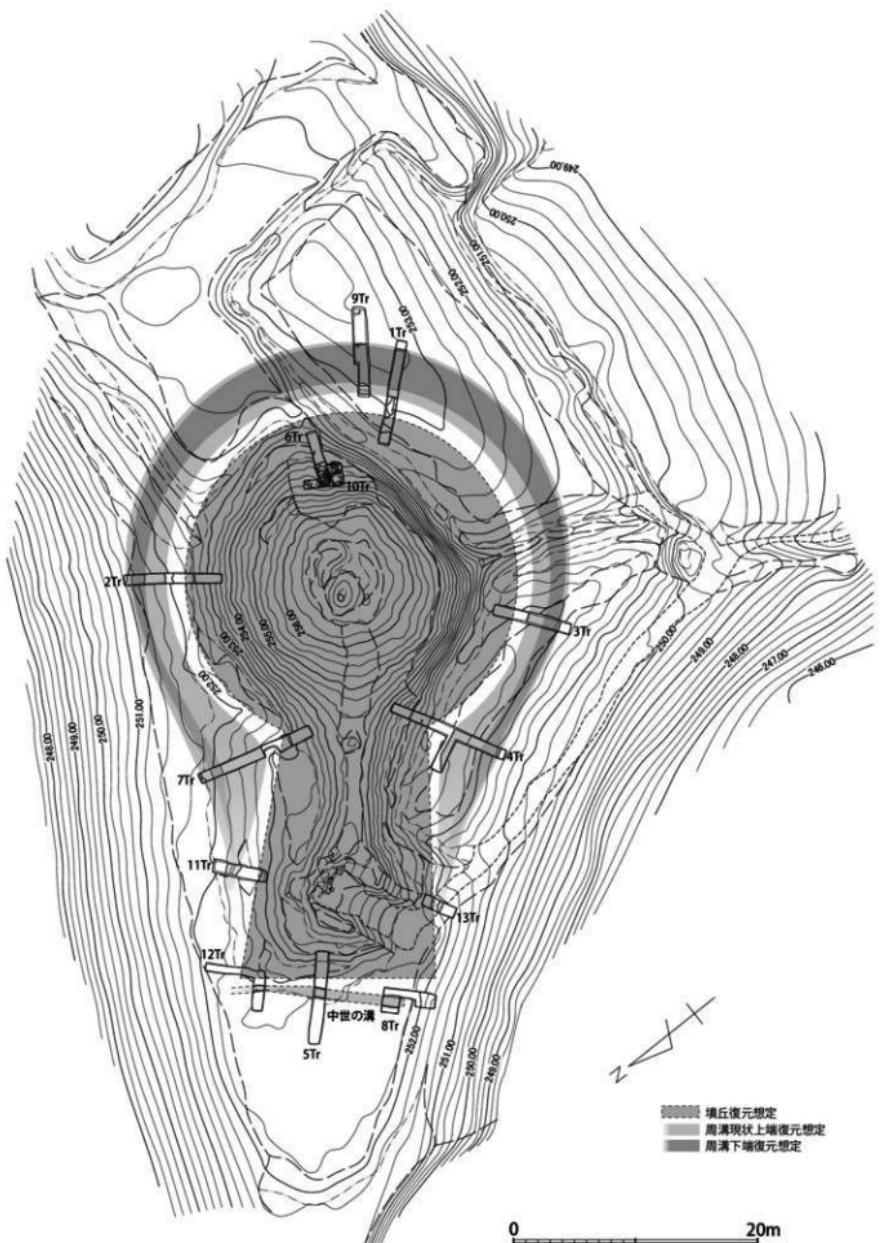
4.まとめ

(1)復元案について

坊ノ原古墳の復元案については、測量調査の成果から前節で述べたとおり、墳長45m、後円部径27m、くびれ幅11m、前方部長19m、前端幅16.2mを測り、後円部高4.6m、前方部高2.2mの前方後円墳であると考えた。また、現状で確認できるテラスから、後円部、前方部とも二段築盛である可能性が高いと想定した。ここでは、測量調査の成果と発掘調査で得られた成果を合わせ、坊ノ原古墳の復元案について考えていきたい。

坊ノ原古墳の発掘調査では、計13箇所のトレーニング調査が実施された。後円部に第1~3・6~9・10トレーニング、くびれ部に第4~7トレーニング、前方部に5~8・11~13トレーニングのうち、前端部に第5~8・12トレーニングが設定され、発掘調査が行われた。これらのトレーニング調査では、墳端として明確な構造は検出できなかった。しかし、第2・11・12トレーニングでは、墳端である可能性が高いと考えられる痕跡が確認されている。また、豊後大野市の前方後円墳でよくみられる墳端外側のテラスについては、第2トレーニングで検出され、その可能性が考えられる痕跡が第7・11・12トレーニングで確認できた。さらに、周溝については、第1~4・7・9・11トレーニングで確認できた。これら発掘調査の成果を踏まえ、墳丘測量図の成果を合わせたものが第200図である。

後円部の復元案を考える上で、まず後円部のトレーニングで検出した周溝についてみていく。後円部で周溝を検出したトレーニングは、第1・2・4~9トレーニングである。これらのトレーニングのうち第1・4~9トレーニングの状況から削平を受けているものの、周溝底部の墳丘側の下端の傾斜変換線が墳端であると判断できる。しかし、後円部の第2トレーニングとくびれ部の第7トレーニングで墳端と周溝の間に平坦面を検出していることから、これらの箇所をとおるよう後に円部を復元すると、整合性が取れない。つまり、築造当初の状況は、墳端ラインの外側にテラスが



第200図 坊ノ原古墳墳丘復元図(1/400)

広がり、周溝へとつながるような造當であったことを考えざるを得ない。これらの状況を考慮して、後円部の復元案について考えていきたい。墳端であると考えられる痕跡については、後円部北側の第2トレンチで確認できている。しかし、その他後円部で設定されたトレンチでは、墳端が確認できていないことから、測量調査で想定した後円部の復元ラインをもとに、第2トレンチとくびれ部の第7トレンチで検出した墳端の痕跡を通る径27.2mが後円部径であると考えられる。測量調査で出した後円部の復元案より、0.3mほど若干北側に寄った位置となる。この墳端ラインから、第2トレンチで検出した墳端外側のテラスを考慮すると、この墳端ラインから外側に幅1mほどのテラスがめぐる可能性が高い。また、段築の確認のために設定された第10トレンチでは、中世の集石であると考えられる遺構のため明確な段築の痕跡を確認することはできなかった。しかし、古墳築造当初のテラスを利用した遺構である可能性が高いため、測量調査で指摘したとおり後円部の段築は二段築成である可能性が高い。

くびれ部については、北側に第7トレンチ、南側に第4トレンチが設定された。北側の第7トレンチでは、墳端が、後世の削平により消失しているのが確認された。しかし、くびれ部の墳頂部からトレンチ端までの墳丘斜面の等高線間隔をみると等間隔となっていることから、墳丘盛土が比較的遺存していると考えられる。そこで本トレンチでの墳端の痕跡について探るために、この墳丘斜面の断面ラインをもとにトレンチの土層の堆積状況を踏まえ、第189図の土層図に当てはめると、現状の墳丘斜面のラインが、トレンチの墳丘側で検出した削平ラインの下端から0.4mほど外側でぶつかることがわかった。これを同図の平面図で整合すると、削平ラインの下端から0.4mほどの間に水平に削平され、それ地点の外側は地形に沿ってなだらかに周溝に接続していることが確認できる。この地点がくびれ部北側の墳端付近になる可能性が高いと推察される。また、南側の第4トレンチの成果では、第7トレンチと同様に墳端は墳丘斜面から続く後世の削平により確認できず削平された下端の位置から2.1m外側で周溝が検出された。またこの周溝の墳丘側の上端ラインは、直線状に開きながら前方部隅角に向かっていることがトレンチ拡張部で確認できている。また、本トレンチに隣接する前方部に設定された第13トレンチにおいて、墳端と考えられる落ち込みと、深さが浅い周溝を検出した。この検出した墳端を起点に、第4トレンチで検出した周溝の上端ラインと平行になるようにラインを延長し、後円部の復元したラインと接合する地点が南側のくびれ部になる可能性が考えられる。これら両くびれ部間の距離、11.8mがくびれ幅であろう。また、墳端外側のテラスについては、第7トレンチで想定した墳端から周溝側では、想定した墳端から緩やかな角度で周溝上端ラインまで続いており、その距離は2.2mほどある。この間に墳端外側のテラスが存在していた可能性が高いものと考えられる。一方、南側の第4トレンチでも、想定したくびれ部の墳端から周溝上端まで最大で2mほど離れており、その間は削平を受けているものの緩やかな斜面が続くことから、この間にテラス面が存在していたとみられる。

前方部については、前方部南側に第13トレンチ、北側に第11トレンチ、前端部側に第5・8・12トレンチが設定され発掘調査が行われた。その結果、前方部北側の第11トレンチでは、墳端と考えられる痕跡と周溝が確認できた。トレンチの土層堆積状況をみると、トレンチの墳丘側の端から0.6m程外側まで墳丘盛土と考えられる層がみられることから、この位置が墳端である可能性が高い。北側くびれ部で説明した地点から、この地点を通るラインが前方部北側の墳端ラインであると考えられる。また、北東側に隣接する第12トレンチでは、L字状に設定されたトレンチの角においてトレンチとは逆方向に墳丘盛土の痕跡がL字状に確認されている。つまり、少なくともこのラインが前方部北側の隅角である可能性が高い。さらに、この墳丘盛土が確認された墳丘西側(主軸側)ラインをもとに考えると、少なくともこのラインが前端部の位置となる可能性がある。これらの復元した墳端ラインから、北側の隅角について考えると、復元した前端ラインと前方部北側の復元した墳端ラインが交わる位置が隅角になると想定できる。一方、前方部南側の墳端ラインについては、先ほどくびれ部の南側でも述べたように、くびれ部から第13トレンチで指摘した墳端を通るラインが前方部南側の復元した墳

端ラインであると考えられる。この復元した前方部南側の墳端ラインと前端ラインとが接する地点が前方部南側の隅角となる可能性が想定でき、隅角からくびれ部にいたる角度が南側の隅角の方が緩くなる。つまり墳丘主軸の北側と南側で、左右非対称の平面観の前方部となる。以上のことから、復元した前方部の両隅角の位置から、前方部長20m、前端幅16mとなり、先述した復元した後円部径までを含めると墳長46.3mを測る規模になると考えられる。また、前方部においても第11・13トレーニングの墳端ラインと周溝までの間に距離があることから、墳端外側のテラスが存在していた可能性が高い。特に北側の第11トレーニングでは、墳端と周溝上端までの間が1.5mと離れていることから、墳丘北側については1m程のテラスが全周していた可能性が高いものと推測できる。一方、第13トレーニングにおいては、墳端と周溝上端までの距離が0.3mと短い。また、先ほど述べた南側の隅角の角度が緩い点も踏まえると、南側の方が台地の上端ラインに近接していることから、地形的制約が要因となったためと考えられる。

これまで、各部における復元案について、測量調査と発掘調査の成果を合わせた古墳の復元案として述べてきた。以上をまとめると、墳長46.3m、後円部径27.2m、くびれ幅11.8m、前方部長20m、前端幅16mを測る規模で後円部、前方部とも二段築成の前方後円墳であったと考えられる。また、墳端と周溝の間には、くびれ部の範囲だけ広くなるが、1m程のテラスが全周するように存在していた可能性がある。

以上、墳端外側のテラスから墳丘までの復元をしてきたが、周溝についても、第1～4・7・9・11トレーニングで確認できたため、復元案を示したい。周溝は、各トレーニングで検出した周溝底部の下端で復元した範囲と発掘調査で検出した周溝の上端で復元した範囲をそれぞれ示した。周溝の形は馬蹄形で、検出した周溝上端をみると後円部の墳丘主軸側で3.9m、北側くびれ部が5.4m、南側くびれ部で4.1mと3地点で周溝の幅が広くなる形態となる。また、周溝底部についても、墳丘主軸の後円部側の周溝底部の標高は、251.90m高く、墳丘南側では250.900～251.500mの0.6mの差で推移し、墳丘北側については、250.480～251.700mと1.22mの差で前方部隅角に向けて標高が高くなる。前方部に設定された第11・13トレーニングでは、隅角に近づくにつれて周溝の深さが浅くなっているのが確認されており、築造当初に前方部前端に周溝がめぐっていたかどうかは不明である。

(玉川)

【引用・参考文献】

- 清水宗昭・田中裕介 1998「道ノ上古墳」『大分の前方後円墳』大分県文化財調査報告書第100輯 大分県教育委員会
田中裕介 1998「立野古墳」『大分の前方後円墳』大分県文化財調査報告書第100輯 大分県教育委員会
田中裕介 2019「豊後大野市の古墳群からみた地域社会と首長像」『古墳時代阿蘇ルートの研究』熊本大学文学部
玉川剛司 2004「小熊山古墳測量調査」『文化財研究所年報』別府大学文化財研究所
玉川剛司 2012「小坂大塚古墳測量調査について」『豊後大野市内遺跡発掘調査概報3』豊後大野市教育委員会
玉川剛司 2014「諫生古墳群測量調査について」『豊後大野市内遺跡発掘調査概報4』豊後大野市教育委員会
玉川剛司 2015「秋葉鬼塚古墳墳丘測量調査について」『豊後大野市内遺跡発掘調査概報5』豊後大野市教育委員会
玉川剛司 2016「坊ノ原古墳墳丘測量調査について」『豊後大野市内遺跡発掘調査概報6』豊後大野市教育委員会
玉川剛司 2019「重政古墳墳丘測量調査について」『豊後大野市内遺跡発掘調査概報9』豊後大野市教育委員会
諸岡 郁 2002「道ノ上古墳」『三重地区遺跡群発掘調査概報VI』三重町教育委員会
諸岡 郁 2017「坊ノ原古墳」『豊後大野市内遺跡発掘調査概報7』豊後大野市教育委員会
諸岡 郁 2018「坊ノ原古墳」『豊後大野市内遺跡発掘調査概報8』豊後大野市教育委員会

(2) 確認調査の結果

2次にわたる各トレンチ調査の結果、墳丘表面に葺石は全くみられず、転落した痕跡もないことから、当初から葺石を使用せずに築造された墳丘であったと思われる。第6・10トレンチで確認できた礫は、元は葺石であった可能性を残しつつも、後世の遺構であると判断される状況である。従って当初地表面でみられた河原石は後世に運び込まれたものと考えられる。

墳丘の周間に周溝が設けられているが、前方部の前端には設けられていないことが確認できた。1次調査の時点では第5トレンチの溝状遺構が周溝として墳丘全周囲に巡らせてあるとも考えられたが、前方部前端側の溝は周溝とは接続しないことや、中世の遺物を伴うことから古墳とは別の遺構であると判断した。従って周溝は後円部から前方部側面までの範囲で馬蹄形状に設けられたものと考えられる。溝底部の標高については1次調査でもみられたとおり、後円部南東側の主軸付近がやや高めである以外は水平に近く、地形に沿って掘り込まれているが、墳丘北側より南側がわずかに低く高低差があることから、向原川沿いの平野からの側面観を意識した築造と考えられる。

後円部からくびれ部にかけて周溝との間に2m前後の平坦面が各トレンチで検出しているが、墳端部のテラスとして墳丘周囲に存在したものと思われる。葺石がないため築造当初から設けられたテラスか、あるいは後世の掘削面か判別は難しいが、三重地域の古墳と共通した築造として設けられた可能性が高いと思われる。

主体部は箱形石棺である以上の詳細は知られてないが、調査トレンチから出土した土師器から、墳丘形態での推定とほぼ一致する前期後半頃の築造年代が考えられる。

(諸岡)

第2節 漆生古墳群

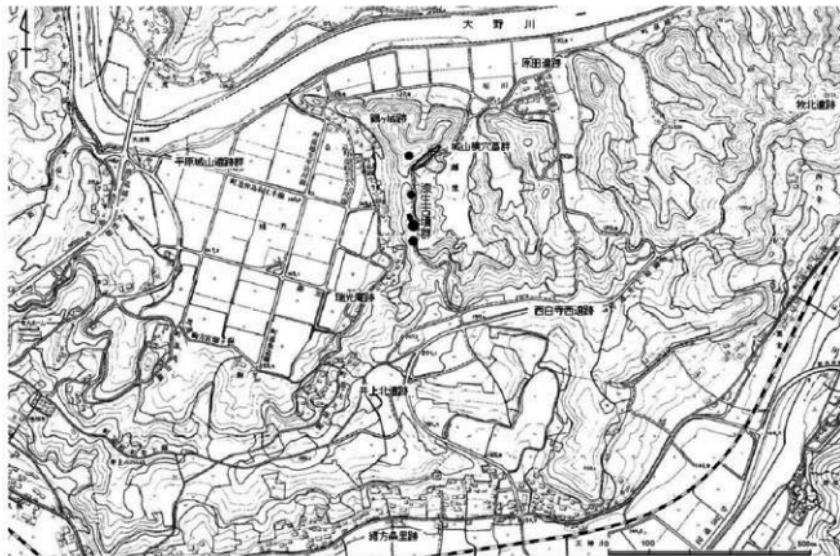
豊後大野市緒方町に所在する漆生古墳群は、調査以前から前方後円墳1基、円墳らしき古墳2ないし3基からなることが知られ、城山古墳には箱形石棺の部材が散乱し、大久保2号墳には舟形石棺の蓋石が露出していた⁽¹⁾。舟形石棺の形式から、大久保2号墳は墳形が不明瞭ながら古墳時代中期の古墳と想定され、前方後円墳の大久保1号墳はその墳形から前期にさかのぼる可能性が考えられていた。1991(平成3)年の発見の事情や1992(平成4)年の最初の測量と実測調査の成果は、神田高士・後藤幹彦・田中裕介・諸岡郁・渡辺幹雄「緒方町越生にある漆生古墳群の観察」『緒方町立歴史民俗資料館年報』2 1992にまとめられている。

以上の古墳群は古墳時代前期から中後期に至る、きわめて狭小な地域を長期にわたり継続した古墳群であると考えられ、その内容は豊後大野市の古代史解明の貴重な資料であると考えられたが、古墳群全体の墳丘測量図や各古墳に露出する石棺とその正確な位置、副葬品などのデータの蓄積がなく、史跡として保存していくための基礎資料の収集が急務であると考えられた。そこで重要遺跡の範囲確認調査を実施することにした。

1. 立地と環境

緒方町越生区の大野川沿岸の沖積平野を見下ろす丘陵上に所在し、標高は182~189mで平野とは約40mの比高差がある。丘陵には凝灰岩質の崖面が隨所に見られ、南北方向の尾根状に連なる地形となっており、その頂部に4基の古墳群が並ぶように築造されている。緒方町域には緒方川沿岸に広大な沖積平野(緒方盆地)が古墳群より700m程南側に広がっているが、この古墳群は緒方盆地から視認できる位置ではなく、狭小な大野川沖積平野である越生地区からの視認を意識した立地環境といえる。

(諸圖)



第201図 漆生古墳群周辺地形図(1/12000)

2. 調査の経過

調査は豊後大野市教育委員会と別府大学考古学研究室の合同調査団によって行われた。

測量調査 発掘調査に先立って2011(平成23)年11月23日より、漆生古墳群全体の測量調査を開始し、2013(平成25)年12月8日の第2次調査の直前まで、約45日間を費して完了した。

第1次発掘調査 2012(平成24)年度冬 最初は古墳であるか否かを慎重に確認するところから調査を開始した。大久保1号墳では後円部の第1トレンチから後円部には尾根線を切断する狭い溝を介して葺石がふかれており、一段目平坦面も確認された。第2トレンチからびれ部が検出され、前方後円墳であることが実証された。葺石は人頭大の円礫がもちいられ、この丘陵が凝灰岩からなる丘であることからみて大野川から採集されたものと容易に推測された。惜しむらくは前方部前端の確認を目的とした第3トレンチにおいては、後円部やびれ部のような明瞭な墳端列石が発見されず、課題を残した。一方古墳かどうか定かではなかった大久保3号墳では大きな成果があった。第2トレンチで、中心主体となる硬質凝灰岩製の蓋石が発見され、周囲にはベンガラの塗布が行われていた。一度蓋石を開いた再開棺の痕跡も見つかり、葺石はなかったが墳端の削平面をみると、径10mほどの円墳であることが判明した。測量調査によって城山古墳が方墳である可能性が指摘⁽²⁾され、発掘によって城山古墳には葺石のない削りだしと一部盛り土による成形であることが判明した。

この第1次調査の結果、古墳群は4基からなり前方後円墳、方墳、円墳とバラエティーに富み、葺石の有無の違いがあることもわかつてき。しかしトレンチからは出土遺物がほとんどなく、土師器の破片がわずかに出土しているのみである。したがって各古墳の築城順序や時期が明確にはならなかつた。

第2次発掘調査 2013(平成25)年度冬 そこで第2次調査は大久保1号墳の規模確定と時期推定の資料を得ることと、2号墳の墳形確定を第一の目的に発掘調査をおこなつた。その結果大久保1号墳では第4トレンチにおいて第1次調査ではつきりしなかつた前方部前端の位置が判明し、墳長は36mとほぼ確定した。大久保2号墳では第1・第2トレンチともに葺石や周溝や突出部は確認できなかつたため前方後円墳の可能性はなくなり、墳丘測量図より方墳である可能性が指摘された。

第1次と第2次調査の結果、トレンチからは出土遺物がほとんどなく、土師器の破片がわずかに出土しているのみであった。したがって各古墳の築城順序や時期など依然として明確にならなかつた。

第3次発掘調査 2014(平成26)年度夏 第3次調査は大久保1号墳の墳形と段築などの墳丘構造と時期推定の資料を得ることを目的にトレンチを設定し、後円部の第5トレンチでは二段築盛を確認したが、前方部の第6トレンチでは段築はないことが判明した。大久保2号墳の主体部確定を第一の目的に墳頂部に第3トレンチを設定して掘り下げをおこない、その結果主体部は岩盤に直接墓坑をほりこみ、その上に舟形石棺の蓋をかぶせていると予想された。

第4次発掘調査 2014(平成26)年度冬 測量調査によって方墳である可能性が指摘された城山古墳は、中世末の山城による改変の可能性が高まり、その状況を確認するため墳頂部を全面的に調査し、二か所の主体部の残骸を発見した。

第5次発掘調査 2015(平成27)年度冬 以上の経過を踏まえ第5次調査では、大久保1号墳後円部頂の土器の有無、大久保2号墳では石棺の直下を調査した。その結果大久保1号墳の後円部墳頂には砂利敷きが認められたが、土器等は少なかつた。大久保2号墳の墳頂部トレンチでは中心主体の痕跡をかろうじて確認できた。

第6次発掘調査 2016(平成26)年度冬 そこで今回の2016年度の調査では、これらの点を踏まえ、大久保1号墳では後円部頂の土器の有無を昨年度に続いて精査し、大久保3号墳では主体部を調査した。その結果3号墳の主体部は地山に掘りこんだ石蓋岩掘土壙ともいえる主体部であることが判明した。

以上をもって漆生古墳群の調査は終了した。

3. 調査の実施と体制

(1) 測量調査（詳細は第1節）

2011(平成23)年11月から2013(平成25)年12月まで断続的に玉川剛司(別府大学職員)を中心に別府大学大学院生、学部生の協力をもとに電子平板を用いた詳細な測量調査をおこなった。

参加者 苓川太郎、鮎川和樹、有村源喜、井大樹、井樋豪太、栗林沙紀、権丈和徳、木場浅葱、崎谷雄紀、塙見恭平、紫藤美美、高木慎太郎、田中暁、松浦由佳、千原和己、豊崎晃史、中原彰久、橋口貴憲、馬場晶平、藤川貴久、宮田滋、村田仁志、和田旭史

(2) 第1次調査 2012(平成24)年度冬

発掘調査 現地調査は諸岡都(豊後大野市教委)、田中裕介(別府大学文学部教授)を主担当者に、上野淳也(別府大学文学部助教)、玉川剛司(別府大学職員)が副担当者としてあたり、以後この体制で第6次調査までおこなった。2012(平成24)年12月18日から城山古墳と大久保1号墳のトレンチ調査を諸岡担当で先行し、12月21日～23日、26～28日には別府大学の遺跡調査実習(集中講義)の学生が参加し、翌2013(平成25)年1月4～6日と13・14日に補足調査を行い、今年度の調査を終了した。参加者は以下の通り。

作業員 高山憲章、高山幸治、首藤満生、羽田野健夫、高山尉

学生 権丈和徳、崎谷裕紀(以上大学院1年)、宮田慈(大学院研究生)、紫藤美美、山本圭祐(以上学部4年)、松浦由佳、千原和己、川上友菜、倉崎社志、崎野祐太郎、島圭史、杉本直之、武田典子、森脇大道、山本真央、幸義人、曹承喜、大谷亨、菊池真央子、久保千明、久保山真理早、田中弥来、榎崎泰志(以上学部3年)、木場浅葱、藤川貴久(以上学部2年)、鮎川和樹、村田仁志(以上学部1年)、山口将史(別大OB) また発掘中には、杉井健(熊本大学文学部教授)、高橋克壽(花園大学文学部教授)、下村智(別府大学文学部教授)、吉田和彦(杵築市教委)の助言を現地で得たほか、赤色顔料の同定を平尾良光(別府大学文学部教授)に依頼した。

(3) 第2次発掘調査 2013(平成25)年度冬

2013(平成25)年12月18日から大久保1号墳と2号墳のトレンチ調査を諸岡担当で先行し、12月21日(土)～23日(月)、26日(木)～28日(土)には別府大学の遺跡調査実習(集中講義)および考古学研究室の学生が参加し、翌2014(平成25)年1月3～5日と28日に補足調査を行い、今年度の調査を終了した。参加者は以下の通り。

作業員 高山憲章、高山幸治、首藤満生、波多野健夫、佐藤政治

学生 佐藤理恵(大学院1年)、小川宗一郎(学部4年)、井大樹、江口寛基、久我一夫、後藤愛優美、中島健太郎、中嶋小春、藤川貴久、松井琢磨、松圓菜穂(以上学部3年)、鮎川和樹、小中原南、鮫島葵、中原彰久、松下由香里、村田仁志(以上学部2年)、有村源基、安藤佳奈子、塙見恭平、高木慎太郎(以上学部1年)

また発掘中には、下村智(別府大学文学部教授)の助言を現地で得た。

(4) 第3次発掘調査 2014(平成26)年度夏

現地調査は諸岡、上野、田中を主担当者に、玉川剛司(別府大学文化財研究所)の協力をえて、2014(平成26)年8月3日(日)、7日(木)から12日(火)には別府大学の遺跡調査実習(集中講義)および考古学研究室の学生が参加し、9月4日(木)に補足調査を行い終了した。参加者は以下の通り。

作業員 高山幸治、高山尉、佐藤政治

学生 崎野祐太郎、白瀬聖子、園田涼太、千原和己、宮木貴史、山下祐雨(以上大学院1年)、井大樹・中嶋小春、藤井幹也、藤川貴久(以上学部4年)、安部龍之介、鮎川和樹、小中原南、鮫島葵、塙本史晃、中

原彰久、成合修造、松尾知哉(以上学部3年)、井手基子(学部1年)

(5) 第4次発掘調査 2014(平成26)年度冬

現地調査は諸岡、田中を主担当者に、上野、玉川が副担当であたり、2014(平成26)年12月13日(土)調査区の設定、12月20日(土)～22日(月)、25日(金)～27日(日)には別府大学の遺跡調査実習(集中講義)および考古学研究室の学生が参加した。参加者は以下の通り。

学生 崎野祐太郎、白瀬聖子、千原和己、宮木貴史、山下祐雨(以上大学院1年)、上田文華、真謝大地(以上学部4年)、鈴川和樹、岩永悠暉、大矢健太郎、河内花織、後藤春香、小中原南・鷲島葵・田中光子、田上悟大、塚本史晃、中原彰久、浜口螢、松尾光、松尾知哉、松下由香里、村田仁志(以上学部3年)、高木慎太郎(以上学部2年)、井手基子、後藤愛美、時枝杏名、野田千輝、吉岡拓哉(以上学部1年)

また発掘中には、下村智(別府大学文学部教授)の助言を現地で得たほか、赤色顔料の同定を平尾良光(別府大学文学部教授)をお願いした。

(6) 第5次発掘調査 2015(平成27)年度冬

現地調査は諸岡、田中を主担当者に、上野、玉川が副担当であたり、2015(平成27)年12月19日(土)～21日(月)、26日(土)～28日(月)には別府大学の遺跡調査実習(集中講義)および考古学研究室の学生が参加した。参加者は以下の通り。

学生 井大樹、安部和紀、江口寛基、中嶋小春(以上大学院1年)、村田仁志(学部4年)、高木慎太郎、塙見恭平、藤丸紗弥加、片岡翼、川野啓太、窪田優也、松堂正偉、東啓二、片山唯、有村源喜、安藤佳奈子、大原雅哉、倉員秋穂、黒原啓太、佐藤博紀、竹永昂平、野上慧、柳瀬茉希、山脇拓昌(以上学部3年)、井手基子、後藤愛美、時枝杏名、野田千輝、吉岡拓哉、古田矩美子(以上学部2年)、川村有紀、清水昂平、佐伯孝央、前田純子(以上学部1年)

(7) 第6次発掘調査 2016(平成28)年度冬

現地調査は諸岡、田中を主担当者に、上野、玉川が副担当であたり、2016(平成28)、12月22日(木)～24日(土)、26日(月)～28日(水)には別府大学の遺跡調査実習(集中講義)および考古学研究室の学生が参加した。参加者は以下の通り。

学生 大矢健太郎、中原彰久、村田仁志(以上大学院1年)、安藤佳奈子、塙見恭平、高木慎太郎(以上学部4年)、池田亘、井手基子、後藤愛美、時枝杏名、野田千輝、福島力也、古田矩美子、横井直光、吉岡拓哉(以上学部3年)、岡元蓮、川村有紀、佐伯孝央、清水航平、末光博史、田口裕介、前田純子(以上学部2年)、伊藤龍之介、久保園梨左、菅野真由、田川麻衣(以上学部1年)

3号墳の石蓋開棺時には、志賀智史(九州国立博物館)氏に赤色顔料の採取をお願いした。また杉井健(熊本大学)、吉田和彦(杵築市教委)、井大樹(大分県立埋蔵文化財センター)には、現地で助言をいただいた。

地下レーダー探査 2017(平成29)年1月28日 東憲章とDean Goodman 氏の指導の下、田中・諸岡と以下の学生が参加した。

村田仁志、大矢健太郎、中原彰久(以上大学院1年)、吉岡拓哉(学部3年)

(8) 整理と報告書作成

2013(平成25)年度 図面整理とデジタルトレースには権丈、崎谷、佐藤理恵・北原美稀(2013年度大学院1年)の協力を得た。測量調査と発掘調査の成果は概報に速報した⁽³⁾。

2014(平成26)年度 図面整理とデジタルトレースには佐藤理恵(大学院2年)・宮木貴史と千原(大学院1年)が

当たり、玉川剛司(別府大学文化財研究所)の協力を得た。発掘調査の成果は概報に速報した⁽⁴⁾。

2015(平成27)年度 図面整理とデジタルトレースには井・安部・江口・中嶋(大学院1年)が当たり、玉川剛司(別府大学文化財研究所)の協力を得た。発掘調査の成果は概報に速報した⁽⁵⁾。

2016(平成28)年度 図面整理とデジタルトレースには大矢・中原・村田(大学院1年)が当たり、玉川剛司(別府大学文化財研究所)の協力を得た。発掘調査の成果は概報に速報した⁽⁶⁾。

2017(平成29)年度 図面整理とデジタルトレースには塩見・高木・竹永と後藤佳菜(大学院1年)が当たり、玉川剛司(別府大学文化財研究所)の協力を得た。発掘調査の成果は概報に速報した⁽⁷⁾。

2021(令和3)年度 報告書の再構成と執筆をおこなった。

なお第3次調査から第6次調査は日本学術振興会科学研究費基盤研究(B)「阿蘇地域を中心とした古墳時代の九州島における情報伝達・文物交流の実証的研究」(研究代表者:熊本大学杉井健:jp26284122)の助成を受けた。
(田中)

【註】

- (1) 日名子太郎 1929「大野郡古墳横穴調査書」『大分県史跡名勝天然記念物調査報告』第7輯、大分県史跡名勝天然記念物調査会
- (2) その後の発掘調査で、戦国時代の城郭構築で変形され他もので、本来円墳であると判明した。
- (3) 玉川剛司「漆生古墳群測量調査」田中裕介「漆生古墳群第1次発掘調査」『豊後大野市内遺跡発掘調査概要報告書4—平成23年度・平成24年度調査—』2014、p4~12、p13~22 豊後大野市教育委員会
- (4) 千原和己・田中裕介「漆生古墳群第2次調査」『豊後大野市内遺跡発掘調査概要報告書5—平成25年度調査—』2015、p4~12 豊後大野市教育委員会
- (5) 井大樹・安部和城・江口寛基・中嶋小春・田中裕介「漆生古墳群第3次・第4次調査」『豊後大野市内遺跡発掘調査概要報告書6—平成26年度調査—』2016、p4~13 豊後大野市教育委員会
- (6) 大矢健太郎・中原彰久・村田仁志・田中裕介「漆生古墳群第5次調査」『豊後大野市内遺跡発掘調査概要報告書7—平成27年度調査—』2017、p4~14 豊後大野市教育委員会
- (7) 塩見恭平・高木慎太郎・竹永昂平・玉川剛司・田中裕介「漆生古墳群第6次調査」『豊後大野市内遺跡発掘調査概要報告書8—平成28年度調査—』2018、p4~13 豊後大野市教育委員会

4. 墳丘測量調査

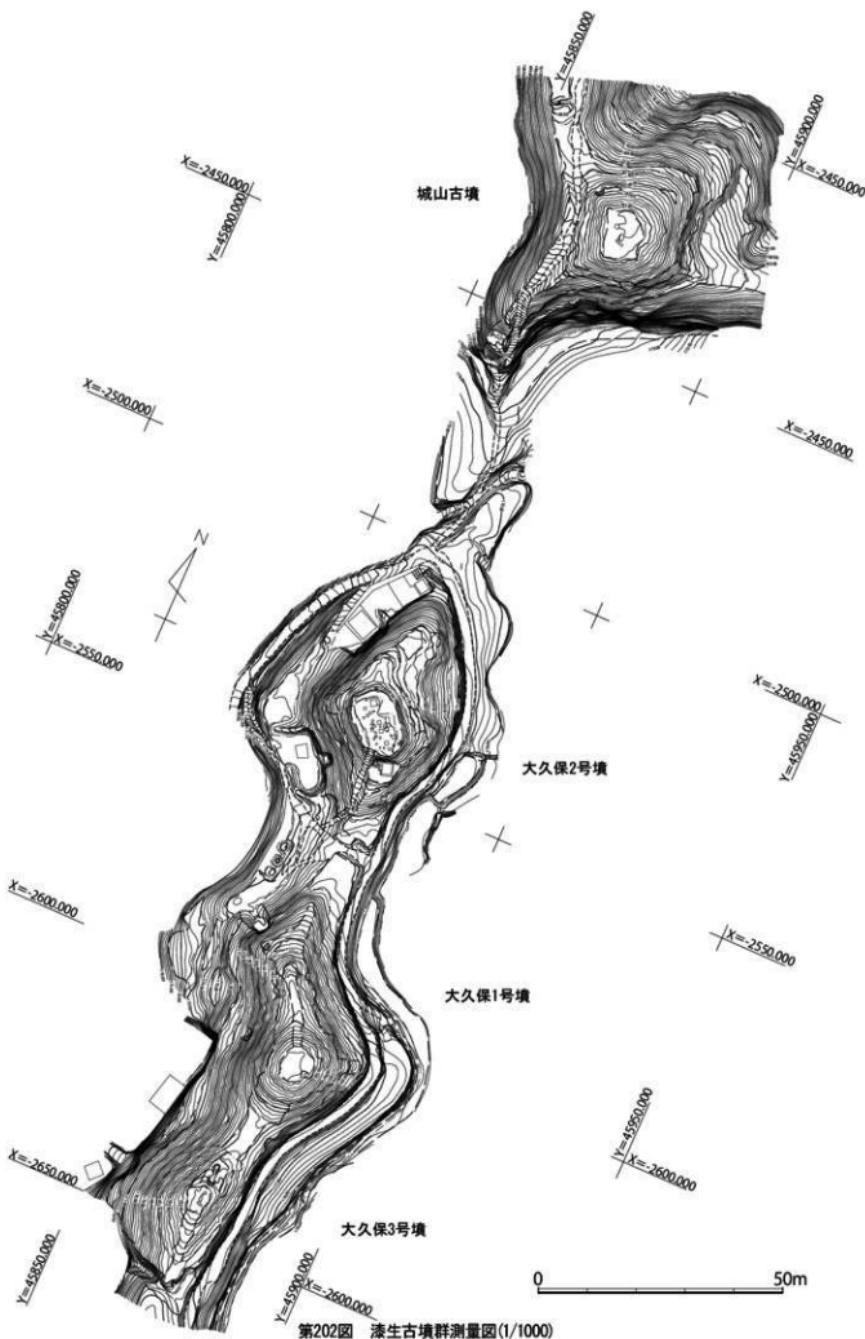
漆生古墳群は、大久保1~3号墳、城山古墳の計4基からなる古墳群である。南北に延びる同一の尾根上に築造されているが、尾根が狭く標高が低くなっている箇所があり、南側グループ(大久保1~3号墳)の一群と北側グループ(城山古墳、城山横穴墓群)とが分断された状況で立地している。

漆生古墳群の墳丘測量図については、1993(平成5)年度に大久保1号墳のみ作成された(田中・諸岡ほか1993)。この測量調査は、規模の確認や墳丘形態を確認することを目的としており、25cm間隔の等高線で、等高線の標高については墳頂部の最高標高を0mとしたものであった。

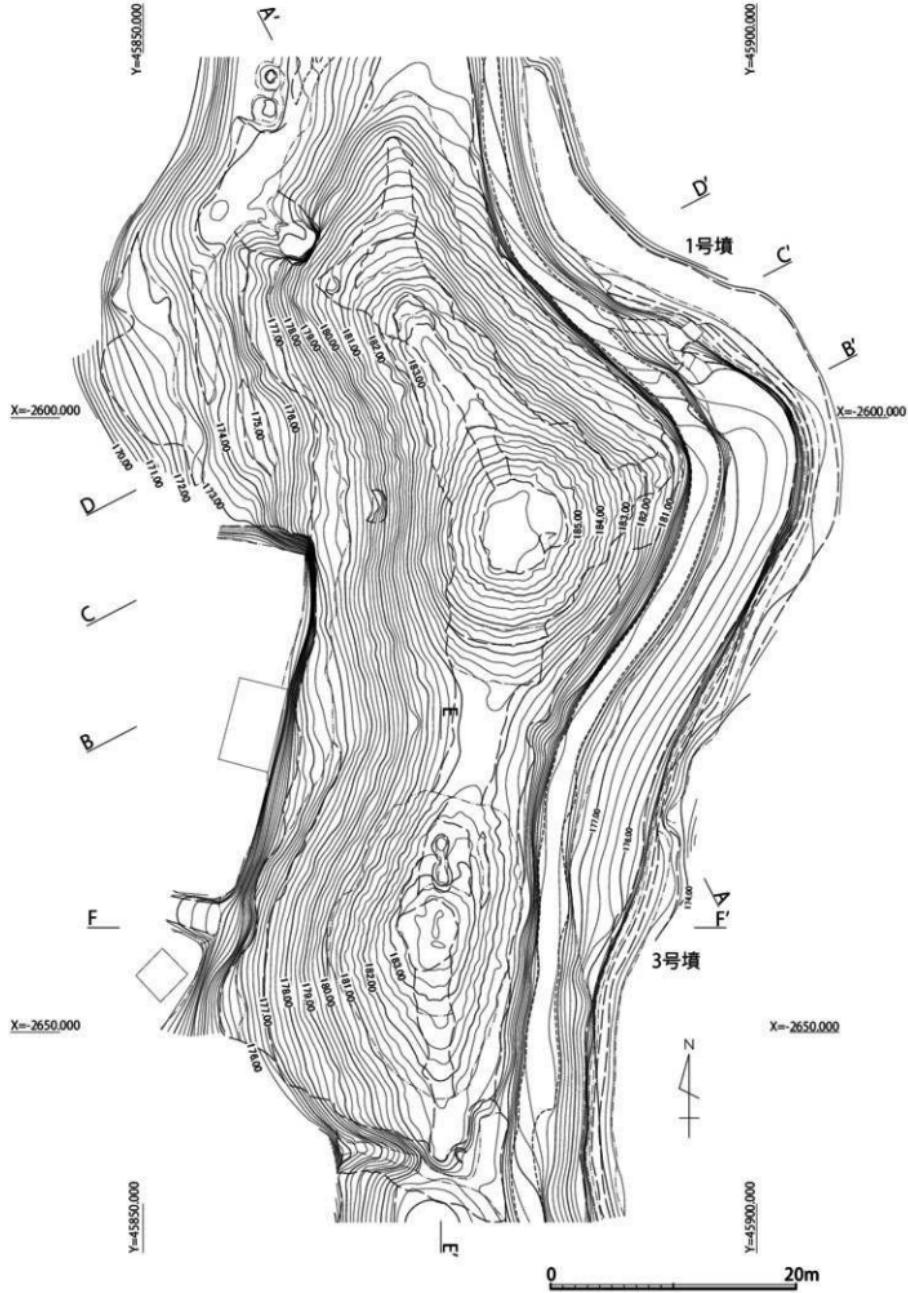
豊後大野市では、2010(平成22)年度より市内に所在する前方後円墳の精緻な測量図の作成(2012玉川)と、規模確認のための発掘調査を目的とした総合調査を実施しており、その一環として、漆生古墳群の各古墳の墳丘規模等を確認するための発掘調査を実施することになった。そこで、発掘調査に先立ち、あらかじめ豊後大野市が設置した世界測地系の座標を使用し、デジタル機器を用いて4基の古墳の墳丘測量調査を行った。

(1) 調査の内容

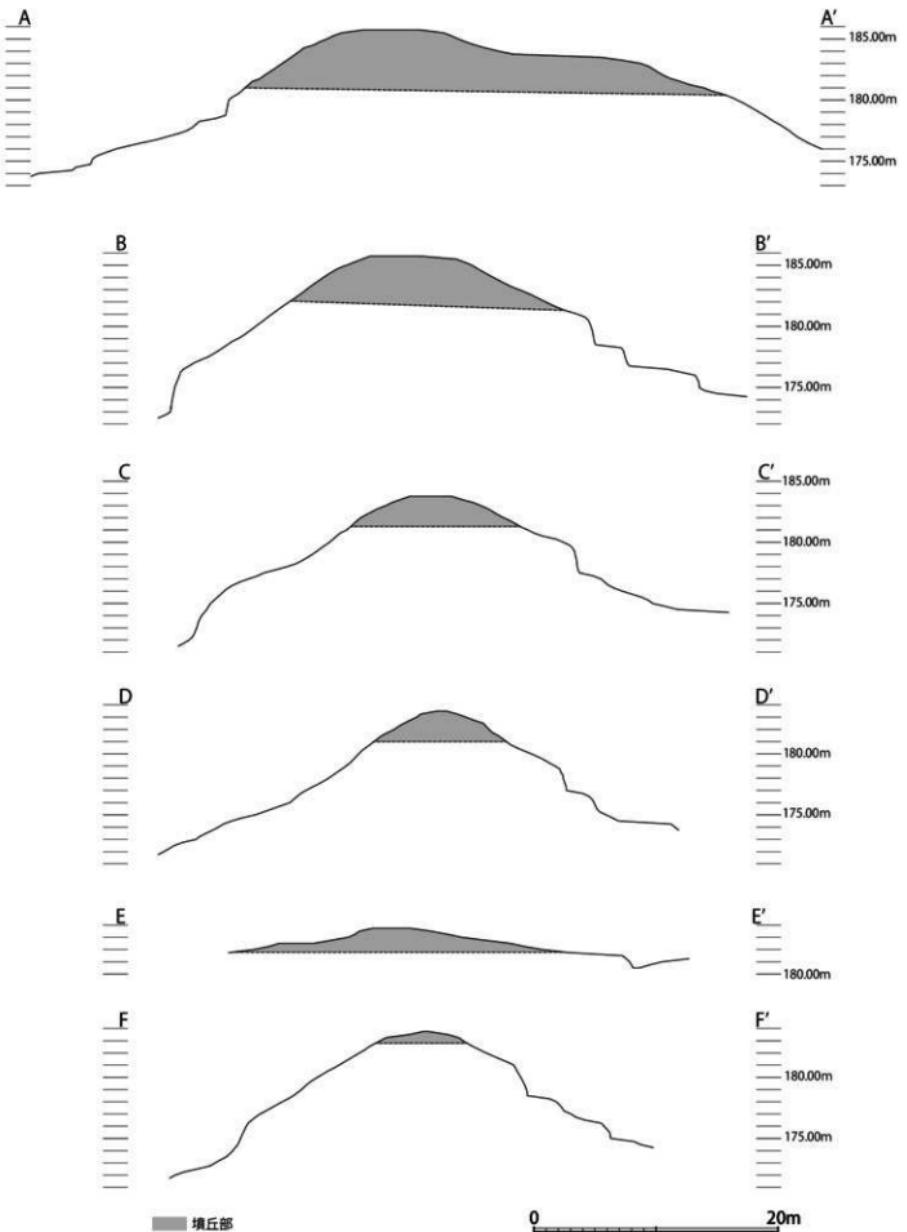
測量方法は変化点測量(2003玉川)で、あらかじめ市教委が準備した計15本の基準点(世界測地系)⁽¹⁾をもとに、必要に応じて補助杭を設定し、測量調査を行った。測量図としては、25cm間隔の等高線である(第202図)。測量調査期間としては、2011(平成23)年11月23日から2013(平成25)年12月8日の実働計45日間の現地調査日数を要した。測量範囲については、立地状況の確認や小坂大塚古墳でも問題となった墳丘の視認性の観点



第202図 漆生古墳群測量図(1/1000)



第203図 大久保1・3号墳測量図(1/400)



第204図 大久保1・3号墳縦横断面図(1/400)

から、広範囲の測量が必要であると考え、墳丘及び周辺地形を合わせて10,372.0976239m²の範囲におよんだ。計測点は、総数で13,972点であった。以下、調査の成果について述べていきたい。

(2) 大久保1号墳(第203・204図)

古墳群の南側から2つ目の古墳で、北側の2号墳と南側の3号墳との間に立地する古墳である。本古墳群では、唯一の前方後円墳で、後円部を南東側に向けて築造されている。以下各部の詳細について記載したい。

後円部 後円部西側については、南側の尾根稜線西端から墳頂部付近を通り、くびれ部にかけて崩落ラインが見られる。その下位の墳丘傾斜面については急傾斜となっており、明確な墳端ラインは認められない。後円部東側については、南側から北東にかけて里道造成に伴う掘削により墳丘が崩落しており、墳端は確認できなかった。また、東側で確認した墳端ラインよりくびれ部にかけても後世の改変によって、墳端ラインが確認できなかつた。

しかし、尾根稜線に接する後円部南側と、後円部東側の一部については、墳頂部から墳端までの等高線の間隔が同間隔であることから、墳丘斜面が良好に遺存していると考えられる。これら2つの範囲を詳細にみていくと、後円部南側の尾根稜線に接する幅約6.3mの箇所については、標高182.250mの等高線に平行するように墳端ラインがみられ、東側についても標高181.250mの等高線に沿って幅約2.2mにかけて墳端ラインが確認できた。この2箇所を結ぶ径25.4mが後円部径であると考えられる。

段築については、墳丘斜面が良好に遺存している南側斜面の標高183.750m～183.000mの等高線に沿ってテラス面がみられる。また、同じく東側についても同標高の等高線に沿って確認できることから、二段築成であると考えられる。

墳頂部については、平坦で等高線も乱れもなく、径6.9mの円形を呈している。最高標高は185.870mで、南側の墳端から測ると後円部高は3.6mである。

くびれ部 墳丘東側については、後円部から続く崩落ラインが前方部まで延びており、明確な墳端は確認できない。また、西側についても同様で、後円部から続く崩落ラインが前方部まで続き、明確な墳端が認められなかつた。しかし、両側の等高線を見ると、前方部から直線的に続くラインが後円部に向かって緩やかに広がっている。これら等高線が広がりはじめる地点が、西側の標高180.000mの等高線と第204図の横断面C-C'が接する付近で、この地点を墳丘主軸で反転復元した地点間の13.6mがくびれ幅であると考えられる。発掘調査による確認が必要となろう。

墳頂部については、くびれ部から後円部にかけて、等高線の大きな乱れもなく、幅2mほどの隆起斜道が確認でき、良好に遺存しているものと考えられる。くびれ部の最高標高は184.077mで、くびれ部墳頂高は、1.83mであった。

前方部 墳丘東側及び西側については、くびれ部から続く崩壊ラインが隅角まで延びているため、前方部幅については不明である。また、前端部付近については、後世の削平や風倒木痕等により、墳端としての明確なラインはみられなかった。しかし、180.000mの等高線と平行に墳端と考えられる幅3.6m程の下端の傾斜変換線がみられ、このラインを墳端ラインとすると、17.5mが前方部長となる可能性が考えられる。また、前端幅については、両くびれ部とこの墳端と考えられるラインを延長し接する地点間の距離が15.7mを測り、この数値が前端幅であるものと推察できる。前端部についても発掘調査による確認が必要であろう。

段築については、前端部の墳端ラインよりも上位に、テラス状の平坦面が見られることから、二段築成の可能性がある。前方部墳頂部については、最高標高183.97mで等高線の乱れもなく、くびれ部から前方部端部方向にかけてほぼ平坦であることが特徴である。また、前方部高については、前端部の墳端から測ると2.6m、後円部墳端から測ると1.4mである。



第205図 大久保1・3号墳測量復元図(1/400)

まとめ 以上これまでの各部の状況をまとめると、後円部、前方部ともに二段築成で、後円部径25.4m、後円部高3.6m、くびれ幅13.6m、前方部長17.5m、前方部高2.6mまたは1.4m、後円部径と前方部長から全長41mを測る規模の前方後円墳となると想定した。しかしこれらの規模は、くびれ幅や前端部については明確ではなく、前方部幅についても不明であるため、発掘調査による確認が必要である。後円部の平面形態については、等高線から判断すると築造当初から正円形を保っていない可能性がある。つまり、田中が指摘するように、狭い尾根線上に築造しているため、正円形に築造できなかった可能性が高い(1993田中)。ただし、越生地区の谷からみると、墳丘の段築や周辺の地形等により整然と築造された前方後円墳の側面観であると認知できる(第205図)ため、南から北西にかけての方向から視認させる築造になっているものと考えられる。また今回の測量調査では、墳丘や墳丘の周辺から葺石や表採遺物は確認できなかった。

(3) 大久保3号墳(第203・204図)

大久保1号墳の15m程南側に、南北に延びる尾根の軸線上に築造されている古墳である。墳頂部より北側は、長さ4.6m、幅1.4mの炭窯により掘削されている。また、東側についても里道による削平で墳丘盛土が一部崩落している。墳形については、旧地形の尾根が狹くなっているため、梢円形を呈している。墳頂部については若干の等高線の乱れがあるものの盗掘等の痕跡は見られない。

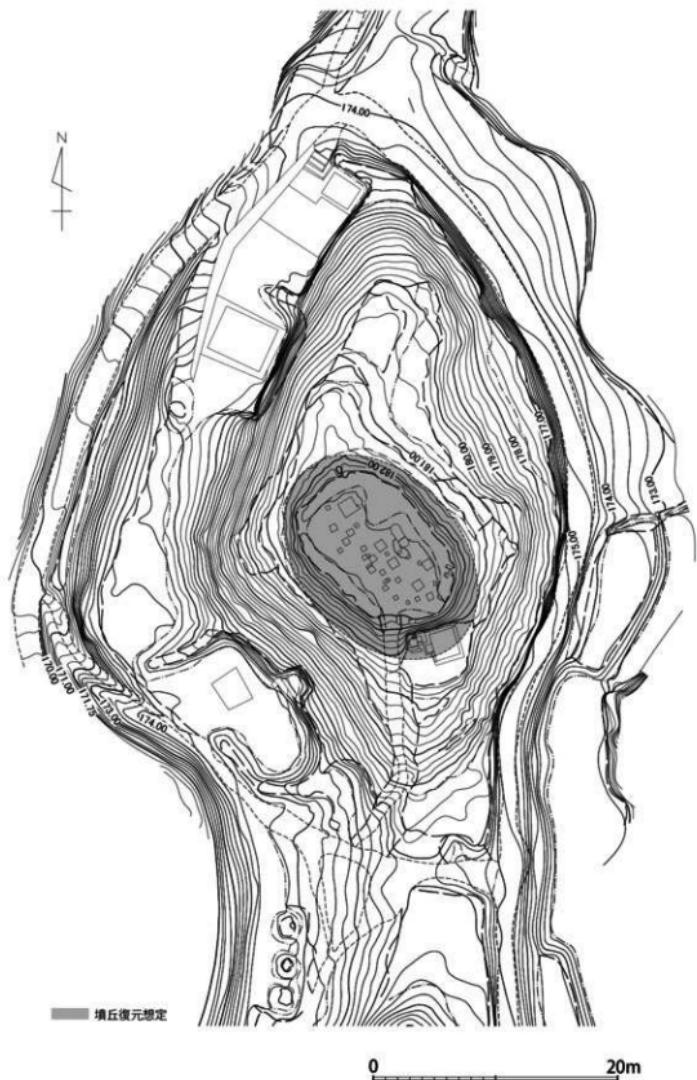
現状の墳端については、北側は墳頂部上端ライン北側より8.5m、南側は墳頂部の上端ライン南側から10.5m外側に下端のラインがそれぞれ見られるが、北側については炭窯により大きく改変を受けているため、墳端になる可能性は低いと判断される。これは、南北の下端ラインを結ぶと25mが最大径となるが、中心が墳頂部の北側上端ライン付近となること。また、南側の下端ラインについても幅1.7mと狭く、墳端である可能性は低いことからもうかがえる。この南側の墳端ラインよりも6.8mほど北側に、下端の傾斜変換線が見られる。墳頂部の中心から、この下端ラインを通る円を描くと径14.4mとなり、大久保3号墳は直径14.4mを測る円墳であると考えられる。墳頂高については、1.1mである。

(4) 大久保2号墳(第206図)

1号墳より40mほど北側に位置し、標高182.000mに位置に築造されている古墳である。墳丘周辺では、西側に墓地造成のため方形区画、北側にも現代の墓地造成区画により、東側についても1号側に延びる里道により尾根が大きく掘削されている。墳頂部においても、近世の墓地造成とともによう削平により、最大長13.8m、幅8.9mの平坦面が形成されている。この墳頂部西側の一角に長さ約2m、幅約0.7mの阿蘇凝結凝灰岩製の舟形石棺の蓋が存在する。また、墳頂部の上端ラインに沿っては、削平した際に出た墳丘土を畔状に寄せた高まりが見られる。墳頂部の最高標高は、182.70mである。墳形としては、墓地造成の削平により北西から南東方向に延びる梢円形を呈している。現状の墳端ラインは、墳丘の北西から東側にかけて、標高181.500mの等高線に平行して確認できることから、北西から南東方向の最大長18m、南西から北東方向の長さ13.3mの規模である。また、南側からの登り口となっている里道の東側には、納骨堂設置の際に削平されたテラス面が存在する。このテラス面は墳丘東側から延びる墳端ラインと接合することから、本来墳端があった箇所を利用し造成されたものと考えられる。ただし、これまで指摘してきた墳端ラインは、墳頂部を削平した際に押し出した墳丘盛土が再堆積したものも含まれると考えられるため、本来の形状については確定ではない。墳丘主軸は南東から北西方向で、主軸に並行するように墳丘の北側斜面と南側斜面の等高線が直線状にめぐることから、方墳の可能性も考える必要がある。今回の復元案の平面形としては、梢円形で復元している(第207図)。墳丘北側では、墳端ラインに接する舌状の高まりが確認できる。この高まりが、本墳丘に伴わない場合は、築造時の尾根稜線となる。しかし、墳丘に伴う場合は、等高線が大きく区曲していることから造出もしくは前方部である可能性も考慮する必要がある。発掘調査による検証が必要であろう。墳頂高については、1.25mである。



第206図 大久保2号墳測量図(1/400)



第207図 大久保2号墳測量復元図(1/400)

(5) 城山古墳(第208図)

古墳群の最北端に立地する古墳で、南北に延びる尾根と東に延びる尾根との分岐点に築造されている。また、丘南側の尾根斜面には阿蘇凝結凝灰岩が露頭しており、城山横穴墓群が造営されている。墳形については、墳丘周辺に削平の痕跡があることから、当初円墳であると考えていた。しかし、隅角が見られることや、隅角間の等高線が直線的にめぐることから、方墳の可能性も考慮して測量調査を行った。

墳丘斜面及び墳端については、墳丘西側では尾根の東側に抜ける里道により墳端及び墳丘の一部が削平を受けている。また、この里道については、古墳が立地する尾根を登り切った188.000mの等高線がめぐる付近で、里道造成に伴う掘削が顕著となる。特に同地点の墳丘側は、大きく掘削されている。この掘削面の東側には削り残しと考えられる幅1m、長さ5.6mほどのテラスが確認でき、さらにその上段にも幅0.4m、長さ3mのテラスが確認できることから、これらのどちらかのテラス下端が墳端、もしくは墳端の痕跡である可能性が考えられる。墳丘北側では、西側斜面と接する付近で風倒木により墳丘盛土が崩落し等高線が乱れているものの、墳端と考えられる下端の傾斜変換線がみられる。この下端の傾斜変換線は、188.000～187.750mの等高線に沿って確認でき、その外側には幅1mほどのテラスが墳丘東側までめぐっていることから、墳端である可能性が考えられる。東側斜面では、削平によって187.000～187.750mの等高線の間で、幅約15mにわたり墳丘が崩落している。しかし、この崩落の上端ラインの南側では、等高線186.000m付近にテラスがみられ、テラス下端ラインから上位の等高線の間隔もほぼ同間隔であることから、墳端の痕跡である可能性がある。墳丘南側については、188.000mの等高線から下は急傾斜面となっており、墳頂部から16m下に横穴墓群が造られている。

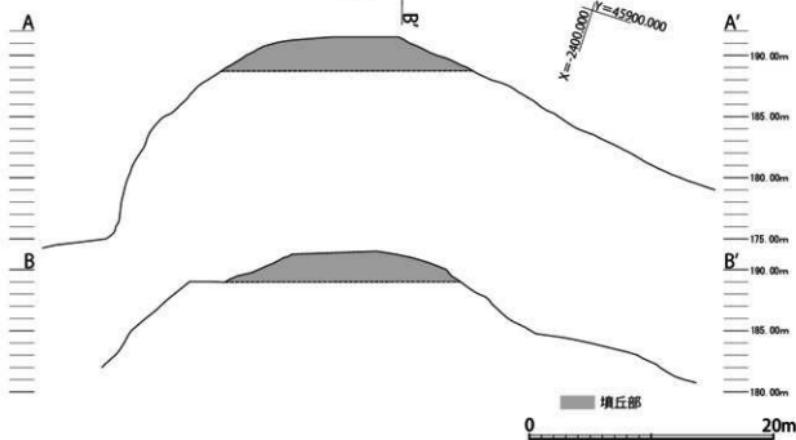
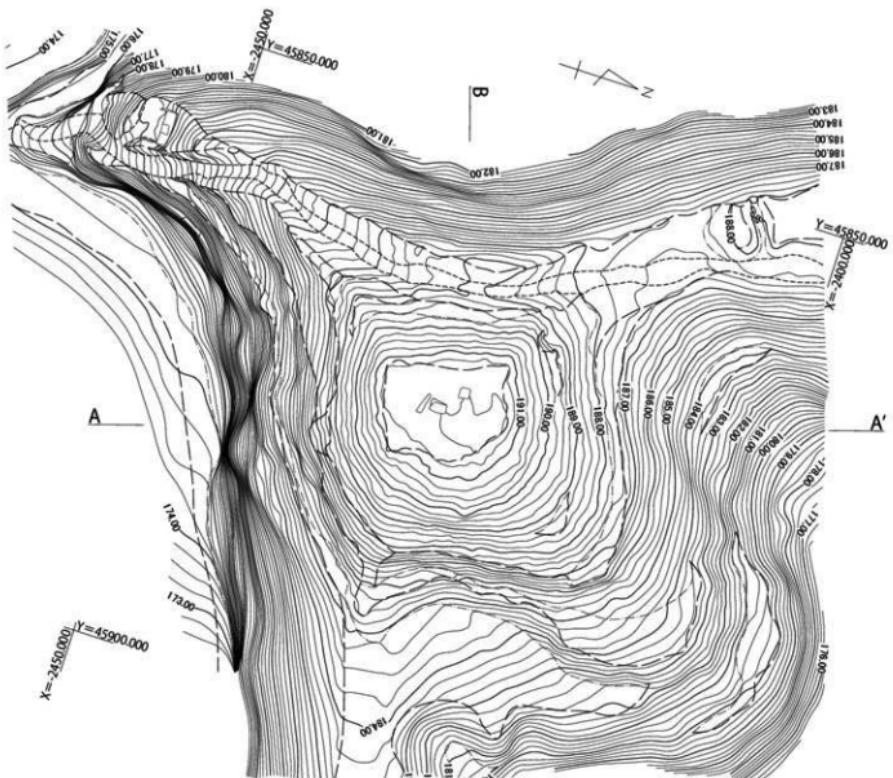
段築については、西側墳丘斜面の標高189.000～189.750mの等高線に沿って、幅1.2mほどのテラス面が、北東側の隅角でも標高188.500～189.000mの等高線に沿ってテラス面が確認できることから、二段築成であった可能性も考えられる。墳頂部の平面形は、東側は円形で、里道のある西側については、等高線と並行するように直線状になっており、半月状の形態となっている。また、墳頂部には、安山岩製の組み合わせ式石棺の石材が散乱しており、改変を受けている。墳頂部の最高標高は191.700mで、現状の墳丘高は3.5mである。

以上の状況から、墳端もしくは墳端の痕跡と考えられる3つの地点から復元案を考えたい。

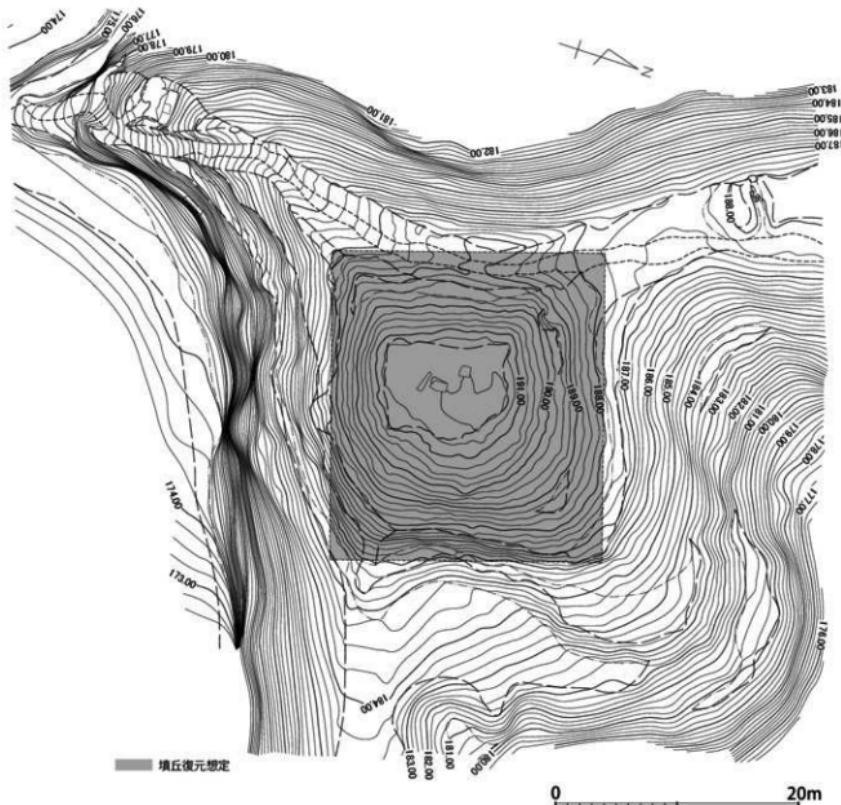
一つ目が、墳丘西側の古墳が立地する尾根に上ってくる里道東側のテラス下端ライン。二つ目は、墳丘北側から東側の187.000～187.750mの等高線の間で確認したテラス下端ライン。三つめは、墳丘南東側隅角で確認したテラス下端ライン。これら3か所の墳端ラインは、隅角状に屈曲していることも考慮し復元すると、南北22.4m、東西25.4mの方墳になると考えられる。なお、この墳形については、測量調査の段階では等高線の状況から方墳である可能性が妥当であると思われるが、墳丘東側の190.000mの等高線から墳頂部にかけて弧を描くようになめぐっており、墳頂部の平面形も東側のみ半円形を呈していることから、円墳の可能性も高いものと考えられる。円墳として復元すると、直径15mを測る円墳となる。本稿では、方墳として墳丘復元案を第209図として提示した。墳形については、発掘調査による確認が必要である。

(6) 測量調査のまとめ

墳丘測量調査の成果とその成果から各古墳の復元案をしめてきた。これら復元案をまとめると、大久保1号墳(第205図)は、全長41m、後円部径25.4m、くびれ幅13.6m、前方部長17.5m、前端幅15.7m、後円部高3.6m、前方部高2.6m(1.4m)の規模の前方後円墳で、後円部・前方部とも二段築成になると想定した。大久保3号墳(第205図)については、古墳の北側と南側で確認した墳端と考えられる傾斜変換線から、直径14.4mを測る円墳であると考えた。大久保2号墳(第207図)は、現状の墳端ラインが、墳丘の北西から東側にかけて、標高181.500mの等高線に平行して確認できることから、北西から南東方向の最大長18m、南西から北東方向の長さ13.3mの梢円形の平面観を復元案として示した。しかし、墳頂部から現状の墳端までの間の等高線が墳丘主軸に並行する



第208図 城山古墳墳丘測量図 ($S=1/400$)



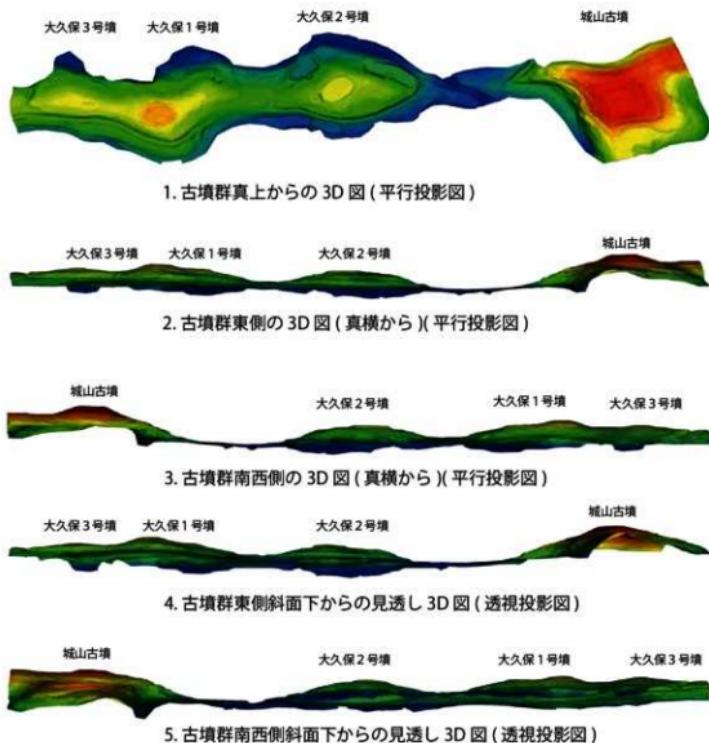
第209図 城山古墳測量復元図(1/400)

ように直線状にめぐっていることから、方墳の可能性も視野に考慮する必要がある。墳頂部と現墳端周辺が近世墓による改変を受けており、築造当初の状況が不明であるため、発掘調査により墳形の確認が必要である。城山古墳(第209図)については、古墳の南西・北西・北東・南東側の墳端と考えられる傾斜変換線の下端ラインから、復元案として南北22.4m、東西25.4mの方墳であると想定した。しかし、墳丘東側の190.000mの等高線から墳頂部にかけて弧を描くようにめぐっており、墳頂部の平面形も東側のみ半円形を呈していることから、復元案の第2案として直径15mを測る円墳となる可能性も考えられる。発掘調査による確認が必要である。

漆生古墳群は、冒頭でも述べた通り、南北に延びる比較的狭い尾根上に築造されていることから、円墳または後円部が正円とならず、楕円形となる可能性が高い。また、前方後円墳である大久保1号墳については、後円部からの前方部にかけての墳丘主軸が地形の制約により北東側に偏っている可能性も考慮する必要がある。しかし、側面観や谷からの視点では、前方後円墳として認定できると考え、第210図の3D図を作製した⁽²⁾。第210図1は真上からの3D図で、2は古墳群東側からの側面観(真横)からの3D図、4は古墳群南西側からの側面観(真横)からの3D図、3は古墳群東側の谷からみた見透し3D図、5は古墳群南西側の谷からみた見透し3D図である。

これらの各視点からの3Dをみると、特に南西側からみた3D図の方は各古墳がはっきりと視認できるのに対し、東側からみると特に1号墳の前方部が後円部よりも奥の位置となるため前方後円墳と認識しづらい。古墳群西側の漆生地区が小さな盆地地形となっており、この盆地内からの視認性を意識した築造となっている可能性が高いものと考える。今後周辺の発掘調査で、同時代の遺跡が発見されることにより、集落遺跡と墓地との視認性についても明らかになることを期待したい。

(玉川)



第210図 漆生古墳群3D図

【註】

(1)規準杭として3号墳の墳頂部にT-2、1号墳の墳頂部にT-3、1号墳の前方部掘にT-4、2号墳墳頂部南側にT-5、2号墳北側にT-6、2号墳と城山古墳の間にT-7～9、城山古墳墳頂部南側にT-10、城山古墳北側にT-11・12の計11本の世界測地系の座標が設置された。各規準杭の座標は以下のとおりである。

T-2:X=-2642.607, Y=45873.905, Z=183.737, T-3:X=-2607.300, Y=45880.243, Z=185.797, T-4:X=-2579.436, Y=45871.238, Z=179.615, T-5:X=-2542.990, Y=45869.008, Z=182.472, T-6:X=-2525.731, Y=45863.289, Z=181.547, T-7:X=-2497.022, Y=45870.466, Z=173.845, T-8:X=-2470.864, Y=45865.862, Z=174.957, T-9:X=-2444.819, Y=45859.444, Z=185.996, T-10:X=-2430.841, Y=45871.836, Z=191.339, T-11:X=-2412.098, Y=4587.446, Z=187.314, T-12:X=-2367.903, Y=45825.649, Z=289.272

(2)座標値のデジタルデータから、TINデータ(近接する座標値から不整三角網生成し、地表面を三角形の集合で表現するデジタルデータ構造。)を作製し、標高値を段階的に色分けした3D図。

【参考文献】

- 神田高士・後藤幹彦・田中裕介・諸岡郁・渡部幹雄 1993 「緒方町越生にある漆生古墳群の観察-大久保2号石棺の実測と大久保1号墳の測量から-」『おおいた考古』第6集 大分県考古学会
- 田中裕介 1998 「大分県の大型古墳」『大分の前方後円墳』大分県文化財報告書 第100輯 大分県教育委員会
- 下村智・吉田和彦・玉川剛司 2003 「古墳におけるデジタル測量の研究-大分県下の古墳を事例として-デジタル測量」『九州考古学』78号 九州考古学会
- 玉川剛司 2004 「小熊山古墳測量調査」『文化財研究所年報』2 別府大学文化財研究所
- 玉川剛司 2012 「小坂大塚古墳測量調査について」『豊後大野市内遺跡発掘調査概報3-平成22年度調査-』豊後大野市教育委員会
- 玉川剛司 2014 「漆生古墳群測量調査について」『豊後大野市内遺跡発掘調査概報4』豊後大野市教育委員会

5. 古墳群の構成と基本層序

古墳群の構成 漆生古墳群は4基の古墳群と一群の横穴墓群からなる古墳群であり、横穴墓群は城山古墳の直下の崖面に6世紀後半から掘削され、そこから7世紀に至る数基の横穴が長い崖面に点在している。最北部の城山古墳は、大久保1~3号墳とは狭い谷で分断された台地の南端に位置している。その北には十分古墳を作る余地があるが、現状では平坦になっている。戦国時代の城郭建設とその後の近世墓地化によって旧状復元することは困難であった。大久保2号墳も狭い独立丘陵のトップに作られたもので、現状は近世墓地によって削平されており、露出した石棺蓋がなければ、古墳であると考えるのは難しい状況であった。大久保1号墳は尾根線左右の墳裾が崩落していると考えられたが、それ以外は前方後円墳の旧状をよく保存していた。1号墳からの南に位置する大久保3号墳は尾根線にあまり高低差なく連続し、わずかな高まりとなっているので当初は自然地形かではないかとおもわれた。

基本層序 古墳群の造られた丘陵は阿蘇4溶結凝灰岩の堆積浸食により形成された丘陵である。古墳が作られた尾根の基盤層はこの凝灰岩層がかなり風化して軟化した土質である。現表土の腐植土層を第1層、その下の上方より流した堆積した自然層を第2層、盛土等の人为堆積層を第3層、基盤の凝灰岩層を第4層として、その層序の間に形成される人為的な面と境界面は各トレンチ毎に記載した。

6. 大久保1号墳（第211図 写真図版42）

1992(平成4)年の測量時に墳長34mの前方後円墳と報告され、特に前方部が低い形状から古墳時代前期にさかのぼる可能性が指摘されていた⁽¹⁾。今回の調査の目的は、墳丘及び周溝などの存在と規模および古墳の範囲確定の資料を得るという保存目的と、あわせて埴輪あるいは土師器等の有無を確認し古墳の築造年代を確定する資料を得る研究目的でおこなった。なお今回の測量調査によって調査前に前方部の前端線が、1992(平成4)年の測量時の見解よりさらに北側に2mほどび、墳丘規模がやや大きくなるのではないかという意見が出された⁽²⁾。

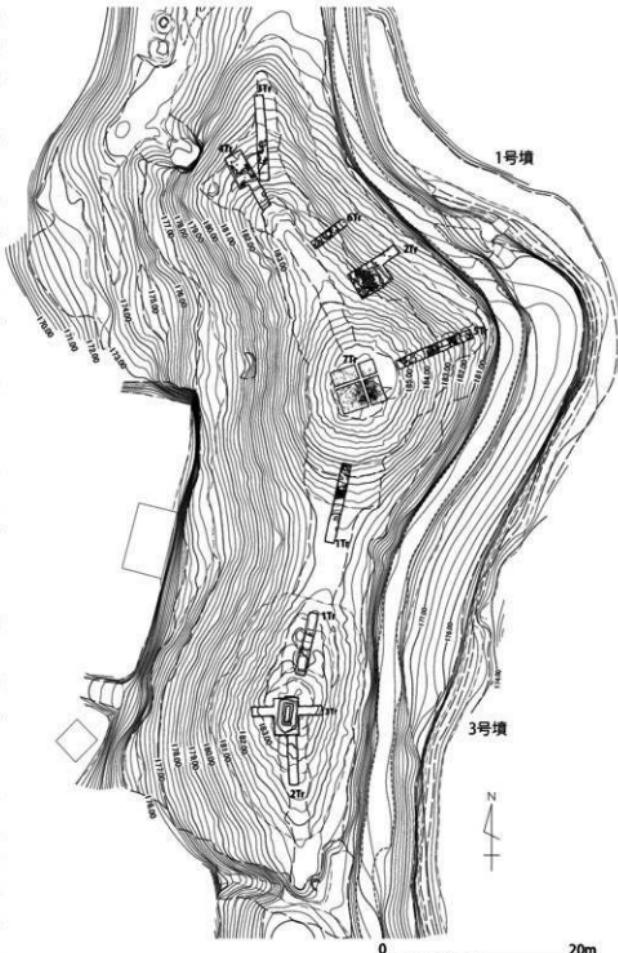
そこで第1トレンチは後円部の墳端確認を目的として1号墳南側に設定し、第2トレンチは墳丘くびれ部の位置を確認して墳形復元の資料をえて前方後円墳であることを実証し、併せて供獻土器の出土を期待した。第3トレンチは前方部の前端の状況を確認して古墳の規模を確定することを目的に設定した。

(1) 第1トレンチ（第212図）

後円部の墳端を追及するために後円部墳丘斜面下部から丘陵尾根に向かって幅1m×8.2mの調査区を設定した。表土である第1層を剥ぐと、すぐに上方から流下堆積した第2a層自然堆積土があらわれ、そこから人頭大～拳大の円礫が多量に混じり始め、葺石が敷かれていたことが判明した。この層を取り除くと移動流出した葺石を多量に含む黒褐色土の第2b層が墳丘斜面に現れ、墳丘外となるその外側では基盤層の第4層が露出し

た。墳丘斜面と尾根線の境界当たりを精査すると、丘陵を断ち切るように第2b層の堆積がひろがり、墳丘と自然の尾根を区画する人工的な溝と考えられた。

溝内堆積土第2b層と流れ落ちた葺石を確認しながら慎重に掘下げると、幅2m弱深さ20cmほどの溝が現れ、その溝の下端標高181.80m付近からから築造当初の葺石が高さ1m程度現れた。墳端の基底石は人頭大の円礫を用い、葺き上げるにつれて円礫は小型化していた。葺石の端部の大型礫は2~3列平坦に並べたのち、角度を変えて葺かれている。この部分だけだが、狭いテラスの可能性もある。標高182.4m付近から上は凝灰岩の基盤層第4層が露出し、183.0m付近から上には再び第2b層と葺石の堆積が現れた。その部分の堆積を取り除くと幅1mほどの平坦面が現れ一段目上の平坦面と考えられたが、二段目の葺石基底部までは達しなかった。第2b層からは土師器破片が少量出土したが、いずれも上位から流出したものである。以上のように前方部南側の一

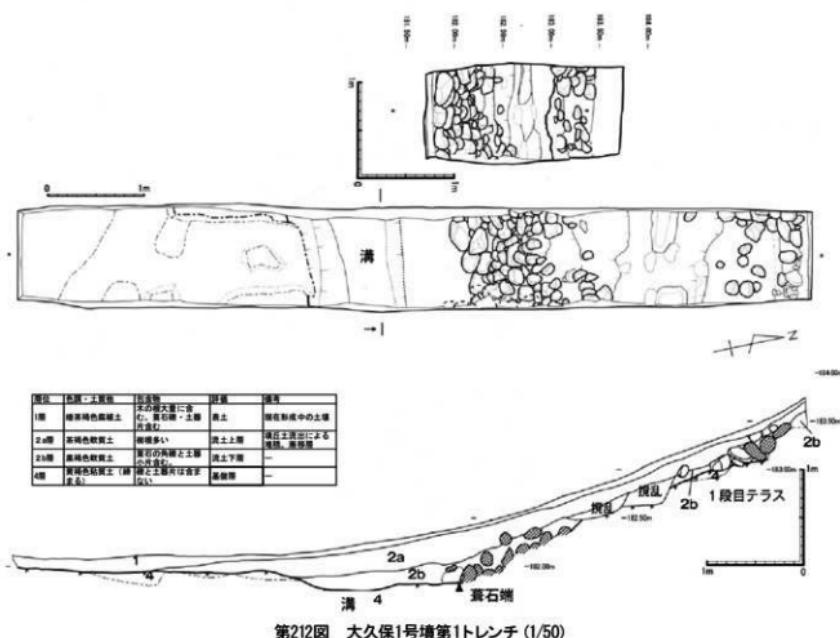


第211図 大久保1・3号墳トレンチ配置図(1/500)

丘と周溝を構築し、斜面に葺石をおこなっている状況と平坦面の存在が判明した。

(2) 第2トレンチ(第213図)

測量図から判断してくびれ部にあたる位置に幅3m×長さ3.7mの調査区を設定し、のちほど下方に幅1m長さ2mのトレンチを拡張した。表土第1層を剥ぐと全体に比較的大型の円礫が大量に出土し、崩落した葺石が堆積していることが明瞭に認識できた。転礫を含むその土層を除去していくと上位の標高182.70m付近から平坦面を



第212図 大久保1号墳第1トレンチ (1/50)

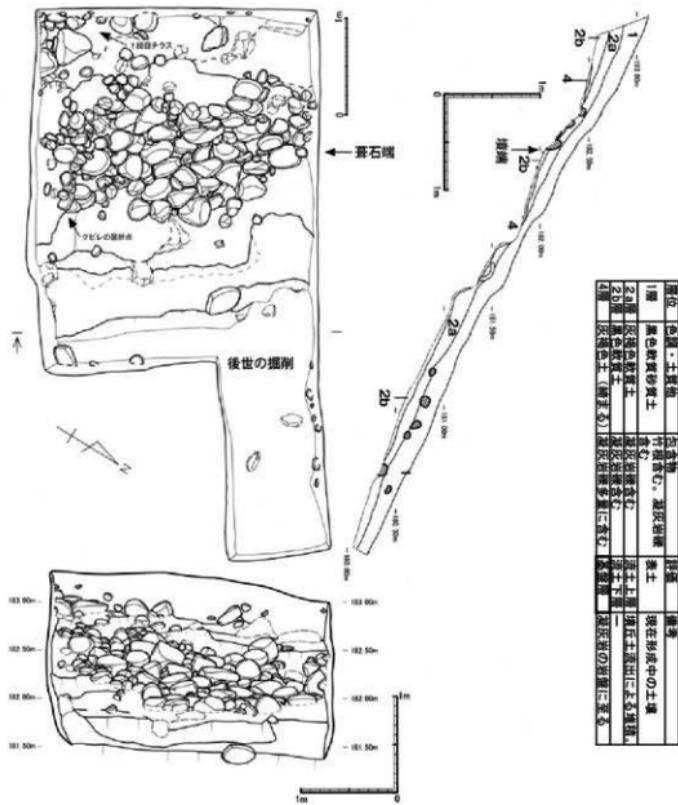
検出し前方部に向かって低く傾斜していた。そこが当初一段目上のテラスと推定されたが、その後の調査で前方部は段築がないと考えられ、一段目テラスは後円部のみと考えられる。前方部墳丘斜面には前方部側には人頭大の葺石が数段重ねられ、標高181.80mあたりに墳端が来るものと推定される。下端の葺石は傾斜がゆるく、一見墳端テラスの敷石ように見えるが、二次的な堆積の可能性も考慮する必要がある。いっぽう調査区南側では礫が小ぶりとなり、基盤層第4層の斜面が露出した。墳丘斜面葺石の基底ラインと基盤層のラインを追うと、異なる大きさの葺石の境界が後円部と前方部の境界となると推定された。この葺石基底が墳端であるかどうかを確かめるためにさらに調査区を下部に延長したが、後世に掘削されたらしく、急に崖上に下がって基盤層が露出した。

葺石上面からところどころ土師器の小片が出土したが、いずれも流れ落ちたものであった。墳丘東側のくびれ部より後円部側は基盤層第4層の凝灰岩を削り出して構築し、斜面に葺石を施している状況が判明した。

(3) 第3トレンチ (第214図)

幅1m×長さ8.8mの調査区を尾根線に平行して、前方部の前端推定位置からさらに外側に長く設定した。これはまずは墳丘および周辺施設の範囲確認を第1の目的にしたことによる。

表土第1層をはぐと、第2a層の墳丘側の調査区上端から2ないし4mに当たる範囲から、円礫が多数顕をだした。いずれも拳大からやや大きめの河原石で、基盤層の中に含まれているものではなく、丘陵下の大野川河川敷などで採集されるもので、人為的に持ち込まれた葺石の一部であると推定された。その範囲の上位と下位では円礫の出土は極めて少なく、第2a層を10cmほど掘り下げるごとに基盤層が露出した。円礫出土範囲を丁寧に掘り下げるごとに黒褐色の第2b層が広がり、斜面が段上の削り出しがなることが判明したが、円礫の下には葺石



第213図 大久保1号墳第2トレンチ (1/50)

構築時の根石等は発見されず、いずれの円礫も二次的な堆積であると推定された。段築の遺構は残っておらず葺石の根石も残っていないので墳端とは断定できなかつたが、再測量調査による墳端推定ラインの一一致し、トレンチ内にはほかに基盤を削り込んだ痕跡はなかつたので、墳端である可能性を考えたうえで課題として残された。なお円礫堆積に混じって数点の土師器小片(第219図2)が出土したが、いずれも流れ落ちたものである。

(4) 第4トレンチ (第215図)

前方部前端に設定した第3トレンチでは斜面の葺石を発見できず、墳端の確定にはいたらなかつた。そのため、第3トレンチの西側に、墳丘主軸に対して平行となる形で、幅約1m×長さ約6.5mの調査区を第4トレンチとして設定し、葺石の検出を行つた。

表土第1a層を剥ぐと、その下の自然堆積層第1b層の中から拳大の円礫が出土し始めた。前年度調査でも、ほぼ同じ高さから葺石が出土していたが、この葺石は実際に列をなしているかの確認を行うため、調査区西方向に幅約1m×長さ約3.3mの拡張を行つた。

第1b層を取り除くと、その下から礫を多く含む流土である茶褐色層2a層と暗茶褐色層2b層、盛土と思われる第3層が部分的に検出された。第3層南端からは基盤層第4層が露出した。移動した葺石を除去しながら第2a層を掘り下げていくと、人頭大～拳大の葺石が検出された。葺石はトレンチに直行して列をなしており、この位置は、前年度調査において第3トレーニングにて不明瞭ながら検出されていた円礫列の延長上にあるため、ここが前方部の前端になると推定される。後円部第1トレーニングにおいて周溝が検出されていたが、今回の調査においては検出されず、周溝は前方部には存在していないことが判明した。

遺物については、数点の土師器片が出土した(第219図1.3)。どれも小さな破片であり、時期決定には用いることはできないが、そのうち1点は古墳時代前期の安国寺式壺頸部片(第219図1)であり、外面に赤色顔料が塗布されている。どの出土遺物も土と共に流れ出たものだと推測され、原位置を保っていない。

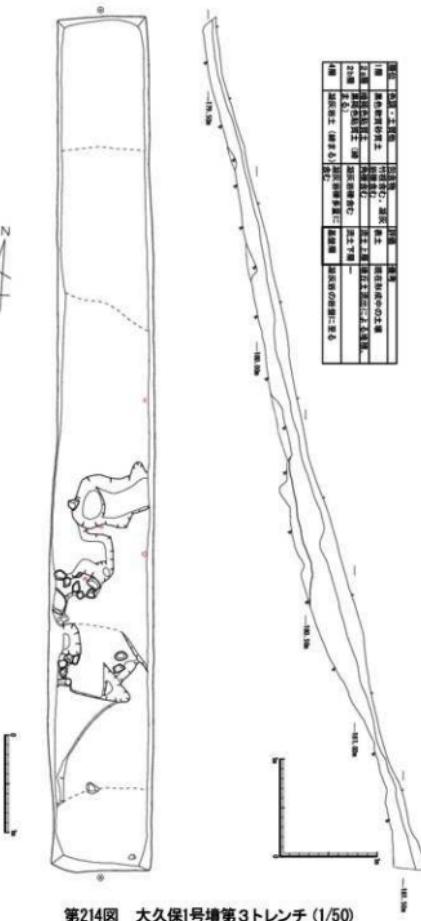
(5) 第5トレーニング(第216図 写真図版1)

後円部の平面形と段築の位置および高さを復元するために、円丘東側に墳端から後円部頂に向かって主軸に直行する形で、北東方向に長さ約8.0m、幅約1.0mのトレーニングを設定した。後円部の墳端確認、段築と葺石施設状況を観察し、あわせて時期比定の可能な遺物を採取するためである。

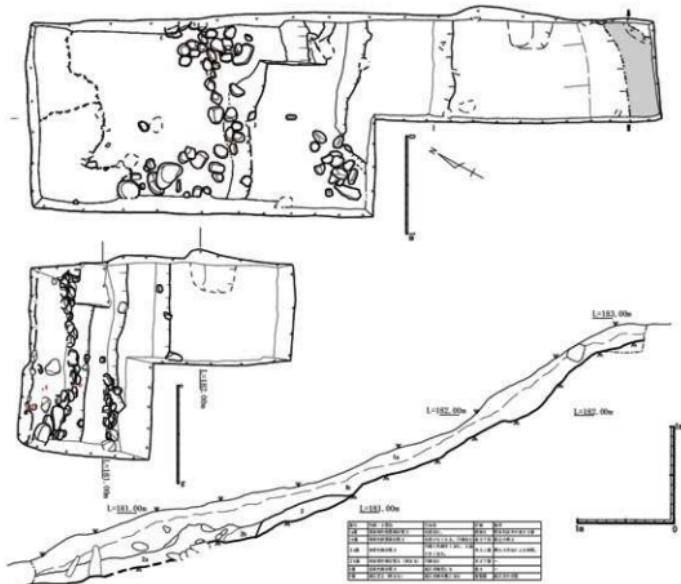
第1層の表土を剥ぐと、流土層第2a、2b層が検出された。第2a、2b層を取り除くと、第2c、2d、2e層が検出された。これらはすべて暗褐色軟質土であり、土の色調と質は微妙に違うが、すべて墳丘盛土の上部からの流出土であると解釈した。以上の流土第2層の下から、2ヵ所の葺石面を検出した。下部の葺石斜面を一段目斜面葺石、上部の葺石斜面を二段目斜面葺石とする。

一段目斜面上位層の第2d層下で、テラス面が検出された。このテラス面の確認を行うためにサブトレーニングを設定し、テラス面を掘り下げると、基盤層の立ち上がりが検出された。そこからテラス面は、盛土で形成されており、下位で検出した一段目斜面の葺石の一部は、第3層上面の盛土上に葺石を施工したと考えられる。

二段目斜面上位層は、墳頂部からの流出土である、第2a、2b、2c層を取り除くと、第4層の凝灰岩礫を含む基盤層がすぐに検出され、既に葺石のほとんどは流出していた。いっぽう一段目斜面では第2d層を取り除くと、



第214図 大久保I号墳第3トレーニング(1/50)



第215図 大久保1号墳第4トレンチ (1/50)

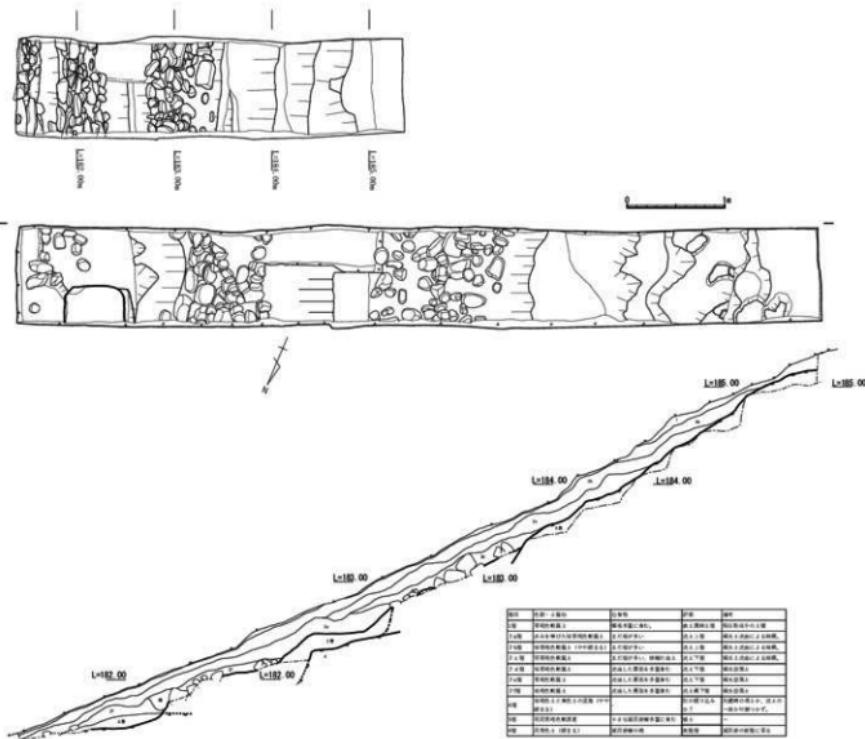
そこでは葺石を検出した。葺石検出面で留めたため未掘であるが、サブトレンチの観察から、盛土第3層が、葺石の下に延びるため、一段目斜面の葺石の直下は盛土が存在すると考えられる。以上のように一段目斜面から二段目斜面の途中部分まで、テラス面下位の葺石施工面下には、第3層の盛土が続くと思われるが、今回の調査では葺石検出面で終了し下部は未掘である。最後に、トレンチ墳端側のA層であるが、これは古墳の造営とは関係が無く後世に掘削された土壤とその埋土であると思われる。この面で幅約0.8mほどの板石を検出した。

以上、第5トレンチの成果をまとめると、大久保1号墳は、基本的に地山成形で墳形を作り、その地山土を用いて後円部の円丘や、テラス面などの墳丘整形を行っているものと考えられる。また、今回の調査で検出したテラス面は、第1トレンチで検出したテラス面、くびれ部に設定した第2トレンチで検出したテラス面とほぼ同一レベルにあることから、これらのテラス面は連続し、後円部をめぐる第一段平坦面を形成すると考えられる。また、墳端部分が別の遺構によって破壊されているため、墳端の厳密な確定ができなかつた。また、遺物は、土師器小片が2点、2層の最下部から出土したが、時期を比定することはできなかつた。

(6) 第6トレンチ (第217図)

前方部側面の墳端及び墳丘構築状況、遺物の確認などを目的に、第6トレンチを前方部左側の斜面に設定した。

掘り下げを進めると、表土第1層と比較的厚い流土第2層の下、トレンチ中央部からまとまって葺石が検出された。葺石面の中央部は木根による擾乱が見られた。その擾乱土壤を掘り下げると、地山の土を使って盛土第3層がなされ、その上に葺石が敷かれていることが確認された。さらにその擾乱土坑を利用して地山まで掘り下



第216図 大久保1号墳第5トレンチ (1/50)

げると、下にはL字形に基盤層第4層を掘削した水平面が認められた。一方、トレンチの前方部墳頂側、即ち葺石面の上位では、表土直下で基盤層が露出していた。つまり前方部側面の造作は、基盤層を一旦L字形に削り出して、その上に盛土で斜面をととのえて、そこに葺石を敷いていることになる。葺石の下端には、基底石と思われる人頭大の川原石を用いた大型の円礫が確認された。その前面は基盤層を削出しており、墳端部であった可能性が高い。またトレンチ上部を墳頂側へ1m拡張して掘り下げたところ、凝灰岩の基盤層と円礫が確認され、前方部斜面には段築が構築されていない可能性が高い。

遺物については、土師器の胴部小片がトレンチ下部の削平部から2点、擾乱土壤から1点出土した。これらは上層から流れ落ちたものではないかと思われる。時期を明確に特定できる破片ではない。

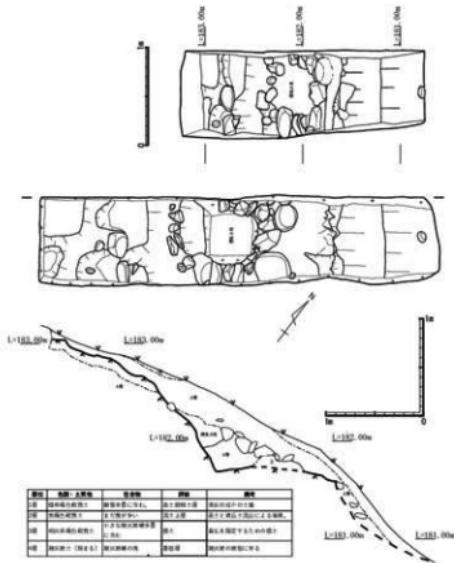
(7) 後円部墳頂調査区(第218図)

墳丘斜面に設定したいすれの調査区でも出土遺物は僅少で、壺形埴輪など墓上に配列する遺物は出土せず、わずかな土師器の小片が出土するのみで、大久保1号墳の構築時期を推定する材料が不足していた。

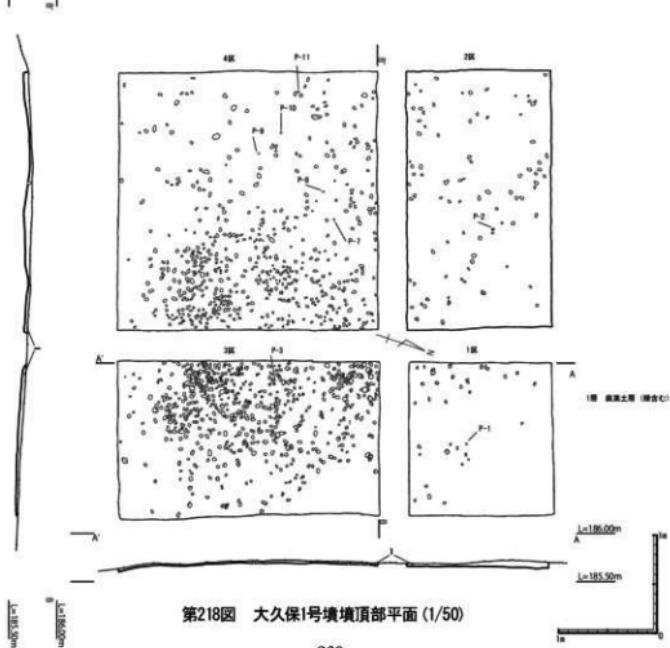
そこで古墳埋葬儀礼に伴う土器の出土がみこまれる地点として、すでに東側くびれ部を調査しており、西側くびれ部は崖状になり調査に危険をともなうので、後円部墳頂平坦面の調査を考えた。平坦面には、後世の乱

掘の痕跡ではなく保存状態は良好と考えられ、現状でも葺石とは異なる小円礫の広がりが確認できるので、その上面を露出して埋葬儀礼の痕跡と土師器の採集を目的とする調査区を設定した。

前方部の中軸線を基準に4.5m×4.5mの方形の区画を設定し、墳丘の中軸線にそって4分割し、表土剥ぎから行った。するとすぐに2・3cm大小の小円礫が露出し始めた。さらに表土剥ぎをすすめると円礫の広がりが存在することが判明し、その上面から3~4cm大小の土器片が見つかり始めた。1区や2区から円礫の出土は僅かであり、3区と4区に特に密集して広がっていることが判明した。円礫の集積状態から、1号墳の主体部は3・4区付近ではないかとも想定される。円礫の広がりも凸凹があることが分かったがのちにこれは木の根による乱れであると判明した。



第217図 大久保1号墳第6トレンチ (1/50)



第218図 大久保1号墳墳頂部平面 (1/50)

こうして墳頂平坦面全体に設定した調査区の全面から円礫の広がりを確認し、墳頂部は全面にわたって小円礫が敷かれていることが判明した。円礫は大久保1号墳が作られた丘陵の土壤には含まれていない。おそらく近隣の大野川あるいは緒方川から採集されたものと考えられる。

遺物に関する限り4区から5点と調査区で一番多くの土師器小片が出土した。調査目標の一つであった土器片については、墓上儀礼の内容を示すような出土状況を示す痕跡はなく、数点の土師器片が点在するのみの状況であった。

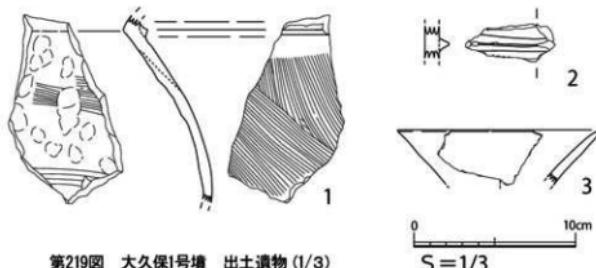
(8) 墳丘構造の調査成果

測量時の前方部を北に向けた自然丘陵を利用して、葺石をもつ墳長41mの前方後円墳という成果に、追加修正して成果を列挙する。①第4レンチの方向と直行して列をなす葺石を、第3レンチで検出された円礫散布の延長とみて前方部前端とするならば、古墳の全長は約36.5mとなる。②南側の後円部端には幅2m弱深さ20cmほどの溝で丘陵と区画されている。③後円部端とくびれ部において、墳丘斜面上の葺石および段築と平坦面の検出、墳丘基底部の葺石の検出などがなされた。④後円部からくびれ部さらに前方部の一段目は基盤層である凝灰岩の岩盤を削り出して整形している。⑤後円部の墳端の高さは後円部南端と東くびれ部で181.80m、第一段目上の平坦面が183.00mとなり、後円部については墳端と一段目平坦の高さを揃えている。⑥くびれ部では葺石に利用された円礫の大きさの異なる範囲があり、施行単位が区別できる可能性がある。⑦周溝が、前方部側では確認できなかった。⑧後円部の第1レンチとくびれ部の第2レンチにおいて、墳端の葺石に狭いテラスが存在する可能性が指摘できる。⑨墳頂部の3区と4区から小円礫がまとまって露出。また礫の広がり方から主体部は埋没後の現状を維持していると推定される。⑩遺物としては土師器片が数点出土したが、墳頂上の墓上祭祀の様相を示したり、時期を特定できる遺物の出土は確認できなかった。

(9) 出土遺物(第219図)

土師器 1は前方部第4レンチ流土第2層出土の土師器、安国寺式系譜の壺の頸部から胴部片。胎土は砂粒多く角閃石を含む在地の胎土。頸部には三角突帯を張り付ける。内面はヨコハケが一部入るが指圧痕の残るナデ。外面はタテハケ(5本/1cm)。焼成良好で明褐色。2は前方部第3レンチ流土第2層出土の壺胴部の三角突帯部分。胎土焼成は1と同じ、ナデ調整で外面に黒斑がある。3は前方部第4レンチ流土第2層出土の土師器小型壺の口

縁部片か? 内
外ヨコナデ調整、
胎土は同じで赤
褐色。



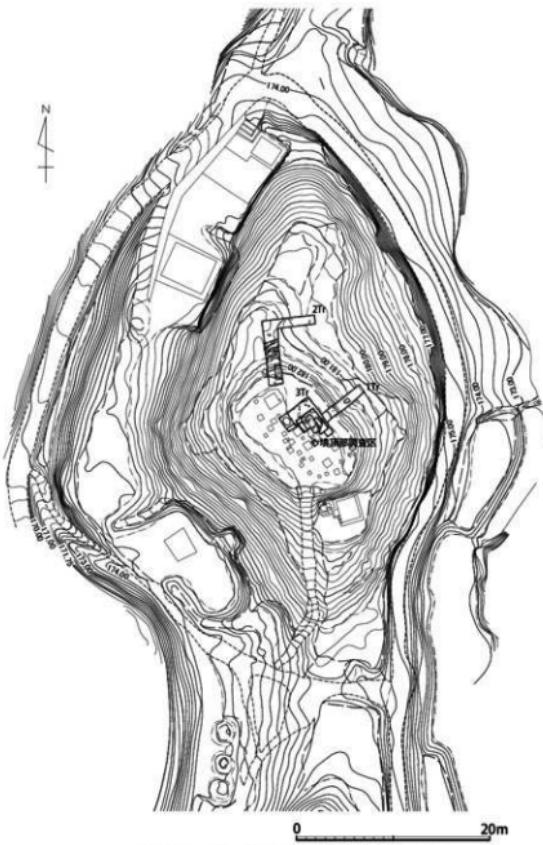
第219図 大久保I号墳 出土遺物(1/3)

7. 大久保2号墳(第220図)

1992(平成4)年の測量調査の際に、南北約14m、東西約10mの円墳と報告された。墳丘測量によって方墳である可能性も指摘されていた。古墳墳頂部は19世紀前半ごろの墓地造成のために大きく削平を受けており、

最大長13.8m、幅8.9mの平坦面が形成されている。墳形や墳長は判明していない。墓地内西側には、側辺部長約2m×小口部長約70cmの凝灰岩製の一石刳貫舟形石棺の蓋部が露出している。

今回の調査では、この棺蓋の原位置の確認および墓坑などの検出のため、棺蓋に隣接する形で墳頂部から東方向へ第1トレーナーを設定した。また、測量図から考えて突出部が存在する可能性もあるため、墳形・墳端の確認および、盛土や葺石の検出のために北側に第2トレーナーを設定し、墳丘の形状および構造の解明を目指したが、葺石がないことを確認した程度で、良好な資料は得られなかった。そこで石棺蓋の露出した墳頂部にトレーナーを入れて棺身の発見と墓壙の確認を目指して第3トレーナーを近世墓地の合間に設定した。その結果、石棺の西側拡張部において整地層から赤色顔料のついた親指大の凝灰岩片が数点出土したので掘り下げを行ふと、赤色顔料を多く含む墓坑埋土が検出さ



第220図 大久保2号墳トレーナー配置 (1/500)

れた。だが遺物は確認されなかった。その下からは、凝灰岩の基盤を刳り貫いて整形された墓坑の残存部が確認された。この墓坑の表面には、赤色顔料が塗布され、小口部の平面形は方形ではなくやや円形の形をしていた。赤色顔料の科学分析を行いベンガラであることが確認された(平尾良光氏による分析)。結果的には、石棺の身の破片も発見されず、棺身は刳抜式石棺ではなく基盤層を刳り貫いて用いられたのではないかと考えられた。また、石棺の北西側の調査区を掘り下げたが予想より厚い凝灰岩疊を多く含む整地層第2層が堆積して遺構を検出することはできなかった。だが、整地層には人頭大の凝灰岩疊が多く含まれ、基盤層の上から中世糸切底の土師器小片が出土しており、整地層とそれに伴う削平は古墳時代ではなく中世になり、大久保2号墳の中世の再利用の可能性も考えられる。

(1) 第1トレーナー (第221図)

近世墓地西側に露出している石棺棺蓋に隣接する形で、幅約1m×長さ約6mの調査区を設定した。

表土である第1層を剥ぐと、根の多い自然堆積層第2層が検出された。この層を除去していくと、棺蓋付近か

らは墓坑と思われる掘方が検出された。トレーナーの中ほどでは、近世埋土層第3層と、それに伴う急傾斜が確認された。トレーナー下部からは基盤層第4層が露出した。第3層は人頭大の凝灰岩礫を多く含む人為的な堆積層であり、検出当初は盛土と推定していたが、基盤の凝灰岩に由来する大きな角礫を多数含むことから、近世墓地造成の際に、削平によって出土した土をここに盛った可能性が高く、近世埋土と解釈した。石棺付近の掘方は、墓坑の埋土である可能性を考慮し、慎重に掘り下げ土坑埋土層を検出した。土坑埋土は、土色の違いからA層・B層に分層した。

遺物については、数点の土師器片が出土したが、そのうち1点は、B層の底部から出土しており、埋葬当時のものである可能性がある。その他は墳丘斜面より出土しているが、どれも時期決定には使用できない小さなものである。

(2) 第2トレーナー(第222図)

前方部の有無と填塙の確認のため、古墳北側の斜面に幅約1.5m×長さ約6.7mの調査区を設定し、のちほど調査区北端から東に向かって幅約1m×長さ約4mの拡張を行った。

表土第1層を剥ぐと、自然堆積層第2層が検出された。また、トレーナーの中部において、第2層に掘り込む形で溝のような部分が検出され、基盤層第4層が露出した。この部分については、周溝の一部なのか、木の根などによる擾乱を受けた部分なのか判断することはできなかった。第2層を除去すると、拳大の凝灰岩礫の出土する近世埋土層第3層と、基盤層4層が確認できた。第2トレーナーの第3層は、第1トレーナーの第3層と対応する層だと考えられるため、同じ解釈のもと、盛土ではなく近世埋土層とした。

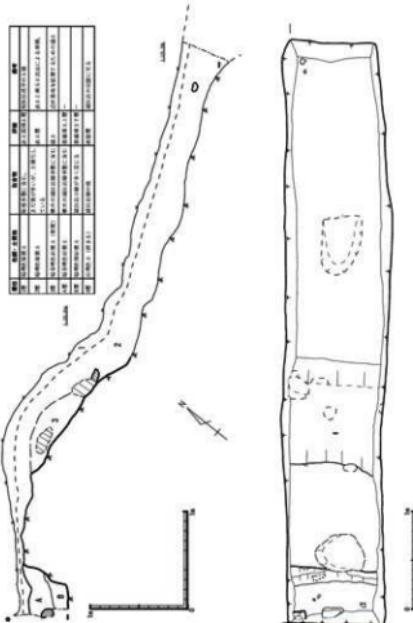
前方部の有無を決定付けるために設定した拡張部において、露出した基盤層第4層はなだらかに傾斜しているのみであり、第4層に対する削りだしなどの人為的な痕跡も見受けられなかった。前方後円墳に必須であるくびれ部などが存在しないと判断できるため、この古墳が前方後円墳ではないことが確実となった。

また、この古墳の墳形について墳丘測量図より方墳ではないかという指摘があった。類似した墳丘をもつ城山古墳と共に、山麓に広がる緒方町越生地区から漆生古墳群を見上げた際に見える古墳西側面の角を整形し、背面はあまり手を加えないという築造計画が存在したとも考えられる。

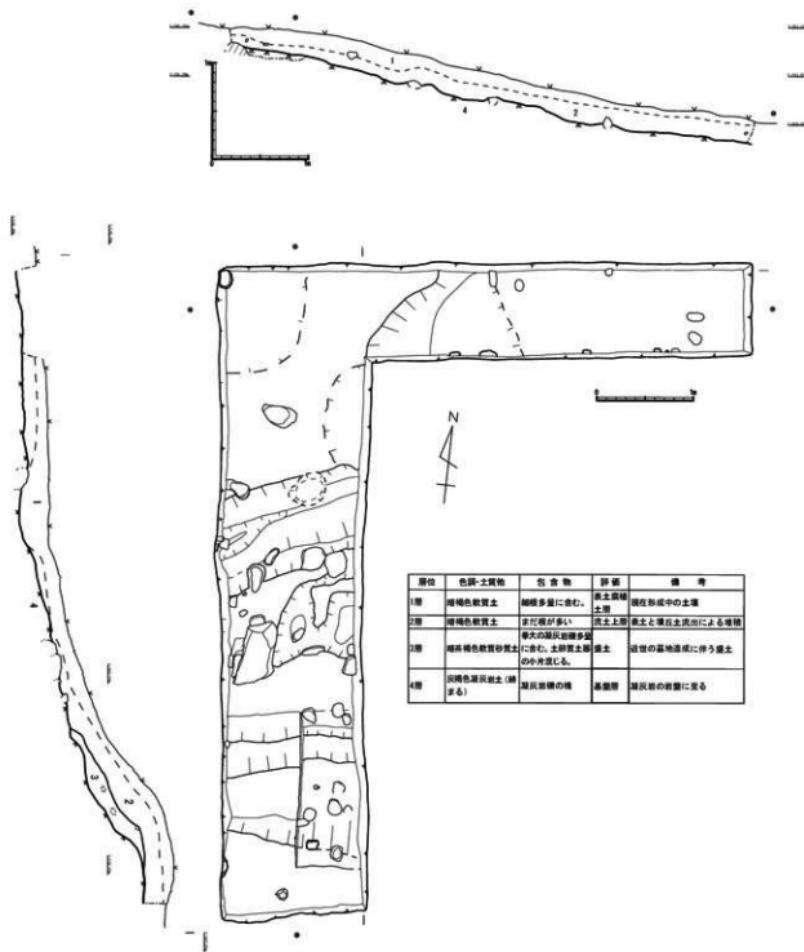
遺物については、第1トレーナーと同じく、数点の土師器片が出土したのみである。1点が近世埋土層である第3層から出土した以外は、どれも表土や自然堆積層から出土したものであり、時期決定には使用できない。

(3) 第3トレーナー(第223図)

大久保2号墳では、以前から凝灰岩製の割貫石棺の蓋が露出しており、古墳としての認知は早かった。その



第221図 大久保2号墳第1トレーナー(1/50)



第222図 大久保2号墳第2トレンチ (1/50)

一方、近世から墓地としても利用されており、墳頂部の変化は古墳群の中でも特に激しかった。そこで石棺の身及びその埋葬施設の存在の有無を確認する為、調査区を設定した。はじめは比較的近世墓の集中が少ない石棺の北西側に約1m×約2m40cmの調査区を掘り下げたが、思ったより厚く凝灰岩礫を多く含む整地層第2層が堆積し、遺構を検出することは出来なかった。整地層には人頭大の凝灰岩礫が多く含まれ、基盤層第4層直上では中世糞切底の土師器小片が出土した。その為、この整地層とそれに伴う削平は、古墳時代ではなく中世に下ると考えられる。接する城山古墳では、中世山城としての利用が確認されており、大久保2号墳でも中世の利用の可能性について検討する必要があろう。また、調査区の南西端では近世墓が検出されたため未

掘とした。

当初の調査区設定では主體部を確認することが出来なかつた為、石棺の両側面に添うようにさらに調査区を拡張した。拡張区の北東側では、第1トレント掘り下げの際に確認された石棺付近については、規模や土層堆積の状況から本来の古墳に伴う墓坑でないことが明らかになつた。また、調査区の東端でも近世墓が検出されたため未掘とした。

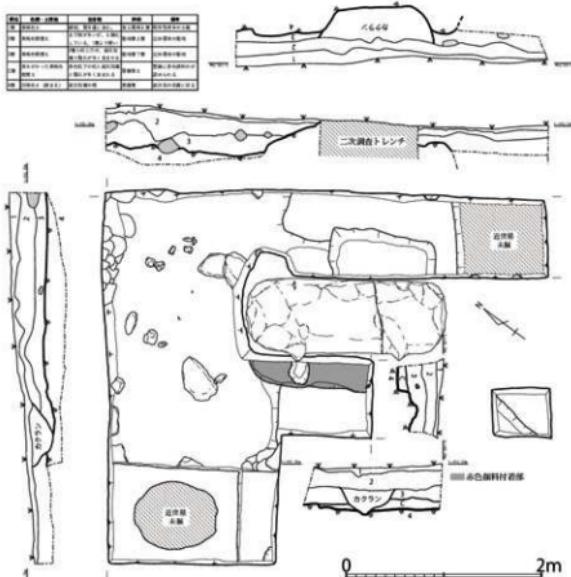
一方、石棺の西側拡張部では、整地層第3層から赤色顔料の付いた親指大の凝灰岩片が数点出土していたので、慎重に掘り下げたところ、赤色顔料を多く含むC層が検出された。C層は約10cm

ほど堆積していたが、遺物等は確認されなかつた。その下からは凝灰岩の基盤層を削り貫いて整形された墓坑の残存部が確認された。その表面には赤色顔料が塗布され、小口は方形でなくやや円形の形態をなしている。また、墓坑の側壁は10cm程度残るのみでこの部分にも赤色顔料が塗布されていた。

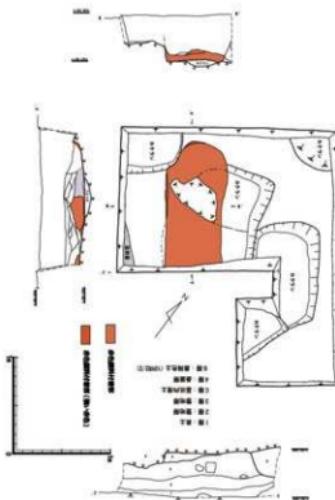
出土遺物に関しては、整地層より土師器片が数点出土しているが、いずれも小片であった。

(4) 墓頂部調査区（第224図）

前年度調査の継続として墓坑全体を把握するために剖貫石棺蓋の直下の調査を行つた。石棺の蓋部を移動させ掘り下げを行うと赤色顔料の付着がみられる凝灰岩片が複数みつかつた。また墓坑を削り出す際の加工痕がみられる壁があり、その横には赤色顔料はともわなないが残りの良い壁がみられ、赤色顔料が付着した部分が崩れ落ちたのではないかと考えられる。この墓坑の下部の側壁は高さ14cm程であった。約40cm～46cmほど掘り下げていくとおおよその墓坑の輪郭を確認することができた。この墓坑であるが幅が約60cm×長さ約130cm以上になると推定される。主體部の主軸は方位角326度で、西北一東南方向に設定さ



第223図 大久保2号墳第3トレンチ(1/50)



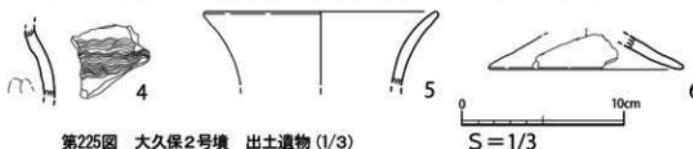
第224図 大久保2号墳墳頂部トレンチ(1/50)

れている。小口部分は、平面形では半円形をしており石棺の蓋にあわせるためにこのような形をしているのではないかと考えられる。

小口部の深さは10cm程で赤色顔料は他の部分と比べ赤色が強い。断面からも小口部は半円形だと確認でき赤色が他より強い。断面C'側の深さは10cmほどで形は方形である。墓坑の深さは場所により6~14cm程の違いがみられる点から、後世に削平をうけていると考えられる。

(5) 出土遺物 (第225図)

4は測量時表面採集の壺の肩部片。外面に横方向の櫛描波状文を二条重ねる。内面は指圧痕残るナデ調整、胎土は角閃石を含む砂粒多い在地胎土。赤褐色。5は第3トレンチ出土の土師器の小型壺の口縁部片。6は第1トレンチ1b層表土出土の土師器の高杯脚端部片。内外ヨコナデ、胎土は5と同じ。



第225図 大久保2号墳 出土遺物 (1/3)

S = 1/3

(6) 調査成果

大久保2号墳について判明した成果を以下に列挙する。①基盤層の状態より、突出部は確認できないため、前方後円墳の可能性はない。②葺石や周溝は確認できない。③墳丘測量図より方墳である可能性が指摘されたが、墳形や墳長を決定付ける遺構は確認されていない。④赤色顔料を塗布した地山掘り込みを確認できた。その赤色顔料は科学分析の結果ベンガラであることが確認できた。⑤石棺の身の破片を一点も確認できなかった。その為、埋葬施設に関しては一般的な剖貫石棺ではなく、身は基盤層を割り貫いて用いている可能性が示唆された。⑥墓坑の平面形は小口部において円形をなし、石棺蓋の平面形に合わせて基盤層の凝灰岩をくりぬいてつくられたと考えられる。⑦時期決定に用いることのできる遺物は出土していない。⑧中世から近世にかけて削平を相当うけている為、城山古墳同様、中世山城施設として機能していた可能性がある。

(田中)

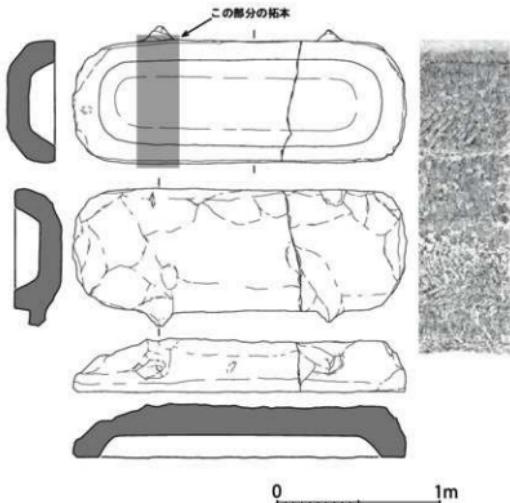
(7) 大久保2号墳の石棺蓋 (第226図)

大久保2号墳の石棺蓋は、現状墳頂部中央よりやや北側に伏せた状態で安置されており、調査時には三分の二程度のところで二つに割れていた。また、外面は長年の風雪により剥離が激しく調整の痕跡等は確認できる状態ではなかった。石材は阿蘇溶結凝灰岩でやや硬質であり、所々に5cm程度のスがみられる。ここでは調査時に蓋の内面状態等を詳細に確認できたので、主にその成果について報告したい。

蓋の全長は205cmで、幅は75cm程度である。側辺部に二個ずつ、計4つの繩掛け突起が付き、残存状態の良い繩掛け突起の観察から、角柱もしくは台形状の形態でやや下垂するのではないかと考えられる。外面は風化が激しいが大まかな形は把握でき、外面上部が比較的平坦な構造をしていることがわかる。また、側辺部の外面端には5cm程度の帯状の加工痕があり、やや内傾している。

内面は外形と同じ形に割り抜かれ、小口が隅丸である点は特徴的である。内面天井部には荒いノミ状の工具で加工した跡が残り、側辺部内面では手斧状の工具で小口内面へと連続的に加工していることがわかる。特に端部平面には丁寧な手斧加工が見られ、先ほど述べた側辺部外側の加工も含め仕上げ的な意味で最後に面の調整を行ったと考えられる。さらに、内面には赤色顔料が全面に見られ、昨年報告した主体部との関係を考える上で重要である。

(井)



第226図 大久保2号墳石棺(1/30)

であると推定される。一般的に岩石や砂の中には水銀や鉛はほとんど含まれておらず、これらの元素が含まれていればはつきりわかる。鉄は岩石の構成元素であるため、鉄があるだけではベンガラが使われたかどうかはかならずしもはつきりしない。そこで、赤色顔料を塗布されている部分と、本来は赤色顔料が塗布されていない面との比較から、鉄の濃度推定する方法を利用することが一般的である。今回の試料もこの方法で測定してみる。

結果 試料1と2のスペクトル図から、水銀と鉛は検出されなかった。それ故、朱や丹ではないと判断できる。そこで、赤色部とそうでない部分(赤色ではあるが)との鉄の濃度を測定した。その結果として、赤色が強い部分の蛍光X線スペクトルは岩石部よりも鉄の濃度が高かった。故に、赤色部には鉄系の顔料、ベンガラが利用されていると判断される。

(平尾)

8. 大久保3号墳(第211図)

1992(平成4)年に古墳が存在する可能性のある地形であることが指摘され、測量調査では円墳状の高まりとなることが分かったが、葺石もなく形状も明瞭ではないので、まず第一に古墳であるかどうかを確かめるために、丘陵の方向に平行して2つの調査区を設定した。

(1) 第1トレント(第227図)

幅1m×長さ6.5mの調査区を丘陵に平行して古墳推定範囲の北側に設定した。高まりの北側に大きな穴が掘られており、その場所を清掃して削り出しと盛土の有無を断面観察から検討した。現代の遺構に大きく破壊されていたが、全体に円礎の出土ではなく葺石は存在しないものと推定され、このトレントには古墳に関する遺構は存在せず、わずかに断面土層に基盤層に傾斜変換点が3か所観察されたのでそのどれかが墳端になると推定された。

(2) 第2トレント(第228図)

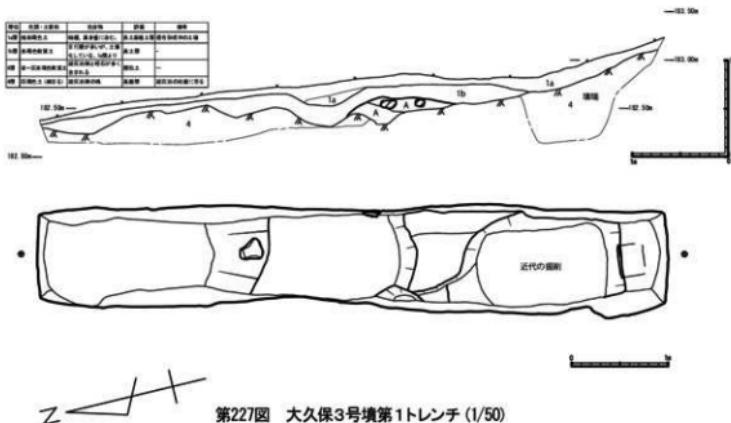
第1トレントで古墳であるという確証が得られなかったため、ダメ押しに地形の高まりの中心部に及ぶ幅1m×長9mの調査区を設定した。その結果調査区北端で石棺の棺蓋を発見し、大久保3号墳が古墳であることが判

(8) 赤色顔料の科学的測定

大分県豊後大野市越生に所在する漆生古墳群(大久保2号墳)から出土した土に付着している赤色顔料2点に関して、化学組成測定の依頼があった。

そこで、資料の化学組成を蛍光X線分析法で測定し、顔料の化学組成を推定したので、その結果を報告する。

測定 試料は2種類ある。測定には蛍光X線分析法を利用した。赤色顔料として、古代には水銀朱、鉛丹、ベンガラという3種類が利用されている。それぞれには水銀、鉛、鉄が主成分として利用されているため、蛍光X線分析で3種の元素のうちどれかが検出されれば、その元素を含む顔料



第227図 大久保3号墳第1トレンチ (1/50)

明した。調査は蓋石の露出にとめたが、棺蓋の石材は大きく2枚に分かれた硬質凝灰岩の石材を利用し、北側の石材には不整ながら二カ所に繩掛状の突起を削り出している。また断面土層を検討すると、当時の墓壙とは別に、北側の棺蓋に向かって再度掘り込まれた面を観察できたので、追葬などにより石棺を再び開けられたことが判明した。蓋石が2枚に分かれていることと突起があることは、追葬等による開棺が予定されていたことを推測される。また初葬時には棺蓋の周囲に赤色顔料が目地をふさぐように塗布されていることが観察でき、北棺蓋中央には赤色顔料が円文風に塗布されていた。開棺後の再埋設の際にには赤色顔料の塗布は行われていない。なお赤色顔料の成分はベンガラである。

さらに削り出しによる墳端と盛土を確認した。削り出し部分やその周囲には円礫の出土は全くなく、葺石が行われていないことが判明した。現状で30cm程度の盛土が残っていることも判明した。

(3) 第3トレンチ (第229、230、231、232図)

これまでの調査成果を基に、蓋石の棺身の確認及び、東西の墳端の確認を目的として、墳頂部に南北1.0m×東西7.2mの長方形の第3トレンチを設定した。掘下げの結果、トレンチ中央部に蓋石の一部が確認できたため、さらに南北に3.9m、東西に2.5mにトレンチを拡張し、蓋石の全体を検出した(第229図)。

蓋石の周囲を精査した結果、墓壙は凝灰岩の岩盤に直接掘り込まれた全長3.45m、最大幅1.92mの南北に長いやや扁平な五角形を呈することが判明した。墓壙の底部は平坦ではなく、主体部周辺に幅0.32~0.70m、深さ0.14~0.30mの不安定な溝が巡る。これは蓋石の形に合わせて墓壙を掘り込んだためと考えられる。

蓋石は硬質の阿蘇溶結凝灰岩製で全長2.25m、最大幅0.98mを測る。北側に2つ、南側に1つ、計3つの繩掛突起を持つ。北側の2つの繩掛突起は長さ5cm、幅12cm、南側の繩掛け突起は長さ6cm、幅13cm、厚さ7cmを測る。赤色顔料は蓋石縁辺のみならず被覆土の周囲にも広がっている。裏面には主体部の形に沿って赤色顔料の広がりが見られ、その周囲には斑点状に残存している(第230図)。土層の堆積状況や赤色顔料の範囲からかんがえて、蓋石は本来割れていたのではなく、はじめから2つに作り、小口が合わさるように加工したものと考えられる。再開棺の際は北側から開けられたと考えられる。

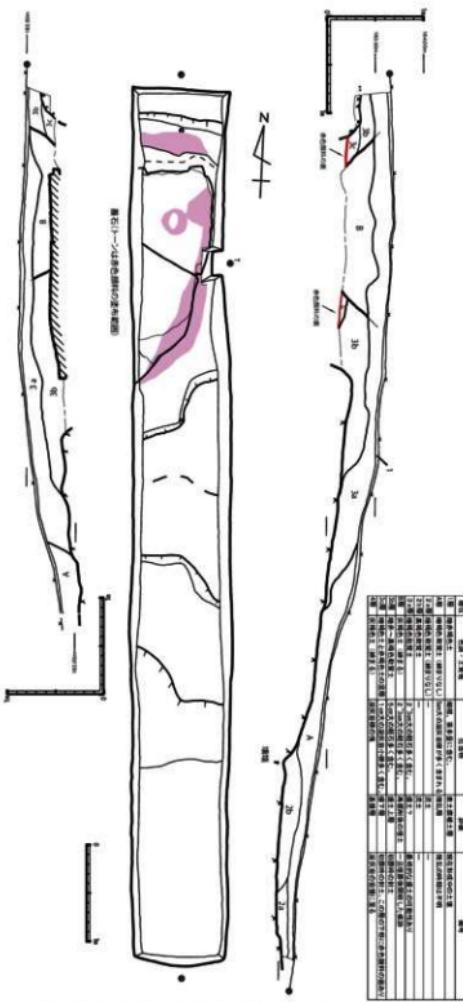
蓋石を除いたところ、主体部は石製の棺身ではなく、凝灰岩の岩盤を直接彫り込んだものであった。阿蘇溶結凝灰岩製の地山をほぼ垂直に掘り込んだ全長1.82m、最大幅0.47m、深さ0.42mの埋葬主体が確認され、蓋石と同様に底面・侧面・小口面の全面に赤色顔料が塗布されていた。主体部南側は若干崩落していたが、ほぼ

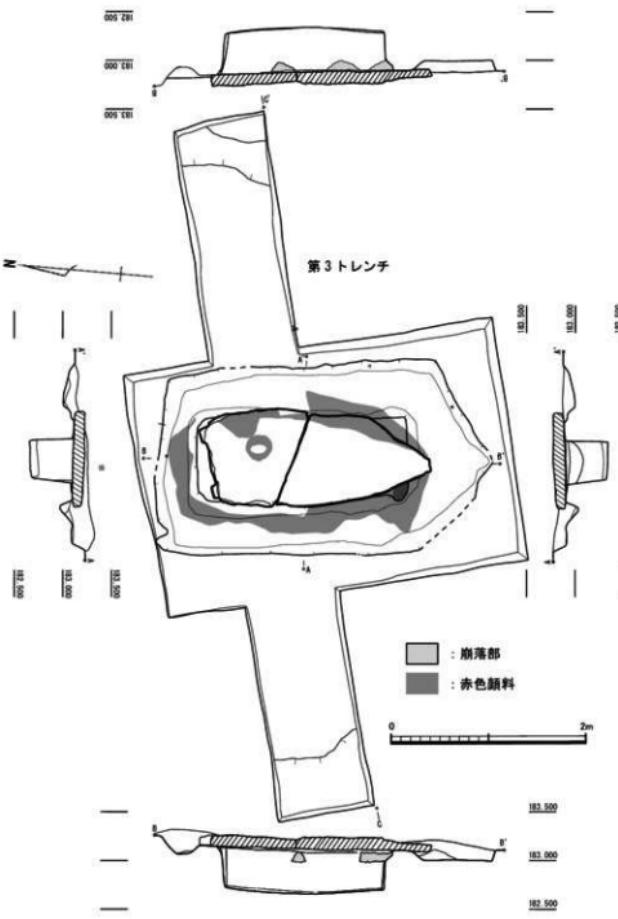
完全な状態で流土もなかった。床面は直線ではなく、中央に向かってやや湾曲していた。主体部の長軸は方位角355度で、ほぼ南北に設定されている。

墓壙の内部に溝を巡らすことで主体部周辺を一段高く見せ、蓋石を際立たせるように作られたものと考えられる。墓壙周辺には赤彩があるが、北東部の墓壙には赤彩が残っていないため、ここから蓋石を片側より開けたことが推測される。

本来であるならば蓋石の北側に2つ付いている繩掛突起は対になるように南側蓋石に付けられるはずであるが、1つしかない。これは石蓋を加工した段階でその状態であったのか、元々加工されたときには2対の繩掛突起を持っていたが、石蓋を3号墳に運搬する最中に割れてしまったためであるのか、不明である。

遺物は土師器が8点と人骨片が4点出土した。主体部内部から土師器は確認されず、人骨片のみであった。土師器片は図化できないほど小片で、それらは埴方周辺から散在する形で多くは墳丘盛土より、一部床面上直上から出土している。特に主体部東側より集中して見られた。人骨片は主体部から出土している。1つは頭蓋骨と思われるもので、主体部北側から出土した。その周囲には歯が2つ出土した。内1つはその形状から臼歯と推定される。主体部中央付近からは大腿骨の一部と思われる骨片が確認できた。このことから被葬者の頭位は北側に向けられていたと推測される。それ以外の人骨ではなく、蓋石から推測された追葬人骨は確認できなかった。

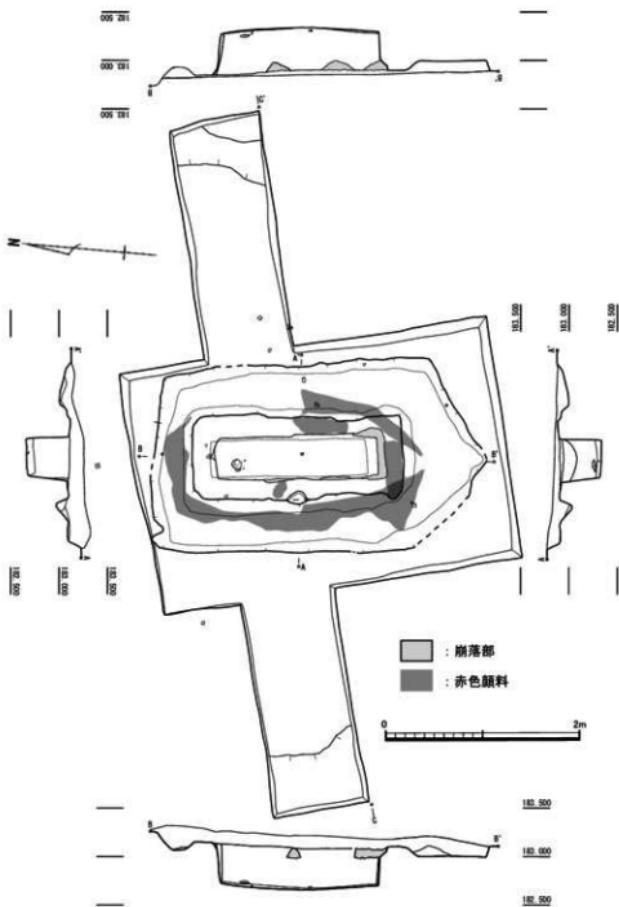




第230図 大久保3号墳 第3トレンチ石棺出土状況 (1/50)

(4) 調查成果

①まず古墳であることが主体部の発見で実証された。②削り出しによる墳端の造成と盛土による墳丘構築が行われているが、葺石は使用されていない。③石棺柏蓋の中央を古墳の中心と仮定すると墳端まではほぼ5mであるので、南北の長さは10m程度の古墳となると推定される。④墳形は東西が尾根の斜面となって流出しているので判然としないが、測量図から推測して円墳の可能性が高い。⑥主体部は基盤層を深く掘削し、柏蓋の高さを基盤層の高さに合わせており、初葬後に盛土をおこなって墳丘を完成させたと推定される。また主体部は南北方向に地形に平行して設定されている。⑦大久保3号墳の主体部は、凝灰岩の岩盤をぐりぬいた石蓋土壇であることが判明した。主体部の長軸は方位角355度で、ほぼ南北に設定されている。⑧初葬時には柏蓋の周囲



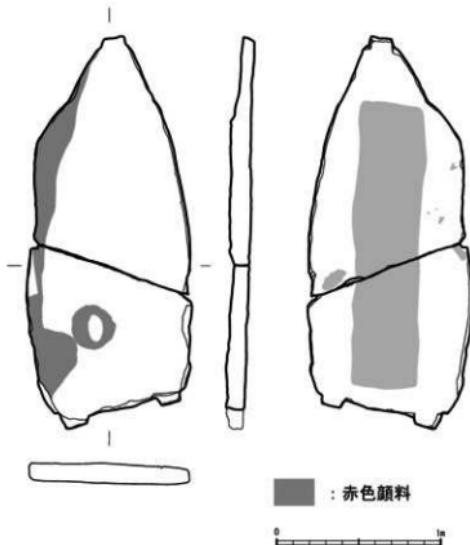
第231図 大久保3号墳 第3トレンチ完掘状況 (1/50)

に赤色顔料の塗布が行われている。⑨追葬等のためそのご北棺蓋をあける再開棺が行われている。棺蓋の形状から見て当初から想定された行為と推定される。蓋石には3か所に縄緋け突起がしつらえられていた。

また⑩主体部内部の人骨片を見る限り、二人目の埋葬の痕跡はなく、棺蓋の状況とは矛盾した。⑪また副葬品はなく、墓壙埋土中の土器片も少量で土器から年代を推定するのは困難であった。
(田中)

(5) 赤色顔料の科学的測定

大分県豊後大野市緒方町越生字大久保に、大久保1号墳、2号墳、3号墳がある。この3号墳の考古学的な発掘から、初葬時に棺蓋の周囲に赤色顔料が目地をふさぐように塗布されていたと観察されている。本報告で



第232図 大久保3号墳 主体部蓋石 (1/30)

はこの古墳に用いられている赤色顔料がどのような物質であるかを自然科学的に明らかにしようとする。調査のための赤色顔料試料は田中・玉川氏によって、礫として採取された。

科学的測定 試料は礫の表面に付着した赤色顔料という形で提供されたもので、礫の赤色部と岩石部とを比較する。試料の礫は軽石であり、4試料ある。それぞれ試料1, 2, 3, 4とし、8点を測定する。

測定には蛍光X線分析法を利用し、元素の種類と濃度を解析する。

結果と考察 得られた蛍光X線スペクトル図からカリウム、鉄、水銀、鉛、ストロンチウムのX線数を比較した。赤色顔料として利用される可能性のある物質として水銀朱(HgS)、鉛丹(Pb3O4)、ベンガラ(鉄)(Fe2O3)が考えられる。それぞれ、水銀、鉛、鉄が主元素である。そこで、

蛍光X線スペクトル図で水銀、鉛、鉄のX線を調べてみると、水銀と鉛のピークの位置にはX線が全く見えないのと、水銀朱や鉛丹などの赤色顔料は含まれていないと判断できる。そこで鉄のピークを調べてみると、赤色部には岩石部よりも多くの鉄のX線数が認められた。岩石種が決まってれば鉄の濃度はそれ程大きく変わるとは思えないで、鉄が赤色部に多く存在していると示される。鉄が赤色部に多いことから赤色顔料が鉄関係の材料であることを示唆している。すなわち、赤い着色部には鉄が多いので、ベンガラが塗布されていたと推定される。

(平尾)

※なお、墓坑壁床面の赤色顔料については、志賀智史(九州国立博物館)に分析を依頼した。人骨の分析とあわせて、報告は後日に期したい。

9. 城山古墳(第233図)

測量調査の結果、一辺22.4m×25.4mの方墳である可能性が指摘され、古墳の範囲を確認するため東西に2カ所のトレンチを設定した。丘陵の西側に広がる広い谷からみると墳丘がよく見える正面は西側になり、そちらに向かう西北と西南のコーナーは測量図では明瞭な角をなすが、反対側の2つのコーナーは不明瞭である。そのため現状観察からは円墳・方墳いずれとも決めかねた。

しかし第4次調査において墳頂部から検出された墓抗の深さから推測すると、墳頂部は築造後に1m以上の削平を受けていることが明らかになり、大規模な削平を受けたことが判明した。さらに西側の、方墳と考えた要因でもある隅角に挟まれた一面も、基盤層に達する削平が考えられ、中世に山城の造作の際に削平をうけた可能性ができた。したがって城山古墳の現形は、大きく改変を受けていることが判明し、隅角のない東側の平面形からみて、円墳である可能性が高まった。

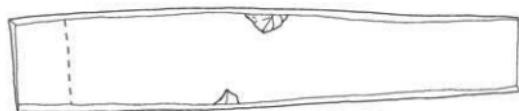
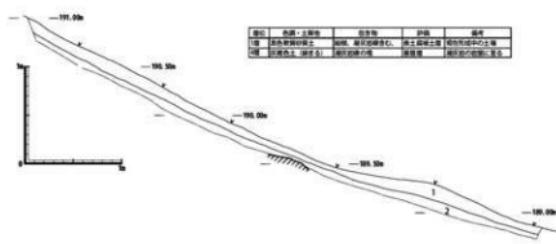
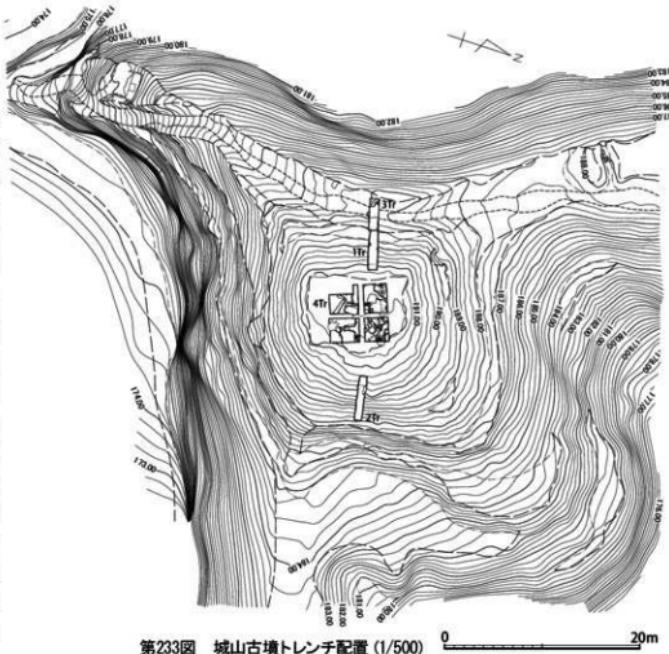
(1) 第1トレント
(第234図)

一辺が直線的になっている西側斜面に幅1m×長さ5.2mの調査区を設定した。表土第1層を剥ぐとすぐに凝灰岩の基盤層第4層が露出した。ところどころ硬い凝灰岩の岩盤が顔を出す。トレントの上位標高190.50mあたりから上では軟質で茶褐色土の第3層が堆積し、基盤層が認められなかつたので、その高さから上には盛土が施されているものと推定される。それより下は葺石もなく基盤層を削り出して墳丘斜面を形成していると推定される。また段築の存在する気配はなかつた。

(2) 第2トレント

(第235図)

第1トレントと対面する東側の斜面に幅1m×長さ4.6mの調査区を設定した。途中倒木による擾乱があり層位が不明瞭なところもあるが、第1トレントと同じく意外にもすぐに基盤層第4層があらわれ、標高190.0mあたりから上で盛土第3層が認められた。正面の西側よりも東側の方が厚く盛土が行われている。190m付近から傾斜がゆるくなっているのは、盛土の流出が激しかったためと推測される。第1トレントと同じく葺石や出土遺物は一点も見当たらなかつた。



第234図 城山古墳 第1トレント (1/50)

(3) 第3トレーニング (第236図)

第1トレーニングを拡張して第3トレーニングを設定した(幅1m×長さ3.2m)。表土第1層から10~20cmほど掘り下げたところで、トレーニングの東側ではすでに基盤層第4層が確認され、このことからトレーニングの東側は斜面となり、明確な変換ラインを境にして、西側は平坦であることが確認された。トレーニング西端(長さ約50~60cm)には落ち込みがあり、深さ約30cm程度のA層(暗褐色、5~10cmくらいの礫含む)が堆積していた。A層を深さ20~30cm程度取り除いていったところでは基盤層第4層が確認された。層序は、落ち込みの埋没の後、削平が行われて、斜面と平坦面の2つの区画と境が生じたものと考えられる。そして、その上に表土第1層が堆積したものと思われる。第3トレーニングからは遺物は出土していない。

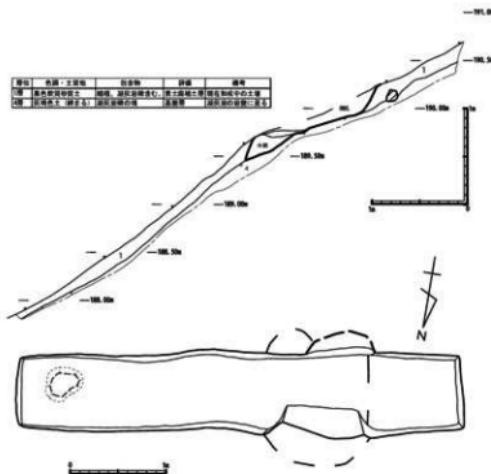
(4) 墓頂部調査区 (第237図)

城山古墳には墳頂及びその周辺に、凝灰岩製の石棺材が露出していることが早くから知られていた。棺材の特徴から考えると、大久保2号墳とは異なり、組合せ式の箱形石棺の部材と考えられた。石棺材は比較的保存状態が良く、組合せ式の箱形石棺の側板と判別できるものが1点、不明部材が2点残されている。いずれの棺材の一方には、赤色顔料が塗布されている。

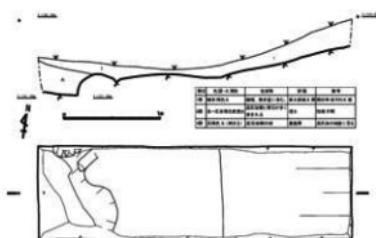
主体部調査のため、墳頂部に幅50cmの十字のベルトを残し、計4区画に分割した調査区を設けた。中央部より、十数cm程度掘り下げたところから、組合せ式の箱形石棺の小口板の抜き取り痕らしい痕跡と、墓坑の底部の輪郭が確認された。

第1主体 墓坑の痕跡内からは、赤色顔料が塗布された凝灰岩の断片が確認され、その底部には小穂等の敷かれた状態ではなく、底板が施されないタイプの箱形石棺が中心主体に用いられたと推定される。第1主体部は長さ約180cm、幅約80cmで南北に向いている。また周囲からは、高杯の口縁部と脚部それぞれの土師器片が出土した。主体部の長軸は方位角162度で、ほぼ南北に設定されている。

第2主体 東側からもう一ヶ所、赤色顔料の塗布が確認された。この付近にも主体部が存在していた可能性があるが、石棺が使用されていたかどうかは不明である。断面をみると5cmほどの深さを確認できた。第2主体は残存部として長さ約60cm、幅約60cmである。



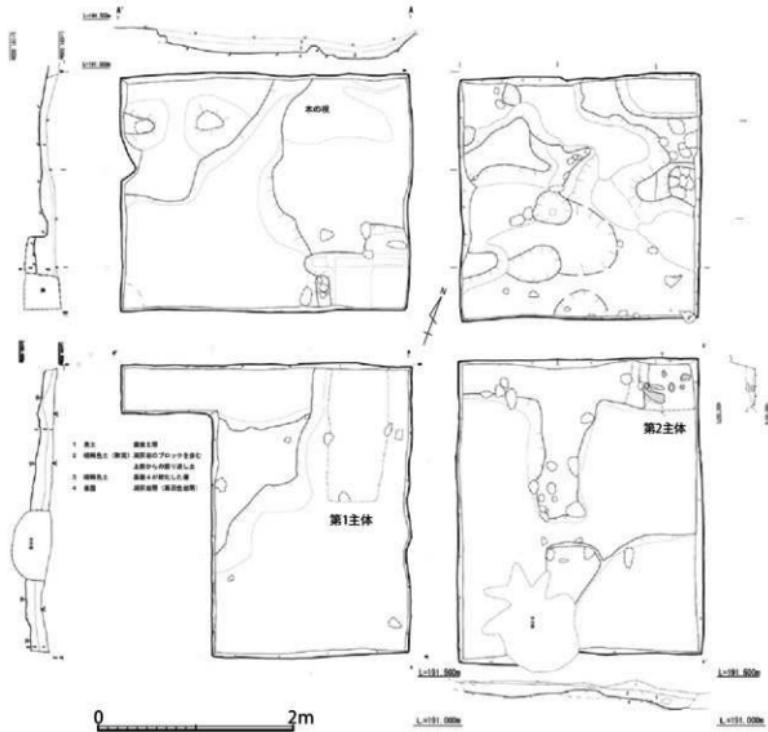
第235図 城山古墳 第2トレーニング (1/50)



第236図 城山古墳 第3トレーニング (1/50)

墳頂の削平 今回の調査より、墳頂部より検出された墓坑底面の高さから推測すると、墳頂部は築造後に1m以上の削平を受けていることが確認できる。このような大規模な削平をうけたのであれば、現状の墳丘測量図から推測した、円墳ないし方墳という墳形の推定は根拠を失う。西側の方墳ではないかと考えた隅角に挟まれた一面も、後世の改変による可能性が出てきた。城山古墳からその北側に中世の山城の遺構が残されており、城山古墳の現状はその後の城郭造成による、変形の可能性が高い。

(田中)



第237図 城山古墳 墳頂調査区 (1/50)

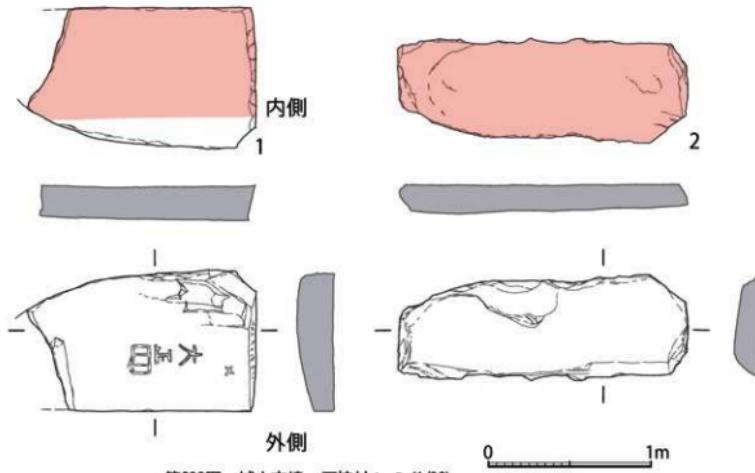
(5) 城山古墳の石棺材 (第238図、第239図)

城山古墳には、以前から墳頂部に3つの石棺材の存在があることが確認されており、いずれも凝灰岩製で古墳に伴う棺材であると考えられる。また、城山古墳の付近を流れる水路に石棺材と思われる石材が2つ確認されている。第5次調査ではこれら城山古墳墳頂部、水路上に存在している石棺材について実測を行った。

石棺材No.1 (第238図-1) 組み合わせ式の箱形石棺の側板と考えられる棺材であり、断面形態は翼状の一枚石である。横幅は85cm、縦幅は141cmで、厚さは20cm程度だが上面にかけて細くなり12cm程度になる。石棺材の外面には幾つかの加工痕が残されており、見た目の違いから2種類に分けられる。1つは叩き潰したような整形

面である。もう1つは自然面をそのまま利用しながら、ノミによる整形を行ったと考えられる面が見られる。また、外側には「大正四」と「×」の掘り込みがなされており、当時の発見者によって掘り込まれたものであると考えられる⁽³⁾。内面はやや内側に湾曲しており、赤色顔料が塗布されている。また、土に埋まっていたと考えられる下面の約20cmの範囲には赤色顔料の塗布が見られない。棺材の端部には両面ともに、縦方向の工具による加工痕が見られる。

石棺材No.2(第238図-2) 棺蓋ではないかと考えられる。横幅は62cm、縦幅は178cmで、厚さは15cm程度である。石棺材の外側には叩き潰したような加工による整形面がみられ、側面は平たく整形されている。内面はやや

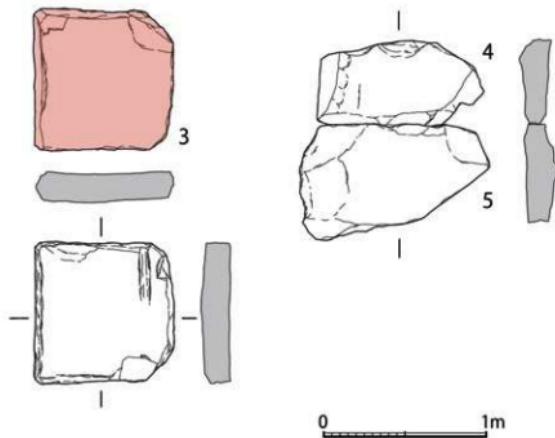


第238図 城山古墳 石棺材1・2 (1/30)

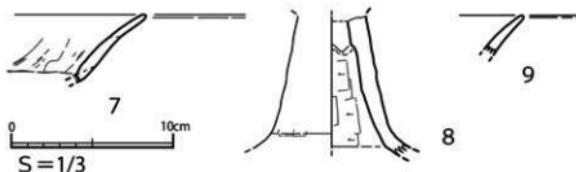
内湾しており、全面に赤色顔料が塗布されている。

石棺材No.3(第239図-3)

側板ではないかと考えられる棺材で、横幅は86cm、縦幅は85cmで、厚さは18cm程度である。外面は平たく整形されている。また、一箇所後世のものと思われる枘(ホゾ)が施されている内面も平たく整形されており、全面に赤色顔料が塗布されている。また、側面の割れ



第239図 城山古墳 石棺材3・4・5 (1/30)



第240図 城山古墳 出土遺物 (1/3)

と思われる部分にも赤色顔料が付着していることから、石棺加工当時の加工面である可能性が考えられる。

石棺材No.4、石棺材No.5(第239図・4・5) 城山古墳の付近を流れる水路の上に置かれている棺材である。形態から、石棺のどの部分に使われていたのか不明である。石棺材No.4は横幅60cm、縦幅116cm、厚さ20cm程度の棺材で、石棺材No.5は横幅51cm、横幅102cm、厚さ18cm程度の棺材である。
(村田)

(6) 出土遺物(第240図)

土師器 7は高壇の杯部片。8は高壇脚部片、内面に円盤充填の剥離痕。外面は縦方向の工具ナデ、内面は横方向のヘラ削り。胎土は角閃石や石英を含む在地胎土。9は口縁片。

(7) 調査成果

方墳の可能性もあるとの測量調査の結果を受けて臨んだ発掘調査の成果は、以下の通り。①墳丘は削出しで整形されている。盛土は墳頂部に西に薄く東に厚く盛られている。②段築や葺石はない。③墳端部の基盤層第4層の削平が考えられることから、中世に山城の造作の際に削られた可能性が指摘でき、その痕跡として斜面と平坦面の2つの区画が、生じたものと考えられる。④墳頂部には、組合せ式の箱形石棺の部材が散乱し、赤色顔料が塗布されている。調査区からは、墓坑の底部の輪郭が確認された。主体部の長軸は方位角162度で、ほぼ南北に設定されている。⑤墳長部東側には、赤色顔料が塗布された凝灰岩礫が確認されており、この付近に第2主体部が存在した可能性がある。⑥出土した土師器高壇から古墳時代前期後半の築造年代を考えられ、箱形石棺の仕様もこれと矛盾しない。
(田中)

【註】

- (1) 神田高士・後藤幹彦・田中裕介・諸岡郁・渡辺幹雄「緒方町越生にある漆生古墳群の観察」『緒方町立歴史民俗資料館年報』2 1992
- (2) 玉川剛司「漆生古墳群測量調査」『豊後大野市内遺跡発掘調査概要報告書4—平成23年度・平成24年度調査—』2014、p4~12、豊後大野市教育委員会
- (3) 地元出身の当時の大分中学校生徒によるものである。

10. 漆生古墳群の調査成果

(1) 漆生古墳群の立地について(第241図)

はじめに 漆生古墳群は大分県豊後大野市緒方町越生(こしお)地区の大野川沿岸を見下ろす丘陵上に所在しており、前方後円墳1基を含む4基の古墳群が尾根地形上に並ぶように分布している。これらの古墳が築造された時期については推定ではあるが古墳時代前期後半の4世紀から中期の5世紀とされている。また、漆生古墳群の城山古墳が立地する尾根の南岸壁には城山横穴墓群が確認されている。城山を含む尾根北側には、中世に山城である鶴ヶ城が築かれていたことがわかっている⁽¹⁾。これらの古墳群の成立背景にある要因について古代越生平野の様相と、古代の交通の2つの視点から考察を行った。

近世以前の越生平野の様相 まず、古代越生平野の様相について述べる。漆生古墳群が見下ろす越生平野は、現在水田開発が行われているが、その起源は古代まで遡るものではなく、江戸期に緒方上井路が通水した後に行われるようになったようである。『清川村誌』に江戸時代のこの地域の様相を記した『加藤文書』が紹介されており、江戸時代の享保の飢饉の記述が見られる。文書には上自在村や打越村で凶作によって多くの死者が出たことが記されている。この飢饉によって多くの死者が出た理由として、越生平野の立地が大きく関係している。越生平野は大野川と緒方川に挟まれており、双方の河川によって阿蘇凝結灰岩の冠する台地が激しく浸食されたことによって誕生した小規模な丘陵上に位置している。つまり、立地としては大野川岸に位置しているが、川よりも標高が高い土地であるため河川から水を得ることに適さず、使用可能な水系は迫の奥に存在するイノコから流れ出る小規模な川などに限定され、水田を育むには不十分な環境であったと考えられる。このことから越生平野は、仮に大野川の水を利用出来たとしても、川に隣接する一部の土地のみで水田開発が行える程度であり、生産力は望めなかつたと考えられる。その上、小字を見ても緒方川流域には田の付く字名が多く存在していることに対して、越生地区には森田という字名以外は、迫・畠・原がつく字名が多く見られることからも、緒方において稲作が開始される中心地は後に緒方莊が開かれた緒方川流域であり、古代・中世の越生平野は現在のような稲作中心の土地利用は行われてはいなかつたのではないかと考えられる。したがって、漆生古墳群が築造された当時の越生平野においても米の生産力は期待出来ず、古墳の築造の背景に生産力が関係しているわけではないと考えられる。

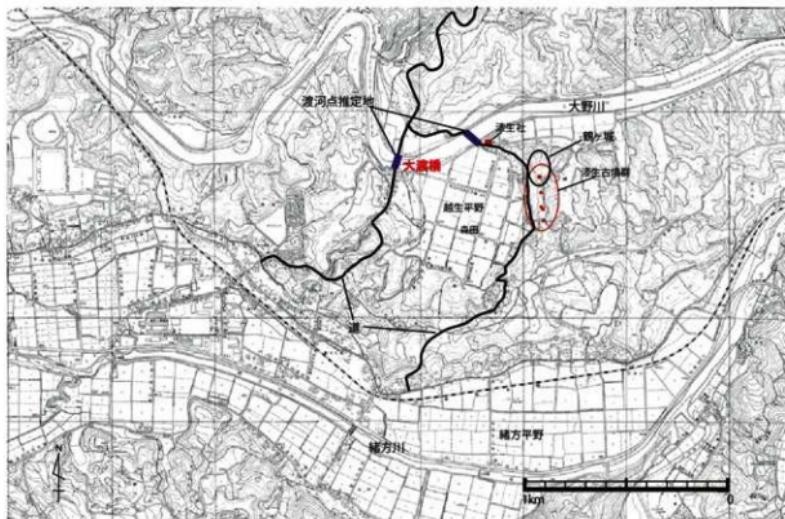
渡河地点としての越生平野の考察 次に古代・中世の交通について、古代の大野川流域は瀬戸内・東九州・中九州を繋ぐ交通上の要衝であったことが考えられているが、古代・中世の大野郡は平地が少なく『豊後國風土記』大野郡の条に「此の郡のすぶる所はことごとく皆原野なり」とあるように、尾根や台地が点在する特徴がある。平地が少ない中で、尾根や台地の上は一定の平地が広がっていることから、この地形環境を利用して古代・中世の道は作られており、尾根と尾根・台地と台地を結ぶようにして道が発達していったと考えられる⁽²⁾。また、この地域において尾根と尾根の間に流れる川を渡れる場所は限られており、渡河点は交通上重要な役割を果たしていたと考えられる。そのため道や渡河点は、それらを見渡せる高い場所に権威をアピールするための古墳の成立と深く関係していると考えられている。

漆生古墳群が位置する越生地区には、1923(大正12年)に大渡(おおわたり)橋が出来るまで2つの船渡し場があったようである。その地点の一つに現在の大渡橋付近が考えられ、大野川を挟んで対岸の大渡には大野川に竹を編んで筏のようにして浮橋が設けられていた(豊後國誌)という記述があることからも、古くから渡河点として人々が利用していた可能性がある。もう一地点については深渡しと浅渡しがあったとされていることから、大渡橋よりも下流の越生平野東端部にあったのではないかと考えられる。

この渡河点が繁ぐ道は、航空写真や字図などを基に見てみると現在の大渡橋から南に続く尾根の東側を通って下自在に向かって続く道や、橋を北上し現在の朝地町方面に続く道が確認できる。この朝地方面へと続く尾根道は、夏足(なたせ)台地→朝地→竹田へ続く尾根道につながっており、丸山古墳や用作(ようじやく)古墳などもこの尾根道に沿うように立地していることから古墳時代の主要路であったと思われる。また、この地域の大野川流域において渡河点として考えられる地点が地形上、他に考えることが出来ないことからも漆生古墳群が見下ろす渡河点は緒方川流域から朝地方面へ抜けるための重要な地点であったと考えられる。

まとめ 前述した内容から、古代の越生平野は古墳が成立する背景になりえる程、米の生産力が高かつたとは考えにくく、古代の道を考えた際の交通の要衝「渡河点」としての役割を担っていた可能性が高いと考えられる。そのため、漆生古墳群が大野川を見下せる尾根上に成立した背景として「渡河点」の存在があり、この交通の要衝から見える位置に権威のアピールをするために古墳が築造されたのではないかと考えるに至った。また、中世にこの尾根上に山城が築かれた背景にも「渡河点」の存在が大きいと考える。

(村田)



第241図 漆生古墳群の立地

【詩】

- (1) 大分県教育委員会編 2004『大分の中世館』第四集 総論編
 脇方町立歴史民俗資料館総合資料室編纂室 2001『脇方町誌』総論編

(2) 飯沼司司編 2005『環境歴史学の視点に立つ中世莊園研究－大分県直入・大野郡城を中心に』別府大学

(2) 墳丘復元案について

漆生古墳群の復元案については、測量調査の成果から前節で述べた。ここでは、この測量調査の成果と発掘調査で得られた成果を合わせ、漆生古墳群の各古墳の復元案について考えてみたい。

①大久保1号墳

前節で、墳丘測量調査の成果とその成果から大久保1号墳の復元案(第205図)を示した。その結果は、墳長41m、後円部径25.4m、くびれ幅13.6m、前方部長17.5m、前端幅15.7m、後円部高3.6m、前方部高2.6m(1.4m)の規模の前方後円墳で、後円部・前方部とも二段築成になると想定した。

測量調査後の発掘調査では、計7本のトレンチ調査が実施された。後円部に第1・5・7トレンチ、くびれ部に第2トレンチ、前方部に第3・4・6トレンチである。これら各トレンチの発掘調査の成果から、復元案を考えたい。

後円部 後円部の南側に設定された第1トレチでは、トレチ南側から4.7m墳丘側に墳端と考えられる根石と葺石が検出された。さらに根石から0.6mほどテラスがみられ、このテラス外側に周溝が確認された。このテラスは、豊後大野市の前方後円墳でみられる墳端外側のテラスであると考えられる。また、この周溝は、後円部のこの箇所でしか確認できていないことから、丘陵と墳丘とを断ち切るよう掘られた溝であると考えられる。また、後円部東側に設定された第5トレチでは、墳端部分であると考えられる箇所が別の造構によって破壊されているため、墳端の厳密な確定ができなかった。しかし、検出した葺石と墳丘斜面から推定すると、トレチ東端から1.15m墳丘側に墳端があったものと考えられる。また、くびれ部に設定された第2トレチでは、後円部と前方部

の境界が検出され、トレントレンチ側の端から2.0m外側で墳端と考えられる石列が確認された。また、このトレントレンチ側の端から2.0m外側で、トレント後円部側の端から0.8m前方部側の交点付近がくびれ部であると考えられる。これら、3点から後円部の復元をすると、後円径22.8mを測り、平面形態が若干歪んだ円形の後円部となると想定できる。

段築については、第1・5トレントで検出し、後円部は測量調査で想定した通り二段築成であることが分かった。
くびれ部 くびれ部東については、後円部の第5トレントで述べたとおりであるが、くびれ部西側については、急斜面であったため、発掘調査がされていない。そこで、墳丘測量の成果から復元した案を参考に復元した。これら復元した地点間を測ると、くびれ幅12.5mであると考えられる。

前方部 前方端部に設定された第4トレントで人頭大～拳大の葺石が検出され、その出土状況からトレント墳丘側の端から4.4m付近が墳端であると考えられる。また、前方部東側に設定された第6トレントでは、葺石が検出され、その下端に基底石と考えられる人頭大の川原石を確認した。この基底石とくびれ部の第2トレントで検出した前方部の墳端を結ぶと、前方部隅角に向かって墳端ラインは広がらず、むしろ窄まる平面觀となつた。この要因は、狭い丘陵に前方後円墳を营造するために地形の制約を受け、前方部の平面形態が窄まるような設計でしかできなかつたものと考えられる。また、前方部西側については、くびれ部でも述べたように地形の制約から調査区が設定できなかつたため、墳丘測量調査の成果からの復元を参考に、復元案を示した。西側くびれ部から前方部隅角方向に向けて、17.9750～180.500mの等高線間が直線状にめぐっていることから、この等高線の方向と前端部の第4トレントで検出した墳端ラインが接する地点を隅角であると想定した。以上から、前方部長15.7m、前端幅9.5mを測る規模の前方部となると想定した。段築については、各トレントでも検出できなかつたため、前方部の段築は一段であることが判断されている。

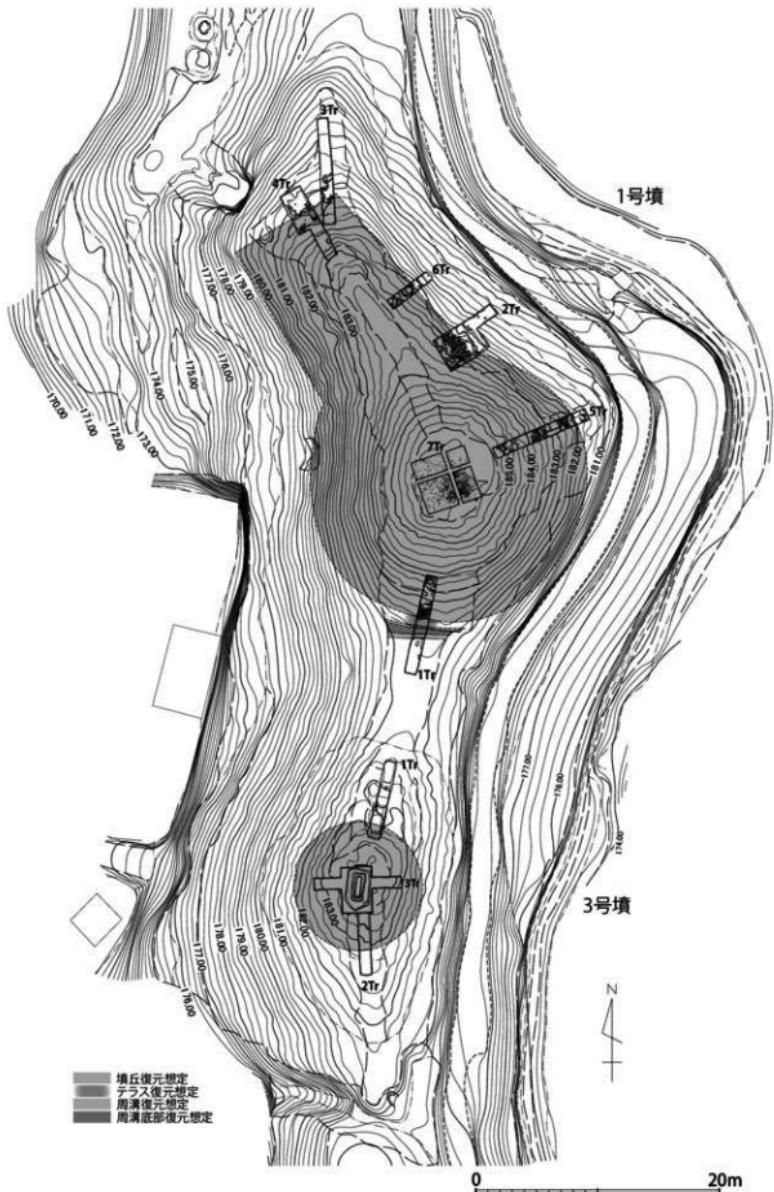
以上、発掘調査の成果と測量調査の成果を合わせ、復元案について述べてきた。ここで、各部の復元についてまとめたい。墳長36.5m、後円部径22.8m、くびれ幅12.5m、前方部長15.7m、前端幅9.5m、後円部高3.6m、前方部高2.6m(1.4m)の規模の前方後円墳である。また、段築については、後円部は二段築成、前方部は一段築成であることが発掘調査の成果から判明した。くびれ幅に比べ、前端幅が狭くなっている要因は、古墳が立地する丘陵が狭く、地形的な制約があったためであると考えられる。また、前方部の墳丘主軸と、隆起斜道から後円部の墳丘主軸が一致せず、前方部の主軸から15度ほど西側に振っている。これも、地形的な制約に伴うことが要因であろう。

②大久保3号墳

大久保3号墳については、前節の測量調査の成果より、古墳の北側と南側で確認した墳端と考えられる傾斜変換線から、直径14.4mを測る円墳であると考えた。今回の発掘調査により、古墳北側に設定された第1トレントと、南側に設定された第2トレントの発掘調査で、軟質の凝灰岩である地山を削り出した墳端を確認した。第1トレントでは、墳丘側のトレント端から1.2m北側で墳端と考えられる傾斜変換線の下端を検出した。第2トレントでは、墳丘側のトレント端から7m南側で墳端と考えられる傾斜変換線の下端を確認している。これら、検出した墳端を基に円を描くと、直径10.5mの規模となる。測量調査の成果で想定した直径よりも3.9m規模が小さくなるという結果となつた。また、第3トレントで墳丘の東西方向に調査区を広げ墳端の確認を実施したが、墳頂部から急激に落ちていることが確認されている。つまり、今回は3号墳の平面觀の復元を正円で示しているが、正円ではなく橢円形となることも考える必要がある。また、同トレントでは、墳頂部に石蓋を発見し、その下部の棺身は直接岩盤を彫り込んだ主体部を検出している。なお復元した円の中心は、主体部の中央となる。

③大久保2号墳

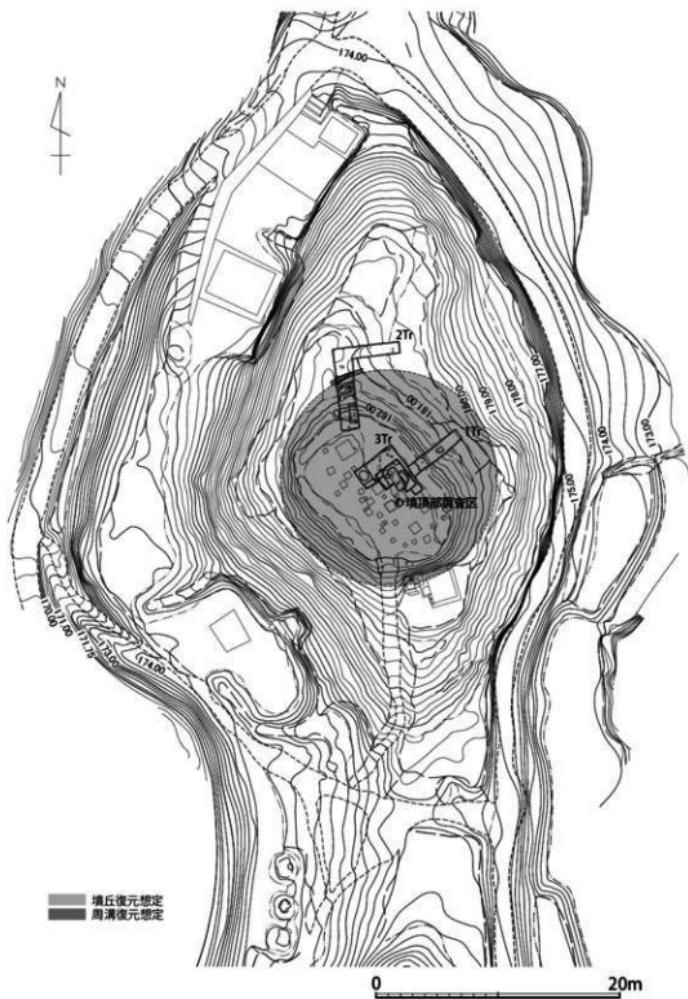
大久保2号墳は、前節で墳丘測量調査の成果から復元案を想定した。北西から南東方向の最大長18m、南西から北東方向の長さ13.3mの橢円形の平面觀を復元案として示した。しかし、墳頂部から現状の墳端ま



第242図 大久保1・3号墳復元図(1/400)

での間の等高線が墳丘主軸に並行するように直線状にめぐっていることから、方墳の可能性も視野に考慮する必要があると述べた。

大久保2号墳の発掘調査では、第2トレーニングの墳丘側のトレーニング端から4.1m北側で、溝状遺構を検出した。この溝状遺構は、古墳に伴うものなのか判断できなかったが、墳端の候補として考慮する必要がある。また、墳端の確認のために設定した第1トレーニングでは、明確な墳端である遺構を検出できなかった。墳頂部に設定



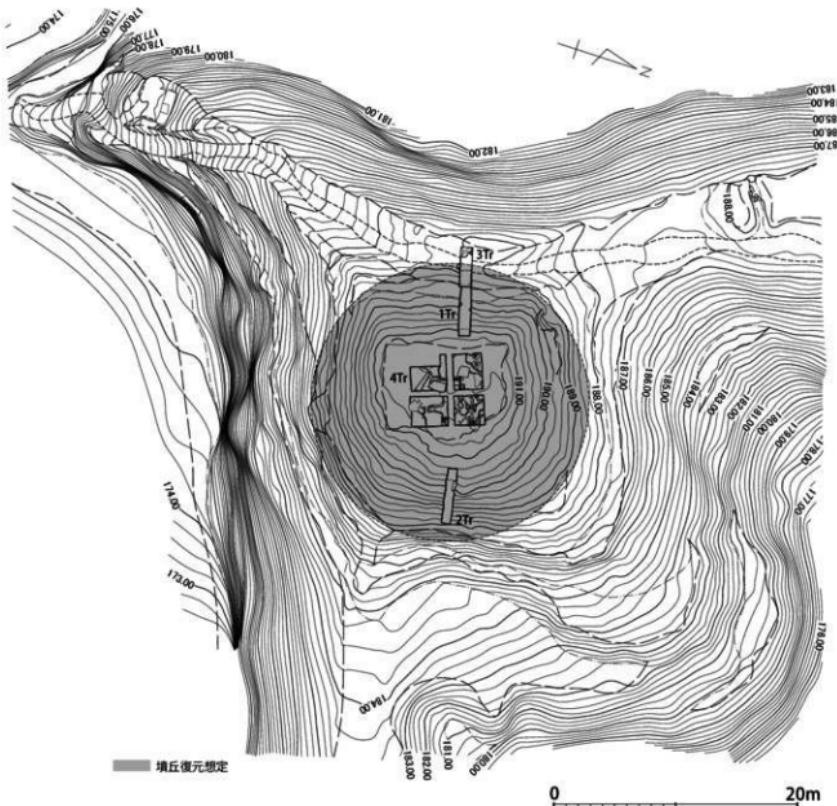
第243図 大久保2号墳復元図(1/400)

した墳頂部調査区では、現在墳頂部で露頭している石棺蓋の西隣りで主体部の墓壙を検出した。

以上、墳端の確定的な成果が得られていないため、推測の域は出ないが復元案を考えると、主体部の中心を円の中心にして、第1トレチで検出した周溝と考えられる地点までの半径を出すと、直径17.6mの円を描くことができる。この描いた円と現状の等高線および墳端の状況とを比較検討すると、墳丘西側でみられる現状墳端ラインとほぼ重なり、墳丘東側の第1トレチの外側にみられるテラスの下端ラインとも重なることが第243図で確認できることから、方墳ではなく直径17.6mの円墳である可能性が高いものと考えられる。

④城山古墳

城山古墳の墳丘測量調査の成果からの復元案については、前節で述べた。古墳の南西・北西・北東・南東側の墳端と考えられる傾斜変換線の下端ラインから、復元案として南北22.4m、東西25.4mの方墳であると想定した。しかし、墳丘東側の190.000mの等高線から墳頂部にかけて弧を描くようにめぐっており、墳頂部の平面形も東側のみ半円形を呈していることから、復元案の第2案として直径15mを測る円墳となる可能性についても言及した。



第244図 城山古墳復元図(1/400)

城山古墳では、計4箇所のトレンチ調査が実施された。墳丘西側に第1・3トレンチ、墳丘東側に第2トレンチ、墳頂部に4つの区からなる第4トレンチである。各トレンチでの発掘調査の成果についてまとめると、墳丘東側の第1・3トレンチでは、墳丘に伴う盛土は検出できず、後世の掘削による地山を削り出した痕跡しか確認できなかつた。また、墳丘西側に設定した第2トレンチでも同様の結果であった。以上の発掘調査の成果から、調査の所見でも述べているとおり、測量調査成果で復元した方墳という墳形ではないことが明らかになった。測量調査成果で第2案として提示した、円墳となる可能性が高いと判断できる。また、墳頂部に設定された第4トレンチでは、2区に第1主体部、1区に第2主体部が確認されており、この両主体部間を手掛かりに、復元案を改めて考えたい。測量調査でも指摘したが、墳丘西側では等高線が半円形にめぐっており、さらに北西側には188.750mの等高線に沿って長さ約4m、幅約1.6mのテラスがみられる。両主体部の間にを中心に、このテラス下端ラインまで半径11.4mの円を描くと、テラスのある範囲の墳頂部からテラス下端までの等高線と並行するラインとなる(第244図)。以上から、直径22.8mの円墳になると考えられる。墳頂高については、2.75mである。

⑤まとめ

これまで、測量調査と発掘調査成果を含めた復元案について述べてきた。前節で測量調査の成果からの復元案と今回の復元案を比較すると、墳形も規模もかけ離れた結果となってしまった。特に、大久保2号墳と城山古墳については大きく異なっていた⁽¹⁾。発掘調査の報告でも指摘されているとおり、中世以降の改変により軟質の凝灰岩である地山まで、墳丘に沿って掘削されていたため、築造当初の墳形が改変されていることが復元を困難にしていた。また、狭い丘陵上に立地しているという状況も、困難にしていた要因の一つでもある。なお、大久保2号墳と城山古墳については、発掘調査により墳頂が検出されていないため、復元案が推定の域を出ない。これらの課題をもとに、今後発掘調査により確認されることを期待したい。

(玉川)

【註】

(1) 墳丘測量調査での復元案と墳丘測量調査及び発掘調査の成果を合わせた復元案の数値の誤差は、下記の通りである。

第11表 漆生古墳群の復元案

古 墳 名		大久保 1 号墳	大久保 2 号墳	大久保 3 号墳	城山古墳
墳丘測量調査	墳長（直径）	41 m	m	14.4 m	22.4×25.4 m
	後円部径	25.4 m	— m	— m	— m
	くびれ部幅	13.6 m	— m	— m	— m
	前方部長	17.5 m	— m	— m	— m
	前方部前端幅	15.7 m	— m	— m	— m
	後円部高（墳頂高）	3.6 m	1.25 m	1.1 m	3.5 m
	前方部高	2.6 m	— m	— m	— m
	段築（後円部）	2 段	1 段	1 段	2 段
	段築（前方部）	2 段	— 段	— 段	— 段
墳丘測量・発掘調査	墳長（直径）	36.5 m	17.6 m	10.5 m	22.8 m
	後円部径	22.8 m	— m	— m	— m
	くびれ部幅	12.5 m	— m	— m	— m
	前方部長	15.7 m	— m	— m	— m
	前方部前端幅	9.5 m	— m	— m	— m
	後円部高（墳頂高）	3.6 m	1.25 m	2 m	2.75 m
	前方部高	2.6 m	— m	— m	— m
	段築（後円部）	2 段	1 段	1 段	1 段
	段築（前方部）	1 段	— 段	— 段	— 段

【引用・参考文献】

- 清水宗昭・田中裕介 1998「道ノ上古墳」『大分の前方後円墳』大分県文化財調査報告書第100輯 大分県教育委員会
田中裕介 1998「立野古墳」『大分の前方後円墳』大分県文化財調査報告書第100輯 大分県教育委員会
田中裕介 2019「豊後大野市の古墳群からみた地域社会と首長像」『古墳時代阿蘇ルートの研究』熊本大学文学部
玉川剛司 2004「小熊山古墳測量調査」『文化財研究所年報』2 別府大学文化財研究所
玉川剛司 2012「小坂大塚古墳測量調査について」『豊後大野市内遺跡発掘調査概報3』豊後大野市教育委員会
玉川剛司 2014「漆生古墳群測量調査について」『豊後大野市内遺跡発掘調査概報4』豊後大野市教育委員会
玉川剛司 2015「秋葉鬼塚古墳測量調査について」『豊後大野市内遺跡発掘調査概報5』豊後大野市教育委員会
玉川剛司 2016「坊ノ原古墳測量調査について」『豊後大野市内遺跡発掘調査概報6』豊後大野市教育委員会
玉川剛司 2019「重政古墳測量調査について」『豊後大野市内遺跡発掘調査概報9』豊後大野市教育委員会
諸岡 郁 2002「道ノ上古墳」『三重地区遺跡群発掘調査概報VI』三重町教育委員会
諸岡 郁 2017「坊ノ原古墳」『豊後大野市内遺跡発掘調査概報7』豊後大野市教育委員会
諸岡 郁 2018「坊ノ原古墳」『豊後大野市内遺跡発掘調査概報8』豊後大野市教育委員会

(3) 漆生古墳群の内容と築造時期

6次にわたる発掘調査の結果、漆生古墳群は前方後円墳1基、円墳2基、墳形不明古墳1基の4基の古墳からなる古墳群であることが判明した。以下各古墳の墳丘構造、主体部構造、および出土遺物をまとめ、築造時期の推定を行っておきたい。

①大久保1号墳

墳丘 大久保1号墳は墳長約36.5mの前方後円墳となる。後円部径は22.8m、前方部長は15.7m、後円部高3.6m、前方部高2.6m、後円部二段、前方部一段の構造であり、各段斜面に葺石、後円部一段目平坦面に敷石を確認した。後円部の周溝内では葺石がテラス状になることを確認している。

主体部 後円部墳頂には小円礫の堆積が認められ後円部墳頂部全体に置かれていることが判明した。平坦面の中央部に小円礫が集中する箇所が観察され、埋葬主体部の位置を暗示するものと考えられる。さらに第6次調査の直後に地下レーダー探査によれば、やはり中央部に1か所反射の弱い部分があり、その位置と小円礫の対応するものと推定される⁽³⁾。墳頂平坦面においても土師器の出土は極めて少なく、当初意図した年代判定のできる土器資料についてはわずかな手掛かりを得たに過ぎなかった。

築造時期 最後まで手掛けたとなる遺物の出土がほとんどなかった。須恵器の破片が一点も出土していないこと、土師器の小破片のなかに古墳時代前期の在地の安国寺式の系譜をひく壺の破片があることなど、墳形が前方部の高さが水平で狭小であり、玉川の墳丘形態の復元によれば(本書第242図参照)近隣の前方後円墳の中で前期末～中期初めと推定される豊後大野市三重町小坂大塚古墳と最も類似するという指摘を勘案すれば、築造の時期はその前後と推定される。

②大久保2号墳

墳丘 大久保2号墳においては、葺石が確認できることや、墳端は確認されていないため、墳形および墳丘規模は不明であるが、径17～8m規模の小古墳といえる。墳頂部が大きく削平され中世に整地されていることが判明した。

主体部 大久保2号墳では擾乱土中に石棺の身にあたる石材が全くなく、かわりに石棺蓋石の大きさに対応する赤色顔料の付着した土坑の底部を確認したことは特筆される。石棺蓋の内面の剝抜部の平面形が小口部において円形をなすのに対応して、土坑の小口部もまた円形である。石棺蓋土坑墓ともいえる主体部になる。

築造時期 年代の確定を可能にする出土遺物は確認されていない。中心主体を岩盤に棺身を掘り込み、舟形石棺の蓋を直接かぶせたものと判断された。大久保2号墳と同様の例はかつて高木恭二氏が「舟形蓋土壙」あるいは「舟蓋土壙」と呼んだものである⁽⁴⁾。いまのところこのような古墳の地山の岩盤に直接主体部を掘り込み、その上に大久保2号墳例のように舟形石棺の石蓋を載せる例は、高木氏が指摘した熊本県山鹿市菊鹿町灰塚

古墳と同県宇土市の西潤野1号墳で知られており、大分県では初めての例となる(第5章第3節参照)。この石棺蓋の特徴から中期後半の年代に収まるものと考えられる⁽⁵⁾。

③大久保3号墳

墳丘 大久保3号墳の墳丘は盛土で築造されるが、溝による区画や葺石を持たないため、中心主体の位置と盛土の範囲から推定して墳長10mほど円墳であったと考えられる。

主体部 なによりも意外だったのは蓋石の下に箱形石棺の棺身が存在すると考えていたのに、直接地山である凝灰岩の岩盤を割りぬいたものであったことである。通常「石蓋土壙墓」と呼ばれるものであるが、蓋石に縄掛け突起があることと赤色顔料による円文が描かれている点から通常の石蓋土壙墓ではないことは明らかである。また3号墳の主体部は断面土層の状況と蓋石周辺の赤色顔料の散布状態から、北側蓋石を再度開けていることが明らかであったが、内部には追葬者にあたる人骨の残存はなく、再開棺は必ずしも追葬のためではないことが考えられた。

築造時期 墳丘上や棺内からの出土遺物ではなく、次期決定の手掛かりは主体部の特徴しかない。箱形石棺に利用される平たい蓋石に縄掛け突起が削り出されている例は、県内では豊後大野市三重町鉢ノ窪3号石棺の同一墳丘上に隣り合って並列する箱形石棺の蓋石にもある。県外では福岡県飯塚市鹿毛馬きよう塚古墳の主体部箱形石棺の蓋石と、同じく飯塚市川津の川津1号墳にも認められる。かなり遠くだが茨城県行方市のみ塚古墳の箱形石棺にも両側に一対の縄掛け突起が削り出されている⁽⁶⁾。県外の3例はいずれも、共存する舟形石棺や出土須恵器から中期後半の古墳と考えられている⁽⁷⁾。おそらく中期中葉以後に普及した舟形石棺の縄掛け突起が、同時期に作られていた凝灰岩製の箱形石棺の蓋石に模倣されたものと考えられ、大久保3号墳の築造時期を中期中ごろから後半と推定する根拠となるものと考えられる。

④城山古墳

墳丘 城山古墳では葺石や周溝は確認できず、盛土が予想された墳頂調査区では意外にも表土直下で基盤層が露出し、中央に南北方向の中心主体の墓壙痕跡を確認した。墳頂部は箱形石棺の埋設墓壙の大半が消失するほどの削平を受けていたことが判明した。そうなると測量によって考えられた墳形は、削平後の形状であり、測量時に想定した方墳という形状は後世の変形をうけたのちの形状を、当初の古墳の形状と見誤ったことになる。したがって墳丘の形状は墳丘東側の形状が生きているとすれば円墳となり、墳端を確認できなかったので明確ではないが、直径23mほどと推定される。

主体部 墳頂部中央には、南北方向に組合せ式の箱形石棺が据え付けられ、内部は赤色顔料が塗布されていたと復元できる。墳長部東側には、赤色顔料が塗布された凝灰岩礫が確認されており、この付近に第2主体部が存在した可能性がある。

築造時期 出土した土師器高坏(第240図7・8)から古墳時代前期後半の築造年代が考えられ、箱形石棺の仕様もこれと矛盾しない。

⑤漆生古墳群の築造順序

漆生古墳群の4基からなる古墳群の築造の経過を復元すると、まず最初に築かれたのは最も北に位置する径20mを超す円墳の城山古墳である。葺石などの表面装飾はないが、1m程度の盛土により墳頂を形成し、中央に主軸を南北方向に向けた箱形石棺を中心主体とし、その東側に第2主体を設けた可能性が高い。石棺材の整形状態と出土した土師器高坏から古墳時代前期後半の築造と考えられるが、この時期に主体部を南北方向に向けるのは、東西方向が卓越する豊後南部では異例である。

次に構築されたのは前期末から中期前葉と推定される、墳長36.5mの前方後円墳大久保1号墳である。根拠は前方部の低い墳形である。墳形の特徴が同じ豊後大野市内の三重町小坂大塚古墳を近似することができておらず、築造にあたって三重盆地の勢力と関係があったものと推定される。

中期後半に大久保3号墳と大久保2号墳が相次いで築造されたものと考えられる。いずれも棺身を直接凝灰岩の基盤層に彫り込んで作り出し、蓋に箱形石棺や舟形石棺の蓋を用いる石蓋岩掘墓で、肥後地方から影響と考えられる。大久保3号墳の石蓋の縄掛突起をつくりだす特徴は、遠く福岡県飯塚市内の古墳群と特徴を共有する。

以上のように漆生古墳群は、城山古墳→大久保1号墳→大久保3号墳・2号墳の順で築造されたものであると推定される。大久保1号墳と大久保2・3号墳の間には半世紀以上のヒアタスがあり、連続的な築造ではない。古墳時代後期末になると城山古墳の直下の崖面に城山横穴墓群が築造を開始する。城山古墳が最古の古墳であることが意識されていたものと推定される。

(田中)

【註】

- (1) 大分県教育委員会編『大分の中世城館 第四集 総論編』2004、大分県教育委員会
『緒方町誌 総論編』2001 緒方町
- (2) 飯沼賢司編『環境歴史学的視点に立つ中世莊園研究一大分県直入・大野郡を中心に一』(科研費報告書9 2005 別府大学)
- (3) NPO法人いと地中探査研究所によって、2017年1月29日に実施された。
- (4) 高木恭二 1994「九州の削抜式石棺について」『古代文化』46-5 古代学協会
- (5) 神田高士・後藤幹彦・田中裕介・諸岡郁・渡部幹雄 1933「緒方町越生にある漆生古墳群の観察」『おおいた考古』6 大分県考古学会
- (6) 筑波大学甲山古墳研究グループ 2020「つくば市甲山古墳の研究一考察編一」『筑波大学先史学・考古学研究』31号、p77~108 筑波大学人文社会科学研究科歴史・人類学専攻
- (7) 嶋田光一ほか(八木健一郎執筆分) 2016「古墳時代」『飯塚市史』上巻p238、p259

第5章 遺構・遺物の検討

第1節 墳丘(形態・構造)について

玉川剛司

1. はじめに

豊後大野市内には、計8基の前方後円墳が存在し、大野川の南側にある旧三重町に所在する前方後円墳は6基である。これら6基の前方後円墳のうち、道ノ上古墳、重政古墳、秋葉鬼塚古墳、竜ヶ鼻古墳の4基は、三重盆地を中心に周辺の台地縁辺部に築造されている。なお、残り2基については、立野古墳は盆地北側に広がる大野川の河岸段丘上に立地し、小坂大塚古墳は盆地から1kmほど東側の台地上に立地する。また、大野川の南側に立地する前方後円墳でみると、三重盆地から西側にある旧緒方町の越生地区に広がる丘陵上に築造された、計4基からなる漆生古墳群の大久保1号墳が立地している。市内で唯一大野川の北側に立地する前方後円墳として、旧大野町に所在する坊ノ原古墳がある。

これまでの測量調査や発掘調査で、これら8基の前方後円墳には、共通する特徴がある。①前方部の墳頂高が低く、くびれ部から前方部にかけての墳頂がほぼ平坦である点である。②くびれ部幅と前端幅の差が同じ、もしくはあまり前端幅が広がらないという特徴。また、これら二つの共通点に加え、旧三重町に所在する前方後円墳は、③後円部が東側を向くという特徴がある。この③の方位に関しては、地形的制約もあり、偶然であることも考えられるが、先に述べた①・②の共通点も含め考慮すると、築造企画の段階で、墳丘主軸の共通の認識としてある程度の③の計画性があった可能性が高い。また、市内前方後円墳の発掘調査の成果から、墳端と周溝との間にテラスが確認されており、この「墳端外側のテラス」も当地域の前方後円墳の特徴である。

以下、前章で述べた、各古墳の復元案をもとにこの共通性と特徴点についてみていきたい。

2. 豊後大野市内の前方後円墳の復元案と特徴

測量調査と発掘調査の成果をもとにした復元案については、前章で述べてきた。ここでは、各古墳の企画性についてみていきたい。特に、先に述べた特徴として挙げた①・②について確認するために、数値化した一覧表で作成した(第12表)。①の確認のため、前方部の平面比率として、前端幅÷くびれ幅で平面観の数値化した。②の確認のため、前方部側面比率として、前方部高÷くびれ部高で側面観を数値化し、各古墳の企画性について考えたい。また、③の墳丘主軸および規模の差を確認するため、同スケールで紙面上が北側になるように方位を統一した図面を作成した(第245～247図)。

(1) 立野古墳(第245図)

立野古墳の墳丘主軸については、後円部を北東方向に向けて築造されている。測量調査と発掘調査の成果から、墳長65m、後円部径38.5m、くびれ幅20m、前方部長26.5m、前端幅20m、後円部高6.5m、くびれ部高3m、前方部高3.5mを測る前方後円墳であると復元案が示されている。この復元案から、くびれ幅と前端長が同じで、くびれ部高が3m、前方高が3.5mで、その差は0.5mとほぼ平坦である。①の前方部の平面比率は1.0、②の前方部の側面比率は1.2であった。墳端と周溝の間には、テラスが検出され、このテラスから周溝にいたる傾斜変換線に大型凝灰岩角礫を貼り付けた基底石の石列が確認されている。このような大型凝灰岩角礫を使用している市内の例は、立野古墳のみである。また、墳端の周りには前端側にはめぐらないものの馬蹄形の周溝が確認されている。

第12表 豊後大野市内前方後円墳の規模比較一覧

古墳名	立野古墳	小坂大塚古墳	道ノ上古墳	重政古墳	秋葉鬼塚古墳	竜ヶ鼻古墳	坊ノ原古墳	大久保1号墳
墳長	65 m	42.3 m	70 m	53 m	52.4 m	36.5 m	46.3 m	36.5 m
後円部径	38.5 m	25.7 m	46.5 m	28 m	32 m	19.4 m	27.2 m	22.8 m
前方部長	26.5 m	16.5 m	27.4 m	29 m	20 m	18.5 m	20 m	15.7 m
くびれ部幅	20 m	8.8 m	17.5 m	17.5 m	14.5 m	10 m	11.8 m	12.5 m
前端幅	20 m	13 m	22.8 m	19.5 m	18 m	18 m	16 m	9.5 m
前方部平面観差※1	0 m	4.2 m	5.3 m	2 m	3.5 m	8 m	4.2 m	-3 m
①前方部平面比率※2	1.0	1.5	1.3	1.1	1.2	1.8	1.4	0.8
後円部高	6.5 m	4.35 m	7 m	3.1 m	(3.5) m	(2.6) m	4.6 m	3.6 m
くびれ部高	3 m	1.8 m	2.5 m	1.5 m	1.75 m	(2.2) m	1.7 m	1.5 m
前方部高	3.5 m	1.8 m	2.75 m	2 m	2.25 m	(2.2) m	2.2 m	1.4 m
前方部墳頂高差※3	0.5 m	0 m	0.25 m	0.5 m	0.5 m	(0) m	0.5 m	-0.1 m
②前方部側面比率※4	1.2	1.0	1.1	1.3	1.3	(1.0)	1.3	0.9
段築（後円部）	一段	2段	3段	2段	一段	2?段	2段	2?段
段築（前方部）	一段	1段	2段	2段	一段	2?段	1段	1?段
周溝の有無	馬蹄形	前方後円形	後円部のみ	後円部のみ	馬蹄形	後円部のみ	馬蹄形	後円部のみ
墳端外側テラス	一部あり	あり	あり	あり	あり	—	あり	一部あり
その他	周堤あり							

※1 前端幅-くびれ幅

() 現状の数値

※2 前端幅+くびれ幅

一平均

※3 前方部高-くびれ部高

※4 前方部高+くびれ部高

(2) 小坂大塚古墳 (第245図)

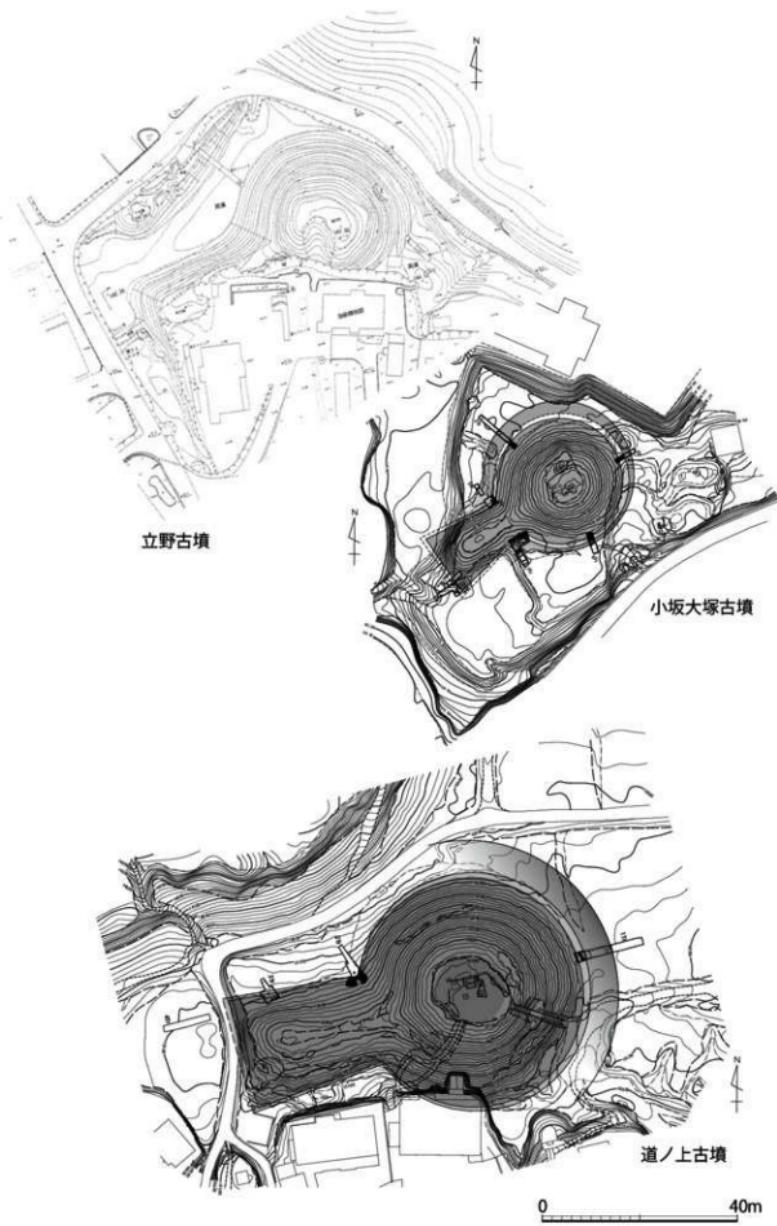
小坂大塚古墳の墳丘主軸については、後円部を北東方向に向けて築造されている。測量調査と発掘調査の成果から、墳長42.3m、後円部径25.7m、くびれ幅8.8m、前方部長16.5m、前端幅13m、後円部高4.35m、くびれ部高1.8m、前方部高1.8mを測り、後円部二段、前方部一段の前方後円墳であると復元案を示した。この復元案からみると、くびれ幅8.8mで、前端幅13mとその差は4.2mであり、くびれ幅より両側の前方部隅角が若干開いている。また、前方部の墳頂部は、くびれ部高と前方部高とともに1.8mと同じ高さである。①の前方部の平面比率は1.5で、平面観の差が4.2mに対し、市内前方後円墳で一番高い比率となった。②の側面比率は1.0であった。発掘調査において、墳端の外側にはテラスが検出され、このテラスから周溝にいたる傾斜変換線にひと回り大きな円礫を使用した基底石の石列が確認されている。この墳端外側のテラスから続く周溝については、前端が削平されているため、全周しているか不明であるが、前方後円墳形を呈している。

(3) 道ノ上古墳 (第245図)

道ノ上古墳の墳丘主軸については、後円部を東北東方向に向けて築造されている。測量調査と発掘調査の成果から、墳長70m、後円部径46.5、くびれ幅17.5m、前方部長27.4m、前端幅22.8m、後円部高7m、くびれ部高2.5m、前方部高2.75mを測り、後円部三段、前方部二段の前方後円墳であると復元案を示した。この復元案からみると、前方部の平面観は、くびれ幅17.5mと前端幅22.8mでその差は5.3mと前方部があり開かない。また、前方部の墳頂部については、くびれ高2.5m、前方高2.75mで、その差は0.25mであることから平坦であると言える。①の前方部の平面比率は1.3、②の前方部の側面比率は1.1であった。また、発掘調査において、墳端の外側にはテラスが検出され、このテラスから周溝にいたる傾斜変換線にひと回り大きな円礫を使用した基底石の石列が確認されている。この墳端外側のテラスから続く周溝については、前端が削平されているため、全周しているか不明であるが、後円部のみ周溝が検出され、丘陵から古墳を隔絶するための溝であると考えられる。

(4) 重政古墳 (第246図)

重政古墳の墳丘主軸は、後円部を東南東方向に向けて築造されている。測量調査と発掘調査の成果から、墳長53m、後円部径28m、くびれ幅17.5m、前方部長29m、前端幅19.5m、後円部高3.1m、くびれ部高1.5m、



第245図 立野・小坂大塚・道ノ上古墳 (1/1000)

前方部高2mを測り、後円部二段、前方部二段の前方後円墳であると復元案を示した。この復元案からみると、くびれ幅17.5mで、前端幅19.5mとその差は2mであり、くびれ幅より両側の前方部隅角が若干開いている。また、前方部の墳頂部は、くびれ部高1.5mで、前方部高2mでその差は0.5mとなることから平坦であるといえる。①の前方部の平面比率は1.1で、②の側面比率は1.3であった。また、発掘調査において、墳端の外側にはテラスが検出され、小坂大塚古墳と同様、テラス外側の基底石には、大きな円礫を使用した基底石の石列が確認されている。この墳端外側のテラスから続く周溝については、後円部のみ確認されており、丘陵から古墳を隔絶するための溝であると考えられる。

(5) 秋葉鬼塚古墳(第246図)

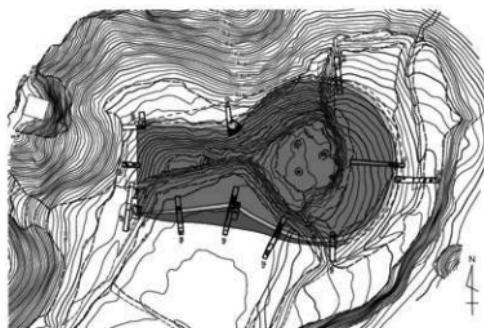
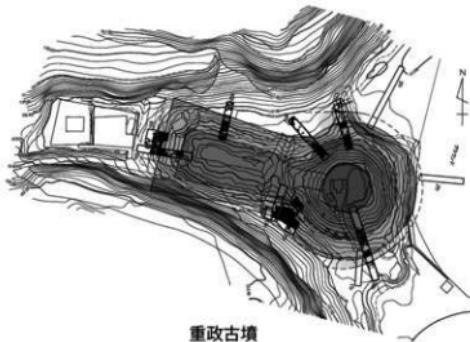
秋葉鬼塚古墳の墳丘主軸は、後円部を東方向に向けて築造されている。測量調査と発掘調査の成果から、墳長52.4m、後円部径32m、くびれ幅14.5m、前方部長20m、前端幅18m、後円部高3.5m、くびれ部高1.75m、前方部高2.2mを測る前方後円墳であると復元案を示した。しかし、この復元案で想定した後円部高については、墳頂部が大きく削平を受けているため、現状の墳頂部の高さである。築造当初は、現状墳頂部高より2mほど高かったものと考えられる。以上、この復元案をみると、くびれ幅14.5mで、前端幅18mであり、くびれ幅より両側の前方部隅角が3.5m開いている。また、前方部の墳頂部は、くびれ部高1.75mで、前方部高2.25mであり、その差は重政古墳と同じ0.5mとなる。①の前方部の平面比率は1.2で、②の側面比率は1.13であった。また、発掘調査において、墳端外側のテラスと周溝が検出されている。また、周溝については、前端部側と後円部側が後世の削平により不明であるが、馬蹄形の溝が隅角付近から後円部の東側まで確認されている。

(6) 竜ヶ鼻古墳(第246図)

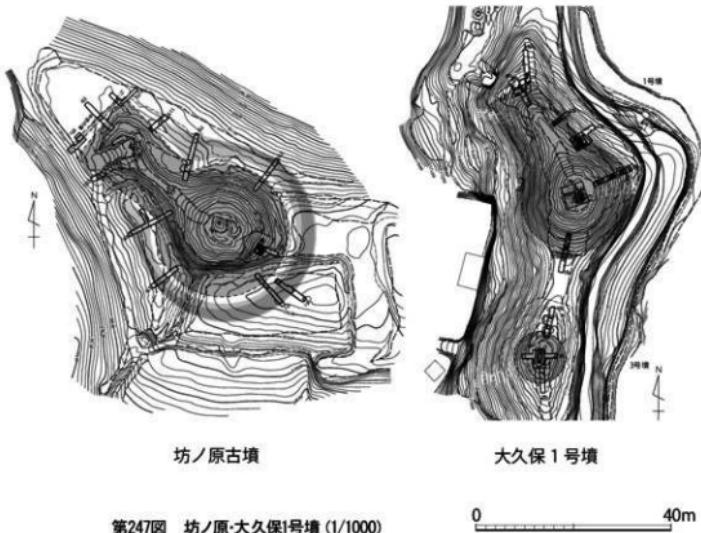
竜ヶ鼻古墳の墳丘主軸は、後円部を北東側に向け築造されている。測量調査と発掘調査の成果から、墳長36.5m、後円部径19.4m、くびれ幅10m、前方部長18.5m、前端幅18m、後円部高2.6m、くびれ部高2.2m、前方部高2.2mを測る前方後円墳であると復元案を示した。なお、後円部高、くびれ部高、前方部高については、墳頂部が削平を受けているため、現状の墳頂部の数値である。復元案をみると、くびれ幅10m、前端幅18mとなり、両側のくびれ部から前方部隅角かけて8m前端幅が広くなる。墳頂部については、先に述べたとおり削平を受けているためその差は算出できない。①の前方部の平面比率をみると、1.8と最も高い数値となっている。出土した遺物から、中期後半に築造されたと考えられるため、市内の前方後円墳の中で最も新しい前方後円墳である。②の数値が高いことも、築造時期が新しいことと関連すると考えられる。また発掘調査で、後円部側に溝を検出し、現況の地形から墳丘に沿ってめぐる周溝ではなく、丘陵と古墳とを空間的に切り離すための堀切の溝であると考えられる。この溝底部の墳丘側の傾斜変換線と復元した墳端との間に平坦な空間があるため、この空間が墳端外側のテラスであると想定している。

(7) 坊ノ原古墳(第247図)

坊ノ原古墳は、後円部を南東方向に向けて築造されている。測量調査と発掘調査の成果から、墳長46.3m、後円部径27.2m、くびれ幅11.8m、前方部長20m、前端幅16m、後円部高4.6m、くびれ部高1.7m、前方部高2.2mを測る前方後円墳で、段築については後円部二段、前方部一段となる復元案を示した。この復元案から前方部についてみていくと、くびれ幅11.8m、前端幅16mで、くびれ部より4.2m前方部隅角が広がっている。また、前方部の墳頂部については、くびれ部高1.7m、前方部高2.2mで、その低高差は0.5mであることからほぼ平坦であることがいえる。これらの数値から、①の前方部の平面比率は1.4、②の前方部の側面比率が1.3であった。坊ノ原古墳は、明確な墳端外側のテラスとその痕跡が発掘調査で確認されていることから、墳端に沿って



第246図 重政・秋葉鬼塚・竜ヶ鼻古墳 (1/1000)



全周すると考えられる。また、さらに外側には馬蹄形の周溝も検出されている。しかしこの周溝は、前方部の両隅角に向けて浅くなっていることから、前端部側にはめぐっていられない可能性が高い。

(8) 大久保1号墳 (第247図)

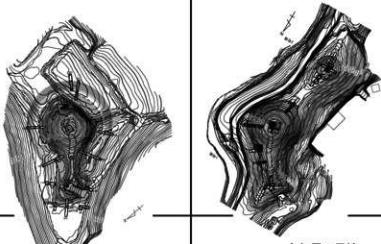
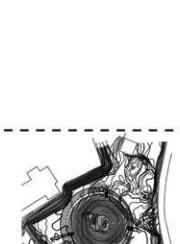
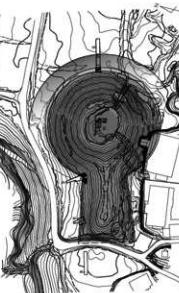
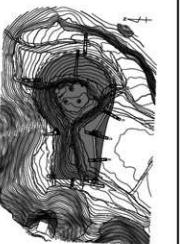
大久保1号墳は、後円部を南南東に向けて築造されている。測量調査と発掘調査の成果から、墳長36.5m、後円部径22.8m、くびれ幅12.5m、前方部長15.7m、前端幅9.5m、後円部高3.6m、くびれ部高1.5m、前方部高1.4mを測る規模の前方後円墳である。段築については後円部二段、前方部一段になると発掘調査で確認されている。この復元案から前方部についてみると、くびれ部幅12.5m、前端幅9.5mとなり、前端幅が3m狭くなる。また、前方部の墳頂部については、くびれ部高1.5m、前方部高1.4mとほぼ平坦であるが、前方部の墳頂の方が0.1m低くなるという結果となった。これらの要因は、古墳が立地する丘陵が狭く、地形的な制約があったためであると考えられる。また、前方部の墳丘主軸と、隆起斜道から後円部の墳丘主軸が一致せず、前方部の主軸から15度ほど西側に振っていることも、地形的な制約に伴うことが要因であろう。以上から①の平面比率は0.8、②の側面比率は0.9という結果となった。後円部南側の第1トレチの発掘調査の結果、墳端の基底石よりも外側に0.6m程のテラスと、さらに外側に溝が検出されている。このテラスは、これまで述べてきた古墳でも確認されている墳端外側のテラスである。また、溝は、後円部側のみ確認されていることから、丘陵と古墳とを空間的に切り離すための堀切の溝であると考えられる。

3. 市内の前方後円墳の共通性

これまで、市内に所在する前方後円墳の復元案と特徴について、古墳ごとに述べてきた。ここでは、共通する特徴点についてまとめていきたい。

(1) 墳端外側のテラス

各古墳の発掘調査で、検出された墳端外側に広がるテラスについて考えたい。

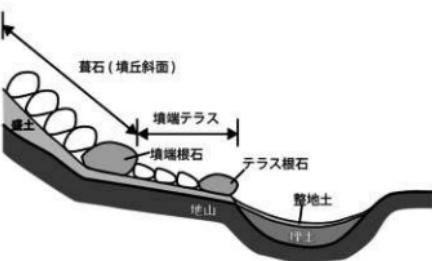
時期区分		大野川北側		大野川南側	
		旧大野町	旧緒方町	旧三重町	
	前半				
前期	後半				
	前半				
中期	後半				

第248図 墳丘比較図(編年) (1/1600)

0 40m

- 303 ~ 304 -

この墳端外側のテラスは、豊後大野市内の前方後円墳で一貫してみられる特徴である。その構造を確認するために、モデル図を作成した(第248図)。第248図をみると、墳端の根石とテラス外側の根石は、葺石よりも比較的大きな石材を選別して使用している。これら根石間にも、葺石と同じように敷石されているのが特徴である。実際の工程を考えると、①周溝や墳端となる個所の地山を堀込み古墳の大まかな平面プランを形成、②盛土の上に墳端の根石配置、③テラスの敷石、④テラス外側の根石を配置という順である。ただ、この墳端外側のテラスは、同じ古墳でも部分的に幅が広くなる個所や、狭くなる個所がみられ、全て同じ幅で形成しているわけではない。このテラスの用途については、周溝まで敷石することで、古墳を大きく視認させるという用途、地山形成後の築造企画との齟齬が出た場合の補正用の空間、流水から墳丘盛土の流出を防ぐための護岸などが考えられる。



第249図 墳端テラスマルク図

(2) 前方部の平面プランと立面プラン

前方部の平面比率である①の数値についてみていく(第12表)。

前端幅とくびれ部幅の差でみると一番大きさがでているのは、5.3mという数値の道ノ上古墳で、次に4.2mの小坂大塚古墳と坊ノ原古墳である。しかし、①の平面比率でみると、小坂大塚古墳の方が1.5、坊ノ原古墳が1.4、道ノ上古墳が1.3という数値であった。つまり、幅の差と①の平面比率を相関的にみると、①の数値が1~1.3までのAグループと1.4~1.8のBグループに分けられる。Aはくびれ部幅に対し前方部隅角があり開かず柄鏡形に近い平面プランのグループで、Bは前方部隅角が開くという平面プランのグループである。この条件に実際に古墳であてはめると、Aグループが立野古墳、道ノ上古墳、重政古墳、秋葉鬼塚古墳、大久保1号墳である。Bグループが小坂大塚古墳、坊ノ原古墳、竜ヶ鼻古墳である。

また、前方部の側面からみた高低差を算出するために、前方部高からくびれ部高を差し引いた数値をみると、全ての古墳が0.5m以内に収まることがわかる。また、②の側面比率についても0.9~1.3に収ることから、市内の前方後円墳のすべてが、前方部の墳頂部が平坦な立体構造物として築造されていることがわかる。

以上のことから、市内の前方後円墳は、墳端外側にテラスを設けるという企画性、築造する地形に合わせ後円部を東向けるという規則性からも、同じ概念のもと築造されていると考えられる。また、同じ前方部の墳頂部を平坦にするという立体的な企画性をもちつつ、AグループとBグループの二つの築造企画があると考えられる。

4. 墳丘復元からみた前方後円墳の編年

市内の前方後円墳のうち、出土遺物から最も古い古墳が前期中葉の立野古墳で、新しい古墳が中期後半の竜ヶ鼻古墳であることが判明している。復元案や先ほど述べた築造企画に触れながら、豊後大野市内に所在する前方後円墳の編年について考えたい。

Aグループの立野古墳が前期中葉で、最初に築造された前方後円墳である。その特徴は、くびれ幅と前端幅ともに同じ幅であり、前方部の墳頂部が平坦であり、馬蹄形の周溝をもつ。墳長が65mと市内の前方後円墳の中で2番目の規模となる。次に続くのが、Bグループの小坂大塚古墳である。遺物は出土していないが、墳丘や周溝の企画性、葺石や墳端の根石、墳端外側のテラスの敷石状況から、道ノ上古墳よりも一段階古い時期が想

定され、前期後半墳の築造であると考えられる。この小坂大塚古墳と同時期であると考えられるのが、坊ノ原古墳である。小坂大塚古墳と坊ノ原古墳とを比較すると、同じBグループの古墳で、両古墳とも前方部の平面差が4.2mで、①の平面比率が1.5と1.4とはほぼ同数値で、前方部の高低差と②の側面比率もほぼ同数値である。古墳時代前期後半の築造であると考えられるが、墳端の根石や墳端外側のテラスの敷石の状況から、坊ノ原古墳の方が後出する可能性もある。

Aグループの道ノ上古墳は、市内最大規模の前方後円墳である。墳端の根石と墳端外側のテラスの根石が葺石よりも比較的大きいサイズの石を使用している点や、葺石の敷石状況から、小坂大塚古墳に近い様相を示し、重政古墳や秋葉鬼塚古墳よりも若干古い様相を呈していることから、前期後半から中期初頭にかけての築造であると推察される。

同じくAグループの重政古墳と秋葉鬼塚古墳については、台地もしくは尾根上に突出した台地の縁辺に築造されている点や、墳丘主軸に対し左右に非対称で歪んだ形態があるが、後円部径とくびれ部幅がほぼ同じである点から、同じ企画性のもと築造されている可能性が高いと考えられる。また、先ほど道ノ上古墳でも述べたように、葺石の配石方法、墳端外側のテラスの敷石方法からみると、道ノ上古墳の方が古い様相を呈すことから、道ノ上古墳の次の段階で築造されたと考えられる。

大久保1号墳については、復元案から、Aグループに属し、①の平面比率から立野古墳の前方部と同系統の企画性が考えられる。しかし、墳端の基底石の配置の状況から立野古墳よりも後出すると考えられるため、小坂大塚古墳と同時期の可能性がある。

竜ヶ鼻古墳は、Bグループに属し、①の平面比率の数値が他の古墳よりも突出して高く、後円部径と前端幅もほぼ同じであることから、市内の前方後円墳の中で一番新しい時期の築造で、中期をこえる時期ではないと判断されることから、中期後半代の築造であると考えられる。

5. まとめ

以上、編年案し示してきたが、時期ごとに改めてまとめたい。

前期中葉に立野古墳が築造され、前期後半に小坂大塚古墳、坊ノ原古墳、大久保1号墳が築造される。前期末から中期初頭にかけて、道ノ上古墳が築造され、中期前半になると、重政古墳、秋葉鬼塚古墳が築造される。そして、中期後半に竜ヶ鼻古墳が築造されるという編年である。この編年観で、A・Bグループについて考えると、豊後大野市内では、築造企画として基本的にAグループの平面プランがベースとなり、BグループはAグループからの派生もしくは周辺からの影響で派生すると考えられる。なお、Bグループの竜ヶ鼻古墳は、前方後円墳の編年観で後期になるにつれて後円部径と前端幅が同じになるという状況からBグループに入っているため、竜ヶ鼻古墳は除外する。このBグループは、前期後半代の一時期だけ築造されていることになる。また、竹田市にある七ツ森古墳群のB・C号墳は、小坂大塚古墳と同企画の古墳であると考えられ、築造時期についても同時期であることから、大野川中・下流域に一時的に広がった墳丘企画であった可能性が考えられる。

【引用・参考文献】

- 清水宗昭・田中裕介 1998「道ノ上古墳」『大分の前方後円墳』大分県文化財調査報告書第100輯 大分県教育委員会
田中裕介 1998「立野古墳」『大分の前方後円墳』大分県文化財調査報告書第100輯 大分県教育委員会
田中裕介 2019「豊後大野市の古墳群からみた地域社会と首長像」『古墳時代阿蘇ルートの研究』熊本大学文学部
玉川剛司 2004「小熊山古墳測量調査」『文化財研究所年報』2 別府大学文化財研究所
諸岡 郁 2002「道ノ上古墳」『三重地区遺跡群発掘調査概報VI』三重町教育委員会
諸岡 郁 2017「坊ノ原古墳」『豊後大野市内遺跡発掘調査概報7』豊後大野市教育委員会
諸岡 郁 2018「坊ノ原古墳」『豊後大野市内遺跡発掘調査概報8』豊後大野市教育委員会

第2節 大野川中流域における埴輪群

田中 裕介

1. はじめに

旧豊後国は西海道の一国として九州の一員とみなされている。しかし瀬戸内海という内海を中心におき海上交通を介してみれば、九州の他の諸国よりも、豊後国は畿内や吉備などの環瀬戸内諸国と近い関係にあることに気が付く。このような地理的影響は古墳時代も例外ではない。一方、太平洋への出口に接する豊後国は、日向大隅をへて南島へ連なる交通の結節点でもあった⁽¹⁾。豊後における古墳時代の埴輪の分布にも畿内からの影響が波状的におよぶ傾向が顕著で、埴輪生産が豊後で定着し自律的に発展するいまとをえたえなかった。そのため豊後の埴輪の内容と分布の様相は、在地の古墳からの技術的継承よりも、畿内などの発信元との直接的関係を反映していると思われ、周辺あるいは遠隔各地との古墳時代の首長間あるいは集団間の関係をたどる事がかりとなる。

第13表 豊後の埴輪の編年的位置

		■円筒埴輪	●型垂埴輪	▲「壺台形埴輪」				
集成編年	和田編年	広瀬 2015	国東	大分	海部	臼杵	大野	関連
1期	1期	埴輪以前						
			I期古相					
2期	2期	中相	小熊山 ■●▲					
								天神寺山 ■
3期	3期	新相	大分川河川敷 ■				立野 ■●	
4期	II期 1 2 3 4	II期 1 2 3 4	御陵 ■・浅草神社4号 ■	野間1号 ●				
				小牧山6号 ●				
5期	6期	新相	辰巳相	御塔山 ■				
6期	7期	IV期古相 新相	辰巳相 ■	大臣坂 ■	大在 ■	下山 ■	道の上 ■●・重政 ●・秋葉鬼塚 ■●	馬鹿野地 1号 ●
7期	8期	IV期新相	大野 ■・真玉大塚 ■	辻1号 ■			竜ヶ鼻 ■	

ここでは弥生時代後期に安国寺式壺形土器という飾られた土器を共有する文化圏が成立していた大分県南部と東部のなかにあらわれた、内陸の大野川中流域の埴輪を検討する(第250図)

各古墳の円筒埴輪の編年的位置付けについては九州あるいは豊後のなかで資料を集成し、型式学的操作をおこなった編年案を作成するという従来から行われてきた方法はとらない。地域編年と広域編年の分節化についての廣瀬漣の批判である「地域編年の多くは、川西の円筒埴輪論の枠組みを地域内で再生産するものが大半であり、地域独自の編年構築に至ったものが皆無と言つてよい。その理由は古墳時代前半においては地域独自な埴輪の展開が存在しなかつたことに求めることができる。すなわち、前半期の埴輪の編年の場合、日常的に生産・消費される土器で実践されているような広域編年と地域編年といった分節化自体が不適当なのであり、周辺地域の埴輪の厳密な時間的、空間的位置づけは、王権中枢部のありかに準拠して行うのが正しい方法であったのである。」⁽²⁾ という見解に同意するものである⁽³⁾。豊後もまた廣瀬のいう周辺地域に含まれることは言うまでもない⁽³⁾。それゆえ本稿では廣瀬の編年枠組を使用する。対象となる古墳群の編年位置付けは第13表のように考えている。



第250図 豊後大野市三重町の古墳

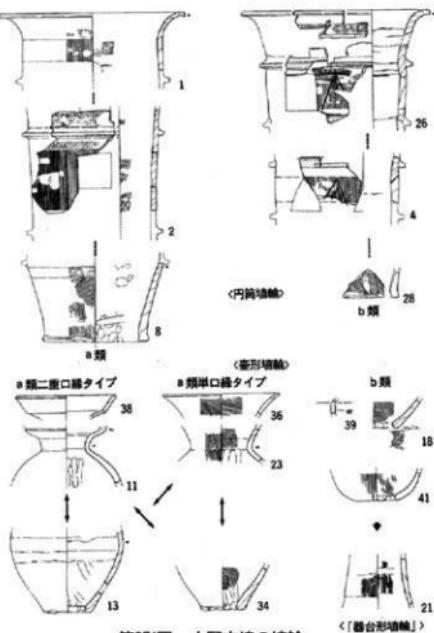
さらに畿内の王権中枢発でありながら地域への定着が顕著な壺形埴輪にしても、豊後だけで地域編年を確立することは円筒埴輪同様にむつかしい。円筒埴輪よりもずっと多く作られているが、それでもなお特定の大型埴輪に際しては生産された、廣瀬の言う「単発生産型」に近く、同一の工人あるいはその系統が重ねて製作することがまれなので系統的に変遷することが少ない。本稿では編年の手掛かりとして円筒埴輪との共伴関係を中心に考え、そのうえで他の地域に由来する要素を指摘し、壺形埴輪における地域性を考える。

2. 立野古墳の埴輪

立野古墳は別府湾南岸に開口する大野川水系の内陸部に所在する埴輪65mの前方後円墳である(田中編1998)。この古墳の確認調査によれば、朝顔形埴輪ではなく普通円筒埴輪と壺形埴輪の二種類のみが出土している(第251図)。円筒埴輪は大きく外反する口縁(1・26)、高くシャープな突帯、同一の段内に3穴以上の透穴(26・4)が施され、その形は方形と正三角形のみで円形を伴わない。透穴は口縁部と底部を除く格段に縦列あるいは千鳥に配置されている。透穴間には三角あるいは格子状の線刻(26・4)が施される。底部高と突帯間はほぼ等しく、口縁部高はやや短い。薄手でシャープな造りの円筒埴輪a類と、厚手で突帯間の狭い円筒埴輪b類に分けられるが、型式的には同一系統の円筒埴輪である。外反口縁と透穴の特徴から見て廣瀬1期新相にあたる。立野古墳に先行すると考えられる小熊山古墳の円筒埴輪⁽⁴⁾とは、その外観、突帯形状、透穴などあらゆる点で異なっており、小熊山の円筒埴輪の系譜をひくものではないと考えられる。

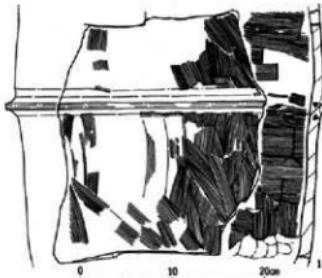
壺形埴輪は二重口縁と単口縁があり、前者のほうが多い。単口縁は緩く外反する。二重口縁は頸部が直立するもの(39)と外傾するもの(11)があり、上部口縁は短い(38)。底部はいずれも開放形(13・34・18・41)で、焼成前穿孔ではない。底部にも厚くしっかりとするa類と薄く仕上げるb類がある。したがって胴部全体は最大径を中位に持つ長胴形となる。単口縁の口径は22cm、胴部最大径は22~24cm、底部径は9cm、器高は30数cmほどと推定され、長胴化しているが、小熊山古墳の壺形埴輪に比べるとかなり小型化している。なお立野古墳の壺形埴輪については底部の成形技法などを根拠に中期前葉(集成編年5期並行)に置く編年案が竹中克繁氏によってしめされている⁽⁵⁾が、後述するように、立野古墳の埴輪の祖型ともいえる大阪府茨木市将軍山古墳とその後に作られたと考えられている豊中市小石塚古墳すでに底部開放成形の壺形埴輪が造られており、その技法の影響が考えられるので、立野古墳の壺形埴輪の年代を中期にまで降ろす根拠にはならないと考える⁽⁶⁾。

ところで立野古墳と同一型式の円筒埴輪として大分市大分川河川敷採集埴輪が知られている⁽⁷⁾。この埴輪は1997(平成9)年冬に大分市元町の大分川河川敷で採集された胴部から底部にかけての破片である(第252図)。表面に軽い摩滅がみられるので近傍から河川に流れ落ちたものと推定されている。底面は欠失しているが基底



第251図 立野古墳の埴輪

(出典: 田中編1998, P41、第15図)



第252図 大分川河川敷採集埴輪

古墳の埴輪である⁽⁹⁾。将軍山2号墳は墳長107mの前方後円墳である。「茨木將軍山古墳」として浜津を代表する前期古墳として知られていた。この将軍山古墳からは各段に置かれて埴丘を囲繞する大量の普通円筒埴輪と少數の器台形円筒埴輪、それに墳頂を中心に用いられた壺形埴輪が出土している。このなかで普通円筒埴輪が立野古墳の円筒埴輪に類似する(第253図)。将軍山古墳例にみられるような低位置突帯こそ認められないが、ゆるやかに外反する口縁部、方形の透穴は酷似している。特に立野古墳で円筒埴輪a類と分類した円筒埴輪は胴部径や突帯間隔も近似する。

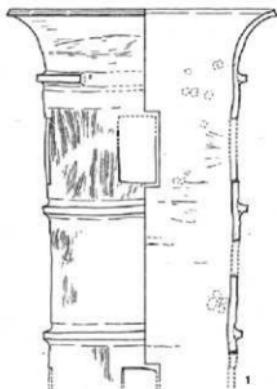
他方壺形埴輪では形態と大きさは大きく異なるが、底部を開放成形する点で将軍山古墳の壺形埴輪とその特徴が一致している。将軍山古墳の壺形埴輪の大型化とそれに伴う底部開放成形の出現⁽¹⁰⁾は、大型化の傾向が収まつてからも同じ浜津の小石塚古墳などに継承されており、このような大阪湾北岸だけでなく、愛媛県今治市妙見山1号墳のように瀬戸内海沿岸の前期中葉の古墳にも壺形埴輪の底部開放成形は認められる。以上の点から立野古墳の壺形埴輪が底部開放成形と長胴化という特徴から中期まで下げる見解⁽¹¹⁾は妥当ではなく、将軍山古墳の埴輪制作技法が豊後南部に、前期中葉の新しい時期に伝わったものだとすれば、立野古墳の埴輪の製作年代は、筆者がかつての報告書⁽¹²⁾の中でのべた前期後葉という考えをさらに一段階古くしてよいと考える。廣瀬氏が立野古墳の円筒埴輪と壺形埴輪のあいだに年代の齟齬が生じているという指摘⁽¹³⁾は、円筒埴輪の年代に壺形埴輪の年代をさかのぼらせるで解消すると考える。

3. 道ノ上古墳の埴輪(第254図)

豊後大野市三重町最大の前方後円墳で、墳長70mをはかる。2000(平成12)年度に、大野郡三重町教育委員会によって範囲確認調査が行われ、くびれ部や後円部の墳端が確認され、埴輪が出土した⁽¹⁴⁾。普通円筒埴輪の破片と、壺形埴輪の破片が断片的に出土したのみで全形に復元できる個体はない。それでも破片の中に、家形埴輪や器財埴輪と考えられるものはなく、朝顔形埴輪もない。壺形埴輪についても、單口縁ばかりで二重口縁になりそうな破片は一点もない。このような普通円筒埴輪と單口縁の壺形埴輪の二種類といふ埴輪の器種構成は、後述する重政古墳と秋葉鬼塚古墳と共に、二重口縁の壺形埴輪の比率が高い立野古墳との隔たりを感じさせる。

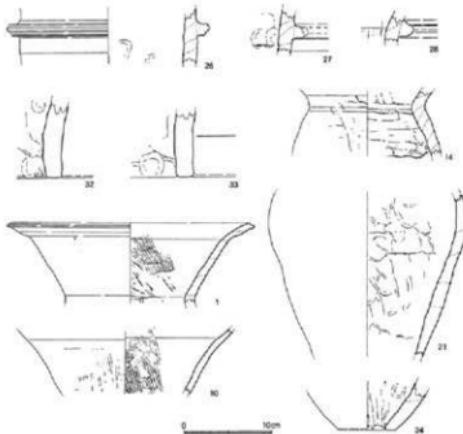
部の大半と第一突帯が残り、方形の透穴が認められる。突帯付近の胴部復元径は33.8cm、基底部も15センチ以上が残る大型の円筒埴輪である。突帯は高く突出し、外面には二次調整のタテハケを施す。突帯が方形であることと、突帯間の上位につくらしいところから立野古墳の円筒埴輪a類とよく似ていることを指摘したことがある⁽⁸⁾。このように大分川河川敷採集埴輪は立野古墳の同一型式と言ってもよい円筒埴輪であり、立野古墳と同時期に築造された未知の古墳が大分川下流域に存在したことは疑いない。

この立野古墳と大分川河川敷採集の二例の円筒埴輪を考えるにあたって最も興味深い資料は大阪府茨木市将軍山2号



第253図 茨木將軍山古墳の埴輪
(出典:廣瀬・若杉2005, p.6図3.1)

円筒埴輪は突帯の付く胸部片と基底部片が出土し、突帯は比較的高く、典型的な台形突帯は今のところ認められない。壺形埴輪は頸部が大きく開きながら伸び、口縁部が屈折する。この特徴は重政古墳と秋葉鬼塚古墳の壺形埴輪でも見ることができる。胸部はなで肩で、胸部最大径はかなり上方になり、底部は開放成形で、すばまるように細くなる丁寧な造りである。全体として長胴である。外面はナデ調整、頸部から口縁部の内面はナナメハケ調整、胸部内面は接合痕を残す指ナデ調整である。一部に赤色顔料の塗布が認められる。円筒埴輪の破片は少なく口縁部もないので、形態的比較が容易ではないが、立野古墳の円筒埴輪とはかなり異なる。

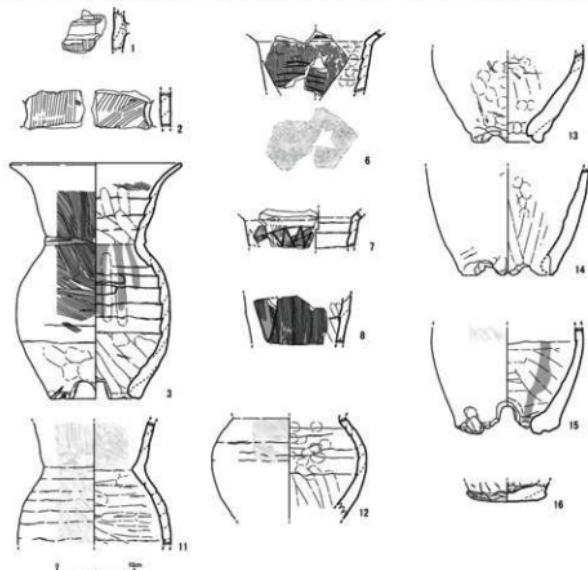


第254図 道ノ上古墳の埴輪

4. 秋葉鬼塚古墳の埴輪（第255図）

秋葉鬼塚古墳は墳長52mの周溝が全周する前方後円墳である。低地を挟んで隣り合う台地上に立地する重政古墳と同規模の古墳と考えてよい。円筒埴輪3点と多量の壺形埴輪が出土した。一方、家形埴輪や器財埴輪等は一点もなく、円筒埴輪もきわめて少数が使用されたと考えられる。

形式構成は円形透穴を持つ円筒埴輪と單口縁の壺形埴輪の二器種のみからなる。壺形埴輪は、單口縁の頸部上位で外方に屈折する形態的特徴がある。この点は道ノ上古墳と重政古墳と共に通する。さらに壺形埴輪には頸部に線刻や三角形の透穴を施す例が散見され、底部も開放して成形し、乾燥時の支持具の痕跡が明瞭な製作痕を残している。線刻や透穴を施す点では重政古墳の壺形

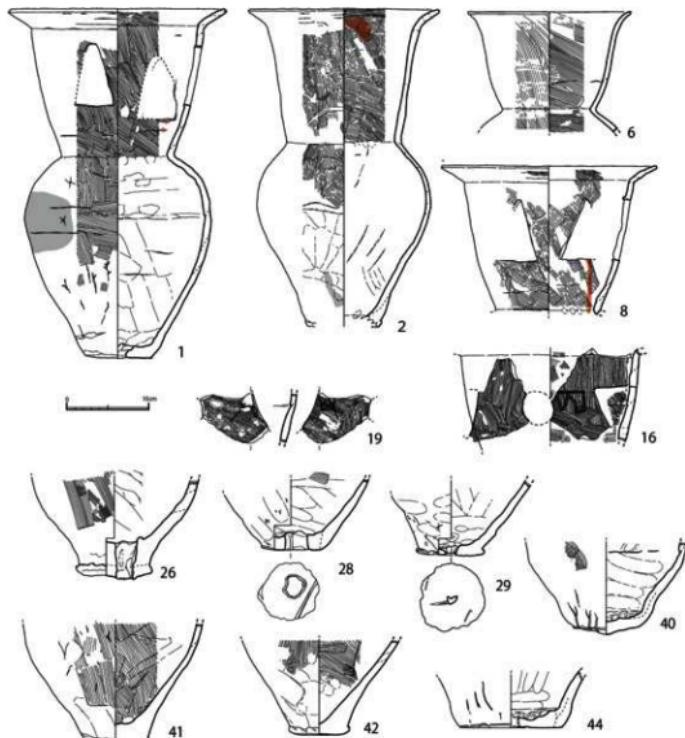


第255図 秋葉鬼塚古墳の埴輪

埴輪と共に通するが、底部の形状は基本的に全く異なっている。1点のみであるが後円部下の2トレーンより、平底で穿孔のない底部片が出土している(第255図6)。この底部成形の壺形埴輪は重政古墳において一定の割合で含まれており、重政古墳と秋葉鬼塚古墳の密接な関係を示すものである。胎土はいずれも豊後大野市内の土器と共に通する阿蘇溶結凝灰岩由來の砂礫をふくみ、搬入品はないと考えられる。壺形埴輪は製作技法が極めて画一的で同一工房で作られたと考えられるが、円筒埴輪は刷毛目が壺形埴輪とは異なる別の工人の製作である。

5. 重政古墳の埴輪(第256図)

重政古墳は、道ノ上古墳の西方、重政台地の西端のわずかな丘陵上の作られた墳長53mの前方後円墳である。出土した埴輪はすべて単口縁の壺形埴輪のみである。円筒埴輪は発見されず、二重口縁の壺形埴輪もない。精粗大小の違いはあるが、頸部が上方に向かってひらき後円部が屈折外反する特徴は共通する。頸部には直線的に開くものと、エンタシス状に外に膨らむ者の2種があり、口縁部も稜をもって屈折し直線的に外上方に伸びる口唇部と、稜を作らず外反する口唇部がある。頸部が直線的に外方に伸びて、口唇部が屈折する形態は道ノ上古墳と秋葉鬼塚古墳の壺形埴輪と共通する。頸部に三角形や円形の透穴を入れる個体とそうでない個体がある。胴部は最大径の位置が上位にあり、胴部下半が伸びて全体に長胴化している。この点も道ノ上



第256図 重政古墳の埴輪

古墳の壺形埴輪と類似するが、底部は平底を作り出したのち焼成前に穿孔する点で全く異なっている。しかも底部穿孔のない個体も散見される。このような平底をつくりだす壺形埴輪は三重地域では秋葉鬼塚古墳で1例知られているのみである。しかし底部の製作技法が全く同じ壺形埴輪が大分県中津市勘助野地1号墳で知られている⁽¹⁵⁾。また口縁部の外方屈曲は、近接する三重地域の道ノ上古墳と秋葉鬼塚古墳でも知られている⁽¹⁶⁾。頸部の三角透穴は重政古墳と秋葉鬼塚古墳が三重地区では初見である。

6. 竜ヶ鼻古墳の埴輪(第257図)

竜ヶ鼻古墳は重政古墳の北側に低地を挟んで対面するように作られた現存墳長36.5mの前方後円墳である。埴輪は後円部と台地を切り離す「周溝」の中と、古墳の南側の崖面に穿たれた横穴墓群の前部から出土した。後者は文字通り墳丘から落ちてきたものである⁽¹⁷⁾。

埴輪は普通円筒埴輪と朝顔形埴輪があるが、器財・形象埴輪は今のところ一点も知られていない。また三重地区的古墳の特徴ともいえる壺形埴輪も出土していない。円筒埴輪の特徴は、穴窯焼成と考えられる硬質の焼成状況であること、突帯断面形が高くない台形をなし、外面には斜めの静止痕を短い間隔でつけるB種ヨコハケが、認められる。以上の特徴から川西編年4期の円筒埴輪でもその後半に当たるもので、集成編年の7期から8期にかかるころの埴輪に相当すると考えられる。

7.まとめ

以上、大野川中流域の一支流である三重川の流域に築かれた前方後円墳に使用された埴輪を記述してきた、まずその編年的順序を整理しておきたい。

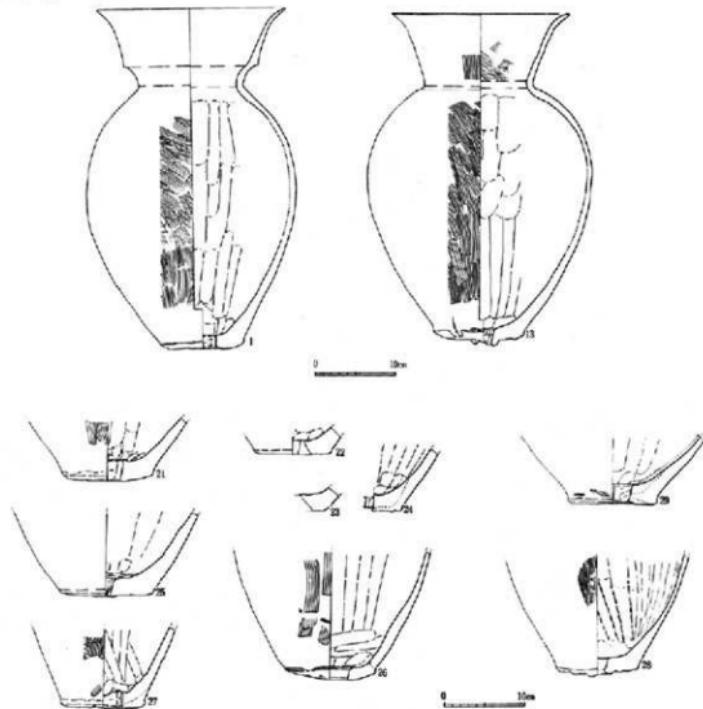
円筒埴輪の型式的古さと壺形埴輪に二重口縁形態が含まれる立野古墳の埴輪が最も古く、穴窯焼成でB種ヨコハケが観察される竜ヶ鼻古墳の円筒埴輪が最も新しく、ほかの三古墳の埴輪と編年に分離されることは明瞭である。立野古墳は前期中葉の新段階にあたる茨木将軍山古墳と同時期であると推定され、一方竜ヶ鼻古墳は川西4期の埴輪でも新しい集成7~8期の中期後半に当たる。道ノ上古墳と重政古墳および秋葉鬼塚古墳は、円筒埴輪の有無、壺形埴輪の底部形態の差異など明瞭な違いがあるが、単口縁の壺形埴輪に限られ、その頸部から口縁部の形態的特徴、長胴化して胴部最大径が上位に来る体部のプロポーションは、同一型式の壺形埴輪と呼べるものである。

道ノ上・重政・秋葉鬼塚の3古墳の埴輪はいずれも穴窯焼成導入以前の黒斑を有しているが、全国的に埴輪製作における穴窯焼成技法の導入は、前方後円墳集成編年の6期からとされており、大分県内最古の穴窯焼成の埴輪は海部の6期の大分市大在古墳の埴輪であり、また三重地域の円筒埴輪における穴窯焼成の確実な例は竜ヶ鼻古墳である。熊本県阿蘇地方の長目塚古墳の黒斑の残る埴輪は最近の報告では集成編年6期と報告されている⁽¹⁸⁾。大在古墳の所在する別府湾岸と熊本県阿蘇地方の中間に大野川中流域の三重盆地が



第257図 竜ヶ鼻古墳出土の埴輪

位置を考えれば、集成5期の特徴をもつ壺形埴輪が集成6期まで残る可能性も考慮すべきであろう。しかし平底をいったん作りそこから焼成前に穿孔するという底部のきわだった特徴を共有する豊前の勘助野地1号墳の壺形埴輪(第258図)は、その第1主体部の副葬品や土師器群から集成5期と考えられている。この特徴を共有する壺形埴輪が主体となる重政古墳、1点だがこの底部を共有する秋葉鬼塚古墳は、勘助野地1号墳と同時期と考えられることから、現状では古墳時代中期前葉の集成5期に収まる埴輪と考えておきたい。以上のように黒斑を有する点、底部平底造りの特徴的形態などから中期前葉の集成編年5期の中に三古墳とも納まるものと推定される。



第258図 勘助野地1号墳の壺形埴輪

以上のように考えると、立野古墳と、道ノ上・重政・秋葉鬼塚三古墳の間には、前期後葉から末のあいだの埴輪ではなく、三古墳と竜ヶ鼻古墳の間にもヒアタスがあり、以上の三群の埴輪は、技術的には系譜的関係が薄いことは容易に推察される。以下、立野古墳と中期前葉の三古墳の埴輪についてその系譜などを考える。

立野古墳 円筒埴輪と壺形埴輪は浜津の茨木將軍山古墳の埴輪制作者の影響が強いことを先に指摘した。瀬戸内海と別府湾の勢力を介してその形態が伝わってきたものと推定される。壺形埴輪については底部の開放成形という特徴は円筒埴輪と同じく浜津方面から伝わってきたと考えられるが、頸部から口縁の特徴は、小熊山古墳同様に単口縁と二重口縁とともに、埴輪以前に普及した土師器の畿内系単口縁壺と二重口縁壺に由来している。したがって壺形埴輪については底部の作り方を伝授した畿内地方の埴輪工人との関係のみをもとに製

作されたものではなく、口縁部という最も視覚的部分は在地の土師器を祖型にして製作されたものと推定される。その際注目されるのは祖型とされた壺が、豊後地方で弥生時代後期以来在地の共同体祭祀に用いられてきた安国寺式の壺形土器でなく、それ以前に普及した外来系の壺であったことである。例えば立野古墳以前の在地の小古墳である豊後大野市陣箱遺跡の周溝墓に供獻された壺形土器⁽¹⁹⁾と、立野古墳とほぼ同時代に築造されたと推定される前方後方墳である竹田市久住町の仏原千人塚1号墳出土の壺形土器⁽²⁰⁾は、いずれも安国寺式の系譜をひく在地型の壺形土器(第259図)であり、立野古墳の壺形埴輪とは対照的である。つまり立野古墳の壺形埴輪は豊後に当時普及していた壺形土器を形象化したという意味では在地的ではあるが、弥生時代以来の伝統的安国寺壺を形象化せず、立野古墳以前に古墳時代前期中葉に豊後に普及した布留様式の土師器に由来している点では外来的である。

道ノ上古墳、重政古墳と秋葉鬼塚古墳 重政古墳と秋葉鬼塚古墳の壺形埴輪はその口縁部形態、透穴、文様等の特徴がよく一致し、平底無穴の底部を持つ個体が共有されている。この二古墳は埴輪から見る限り前後に位置づけるより、ほぼ同時に作られたものと考えたほうが良い。壺形埴輪の形式構成として二重口縁がなく単口縁に限られる点は、道ノ上古墳の埴輪とも共通する特徴である。

口縁部が外方に屈折する特徴を、三重盆地内に所在する接近した三古墳、道ノ上古墳と重政古墳および秋葉鬼塚古墳が共有することを指摘した。道ノ上古墳は墳長70mの大野川中上流域最大規模の前方後円墳であり、かつてはその墳形から前期にさかのばる古墳ではないかといわれたが、2001(平成13)年の豊後大野市の調査によって川西3期の円筒埴輪が壺形埴輪とともに出土し、中期前半の古墳であることが判明した。壺形埴輪の底部の造りを比べてみると、開放成形で端正に作る道ノ上古墳、粗雑な開放成形の秋葉鬼塚古墳となり、秋葉と重政は平底成形の底部の壺形埴輪を持つ点で共通する。この三古墳の壺形埴輪は集成5期という編年的枠組みの中では同時期となり、道ノ上古墳の壺形埴輪と、秋葉・重政古墳の壺形埴輪の二群に分けることができるが、形態からは、その違いを前後関係に並べることは難しい。

秋葉鬼塚古墳と重政古墳の埴輪の底部製作技法は、豊前山国川下流域の勘助野地1号墳と共に通しており、埴輪製作技術のみならず、底部の穿孔の大小や穿孔方法にばらつきがあることも、共通した特徴をなしている。これは壺形埴輪供獻にまつわる祭祀儀礼習俗の同一を意味すると考えられ、遠隔地間の密接な関係を示すものであり、この交流は別府湾岸の勢力を介して、内陸ルートないし国東半島を周回する水上ルートのいずれかでなされたものと推定される。

頭部の形態と透穴・線刻文様 重政古墳の壺形埴輪の頭部のエンタシス状の膨らみや、秋葉鬼塚古墳と重政古墳に共通する、三角形と小型円形の透穴を交互に頸部配置する独特の装飾は、長野県森将軍塚古墳や山梨県甲斐銚子塚古墳など中部以東の東日本の前期古墳において幾つか例が知られているが、西日本では極めてまれである。しかし目を別の器種に転じれば、南九州の日向・大隅では、胴部がエンタシス状に膨らみ、そこに透穴を施す器台が、宮崎市熊野原C点、宮崎県国富町東福寺遺跡、鹿児島県肝属町塚崎25号墳で知られている⁽²¹⁾。大野川中流域が、別府湾岸から日向への陸路の通過点であるという地理的条件からすれば、この独特な特徴は、日向からの影響とも考えられる。

以上のように頸部から口縁部と底部において重政古墳の壺形埴輪は、通常の製作上のルールを明らかに逸脱している。その特徴は東日本の前期後半から末の壺形埴輪との類似を指摘できる。しかし目を九州に転じれば、逸脱の方向は異なるが、宮崎市生日古墳群生日5号墳の壺形埴輪⁽²²⁾、熊本県阿蘇の長目



第259図 仏原千人塚古墳の壺形土器

塚古墳⁽²³⁾や菊池市慈恩寺京塚古墳などで、形態や製作のルールを逸脱した埴輪が製作されており、それらの埴輪はいずれも中期の前葉から中葉の古墳であり、壺形埴輪の製作において中央や北部九州から離れて、中九州から南九州にかけて独自な動きが現れたものと考えられる。

【註】

- (1) 橋本達也 2018「古墳と南島社会」『国立歴史民俗博物館研究報告』211集、p434
- (2) 廣瀬覚 2015『古代王権の形成と埴輪生産』p102、同成社
この見解の前提には、前期の埴輪生産は古墳建造ごとに埴輪工人が組織され、古墳造営終了後に解散するという高橋克壽の研究がある。
- 高橋克壽 1994「埴輪生産の展開」『考古学研究』41-2 考古学研究会
- (3) 九州でも埴輪生産が定着した中期末からは円筒埴輪の地域性が顕在化して、その特徴に即した編年と分布の変化が見えるようになる。その好例は以下の小嶋篤の研究である。
- 小嶋篤 2018「嘉德型埴輪の研究」『埴輪論叢』8号 墓輪検討会
- 小嶋篤 2019「肥後南部型埴輪の研究」『埴輪論叢』9号 墓輪検討会
- (4) 吉田和彦編 2006『小熊山古墳発掘調査報告書』(杵築市埋蔵文化財発掘調査報告書10) 杵築市教育委員会
- (5) 竹中克繁 2004「九州壺形埴輪研究序論」『熊本古墳研究』2 p13-32、熊本古墳研究会
- (6) なお愛媛県今治市大西町に所在する妙見山1号墳の壺形埴輪の中にも開放成形の技法が存在する。筆者は妙見山1号墳の時期を立野古墳より古く小熊山古墳と同時期と考えている。
- 下條信行編 2008『妙見山1号墳』p273 今治市教育委員会・愛媛大学考古学研究室
- (7) 田中裕介 1999「大分県埴輪資料集成 I」『おおいた考古』11集 p23 大分県考古学会。
- (8) 註7文献p27
- (9) 廣瀬覚・若杉智宏 2005『将軍山古墳群 I』新修茨木市史資料集8 茨木市
- (10) 廣瀬覚 2005「壺形埴輪の大型化とその背景」『将軍山古墳群 I』p39~59
- (11) 註5文献
- (12) 田中裕介編 1998『大分の前方後円墳』大分県文化財調査報告100 大分県教育委員会
- (13) 註2廣瀬論文 p151
- (14) 諸岡郁 2002「道ノ上古墳」『三重地区遺跡群発掘調査概報』VI p9-11、三重町教育委員会(大分県大野郡)
- (15) 田中裕介・村上久和(註) 1988「勘助野地遺跡」『一般国道雄10号線中津バイパス信倍文化財発掘調査報告書』(I) 大分県教育委員会
- (16) 田中裕介 2015「秋葉鬼塚古墳出土遺物」『豊後大野市内遺跡発掘調査概要報告書』5 p27~29 豊後大野市教育委員会
- (17) 諸岡郁 2000「竜ヶ鼻古墳」『三重地区遺跡群発掘調査概報』IV 三重町教育委員会
- (18) 杉井健編 2014『長目塚古墳の研究』(科研費研究成果報告書) 熊本大学文学部
- (19) 諸岡郁 2018『陣箱遺跡』豊後大野市埋蔵文化財調査報告3 p74 豊後大野市教育委員会
- (20) 宮内克己 2002『仏原千人塚古墳群』p17 久住町教育委員会・大分県教育委員会
- (21) 甲斐康大氏の教示による。
- 甲斐康大 2013「九州南部における古墳時代前期の地域間交流」『古墳時代の地域間交流I』九州前方後円墳研究会
- (22) 『生目古墳群 I -生目5号墳発掘調査報告書一』2010 宮崎市教育委員会
- (23) 杉井健編『長目塚古墳の研究』2014、熊本大学文学部

【参考・引用文献】

- 田中裕介編 1998『大分の前方後円墳』大分県教育委員会

第3節 大野川中流域の割抜式石棺⁽¹⁾について

井 大樹

1. はじめに

1922(大正11)年、梅原末治が「豊後北海部郡における二三の古墳」(梅原1922)において王ノ瀬石棺(大分市)を実測し詳細に報告して以来、県下の割抜式石棺は複数の研究者によって調査研究が行われてきた。戦後には賀川光夫らによって七ツ森古墳、下山古墳、臼塚古墳、世利門古墳等が発掘調査され、未盗掘の割抜式石棺が次々に明らかになった(賀川2000)。このように資料が増えた結果、清水宗昭・高橋徹によつてはじめて県下の割抜式石棺が集成された。両氏は特に石材に着目し、箱形石棺を含む古墳時代の石棺を整理した。この中で阿蘇溶結凝灰岩を加工した割抜式石棺に関して中部九州と畿内との関係において確立した阿蘇溶結凝灰岩石棺文化が、海部の首長と中国・近畿の首長とが関わる中で間接的に豊後にもたらされたと指摘している(清水・高橋1982)。また、神田高士は舟形石棺について、集成・編年作業のなかで長幅比の変化や石枕の簡略化等に着目し4種類に分類した。さらに、他地域との比較から嘉穂や出雲、日向等の遠隔地の石棺の特徴を持つ舟形石棺が県下に分布することを示した(神田1990)。これら各地域の割抜式石棺の状況が明らかになったことで九州全体の整理も行われ始める。高木恭二は玄界灘沿岸、有明海沿岸、豊後水道沿岸、日向灘沿岸の4地域⁽²⁾に割抜式石棺が分布し、10型式に分類できることを示した。特に大分においては大野川中・上流域に平面が隅丸形を呈する豊後Ⅰ型が、臼杵湾沿岸には蓋の小口部に1個づつ、長側辺に2個づつ繩掛突起を造り出す豊後Ⅱ型が分布するとした(高木1994)。

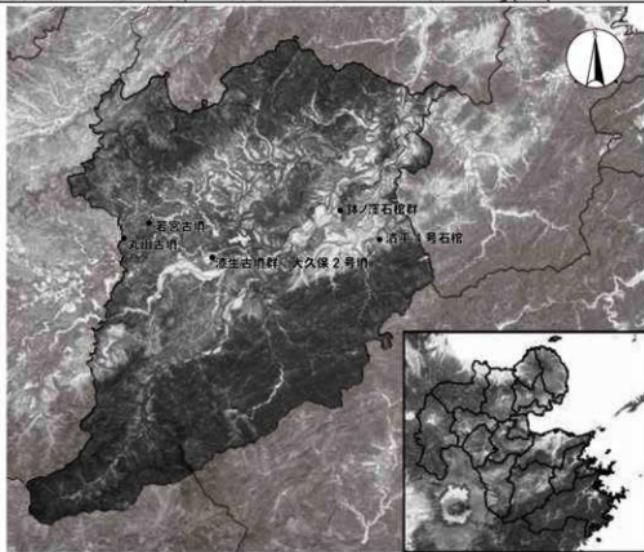
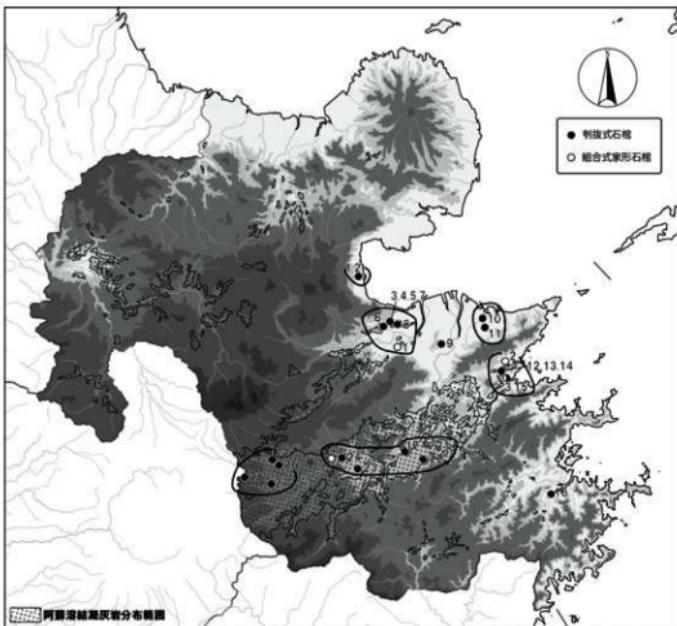
第14表 大分県下の割抜式石棺一覧

No.	石棺名	所在地	墳形	墳丘規模	部材	石材	分類案			集成記録		
							神田	若杉	林田	清水 高橋	神田	若杉
1	実相寺1号石棺	別府市北石垣	円墳	蓋	角閃石安山岩	東九州IV	●	●				
2	実相寺2号石棺	別府市北石垣	円墳	蓋	角閃石安山岩	東九州IV	●	●				
3	蓬莱塚附近石棺1(万寿山2号)	大分市大字賀来片面	円墳	蓋・身	安山岩?			●	●	●		
4	蓬莱塚附近石棺2(万寿山12号)	大分市大字賀来片面	円墳	蓋・身	安山岩?							
5	万寿山古墳群1号墳	大分市大字賀来片面	円墳	蓋・身	阿蘇凝灰岩							
6	御器所横穴墓	大分市宮原町中村	横穴墓	蓋	阿蘇凝灰岩							
7	丑鹿古墳	大分市大字賀来	円墳	蓋・身	阿蘇凝灰岩?	東九州V	●	●				
8	永興千人塚古墳	大分市永興加茂	前方後円墳	43m	蓋・身	阿蘇凝灰岩						
9	真言石棺	大分市松岡			蓋	阿蘇凝灰岩	東九州V	●				
10	王ノ瀬石棺(1号墳)	大分市坂ノ市	前方後円墳		蓋・身	阿蘇凝灰岩	東九州V	●	●	●		
11	龜塚古墳	大分市里	前方後円墳	116m	身	阿蘇凝灰岩				○		
12	白堀古墳1号石棺	臼杵市福田	前方後円墳	87m	蓋・身	阿蘇凝灰岩	豊後A	東九州田	豊後II	●	●	●
13	白堀古墳2号石棺	臼杵市福田	前方後円墳	87m	蓋・身	阿蘇凝灰岩	豊後A	東九州田	豊後II	●	●	●
14	丸山古墳	臼杵市福田	円墳	10m	蓋・身	阿蘇凝灰岩	豊後A	東九州田	豊後II	○	●	●
15	下山古墳2号石棺	臼杵市瀬防	円墳	29m	蓋・身	阿蘇凝灰岩	豊後D			○	●	●
16	岡谷古墳	佐伯市神田			身	阿蘇凝灰岩				○	○	○
17	跡ノ原1号石棺	豊後大野市三重町上原田			蓋・身	阿蘇凝灰岩	豊後B	東九州I	豊後I	●	●	●
18	跡ノ原2号石棺	豊後大野市三重町上原田			蓋・身	阿蘇凝灰岩	豊後B	東九州I	豊後I	●	●	●
19	跡ノ原3号石棺	豊後大野市三重町上原田			蓋	阿蘇凝灰岩	豊後B			●	●	●
20	跡ノ原5号石棺	豊後大野市三重町上原田			身	阿蘇凝灰岩				○	○	
21	跡ノ原6号石棺	豊後大野市三重町上原田			身	阿蘇凝灰岩				●		
22	達平塚原4号石棺	豊後大野市三重町小坂			身	阿蘇凝灰岩	豊後B	東九州I	豊後I	○	●	●
23	大久保2号墳	豊後大野市緒方町越生	円墳	39m	蓋	阿蘇凝灰岩	東九州I			●		
24	若宮古墳	豊後大野市朝地町宮生	円墳	約20m	身	阿蘇凝灰岩				○	○	○
25	御祖神社石棺(谷川古墳)	竹田市下板田	円墳	約20m	蓋・身	阿蘇凝灰岩	豊後C	東九州II	豊後I	●	●	●
26	舟ノ辻古墳	竹田市下板田	円墳	約20m	身	阿蘇凝灰岩				○	○	○
27	七ツ森A号墳	竹田市戸上	円墳	20m	蓋・身	阿蘇凝灰岩	豊後C	東九州II	豊後I	●	●	●
28	石舟石棺	竹田市小塚	円墳	15m	蓋・身	阿蘇凝灰岩	豊後C	東九州II	豊後I	○	●	●

第15表 大分県下の組合式家形石棺

1	世利門古墳	大分市上井	円墳?	18m	蓋・身	阿蘇凝灰岩				●	●	
2	高倉古墳	臼杵市美野	円墳?	約20m	?	阿蘇凝灰岩				○	○	
3	下山古墳	臼杵市美防	前方後円墳	68m	蓋・身	阿蘇凝灰岩				●	●	
4	丸山古墳	豊後大野市朝地町上尾塚	円墳?	15m	蓋	阿蘇凝灰岩	I型b類			●		

*集成記録の●は図面があるものを示し、○は記述のみ



こうした分類案を基にして林田和人や若杉竜太は図面等のなかった各地の資料を図化し、東九州や九州全体の再検討を行っている（林田1995・若杉1997）。近年では、別府大学等により漆生古墳群（豊後大野市）や実相寺古墳群（別府市）の発掘調査が行われ、大久保2号墳や実相寺1・2号石棺の再実測から新たな知見が得られている（田中2016）。

このような状況下で筆者は豊後大野市が実施した大久保2号墳（漆生古墳群）の発掘調査に参加する機会を得た。墳頂には以前から剥抜式石棺蓋が露出していることが知られており（田中1993）、発掘調査では墓坑の発見に至った。これを契機として県下の剥抜式石棺について実測等を進め再検討を行った。今回はその際に得られた大野川中流域の状況についてまとめたい。

2. 大分県下の剥抜式石棺の分布

大分県下の剥抜式石棺は別府以南（豊後）地域に集中して分布している。春木川流域地域を除けばすべて阿蘇溶結凝灰岩を石材としており、阿蘇溶結凝灰岩が広がる地域を中心に6つの分布の集中を認めることができる。以下個別の地域について概略を述べたい。

（1）春木川流域

別府市では実相寺古墳群において2例の舟形石棺がみられる。どの古墳に伴うかはわかつておらず、実相寺古墳公園内に安置されている。いずれの石棺も、鶴見火山群の噴火によって堆積した角閃石安山岩で造られている。

（2）大分川下流域

大分市では、大分川下流域に数多くの石棺が集中している。蓬莱塚附近石棺2や万寿山1号石棺、永興千人塚石棺にみられる様に蓋や身の外面隅を切断し、面取り加工する特徴がみられる。また、蓬莱山附近石棺1、世利門古墳では蓋にコの字状に突出させた棟を造りだし、そこに横方向からやや梢円形の孔を2か所穿つ。この特徴は臼杵湾岸域にもみられるもので地域間の関連性が推察される。

（3）丹生川流域

鞍前から王ノ瀬石棺は畿内の石棺として注目されてきた。明治初年頃道路改修時に発見されたと以前から伝えられてきたが、どの様な古墳に伴うかは長年不明のままであった。しかし、2004年辻1号墳の報告の際に高畠豈によって精緻な記録調査が行われ、辻古墳に伴うことが明らかになった（高畠2004）。亀塚古墳では1994（平成6）年、墳頂部の主体部調査が行われ、結晶緑泥片岩の組合せ箱形石棺（第1主体部）と凝灰岩製剥抜石棺（第2主体部）の存在が明らかになった。

（4）臼杵湾岸地域

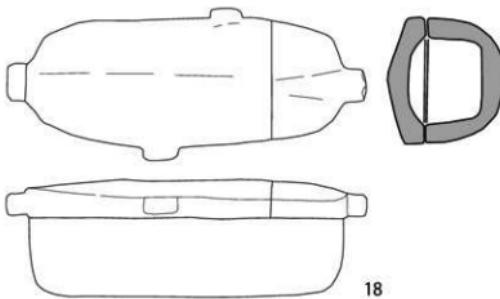
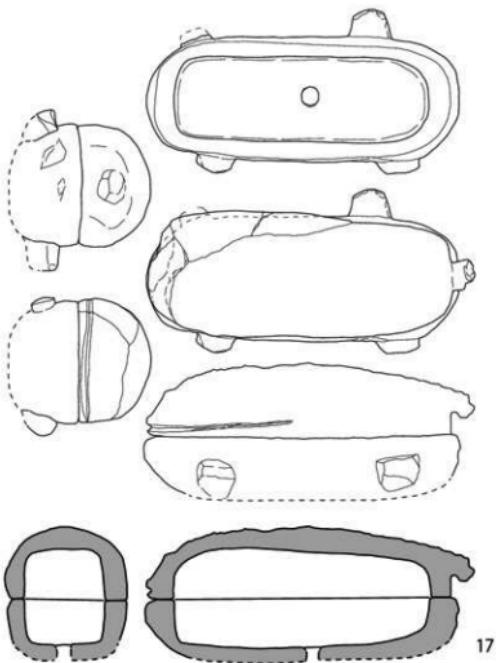
臼杵市では臼杵2号石棺、下山古墳石棺、神下山古墳石棺の蓋に浅く掘り窪めた枠内に装飾が施される。また、神下山古墳石棺にみられる蓋棟部穿孔は、先ほど述べたように大分川下流域の石棺にもみられることから製作工人間の関係が推察される。

（5）大野川中流域

県内で最も多く剥抜式石棺が集中している地域である。平面形態は小口が丸みを持ち隅丸方形であり、後述するが底部に穿孔をもつ石棺も多数存在する。また、鉢ノ窪石棺群に認められるように前方後円墳や大型円墳の主体部ではなく小型低墳丘の円墳等に用いられるのも特徴である。

（6）大野川上流域

神田氏が指摘するように沖出古墳に類似する石棺が多く確認されている（神田1990）。小口のみに縄掛け突起が用いられ、左右で小口の幅が異なるもの特徴である。出土遺物は確認されていないが長幅比、沖出古墳との形態類似から比較的古い石棺群ではないかと考えられる。

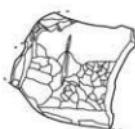


0 1m
1:30

第261図 大野川中流域の割抜式石棺実測図(1) ※番号は一覧表と対応する



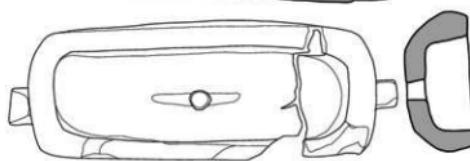
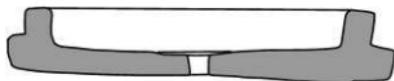
19



21



20



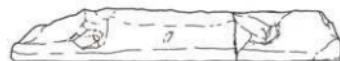
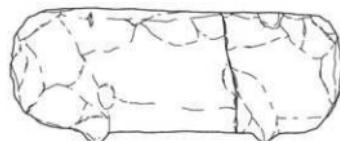
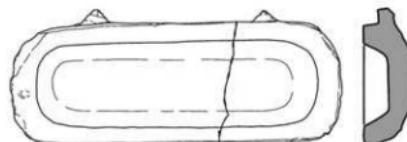
22



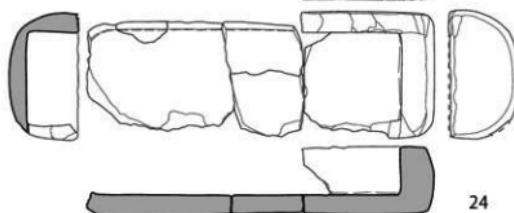
1-30

第262図 大野川中流域の割抜式石棺塞測図(2)

*番号は一覧表と対応する



23



24

0 1m
1:30

※番号は一覧表と対応する



組合式 4

第263図 大野川中流域の割抜式石棺実測図(3)

3. 大野川中流域の剝抜式石棺

今回の集成作業で現在34件の剝抜式石棺⁽³⁾が確認された。大野川中流域については9基の剝抜式石棺が集中しており、前述のとおり県下で最も剝抜式石棺が集中する地域である。ここでは個別の石棺について特徴等の詳細を述べたい。

(1) 鉢ノ窪1～6号石棺(第261図17・18、第262図19～21)

鉢ノ窪石棺群は大字上田原字原に所在し、西側に向かって緩やかに突出する台地上に展開する。同じ台地上の上方には前期中葉の前方後円墳である立野古墳が位置する。1号石棺(17)は卵形の舟形石棺で小口は蓋身共に丸く、棺蓋には片側小口にやや下垂する繩掛け突起が一つ付き、側面には繩掛け突起がない。棺身には側面に二つずつ上面が平坦な繩掛け突起が付く。底部中央には直径約10cmの排水孔を穿つ。3号石棺(18)は民家の庭にあり複雑に傾いており実測が困難であったので、若杉氏が示した復元図(若杉1997)を用いて説明したい。棺蓋は扁平で小口、側面それぞれに一つずつ扁平な繩掛け突起が付く。また、蓋は1/4のところで分割ができる追送を意識したものである。棺身は深く底部中央に直径約10cmの排水孔を穿つ。4号石棺(19)は蓋のみの資料で小口のみに繩掛け突起が付く。全体的に扁平で小口は丸みを持つ。5号石棺(20)は棺身のみの資料で二つの破片資料からなる。繩かけ突起が側面に一つずつ確認でき、位置は小口に接近している。6号石棺(21)も棺身のみの資料で石枕が確認できる。小口は方形で繩掛け突起は確認できない。鉢ノ窪石棺群では最も古い資料と考えられる。

これらの石棺は半径30m程の間に集中しており、1号石棺では発掘調査により人頭大の軟質凝灰岩を配置し、浅い周溝が廻る直径約10mなどの円墳であることが確認されている(諸岡1997)。

(2) 潟平塚原4号石棺(第262図21)

潟平塚原4号石棺は三重町小坂字潟平に所在する。棺身のみが確認され、小口に一つずつ円柱状の繩掛け突起が底部から水平に伸びるように付いている。小口は方形に近く、底部中央には直径約10cm孔が穿たれこの孔からそれぞれの小口方向に長さ約20cmの排水溝が伸びる。付近で発見された潟平塚原3号石棺でも箱形石棺でありながら底板に排水孔を穿っており、剝抜式石棺と箱形石棺との関連を知るうえで重要な資料である。

(3) 大久保2号墳(第263図23)

大久保2号墳が所在する漆生古墳群は緒方町越生区の大野川沿岸を見下ろす段丘上に所在し、前方後円墳1基を含む4基の古墳が尾根上に並ぶ。石棺が露出していることは古くから知られていたが(田中ほか1993)、発掘調査等は行われていなかった。そこで、2011(平成23)年度から豊後大野市教育委員会と別府大学によって測量調査と発掘調査が行われ、大久保2号墳においても主体部の発見に至った。

大久保2号墳石棺は棺蓋のみが露出しており、風化による剥離が激しく確認が難しいものの側面に二つずつ繩掛け突起が付いていた痕跡が確認できる。小口は丸みを帯びて石棺全体はやや扁平である。注目すべきは棺身にあたる部分で、発掘調査の結果、凝灰岩の地山を剝り抜いた特殊な形態であることが確認された。漆生古墳群が位置する尾根の地山は軟質の阿蘇溶結凝灰岩で、大久保2号墳の北側にはこの凝灰岩を剝り抜いた横穴墓も確認される。墓坑はノミ状の工具で削られ内面はベンガラが塗布されていた。また、墓坑の小口も丸みを帯びておりこの形状は石棺小口の形状と一致する。

(4) 若宮古墳(第263図24)

若宮古墳は朝地町宮生若宮神社境内の山林内に所在する直径約20mの円墳である。墳頂部には文政11年銘の石碑がありこの周辺に赤色顔料が塗布された石棺材が散在している。残されているのは棺身と思われる資料で現存する範囲には繩掛け突起がみられない。小口側面をみるとかまぼこ型に底が丸くなっている、上面形態は方形である。

(5) 丸山古墳 (第263図2)

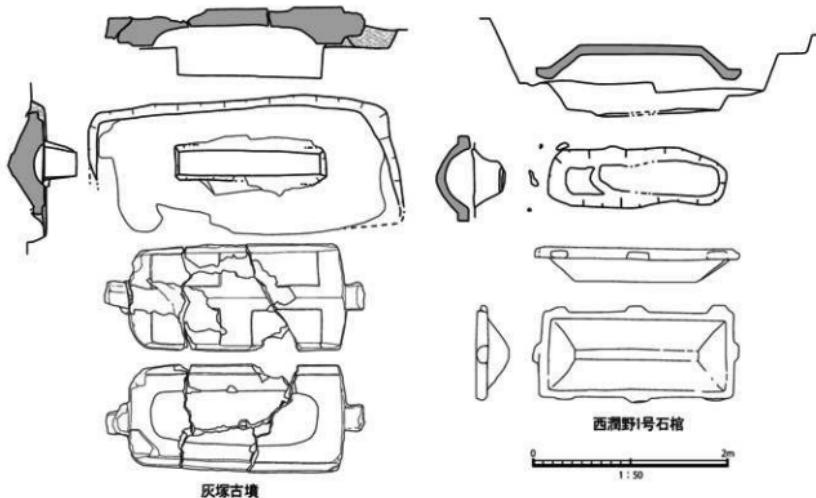
丸山古墳の石棺は江戸時代にはすでにその存在が知られており、1831(天保2)年頃に書かれた『九州道中日記』には現在のように墳丘から少し離れた道沿いに棺蓋が位置していたことが記述されている(柄木田2005)。その後、1907(明治40)年ごろ石棺を石材として記念碑を作成する案が持ち上がった際に歴史遺産として保護するため「丸山ノ銭蓋石古来久世不可移動」との銘文を刻み残された。

石棺材の材質は硬質の凝灰岩製で平面形態は小判型をしている。小口はその断面が内側に内傾しており、内側側面には幅約12cmの帯状張り出しがあり、これらの特徴は下山古墳(臼杵市)の組合式家形石棺の特徴に類似している。

4.まとめ

これまで大分県下の割抜式石棺の分布と大野川中流域の割抜式石棺の概要を述べた。ここではそれらを踏まえ大野川中流域石棺の特徴と時期等についてまとめた。

高木氏は大野川中・上流域に分布する割抜式石棺を豊後I型とし、この特徴については①小口の平面が隅丸形を呈する②棺身に排水孔を持つものが多いとの指摘を行っている(高木1994)。この特徴はおおむね該当するが、鉢ノ窪6号石棺や瀧平塚原4号石棺、若宮古墳石棺は小口平面形が方形で①の特徴からは外れる。鉢ノ窪6号石棺に石枕が確認できることや若宮古墳石棺の長幅比を考慮するとやや古手の一群であると指摘できる。その上で域内の石棺群の時期を考えると古墳時代中期中葉に属する鉢ノ窪6号石棺や瀧平塚原4号石棺、若宮古墳石棺と中期後葉に属するその他の資料の二つに分けることができる。また、②の排水孔については4基の資料がみられるが、大分平野を中心に亀塚古墳2号主体(大分市)、王ノ瀬石棺(大分市)、蓬莱山附近石棺1(大分市)等でもみられ、時期的には亀塚古墳2号主体が中期前葉と大野川中流域の資料より先行して出現している。県外では神領10号墳(鹿児島)や宮崎県内の資料に排水孔を穿つ資料



第264図 熊本の舟蓋土坑墓実測図

がみられ、九州東岸における石棺工人の広域交流が想定される。

さらに、大久保2号墳石棺は舟蓋土坑墓と呼ばれる蓋が削抜式石棺、身が土坑墓の特殊な形態で、その類例を探すと熊本に灰塚古墳(山鹿市)、西潤野1号石棺(宇土市)をみることができる。この二つの石棺は石棺蓋に共通した特徴ではなく、土坑墓の蓋に削抜式石棺を用いるという墓制の形態において共通している。大久保2号墳においても棺蓋は在地的なもので、同様の共通性を見出すことができる。また、先述したように朝地丸山古墳石棺に關しても臼杵市にある下山古墳石棺との共通性がみられる。

大野川中流域は九州の中央部にあり、河川や陸路を通じて大分平野や臼杵湾岸、宮崎、熊本地域と交流があり、これらの影響を相互に受けた多彩な地域性を取り入れた削抜式石棺が作られたと考えられる。また、今回は削抜式石棺に特記して述べたが、この地域には削抜式石棺の特徴を持つ箱形石棺が複数事例みられ、これらについても今後調査を行い地域性について明らかにしていきたい。

【註】

- (1) 県下には舟形石棺、組合式家形石棺、畿内系家形石棺が存在し、本稿ではこれらをすべてまとめて削抜式石棺として使用する。
- (2) 高木氏はさらに4地域を細分し以下の16地域を示した。北九州地域、唐津湾沿岸地域、佐賀平野地域、筑紫平野地域、菊池川下流域、菊池川中流域、熊本平野地域、宇土半島基部地域、氷川下流域、大野川上流域、大分平野、臼杵湾沿岸地域、佐伯湾沿岸地域、五ヶ瀬川下流域、宮崎平野地域、志布志湾沿岸地域。
- (3) 蓼葉山附近石棺1・2、岡・谷古墳の資料については散逸して現存していないことを確認した。

【参考・引用文献】

- 梅原末治 1922 「豊後北海部郡における二三の古墳」『大分県史跡名勝天然記念物調査報告』第1輯 大分県
賀川光夫 2000 『考古叢帖』別府大学史学研究会・大分県考古学会
柄木田文明 2005 「中条唯七郎『九州道中日記』を読む」『市誌研究ながの』第一二号
神田高士 1990 「大分の舟形石棺」『おおいた考古』第3号 大分県考古学会
清水宗昭・高橋徹 1982 「大分の石棺」『九州考古学』第56号 九州考古学会
高木恭二 1994 「九州の削抜式石棺について」『古代文化』第46巻第5号 古代学研究会
高畠豊 2004 『辻古墳群』大分市埋蔵文化財発掘調査報告書 第51集 大分市教育委員会
田中裕介ほか 1993 「緒方町越生にある漆生古墳群の観察」『おおいた考古』第6号 大分県考古学会
田中裕介 2016 「実相寺古墳群に所在する二基の石棺について」『実相寺古墳群』別府市埋蔵文化財発掘調査報告書 第8集 別府市教育委員会
林田和人 1995 「東九州の舟形石棺」『宮崎考古』第14号 宮崎考古学会
若杉竜太 1997 「九州石棺考」『先史学・考古学研究』II 龍田考古会

第6章 総括

1. 三重古墳群の展開について

(1) 築造時期

大分県南部の内陸部である大野川中流域の三重地域に展開した首長墓群をはじめとする三重古墳群の調査によって得られた成果についてまとめてみたい。

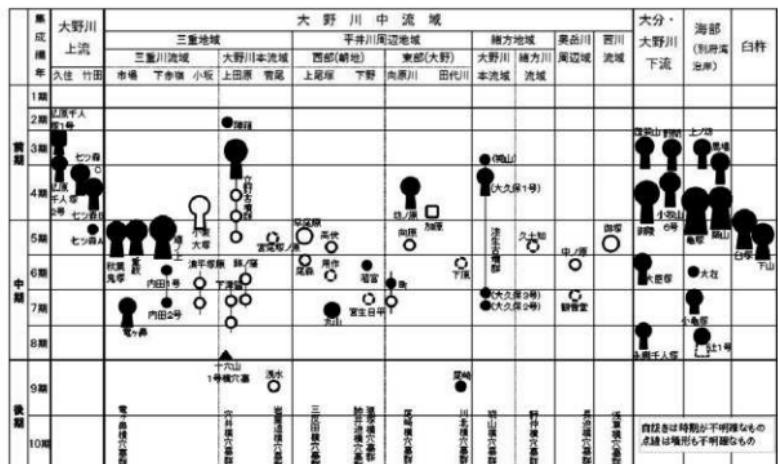
三重古墳群の前方後円墳は、前期後半の立野古墳より始まり、中期前半に道ノ上古墳・重政古墳・秋葉鬼塚古墳の3基がほぼ同時期に、さらに中期後半に竜ヶ鼻古墳が築造されたことが出土した埴輪で明らかとなった。以前は歴代首長系譜として順に築造されたと考えられていたが、築造年代が同時期に集中、あるいは空白時期の存在があるなど、一つの系譜の首長墓群ではないことが判明した。それは政治的・社会的体制が複数想定され、近い距離でありながらそれぞれ異なる環境に築造する一方、共通した埴丘構造による関係性も持つことが伺える。埴端にテラスを設ける特徴については、県内では大野川下流の小牧山6号墳に事例があり、前方部を西側に向いているのは大野川上流の七ツ森古墳群と共通する事例で、広域で共通要素を探り入れて築造されていたことがうかがわれる。築造時期が近い小坂大塚古墳・秋葉鬼塚古墳・重政古墳・道ノ上古墳の4基は葺石をはじめとした外表施設もよく似ており、首長の系譜は異なっても共通の企画によって築造されていることがわかる。埴輪が用いられていることも三重古墳群の特徴の一つで、墳形が判明していない宮尾塚・原古墳の例を除いて、首長の葬送儀礼に埴輪を採用しているのは大野川流域の内陸部で唯一である。これは大野川下流の大分方面の首長群を介して、対外交流によってもたらされたと考えられ、他地域の各首長墳との影響を受けていることが古墳の各特徴でみることができる。

埴輪の出土しない首長墳で、時期推定の根拠に乏しい小坂大塚古墳の築造年代について検討してみる。埴丘形態は前方部が小型の柄鏡形の墳形から、前期に築造されたとの見方が大半で(玉永1986、田中1998ばかり)、埴丘測量では前期古墳の七ツ森B・C墳や坊ノ原古墳との墳形上の類似点が指摘されている(玉川2016)。もう一つ埴輪を持たないという海部の築山古墳との共通した特徴もあり、七ツ森古墳や坊ノ原古墳と同じく、政治的関係が深いことが推定される(田中2019)。小坂大塚古墳の埴丘表面の葺石礫については、道ノ上古墳や重政古墳などより、根石は特に大型である。立野古墳でみられた大型角礫ほどではないが、時期によって根石礫の大きさの変化があるとすれば、小坂大塚古墳は、立野古墳にやや近い古式の特徴を有するとも考えられる。従って立野古墳に続く、三重盆地の前方後円墳の中では先行する前期末頃の可能性が高いと考えておきたい。

(2) 大野川中流域における三重古墳群

三重盆地を含む大野川中流域の古墳群は、分布する各河川単位が政治的権力の範囲と推定され、それぞれの系譜として古墳の築造が展開している。現段階で時期不明の古墳が多いが、三重地域・平井川周辺地域・緒方地域等の地域毎に、古墳編年表をまとめてみた(第265図)。それぞれ前期後半に首長墓が出現し、三重地域の立野古墳、続いて平井川周辺地域の坊ノ原古墳、緒方地域の城山古墳・大久保1号墳などの、前方後円墳が各地域で出現している。これは、大野川中流域に政治支配地域の単位として少なくとも3箇所で成立し、後の古代律令体制の郷単位の原形になるものと推定される。前方後円墳が当時の中央政権との政治的な関係を結んだ結果として出現し、三重地域の立野古墳と緒方地域の大久保1号墳が大野川本流の沿岸に存在するのも、大野川を重視する共通した背景に基づくことが推定される。

以後緒方・平井川周辺の両地域の推移について、前方後円墳は一代限りで、円墳が後続する。緒方地域の大久保1号墳の以後、空白の期間もあるが、小円墳の大久保2号・3号墳が続いて築かれる。平井川周辺域の



第265図 豊後大野市及び周辺域における首長墓の変遷

坊ノ原古墳は同じ立地環境下には向原古墳1基のみしかなく、西に離れた上尾塚地区に展開するようになるが、いずれも円墳である。

一方の三重古墳群では中期以降、立野古墳と同じ立地環境には小円墳のみが後続するが、少し離れた三重盆地周辺に移るよう3基の前方後円墳群がほぼ同時期に築造されている。大野川中流域では三重地域のみ前方後円墳の築造が続き、それ以外の地域は円墳へ変化して推移していくが、当時の各地域首長の社会的地位の変化が墳形に反映されたこととみられる。平井川流域の丸山古墳や早尾原古墳など径30mを超える大型円墳は、墳丘の規模的には三重古墳群と匹敵する権力者層が存在したと思われるが、中央政権との関係性の低下していたと推定される。中流域全体が社会的変化をしていく中で、三重盆地の首長は中期以降もこうした政治的な関係を維持し続けた結果と思われる。

しかしそれも長く続くものではなく、中期後半以降は大野川中流域の他地域と同様に小円墳のみとなり、中央政権との関係性低下の現れとみられる。大分県南部全体と共に傾向で、広域的な動向として政治的地位の低下が連動した状況となっている。後期以後は、尾崎古墳や浅水古墳の小円墳程度で古墳は築造を停止し、横穴墓が谷間地域などに造営されるようになる。

(3) 三重古墳群の立地環境

三重古墳群などの首長墓の立地は、多くが一際高く眺望の良い場所であり、支配地域に関する環境で築造していることが伺われる。地形的にも大野川流域の平地は広大とはいえないが、河川沿いの中小の沖積平野の各地を単位として分布するように築造されているものが多く、沖積平野とその周辺地域を生活基盤や生産基盤とした被葬者である首長の拠点であったことを示すものと考えられる。また一方、周囲に平野ではなく、周囲の台地や丘陵上を見渡す位置に所在するものもあり、拠点から離れた場所に築造したことが示唆される。三重古墳群もそうした立地環境の点から検討をしてみたい。

まず立野古墳は、大野川に近い段丘面をも見下ろす位置にあり、そこは水田可耕地に適さない畑作の卓越したと推定される地域で、川からの上陸地点を重要視しての立地と考えられる。後続する首長墳は三重盆地内を

取り巻くように道ノ上古墳・重政古墳・秋葉鬼塚古墳と、東端の三重川下流側にある小坂大塚古墳があり、一定の距離を保つように所在する。小坂大塚古墳は、三重盆地とは隔たった台地上にあり、周囲には狭い谷底平野を望む程度で、他の前方後円墳とは立地環境が異なっている。畑作の卓越した台地地形上に立地し、小円墳の瀬平塚原古墳群もこのような環境にある。大野川中流域では弥生時代後期を最盛期とする台地上の大規模集落が、古墳時代以後には稻作の普及とともに平地へと移っているが、引き続いて台地上を拠点としていた首長墓という背景も考えられる。

道ノ上古墳・重政古墳・秋葉鬼塚古墳のある三重盆地の平野部は、上田原地区よりも水田可耕地に適しており、そうした生産性の高さを背景とした首長墓と考えられ、次に築造される竜ヶ鼻古墳においても同様である。なお、三重盆地は三方向へ分かれる平野地形のうち、一番広い西側の玉田川沿いには首長墓ではなく、中央の三重川上流沿いと、東側の三重川下流沿いに築造地が偏っている。それぞれ被葬者の政治支配地域の中心地が、地形による生産性以外の要因があることも示唆される分布のあり方を示している。これは、三重盆地以外にも市内で最も広い沖積平野である緒方盆地をはじめ、奥岳川・茜川・柴北川・野津川などの各支流沿いに相応の広さを持つ平野があつても古墳は分布しない事例がいくつも存在することからも判断される。

この点で挙げられる要因の一つとして、交通路の存在がある。緒方地域の漆生古墳群付近は河川交通の渡河点と推定され(村田2017)、その西方向に続く尾根上は上尾塚地区にある円墳群へと続くが、近世岡城路の街道筋でもある。平野部の生活拠点を見下ろす位置ではなく、交通路沿線と推定される点で共通し、三重古墳群の位置が交通路と深く関連することが考えられる。

2. 交通路からみた三重古墳群

(1) 古代官道路線

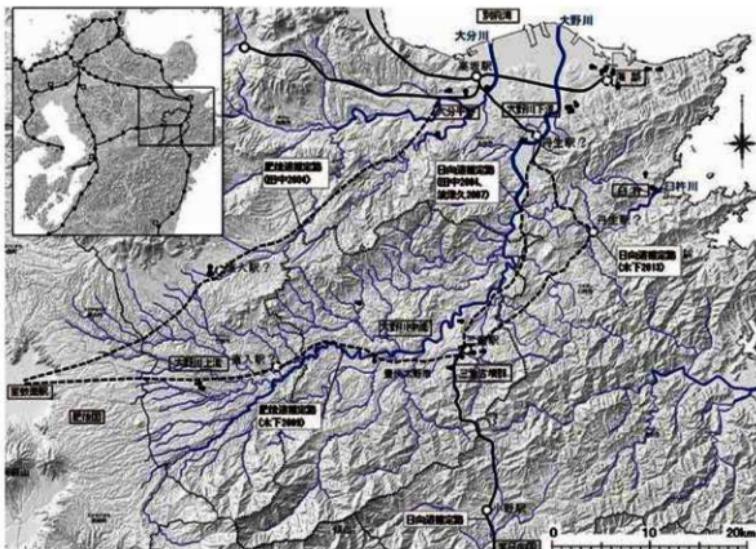
三重古墳群の築造の基盤として、交通路の要衝地としての背景が以前から想定されている(玉永1987)。後に設置される大野郡衙や、古代官道沿いに三重駅の設置が推定されていることから、古くから地理的にも要衝であったことが考えられる。しかし豊後における古代官道は遺構としては未確認のため、さまざまなルートが推定されている(第266図)。その中で三重駅が豊後大野市三重町に、小野駅が佐伯市宇目小野市に比定されているのは多くの説で一致している。三重駅より南下して、内陸部の峻険な山地を越える延岡方面への最短ルートの陸路でもあり、中世や近世以後も主要な交通路であることから、ほぼ同一ルートと考えられている。

一方、三重より北側大分方面のルートについて、豊後国府に近い高坂駅が大分市上野付近に多くが比定されているが、その間の丹生駅に関してはいくつかの説がある(第250図)。大分市松岡に比定している説(西別府1987)では、三重駅まで近世日向道とほぼ一致する大野川筋に沿うルートを推定する(田中2004、波津久2007)が、臼杵市に比定している説では、東方にやや迂回して臼杵方面を経由するもの(木下2009、2013)などがある。

豊後と肥後間の官道についても、直入駅の所在地が久住町付近に比定する説(後藤1995)では、高坂駅から直接つながるルート(田中2004)であり、竹田市街地説では三重駅から分岐点するルートもある(木下2009、波津久2003)。以上から様々な推定がなされているが、三重駅から各方面への起点としての要衝と考えられている。古代官道推定路線に沿って古墳が分布している状況から考えて、古墳時代には交通路として成立したことかが想定され、三重盆地は各方向へ結節する重要な中継地として、人や物資の往来が行き交う地理的にも好都合な環境であったと推定される。

(2) 三重周辺の交通路と古墳の分布(第267図)

こうした交通路の形成は、地域間交流や社会的関係の構築に大きな役割を果たしたものと思われ、こうした広

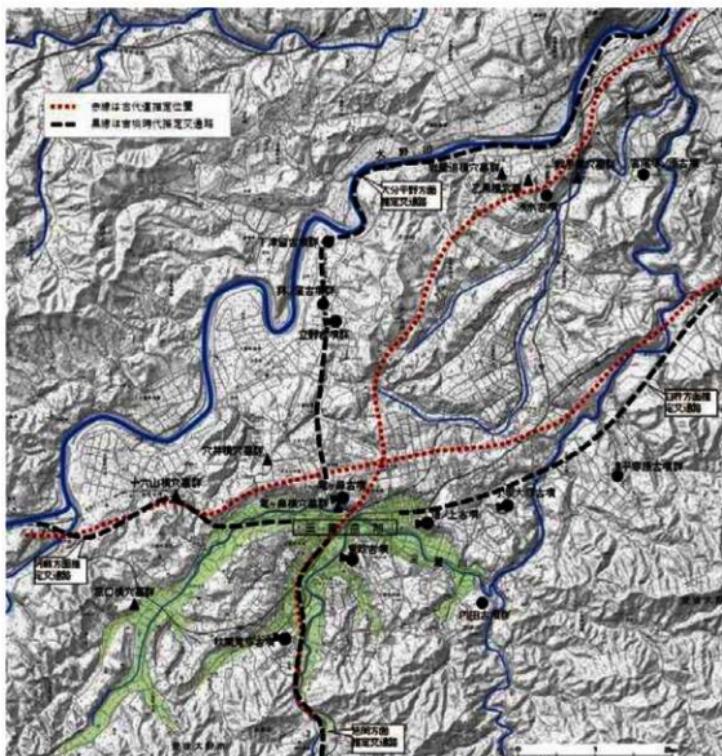


第266図 古代道路推定地と古墳分布図 (国土地理院陰影地形図に加筆 1/500000)

域的な交流を考える上で関連が注目される。別府湾に面する海部や大分平野から、三重地域の間は大野川筋に沿って南下していくことが想定される。近世には陸路より舟による河川交通が主に利用されているため、古墳時代から海部地域との結びつきにおいても、この川筋が有力視されており、大野川近くに立地する立野古墳はこの川から上陸地点として、交通路としての川を意識した位置であることが推定されている(田中1998)。そこから陸路で宮崎方面に南下してわずか3km程の位置にある三重盆地は、それほど広い平野ではなく生産力もそう高くはなかったと思われるが、このような交通上の立地環境により重要性の高い地であったと考えられる。

三重古墳群の分布位置は、大野川から三重盆地への入口位置として築かれた立野古墳と、宮崎方面へ向かう途中の三重盆地中心に展開する竜ヶ鼻古墳、重政古墳、秋葉鬼塚古墳は同じ交通路上のもとで支配城とした首長墓と捉えることができる。竜ヶ鼻古墳と重政古墳は、盆地中心部を見下ろす位置で、秋葉鬼塚古墳は南側の宇目の小坂駅を経由する宮崎方面からの入口位置である。

一方、三重盆地東部の道ノ上古墳は、このルート上からやや離れており、小坂大塚古墳にいたっては盆地からも大きく外れている。三重川沿いに交通路の移動があったとすれば、立野古墳以後の衰退が上陸地点の移動によると考えられ、あるいは海部ではなく臼杵方面へのルートとしての立地とも考えることができる。つまり大分・海部方面へ向かう大野川筋の道と、東側に分岐して臼杵の首長と結ぶ道沿いとすれば、道ノ上古墳やさらに東の小坂大塚古墳の立地も臼杵方面を意識した立地と推定される。道ノ上古墳は築造時期が臼塚古墳と同時期であり、臼塚を盟主墳として従属する地域首長墳とする関係が指摘される(田中2010)これからも、大野川ルートとともに重要視された背景が推定でき、小坂大塚古墳が北西側の視認を意識した構造の可能性(玉川2012)から、北西側の台地上に交通路の存在も考えられる。海部の築山古墳との関連性も指摘されるものの、交通路の視点から臼杵との関連性も浮上することになるが、築造時期の判明しない段階では仮説に止めておきたい。



第267図 三重古墳群と推定交通路

もう一つ、三重より西方向に向きを変えての肥後方面へも推定ルートの一つであり、大野川を遡つていけば緒方地域の漆生古墳群に通過して上尾塚の古墳群、さらに上流の七ツ森古墳群を経て熊本へ通じるルートの起点とも考えられる。その際漆生古墳群も立野古墳と同じく、大野川からの上陸・渡河位置と考えられ、そこから陸路で平井川周辺域の古墳群を通過して上流域に向かったものと思われる。

このようにさまざまな交通路を考えることができるが、いずれも三重盆地は東西方向へ向かう起点でもあることが推定される。水運と陸運が交差する地理的条件として、人や物が集積する場所が政治拠点化する動きは各地でみられるところ、三重盆地もその一つとして、三重古墳群も交通という背景が大きく関わって出現したと考えられる。河川を利用した水上交通や陸上交通、自然と人が集まる交通の要衝に営まれて、広域交通が重視され共同体間の政治関係が結びつく(廣瀬2019)ことと考えられ、三重古墳群をはじめ市内外各地の古墳群も交通路と密接に関連し、政治的にも重要視されていたと考えられる。

3. 三重古墳群の歴史的意義

三重古墳群は畿内政権の政治的影響力のもとで成立・発展したもので、その被葬者は豊後南部の各首長群

と連合して成立した首長の一人とみられる。そこには中央政権の政策による政治的な連携のもと、各地域間交流の一環で三重古墳群の展開へつながることを、調査結果から考察してみたい。

(1) 豊後南部からみた三重古墳群

豊後における首長墳の発生は、まず国東半島の小熊山古墳や海部の亀塚古墳など海上ルートの入口として海岸部に盟主墳とされる巨大古墳の出現以降、大分平野や海部地域など別府湾周辺に分布している。これは盟主に従属する地域首長墳としての政治体制に組込まれた関係が考えられ(田中2010)、内陸部の竹田市の七ツ森古墳群や仏原千人塚古墳群まで広まりを見せてている。三重古墳群の立野古墳も、別府湾岸から熊本や宮崎方面への内陸部を経由する中継地として造営された首長墓として、この墳の築造と推定されるが、これは国東や海部との関係が深い連絡伝達の交通路として大野川を通じたルートが大きな役割を果たしたものと思われる。緒方地域の漆生古墳群や平井川周辺の坊ノ原古墳も同様な理由で、首長墓の出現につながったものとみられる。

立野古墳以後、三重盆地が新たな拠点となって重政古墳や秋葉鬼塚古墳が築造され、首長権は盆地内の有力者層が担うようになる。この頃海部地域から白杵地域に盟主首長の交代に伴い、白杵との新たな交通路が重視された結果、交通の要衝としてそれぞれの交通路に関わる首長として、重政古墳・秋葉鬼塚古墳・道ノ上古墳の築造に至ったものと考えられる。狭い範囲での3基の前方後円墳の同時期の輩出は、政治的な関係の変動と交通路を中心とした動きに相応し、それぞれ緊張関係もありながら、墳丘構造を共通するなど密接な協力関係もあった首長の存在が垣間見える。しかし、系譜的には継続せず、次に竜ヶ鼻古墳が築造されるまで一定の空白期間があるなど首長の政治的な結びつきが長期間続くものでないことがみられる(田中2019)。

中期中葉から後葉にかけて、海部では再び別府湾方面に盟主墳の移動があり、規模が縮小していくが、三重古墳群では竜ヶ鼻古墳を最後に首長墳はみられなくなり、小円墳の中小首長墳が一部続くのみである。上流域もすでに築造を停止しているなど、全体的に古墳築造が減少し、盟主首長の消滅に伴い、三重古墳群も含めた地域首長の地位の低下が考えられている。三重古墳群の出現と衰退は、こうした広域的な政治変動に連動するような大きな影響を受けた結果と考えられる。

後期には横穴式石室墳も一部築造されているが、多くは横穴墓形式に移行して分布する。こうした横穴墓は中期末築造と推定される十六山1号横穴墓(玉永1983)において鉄製武器類などの副葬品を持つものもあるが、多くは群集して集団家族墓としての形態となって造営が広まっている。

(2) 東九州における交流

墳丘構造に見られる特徴に、墳端にテラス状の平坦面を設けられているが、同様の構造を持つ古墳が大分県内では、大野川下流に前期末の築造と推定される小牧山6号墳がある(池邊1995)以外、多くは知られていない。しかし宮崎平野の生日古墳群の1号・3号・22号墳で、基底部疊敷帶あるいは墳丘外平坦面という呼称で確認されており、いずれも集成編年3期から4期の前期古墳である(稻岡・竹中2012、石村2018)。他にも西都原46号墳や弁指古墳でも墳端平坦面を有する古墳が前期から中期初頭の時期の古墳にみられ(石村2019)、東九州で時期の近い一部の前方後円墳に共通する構造として知られている。

埴輪について、最初に出現する立野古墳において出土した壺形埴輪の口縁部形態は東九州地域の影響がみられ、円筒埴輪は大阪地域の工人の手による可能性が考えられる(田中2009)。これも海路から海部を経由しての繋がりで導入されたと考えられる。三重盆地内の道ノ上古墳、重政古墳、秋葉鬼塚古墳の3基はほぼ同時期の築造と考えられるが、底部が平底に作られる重政古墳の壺形埴輪は中津市の勘助野地1号墳と同じ手法で作られ、道ノ上古墳や秋葉鬼塚古墳は白塚古墳と似た壺形埴輪の形態で、埴輪の組成も似ている(田中2010)。また頸部に透穴を持つなど通常の壺形埴輪から外れた手法もみられ、中九州で独自に製作される影響

とも考えられるなど(田中他2021)、このことは政治的関係の多様性ともみることができ、こうした埴輪の特徴は、結びつきの深い地域との交流の影響が色濃く反映していることが推定される。

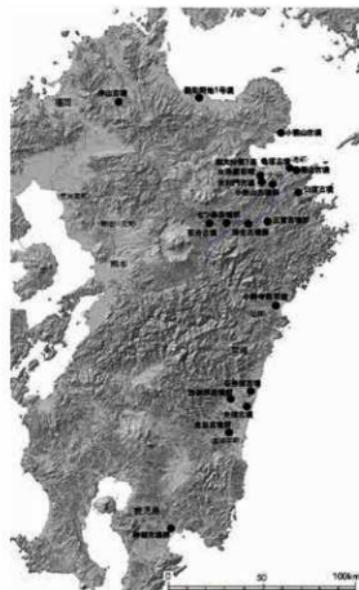
また主体部施設の一つとして、鉢ノ窪古墳群や瀬平塚原古墳群などの石棺の特徴として、九州を通じた交流が指摘されている。箱形石棺の構造の枘を彫り出すなどの製作技法には、海部地域の影響が考えられている。特に白杵の臼塚古墳から伝わったとみられる削抜式舟形石棺は、畿内へ向かう瀬戸内の海上交通を掌握していた讃岐や備前の首長との交流から、北部九州の沖出古墳を介して石棺製作技術を導入したとみられている(若杉1997)。また宮崎県延岡地域の棺身側辺に角柱状突起を有するなどの特徴が、鉢ノ窪古墳群にも共通すること(林田1995)、鉢ノ窪1・3号棺や大久保2号墳石棺の舟形石棺の楕円形に近い形状は、出雲など日本海沿岸部との類似例として延岡地域や熊本県菊池川流域と共通すること(神田1993、林田1995)。さらに棺身底部の穿孔も大分の海部地域や宮崎・鹿児島の東へ南九州一帯で見つかっている特徴で(井2016)、棺蓋が分割製作された特徴が大分平野から熊本県菊池川流域にかけてみられる(田中2016)など、製作技術の中継地として伝播に関わりながら影響を受けていたと指摘されている。

こうした各地との石棺製作技術の繋がりは、情報伝達が活発にやり取りされたことが示唆されている。血縁や婚姻関係で結ばれた首長の同族的結合として利用された(和田2018)とも推定され、外部地域の有力首長間で強い関係性による結びつきがあったものと思われる。

(3) 九州・西日本における位置づけ

三重古墳群は畿内の中央政権の政治的影響力のもとで成立・発展したもので、その被葬者は古墳時代前期後半から豊後後南部の各地の首長と連合して登場した人物とみられる。瀬戸内側の海上交通を経由して別府湾岸の盟主墳を介し、中央政権の政策として、交通路の掌握に重点が置かれたことと考えられる。大陸と古くから交流のあった北部九州は、瀬戸内海や日本海を介した海上交通網が特に重要視され、沿岸から内陸方面へ縦横に広げて、地域の有力者層をも傘下に組込まれていたものとみられる。東九州もこうした政策のもとで、別府湾が大部分地域の玄関口として国東半島や海部地域が強い影響下にあり、そこから熊本宮崎方面の九州各地へつながる内陸の中継地として、三重古墳群の築造へ繋がったことと考えられ、こうした盟主墳による政治体制に組込まれて中央政権と結びついて築造された首長墓群といえる。各古墳の築造には必ず別府湾や海部地域との深いつながりのもととなる盟主墳があり、墳墓築造には互いに共通要素を持っている。南九州などの影響とも考えられる埴丘構造や、石棺や埴輪にも共通性を持った広域化した政治的な結びつきを前提に、以後の首長墳築造に受け継がれている。

三重古墳群における前期末の大野川治いらから三重盆地へ首長墳が移動するのは、海部の盟主墳の移動に伴う首長権の交代ともいえる現象とみられ、中期初頭に3基が築造されたのもこうした盟主墳を介した中央政権との政治的な関係の結果と考えられる。首長墓の唐突な出現や複数系譜形の古墳出現は全国的にも見られる



第268図 九州の関連古墳位置図

現象とされ、中央政権の地方政策の体現としての中央と地方の政治秩序の表われとみられる（広瀬2019）。交易による技術や物資などの相互交流を通して政治力が拡大し、さらに交通路運営の支配を中央政権の支持のもと存続させてその支配下に組込まれていく。海部や臼杵など盟主墳もこうした地方支配の一環で交代が生じ、それに伴って三重古墳群の地方首長も結びつきの強化の結果、首長層の出現に進展する政治的な動きとして前方後円墳の築造へつながったことが考えられる。三重盆地の首長の支配地域は、後の大野郡三重郷という行政単位の元へつながるものと思われる。

中期中葉の空白時期を経て、中期後半の竜ヶ鼻古墳の築造を最後に前方後円墳は停止するが、三重古墳群における首長墳築造の消長が前期後半より中期後半の範囲内に収まることは、大分県南部から宮崎県北部を含めた東九州の各地域の首長墳と同じ動向で推移している。こうした地方首長墓のありかたは中央政権の地方政策のあらわれとし、いくつかの時期に全国的な大きな変化が生じているが、中期後半は対外政策の変化の時期とされ、各地の地域首長の衰退は、他地域への強制移住、畿内への上番など、政治的地位の下降（広瀬2019）とみられている。しかし小円墳の埋葬主体部に、瀬戸内から端を発し臼杵や延岡と共通した舟形石棺や、海部の加工技術のある箱形石棺が使われている。中央政権との関係が衰えて首長の権威は低下してもこうした地域間交流は続いていることが示唆されるが、やがてそれも終焉に向かっていく。豊後南部と同様に政治政策の変化はその後回復することなく、後期古墳もほとんど築造されないものこの地域の特質である。

三重古墳群はこうした中央政権との関係によって出現し、時には従属や離脱をしながら首長の移動を経て存続していった地方首長の一つのあり方を示している。当時の地方政治社会を反映する貴重な史跡であり、他地域の首長との対外交流を経ながら自らの権威を高めながら統治していった首長の存在の証ともいえる。（諸岡）

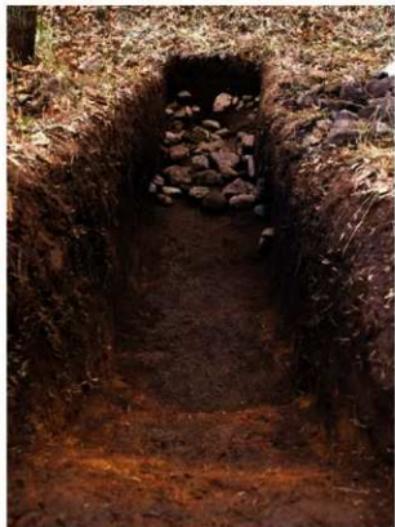
【参考文献】

- 井大樹 2016「大分県下の削抜式石棺」『豊後大野市内遺跡発掘調査概要報告書』6 豊後大野市教育委員会
池辺千太郎 1995「大分市松原山所在の小牧山古墳群について」『おおいた考古』第7集 大分県考古学会
稻道洋・竹中克繁 2012「『生日古墳群Ⅱ』一生目3号墳発掘調査報告書」宮崎市教育委員会
石村友規 2018「『生日古墳群Ⅲ』一生目1・2・24・25・26号墳発掘調査報告書」宮崎市教育委員会
石村友規 2019「九州島における導入期の葺石に関する一考察」『学術財研究』第1集 佛教大学「学術財研究」編集事務局
神田高士 1990「大分の舟形石棺」『おおいた考古』第3集
神田高士ほか 1993「緋方町越生にある漆生古墳群の観察一大久保2号墳石棺の実測と大久保1号墳の測量調査から」『おおいた考古』第6集
木下良 2009「辞典日本古代の道と駅」吉川弘文館
木下良 2013『日本古代道路の復元的研究』吉川弘文館
後藤宗俊 1995「豊後に於ける古道と駅制」『風土記の考古学4 豊後国風土記の卷』同成社
田中裕介 2004「豊後國」『日本古代道路辞典』古代交通研究会
田中裕介 2010「東九州における首長墓の変遷と性格」『第13回九州前方後円墳研究会鹿児島大会 九州における首長墓系譜の再検討』九州前方後円墳研究会
田中裕介 2016「実相寺古墳群に所在する二基の石棺について」『実相寺古墳群』別府市教育委員会
田中裕介 2019「豊後大野市の古墳群からみた地域社会と首長像」『古墳時代阿蘇ルートの研究』熊本大学文学部
田中裕介・玉川剛司・諸岡郁 2021「大分県豊後大野市所在重政古墳の調査」九州考古学会研究発表
玉永光洋 1983「十六山巣穴墓」三重町教育委員会
玉永光洋 1987「古墳時代」『大分県三重町誌の総集編』三重町
玉永光洋 1995「山の生活一大野川上・中流域集落遺跡の調査より一』『風土記の考古学4 豊後国風土記の卷』同成社
西別府元日 1987「丹生駅と太宰府道・日向道をめぐって」『大分県地方史』第126号大分県地方史研究会
波津久文芳 2003「三重大原大地の古代直線道」『大分県地方史』第189号大分県地方史研究会
波津久文芳 2007「『三重駅・高坂駅と両駅を結ぶ日向道』『大分県地方史』第201号大分県地方史研究会
林田和人 1995「東九州の舟形石棺」『宮崎考古』第14号宮崎考古学会
広瀬和雄 2003『前方後円墳国家』角川書店
広瀬和雄 2019「前方後円墳とはなにか」（中公叢書）中央公論新社
村田仁志 2017「漆生古墳群の立地について」『豊後大野市内遺跡発掘調査概要報告書』7 豊後大野市教育委員会
若杉竜太 1997「九州石棺考」『先史学・考古学論究II』熊本大学文学部考古学研究室創設25周年記念論文集
和田晴吾 2018『古墳時代の王権と集團関係』吉川弘文館

写真図版1 小板大塚古墳(1)



写真図版2 小坂大塚古墳(?)



第2トレチ



第3トレチ近景



第3トレチ

第3・5トレチ近景

写真図版3 小坂大塚古墳(3)



第4トレンチ



第5トレンチ



第6トレンチ



第6トレンチ近景



第7トレンチ近景

写真図版4 小坂大塚古墳(4)



第7トレンチ



第7トレンチ周溝内



第8トレンチ



第8トレンチ近景

写真図版5 道ノ上古墳(1)



道ノ上古墳遠景



道ノ上古墳近景(南西側)



第1トレンチ



第1トレンチ近景



第1トレンチ



第2トレンチ



写真図版6 道ノ上古墳(2)



第2トレンチ



第3トレンチ



第2・3トレンチ近景



第4トレンチ

写真図版7 道ノ上古墳出土遺物(1)



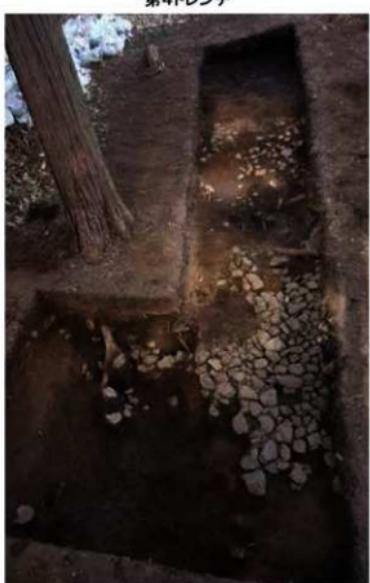
写真図版8 道ノ上古墳出土遺物(2)



写真図版9 重政古墳(1)



写真図版10 重政古墳(2)



写真図版11 重政古墳(3)



第6トレンチ段築



第6・8トレンチ



第7トレンチ

写真図版12 重政古墳(4)



第7トレンチ



第7トレンチ遺物出土状況

第7トレンチ段築



第9トレンチ

写真図版13 重政古墳(5)



第10トレンチ



第10トレンチ段築

第11トレンチ遺物出土状況

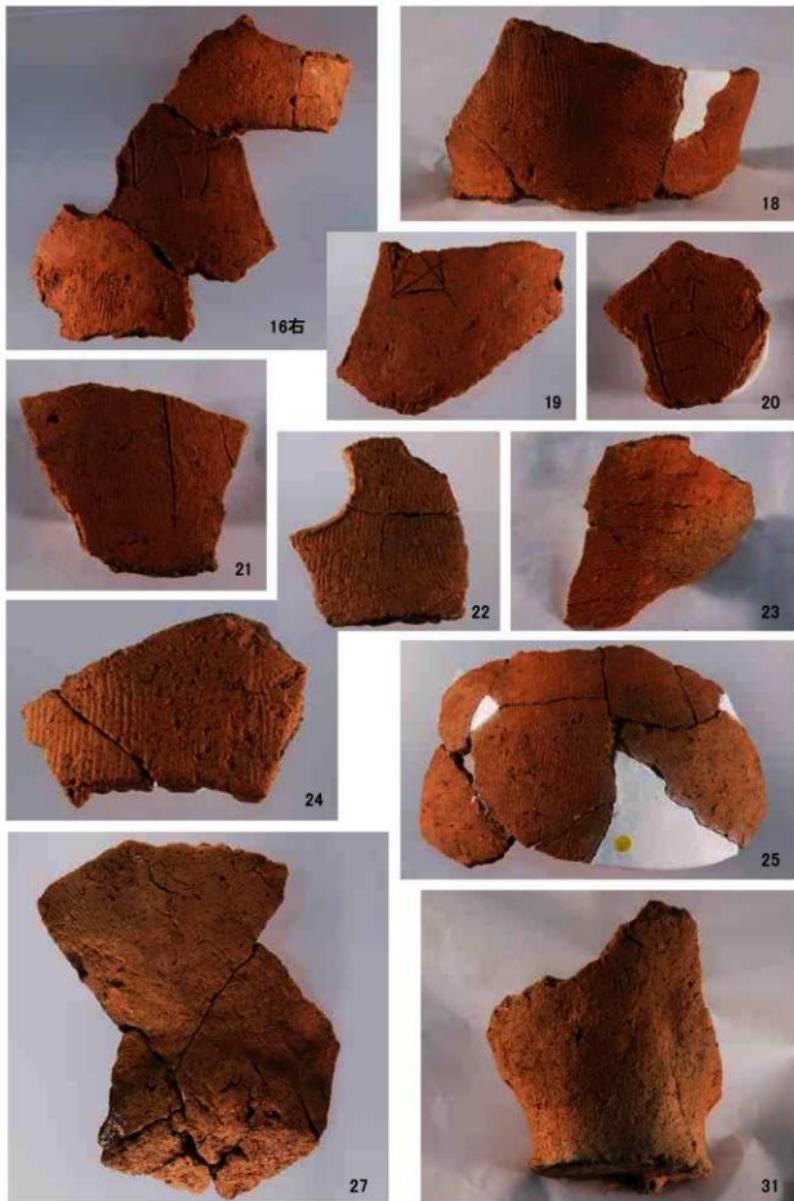


第11トレンチ

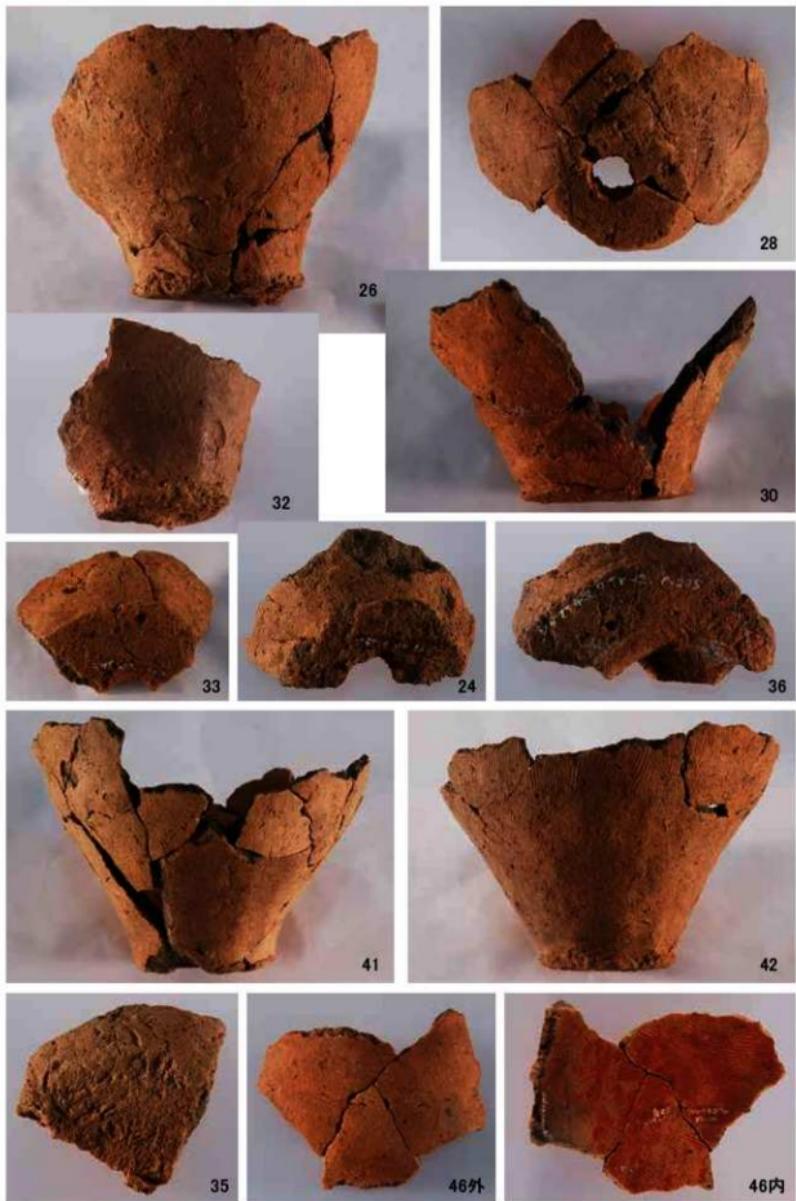
写真図版14 重政古墳出土遺物(1)



写真図版15 重政古墳出土遺物(2)



写真図版16 重政古墳出土遺物(3)



写真図版17 秋葉鬼塚古墳(1)



写真図版18 秋葉鬼塚古墳(2)



第3トレーナー



第4トレーナー



第5トレーナー



第6トレーナー

写真図版19 秋葉鬼塚古墳(3)



第7トレーナー



第8トレーナー



第9トレーナー



第9トレーナー

写真図版20 秋葉鬼塚古墳(4)



第10トレンチ



第10トレンチ



第11トレンチ



第12トレンチ

写真図版21 秋葉鬼塚古墳出土遺物



写真図版22 竜ヶ鼻古墳



写真図版23 竜ヶ鼻古墳出土遺物



写真図版24 立野古墳(1)



立野古墳遠景:右(左は鉢ノ窪古墳群)



立野古墳近景



第1トレーナー



第2トレーナー



第3トレーナー

大分県教育委員会より提供

写真図版25 立野古墳(2)

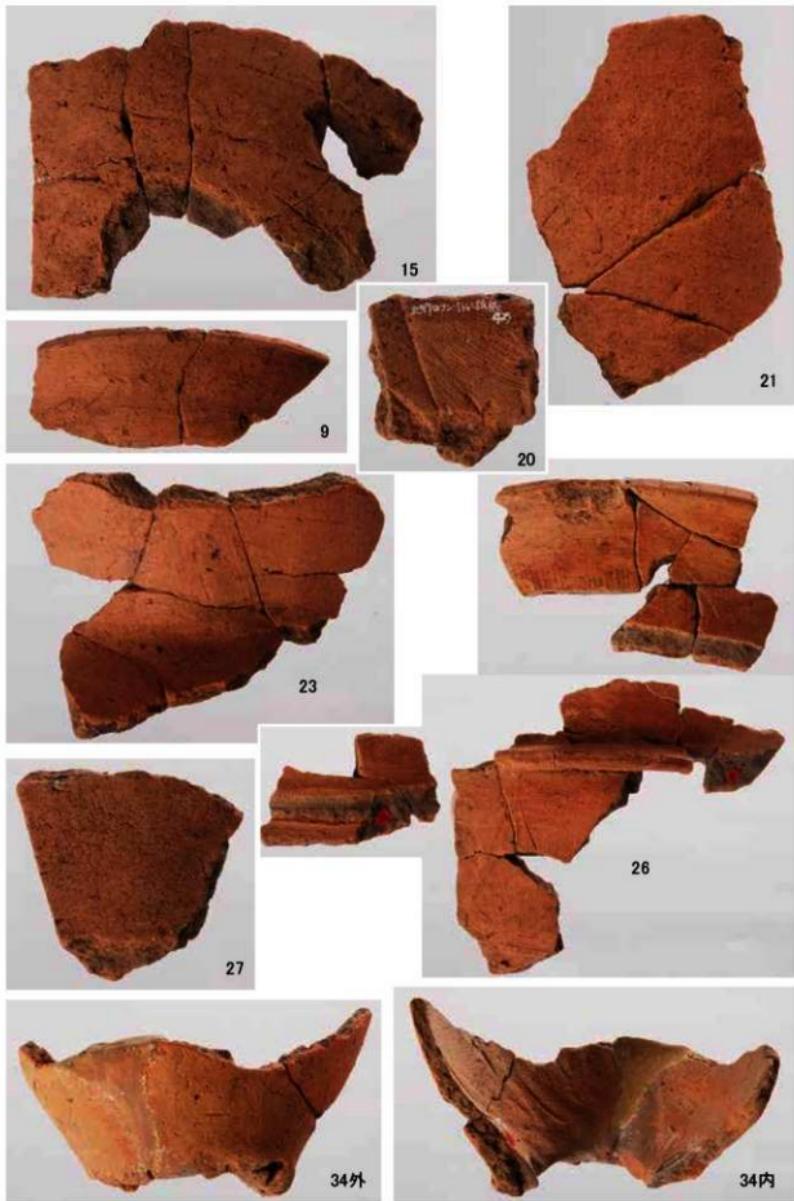


大分県教育委員会より提供

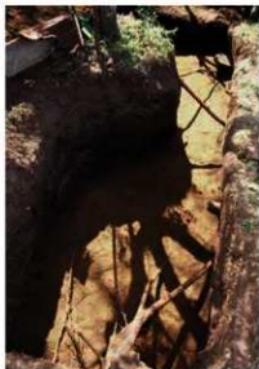
写真図版26 立野古墳出土遺物(1)



写真図版27 立野古墳出土遺物(2)



写真図版28 鉢ノ窪古墳群(1)



第1トレンチ



第2トレンチ



第3トレンチ

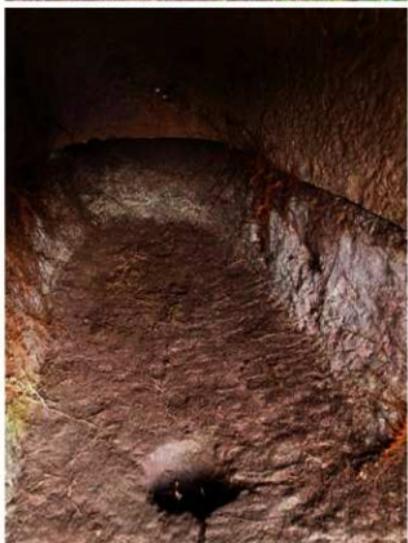


第2トレンチ

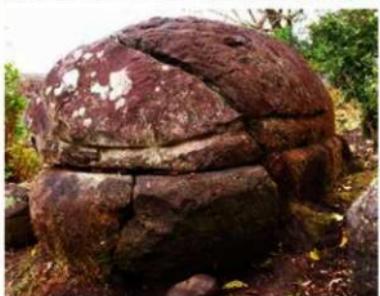


第3トレンチ

写真図版29 鉢ノ窪古墳群(2)



1号石棺内面



1号石棺



2号(左)・3号(右)石棺



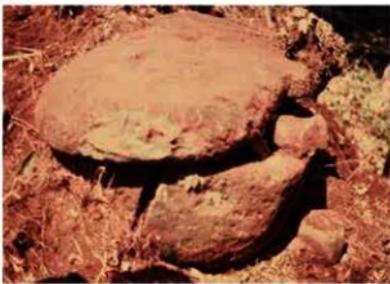
2号石棺



写真図版30 鉢ノ窪古墳群(3)



3号石棺



2号棺(左)3号棺(右) (昭和45年頃撮影)



5号石棺



4号石棺

6号石棺

写真図版31 下津留古墳群(1)



下津留古墳群遠景



1号墳近景



1号墳石棺



2号墳近景



3号墳近景

写真図版32 下津留古墳群(2)



4号墳近景



4号墳石棺(棺材1)



4号墳石棺(棺材2)



4号墳石棺(棺材3)



4号墳石棺(棺材4)

写真図版33 下津留古墳群(3)



4号墳石棺(棺材5)



4号墳石棺(棺材6)



4号墳石棺(棺材9)



4号墳石棺(棺材13)



4号墳石棺(棺材13)



4号墳石棺(棺材14)



写真図版34 内田古墳群(1)



内田古墳群遠景



内田1号(マゼ古墳)近景



第1・6トレンチ



第1トレンチ



第1トレンチ



第2トレンチ



第3トレンチ

写真図版35 内田古墳群(2)



第2トレンチ1号墳周溝



第6トレンチ1号墳周溝



第1トレンチ遺物出土状況



1号墳石棺材



第2トレンチ溝状遺構



第1・6トレンチ



第1トレンチ2号墳周溝



第6トレンチ2号墳周溝

写真図版36 内田古墳群出土遺物



写真図版37 坊ノ原古墳(1)



坊ノ原古墳遠景



坊ノ原古墳近景



坊ノ原古墳石棺材



第1トレンチ

写真図版38 坊ノ原古墳(2)



第2トレーニチ



第3トレーニチ



第4トレーニチ

写真図版39 坊ノ原古墳(3)



第5トレーニチ



第6トレーニチ



第7トレーニチ



第8トレーニチ



第9トレーニチ



写真図版40 坊ノ原古墳(4)



第10トレチ



第11トレチ



第12トレチ



第13トレチ



3



2

坊ノ原古墳出土遺物写真

写真図版41 漆生古墳群(1)



漆生古墳群遠景(矢印は大久保1号墳)



城山古墳近景



城山古墳第1トレーニチ



城山古墳第2トレーニチ



城山古墳第3トレーニチ



城山古墳墳頂トレーニチ



城山古墳石棺材

写真図版42 漆生古墳群(2)



大久保1号墳近景



大久保1号墳第1トレンチ



大久保1号墳第2トレンチ



写真図版43 漆生古墳群(3)



大久保1号墳第3トレンチ



大久保1号墳第4トレンチ



大久保1号墳第5トレンチ



大久保1号墳第4トレンチ



大久保1号墳第5トレンチ



大久保1号墳第6トレンチ



大久保1号墳後円部墳頂部

写真図版44 漆生古墳群(4)



大久保2号墳第1トレンチ



大久保2号墳第2トレンチ



大久保2号墳墳頂トレンチ



大久保2号墳墳頂トレンチ



大久保2号墳石棺蓋

写真図版45 漆生古墳群(5)



大久保3号墳第1トレンチ



大久保3号墳第2トレンチ



大久保3号墳石棺蓋



大久保3号墳墳頂トレンチ



大久保3号墳墳頂トレンチ



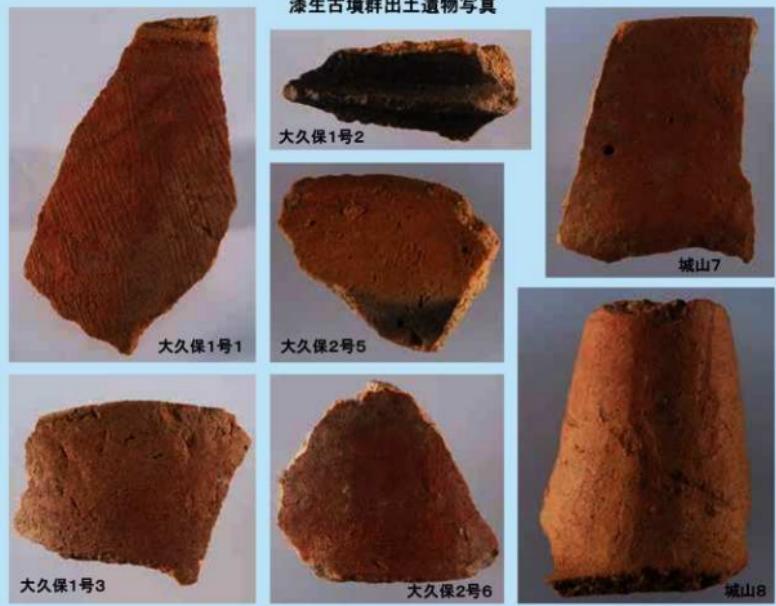
大久保3号墳石棺蓋(内面)

写真図版46 漆生古墳群(6)



大久保3号墳墳頂トレンチ

漆生古墳群出土遺物写真



写真図版47 豊後大野市古墳(1)



浅水古墳



濱平塚原古墳4号棺



尾崎古墳



御塚古墳



中ノ原古墳



向原古墳



大石古墳



久土知古墳石榴材

写真図版48 豊後大野市古墳(2)



丸山古墳



伝丸山古墳石棺蓋



町2号古墳



若宮古墳石棺材



早尾原古墳



高伏古墳石棺材



宮生日平古墳跡



尾森2号古墳石棺材

写真図版49 宮尾塚ノ原探集遺物



報告書抄録

フリガナ	ミエコフングン
書名	三重古墳群
副書名	
シリーズ名	農後大野市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第4集
編著者名	諸岡郁 田中裕介 玉川剛司 井大樹 平尾良光 村田仁志
編集機関	農後大野市教育委員会
所在地	〒879-7131 大分県農後大野市三重町市場1200番地
発行年月日	2022(令和4)年3月25日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地 市町村・遺跡番号	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査 原因	
オサカオオタク 小坂大塚古墳	ソコオオタクノシミユツヤ 農後大野市三重町 小坂字大塚	442127	212046	32°59'05"	131°36'38"	2010.12.18 ~ 2020.02.18	45m ²	確認 調査
ミチノウツ 道ノ上古墳	ソチノウツノシミユツヤ 農後大野市三重町 赤嶺字道上	442127	212055	32°58'58"	131°35'59"	2000.12.19~01.03.21確認 2019.06.10~11.24測量	70m ²	確認 調査
シゲマサ 重政古墳	ソシゲマサノシミユツヤ 農後大野市三重町 内田字重政	442127	212062	32°58'43"	131°35'20"	2017.12.19 ~ 2021.07.21	130.5m ²	確認 調査
アキバヤニヅカ 秋葉鬼塚古墳	ソアキバヤニヅカノシミユツヤ 農後大野市三重町 秋葉字鬼塚ほか	442127	212081	32°58'08"	131°34'46"	2013.10.22 ~ 2014.12.19	98m ²	確認 調査
タツガハナ 竜ヶ鼻古墳	ソタツガハナノシミユツヤ 農後大野市三重町 赤嶺字竜ヶ鼻	442127	212065	32°59'07"	131°35'14"	1998.12.09~12.22確認 2020.07.17~11.16測量	17m ²	確認 調査
タチノ 立野古墳(再録)	ソタチノシミユツヤ 農後大野市三重町 上原字立野	442127	212008	33°00'24"	131°35'20"	1995.12.24 ~ 1996.03.18	(対象) 6000m ²	確認 調査
ハチノワツ 鉢ノ窪古墳群	ソハチノワツノシミユツヤ 農後大野市三重町 上原原字窪	442127	212004	33°00'28"	131°35'13"	1995.03.07~03.14確認 2018.10.28~12.29実測	15m ²	確認 調査
シモツル 下津留古墳群	ソシモツルノシミユツヤ 農後大野市三重町 八代字下津留	442127	—	33°00'58"	131°35'09"	2018.10.28 ~ 2018.12.29実測		確認 調査
ウチダ 内田古墳群	ソウチダノシミユツヤ 農後大野市三重町 内田字種田	442127	212058	32°58'24"	131°36'27"	2002.01.21 ~ 2002.03.13	220m ²	確認 調査
ボウノハル 坊ノ原古墳	ソボウノハルノシミユツヤ 農後大野市大野町 坊ノ原字羽部	442127	212412	33°01'49"	131°28'27"	2014.09.03 ~ 2016.12.20	88m ²	確認 調査
ウルシ 漆生古墳群	ソウルシノシミユツヤ 農後大野市鶴方町 漆生字大久保・城山	442127	212204	32°58'33"	131°29'27"	2012.12.06 ~ 2017.01.07	165m ²	確認 調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
小坂大塚古墳	墳墓	古墳(前期?)	葺石・墳端テラス・周溝		前方後円墳42m
道ノ上古墳	墳墓	古墳(中期)	葺石・墳端テラス・周溝	円筒埴輪・壺形埴輪	前方後円墳70m
重政古墳	墳墓	古墳(中期)	葺石・墳端テラス・2段築成・周溝	壺形埴輪・土師器(甕)	前方後円墳53m
秋葉鬼塚古墳	墳墓	古墳(中期)	葺石・墳端テラス・周溝	円筒埴輪・壺形埴輪・土師器	前方後円墳52.4m
竜ヶ鼻古墳	墳墓	古墳(中期)	墳端テラス	円筒埴輪	前方後円墳36.5m
立野古墳	墳墓	古墳(前期)	葺石・墳端テラス・周溝・陸橋	円筒埴輪・壺形埴輪	前方後円墳65m
鉢ノ窪古墳群	墳墓	古墳(中期)	舟形石棺・箱形石棺		小円墳・石棺6基
下津留古墳群	墳墓	古墳(中期)	箱形石棺		小円墳・石棺2基
内田古墳群	墳墓	古墳(中期)	葺石・周溝	土師器(壺・高坏)	小円墳・石棺2基
坊ノ原古墳	墳墓	古墳(前期)	墳端テラス・周溝	土師器(壺・高坏)	前方後円墳46.3m
漆生古墳群	墳墓	古墳(前・中期)	葺石・2段築成(1号)・墓坑・石棺(3号)	土師器片	前方後円墳1・円墳3

要約

三重古墳群は、大分県内陸部の大野川本域と三重川流域に分布し、前期後半から中期後半にかけて築造された大野川中流域で最大の首長墓群である。前方後円墳が市内8基のうち三重地域に6基が集中し、舟形石棺や箱形石棺などを主体部とした小円墳を伴う古墳群として形成されている。墳丘測量や範囲確認調査を実施した結果、墳丘築造の背景には、交通の要衝地や他地域との交流など政治的な背景により、運営された首長墓群と考えられている。

大分県豊後大野市埋蔵文化財調査報告書第4集

三重古墳群

発行日 2022(令和4)年3月25日発行

編集・発行 豊後大野市教育委員会

〒879-7131大分県豊後大野市三重町市場1200